

空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊

# 空港跡地遺跡 II

1997. 9

香 川 県 教 育 委 員 会  
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター  
香 川 県 土 地 開 発 公 社

空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊

# 空港跡地遺跡 II

1997. 9

香 川 県 教 育 委 員 会  
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター  
香 川 県 土 地 開 発 公 社



空港跡地遺跡全景（南方上空から）



人型土製品



297



311

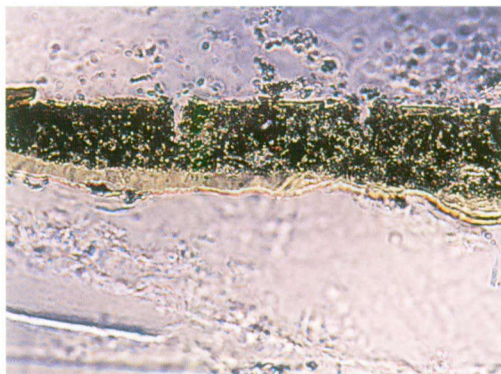


322

赤彩土器



- ③ 色漆層（朱漆）
- ② 薄い漆層
- ① 炭粉下地



- ③ 色漆層（朱漆）
- ② 漆層
- ① 炭粉下地

漆椀漆膜顕微鏡写真

## 序 文

平成元年12月の新高松空港の開港に伴って高松市林町の高松空港跡地は、研究情報機能および文化機能を有する技術・情報・文化の複合拠点、香川インテリジェントパークとして生まれ変わることになりました。

香川県教育委員会では、高松空港跡地の整備事業に伴い、平成2年度から財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して、用地内の埋蔵文化財の発掘調査を実施し、現在も継続して行っているところであります。また、平成6年度からは同センターにおきまして、出土文化財の整理研究業務を行っており、その成果につきましても、昨年度から調査報告書の刊行を行い、今後順次継続する予定にいたしております。

このたび、「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 空港跡地遺跡Ⅱ」として刊行いたしますのは、香川県土地開発公社より委託されました、空港跡地遺跡北東部の現サンメッセ香川とその東側近接地の調査についてであります。同地域の調査では、弥生時代前期から江戸時代にかけての多くの遺構・遺物が出土しておりますが、とくに古墳時代前期に位置付けられます人形土製品ひとがたどせいひんにつきましては、全国的に見ても出土例の少ない貴重なものとして、出土時より多くの注目を集めました。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土文化財の整理・報告にいたるまでの間、香川県土地開発公社及び関係機関並びに地元関係各位には多大の御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともよろしく御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成9年9月

香川県教育委員会

教育長 金森越哉

## 例 言

1. 本報告書は、高松空港跡地開発整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第2冊であり、香川県高松市林町に所在する空港跡地遺跡（くうこうあとちいせき）の報告を収録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が香川県土地開発公社から委託され、香川県が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 発掘調査は、予備調査を平成2年4月から同年9月まで実施し、本調査を平成3年1月から平成6年8月まで実施した。本報告書に収録された地区については、平成3年4月から平成5年12月に調査を実施している。  
発掘調査の担当は、本文中に記したとおりである。
4. 調査および報告書の作成にあたって下記の関係諸機関等の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）  
香川県土地開発公社，高松市教育委員会，明善学園高等学校，林地区開発協議会，地元各自治会，地元水利組合
5. 報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。本書の編集および第3章第1・2・4節，第3節2項を除く各章の執筆は蔵本が担当した。  
また出土木製品の樹種鑑定を株式会社パリノ・サーヴェイと財団法人元興寺文化財研究所に，漆器碗の漆膜分析を財団法人元興寺文化財研究所に，出土土器の胎土分析を岡山理科大学自然科学研究所白石純氏に，土器に付着した赤色顔料の分析を別府大学文学部本田光子氏にそれぞれ依頼し，頂いた玉稿を第3章に掲載した。
6. 発掘調査および報告書の作成にあたって，下記の方々のご教示・ご助力を得た。記して感謝を表したい。  
（順不同、敬称略）  
戸川昌代，中野晴久，藤澤良祐，前田好美，間壁葎子，松井章，安川豊史
7. 本報告書で用いる方位は，国土座標系第IV系による。標高は，T. P. を基準としている。  
また，遺構は下記の略号により表記している。  
S A 柵列            S B 掘立柱建物        S D 溝状遺構        S E 井戸  
S H 竪穴住居跡    S K 土坑            S P 柱穴            S X 不明遺構他  
S R 川跡

8. 挿図の一部に建設省国土地理院地形図高松南部（1：25,000）及び同高松南部（1：50,000）を、また図版の一部に建設省国土地理院撮影の空中写真を使用した。
9. 本報告書で用いる遺構図のレベルの単位はすべてメートルである。
10. 石器実測図中の網目は摩滅痕を、輪郭線の周りの点線は潰れ痕、実線は磨滅痕及び研磨痕をそれぞれ表す。また、現代の欠損は剥離面を濃く黒で潰している。
11. 遺物量の表記については、概ねコンテナは28リットル入りのもので表し、袋は20cm×30cmのものを基準としている。

# 目 次

巻頭図版

序 文

例 言

## 第1章 調査の経緯

- 1 調査の経過 ..... 1
- 2 整理作業 ..... 3

## 第2章 調査の成果

### 第1節 調査の方法と各調査区の概要

- 1 調査の方法 ..... 9
- 2 各調査区の概要 ..... 9

### 第2節 遺構・遺物

- 1 弥生時代前期 ..... 19
- 2 弥生時代後期～古墳時代前期 ..... 20
- 3 古墳時代後期 ..... 95
- 4 鎌倉・室町時代 ..... 96
- 5 江戸時代以降 ..... 108
- 6 包含層 ..... 141

## 第3章 自然科学調査の成果

### 第1節 木製品および種実遺体の種類

- 1 木製品の樹種同定 ..... 147
- 2 土器胎土中の種実遺体の同定 ..... 149

### 第2節 樹種鑑定・漆膜分析

- 1 漆製品の塗膜分析 ..... 151
- 2 木製品の樹種 ..... 151

### 第3節 空港跡地遺跡出土土器の胎土分析

- 1 分析試料説明 ..... 153
- 2 空港跡地遺跡出土土器の胎土分析 ..... 156

### 第4節 空港跡地遺跡出土の赤色顔料について ..... 164

## 第4章 まとめ ..... 167



## 挿 図 目 次

第 1 図 遺跡位置図(1/100,000)…………… 1	第 33 図 Ⅲ-43区 SDe138出土遺物実測図 2 (1/4) …… 58
第 2 図 報告地区割図 …………… 5	第 34 図 Ⅲ-43区 SDe138出土遺物実測図 3 (1/4) …… 59
第 3 図 調査区割図 …………… 7~8	第 35 図 Ⅲ-43区 SDe138出土遺物実測図 4 (1/4) …… 61
第 4 図 Ⅱ-7区西壁・南壁土層断面図 (天地1/40・左右1/60)…………… 11~12	第 36 図 Ⅲ-43区 SDe138出土遺物実測図 5 (1/4) …… 62
第 5 図 Ⅲ-5区東壁・北壁土層断面図 (天地1/40・左右1/60) …………… 13	第 37 図 Ⅲ-43区 SDe138出土遺物実測図 6 (1/4) …… 63
第 6 図 Ⅲ-41区東壁・北壁土層断面図 (天地1/40・左右1/60)…………… 15~16	第 38 図 Ⅲ-43区 SDe138出土遺物実測図 7 (1/4) …… 64
第 7 図 Ⅲ-42区東壁・南壁土層断面図 (天地1/40・左右1/60)…………… 17~18	第 39 図 Ⅲ-43区 SDe138出土遺物実測図 8 (1/4) …… 66
第 8 図 SDe77断面図(1/40), 出土遺物実測図 (1/2・1/4)…………… 19	第 40 図 Ⅲ-43区 SDe138出土遺物実測図 9 (1/4) …… 67
第 9 図 SBe02平・断面図(1/80) …………… 20	第 41 図 小溝群断面図(1/40) …………… 68
第 10 図 SBe03平・断面図(1/80) …………… 20	第 42 図 小溝群出土遺物実測図(1/2・1/4) …………… 69
第 11 図 Ⅱ-7・13, Ⅲ-5区遺構配置図(1/400)… 21~22	第 43 図 SDe84・115・122・146断面図(1/40) …………… 70
第 12 図 Ⅲ-41~43区弥生時代~中世遺構配置図 (1/400)…………… 22~23	第 44 図 SDe84・122出土遺物実測図(1/4) …………… 72
第 13 図 Ⅲ-41~43区近世遺構配置図(1/400) …… 24~25	第 45 図 SDe146出土遺物実測図 1 (1/2・1/4) …………… 73
第 14 図 Ⅱ-7区溝状遺構断面図(1/40), 出土遺物 実測図(1/4)…………… 29	第 46 図 SDe146出土遺物実測図 2 (1/4) …………… 74
第 15 図 Ⅱ-13区溝状遺構断面図(1/40), 出土遺物 実測図(1/2・1/4)…………… 31	第 47 図 SDe143断面図(1/40)・出土遺物実測図(1/4) 74
第 16 図 SDe115断面図(1/40) …………… 33	第 48 図 SDe137集石・遺物検出状況, 断面図(1/40) 77~78
第 17 図 Ⅲ-41区 SDe115出土遺物実測図 1 (1/4) …… 35	第 49 図 SDe137出土遺物実測図 1 (1/4) …………… 79
第 18 図 Ⅲ-41区 SDe115出土遺物実測図 2 (1/4) …… 37	第 50 図 SDe137出土遺物実測図 2 (1/4) …………… 81
第 19 図 Ⅲ-41区 SDe115出土遺物実測図 3 (1/4) …… 39	第 51 図 SDe137出土遺物実測図 3 (1/4) …………… 83
第 20 図 Ⅲ-41区 SDe115出土遺物実測図 4 (1/4) …… 41	第 52 図 SDe137出土遺物実測図 4 (1/4) …………… 84
第 21 図 Ⅲ-42区 SDe115出土遺物実測図 1 (1/4) …… 43	第 53 図 SDe137出土遺物実測図 5 (1/4) …………… 85
第 22 図 Ⅲ-42区 SDe115出土遺物実測図 2 (1/4) …… 44	第 54 図 SDe137出土遺物実測図 6 (1/4) …………… 87
第 23 図 Ⅲ-42・43区 SDe115出土遺物実測図 1 (1/4) 45	第 55 図 SDe137出土遺物実測図 7 (1/2) …………… 88
第 24 図 Ⅲ-42・43区 SDe115出土遺物実測図 2 (1/4) 46	第 56 図 SDe137出土遺物実測図 8 (1/2・1/4) …………… 89
第 25 図 Ⅲ-42・43区 SDe115出土遺物実測図 3 (1/4) 47	第 57 図 SKe53平・断面図(1/40), 出土遺物 実測図(1/4)…………… 90
第 26 図 SDe115出土石器実測図(1/2・1/4) …………… 48	第 58 図 SKe54~59平・断面図(1/40) …………… 92
第 27 図 SDe115出土木製品実測図(1/2・1/4) …………… 49	第 59 図 SXe03断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4) …… 93
第 28 図 SDe140・141断面図(1/40) 出土遺物実測図(1/4)…………… 50	第 60 図 SDe142断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4) …… 95
第 29 図 SDe138断面図(1/40) …………… 51	第 61 図 SBe04平・断面図(1/80) …………… 96
第 30 図 Ⅲ-41区 SDe138出土遺物実測図 1 (1/4) …… 53	第 62 図 SBe05平・断面図(1/80) …………… 96
第 31 図 Ⅲ-41区 SDe138出土遺物実測図 2 (1/2・1/4) 55	第 63 図 SBe06a平・断面図(1/80) …………… 97
第 32 図 Ⅲ-43区 SDe138出土遺物実測図 1 (1/4) …… 57	第 64 図 SBe06b平・断面図(1/80) …………… 97
	第 65 図 SBe07平・断面図(1/80) …………… 98
	第 66 図 SBe08平・断面図(1/80) …………… 98
	第 67 図 SBe09平・断面図(1/80) …………… 99
	第 68 図 SAe04平・断面図(1/80) …………… 99
	第 69 図 SAe05平・断面図(1/80) …………… 99
	第 70 図 SXe01断面図(1/60) …………… 101
	第 71 図 SXe01出土遺物実測図 1 (1/4) …………… 103
	第 72 図 SXe01出土遺物実測図 2 (1/4) …………… 105

第73図	SXe01出土遺物実測図3(1/3・1/4) ……………	106	第100図	SDe38断面図(1/40), 出土遺物実測図 (1/3・1/4)……………	128
第74図	SXe01出土遺物実測図4(1/2・1/4) ……………	107	第101図	SDe139断面図(1/40), 出土遺物実測図 (1/3・1/4)……………	131
第75図	SBe01・SAe01平・断面図(1/80) ……………	108	第102図	SDe144出土遺物実測図(1/3・1/4) ……………	132
第76図	SKe01・03・04平・断面図(1/40) ……………	109	第103図	SXe02出土遺物実測図1(1/3) ……………	135
第77図	SKe07平・断面図(1/40) ……………	110	第104図	SXe02出土遺物実測図2(1/2・1/3・1/4) ……	136
第78図	SKe09・19平・断面図(1/40)……………	111	第105図	SXe02出土遺物実測図3(1/4) ……………	137
第79図	SDe20・22・23平・断面図 ……………	112	第106図	SXe04出土遺物実測図(1/3・1/4) ……………	138
第80図	SKe25平・断面図(1/20), 出土遺物 実測図(1/3・1/4)……………	113	第107図	SXe04平・立面図(1/60) ……………	139~140
第81図	SKe26平・断面図(1/40), 出土遺物 実測図(1/3)……………	114	第108図	Ⅲ-41区包含層Ⅰ層木製品等出土状況(1/20)	141
第82図	SKe27平・断面図(1/40), 出土遺物 実測図(1/3)……………	114	第109図	包含層Ⅰ・Ⅱ層出土遺物実測図1(1/3・1/4)…	143
第83図	SKe28・29・31平・断面図(1/40), SKe28出土遺物実測図(1/3)……………	115	第110図	包含層Ⅰ・Ⅱ層出土遺物実測図2(1/2) ……	144
第84図	SKe32・33平・断面図(1/40) ……………	116	第111図	その他出土遺物実測図(1/2・1/4) ……………	145
第85図	SKe35平・断面図(1/20) ……………	116	第112図	漆膜の電子線マイクロアナライザー分析結果 ……	152
第86図	SKe35出土遺物実測図(1/3・1/4) ……………	117	第113図	胎土分析資料1(1a~1g類) ……………	154
第87図	SKe36平・断面図(1/40) ……………	118	第114図	胎土分析資料2(2~6類) ……………	155
第88図	SKe37平・断面図(1/40) ……………	118	第115図	K <sub>2</sub> O-CaO 散布図 ……………	159
第89図	SKe39平・断面図(1/20) ……………	119	第116図	Sr-Rb 散布図 ……………	159
第90図	SKe40平・断面図(1/40), 出土遺物 実測図(1/4)……………	119	第117図	K <sub>2</sub> O-CaO 散布図 ……………	160
第91図	SKe41平・断面図(1/40), 出土遺物 実測図(1/3・1/4)……………	120	第118図	Sr-Rb 散布図 ……………	160
第92図	SKe46・48・49平・断面図(1/40) ……………	121	第119図	K <sub>2</sub> O-CaO 散布図 ……………	161
第93図	SEe01平・断面図(1/50), 出土遺物 実測図(1/4)……………	122	第120図	Sr-Rb 散布図 ……………	161
第94図	SDe06断面図(1/40), 出土遺物実測図 (1/3・1/4)……………	123	第121図	K <sub>2</sub> O-CaO 散布図 ……………	162
第95図	SDe09断面図(1/40) ……………	124	第122図	Sr-Rb 散布図 ……………	162
第96図	SDe10出土遺物実測図(1/3・1/4) ……………	125	第123図	空港跡地遺跡周辺の埋没旧河道・低地部 ……	169
第97図	SDe15断面図(1/40) ……………	127	第124図	胎土1類土器出現頻度 ……………	175
第98図	SDe16断面図(1/40) ……………	127	第125図	胎土1類粘土採取推定地と後期後半段階の 同種土器共有集団……………	177
第99図	SDe36断面図(1/40) ……………	127	第126図	空港跡地遺跡出土の赤色顔料付着土器 ……	178
			第127図	石器石材の搬入量 ……………	179
			第128図	空港跡地遺跡SDe137出土の布留系 土器(1/4)……………	182
			第129図	空港跡地遺跡E地区遺構変遷図……………	186~187

## 図 版 目 次

巻頭図版 1	空港跡地遺跡全景 (南方上空から) 人型土製品	図版 20	II-13区北東部近景 (西→)
巻頭図版 2	赤彩土器 漆椀漆膜顕微鏡写真	図版 21	II-13区南東部近景 (西→) ..... 267 II-13区 SDe25完掘状況 (北→)
図版 1	遺跡周辺航空写真 (左が北) ..... 247	図版 22	II-13区 SDe19完掘状況 (南→) ..... 268 II-13区 SDe19遺物出土状況 (南→)
図版 2	遺跡周辺航空写真 (北より) ..... 248 遺跡周辺航空写真 (東より)	図版 23	II-13区 SBe04全景 (南→) ..... 269 II-13区 SAe04・05近景 (北→)
図版 3	II-7区全景 (上が北) ..... 249	図版 24	III-5区全景 (南→) ..... 270 III-5区北壁土層 (南→) III-5区東壁土層 (西→)
図版 4	II-7区全景 (東→) ..... 250 II-7区北半部全景 (東→)	図版 25	III-41区全景 (上が北) ..... 271
図版 5	II-7区南半部全景 (東→) ..... 251 II-7区 SDe10完掘状況 (南→)	図版 26	III-42区全景 (上が北) ..... 272
図版 6	II-7区西壁土層 (南東→) ..... 252 II-7区西壁土層北端 (東→)	図版 27	III-43区全景 (上が北) ..... 273
図版 7	II-7区南壁西端土層 (北→) ..... 253 II-7区 SBe03全景 (南→)	図版 28	III-41区全景 (南→) ..... 274 III-42区全景 (南→)
図版 8	II-7区 SDe04・05等完掘状況 (北東→) ..... 254 II-7区 SDe04・05等完掘状況 (西→)	図版 29	III-43区全景 (東→) ..... 275 III-41区北端部近景 (西→)
図版 9	II-7区 SDe12完掘状況 (西→) ..... 255 II-7区 SBe01・SAe01全景 (南→)	図版 30	III-42区 SDe115等完掘状況 (南→) ..... 276 III-43区 SDe138等完掘状況 (西→)
図版 10	II-7区 SBe02全景 (南→) ..... 256 II-7区 SBe03全景 (西→)	図版 31	III-42区 SDe77等完掘状況 (北→) ..... 277 III-42区 SDe115土層 e (北→) III-42区 SDe115土層 d (南→)
図版 11	II-7区 SAe02・03全景 (東→) ..... 257 II-7区 SKe09土層 (西→)	図版 32	III-42区 SDe115柄状木製品 出土状況 (北→) ..... 278 III-43区 SDe137・138完掘状況 (東→)
図版 12	II-7区 SKe20全景 (東→) ..... 258 II-7区 SKe25遺物出土状況 (東→)	図版 33	III-43区 SDe137・138完掘状況 (西→) ..... 279 III-43区 SDe138完掘状況 (西→)
図版 13	II-7区 SKe37等全景 (南→) ..... 259 II-7区 SKe37遺物出土状況 (西→)	図版 34	III-43区 SDe138南端井泉状 遺構全景 (西→) ..... 280 III-43区 SDe138南端井泉状 遺構全景 (南→)
図版 14	II-7区 SKe49全景 (北→) ..... 260 II-7区 SDe09完掘状況 (南→)	図版 35	III-43区 SDe138土層 b (西→) ..... 281 III-43区 SDe138土層 c (西→) III-43区 SDe138土器集中出土状況 (南→)
図版 15	II-7区 SDe09土層 (南→) ..... 261 II-7区 SEe01土層 (東→)	図版 36	III-42区 SDe115・小溝群近景 (西→) ..... 282 III-42区 SDe84完掘状況 (西→)
図版 16	II-7区 SEe02全景 (南→) ..... 262 II-7区 SEe02断面 (南→)	図版 37	III-43区 SDe146北端遺物出土状況 (東→) ..... 283 III-43区 SDe146土層 (北→) III-42区 SDe122土層 (西→)
図版 17	II-13区全景 (上が北) ..... 263	図版 38	III-43区 SDe137・138近景 (東→) ..... 284 III-43区 SDe137集石検出状況 (北西→)
図版 18	II-13区北東部全景 (南→) ..... 264 II-13区南東部全景 (西→)		
図版 19	II-13区西半部全景 (南→) ..... 265 II-13区西半部全景 (東→)		
図版 20	II-13区北東部近景 (東→) ..... 266		

図版39	Ⅲ-43区 SDe137集石検出状況 (北→) ……	285	図版59	出土土器 (11) ……	305
	Ⅲ-43区 SDe137集石検出状況 (西→)		図版60	出土土器 (12) ……	306
図版40	Ⅲ-43区 SDe137土層 b (西→) ……	286	図版61	出土土器 (13) ……	307
	Ⅲ-43区 SDe137土層 d (東→)		図版62	出土土器 (14) ……	308
	Ⅲ-43区 SDe137人形土製品出土状況 (西→)		図版63	出土土器 (15) ……	309
図版41	Ⅲ-43区 SDe137遺物出土状況 (東→) ……	287	図版64	出土土器 (16) ……	310
図版42	Ⅲ-41区 SDe142土層 (西→) ……	288	図版65	出土土器 (17) ……	311
	Ⅲ-41区包含層 I 層竹製品出土状況 (東→)		図版66	出土土器 (18) ……	312
	Ⅲ-41区包含層 I 層漆椀出土状況 (東→)		図版67	出土土器 (19) ……	313
	Ⅲ-43区 SXe01獣骨出土状況 (北→)		図版68	出土土器 (20) ……	314
図版43	Ⅲ-43区 SXe02全景 (西→) ……	289	図版69	出土土器 (21) ……	315
	Ⅲ-43区 SXe02全景 (東→)		図版70	出土土器 (22) ……	316
図版44	Ⅲ-41区 SXe04全景 (南→) ……	290	図版71	出土土器 (23) ……	317
	Ⅲ-43区 SDe144完掘状況 (南→)		図版72	出土土器 (24) ……	318
図版45	人形土製品 (1) ……	291	図版73	出土土器 (25) ……	319
図版46	人形土製品 (2) ……	292	図版74	出土土器 (26) ……	320
図版47	人形土製品 (3) ……	293	図版75	出土石器 (1) ……	321
図版48	人形土製品 (4) ……	294	図版76	出土石器 (2) ……	322
図版49	出土土器 (1) ……	295	図版77	出土石器 (3) ……	323
図版50	出土土器 (2) ……	296	図版78	出土石器 (4) ……	324
図版51	出土土器 (3) ……	297	図版79	出土石器 (5) ……	325
図版52	出土土器 (4) ……	298	図版80	出土木製品 (1) ……	326
図版53	出土土器 (5) ……	299	図版81	出土木製品 (2) ……	327
図版54	出土土器 (6) ……	300	図版82	出土金属器 ……	328
図版55	出土土器 (7) ……	301	図版83	木製品顕微鏡写真 (1) ……	329
図版56	出土土器 (8) ……	302	図版84	木製品顕微鏡写真 (2) ……	330
図版57	出土土器 (9) ……	303	図版85	木製品顕微鏡写真 (3) ……	331
図版58	出土土器 (10) ……	304		土器胎土中の種子顕微鏡写真	

## 表 目 次

表 1	平成 7 年度整理作業工程表	5	観察表 3	木器	241
表 2	整理各地区の調査概要	6	観察表 4	土製品	241
表 3	樹種同定結果一覧表	148	観察表 5	軒丸瓦	242
表 4	空港跡地遺跡胎土分析一覧表	163	観察表 6	軒平瓦	242
表 5	試料の一覧と分析結果及びそれに基づく 赤色顔料の種類	165	観察表 7	丸瓦	242
観察表	凡例	193	観察表 8	平瓦	242
観察表 1	土器	194	観察表 9	人形土製品	243
観察表 2	石器	239	観察表 10	鉄器	243
			観察表 11	貨幣	243

# 第1章 調査の経緯

## 1. 調査の経過

空港跡地遺跡は、高松市林町の高松平野中心部、かつて市街地周辺を北流していた旧郷東川によって形成された扇状地の奥部に所在する遺跡である。周辺部は都市化が進み、かつてみられた田園風景は急速に失われつつある。

さて約32haの面積を有する旧高松空港は、第2次世界大戦終戦直後の昭和19年頃、陸軍の軍用飛行場として急遽誕生したようである。終戦後は県下唯一の飛行場として民間機の利用がなされていたが、用地が手狭となったことなどから、平成元年12月に供用が廃止され、空港の諸施設は香川郡香南町に移された。跡地は市街地に近接した広大な空間であり、その有効な利用が検討され、空港跡地開発整備事業計画が策定された。香川県教育委員会では、こうした経過を受けて、埋蔵文化財の包蔵状況やその取り扱いについて検討を進め、平成2年度以降遺跡の所在が確認された範囲について、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して発掘調査を実施することとなった。なおこの間の経緯については、本報告書シリーズ第1冊に詳細に記述されているため、本書では省略する。詳しくは同書に依りたい。

空港跡地遺跡におけるこれまでの調査によって得られた成果については、本報告書シリーズ第1冊並びに今後順次刊行予定の報告書に詳しく述べられることだろう。しかしそれとは別に、数十万 $m^2$ に及ぶ広大な土地に面的な拡がりをもった調査区が設定され、また通有の調査とは異なり、既存の諸施設（道路・用水路・宅地等）に制約を受けない形で調査が実施されたことは、現代に至る土地利用の変遷を跡付ける上で、特にこれまでの調査では容易には得られなかった水利関係のデータを詳細に得ることができた点に、大きな意義を認めることができよう。

以下では、本報告書に所収する遺跡北東部のE地区の調査（平成3～5年度）に限って、その経過を示す。また後述する調査体制は、E地区に関係した者のみを記載しており、その他の調査担当者については本報告書シリーズ第1冊を参照されたい。さらに他地区の調査経過については、本報告書シリーズ



第1図 遺跡位置図 (1/100,000)

第1冊及び今後刊行予定の各地区報告書に依りたい。なお本区南半部にあたる旧空港のエプロン部分と、本区西端部に隣接する旧西側駐車場部分については、調査を実施していない。これは先立って行われた予備調査によって、この部分については空港造成時における攪乱が著しく遺構面が保存されていないと判断されたことによる。

#### 平成3年度

本年度には、基盤整備事業の県道林三谷線予定地北端部（Ⅲ－5区）と、産業交流センター（現サンメッセ高松）建設用地の内、その建物部分の西半部（Ⅱ－7区）についての調査を実施した。Ⅲ－5区は平成3年4月1日に調査に着手し、翌年3月31日をもって終了した。本調査区については予備調査によって遺構密度が希薄と想定されていたため、調査区内の全掘は行わず、東西約8m、南北約35mのトレンチ状の調査区を設定し、必要に応じて調査区を拡張する予定で調査を実施した。調査体制は、調査員2名で、調査に伴う掘削や仮設工等は請負方式を採用した。同様にⅡ－7区も同年12月16日に着手し、翌年3月7日をもって現地での調査を終了した。調査着手時には具体的な建物のプランや位置が決定しておらず、調査着手はそのためやや遅れを生じた。調査体制は、同じく調査員2名と嘱託職員1名の計3名で、調査にあたっては工事請負方式を採用した。

Ⅲ－5区の調査では、遺構面が2面確認され、上位遺構面では近世の溝・柱穴等が、下位遺構面では弥生時代の柱穴がそれぞれ検出された。しかし当初の予想通り、遺構密度は希薄であり調査区の拡張は行わず調査を終了した。Ⅱ－7区の調査では、遺構面は顕著な削平を被っており、遺構の残存状況は良好なものではなかったが、弥生時代後期の小集落と近世の溝・掘立柱建物などが検出された。

#### 平成4年度

本年度は産業交流センターの付帯施設部分（Ⅱ－13区）について調査を実施した。調査体制は、調査員2名と嘱託職員1名の計3名で、調査方式はセンターが直接作業員を雇用する直営調査であった。Ⅱ－13区の調査は、平成4年4月1日に調査に着手し、同年9月2日をもって終了した。本調査区は後に詳述するように、一部を除いて駐車場用地にあたり工事による掘削が遺構面まで及ばないため、基本的には配管等により遺構面が損傷を受ける部分に限って調査を実施した。なお、配管の配置計画に若干の変更が生じたため、調査区の配置は当初と異なったものとなったが、調査面積に変更はなかった。

本調査区でも隣接するⅢ－5区同様、遺構面が2面確認され、上位では中世と考えられる掘立柱建物跡、下位では弥生時代後期の溝などを中心とした遺構を検出した。

なお、本調査区の調査では、近世以降に下る遺構については、全域を掘り下げるなど細かな調査はされていない。また、当該期以降に掘削された遺構・攪乱については、調査時の平面実測図中への図化作業は一部行われていない。したがって、当該期以前の遺構の平面形状についてのデータは完全なものではない。つまり、検出された遺構がどのような理由でそうした形状を呈しているのかについての情報は、一部欠落したものとなっている。

以上のような理由から本調査区については、残念ながらその調査成果を本文中に十分に盛り込むことはできなかった。

#### 平成5年度

本年度は、林三谷線予定地の東に隣接する民間分譲用地の一部（Ⅲ-41～43区）について調査を実施した。平成5年4月1日に調査に着手し、同年12月17日に現地での調査を終了した。調査体制は、調査員2名と嘱託職員1名の計3名で、調査にあたっては工事請負方式を採用した。

本調査区では遺構面が3面確認され、上位の遺構面では近世を中心とした溝や出水等の遺構を、中位の遺構面では中世の流路と推定される遺構を、下位の遺構面では弥生時代前期と同後期から古墳時代前期頃の基幹水路群などを検出した。なお、そのうち古墳時代前期の水路より出土した人形土製品は、当該期の資料としては希少なものであり、新聞・雑誌の紙面を飾り全国的にも注目を集めた。

## 2. 整理作業

本遺跡の整理作業は、遺跡中央部を占めるC地区を嚆矢として平成6年度より開始された。C地区の整理作業では、担当地区の調査成果の報告のみではなく、今後順次刊行される当遺跡報告書の体裁や記載方法、遺物・図面の収納・保管方法などについても統一した基準が設けられた。なお本書の記載方法等についても、その基準に従っている。詳細については本報告書シリーズ第1冊を参照されたい。

さて、本書に掲載する遺跡北東部E地区の整理作業は、平成8年4月1日～平成9年3月31日に香川県埋蔵文化財調査センターにおいて行った。当該作業に関わる人員配置は、調査員1名と整理作業員8名である。基礎整理作業の一部は調査段階で既に終えており、18リットル入コンテナ約230箱の出土遺物の注記・接合・図化・写真撮影作業と、検出遺構の図面・写真などの整理・浄書作業を行い報告書に纏めた。調査区の西半部は、調査担当者と整理担当調査員が異なり、調査成果の内容に対する理解が不十分なものであったため、特に遺構の理解や評価については充分にその責を果たしているとは言い切れない。調査担当者と整理報告者が異なる場合の報告書作成業務については、今後の課題としてよりよい方向を模索すべきと考える。

なお、遺物写真撮影と木製品の樹種鑑定、漆器碗の漆膜分析は外部に委託し、出土土器の胎土分析は岡山理科大学 白石純氏に、出土土器に付着した赤色顔料の分析は別府大学 本田光子氏にそれぞれ依頼した。

### 平成3年度調査体制平成4年度調査体制

#### 香川県教育委員会事務局文化行政課

課長	中村 仁
主幹	菅原良弘
課長補佐	小原克巳(6. 1～)
係長	宮内憲生
係長	藤好史郎

#### (財)香川県埋蔵文化財調査センター

所長	松本豊胤
次長	安藤道雄
係長	加藤正司(～5. 31)
係長	土井茂樹(6. 1～)
主査	山地 修(～5. 31)

#### 香川県教育委員会事務局文化行政課

課長	中村 仁
主幹	菅原良弘
課長補佐	小原克巳
係長	宮内憲生(～5. 31)
係長	源田和幸(6. 1～)

#### (財)香川県埋蔵文化財調査センター

所長	松本豊胤
次長	市原敏則
係長	土井茂樹
係長	今田 修



係長	今田 修(6. 1～)	主任主事	斎藤政好
主任主事	斎藤政好	参事	糸目末夫
参事	篠丸 博	係長	大山真充
係長	廣瀬常雄	文化財専門員	土佐修治
文化財専門員	西村尋文	文化財専門員	西岡達哉
主任技師	植松邦浩	調査技術員	安藤くに子
主任技師	渡邊茂智	調査技術員	吉田圭子(～6. 25)
技師	濱野圭司		
技師	木下晴一		
技師	佐藤竜馬		
調査技術員	多田政弘		
調査技術員	今井由記子		

平成5年度調査体制

香川県教育委員会事務局文化行政課

課長	中村 仁
主幹	菅原良弘
課長補佐	小原克巳
係長	源田和幸
係長	藤好史郎

(財)香川県埋蔵文化財調査センター

所長	松本豊胤
次長	真鍋隆幸
係長	土井茂樹
係長	今田 修(～5. 31)
係長	上林和明(6. 1～)
主任主事	斎藤政好(～5. 31)
主任主事	西村厚二(6. 1～)
参事	糸目末夫
係長	大山真充
文化財専門員	高月 計
主任技師	蔵本晋司
調査技術員	高橋佳緒里

平成7年度整理体制

香川県教育委員会文化行政課

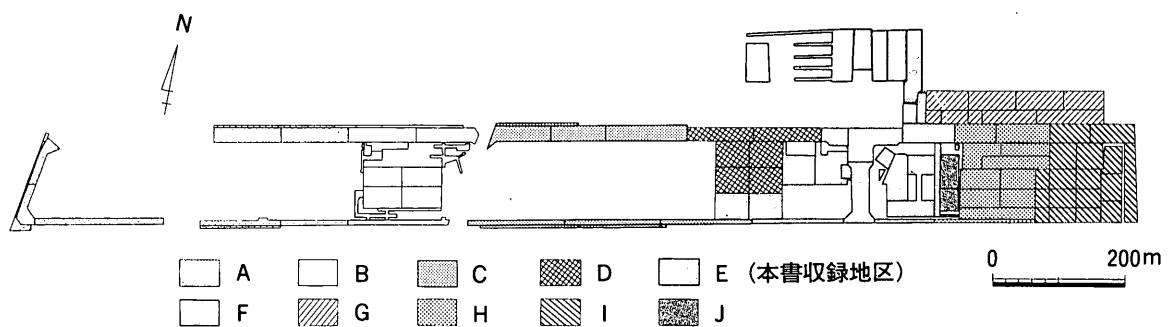
課長	藤原章夫
課長補佐	高木一義
副主幹	渡部明夫
係長	山崎 隆

(財)香川県埋蔵文化財調査センター

所長	大森忠彦
次長	小野善範
主任文化財専門員	廣瀬常雄
係長	前田和也
主任主事	西川 大
主事	佐々木隆司
文化財専門員	蔵本晋司
整理員	西桶右子
整理補助員	石川ゆかり
整理補助員	富家孝子
整理作業員	市川孝子
整理作業員	徳井敦子
整理作業員	鈴木奈穂子
整理作業員	水谷葉子
整理作業員	近藤恭子

作業内容 \ 月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
遺物注記	—————											
接合		—————										
実測			—————									
浄書										—————		
遺構整理	—————											
浄書									—————			
原稿			—————									
編集												—————

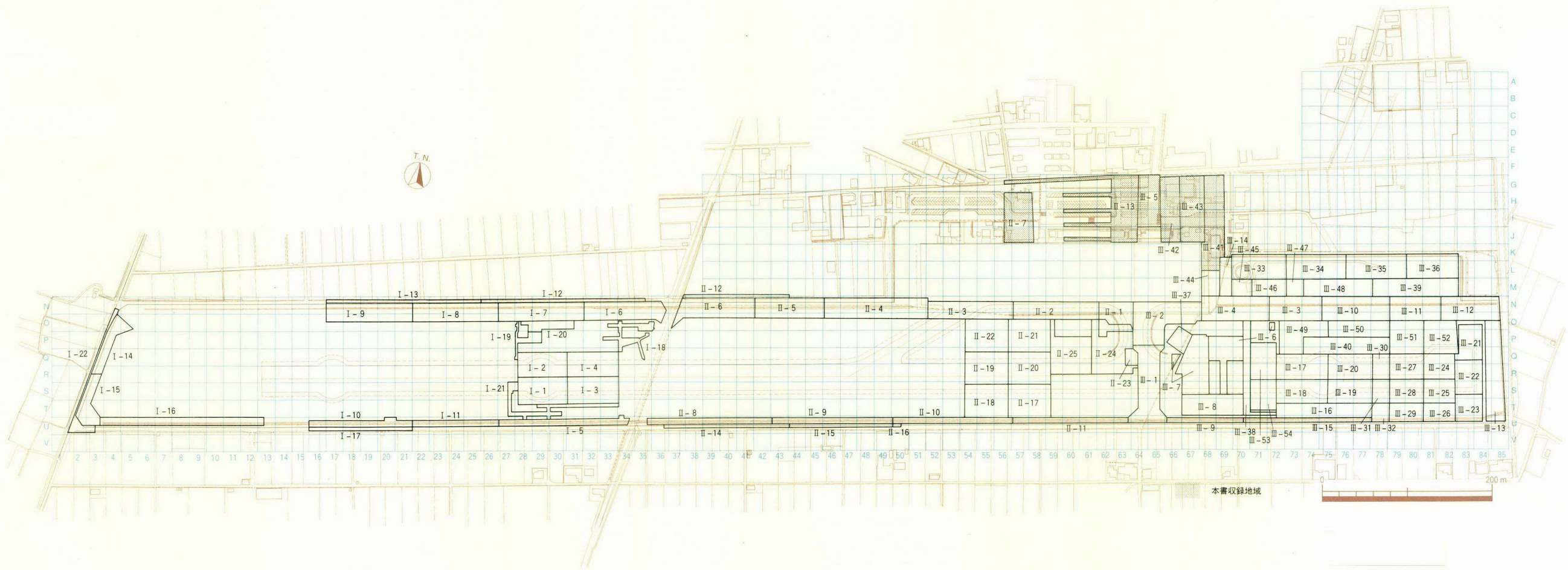
表1 平成7年度整理作業工程表



第2図 報告地区割図

地区名	面積 (m <sup>2</sup> )	主 要 遺 構 等	遺 物 等	報 告 書
A 地区	12,200	弥生時代 竪穴住居, 溝, 土坑, 自然河川 古墳時代 竪穴住居, 前方後円・前方後方・ 方形周溝墓 古 代 溝, 土坑, 水田 中 世 溝, 土坑, 水田 近 世 溝, 土坑	銅剣・銅鐙	未 刊
B 地区	16,033	弥生時代 竪穴住居, 掘立柱建物, 溝, 土坑 古墳時代 竪穴住居 古 代 掘立柱建物, 溝, 土墳墓 中 世 掘立柱建物, 溝, 土坑, 井戸 近 世 溝, 土坑		未 刊
C 地区	11,890	弥生時代 竪穴住居, 掘立柱建物, 溝, 土坑 古墳時代 竪穴住居, 掘立柱建物, 土坑 古 代 掘立柱建物, 溝, 井戸, 土坑 中 世 掘立柱建物, 溝, 土坑, 井戸, 自 然河川 近 世 掘立柱建物, 溝, 土坑	二 彩 陶 器	『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 空港跡地遺跡Ⅰ』1996.12
D 地区	22,120	弥生時代 掘立柱建物, 溝 古 代 溝 中～近世 掘立柱建物, 溝, 土坑		未 刊
E 地区	14,599	弥生時代 掘立柱建物, 溝, 土坑 古墳時代 溝 中 世 掘立柱建物? 近 世 溝, 土坑, 井戸, 出水状遺構	人形土製品	『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 空港跡地遺跡Ⅱ』1997.9
F 地区	16,887	弥生時代 竪穴住居, 掘立柱建物, 溝 古 代 溝 中 世 掘立柱建物, 溝, 土坑, 井戸, 出 水状遺構 近 世 掘立柱建物?, 溝, 土坑, 井戸		未 刊
G 地区	14,676	弥生時代 竪穴住居, 掘立柱建物, 溝, 粘土 採掘土坑群 古 代 溝 中 世 掘立柱建物, 溝, 土坑, 井戸 近 世 掘立柱建物, 溝, 土坑		未 刊
H 地区	22,855	弥生時代 竪穴住居, 掘立柱建物, 溝, 土坑, 出水状遺構 古 代 溝 中 世 掘立柱建物, 溝 近 世 溝, 土坑, 井戸	鍬形木製品	未 刊
I 地区	16,725	弥生時代 掘立柱建物, 溝, 自然河川 古 代 掘立柱建物?, 溝 中 世 溝 近 世 掘立柱建物, 溝, 土坑		未 刊
J 地区	2,780	古 代 掘立柱建物, 溝 中 世 掘立柱建物, 土坑 近 世 掘立柱建物, 土坑		『四国工業技術研究所増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 空港跡地遺跡』1997.3

表2 空港跡地遺跡各地区の調査概要



第3図 調査区割図

## 第2章 調査の成果

### 第1節 調査の方法と各調査区の概要

#### 1. 調査の方法

前章でも述べたように、本地区の調査は都合3年度に及び、また各開発事業の工事着手時期に合わせて調査を順次実施したため、調査区の設定は第3図のとおりとなった。また各調査区に共通する基準線の設定については、北辺道路（現成合町六条線）のセンターラインを基準線とし、センター杭No.5を基点として、各20m間隔の小区画を設定した。各小区画名については、各ラインを第3図に示すようにアラビア数字とアルファベットによる記号を冠して、その北西隅の交点の記号を小区画（グリット）名として採用した。遺構名及び遺物の取り上げは、各調査区及び小区画毎に行っており、遺構名については本報告書所収に当たって、昨年度刊行した本書シリーズ第1集記載の方法に従って変更した。

また遺構平面の測量は、ヘリコプターによる航空測量で行い、一部の平面図及び断面図については担当者の手書きにより作成した。

#### 2. 各調査区の概要

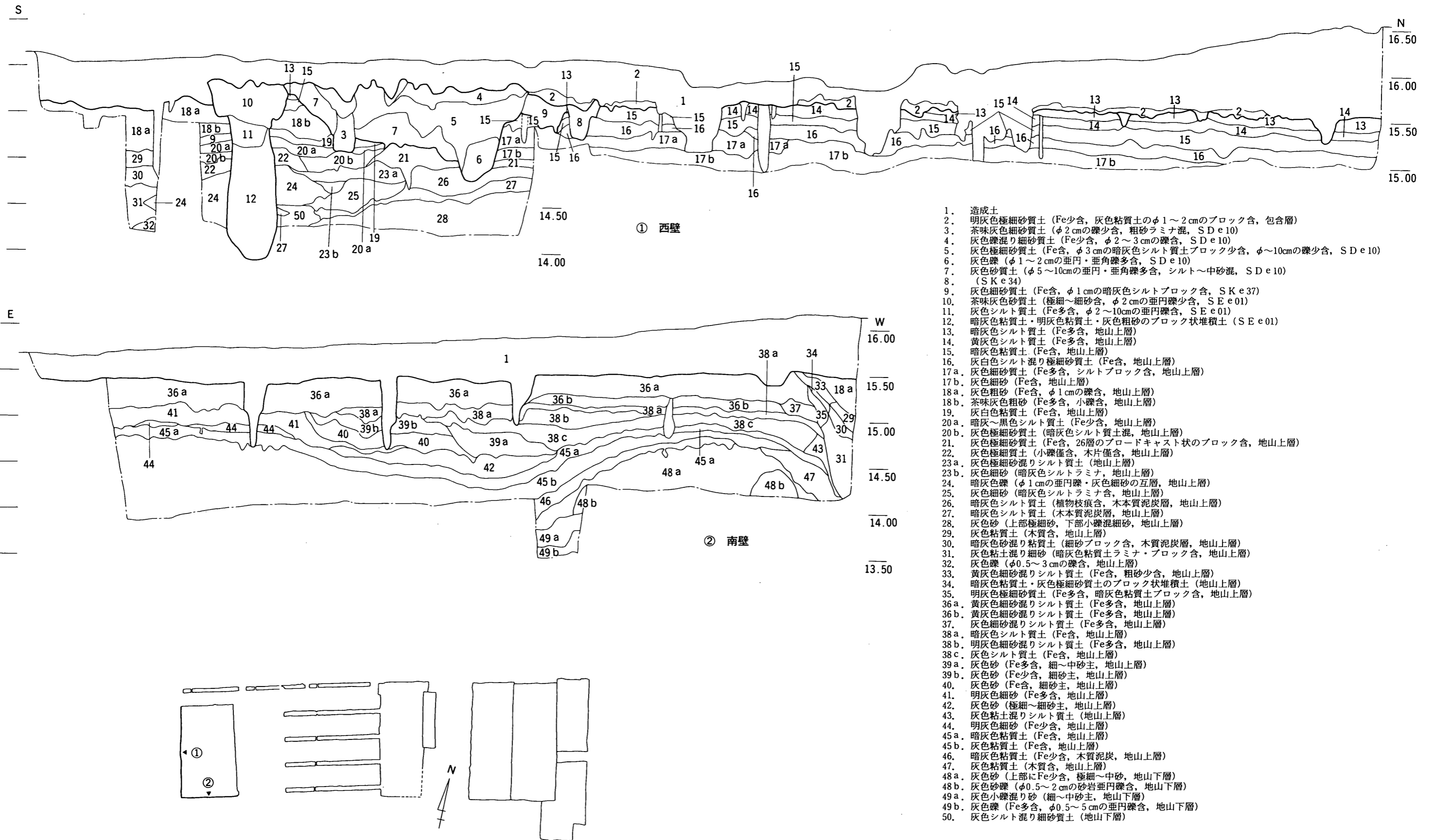
本地区は、遺跡東北部の北辺道路北側に位置し、東西約260m、南北約100m、面積約14,600m<sup>2</sup>の東西に長い概ね長方形を呈する。現地表面は後世の開発などにより概ね西から東に下る起伏の乏しい緩斜面に改変され、地表面の標高は地区東端で14.9m前後、西端で16.2m前後となる。しかしながら調査の結果、地区中央部やや東寄りで南北に連なる低地部分が検出され、その両側に微高地が展開することが判明した。つまりⅡ-7・13、Ⅲ-5区が西側微高地斜面に、Ⅲ-41~43区が低地部と東側微高地斜面に相当する。また空港使用時にはターミナルビル等の建築物が設置されており、それに伴い水路・ケーブル・タンクなどが数多く埋設され、遺構面はかなり損傷を被っていた。以下、前章と一部重複する部分もあるが西より順に各調査区の概要について、土層の堆積状況を中心に記す。

Ⅱ-7区は、地区西端に位置する調査区で、面積は約2,000m<sup>2</sup>である。地形的には調査区西方のⅡ-2~3区周辺をピークとする微高地の東斜面に相当する。地山層をベースとする遺構面は、概ね南西より北東に緩やかに傾斜して検出された。遺構面の標高は、南西隅のK56区周辺で15.6m、北東隅のH58区周辺で15.1mをそれぞれ測る。遺構面までの堆積層の大半は、旧空港造成に伴う造成土及び盛土であり、調査区南半部は本層下面で地山層が検出された。調査区北部H・I57区の東半部以東では、造成土下に空港建設前の旧耕作土層とみられる灰色系砂質土が、最大厚20cmの層厚で起伏をもって堆積し、本層下位は地山層となる。包含層は、明灰色極細砂質土が調査区北部のH~I56区を中心に約10cm以下の層厚で、痕跡的に残存するのみである。包含層中から遺物が出土しておらず、本層の帰属時期はもちろん、隣接するⅡ-17区包含層との対応関係も不明である。本層の下面はかなり起伏に富んでおり、また層中に長径1~2cmの灰色粘土のブロックを含むこと及び包含される遺物量が乏しいことから、人為的に置かれた整地層の可能性が高い。検出された遺構は、この包含層の下面より掘り込まれたもの（SDe04・05など）と、上面より掘り込まれたもの（SDe10など）に二分されるが、包含層の残存範囲が限られ、また調査時に地山面まで重機にて掘削し遺構の検出を行ったため、すべての遺構について包含層と

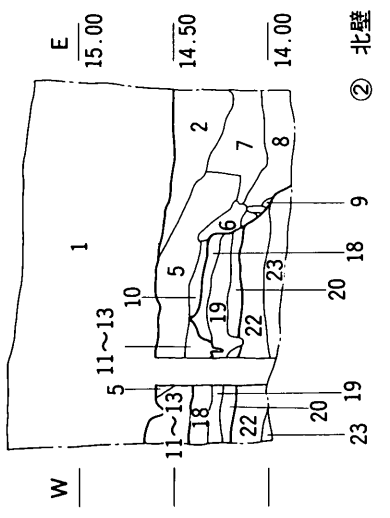
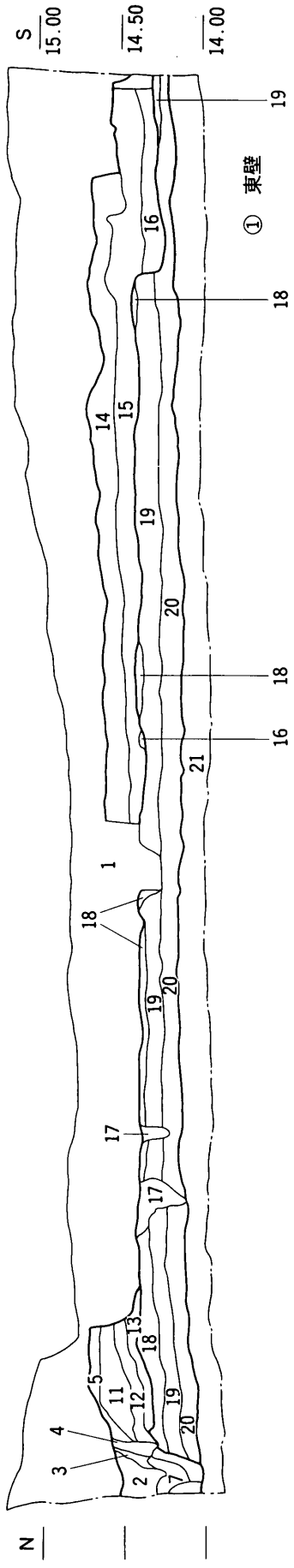
の切り合い関係が確認されたわけではない。したがって本調査区では、遺構面は1面として報告する。また遺構面は、埋設物や構築物の基礎等によって大きく損壊を被っており、さらに検出された遺構の掘削深度等から判断すれば、他調査区同様数十cm程度の削平を被っていることが想像され、溝の接続関係や建物の復元に支障となった。遺構面のベースとなる地山層は、黄色～灰色系のシルト・砂質土・粘土があり、各層は層界が不明瞭で漸移的に変化し、より下位にいくに従って構成物の粒径が荒くなる傾向が認められる。本層群の下位には、基盤層である灰色系砂礫層が堆積する。

Ⅱ-13区は、Ⅱ-7区の東に隣接する面積約3,200㎡の調査区である。本調査区は、サンメッセ香川の駐車場予定地にあたり掘削が遺構面まで及ばないため、配管等により遺構面が損傷を受ける部分のみ調査を行った。したがって西半部は幅2.5mのトレンチ状の調査区となり、溝の接続関係や建物の復元は困難で、不明瞭な点が多い。本調査区も地形的には微高地の東斜面に相当し、地山層上面は概ね南西より北東方向に緩やかに傾斜して検出された。本調査区は、Ⅱ-7区と比べて緩斜面のより下位に位置することから、包含層が良好に残存し、包含層よりコンテナ4箱分の遺物が出土している。本調査区の基本的な層序関係は、地点によって大きく異なるが、基本的には空港造成時の堆積土、空港造成前の旧耕作土、包含層、地山層の順に堆積する。本調査区の包含層は、2層に分層された。上位の包含層Ⅱ層の灰色砂質土は、調査区東部を中心に堆積し、特に63ライン以東では最大厚15cm程度の層厚で広く堆積する。本層からは、9世紀前半代の遺物を中心に弥生土器や石器、微量の中・近世土器類などが出土している。中・近世土器は調査時の混入の、弥生土器は包含層Ⅲ層からの出土の可能性がそれぞれ高く、遺物の内容から9世紀代のプライマリーな堆積層と考えられる。本層上面よりSDe36・38、SBe06～08などの遺構が掘り込まれており、本遺構面を第1遺構面とする。包含層Ⅲ層は黒褐色砂質土層で、調査区北部のG63～64区を中心に最大厚15cmの層厚をもって東に僅かに傾斜して堆積するようである。調査時に包含層Ⅱ層と分離して遺物が採集されていないため、弥生土器が出土したらしいこと以外は遺物の内容については不明である。各包含層の広がりや包含層上面の標高値は、土層断面実測図に記載がなく不明である。最終遺構面(第2遺構面)である地山層上面の標高は、調査区南西隅のK60区周辺で15.30mを、北西部のG60区周辺で14.80mを、東端部のI63区周辺で14.60m前後をそれぞれ測り、直線距離80mで約0.7mの比高差をもって検出される。

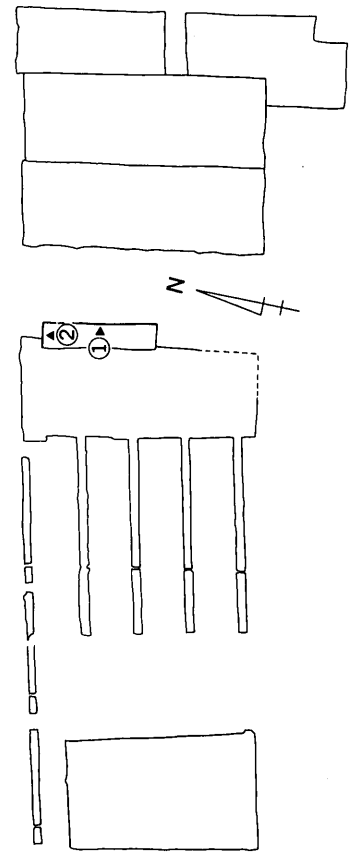
Ⅲ-5区は、Ⅱ-13区の東に隣接する調査区で、県道林三谷線部分の調査区である。本調査区では、事前調査によって遺構密度が低いことが想定されていたので、東西7.5m、南北35mのトレンチ状に調査区を設定して調査を進めた。本調査区での地形環境や基本的な層序関係は、Ⅱ-13区と大差はない。本調査区北端部では、空港造成時の掘削が旧地表面以下には及ばず、4層に細分される旧耕作土層の水平堆積層が確認された。遺物は出土しておらず、本層の帰属時期は不明ながら、隣接する他調査区での状況より近世以降と推定される。本層下位には包含層Ⅱ層が堆積する。包含層Ⅱ層は、主に調査区北半部に良好に遺存し、南半部では旧耕土層により削平され痕跡的にしか検出し得ない。本調査区でも本層中より、弥生土器や7～9世紀代の須恵器坏や円面硯などが出土した。本層上面を遺構面とする第1遺構面より、SDe38や淡黄灰色砂質シルトの埋土を有する柱穴群が掘り込まれる。調査担当者の所見によれば、これらの遺構は近世以降の時期が推定されており、Ⅱ-13区の建物群を構成する柱穴とは時期差が認められる。包含層Ⅱ層の下位に堆積する包含層Ⅲ層は、本調査区では黒灰色粘土と黒黄色粘土の2層に細分された。本層は調査区南端を除いて概ね良好に遺存しており、本層上面の標高は南半部で14.40m、北端部で14.25mを測り北に傾斜する。本層中よりの出土遺物は不明。本層下面、暗灰黄色粘



第4図 II-7区西壁・南壁土層断面図 (天地1/40・左右1/160)



- 1. 盛土
- 2. 淡灰色砂質シルト (暗褐色粘質土ブロック含, SDe38)
- 3. 橙灰色シルト (SDe38)
- 4. 橙灰色砂質シルト (SDe38)
- 5. 暗褐色粘質シルト (SDe38)
- 6. 灰色シルト (SDe38)
- 7. 濁灰青色粘質シルト (SDe38)
- 8. 濁黄灰色中砂 (SDe38)
- 9. 濁黄灰色粘質土 (SDe38)
- 10. 濁赤褐色砂質シルト (旧耕土)
- 11. 灰褐色砂質シルト (旧耕土)
- 12. 橙褐色粘質シルト (旧耕土)
- 13. 橙明灰色砂質シルト (旧耕土)
- 14. 砂黄濁灰色~淡灰褐色シルト (旧耕土)
- 15. 淡緑灰色シルト (旧耕土)
- 16. 淡黄灰色混砂シルト (旧耕土)
- 17. 淡黄灰色砂質シルト (暗褐色粘質土ブロック含, 近世溝)
- 18. 赤灰色粘土 (包含層II)
- 19. 黒灰色粘土 (包含層III)
- 20. 黒黄色粘土 (包含層III?)
- 21. 暗灰黄色粘土 (地山上層)
- 22. 黄黒色粘土 (地山上層)
- 23. 灰黄色粘土 (地山上層)



第5図 III-5区東壁・北壁土層断面図 (天地1/40・左右1/160)



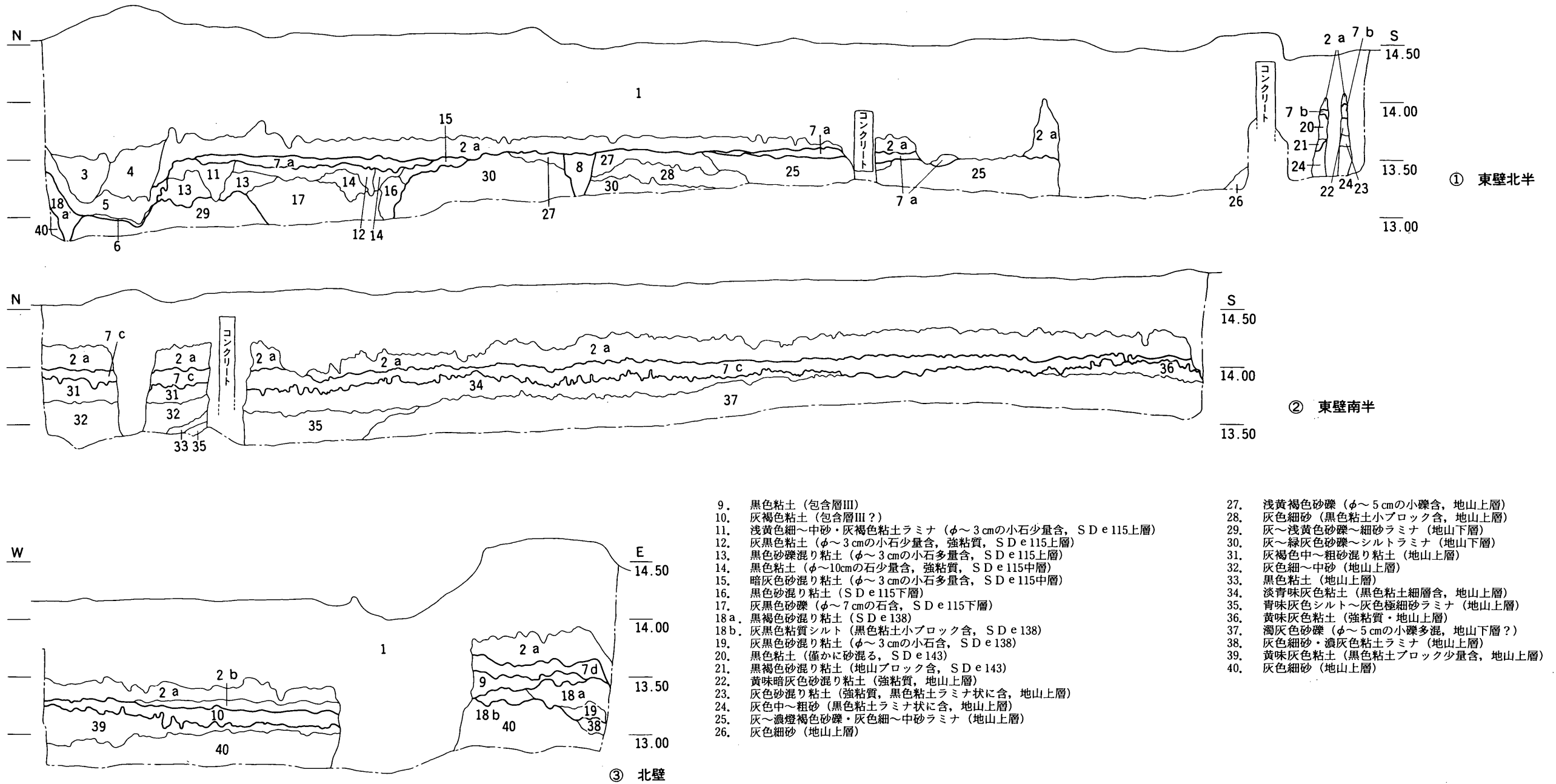
土の地山層上面（第2遺構面）の標高は、調査区南端で14.20m、北端部で14.05mと約0.15mの比高をもって検出された。隣接するⅡ-13区と同層上面の標高値とは約0.5m前後の比高差があり、基準とする杭のレベル値に誤りがあることが想像され、ここでは詳述しない。本遺構面では、黒灰色と灰暗黄色粘質土の埋土を有する柱穴3基を検出した。

Ⅲ-41~43区は、Ⅲ-5区の東に隣接する民間分譲地部分の調査区である。調査区北西部と南東部では、建物基礎によって遺構面下位の基盤層まで大きく掘削を被っており、また上記以外の地点についても幾ばくかの削平・攪乱は避けられず、各調査区間の土層堆積状況の確認に大きな障害となった。現地表面の標高は14.9m前後であり、地山層上面の標高は14.2m前後を測る。この間の約0.7mの堆積層の大半は、旧空港造成に伴う造成土などが占め、空港造成地の掘削が深く及ばなかった地点を中心に、旧耕作土・包含層Ⅰ・Ⅲ層といった3層に大別される基本層序が確認された。

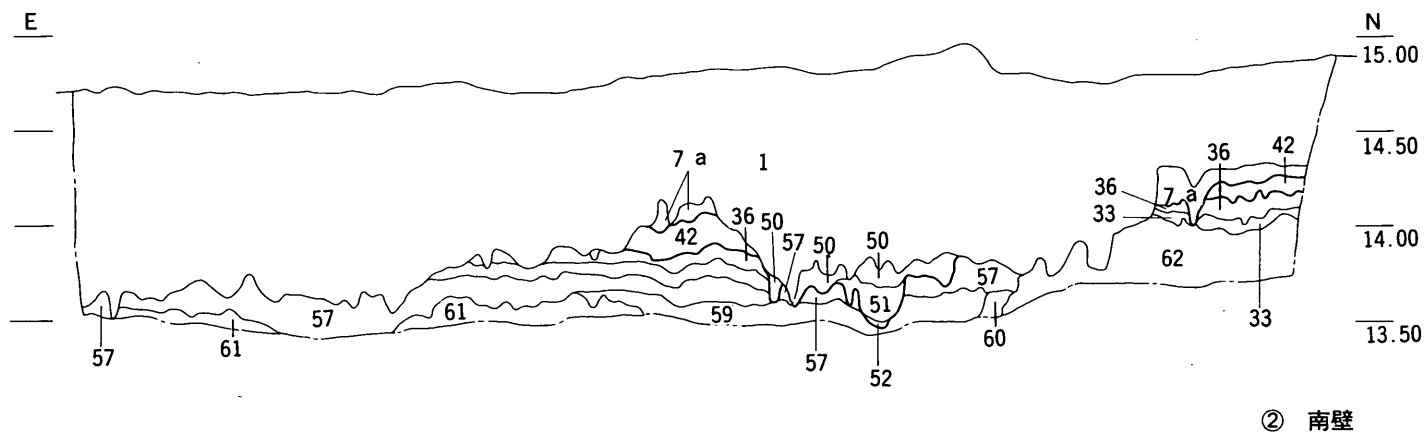
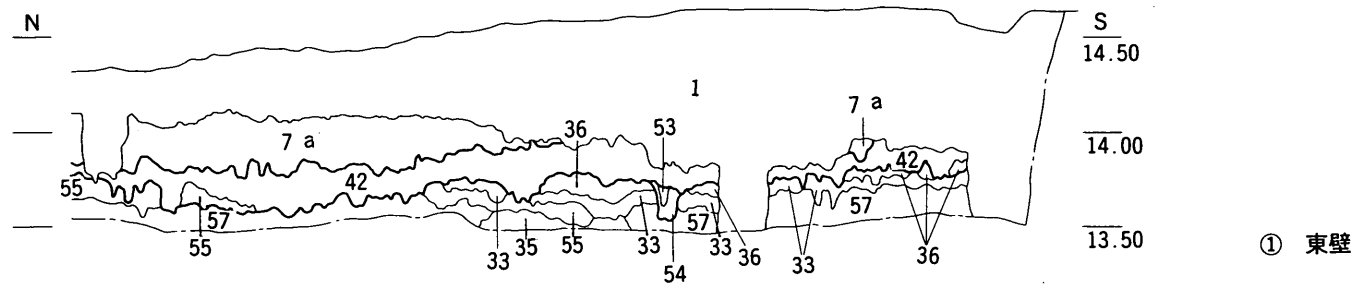
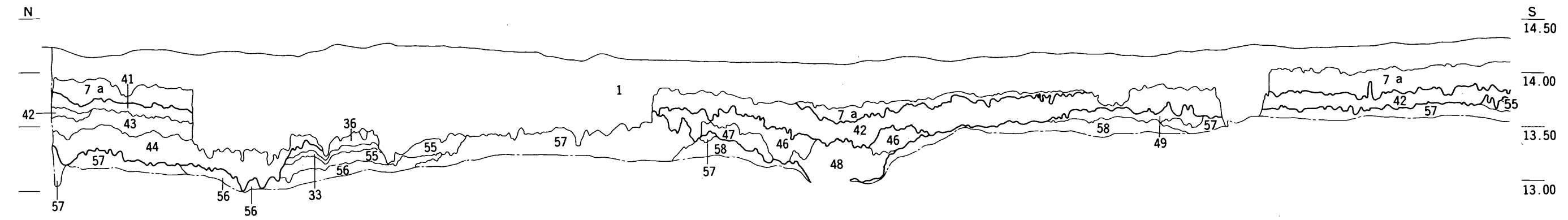
さて地山層上面は、概ね北東方向に緩やかに傾斜して検出されたが、先述したように本調査区西半部は、上面幅20m前後、東西両側縁との最大比高差2m前後の南北に長い帯状の低地部の様相を呈する。この低地部底面を弥生前期から後期の幹線水路が貫流するが、その両側斜面部には水路に向けて流下する樹枝状に延びた小流路群が検出された。小流路群はその形状から、明らかに人為的に掘削された溝ではなく、雨水や湧水を水源としてその流下によって地表面が浸食され、形成されたものと推定される。小流路群からは弥生後期土器の出土が認められ、低地部の埋没が当該期より進捗しつつあったことが窺える。またこの低地帯は南接するⅢ-7・37区でも確認されており、遺跡を南北に縦断して存在し、遺跡東部を東西二つの微高地に分断する。

包含層Ⅰ層は、Ⅲ-42~43区を中心に標高13.4~14.0mにかけて北東方向に緩やかに傾斜して堆積する。本層は、地点によって多少色や土質を違えているが、基本的には灰味をおびた黄褐色系粘土層であり、10~20cm前後の層厚を有する。本層と後述する中世の落ち込みSXe01上層埋土とは明瞭には区分できず、むしろSXe01の最終堆積層といった性格が相応しい。Ⅲ-42区西端では、本層は検出されずⅡ区に分布する包含層Ⅱ層との関係については判然としない。また本層上面は概ね平坦であったが、特に調査区南半部を中心に下面に細かな起伏が顕著に認められた。本層の堆積によって弥生後期以来存在した低地帯の埋没は完了し、本地域の水準化が達成されるようである。

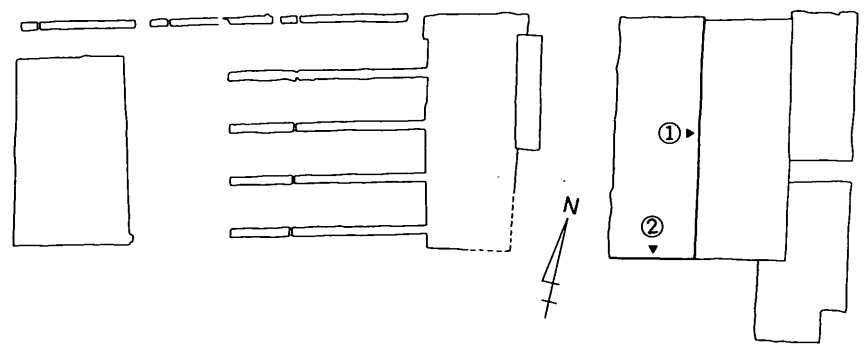
包含層Ⅲ層は、低地帯であるⅢ-42区を中心に検出され、低地帯中央部が最も厚く、縁辺にいくに従って薄くなり、41区東端では検出しえなかった。本層は、本調査区では強粘質の黒褐色粘土層であり、Ⅱ区と同層とはやや色調等が異なるが、遺物内容や堆積状況から判断してほぼ同一のものと判断してよいだろう。また弥生水路や小溝群の埋土と細分することが困難で、これら溝群の埋積と一連の過程で堆積したものと考えられる。本層からの出土遺物は乏しく、水路群の廃棄にともなって集落域の移動が生じた可能性も考えられる。



第6図 Ⅲ-41区東壁・北壁土層断面図 (天地1/40・左右1/160)



- 1. 造成土・旧耕作土
- 7 a. 灰黄褐色砂混り粘土 (Fe含, 包含層 I)
- 33. 黒色粘土 (地山上層)
- 35. 青味灰色シルト～灰色極細砂ラミナ (φ～7 cmの礫多量含, 地山上層)
- 36. 黄味灰色粘土 (強粘質, 地山上層)
- 41. 暗灰褐色粘土 (Fe含, SXe01上層)
- 42. 黒灰色粘土 (SXe01上層)
- 43. 黒褐色粘土 (強粘質, SXe01上層)
- 44. 黒色砂混り粘土 (SXe01下層)
- 45. 黒褐色粘土 (強粘質, 包含層 III)
- 46. 黒褐色粘土 (SDe115上層)
- 47. 濁黒灰色粘土 (黒色粘土ブロック状に含, SDe115中層)
- 48. 黒色粘土・淡灰色細砂ラミナ (下面に小礫・土器片多量に含, SDe115下層)
- 49. 黒色粘土 (強粘質, 小溝群埋土)
- 50. 黒色粘土 (強粘質, φ～1 cmの小石少量含, SDe115上層)
- 51. 黒色砂混り粘土 (36層の小ブロックを少量含, SDe115中層)
- 52. 灰黒色粘土混り粗砂 (φ～1 cmの小石多量含, SDe115下層)
- 53. 灰黒色砂混り粘土 (小溝群埋土)
- 54. 黒色粘土 (33・56層の小ブロック含, 小溝群埋土)
- 55. (地山上層)
- 56. (地山上層)
- 57. 淡緑灰色粘土 (植物遺体少量含, 地山上層)
- 58. 灰色細砂～砂礫 (φ～5 cmの小石含, 地山下層?)
- 59. 灰色粘土 (強粘質, 植物遺体少量含, 地山上層)
- 60. 灰色砂混り粘土 (地山上層)
- 61. 灰色粗砂混り粘質土 (下位は粗砂～砂礫に漸移する, 地山上層)
- 62. 灰色砂質土 (Fe含)



第7図 III-42区東壁・南壁土層断面図 (天地1/40・左右1/160)

## 第2節 遺構・遺物

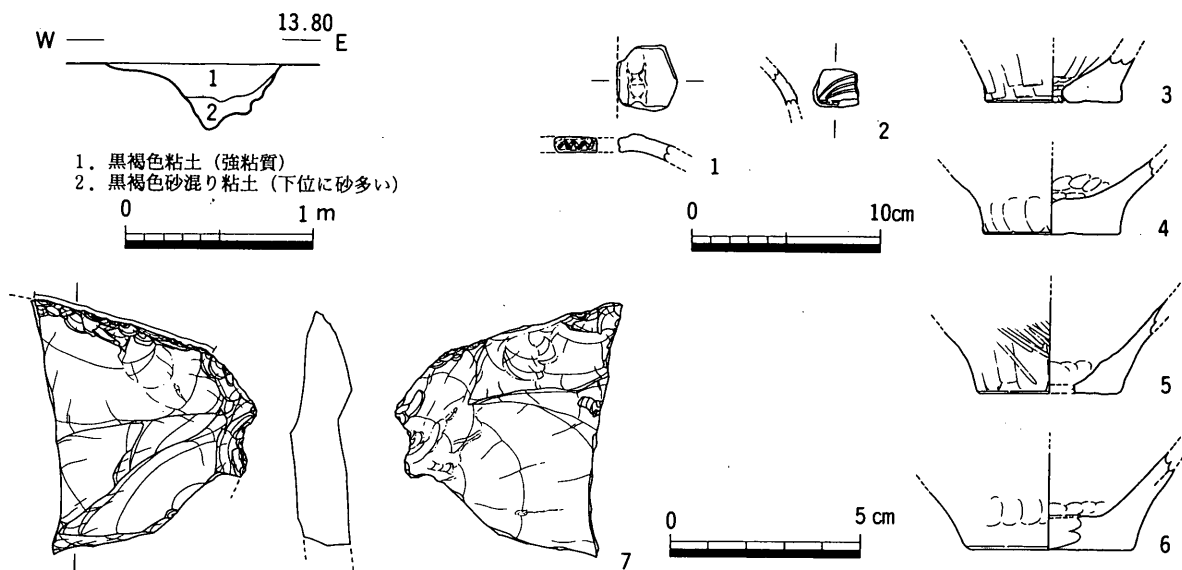
### 1. 弥生時代前期

#### ①. 溝状遺構

SDe77 (第8図・図版31・49・75)

Ⅲ-42区低地部を南北に縦断するように配された溝状遺構である。包含層Ⅲ層下面より掘り込まれる。北端は中世の落ち込みSXe01に削平される。南端は弥生時代後期のSDe115南北溝に切られ、また両溝の流路方向は概ね合致することから、本溝の埋没後SDe115に付け替えられたと判断された。本溝は僅かに弧を描きながら南北に延び、延長約36mを検出した。流路方向はSDe115との重複部よりN1°Wとほぼ真北に直線状に流下し、途中やや屈曲してN11.5°Eと北東方向に折れる。幅0.6~1.0m、深さ0.4m、底面の標高13.3m前後を測る。断面形は、V字状ないしは逆台形状を呈する。底面の高低差から、北流していたことが考えられる。埋土は黒褐色粘土層が堆積し、下位層に砂の混入が多くみられることから2層に細分した。上位層は溝兩岸のテラス部にも堆積する。本溝の周囲には弥生時代後期の小溝群が展開し、調査当初本溝上層と小溝群埋土との識別が困難なため、同一時期のものとして調査を進めた。しかしながら本溝からは前期の遺物しか出土せず、遺物面より小溝群より先行する可能性が想定されたが、層位的な先後関係までは把握できなかった。

遺物は、コンテナ半箱程度が出土したのみで、また大部分は細片化している。7点を図化した。2・5は上層、その他は下層出土の遺物である。1は壺口縁部。端部付近内面に刻み目突帯を貼付し、前期後葉に位置付けられる。2は壺体部小片。外面に重弧文もしくは木葉文を付す。1との供伴を考えれば、木葉文の可能性が高い。3~6は底部。いずれも分厚い頑強な形態である。3は底部中央に焼成後円孔を穿つ。4・6の内面には、長径1mm程の炭化した種子が認められた。後述するように分析の結果、種別は判明しなかったが、土器胎土中に混入したか意図的に混和された可能性が指摘された。7は打製石庖丁の未製品。背部・抉り部共に片面調整である。半折しており、刃部の調整は認められない。



第8図 SDe77断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/2・1/4)

## 2. 弥生時代後期～古墳時代前期

### ①. 掘立柱建物

#### SBe02 (第9図・図版10)

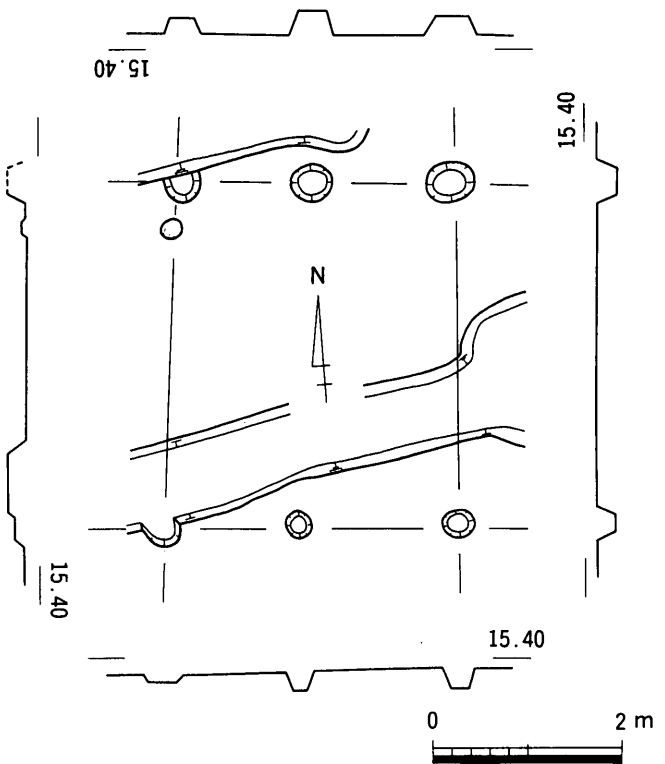
II-7区I57・58グリットで検出した南北棟建物である。後述する近世の建物SBe01の南約9mに位置する。建物中央部を東西方向の攪乱溝が貫通しており、桁方向の柱穴は両端2穴を確認したのみである。したがって本建物は、現状で桁行1間(3.55m)、梁間2間(2.9~3.1m)、主軸方向N8°E、床面積10.7m<sup>2</sup>の側柱建物と復元されるが、本来的には桁行2間であった可能性が高い。柱穴掘り方は径0.3~0.5m前後の略円形ないし楕円形を呈し、北辺の柱穴列が南辺の柱穴列と比較してやや大きい。柱通りはよく揃っており、残存深0.2~0.3m、底面の標高15.0~15.1mである。柱穴埋土は主に黑色粘土が認められた。

本建物に伴う遺物は出土しておらず、時期決定は調査担当者の所見に従った。しかしながら、建物主軸方向は概ね地割りの方向と一致し、SBe01とも近く、時期決定については問題点を残す。

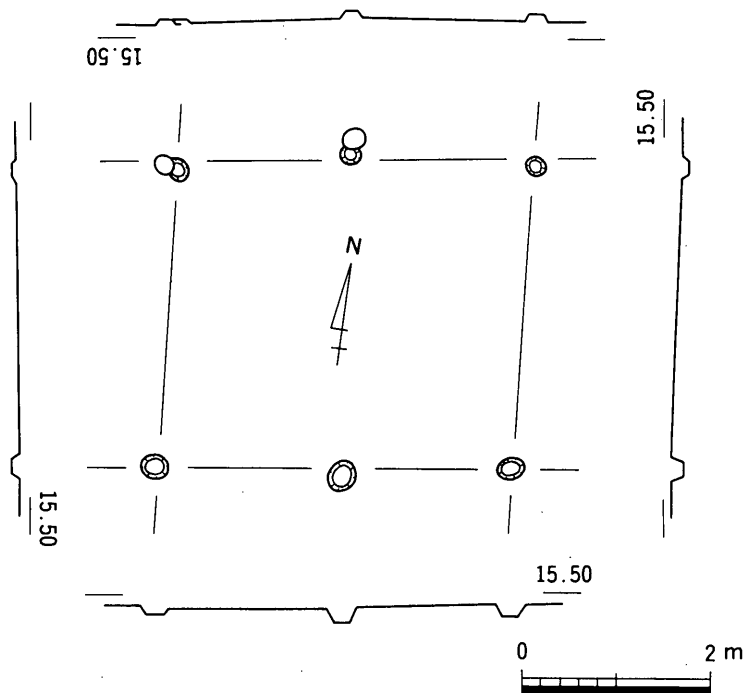
#### SBe03 (第10図・図版7・10)

II-7区J57グリットで検出した東西棟建物である。SAe02と重複するが、柱穴に切り合い関係はない。本建物は桁行2間(3.95m)、梁間1間(3.2~3.5m)の側柱建物で、主軸方向はN85°E、床面積13.7m<sup>2</sup>を測る。柱穴掘り方は径0.2~0.3mの略円形を呈し、南辺列の柱穴がやや大きい。残存深は0.05~0.15mで、底面の標高は15.2~15.3mを測る。桁方向の柱間間隔は1.9mで、柱通りはよく揃っている。

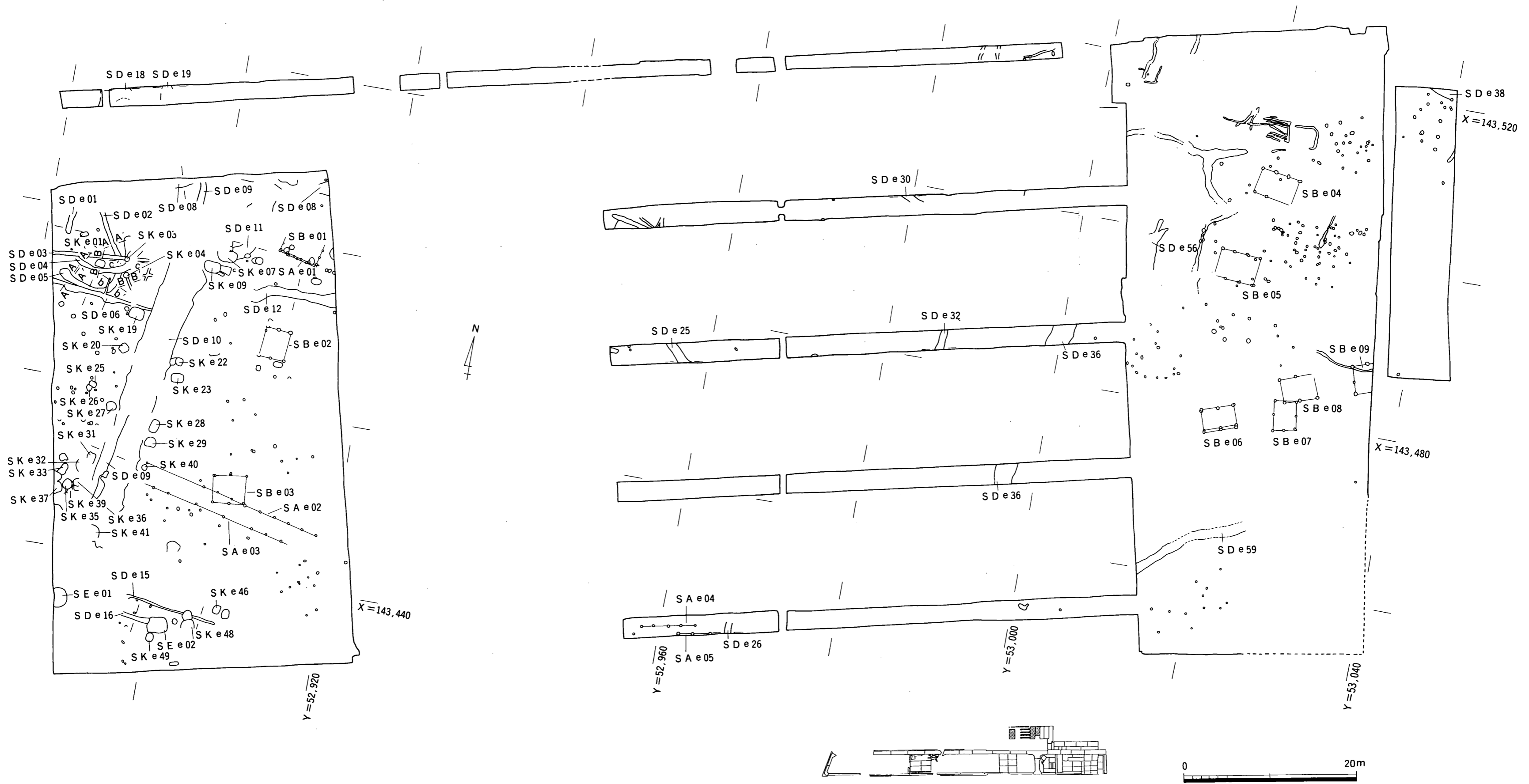
本建物からは、柱穴3穴より弥生土器細片がそれぞれ少量出土している。土器にはいわゆる下川津B類土器と共通する胎土をもつものが含まれ、弥生時代後期以降に時期は限られる。埋土



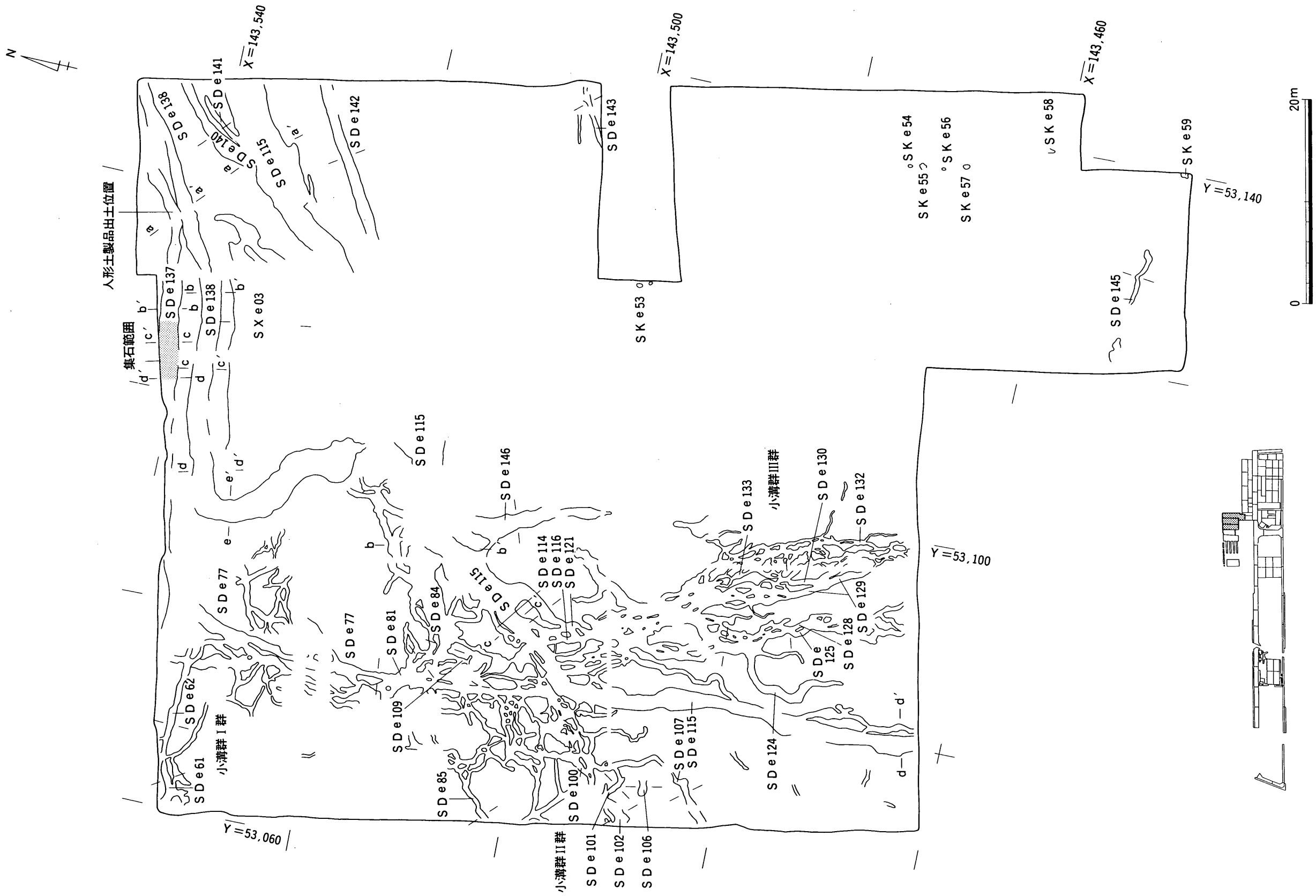
第9図 SBe02平・断面図(1/80)



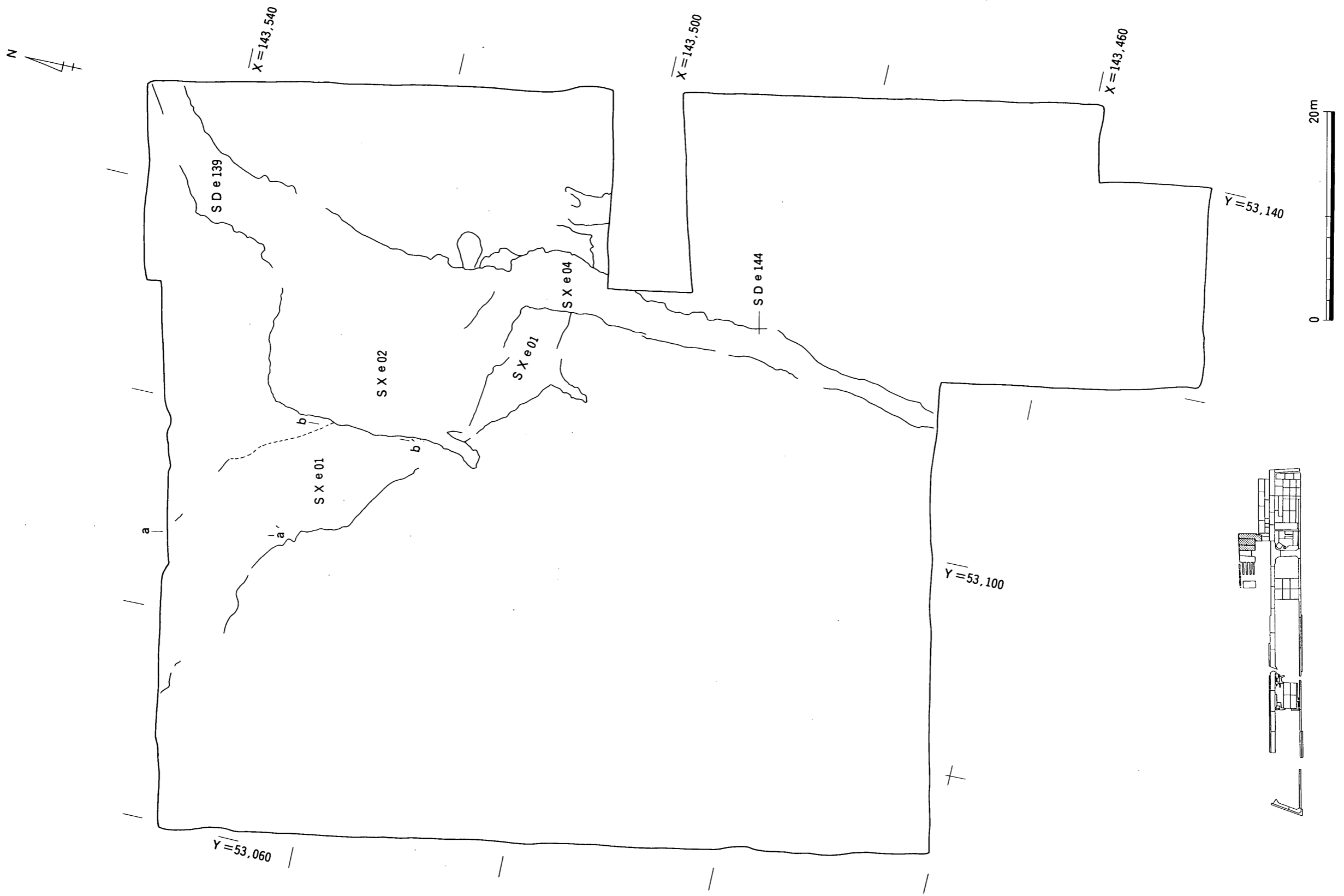
第10図 SBe03平・断面図(1/80)



第11图 II-7-13 III-5区遺構配置図 (1/400)



第12図 Ⅲ-41~43区弥生時代~中世遺構配置図 (1/400)



第13図 III-41~43区近世遺構配置図 (1/400)



の特徴は SBe02 と共通するようであるが、主軸方位が異なり、いわゆる条里型地割りに合致しない。また堅穴住居に付随すると考える円形周溝が近接して存在し、本調査区が当該期の集落の一角を占めると考えられることから、本建物の時期を推定する根拠とした。

## ②. 溝状遺構

### SDe01 (第14図)

Ⅱ-7区H56グリットで検出した溝状遺構である。北端は攪乱を被り、南端は調査区内で終結する。延長2.8mを検出した。流路方向N7.8° E、幅0.7m、深さ0.12m、底面の標高は15.4mを測り、断面形は皿状を呈する。埋土は暗茶褐色極細砂質土の単層である。

遺物は出土しておらず、時期決定は調査担当者の所見に従った。なお溝の位置関係、規模、底面の標高値、埋土の特徴などから判断して、SDe04の延長部になる可能性が高く、そのことは担当者の所見と矛盾しない。

### SDe02 (第14図)

Ⅱ-7区H56～I57グリットにかけて検出した直線溝である。南北両端は攪乱を被り、また南端は攪乱溝より南へは延長しない。検出長は10.1mである。中央部でSDe03～05と重複し、切り合い関係よりそのいずれよりも先行する。流路方向N31° E、幅0.2～0.4m、深さ0.07m、底面の標高15.4m前後を測り、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は暗茶褐色極細砂質土の単層である。

遺物は出土しておらず、時期決定は調査担当者の所見に従った。

### SDe04 (第14図・図版8)

Ⅱ-7区H56・57グリットで検出した溝状遺構である。平面形態は、緩く弧を描く半円形を呈する。今仮に、円形周溝を想定した場合、内径は7.5m前後が復元される。北西端はSDe03によって攪乱を受け、北東端は攪乱により損なわれる。幅0.56～1.2m、深さは西半部で0.1m前後を測る。断面形は皿状を呈し、底面の標高は15.4m前後となる。流下方向については、北東部溝底の標高値が不明なためやや確証に欠けるが、北流していた可能性が高いと思われる。埋土は暗茶褐色極細砂質土の単層で、長径1cm以下の暗茶褐～黒色粘質土の小ブロックを含む。

遺物は出土しておらず、時期決定は調査担当者の所見に従った。

本溝については、調査時円形周溝墓の可能性を考え調査を進めたが、周溝2基(SDe04・05)が重複して存在すること、溝内の堆積土に墳丘盛土の流れ込みの可能性がある土壤が全く認められなかったこと、想定される墳丘部に埋葬施設が検出されなかったことなどから、周溝墓の可能性は否定したい。堅穴住居の周溝といった性格がより妥当性が高いものとする。

### SDe05 (第14図・図版8)

Ⅱ-7区I56・57グリットで検出した溝状遺構である。SDe04同様平面形態は、緩く弧を描く半円形を呈しており、機能面で両者は近似した内容を有していたのであろう。また仮に円形周溝を想定した場合の内径は、SDe04よりやや小規模となる。南端部でSDe06と、北東部でSDe02～04と重複する。切り合い関係よりSDe02より後出し、他の溝より先行する。幅0.5～0.85m、深さ0.1～0.15mを測り、断面形は皿状ないしは逆台形状を呈する。底面の標高は15.4m前後にあり、部位によって底面には若干の起伏が認められる。埋土は暗茶褐色シルト質土の単層である。

遺物は小袋1袋程度の弥生土器片が出土した。細片が多く、また器表面は剥離が顕著で、調整が判読

できないものが多い。大形鉢1点のみ図化した。8は口縁部を小さく外反させる形態で、胎土に角閃石細粒を多く含む。口縁部が矮小な点から、後期中葉以前には遡りえないと考える。

#### SDe08 (第14図・図版49)

Ⅱ-7区H57・58グリットで検出した東西走る溝状遺構である。検出部分の大半は、攪乱溝等により損なわれており、東端部付近でかろうじて形状を知ることができる。また流路方向・埋土より、SDe11と合流する可能性が考えられ、想定される合流部で南へ若干屈曲する。幅は0.7~1.25mと部位によって大きく相違するが、これは上面の削平の度合いに起因する。深さは0.25m前後であり、断面形は皿状もしくは逆台形状を呈する。底面は概ね平坦である。底面の標高は、西半部で15.0m前後、東端部で14.9m前後を測り、高低差から東へ流下する。埋土は黒色粘土の単層で、東半部では細砂粒を混じえる。

遺物は、弥生土器破片がコンテナ半箱程度出土している。器表面は剥離が顕著で、調整の観察できないものが多い。また細片が多数を占める。器種は広口壺、高坏、甕などが認められる。3点を図化した。9は小形の無頸壺。器壁は薄く、張りの強い体部が特徴である。後期初頭頃か。10・11は下川津B類土器。10は広口壺、11は甕で、いずれも後期後半から末頃に下る。

#### SDe11 (第14図)

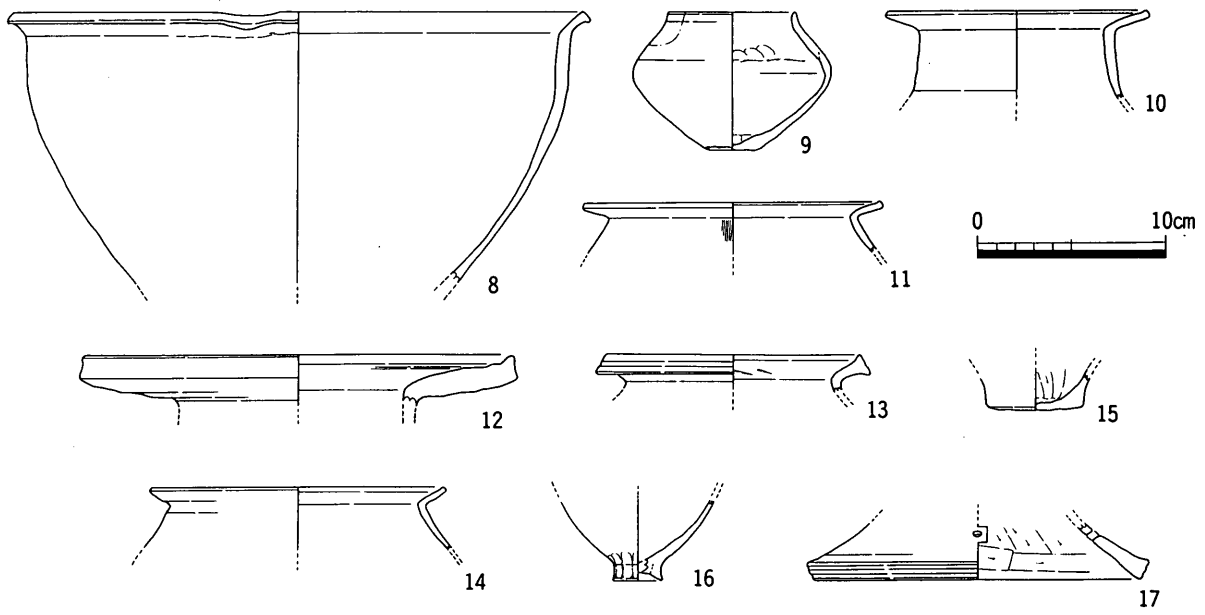
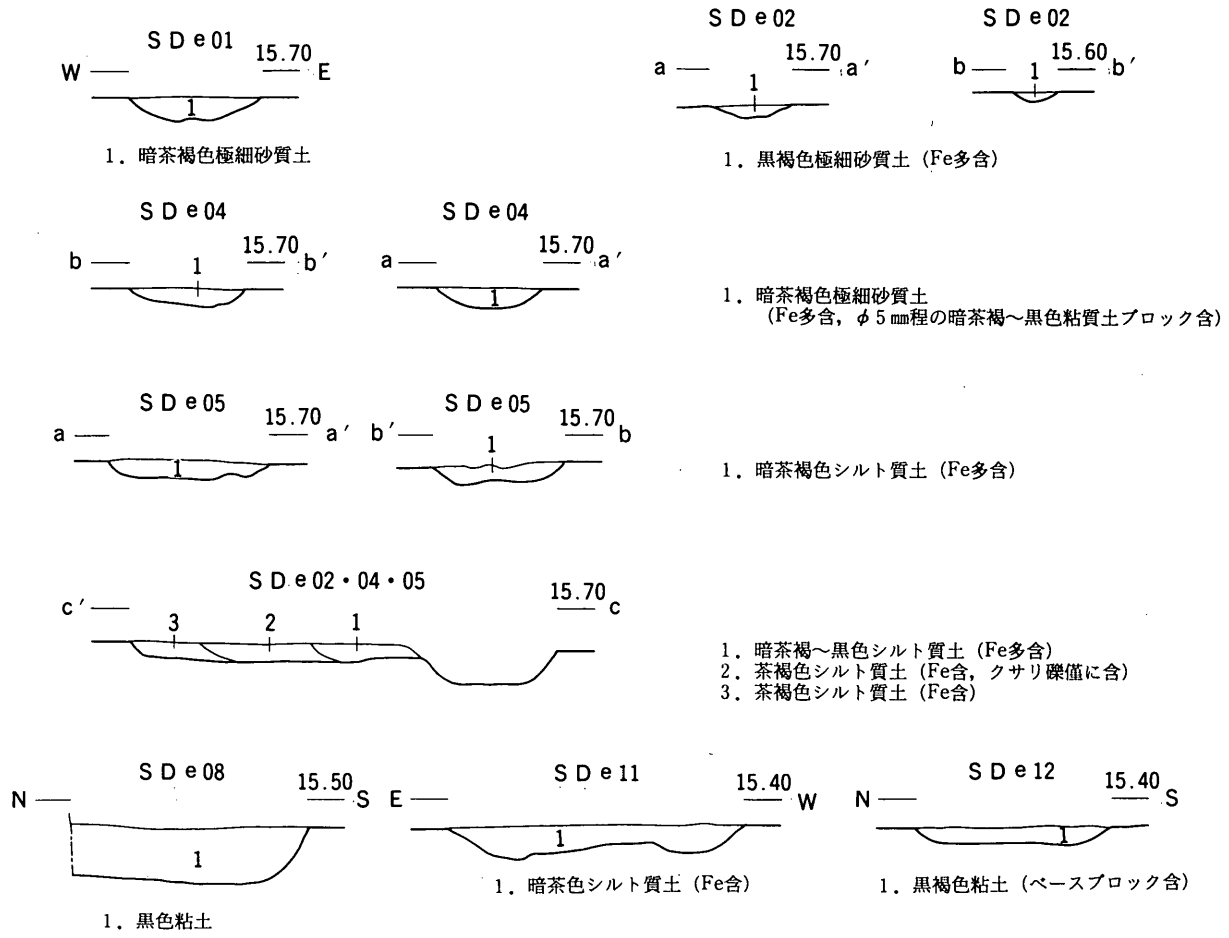
Ⅱ-7区H57・58グリットで検出した溝状遺構である。緩く逆L字状に屈曲して北に延びる。北端は、位置関係や埋土から、SDe08と合流する可能性が高く、西端は、攪乱溝によって損なわれており不明である。SKe06~09・11と重複し、切り合い関係よりそのいずれよりも先行する。幅1.5~2.6m、深さ0.1~0.17mを測る。断面形は浅い皿状ないしは逆台形状を呈する。底面には小溝状の緩やかな起伏が認められ、検出部位による上面幅の開きや時期差がみられる出土遺物の点からも、本溝が本来的には複数の溝が並走・分岐する可能性が示唆されたが、埋土からそれを確証付ける特徴は見出せなかった。埋土は暗茶色シルトの単層である。

遺物は、小袋1袋程度の弥生土器片が出土した。小破片が多く、また器表面は顕著な剥離により、調整の観察が困難なものが多い。器種には、広口壺、大形甕、甕、高坏脚、小形鉢などがある。12は下川津B類広口壺の口縁部片である。口縁部内面に、やや不明瞭な3条の凹線を認める。14は下川津B類甕。器表の剥離が顕著なため調整は不明瞭ながら、口縁部は薄く小型化し、端部は小さく摘み上げる。以上2点は、後期末頃まで下る可能性がある。13は甕口縁部。口縁端部は上下に拡張して、凹線を施す。端部の拡張は弱い。後期初頭に遡る。15は甕の底部。突出した平底形態から、後期中葉頃までには納まるものとする。16は小形の鉢と考えられ、大きく突出した底部を有する。後期中葉以降に下る。17は高坏脚部。端部の肥厚は鈍く、後期初頭でも新しい様相を呈する。上記した遺物は16を除いていずれも、胎土中に角閃石細粒を多量に含む。

#### SDe12 (第14図・図版9)

Ⅱ-7区I57・58グリットで検出した溝状遺構である。東端部は調査区外に延長し、西端部は徐々に浅くなりくの字状に小さく屈曲して途切れる。延長10.0mを検出した。流路方向N89°W、幅1.0m、深さ0.1mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、底面は概ね平坦である。底面の標高15.1m前後となる。埋土は黒褐色粘土の単層である。

遺物は出土していない。本溝の時期は、調査担当者は近世以降に比定するが、埋土の特徴から当該時期に含めるのが妥当と判断した。



8 = SDe05, 9~11 = SDe08, 12~17 = SDe11

第14図 II-7区溝状遺構断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)

#### SDe18 (第15図)

II-13区G57グリットで検出した溝状遺構である。遺構の大半が攪乱溝により破壊されているため、詳細は不明な点が多い。検出し得た部分から、緩やかに屈曲して北西方向に流下する可能性が考えられる。幅1.8m、深さ0.4m程度を測り、断面形は概ね皿状を呈する。底面の標高は15.0m前後である。埋土は2層に細分され、上位に黒灰色砂質土が、下位に灰褐色砂質土が堆積する。

遺物は、小袋1袋程度の弥生土器片が出土した。器表面は顕著に剥離したものが多く、調整の観察は困難である。器種は壺、甕、高坏がある。3点を図化した。18は広口壺。端部を上方に摘み上げる。19は下川津B類甕だが、体部の開きは弱くやや異質感を与える。20は底部。小さな平底形態を呈し、鉢の可能性が高い。上記した遺物はいずれも、胎土中に角閃石粒を多量に含む。

#### SDe19 (第15図・図版22・49)

II-13区G57グリットで検出した溝状遺構である。攪乱溝により遺構の大部分が壊され、検出し得たのは北端部に限られる。概ね南北流する溝で、幅2.6m、深さ0.4mを測る。断面形は皿状を呈し、両岸に幅0.4m程度のテラス部を有する。底面の標高は15.0m前後であった。埋土は褐色砂質土の単層である。

遺物は、溝北端部底面より完形の広口壺が口縁部を西に向け横位に出土した。広口壺以外は、小袋1袋程度の小破片が出土したのみである。2点を図化した。21は体部の開きが弱く、甕または鉢の底部片となろう。底部縁辺を小さく摘み出して上げ底状を呈するのが特徴で、後期中葉までに類例をみる。22は広口壺。出土時には完形であったが、取り上げ時に細片化してしまい、一部復元できなかった部分がある。口縁端部を小さく摘み上げる点で、高松市上天神遺跡4区SD16d・e溝例よりは若干後出するものとする。胎土中に角閃石粒を多量に含む。

#### SDe25 (第15図・図版21・49)

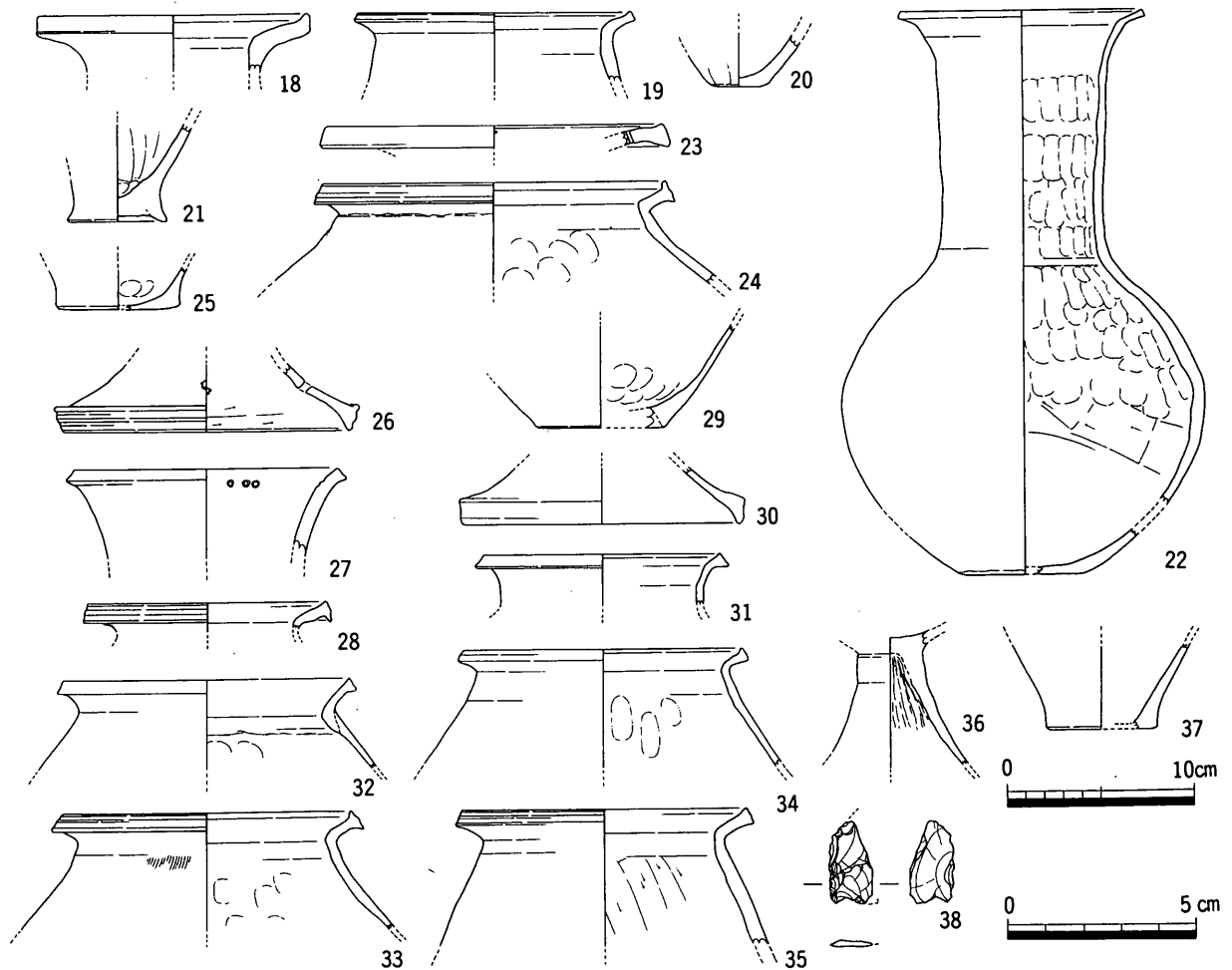
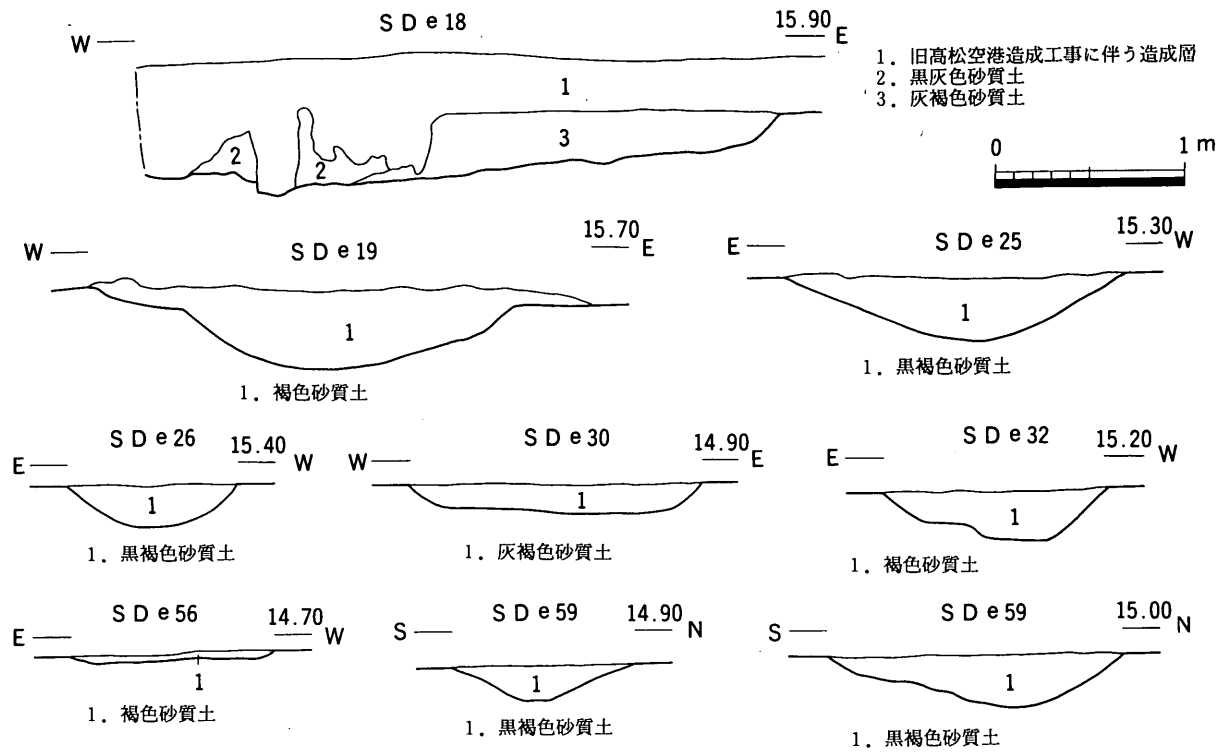
II-13区I60グリットで検出した溝状遺構である。南北両端は調査区外に延長し、2.8mを検出した。流路方向N45°W、幅1.1m、深さ0.3mを測る。断面形は皿状を呈し、底面の標高は14.8m前後である。埋土は黒褐色砂質土の単層であった。

遺物は、弥生土器片が小袋1袋程度出土した。器種は、甕、高坏坏部、脚裾部、大形鉢などがある。23は広口壺口縁部。口縁端部近くに焼成前に小円孔が穿たれ、本来蓋を伴っていた可能性がある。口縁端部の拡張は萎縮しており、後期中葉頃に位置付けられる。24は大形甕。本地域で後期初頭に一般的な形態である。25は甕底部。やや突出した平底で、後期中葉以降には下らない。26は高坏脚部。裾端部は下方に引き出しつつ、上方にも小さく突出する。端面に凹線2条を施し、裾部に小円形の透し孔を穿つ。後期初頭に位置付けられる。24～26は胎土中に角閃石粒を多量に含む。

#### SDe26 (第15図・図版49)

II-13区K60グリットで検出した溝状遺構である。北端部を攪乱溝によって損なわれるが、2.0mを検出した。南北両端は調査区外に延長する。トレンチ部での調査であるため、溝の接続関係は不明である。流路方向N2.5°E、幅0.8～0.9m、深さ0.21mを測る。断面形は皿状を呈し、底面の標高は15.1m前後である。埋土は黒褐色砂質土の単層である。

遺物は、小袋1袋程度の弥生土器片が出土した。いずれも小片であり、器表面の調整は剥離により損なわれているものが多い。器種は、壺、甕がある。そのうち2点を図示した。27は直口壺もしくは小形器台の口縁部片。口縁部内面に円形刺突文を施すが、本例のように口縁部の拡張・加飾が乏しいタイプへの施文はあまり例をみない。後期初頭から中葉までの幅の中で考えておきたい。28は甕口縁部。後期



第15図 II-13区溝状遺構断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/2・1/4)

初頭に位置付けられるが、本例のように端部を下方に強く摘み出す形態は主流とはならない。いずれも胎土中に角閃石粒を多量に含む。

#### SDe30 (第15図)

Ⅱ-13区H61グリットで検出した溝状遺構である。南半部を攪乱溝により大きく損なわれているため、検出長は1.5mにすぎない。流路方向N64°W, 幅0.85m, 深さ0.15mを測る。断面形は皿状を呈し、底面の標高は14.6m前後である。埋土は灰褐色砂質土の単層である。

遺物は、弥生土器小片5点が出土したのみである。

#### SDe32 (第15図)

Ⅱ-13区I61グリットで検出した溝状遺構である。南北両端は調査区外に延長し、2.5mを検出した。流路方向N7.5°E, 幅0.8~1.0m, 深さ0.25mを測る。断面形は概ね逆台形状を呈する。東肩は2段に掘り込まれ、検出面下0.15mで幅0.2m程のテラスが伴う。底面の標高は最深部で14.7m前後となる。埋土は褐色砂質土の単層であった。

遺物は、弥生土器片5点程が出土したのみである。いずれも小片であり、そのうち1点を図示した。29は壺または甕の底部片。突出度の少ない平底で、後期中葉以前には遡らない。

#### SDe56 (第15図)

Ⅱ-13区H63グリットで検出した溝状遺構である。概ね南北に配され、北端部は緩やかに屈曲して、小溝が分岐して途切れる。延長6.1mを検出した。西肩部は攪乱溝により損なわれており、正確な規模は不明である。検出部で、幅1.0m, 深さ0.04mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、底面の標高は14.58mである。埋土は褐色砂質土の単層であった。

遺物は、図示した土器片1点が出土したのみである。30は高坏脚部。端部は下方に引き出すが、肥厚は弱く端面の調整もやや省略されており、後期初頭でも新しい様相を示す。胎土中に角閃石粒を多量に含む。

#### SDe59 (第15図・図版49・75)

Ⅱ-13区J63グリットで検出した溝状遺構である。概ね東西方向に僅かに弧を描くように配される。西端は調査区外に延長し、東端は攪乱溝により損なわれるが、調査区内で途切れるようである。幅1.0~1.3m, 深さ0.2~0.3mを測る。断面形は皿状を呈し、底面の標高は14.5m前後となる。また底面のレベル差から、東に流下する。埋土は黒褐色砂質土の単層である。

遺物は、小袋2袋程度の弥生土器片等が出土した。31は短頸壺とみられる口縁部片。端部の拡張は萎縮し、凹線文等の施文も認められないことから、後期中葉まで下る可能性もある。32~35は甕。口縁端部の拡張が弱い32・34・35は、33より後出する形態であろう。しかしいずれも後期初頭の範疇で理解される。また内面調整で頸部付近にまでケズリ調整が及ぶ35は少数派である。36は高坏脚部。脚柱部はやや細身の形態で、後期後半以降に位置付けられよう。通有のB類高坏とは異なり、また脚柱部内面にケズリ調整をみない点でも、異質な形態である。37は甕底部。やや突出した平底を呈し、上記甕口縁部に近い時期を想定できる。上記した遺物はいずれも胎土中に角閃石粒を多量に含む。38は石鋤とみられるサヌカイト剥片。一側辺の縁辺に調整剥離を認めるが、半折するため全体の形状は不詳である。

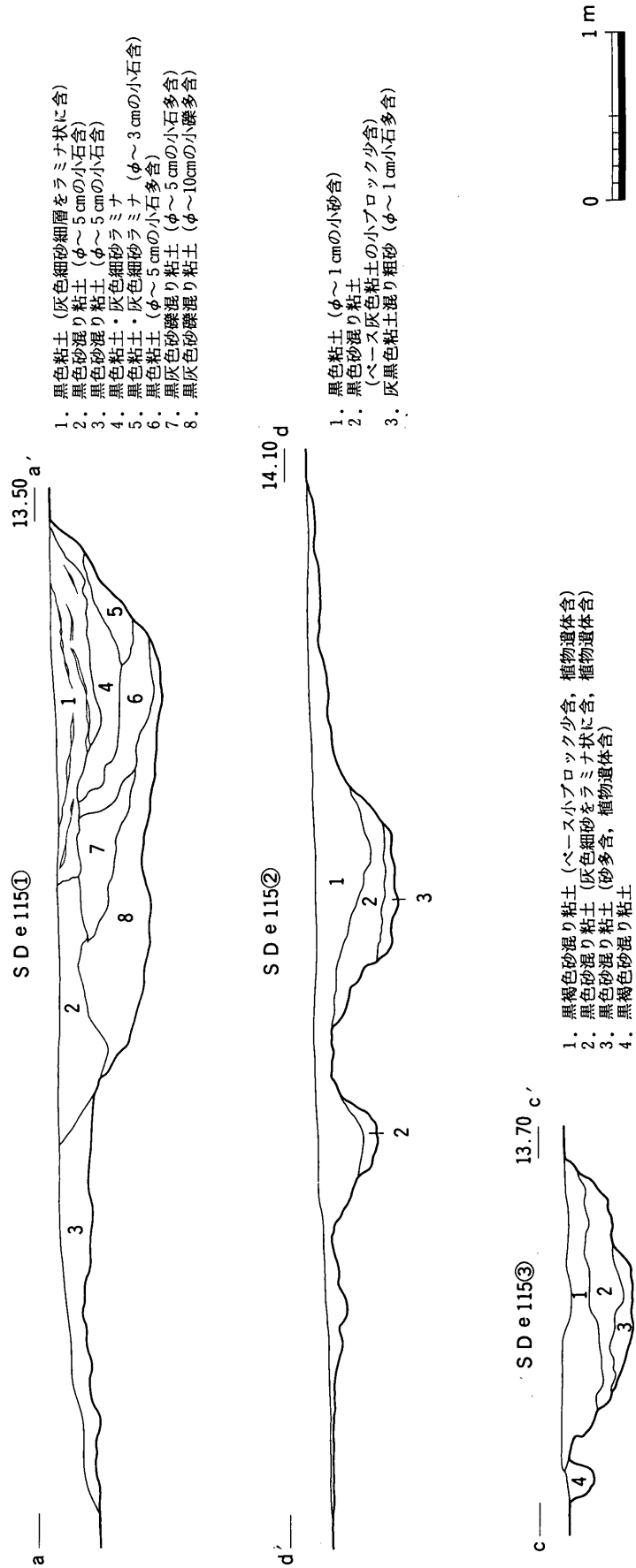
#### SDe115 (第16~27・43図・図版30~32・36・49~54・75~77・79・80)

Ⅲ-41区低地部を南北に縦断し、I66グリットでくの字状に屈曲して北東方向に調査区を横断して流下する溝状遺構である。前述したように前期溝SDe77と一部重複して掘り込まれており、南半部は前期

以来の基幹的水路を踏襲して開削されたと考えられる。また規模・周辺遺構との関係から、自然流路とすることも考えたが、流路方向が概ね直線状に配されること、埋土に改修と考えられる土層の切り合い関係が認められることから、溝として報告する。なお基本的に本溝は、包含層Ⅲ層下面より掘り込まれるが、41区東半部では後述するような所見から、古墳時代前期における改修が想定され、この部分のみ同層上面より掘り込まれる。しかしなぜ改修が41区東半部に限られるのかは、SXe02の攪乱により、確認された範囲が限られるため不明である。

南北溝は緩く屈曲しながら概ね南北方向に延び、幅0.8~1.5m、深さ0.4~0.5mを測る。一方東西溝は流路方向N41°Eで、幅1.7~3.7m、深さ0.4~0.6mをそれぞれ測る。断面形は、南北溝では皿状を、東西溝では逆台形状をそれぞれ呈する。また東西溝のSDe122等の合流部付近では、溝底に径約1.3m、深さ0.2~0.3m程の土坑状の落ち込みが2~3基検出され、灰色細砂と黒色粘土のラミナ層が堆積していた。土坑底面は透水路である砂層に達しており、顕著な湧水が認められた。調査時には水流により単に溝底面が抉られたものと解していたが、後述する43区SDe138南端部で井泉状の掘り込みが検出され、土層の堆積状況や掘削深度も近似することから、規模はややそれとは劣るものの、湧水部に人為的に掘り込まれた井泉状の遺構の可能性も指摘しておきたい。

さてこの合流部以東では後期後半頃以降の遺物が主体的に出土し、それ以



第16図 SDe115断面図 (1/40)

西及び南北溝部分では後期初頭の遺物しか出土せず、明瞭に出土遺物に時期差が認められる。調査時において層位的には両者を区別できなかったが、出土遺物の時期相から推して、後期後半期には南北溝部分はもはや機能しておらず、小溝群より流下してきた水を東西溝西端付近で一端集水し、さらに東へ通水させるため東西溝部分のみ改修が行われたものと考えられる。合流部以東、本溝は徐々にその規模を増しており、結果的に低地部分の排水・燥地化に大きく機能する。

埋土は溝各部によって、多少の相違点がある。まず42区南北溝では3層に細分され、下位2層は粗砂・粘土の順に堆積する。上層の黒色粘土は、南北溝の最終埋没層で、両岸に広くレンズ状に堆積する。下位2層と比較して遺物を多量に包含し、特に北半部に集中する。なお本土層は、南北溝部分以外では認められない。

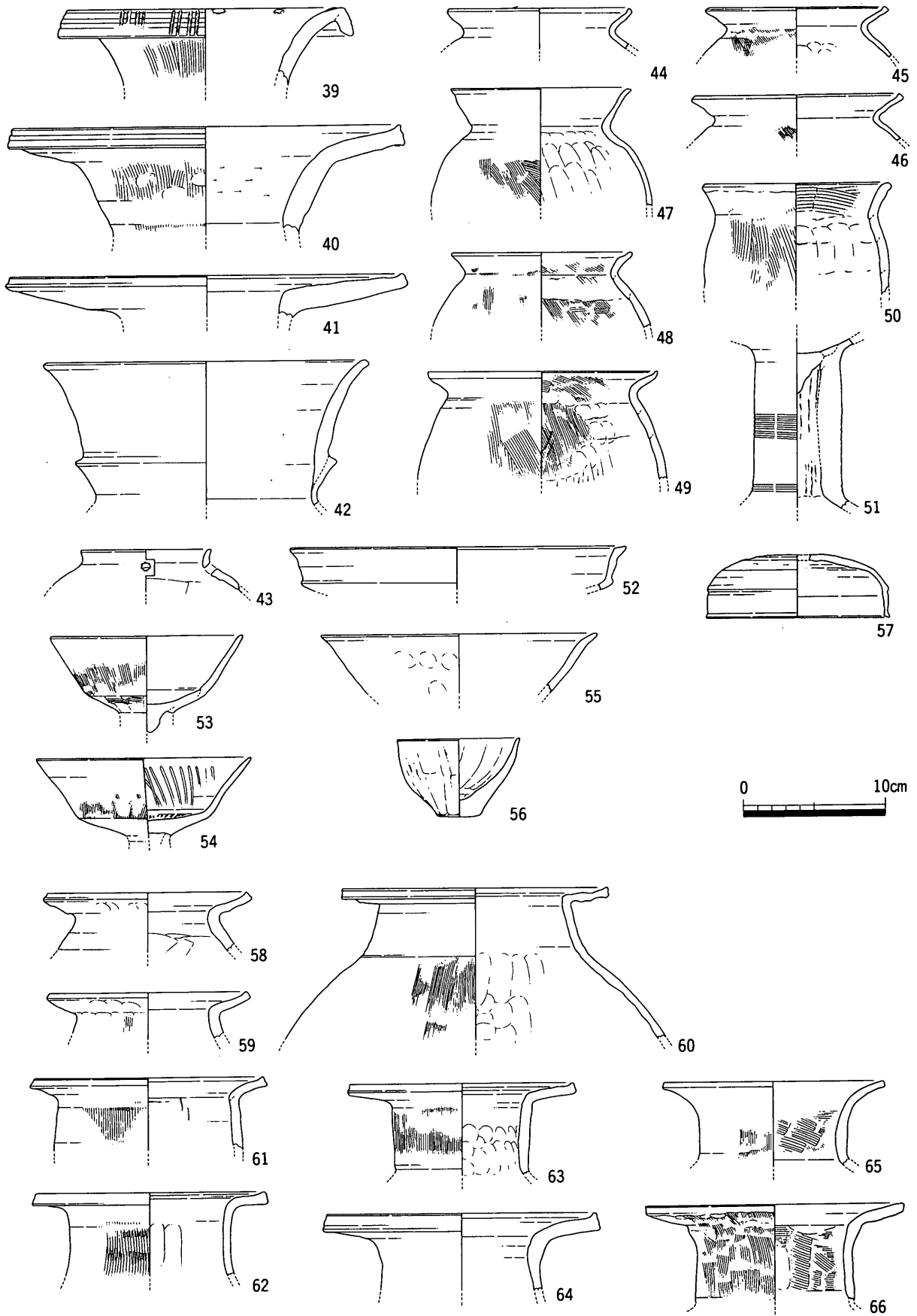
一方42・43区の東西溝部分では、SDe84等が合流してやや複雑な様相を呈する。上記したように、南北溝と東西溝は出土遺物に時期差があり、調査時においてその切り合い関係はつかめなかったが、東西溝が後出することは明瞭である。また土層断面の観察でも、両溝に連続する土層の堆積は認められず、埋土の面からも両溝の相違は追認された。したがって後期初頭に本溝が開削され埋没した後に、東西溝のみが後期後半頃再度掘削（改修）され、遅くとも布留式古相併行期には埋没したと想定される。さて42・43区の東西溝の土層は、SDe84等の合流部以西で3層に（第16図③）、合流部付近で概ね5層に細分され（第43図④）、大きく上下2層に大別される。上層は黒～黒褐色系粘土層で、地山層の小ブロック土を含む。埋土中に粗粒の堆積物を含まず、穏やかな環境下で堆積したものであろう。また後述する小溝群の埋土とも共通し、小溝群と東西溝の埋没がほぼ同時期に進行したものと考えられる。下層は黒色粘土層で、灰色細砂をラミナ状に混え、SDe84の合流部付近では、溝南半部で粒径1cm前後の小礫の集中部がみられた。基本的には流水下の堆積を思わせる。

さらに41区東西溝部分では7層に細分され、上述したように土層の切り合い関係から改修の可能性が想定された。上・中層（第16図1-1・4～6層）は、基本的には大きな差異はなく、改修後の溝の堆積層である。黒色粘土を基調とし、灰色細砂をラミナ状に混えることから、流水下の堆積が想定される。この改修溝は、幅2.15m、深さ0.6mを測る。改修の時期は、後述する出土遺物の内容より、布留式新相併行期の可能性が高い。以後7世紀代に埋没するが、5世紀代以降の遺物量は極めて少なく、また上層のみからしか出土しておらず、比較的短期間のうちに埋没が進行したのであろう。下層（同図-2・3・7・8層）は、改修前の溝の堆積層で、溝底面の地山砂礫層を巻き込みながら堆積し、長径10cm以下の小礫を多数包含する。7・8層は、42・43区東西溝部分の埋土より粗粒の堆積物を含むが、これは42・43区周辺でシルトないしは粘土層であった溝底の地山層が、41区東半で砂礫層に変化しているためと考えられ、基本的には42・43区東西溝の下層と共通する層序と考える。なお2・3層と7・8層は、改修前の溝の上・下層として分離可能だが、改修後の上層である1層と、改修前の溝の上層である2・3層を調査時には分離できず一部一括して遺物を取り上げてしまった。従って下記遺物の説明では、上層としている遺物の中に少量2・3層の遺物が混在し、また下層遺物は7・8層の出土遺物に限って図示することにした。

遺物は、主に溝北半部上・中位層より出土している。上述したように本溝は後期初頭の開削後部分的な改修を繰り返しながら、古墳時代後期までの長期間機能しており、出土した遺物を一括して報告するのは理解の妨げになるものと考え、以下各地区毎に区切って報告する。

39～148・257～260・264・266・267は41区出土遺物。その内39～57・257・258・264が上層より出土

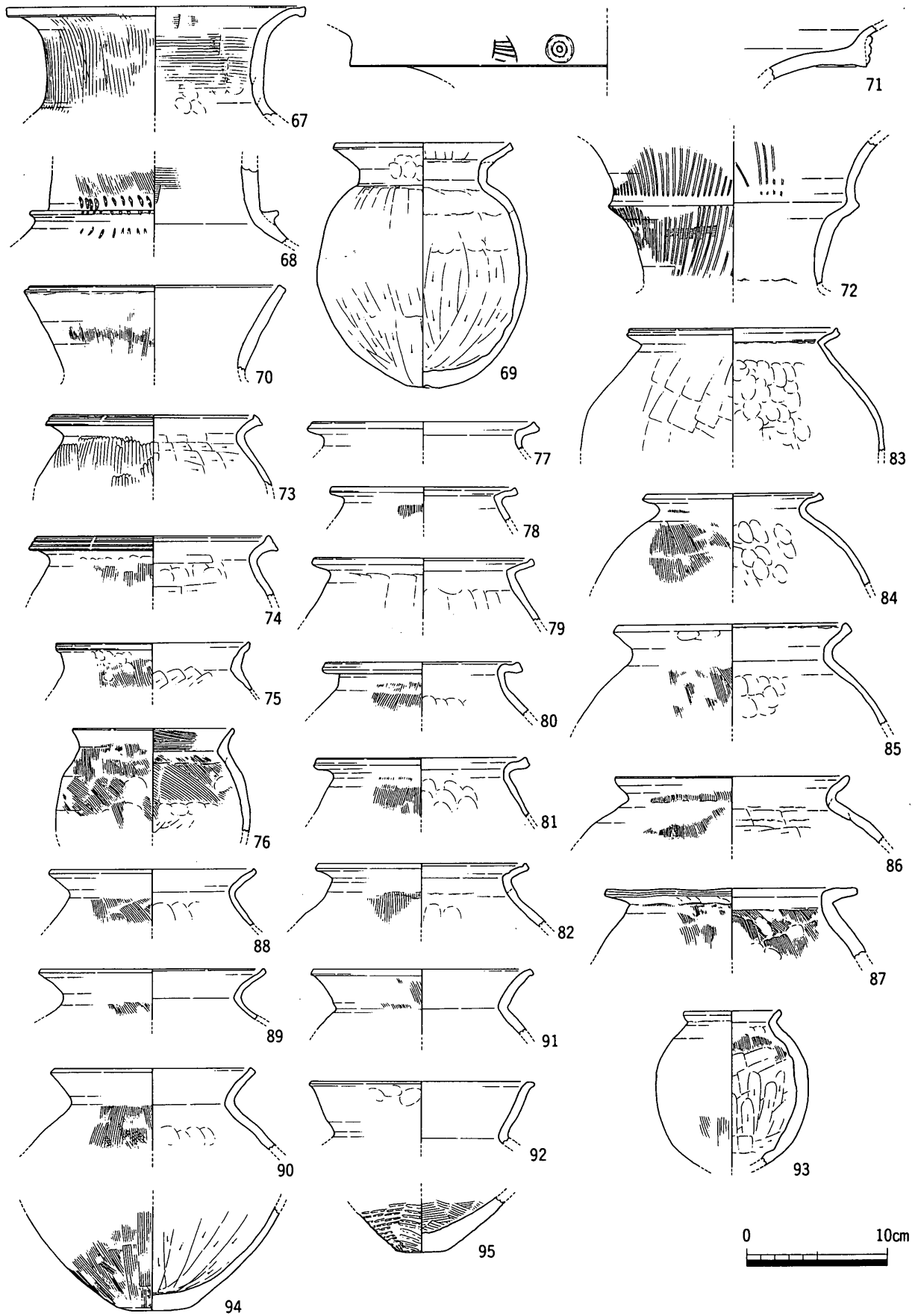




第17图 Ⅲ-41区 SDe115出土遗物实测图1 (1/4)

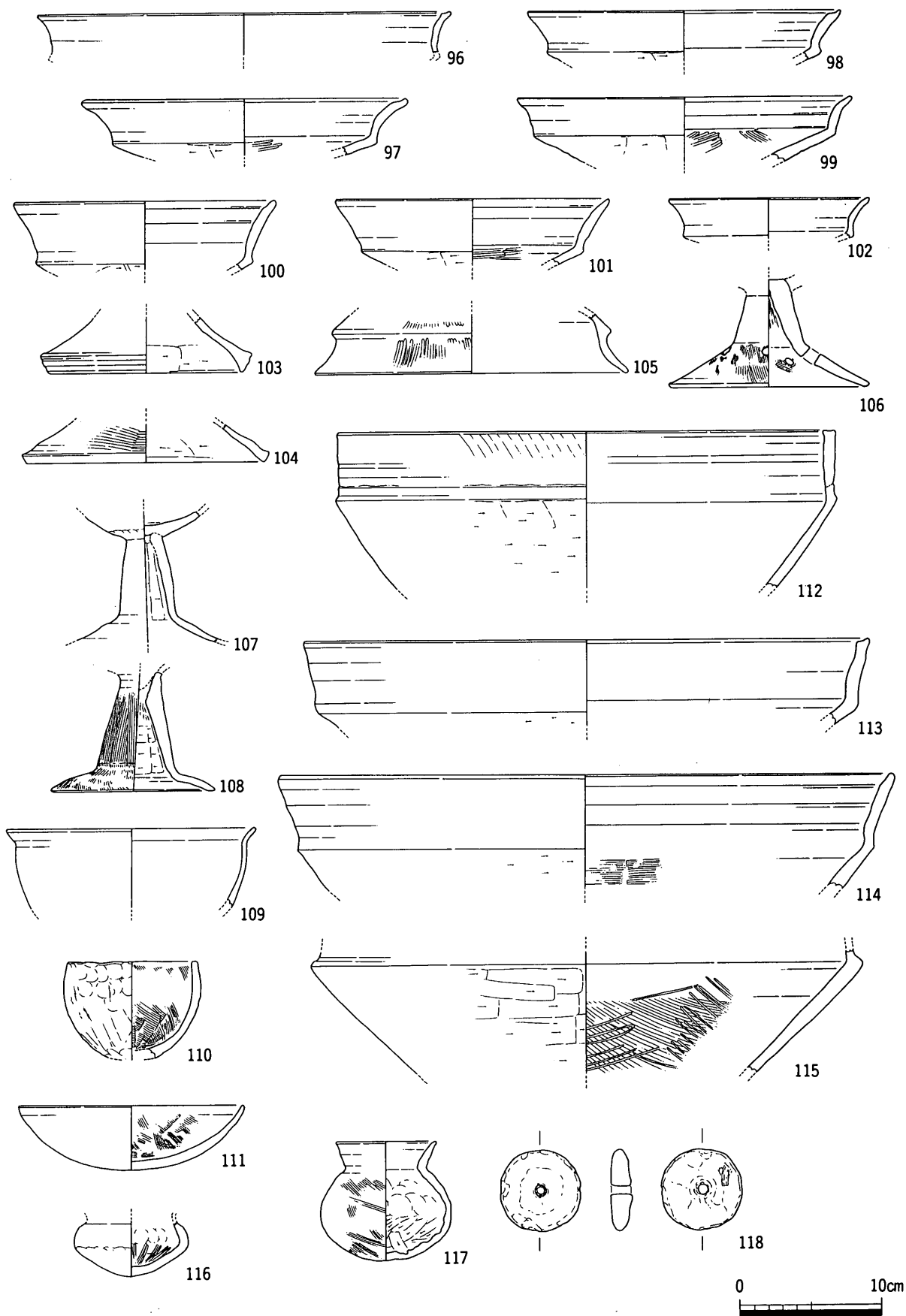
した。39は垂下口縁形態の広口壺。この形態の壺では、本例のような端面への凹線文の施文例は少なく、円形浮文や刺突文が主体となるようである。また本遺跡においては垂下口縁形態の広口壺は極めて少ない。胎土中に角閃石粒を多量に含み、後期初頭頃と考える。40は広口壺。口縁端部は上下に小さく摘み出し、後期末まで下る。角閃石粒を多量に含む。41は下川津B類の広口壺口縁部。おそらく鶴尾タイプの広口壺となろう。42は二重口縁壺。口縁下半部は萎縮し頸部と区別が付け難く、相対的に上半部が大きく発達する。また下半部と上半部は一体化しつつあり、屈曲部はなお上半部を付加する成形法を採るが、内面には明瞭なくびれは認められず、外面の屈曲部も突帯へと変化しつつある前段の様相を呈している。時期的には布留新相にまで下る可能性が高い。43は無頸壺。肩部に円孔が穿たれ、2孔一対の紐通し孔となろう。角閃石粒を多量に含み、後期初頭頃に位置付けられる。44～49は甕。44～46は口縁端部を上内方に小さく摘み上げ、頸部内面はヨコナデにより丸く仕上げる。坂出市川津二代取遺跡 SD04・満濃町買田岡下遺跡 SD37等に類例があり、布留古相に下る。47は内湾する口縁部の端部近くを外方へ摘み出すタイプで、体部の球形化が著しい。布留新相に位置付けられよう。48・49は「く」字に外反する口縁形態の甕で、端部の摘み上げは直立傾向にあり、B類甕の端部形態とは異なる。内面はハケ調整を主体とし、ケズリは体部中位までしか達しない。後期後半～末頃を中心とする。なお49の胎土には角閃石粒が多量に含まれる。50は小形の球形甕。7世紀代に位置付けられ、本溝埋没の下限を示す。51～54は高坏。51は円柱状の高坏脚柱部。外面に沈線を施す。本遺跡では1例のみの出土であり、胎土の点から見ても搬入品の可能性が高い。52は拡張口縁形態高坏。口縁端部の摘み出しが矮小化し、外方へ小さく摘み出すのみ。後期初頭でも新しい傾向を示す。角閃石粒を多量に含む。53・54は深い坏部を有する形態で、外面はハケ調整、内面はミガキ調整が顕著に認められる。川津二代取遺跡・買田岡下遺跡例など布留古相に多見される。坏部上半部の外傾度の強い54は、53よりもやや新しい傾向とみられる。55・56は鉢。55は口縁端部を小さく外反させる形態で、高坏坏部としても違和感はない。56は小形の鉢で、小さいながらもやや突出した平底を有する。遅くとも後期後半の範疇に納まるものとする。57は須恵器の坏蓋。天井部の3/4にケズリ調整が施され、口縁部と天井部の境の稜は鋭く、端面には鈍い凹線状の段を有する。TK208式併行期に比定できる。なお本例とセットになると考えられる坏身(865)が、中世の落ち込み SXe01より出土している。257はサヌカイト製の打製石庖丁である。片面に自然面を残す横長の剥片を利用する。背部と挟り部に潰し加工がみられ、刃部は両面より浅い調整剥離を行う。258はサヌカイト製の石鋏。刃部を大きく欠損する。僅かに遺存する刃部には使用痕は認められない。264は砂岩製の石皿。おそらく全形の1/4程度が遺存するのみだが、片面に顕著な敲打痕を認める。その他図示していないが、本層中より桃核数点が出土している。

58～118・266・267は中層出土の遺物。58～60は下川津B類広口壺。口縁部が矮小化して内湾気味に開き、頸部も短い58・59は、布留式併行期にまで下る可能性がある。また60の矮小化した口縁部もやや新しい傾向であろう。61～67は直立気味の頸部から強く折り返して開く口縁部を有する広口壺。端部は小さく摘み上げる61～64と、四角く納める65～67の2者がある。前者は多量の角閃石粒を含み、B類土器の範疇に含まれる。後期末～布留式古相までは残存する。口縁部が萎縮した61・62や、頸部と口縁部の屈曲部が不明瞭な67などはやや新しく位置付けられるであろう。68も広口壺の頸部片。頸基部を突帯と刺突文で飾る。69はほぼ完形品で出土した小形の広口壺。肩部の張りは弱く、最大径は体部中位付近にあり、底部丸底で球形化が進展している。布留式古相併行まで下る可能性がある。70は直線状に開く口縁部を有する広口壺。川津二代取遺跡や買田岡下遺跡 SD48など布留式古相前後に盛行し、同新相ま



第18图 Ⅲ-41区 SDe115出土遺物実測図2 (1/4)

では残存しえない形態と考える。71は大形の二重口縁壺。口縁部外面を円形浮文と稚拙な鋸歯文で飾る。72も二重口縁壺。外・内面を縦方向の放射状のミガキ調整で飾る。口縁上半部の開きが弱く間延びした点は42と共通するが、42よりは明らかに先行する形態である。また頸部が太く、屈曲部があまり張り出さない点で買田岡下遺跡例に近い。73～92は甕。73・74は後期初頭に通有の甕。しかし73の外面ミガキ調整が頸部付近にまで達し、内面は同様に横ケズリを施す点は、余り例をみない。75の口縁端部を上方に摘み上げる形態の甕も例に乏しいが、口縁部は短く、端部の肥厚傾向も認められるので後期初頭の範疇で理解される。なおいずれも角閃石粒を多量に含む。76の「く」字に外反する口縁形態は、後期中葉以降に下がるが、胎土中に一定量の角閃石粒を含む点で注意される。77～83は下川津B類甕。頸部内面に鋭い稜を有する78・83などは後期末まで下る可能性がある。84は下川津B類甕の系譜上に成立し、他系統の土器の影響が想定される形態。布留式最古相期に位置付けられ、高松市六条・上所遺跡SK01に類似形態をみる。胎土はB類甕のそれとは明らかに異なる。85は下川津B類甕の影響を受けた在地甕かあるいはB類甕の模倣形態。器壁はやや厚く、端部の摘み上げも稚拙で鈍い。86・87はいずれも角閃石粒を一定量含みながらも、金雲母粒がやや目立つ胎土を有する。ややだれた口縁部形態から新しい様相と考えられるが、位置付けは難しい。76と共に、B類甕以外の角閃石粒を一定量含む甕として注意しておきたい。88～90は「く」字に外反した口縁端部を上方へ小さく摘み上げる。85とは異なり、口縁部が外反してやや長く延びる点でB類甕とは異質であり、庄内甕の影響を想定したい。92はやや内湾気味に開く口縁部を有し、端部は外方へ摘み出す。布留新相にまで下る形態である。93は小形の甕。砲弾型の体部から小さく折り返した口縁部を持つ。94は下川津B類土器。形状から壺の底部となろう。96～102は高坏。96は拡張口縁形態高坏。口縁端部は内方へ小さく突出するのみで、後期初頭でも新しい様相を示す。角閃石粒を多量に含む。97～102は下川津B類高坏。坏部上半部が発達し、口径の割にやや深めの形態となる100・101はやや新しい傾向を示す。103は後期初頭の一般的な高坏脚部形態。角閃石粒は含まれるが、B類土器と比してやや少ない。104は小形器台の脚部。通例裾部外面には数条の鈍い凹線文を見ることが多いが、本例では粗い横ハケ調整で終わっている。角閃石粒を多量に含み、後期初頭に位置付けられる。105は装飾高坏の脚部。胎土は精良で、外面に丁寧なミガキ調整を加える。脚裾部は外反するが、まだ大きく発達していない点で後期初頭頃に位置付けられる。106も高坏脚部。大きく開く脚裾部と脚柱部内面にケズリ調整を見ない点で、後期末頃までに位置付けられよう。形態上B類高坏とは異なるが、胎土中に角閃石細粒をやや多く含む点で、B類土器製作集団との関連を考慮する必要がある。107・108はそれより明らかに後出する形態。布留新相まで下る可能性がある。109～115は鉢。109は口縁部を短く外反させる形態。底部形状が明らかでないため、後期後半以降に位置付けておきたい。110は丸底化した半球形鉢。底部外面は指先により粘土を掻き取り、正置させようとした意図が窺える。布留式古相前後に位置付けられる。胎土中には角閃石・金雲母が含有され、金雲母が卓越する点で通有のB類土器とは異質である。111は浅鉢。形態的には後期末前後に出現し、以後高松市中間西井坪遺跡SX01段階までは残存する。112～115は下川津B類大形鉢。口縁部は直立気味に立ち上がり端部を四角く納める112・113と、やや外反して丸く納める114の2者がある。前者は後期中葉前後に位置付けられよう。後出する114も後期末以降には下らない。116・117は小形丸底土器。116は後期後半に出現する在地系の小形丸底土器で、底部内面に放射状のミガキ調整を認める。体部の張りが強く、扁平化しており後期末に下るであろう。117はそれとは別系統の丸底土器。やや下膨れの体部より外反する口縁部を付す。口径が体部最大径を凌ぐことはなく、布留新相までは下らない。118は調査区東端部より出土した

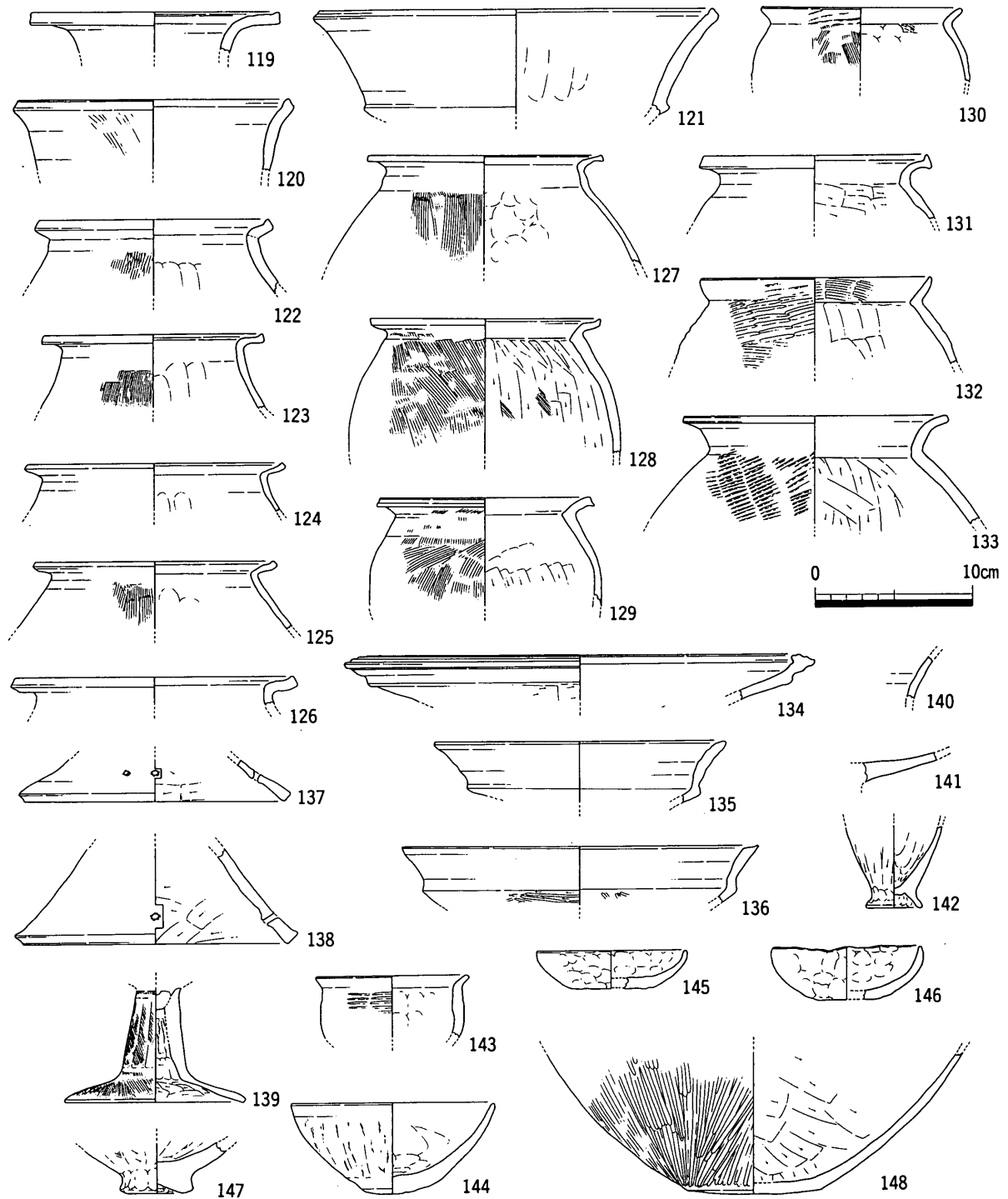


第19图 Ⅲ-41区 SDe115出土遺物実測図3 (1/4)

土製紡錘車。266・267は木製品である。266は幅3.2cm、厚さ0.9cmの板材。上下両端を欠損する小片である。側面は丁寧な加工を施し、平滑に仕上げられており、加工時の余り材とは思えない。267も幅5.2cm、厚さ0.8cmの板材。一側辺に矩形の袢りが切り込まれ、また片面上位には擦痕が認められる。小形の建築部材であろうか。なお本溝出土の3点の板材は、すべてヒノキが用いられていた。

119～148・259・260は下層出土の遺物である。119はやや小形の広口壺。口縁端部を小さく摘み上げる。胎土は金雲母細粒が目立ち、B類土器の中でもやや異質である。120も直口形態の広口壺。70と異なり端部を鈍く摘み上げる形態は、買田岡下遺跡例に近い。121は大形の二重口縁壺。頸部径が太くならず締まり、口縁上半部の外反度が強く発達しない点で、42よりは先行する形態と考える。122～133は甕。122～127は下川津B類甕。口縁部が小形化し薄く作られる124・125は後期末に近い時期と考えるが、同様な口縁部でも明瞭な頸部を有する127はやや古い様相と考えられる。128は後期後半以降に出現する「く」字口縁の甕。外反して開く端部を小さく摘み上げる点は、B類甕のそれに共通する要素であるが、肩の張らない体部形態や屈曲部付近にまで及ぶ内面ケズリ調整は、B類甕には基本的にみない手法である。しかしながら胎土中には角閃石粒を一定量含み、B類甕と親縁性を有する。129・131は後期初頭の甕。129のように明瞭な頸部を認めず、端部を下方にのみ摘み出す形態は本地域の系統にはなく、吉備南部地域の特徴とされる。また131のような頸部内面に達するケズリ調整も、本地域では一般的ではない。いずれも胎土中に角閃石粒を多量に含む。130・132は口縁部外面にタタキメ調整が残存し、口縁部一体成形の甕である。130は胎土中に多量の角閃石粒を含む。134～141は高坏。134は拡張口縁形態の高坏。強く外傾して開く口縁部は、後期初頭でも新しい様相である。胎土中の角閃石粒の含有量は乏しく、代わって石英中粒が目立つやや粗い胎土は異質な感を与える。135・136は下川津B類高坏。136のように口縁端部を外方に摘み出す形態は、拡張口縁形態高坏の系譜を継ぐより古い様相である。137・138は同高坏の脚部。脚裾部の2孔1対の小円形透し孔は、後期初頭以来の本地域の伝統的手法とされる。139も高坏脚部。裾部内面にケズリ調整を施す点は、あまり例をみない。脚柱部へのケズリ調整が徹底されずナデ調整が卓越する点は、布留式併行期でも古い傾向であろう。140・141は下川津B類高坏の坏部小片と考える。140は坏上半部の小片で、緩く外反して開く。141は坏下半部の小片。内面に特徴的な分割ミガキ調整を施す。いずれも内面に赤色顔料の付着がみられる。142は製塩土器脚部。胎土中に角閃石粒を多量に含み、B類土器の胎土と共通する。143～146は鉢。143は小さな外反口縁を有する鉢で、体部外面にタタキメを残す。また144では内底面に指頭圧痕が顕著に認められ、底部は丸底化する。いずれも後期末前後に位置付けられよう。145・146は小皿形態の鉢。内外面指頭圧痕が顕著であり、手ずくねで成形される。布留式古相前後に出現し、短期間で消滅する形態と考える。胎土中に角閃石粒を多量に含む。148はB類土器壺の底部。259はサヌカイト製の打製石庖丁。後期に特徴的とされる小形の形態。刃部には明瞭な使用痕は認められない。260は凹基式石鏃。先端部の調整があまく、未製品と考えられる。なお図示していないが、本層中からも桃核数点が出土している。

149～185・262・263・265・268は南北溝出土遺物。この部分からはコンテナ4箱程度しか遺物は出土しておらず、大半は上層出土の遺物である。図化したもののうち149～183・262・263・265・268が上層出土で、184・185の2点が下層出土の遺物である。また北半I66グリット周辺では、溝底よりやや浮いた上層中より一括投棄された状況で、土器の集中箇所があり、コンテナ1箱程度の遺物が出土している。149・151・157・160・161・166・167・171・175・176・180・182が、集中箇所より出土した遺物である。また、やや南に離れて柄状の木製品や加工痕を認めない自然木数点も出土している。なお自然木は、肉

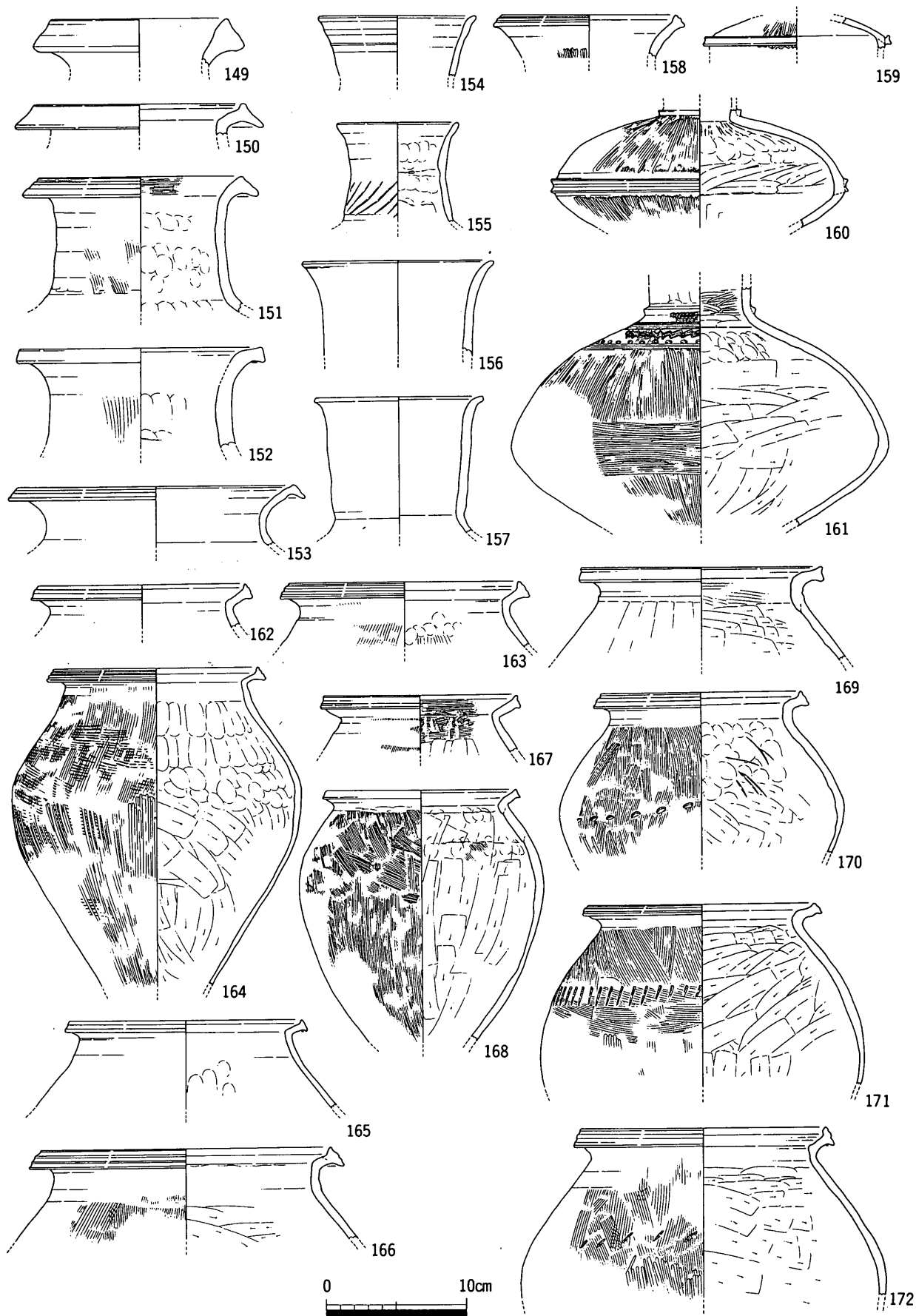


第20図 Ⅲ-41区 SDe115出土遺物実測図4 (1/4)

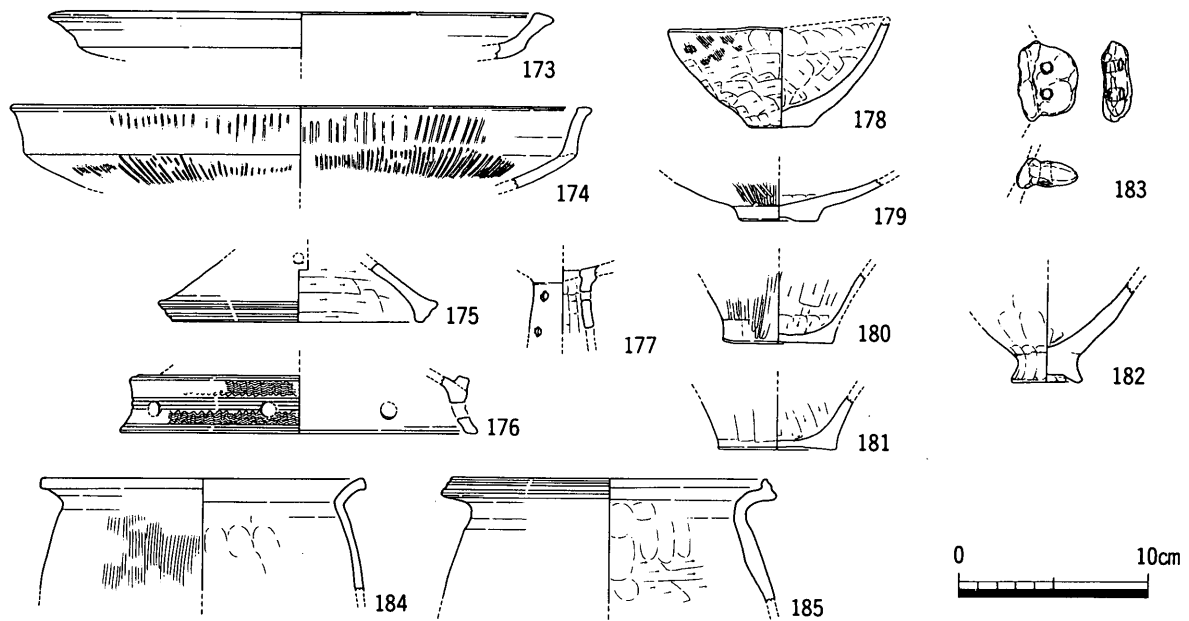
眼による観察ではすべて同一樹種とみられ、分析の結果クヌギであった。149は広口壺口縁部としたが、別の器形になる可能性も残る。形態的にあまり例をみない。端部外面に鈍い凹線を施すことから、後期初頭の範疇で理解される。150も広口壺。後期初頭のこの形態の壺は、151のように通常口頸部は緩やかに屈曲し、端部外面に凹線文の施文が一般的であり、それから判断すればやや後出する可能性もある。また151も頸部外面への凹線文の施文はなく、やや異質である。152は明らかに後出する形態の広口壺。口縁部は萎縮し、端部の拡張は弱いことから、後期中葉頃に位置付けられよう。169は短いながらも直立する明瞭な頸部を有し、器壁がやや厚いことから広口壺とした。口縁部形態は、152に近似する。153

は短頸壺。口頸部が強く外反し、端部は下方にのみ引き出す本形態は、西部瀬戸内に多いとされる。154・155は直口壺。154のように口縁部外面に凹線文を巡らせるものが一般的である。155は頸部外面に斜線文を施すが、口縁部への凹線文はみられず、また胎土中に角閃石粒を含まず、金雲母粒を一定程度含有する。高松平野周縁部からの搬入品であろうか。いずれも後期初頭頃に位置付けられる。156・157は凹線文を認めない直口壺。端部付近で小さく外反することを特徴とする。157のような中位が膨らんだやや長い頸部のものは、本地域ではあまり例を見ない。後期初頭に位置付けられよう。158は外反する口縁部形態の短頸壺。端部は上下に小さく摘み出して拡張し、端面に細かい凹線文を施す。159～161は細頸壺。159・160は体最大径部に突帯を貼付する。161は突帯は見られず、代わりに丁寧な横ミガキ調整を加える。当該期の直口壺にやや見られる調整法である。いずれも胎土は角閃石粒を多量に含む精選された胎土で、外面へのミガキ調整も緻密な精製品である。159は突帯下位に櫛描波状文、161は肩部に櫛描並行沈線と波状文、円形刺突文で飾る。甕では162～166・170が本地方で後期初頭の主体となる形態である。口縁部は強く折り返して短く開き、端部は上下に摘み出して端面に鈍い凹線文を施す。165のように端部の拡張が弱いものは、やや時期的に新しく位置付けられよう。体部外面はハケ調整を施すが、164のようにタタキメの痕跡の残るものもある。内面は縦・斜めのケズリ調整を施し、肩部付近は指押さえやナデ調整を加える。166のように肩部付近にまでケズリ調整が及ぶものはやや異質である。また170は体部中位に刺突文列を加える。167の甕は口縁端部を薄く上方に摘み上げるが、受口状を呈するまでは至らない。肩部内面は横ハケの後板ナデ調整を施す。本形態の甕では、内面ケズリ調整が卓越するが、その点ではやや違和感がある。他地域に系譜を有する形態で、後期初頭に位置付けられる。168はやや後出する形態の甕である。後述する178・184と共に南北溝北端屈曲部付近より出土しており、他の南北溝出土遺物の一群とは異なる層位から出土した可能性も残る。口縁端部は上下に小さく肥厚し、やや肩の張るプロポーションを呈する。後期中頃に位置付けられようか。166・171・172は大形甕。166のような明瞭な頸部を有するものは一般的ではない。体部の張りは強く、肩部にハケ原体の刺突文列をみるが類例は多くはない。口縁端部の拡張が弱い171は、やや新しい様相を呈する。173は拡張口縁形態の高坏。外傾度は強く、端部は外方に引き出すのみで、内方への突出は弱い。174は直立口縁形態の高坏。内外面に放射状のミガキ調整を施す。口縁部が僅かに外反し、端部を外方に小さく摘み出す形態は、後期初頭でもやや新しい傾向である。175は高坏脚部。最も一般的な形態で、裾部に小円孔を穿つ。176は装飾高坏の脚部。外反して開く裾部に7方向の小円孔を穿ち、外面は2条の沈線と櫛描波状文で飾る。裾部があまり発達せず、また外反度も弱いことから、後期初頭に位置付けられよう。177は高坏脚柱部。3方向2段に小円孔が穿たれる。細身の形態で、内面に横ケズリが施されることからすれば、後期末以降に下る可能性が高い。調査区南端付近より出土しており、混入の可能性が高い。178はやや突出した平底形態の小形鉢である。内面下半部の入念なケズリ調整は例に乏しい。外面下半部にケズリ調整が施され、後期後半に下る。179は明瞭に円盤状に突出する形態の底部。底部底面の中央部はやや窪み、体部は大きく張ることから、細頸壺の底部の可能性が高い。体部外面には入念なミガキ調整が認められる。180・181は甕の底部であろう。182は小形鉢の底部であろうか。高く突出した底部形状から、むしろ脚台としたほうが妥当かも知れない。183は長側辺に外傾する剥離痕が認められ、鉢状の器形に付された把手と考える。2孔の小円孔が焼成前に穿たれており、本来的には対面に付した両耳形態の把手で、紐を通して吊り下げる機能を付していたことが想像される。184は「く」字に外反する口縁部形態の甕。後期中葉以降に下る可能性がある。185は口縁部が萎縮し、端部は上方にのみ摘み上げる形態の甕で、





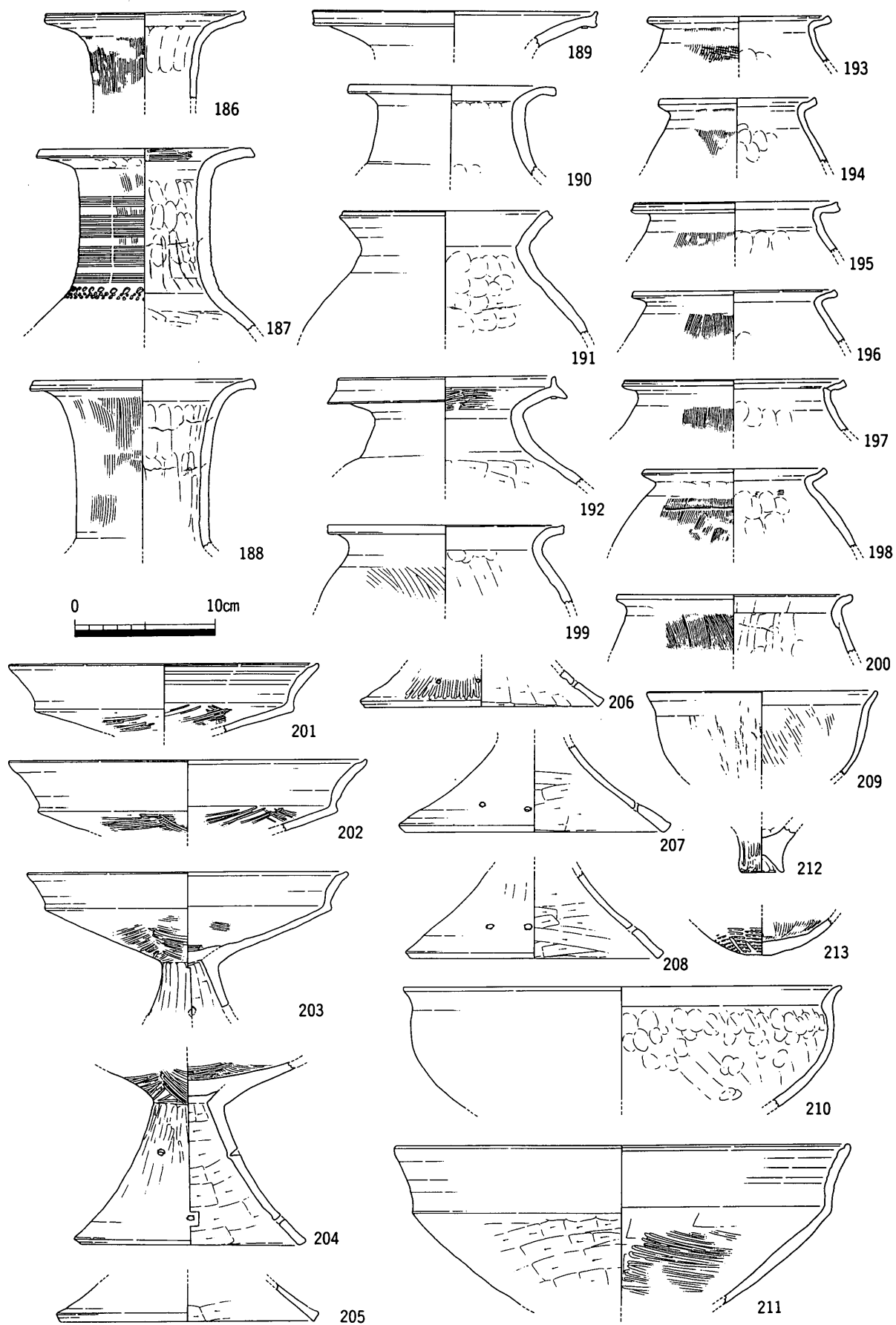
第21图 III-42区 SDe115出土遗物实测图1 (1/4)



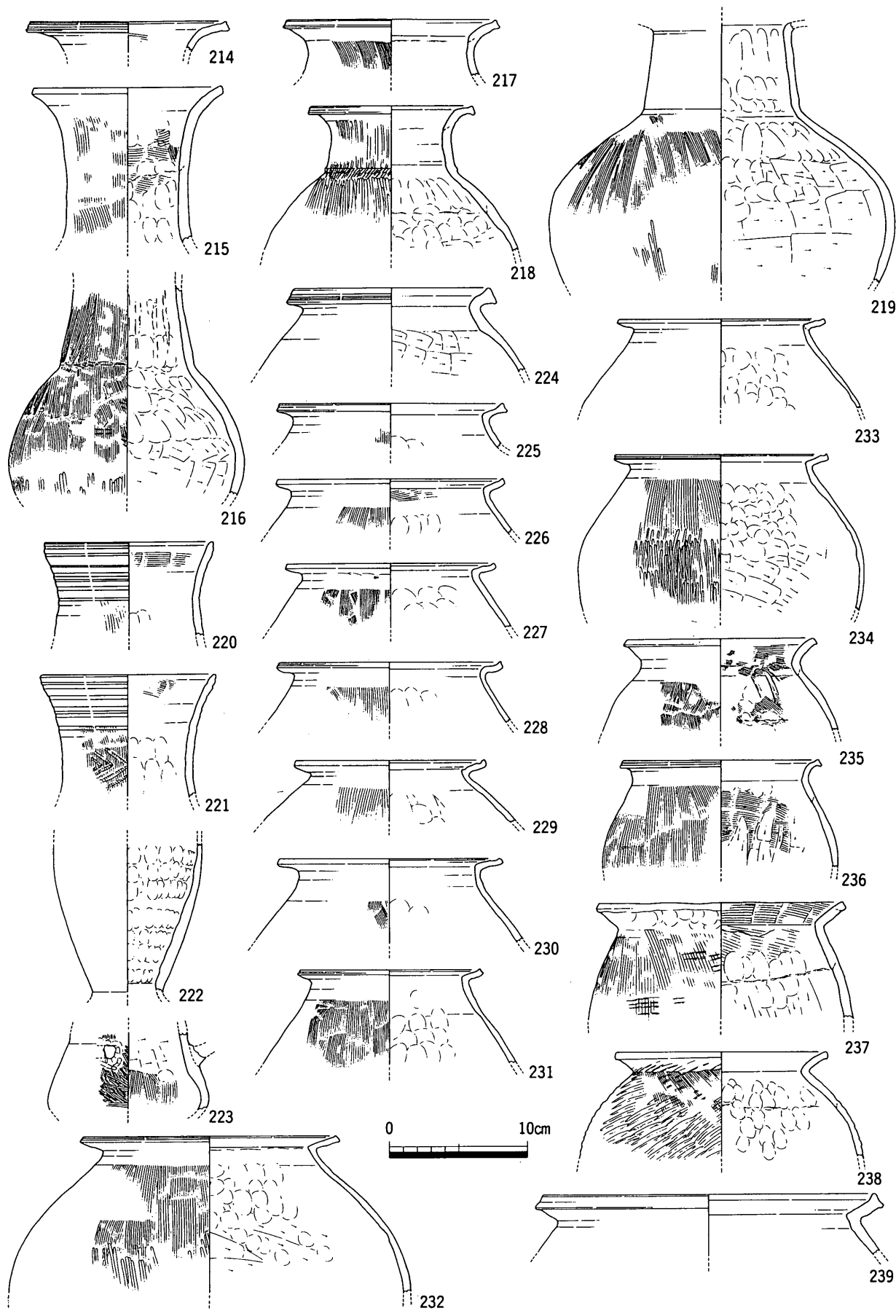
第22図 III-42区 SDe115出土遺物実測図2 (1/4)

体部の張りは弱い。後期初頭でも新しい傾向を有し、胎土からすれば搬入品であろう。以上のうち151・152・154・156~167・169~176・179~181の胎土中には、角閃石粒が多量に含まれる。262はスクレイパー。刃部の調整は粗雑で、一部に自然面を残す。破損面にも細かな調整をみる。263はサヌカイト製の打製石庖丁。かなり使い込まれており、刃部は内湾する。265は幅8cm、厚さ1.7cm程のヒノキの板材で、下端部を片面より削って尖らせている。左面はやや丁寧仕上げられるが、右面は割り取ったままで二次的な加工は認められず木目の凹凸が著しい。何らかの未製品もしくは矢板状の用途が想定される。268は長さ39.1cmの柄状の木製品である。材はコウヤマキを使用する。下半部は五角形状に面取り加工され、先端部は鈍く尖らせるが、使用によりかなり潰れており、ソケット状の付属具が取り付けられていたか、直接刺突具として使用された可能性が高い。握部は径3cm程に丸く削られ、上端は五角形状に面取りされる。

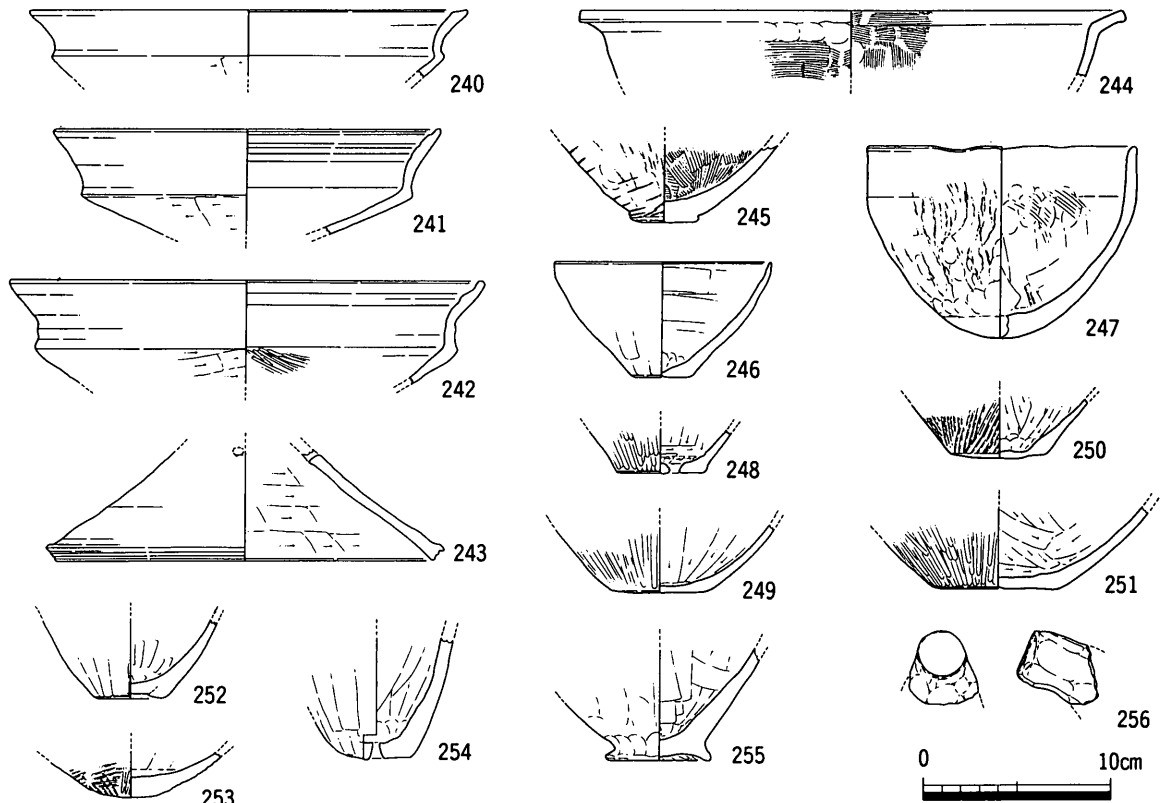
186~256・261は、III-42・43区の東西溝部分の出土遺物。このうち186~213が上層、214~256・261が下層よりそれぞれ出土した。186~188は本地域で後期中葉に盛行する直口壺に系譜を有する広口壺。186・188は下川津B類土器。186の口縁部は緩やかに屈曲し、端部は小さく摘み上げつつ、内面に凹線状の段を認める。187の長く延びた頸部外面への沈線文と頸基部へ刺突文や竹管文を施文する加飾性に富んだ形態は、やや古い様相を引き継ぐ。189は緩く外反して開く形態の広口壺。長尾町丸井古墳出土土器を典型例とする。口縁端部は上下に摘み出して拡張し、布留式古段階に下る。190・191はいわゆる鶴尾タイプの広口壺。しかしいずれも下川津B類土器ではない。内傾する頸部より口縁部は緩く屈曲して開くが、端部や屈曲部にシャープさを欠く。B類広口壺の模倣形態であろう。191は体部と頸部の境が不明瞭で、鈍い段によって頸部がそれと判断されるのみ。もはや体部と一体化しつつあり、口縁部も萎縮して斜め上方に小さく開く。190よりは後出する形態であろう。192も同形態の広口壺で、口縁端部は上下に大きく拡張される。193~197は下川津B類甕。195は後期後半でもやや古い様相を有し、196・197はやや新しく位置付けられよう。198はB類系統甕。口縁部は萎縮し短く、体部の球形化は進展している。布留古相頃に位置付けられる。肩部外面にヘラ描沈線をみる。胎土はB類甕と同じく、角閃石粒を多量に含む。199・200の「く」字外反口縁形態の甕は、B類甕とは異なる在地系譜の甕であるが、体部内外面の調整や口縁端部の上部拡張傾向に、B類甕との共通性をみる。201~204は下川津B類高坏。



第23图 Ⅲ-42·43区 SDe115出土遗物实测图1 (1/4)

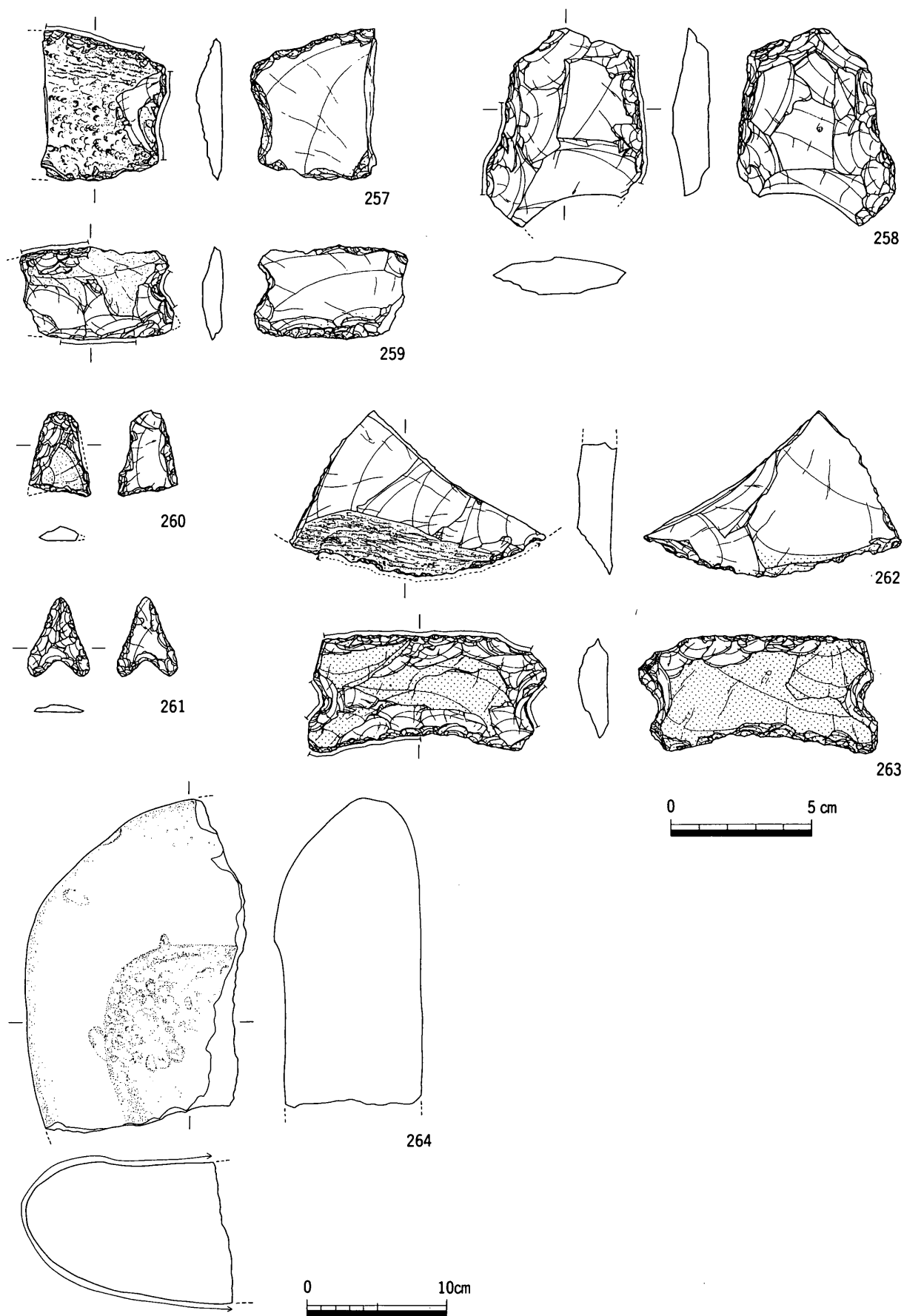


第24图 III-42·43区 SDe115出土遗物实测图2 (1/4)



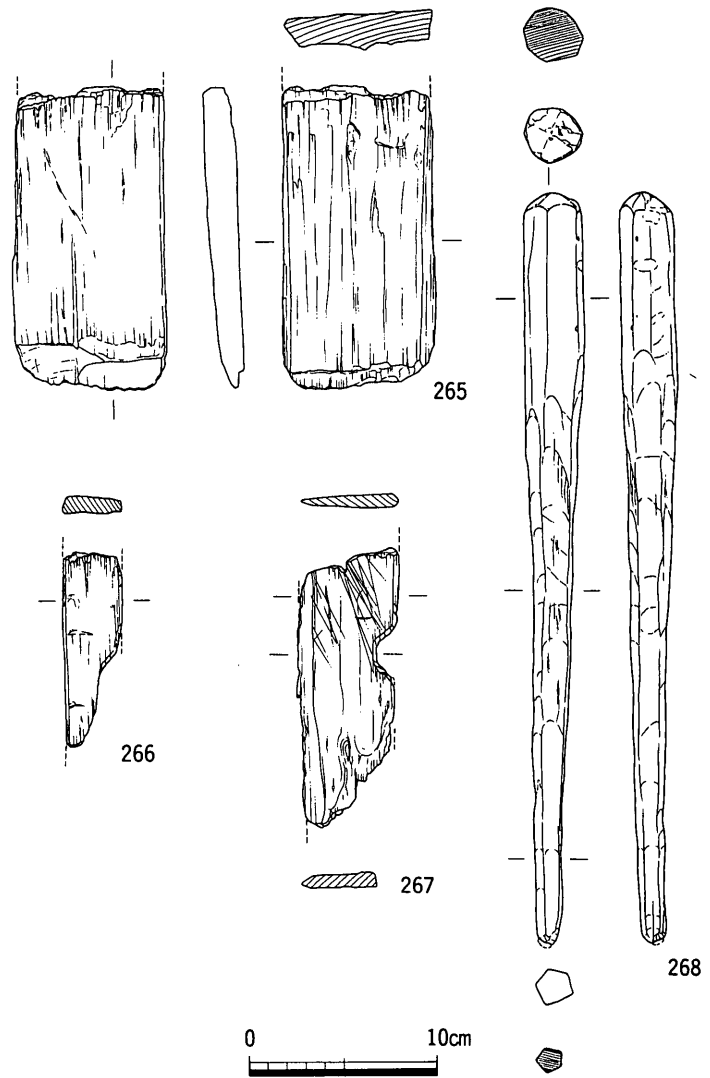
第25図 Ⅲ-42・43区 SDe115出土遺物実測図3 (1/4)

205～208は同脚部。坏部は上半部が大きく外反して開き、内外面ヨコナデ調整される。坏下半部は、特徴的な分割ミガキが多用され、スカート状に開く脚部は外面縦ミガキ・ヘラナデの後ヨコナデ、内面は横ケズリを施すのが一般的である。また脚裾部へは後期初頭以来、2孔1対の小円孔を穿孔することを原則とする。裾部外面にミガキ調整が明瞭に残存する206はやや異質であろう。脚部形態は緩やかに外反して開く204と、外反しつつも裾部付近でやや内湾気味に屈曲する207・208の2形態がみられる。後者が古く位置付けられる可能性があるが、坏部形状が不明なため断言できない。209は小形鉢。口縁部を緩く外反させる。体部外表面には成形時のクラックを認める。210は同形態の大形鉢。口縁部は萎縮して短く、小さく外反して開く。後期末から布留式古相頃に位置付けられよう。丸亀市郡家原遺跡 SD 107出土資料に類似形態をみる。211は下川津B類大形鉢。212は円筒状の脚部小片である。端部は縁辺を摘み出して上げ底状を呈し、体部の開きは弱い。後期前半の製塩土器脚部に類似するが、外面は緻密なミガキ調整を多用するなどそれよりも丁寧な作りである。小形の鉢もしくは壺の底部形態と考えられる。213は甕もしくは壺の底部。かろうじて平底部を認めるが、底部稜線部分はナデにより丸く仕上げられており、丸底化が進んだ形態である。214～219は広口壺。214は下川津B類土器。端部は小さく摘み上げられる。215は口縁部の外反度が先の188より鈍く、より古く位置付けられる可能性がある。216は同頸・体部である。体部外面には僅かにタタキメを認める。胎土中に角閃石粒を多量に含む。217は頸部は短く内傾し、外面に細かなハケ調整を認める。後期末まで下る。218は口縁端部を上下に僅かに肥厚させ、頸基部に低い矩形の小突帯を付し、突帯上面に刺突文を加える。胎土中に角閃石粒を多量に含む、後期前半頃に遡る。219は鶴尾タイプの広口壺。器壁が薄くシャープに作られており、後期後半でも新しく位置付けられよう。220・221は後期初頭の直口壺。221では頸部外面にハケ原体による上下2段の斜線文を認める。いずれも角閃石粒を多量に含む。222は下川津B類細頸壺。本地区からは本形



第26图 SDe115出土石器实测图 (1/2·1/4)

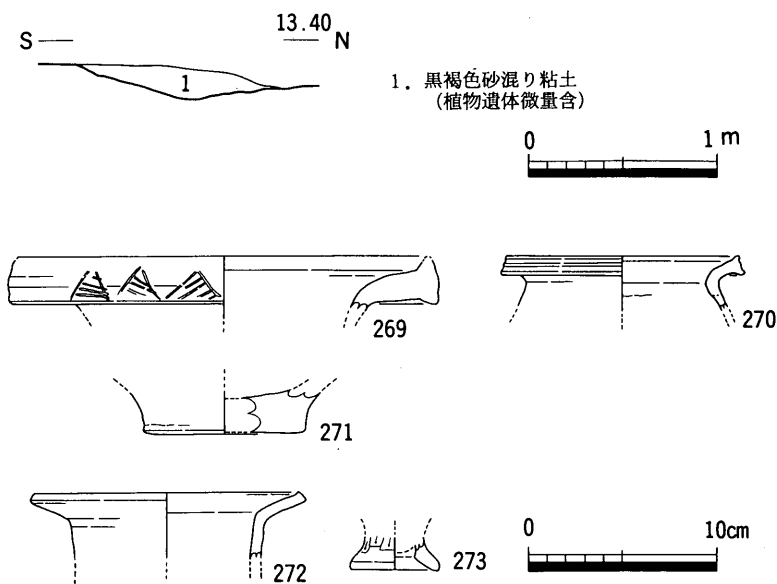
態の細頸壺口縁部は小片も含めて本例1点のみしか出土していない。やや内湾気味に開く形態から、後期末に位置付けられる。223は直口形態の壺体部であろう。肩部に横位の環状把手を貼付する。上天神遺跡4区SK02出土資料に類似形態をみる。角閃石粒を多量に含む。224の甕は、体部外面にハケ調整を認めず、一般的な調整技法とは異なる。口縁部の拡張は鈍化しており、後期初頭でも後出する形態であろう。225～234は下川津B類甕。225は口縁端部の拡張が上記甕の中でもやや大きく、最も古く位置付けられる様相をもつ。229・232などは逆に後期末まで下る可能性がある。「く」字外反口縁形態の甕は、肩の張りの弱い235～237と、体部球形化が進展した238に分かれる。大形甕239は、口縁部が肥厚せずに直線的に伸び端部を上下に拡張しており、むしろ中期末に近い様相とされる。240～242は下川津B類高坏。上半部の発達した241・242がより新しい傾向を有する。243は同高坏脚部。脚端面に鈍いながらも凹線文が施され、後期後半でもやや古い様相を示す。244は外反する口縁部を有する鉢。内外面に丁寧なハケ調整が加えられる。245は小形の鉢と考えられる底部片。内面に入念なハケ調整を認める。246も小形の鉢。小さな底部と大きく外傾して開く口縁部形態から後期末に下る可能性がある。形態上はB類土器ではないが、245と共に胎土中に角閃石粒を多量に含む点は注意される。247は粗製の鉢。外表面に成形時のクラックを多数認める。底部は厚い丸底形態を呈し、後期末に下る。248～251はB類土器底部。250の外面には、タタキメと考えられる調整が認められ、やや異質な感じを与える。252の底部は、いわゆる充填法によって成形される。253の底部は、縁辺部にタタキ調整を加えて丸底様に仕上げられ、先の213に近い形態を呈する。254は甌である。通有の甕底部に穿孔するものとは異なり、また尖底状を呈する形態とも異なり、張りの弱い鉢状の器形の底部に小円孔を穿つ。本来的に甌の用途をなしたのかどうかは不明である。256は土製支脚の頂部小片。西讃域で後期末以降盛行する角形支脚の小片と考えられる。頂端面に丁寧なナデ調整が加えられる点にやや違和感を覚えるが、形態や側面の調整からほぼ間違いないであろう。高松平野を含めた東讃域では初出と思われ、胎土の面からも搬入品の可能性がある。261は凹基式石鏃。縁辺部の調整剥離は浅く、断面形は扁平である。なお図示していないが、上・下層より桃核数点が出土している。



第27図 SDe115出土木製品実測図 (1/4)

SDe140・141 (第28図)

Ⅲ-41区G69グリットで検出した溝状遺構である。いずれも SDe115より分岐して、SDe115の北側を緩やかに湾曲しながら東に延びる。SDe140は調査区外に延長し、SDe141は調査区内で途切れる。SDe140は幅1.0~1.6m、深さ0.2m前後を、SDe140はやや規模が小さく、幅0.3~0.5m、深さ0.1mをそれぞれ測る。断面形はいずれも浅い皿状を呈し、底面の標高は13.1m前後で概ね一致する。SDe115の底面との比高差は約0.3mを測る。SDe115の合流部周辺



第28図 SDe140・141断面図(1/40),出土遺物実測図(1/4)

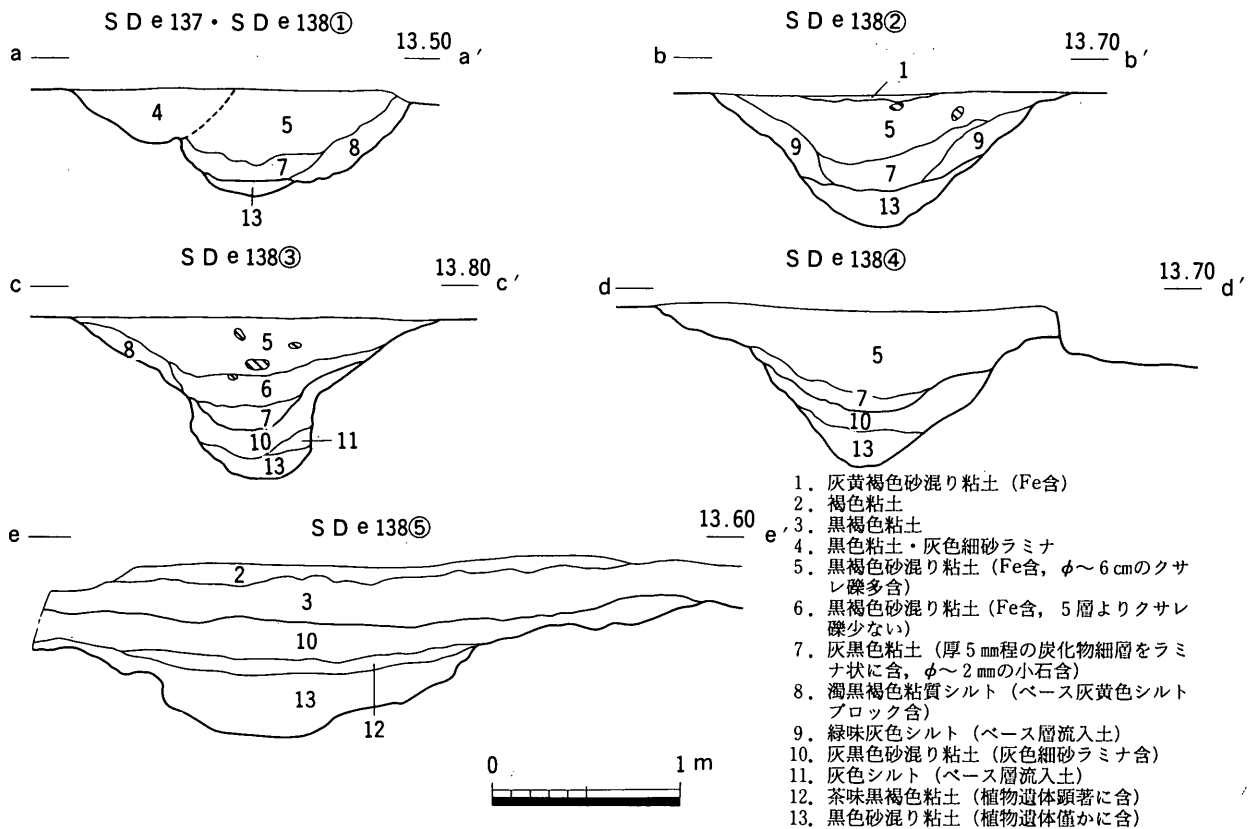
に堰等の遺構は確認できなかったが、位置関係や底面の高低差などから、本来的にはSDe115より分水していた可能性が高い。上述したようにSDe115は、大きく2回以上の改修を経て弥生時代後期初頭から古墳時代後期末頃まで機能していたと考えられるが、本溝はそう長期間機能しておらず、後述する出土遺物や埋土などから、後期中葉頃開削され比較的短期間で埋没したものと考えられる。埋土はいずれも黒褐色砂混り粘土の単層で、SDe140西半部には長径10cm以下の小礫が多量に認められた。

遺物は両溝合わせて、コンテナ半箱程度しか出土していない。うち5点を図示した。269~271がSDe140、272・273がSDe141出土土器である。269は広口壺口縁部。端部外面を線刻鋸歯文で飾る。270は甕。口縁端部の拡張は鈍いが、後期初頭の時期内には納まる。271は大形壺の底部か。272は広口壺。口縁端部を小さく摘み上げる。273は製塩土器脚部。269以外いずれも角閃石粒を多量に含む。

SDe138 (第29~40図・図版30・32~35・38・54~63・75・76・78・82)

Ⅲ-41・43区G67~69グリット周辺で検出した溝状遺構である。包含層I層下面、地山層上面より掘り込まれる。SXe02西側よりわずかに蛇行しながら8m程北流し、くの字状に屈曲して大きく向きを東に変え、SDe137の南側をSDe137に概ね平行するように東流し、調査区外に流下する。南端は、東西幅2m程に瘤状に膨らみ、土坑状を呈して途切れる。この土坑状部分に向けて南北溝底面は徐々に下がり、東西溝部分との底面のレベル差は最大0.8m程に達する。この土坑状部分の南側には、SDe115が配され、SDe115が分岐して本溝と合流していた可能性もあるが、中世の落ち込みSXe01に上面を大きく削平されているため不明である。土坑底面は、透水層である砂層を大きく掘り込み、滞水下の堆積が考えられる黒色粘土と細砂のラミナ層が堆積する。この土坑状の落ち込み四周には、何らの護岸施設は認められなかったが、土層堆積状況などから判断して、湧水施設である井泉状の性格が想定される。調査時においても、この砂層中から多量の湧水が確認された。つまり、この井泉状の施設から揚水した水を、SDe138を介して遺跡北東部へ流下させていたのであろう。なお、土坑状落ち込みの北約2m程の位置で、溝底面より僅かに浮いて鉄製鋤(鋤)先1点(507)が出土した。湧水部近くより出土していることから、祭祀的性格を考慮することも可能であろうか。また、湧水部からわずか8m程北流して流路方向を





第29図 SDe138断面図 (1/40)

大きく変える配置は不自然であり、東西溝北側に何らかの施設があった可能性が想定され、遺物の出土量からすれば居住域の可能性が高い。また後述するSDe137は、ほぼ本溝東西溝と並行する点を重視すれば、本溝の機能停止に伴い付け替えられた可能性が高いが、溝北側の状況が不明なため推測にとどまる。

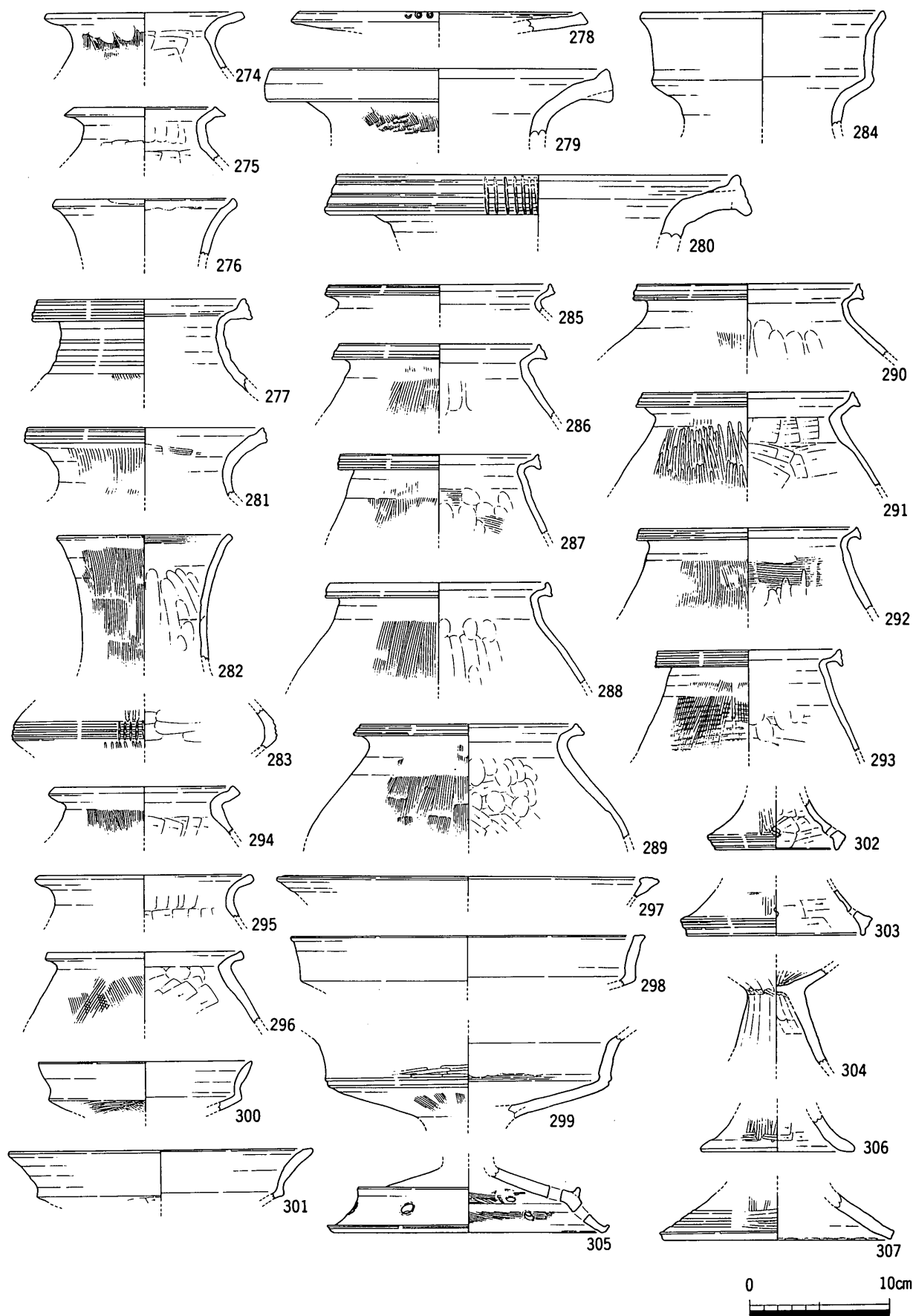
東西溝部分での幅1.9~2.0m、深さ0.7~0.8m、底面の標高12.8m前後を測る。断面形は、比較的掘削時の状況が保たれていると考えられるC断面(第29図③)で、上位0.3mは摺鉢状に緩やかに掘り込まれ、下位は直に近く掘り込まれ箱状を呈する。埋土は7層前後に細分され、堆積状況から検出部位全域に渡って最低2度の改修を経たことが判明した。最上層(3層)は、溝上面を広く覆う堆積層で、機能停止後の自然堆積層と考えられ、投棄された長径6cm以下のクサリ礫を多量に含む。上層(4・5層)は2度目の改修に伴う堆積層で、黒色系の粘土層が厚さ0.3m程堆積する。本層下位層には黒色炭層の細層が数層介在する。下層(8層)は、初回の改修後の堆積層である。灰黒色粘土層が堆積し、灰色細砂層をラミナー状に含む。箱状部分から摺鉢状部にかけて0.5mもの層厚を有し、比較的長期間に亘って堆積したのであろう。最下層(6・7・9~11層)は、上位にベース層の崩落に起因する緑味灰色シルトが、下位に黒色砂混り粘土が堆積する。下位の層厚は0.15m程度であり、本溝開削後短期間のうちに壁面上位の崩落によって上位層が堆積し、溝の機能が一時停止したのであろう。なお、摺鉢状部の形成は本時期と推定される。

遺物は、コンテナ35箱分もの多量の遺物が出土した。調査時において細かく土層の検討を行ったが、調査位置によって若干の混乱が生じ、土層の堆積状況と遺物の取り上げがうまく対応できなかったため、残念ながら以下では最上層・上層・下層の遺物を一括して上層として報告し、最下層出土遺物のみ下層

として報告する。またB断面に図示されるように、本溝周辺を広く覆う包含層I層が、本溝上面で部分的に薄くレンズ状に垂れ込んでおり、本来的に本溝に含まれる遺物と包含層のそれを分離することが困難であった。図示した43区上層出土の遺物のうち、布留式古相併行に下る遺物については、包含層出土の可能性があり、本溝埋没の下限を必ずしも示しているとは限らない。

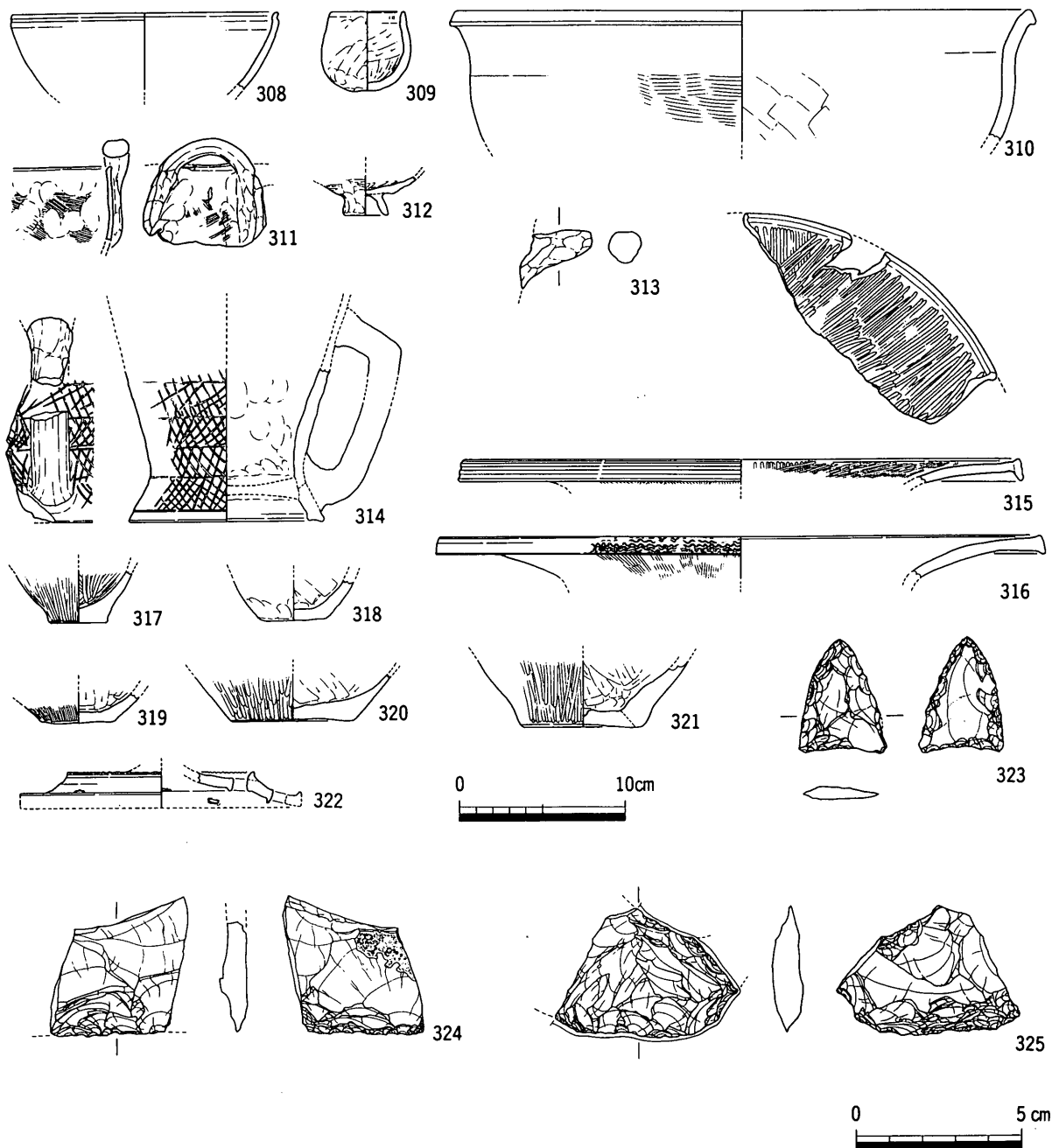
274～321・323～325が41区上層より出土した遺物である。下層より出土した遺物は少なく、322のみ図示した。なお41区の調査では、一部でSDe137と本溝が重複しており、この部分において調査時に両溝の切り合い関係を十分に把握することができなかつたため、SDe137の遺物を本溝出土として一部取り上げてしまったようで、他の土器とは明瞭に異なる時期の遺物が少量含まれる。284・312がそれである。また上層からは図示していないが、桃核5～6点が出土している。

274～280は広口壺である。274は口縁部がやや長く延び、端部の拡張が認められないことから後期中葉頃に位置付けられる。275は頸部が不明瞭で頸部付近にまで内面ケズリ調整が認められ、主に下方に口縁端部を拡張させることから、吉備南部系の模倣形態と考えられる。時期は後期初頭頃であろう。276は口頸部の屈曲が鈍く、端部の拡張も認められないことから、中葉頃まで下る可能性がある。277が本地方の後期初頭の広口壺の最も一般的な形態とされる。278は口縁部の小片だが、端面を円形刺突文で飾る。端面への刺突文の施文は、後期初頭の広口壺に多用され、中葉でも古い様相を残していると考えられる。279は大形の広口壺に属し、口縁部が萎縮していることから、後期初頭でもやや後出するものであろう。頸部に緻密なハケ調整を認める。280も同様に大形の広口壺で、端部は上下に大きく拡張して不鮮明な3条の凹線文と7条以上の短刻線で装飾する。このタイプの壺への端刻線の施文例は少ない。281は短頸壺である。口縁部の外反度は強いものの短く、端部の拡張は弱いことから中葉までの範囲に納まるものと考えられる。282は直口壺口縁部。端部に3条の刺突文を加える。283は細頸壺体部。体部中央外面に4条の鈍い凹線文を施し、その上から5条以上の短刻線で飾る。後期初頭に位置付けられる。上記壺類はいずれも胎土中に多量の角閃石粒を含む。284は上記したように本来SDe137の遺物と考えられる二重口縁壺である。口縁部は中位で鈍く屈曲して上半部の外反度は低く直立し、端部は四角く納める。川津二代取遺跡や坂出市川津下樋遺跡に類似形態があり、布留式古相に位置付けられよう。285～296は甕である。285～293が後期初頭の本地域で、最もポピュラーな形態とされる。口縁端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み出す286～293の形態が多数を占めるが、285のように上方へのみ摘み上げる形態も存在する。285・289・292のように端部拡張の乏しい形態はやや後出する可能性があるが、いずれも口縁部はそれほど伸びておらず後期初頭の時期内に納まるだろう。294は口縁部が短く外反する形態の甕で、端部は小さく摘み上げる。口縁部は短い、端部の拡張は弱まっていることから、中葉頃まで下る可能性がある。本地域ではあまり例をみない形態である。295も端部は鈍く肥厚するのみで拡張は認められず、また頸部の屈曲も鈍く中葉まで下る形態であろう。上記甕はいずれも胎土中に多量の角閃石粒を含む。296の「く」字外反口縁形態の甕は、端部を鈍く肥厚しつつ僅かに摘み上げる。下川津B類甕の模倣形態と考えられ、中葉以降に下る。297～301は高坏。297は拡張口縁形態の高坏で、外面に赤色顔料が塗布される。坏上半部の外傾度は強く、後期初頭でもやや新しく位置付けられようか。298は直立口縁系統の高坏。口縁端部は外方に摘み出しつつ、内方にも小さく突出する。口縁部はやや外反して開き、後期初頭に位置付けられよう。299は装飾高坏坏部。屈曲部外面は鈍い突帯状の2条の隆起があり、上半部は強く外反して開く。上天神遺跡4区SD08出土資料に類例を見る。300は外反口縁形態の高坏で、屈曲部は鈍く突出し、端部は鈍く尖る。301はB類高坏口縁部。端部形状から後期中葉頃に位置付けられる



第30图 Ⅲ-41区 SDe138出土遗物实测图1 (1/4)

か。上記高坏はいずれも胎土中に角閃石粒を多量に含む。302～305は高坏脚部。302・303は後期初頭段階の最も一般的な形態で、端部は強く下方に引き出され、上方に小さく突出する。304は脚柱部の破片だが、坏部内面は放射状のミガキ調整が、外面はヘラナデ調整が施される。本地域ではあまり例を見ない。305は装飾高坏の脚部である。裾部中位で屈曲し、外面に突出度の高い突帯を貼付する。また裾部上・下段にはそれぞれ6ヶの円形透し孔が穿たれる。裾下段の発達は弱く、後期初頭に位置付けられよう。306は緩く外反して開く脚部である。外面は縦ミガキの後端部付近を横ミガキし、内面は横ケズリが施される。内外面の調整技法に高坏脚部としての違和感はないが、形態上類例に乏しく、どのような坏部が対応するかは不明である。307は小形器台の脚部であろう。裾部外面は縦ミガキの後鈍い凹線が3～4条施される。後期初頭に位置付けられよう。上記脚部はいずれも胎土中に角閃石粒を多量に含む。308～310は鉢である。308は小片のため口径復元にやや難を残すものの、後期初頭段階としては珍しい小形の部類に属し、端部下位外面に1条の沈線を施す。胎土中に多量の角閃石粒を含む。309は小形の鉢で、むしろミニチュア土器としたほうがよい。底部は丸底で、直口形態の口縁部は鈍く尖る。布留式新相併行の中間西井坪遺跡谷3資料に類似形態をみるが、単純な器形だけにそこまで下らせる必要は乏しいと考える。310は大形鉢である。口縁部は鈍く外反し、端部は小さく下方に摘み出す。口縁部形状より片口形態が想定されたが、細片のため図化しえなかった。間延びした口縁部形状から後期後半前後に位置付けられる。311は把手付甌と考えられる口縁部の小片である。外面に環状の把手が貼付される。類似形態は、坂出市下川津遺跡SDⅡ01より出土しているが、下川津遺跡例では把手は口縁端部上面に貼り付けられるのに対して、本例では口縁部側面に粘土紐を引き伸ばして広く貼付されており、より安定度の高い作りとなっている。この点で、下川津遺跡例よりより古く位置付けられ、後期初頭まで遡る可能性が高い。なお把手部には赤色顔料が塗布されている。また胎土中に角閃石粒を多量に含む。312の製塩土器脚部も本来的にはSDe137出土の遺物である。体部は大きく開き、外面にはタタキメが認められる。脚部の矮小化が著しく、備讃Ⅳ期にまで下る（大久保1992）。313は一端に剥離痕を有する円柱状の土製品で、外表面は全面指押さえ・ナデ調整が施される。剥離部分の形状から、口縁部が開いた鉢状の器形に付された把手と考えられる。314は一方に縦位の把手を有するジョッキ形の鉢である。裾部は緩やかに外反して短く開き、底部は剥離するが上げ底状を呈する。外面にはやや乱雑な格子文が線刻される。なお同一個体の破片と思われる土器片が、SDe137・141からも出土している。315は大形器台の口縁部である。端部は断面方形の粘土紐を付して、垂下口縁となす。内面は分割した放射状のミガキを入念に施し、外面は縦ハケの後螺旋状のミガキ調整を加える。胎土中には多量の金雲母粒を含む。316も大形器台の口縁部であるが、端部形状は異なり、小さく上下に突出するのみである。端面は櫛描波状文で飾る。本例のように大形器台の口縁端面への櫛描波状文の施文例は乏しく、広口壺口縁部の可能性も残されるが、口縁部が大きく発達することから大形器台とした。胎土中には角閃石粒を多量に含む。大形器台はいずれも後期初頭に位置付けられよう。317は内外面に丁寧なミガキ調整が認められることから、小形の鉢と思われる。また内底面に赤色顔料の付着を認める。胎土中に角閃石粒を多量に含む。319は形態や調整技法などB類甕底部に近似するが、胎土中に角閃石粒は認められず模倣形態であろう。また同様に321もB類土器の可能性が高いが、一般のB類土器と比して粗粒の石英粒が目立ち、また角閃石粒の含有量も少なくやや異質である。322は装飾高坏の脚部である。裾部は強く屈曲し、屈曲部外面にやや突出度の高い刻み目突帯を付す。また裾部上・下段にはそれぞれ円孔を穿つ。裾端部は欠損により明瞭ではないが、強く上方へ摘み上げるようである。突帯上面に僅かに赤色顔料の塗布をみる。裾



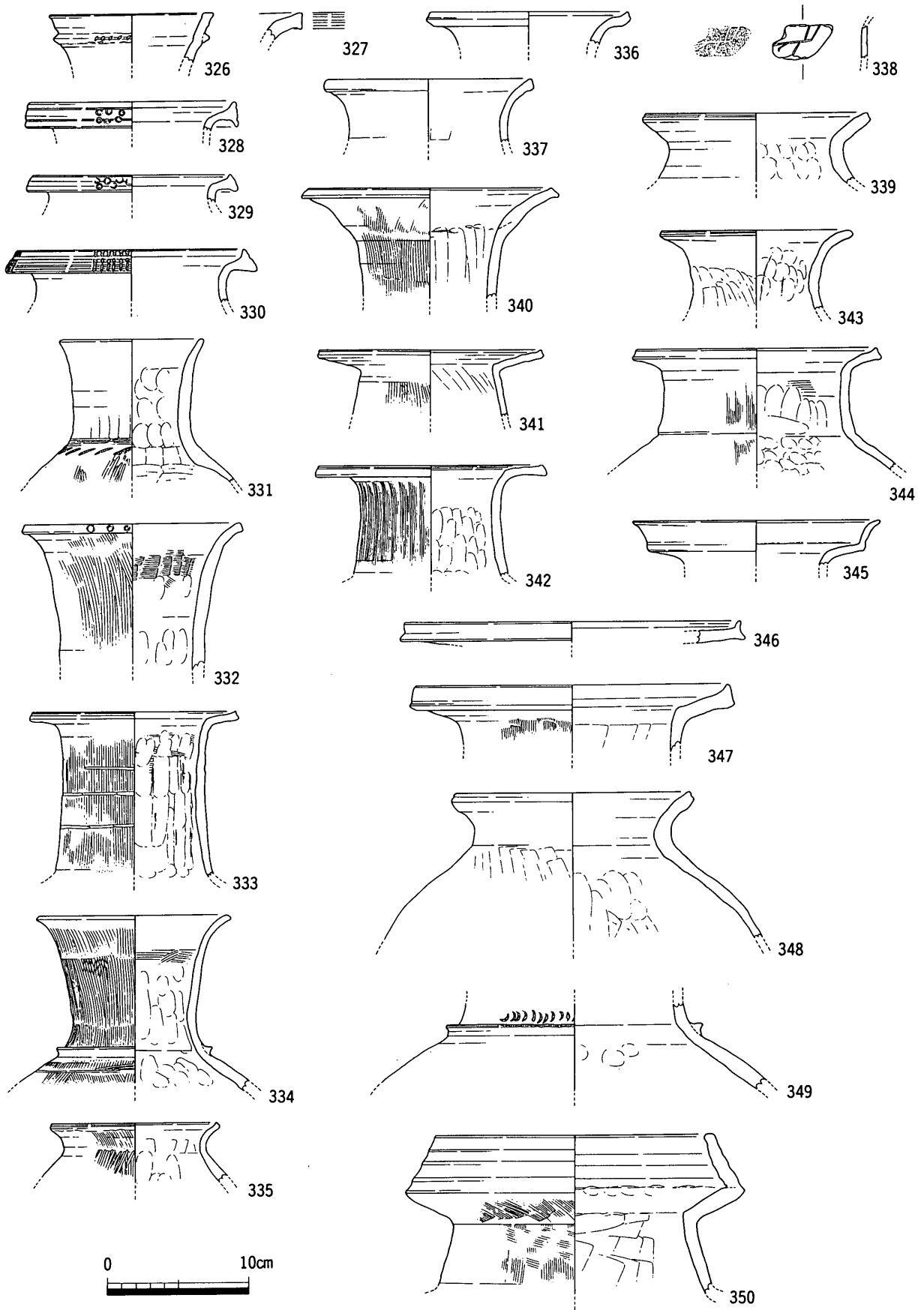
第31図 III-41区 SDe138出土遺物実測図2 (1/2・1/4)

部高が低く、下段の外反度が強いことから、後期中葉以降に位置付けられよう。323は平基式の石鏃である。調整剥離は縁辺部のみで、断面形は比較的扁平である。323は両側縁に調整剥離を加えたスクレイパーと考えた。325もスクレイパーである。刃部以外の縁辺部は欠損しており、あるいは石庖丁となる可能性も残る。片面に自然面を残し、調整剥離も深く及ばない。残存する刃部に使用痕は認められない。

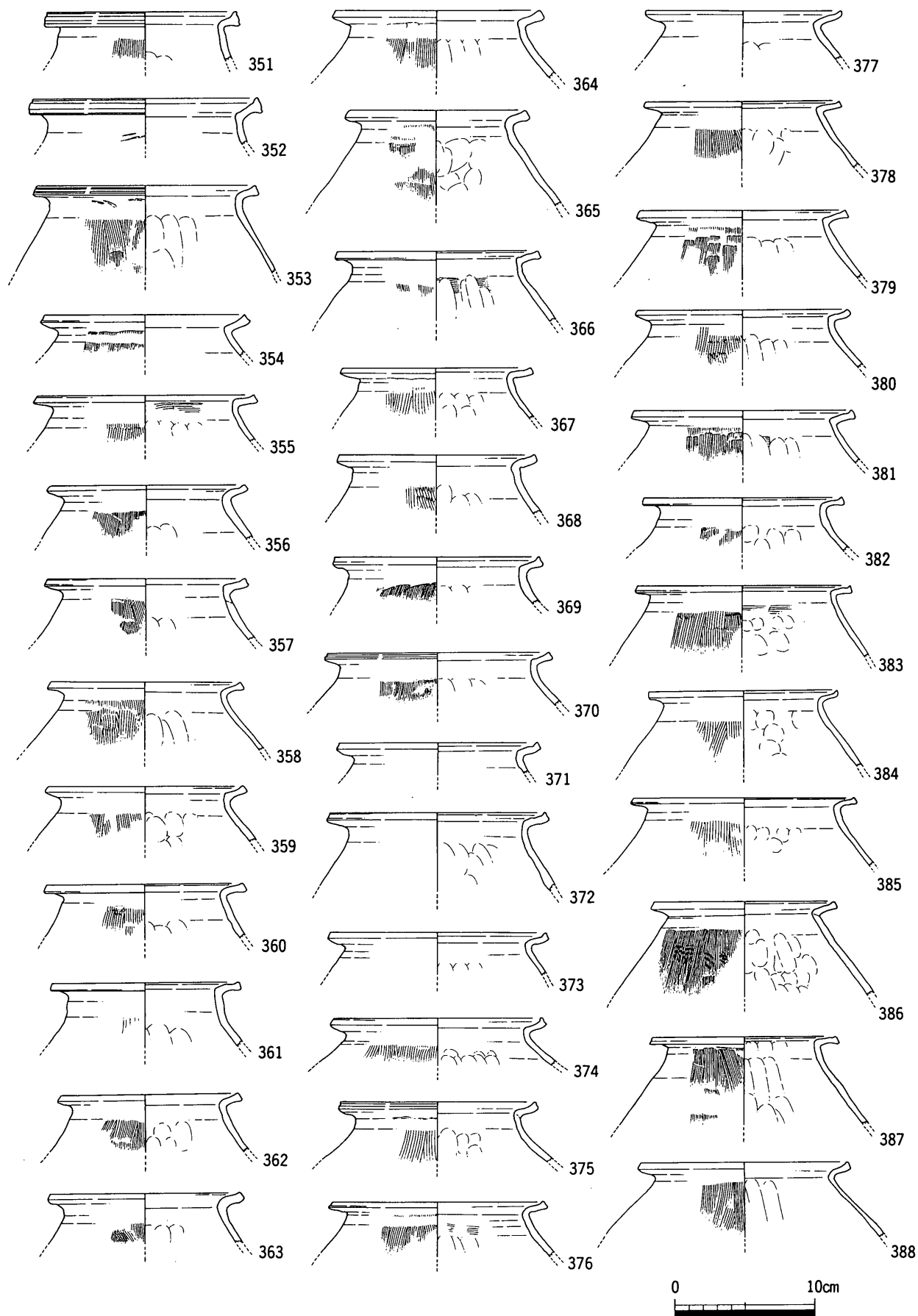
326~507が43区出土遺物である。43区からはコンテナ28箱分もの遺物が出土しており、その大半は上層出土の遺物である。遺物には図示したものの他に、上下層より桃核数点などが出土している。また43区部分では、本溝上面を中世の落ち込み SXe01が重複しており、SXe01からも多量のほぼ同時期の遺物が出土しており、遺物量では本地区の遺構の中で上位を占める。なお下層の遺物は散在する状況でしか出土していないが、G67グリットの屈曲部の下層上面では、やや集中して一括投棄を思わせる土器群が

出土した(図版35)。溝中央部で流路方向に沿って折り重なるように出土したが、個々の土器はあまり接合関係にはなく、他所で破損した土器が持ち込まれたのであろう。476・493・494の3点を図示した。

326～472が上層出土の遺物である。326は中期前葉に遡る壺口縁部である。外面に刻み目突帯を貼付する。327は広口壺もしくは短頸壺の口縁部小片である。端部は鈍く上下に肥厚させ、3条の凹線文で飾る。端部形状から後期前半以降には下らない。端面に赤色顔料が塗布される。328～330・332～336・338～344・346～349は広口壺である。328・329のような端部への上下2段6個1単位の円形刺突文は、後期初頭の本器種に多く採用された施文パターンである。いずれも角閃石粒を多量に含む。逆に330のようなハケ原体の刺突文は例に乏しい。332は緩く外反してラツパ状に開く口縁部を有する。端部に円形刺突文を加える。333は口縁部が強く屈曲して開く形態のもので、頸部外面に縦ハケの後ヘラ描並行沈線を加える。332と共に胎土中に角閃石粒を多量に含み、後期中葉頃に位置付けられる。334は332の後出形態と考えられるもので、頸基部に突帯を付す。外面は丁寧なハケ調整を施し、後期後半でも新しく位置付けられよう。335は体部外面のミガキ調整や不明瞭ながらも外傾する頸部を認めることから、広口壺とした。口縁部は萎縮し、端部の拡張も認められないことから後期中葉以降に下る。336の口縁部形態はあまり例をみない。胎土中には角閃石粒を多量に含む。338は下川津B類広口壺である。いわゆる鶴尾タイプの壺の頸部小片と考えられ、外面に線刻が認められる。339も鶴尾タイプの広口壺であるが、胎土中に角閃石粒を含まず、形態的にも粗雑で明らかに模倣形態である。340はあまり例を見ないタイプである。漏斗状に大きく開いた口縁部形態から、後期後半でもやや新しく位置付けられよう。胎土中に角閃石粒を多量に含む。341・342・344・346・347は下川津B類広口壺である。341の端部は鋭く摘み上げられ、口縁部内面に数条の鈍い凹線を認める。342は頸部の内傾度の弱いタイプである。頸部外面は細かな縦ハケ調整の後、装飾的に一部ハケメをナデ消す。口縁部は小さく摘み上げ内面に鈍い凹線を有する。341と共に後期後半から末頃に位置付けられる。344は341の祖形となるタイプで、太い頸部から強く折れて短く開く口縁部を有し、端部は上下に小さく摘み出す。口頸部形態から後期中葉頃に位置付けられよう。347もほぼ同時期かやや後出する形態と考える。また346は口縁部が水平に近く開き、端部を上下に大きく拡張する大形品である。口縁部内面には凹線文は認めず、後期末かやや後出する形態と考える。343は緩く外反して開く口頸部を有する壺で、頸部外面にケズリ調整を加える。348は口縁部が萎縮して短く、端部を若干摘み上げ気味に成形する。349のように頸基部へ突帯を付し、頸部外面に爪形の刺突文を加える例は後期後半頃に多見される。331は直口壺である。口頸部無文のタイプで、肩部外面にハケ原体の刺突文を巡らせる。胎土中に角閃石粒を多量に含み、後期初頭に位置付けられよう。337は短頸壺である。下川津遺跡弥生土器溜り1出土遺物に類似形態をみる。345は二重口縁壺である。口縁上半部は強く外反して発達は弱く、後期末頃に位置付けられようか。350は後期末以降出現する下川津B類二重口縁壺である。口縁上半部はあまり伸びず、内・外面に鈍い凹線文を加える。しばしば土器棺として使用される大形品で、本調査区からは明瞭な口縁部は本例を含め数点しか出土していない。形態から後期末頃に位置付けられよう。351～416は甕である。351～353は本地域で典型的な後期初頭の甕で、胎土中に角閃石粒を多量に含む。口縁端部の拡張が弱く、口縁部がやや伸びた353は前2者よりやや新しい傾向を有する。354～398は下川津B類甕。掲載した資料中にもかなりのバリエーションが認められるが、体部とは区別される頸部からやや強く折り返して口縁部はやや長く開き、端部は鈍く肥厚して明瞭な摘み上げを為さないタイプ、明瞭な頸部を認めず屈曲部内面に鋭い稜線をもって折り返し、口縁部は短く端部は鋭く摘み上げるタイプ、さらに口縁部が萎縮して薄く、さらに折返しが強

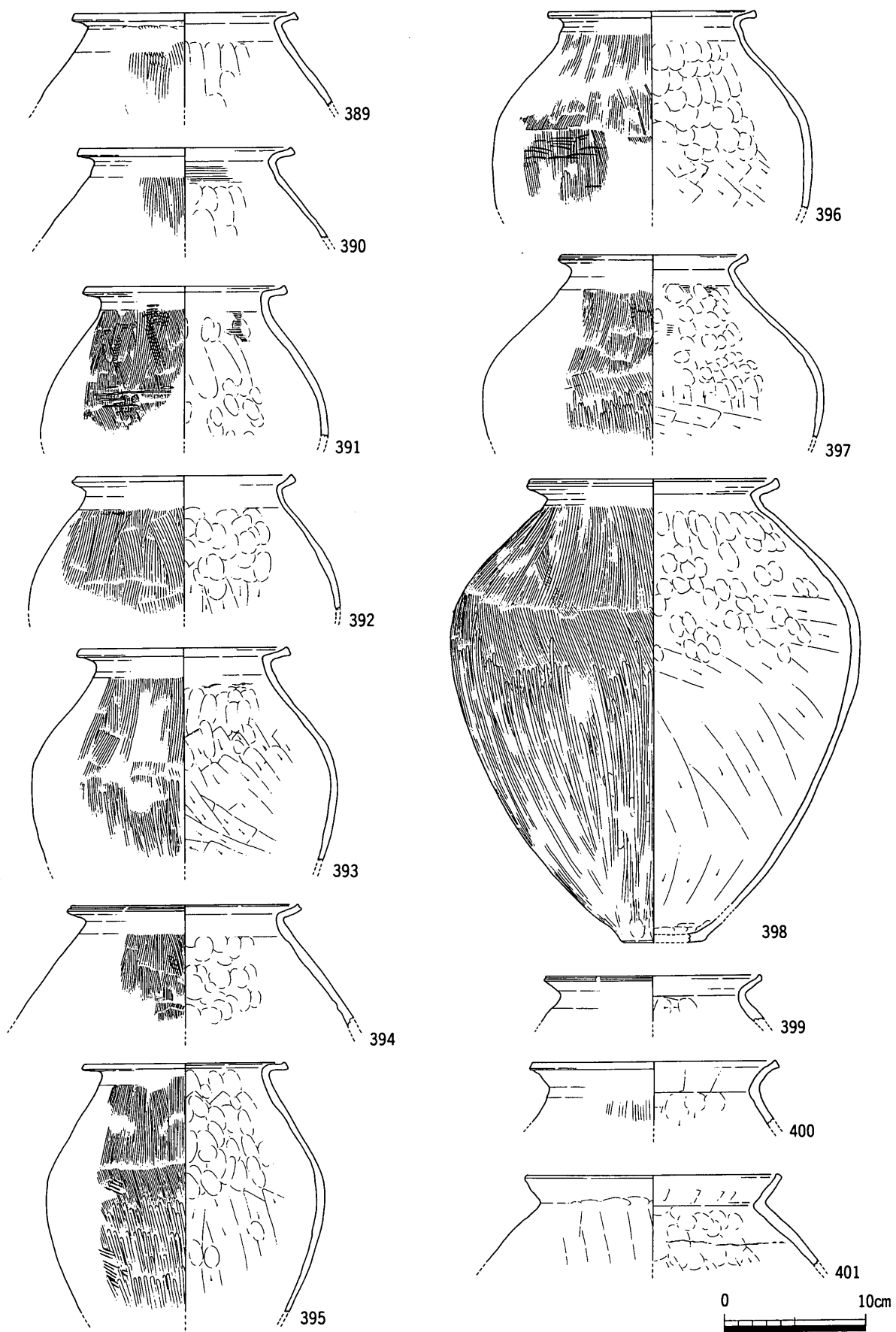


第32图 Ⅲ-43区 SDe138出土遗物实测图1 (1/4)



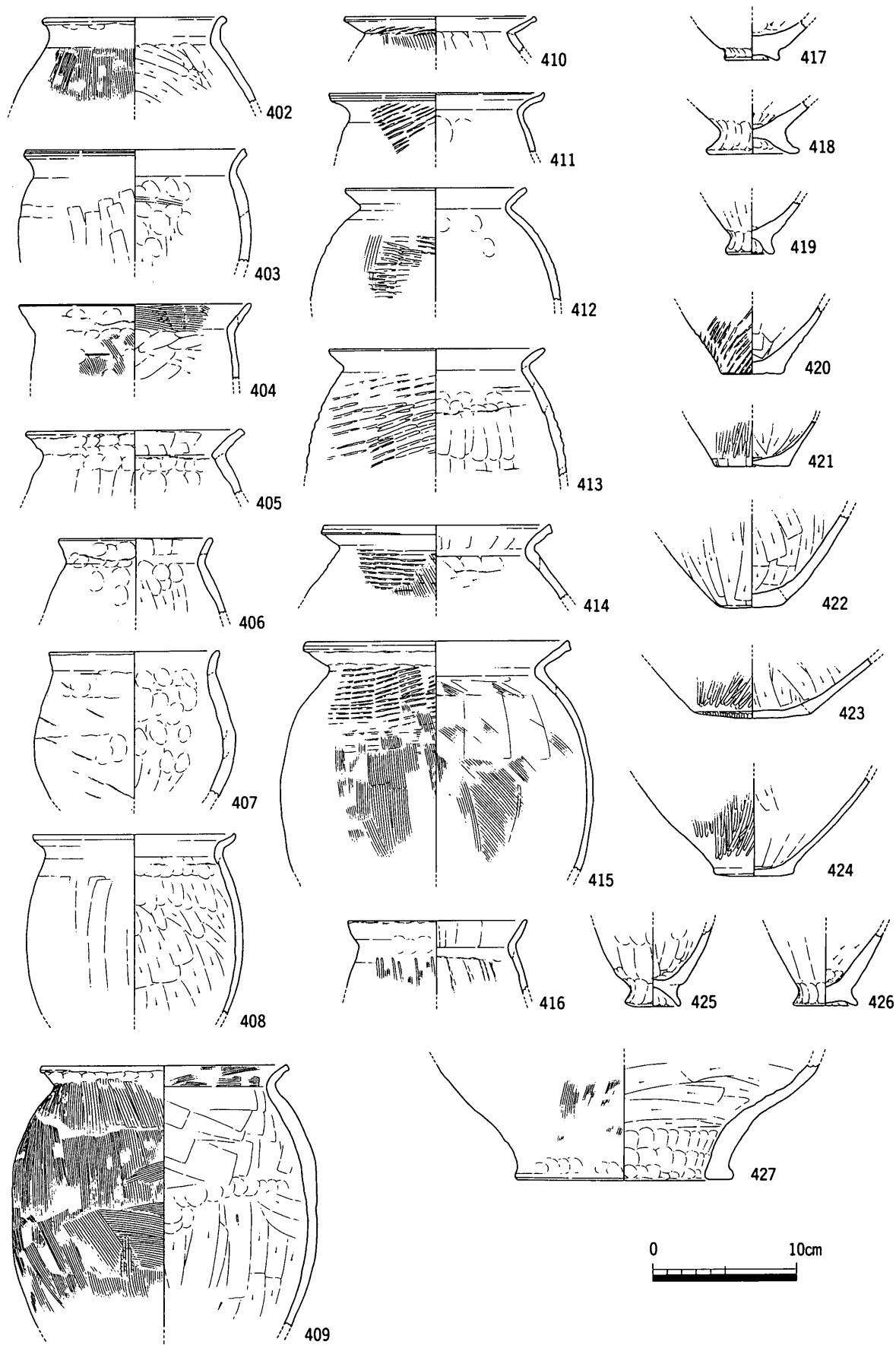
第33图 III-43区 SDe138出土遗物实测图2 (1/4)



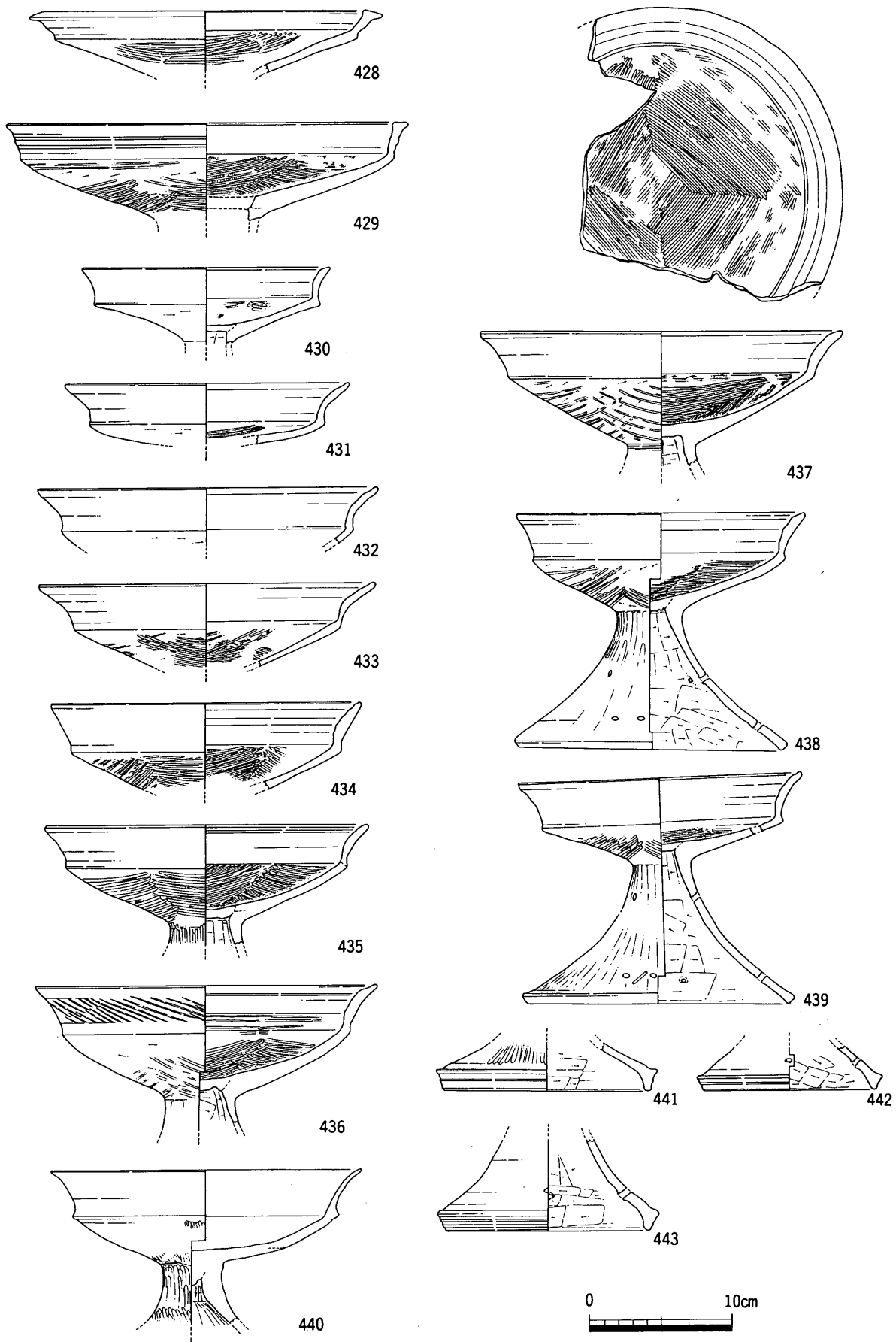


第34图 III-43区 SDe138出土遗物实测图 3 (1/4)

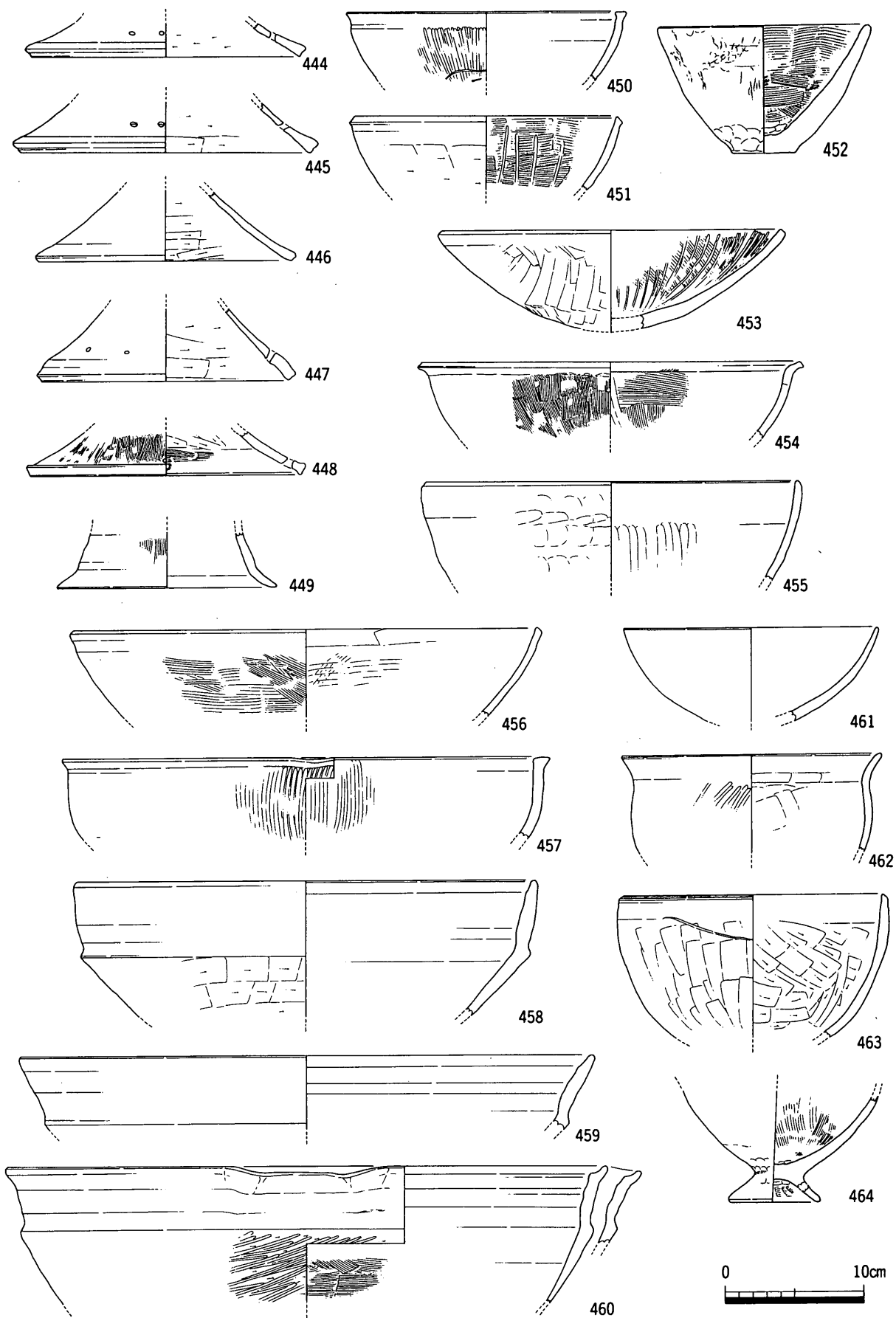
く水平に開き端部の摘み上げも不明瞭なタイプという大きく3者に分けられ、一般的に前者から後者へという時間的変化の方向性が考えられる。また334のようにやや内湾して口縁部が開き、端部は内傾して摘み上げられ、体部の張りも強いタイプは後期末でも新しく位置付けられる。さらに377は口縁端部を小さく斜上方に摘み上げ、明瞭な端面を作らないやや異質なタイプだが、口頸部の形状から後期末頃に位置付けられよう。399以下は「く」字外反口縁の甕。399～401は口縁端部を小さく摘み上げ、B類甕との親縁性が窺える。特に401は模倣形態としてもよいだろう。404は口縁部が大きく開き、体部のそれをおそらく凌ぐものと考えられ、むしろある種の鉢に近い形態を呈する。405～407は内外面指押さえ・ナデ調整が卓越し、器壁も厚い粗製の甕である。407の体部外面には、幅1.5cm程の粘土接合痕が斜めに走り、螺旋状に粘土紐を巻き上げて成形したことが窺える。409は体部の張りの弱い長胴タイプの甕。410～415は外面にタタキメを残す甕である。410・411には口縁部外面にも体部から連続するタタキメが残され、口縁部と体部が一体となって成形されたことが窺える。414・415は口縁端部を四角く納めるタイプで、B類甕とは明瞭に異なるものの胎土中に角閃石粒を一定量含む点で注意される。底部形状は不明ながら、体部の球形化は進展しており、後期末まで下る可能性がある。416は体部外面に縦位に暗文状のヘラナデを施す。417～427は底部である。418は低脚坏の脚部と考えられる。内面は比較的丁寧な板ナデ調整される。419は製塩土器の脚部。外面には縦ケズリ調整を認める。胎土中に角閃石粒を多量に含む。420～422・424は甕底部。いずれも安定した平底形態である。421・424はB類甕の底部か。423は体部の開きが大きく壺の底部と考えられる。胎土中に角閃石粒を多量に含む。425・426は台付鉢の脚部である。器形上は製塩土器のそれに類似するが、内外面の調整手法は比較的丁寧で、明瞭に識別される。427は壺底部と考えられる。底部は成形当初より充填されており、内面には顕著な指頭圧痕が認められ、それは体部のケズリ調整より後に施される。外面は縦ハケ調整が僅かに認められるが、剥離が著しい。壺形埴輪の底部形状に酷似するが、周辺の遺構内容から壺形埴輪とするのはやや無理だろう。異形の壺形土器底部としておきたい。428～440は高坏。441～448は同脚部である。428・429は拡張口縁形態の高坏。428のように坏上半部の外傾度が強く、端部を外方へ顕著に摘み出す形態は後期初頭でもやや新しく、429より先行するとされる。429の脚部径は通常のものよりかなり太く復元されるが、これは脚部がやや片寄って坏部に接合されているため、本来の形状ではない。441～443の脚部が、本形態の坏部に対応する。脚端部は下方へ強く引き出されるが、この引き出しの弱い442はやや新しい様相を備える。430も後期前半に位置付けられる高坏で、坏上半部は強く外反して端部は鈍く尖る。上記高坏はいずれも胎土中に多量の角閃石粒を含む。431～439は下川津B類高坏。444～447は同脚部である。このタイプの高坏は、438に典型的に示されるように、個体差が少なく非常に規格的に成形・調整される。本高坏では坏部は中位で屈曲して上半部は外反して開き、内外面ヨコナデ調整される。外面に斜位の暗文状ミガキ調整が加えられる436は、例に乏しい。坏下半部は内湾気味に開き、内面はナデ調整の後分割ミガキ、外面は横ケズリの後分割ミガキをそれぞれ加える。坏部と脚部の接合部には、いわゆる円盤充填法が採用される。脚部はスカート状に緩やかに外反して開き、外面は縦方向のヘラナデないしはミガキ、内面は横ケズリ調整を施す。脚部にはしばしば小円孔の透し孔を伴い、上位は1孔、下位は2孔1対に規則的に穿孔される。439では下段に4箇所穿孔された内の1箇所に、2孔の円孔の間に左下がりの長方形の透し孔を認める。なお本形態の高坏では、坏上半部が低く外反度の弱い434・435・437などがやや古く後期中葉から後半頃に位置付けられ、坏上半部が発達し、坏部高が口径の割に深く、また脚部が坏部口径とほぼ同じかそれを凌ぐように大きく開く438・439は後期末前後に位置付けられよう。



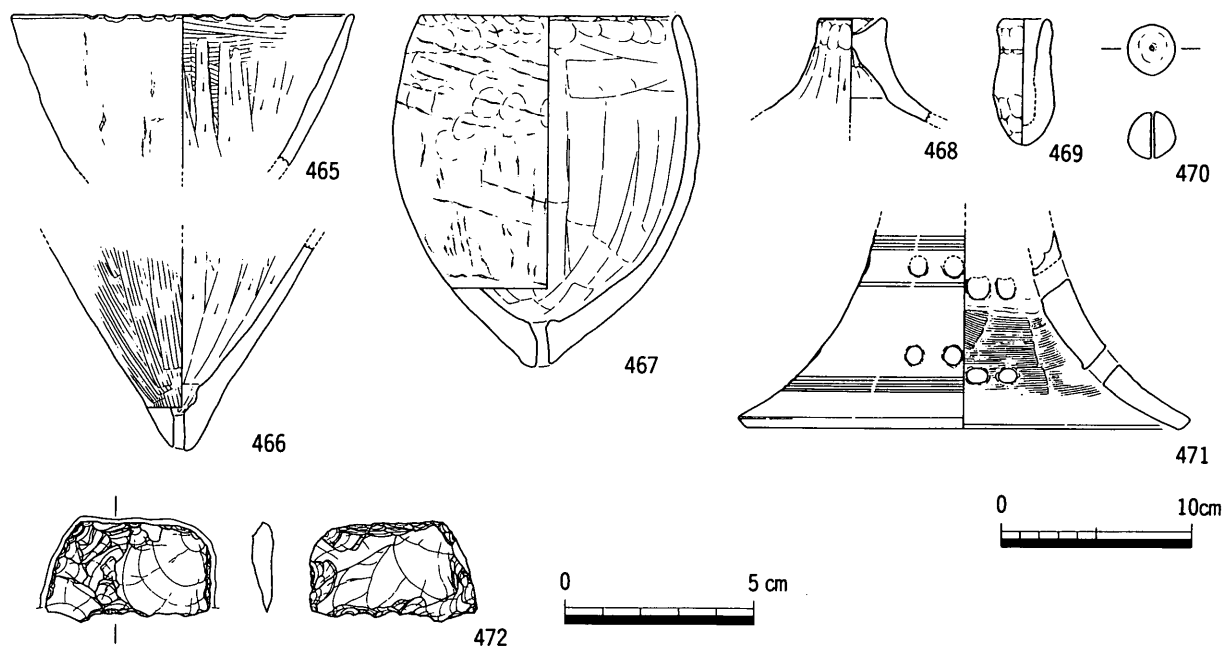
第35图 Ⅲ-43区 SDe138出土遺物実測図4 (1/4)



第36图 III-43区 SDe138出土遗物实测图5 (1/4)



第37图 Ⅲ-43区 SDe138出土遗物实测图6 (1/4)

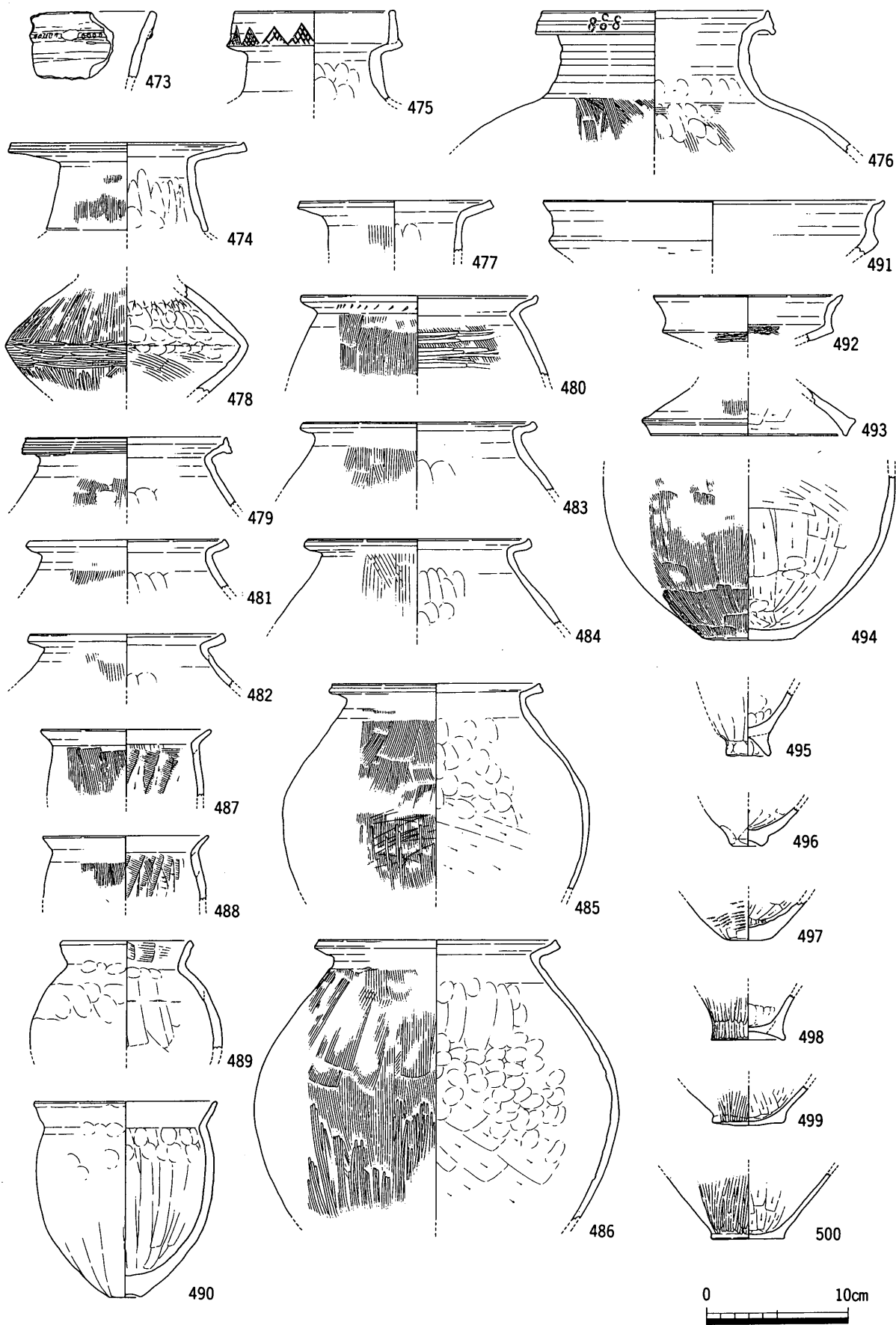


第38図 Ⅲ-43区 SDe138出土遺物実測図7 (1/2・1/4)

447は脚端部付近で鈍く屈曲して内湾気味に開くが、これも古い様相と考える。440はB類高坏とは別の在地系統の高坏である。坏上半部は強く外反して開くが、下半部は浅く後期後半でもやや古い様相を備える。449は壺または鉢の脚台部と考えるが、類例に乏しく上部形態は不明。胎土中に角閃石粒を多量に含む。450～464は鉢である。450は口縁部は鈍く屈曲して端部を内外に小さく突出し、頂部に小さな平坦面を作る。体部外面は縦ミガキを入念に施し、小片のため不明瞭ながら外面に線刻を伴う。胎土中に角閃石粒を多量に含み、後期初頭前後に位置付けられよう。451は外面に横ケズリを施し、内面は横ハケ調整の後放射状のミガキ調整を加える。口縁端部は上方に摘み上げ気味に整えられ、内傾する小さな面をなす。後期後半でも後出する形態であろう。452は粗製の鉢で、器壁は厚く、外面には成形時のクラックを顕著に認める。安定した底部形状から中葉前後に位置付けられよう。453・456は丸底の浅皿形態の鉢。453の内面には放射状のミガキ調整を認める。454は外反口縁を有する大形鉢である。453と共に後期末に位置付けられよう。456・463はやや深めの半球形タイプの鉢。463の外面には「へ」字状のヘラ描記号文を認める。後期後半以降に位置付けられよう。457は片口形態の大形鉢。口縁端部は外方へ鈍く摘み出すのみで、450よりは若干後出する形態である。胎土中に角閃石粒を多量に含む。459・460は下川津B類大形鉢。460では片口形態となる。同高坏の坏部と形態・調整手法とも近似する。いずれも中葉以降に位置付けられる。461は半球形のボール状を呈する小形鉢である。底部は丸底を呈すると思われ、後期末に下る。462は外反口縁を有する小形の鉢。後期末までは少量ながら残存する。464は台付鉢。425・426とは異なり大形の部類に属する。ただし後期末から布留式併行期に少量存在する低脚坏とは異なる器形と考える。465～467は尖底形態の甑である。465は底部を欠損するが、口縁部形態や内外面の調整から、甑としてはほぼ間違いない。口縁端部は意図的に打ち欠いて、小さな波状口縁とする。底部に焼成前の穿孔を認めることから甑としたが、本来的な用途は不明である。大久保氏は甑と共に濾過器の可能性を指摘する(大久保1996)。本器種には、本例のような直口形態のものと、後述するSDe122出土例のように外反する口縁部を付すものの2形態が認められる。両者は時期的な先後関係にあるのではなく、他遺跡の出土例などから同時併存しているようである。形態的に466のように体部に張りがなく、急角度で底部に至るものが古く、467のように体部が丸みを帯びるものは後出する。前者は後

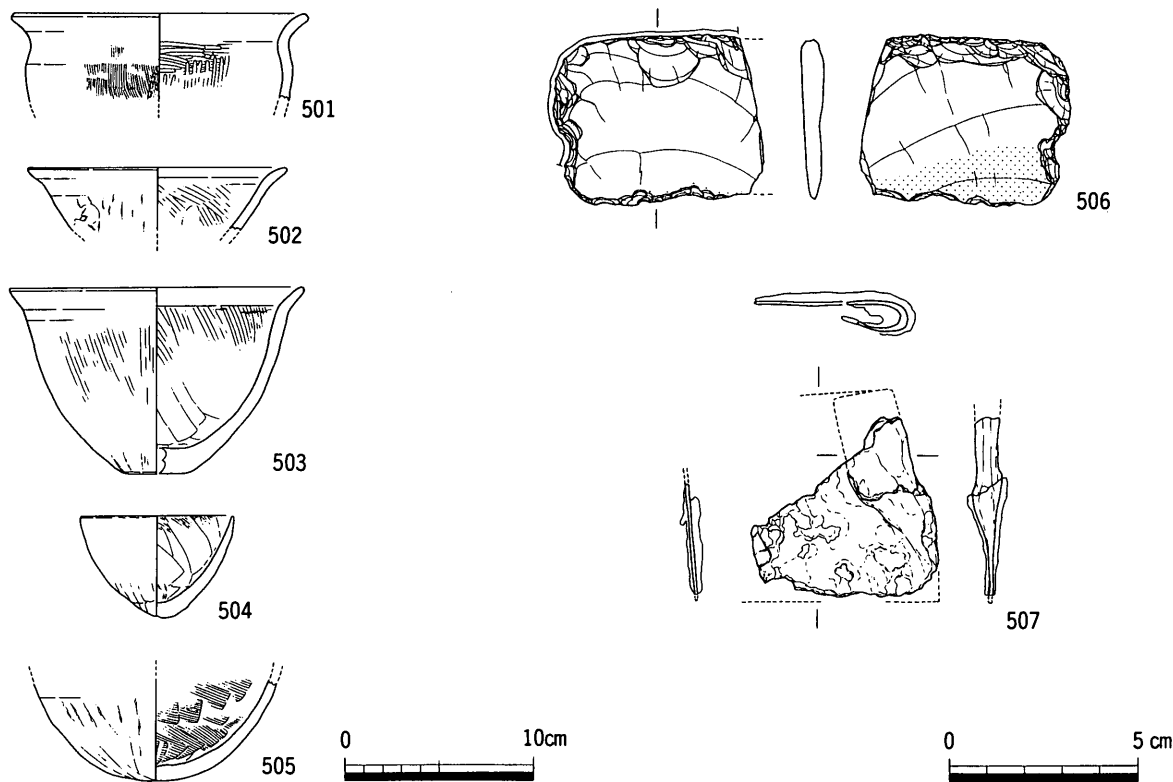
期中葉頃に、後者は後期後半から末頃に位置付けられよう。なお先述した環状把手を付す311は本器種の初現形態と考えられる。また467の外表面には、右下がりの粘土紐接合痕が明瞭に認められる。468は蓋である。摘み部は円柱状を呈し、頂部は指押さえにより凹む。外面はケズリ調整が施され、後期中葉以降に位置付けられよう。469は用途不明の土製品である。外面は指ナデにより仕上げられ凹凸が顕著で、口縁部下位のくびれ部に断続的なヘラ圧痕を認める。胎土中に角閃石粒を多量に含む。470は土玉である。胎土中に角閃石粒を多量に含む、B類土器と共通する胎土を有する。471は大形器台の下半部である。円形の透し孔が上下2段に2孔1対で4箇所穿孔され、その周囲にかすかに凹線文を認める。脚端部に拡張傾向は認められないが、後期初頭に遡る可能性がある。胎土中に角閃石粒を多量に含む。472は楔形石器である。両側縁部に潰し加工をみる。

473～507は下層出土の遺物である。473は縄文晩期に遡る突帯文土器である。周辺域で当該期の遺構は未確認である。474は下川津B類広口壺。頸部が内傾するいわゆる鶴尾タイプの広口壺で、薄く非常にシャープに作られており、後期末まで下る。475は二重口縁壺で、口縁上半部は直立気味に立ち上がり外面に鋸歯文を施す。後期末まで下る可能性がある。476は後期初頭の一般的な広口壺。上下に拡張された端面を鈍い凹線文と6個1対の円形刺突文で飾る。胎土中に角閃石粒を多量に含む。477も広口壺。口縁端部は僅かに摘み上げて、断面三角形状に肥厚する。胎土中に角閃石粒が多量に含まれ、後期後半頃に位置付けられよう。478は細頸壺の体部である。体部最大径部の内面には、明瞭な接合痕が認められ、それより上位と下位で内面の調整法は異なる。また外面のミガキ調整は中央部の横ミガキが最後に施されており、以上の観察結果から本器種は、体部上半部と下半部をそれぞれ別々に成形する、いわゆる分割成形により製作されたことが考えられる。なお体部下半には煤が付着し、調理具として使用された可能性が高い。胎土中に角閃石粒を多量に含む、後期前葉までには納まる。479～490は甕。479は後期初頭の一般的な形態。胎土中に角閃石粒を多量に含む。480の内面の調整手法は在地のそれと異なり、縦ハケの後横ヘラナデ調整を施す。胎土中には角閃石粒を多量に含む、他地域系統の在地産甕であろうか。481～486は下川津B類甕。481・482などがやや古く後期中葉頃か。他は概ね後期後半の範疇に含まれる。487・488はほぼ同一形態の小形の甕。体部内面は、頸部付近まで横ケズリを施した後、静止痕を止めたストロークの短い横ハケ調整を施す。489は甕とするよりむしろある種の壺に近い形態。490は「く」字外反口縁の一般的な甕。頸部があまり締まらず肩の張りが弱く、底部は小さいながらも丸底化はされておらずやや凹む。後期後半でもやや新しく位置付けられよう。491～493は高坏。491・492は下川津B類高坏。491の口縁部は直立気味に外反し、端部は外方への拡張傾向が残る。後期中葉に位置付けられよう。492はやや後出する形態。493は鈍いながらも端部に肥厚傾向が残存し、後期前葉に位置付けられる。胎土中に角閃石粒を多量に含む。494は壺の底部か。外面は丁寧なハケ調整が施され、特に外底面は六角形状に規格的に施される。495は製塩土器脚部。胎土中に角閃石粒を多量に含む。496は小形の鉢の底部であろうか。突出した底部外面に6ヶの規則的な指圧痕を加えややいびつな六角形状に成形した後、底面にも指圧痕を加え上げ底状に成形する。497～500は甕の底部。498は後期初頭に遡る形態だが、胎土中に角閃石粒を含まない。499・500は下川津B類甕底部。いずれも突出した底部形状から、後半以降には下らない。501は外反口縁を有する鉢。体部内面にミガキ調整が多用されることから鉢とした。丸みを帯びた体部形状から後期末まで下る可能性がある。502も小形の鉢。口縁部は小さく外反し、体部外面にはクラックを多く認める。503は中形の鉢。外反する小さな口縁部を付すが、やや安定した底部形状から後期中葉頃に位置付けられる。504は尖底形態の小形鉢。口縁部は薄く尖り、



第39图 Ⅲ-43区 SDe138出土遗物实测图 8 (1/4)



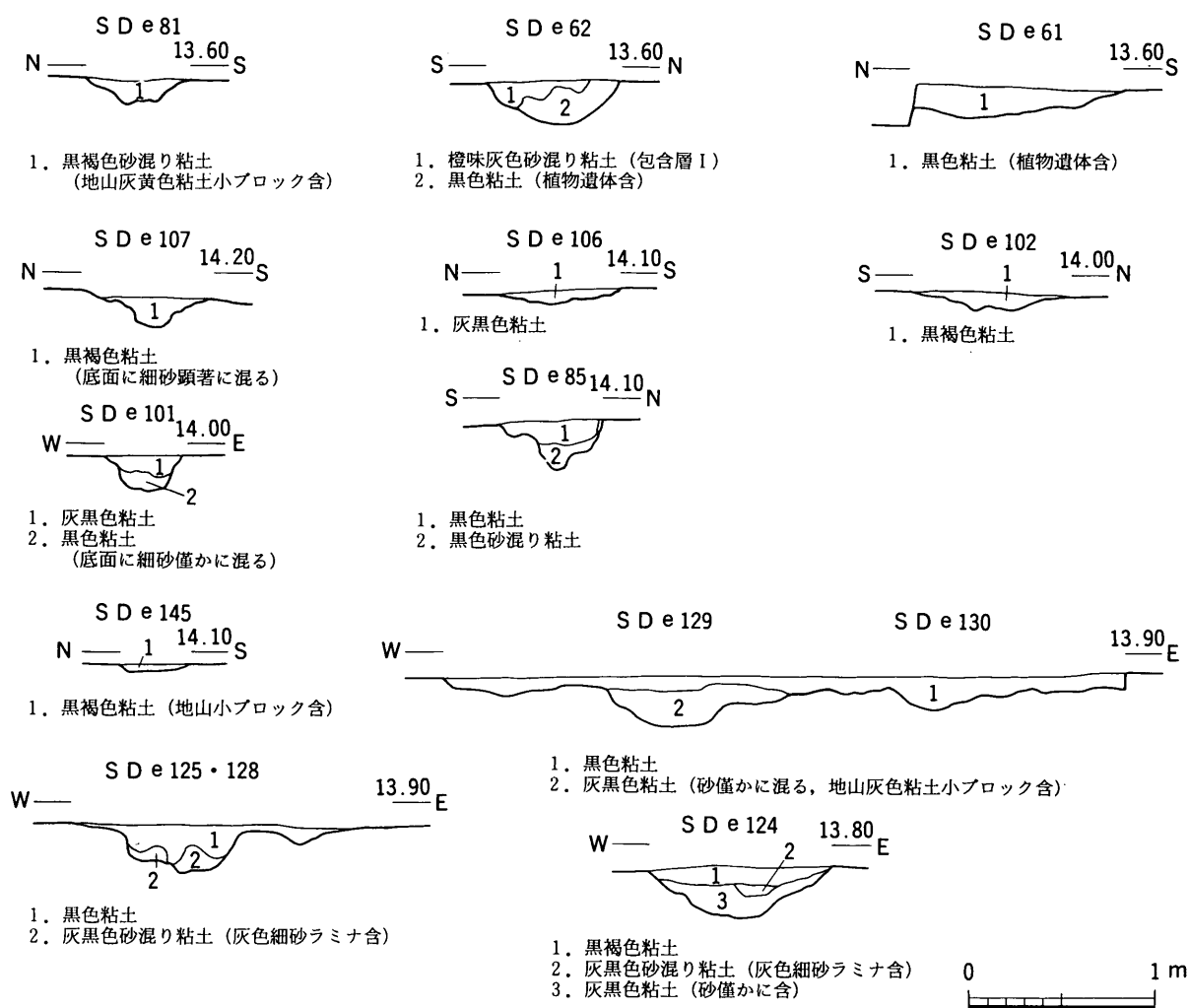


第40図 Ⅲ-43区 SDe138出土遺物実測図9 (1/4)

後期末に下る。505はボール状を呈する小形鉢で、底部外面にはケズリ調整を認める。本例も後期末に下る。506は打製石庖丁。横長薄片を素材としており、調整剥離は深く及ばない。刃部には使用痕が認められる。507は鉄製鋏（鋤）先である。本来刃部幅はあと数cm程度長かったが、出土時に破損したため図化していない。現状で幅4.9cm以上、長さ4.7cm以上を測る。厚さ1～2mmの長方形の鉄板の両側辺を折り返して、風呂部を挿入する袋部となす。ほぼ中央付近で半折して出土した。復元すれば、刃部幅10cm前後となろうか。袋部は1.7cm程の幅で折り返されて、本体部との間に約6mm程の空間をつくる。袋部には木質部は遺存しておらず、本来鋏（鋤）身に装着されたまま遺棄されたかどうかは不明である。

#### 小溝群（第41・42図・図版36・63・76）

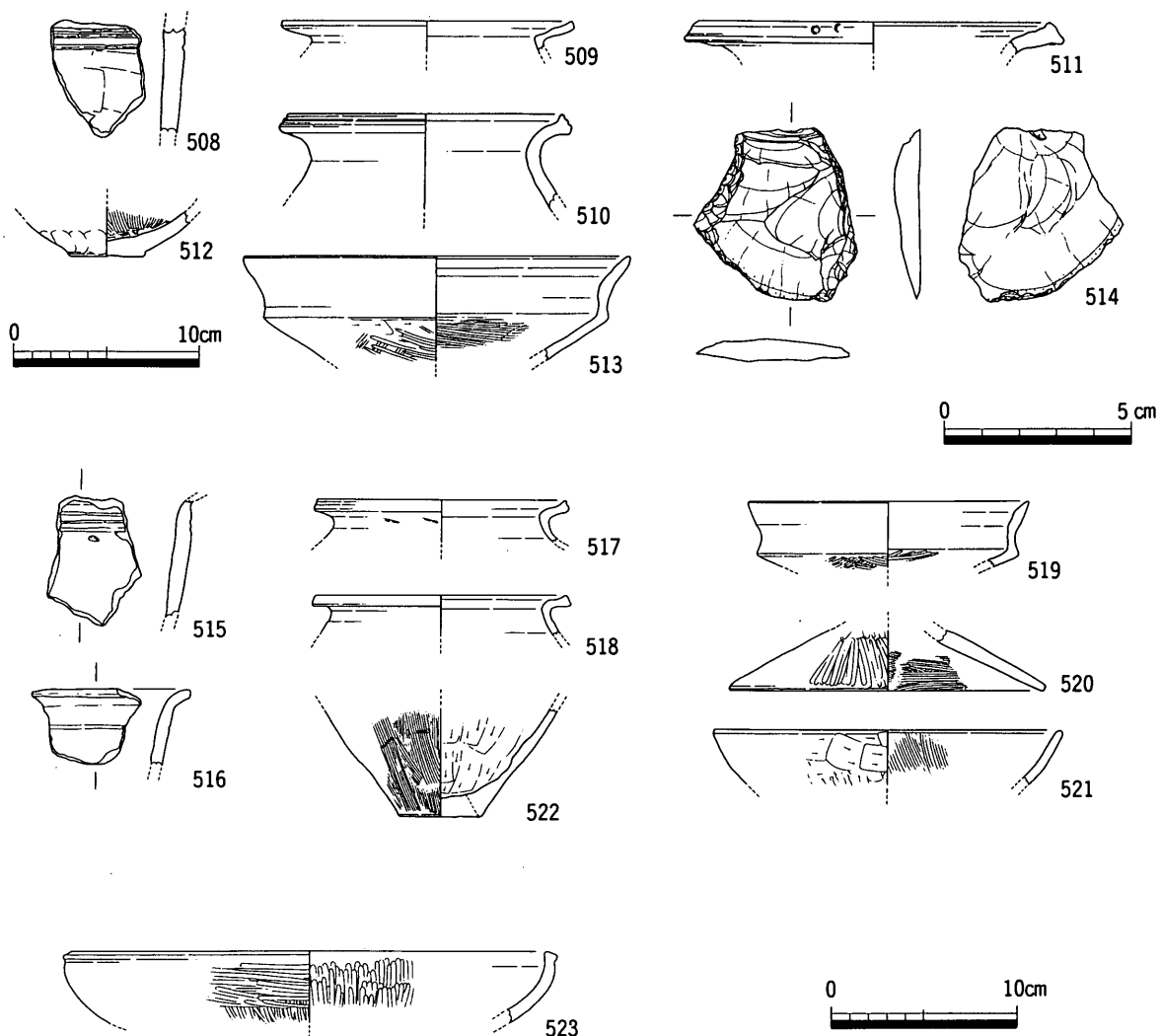
先述したようにⅢ-42区を中心とした低地部には、樹枝状に展開する多数の小流路痕跡が多数検出された。これらの小流路は、その形状から自然の湧水や雨水の流下により地表面が下刻され形成されたものであり、人為的に掘削されたものではないことは明らかである。その多くは幅0.2m、深さ0.1m前後であるが、いくつかの流路が合流して幅1m、深さ0.3mに達するものもある。断面形は皿状ないしは逆台形状を呈する。埋土は基本的には単層で、黒色系の粘土によって充填される。部分的に地山灰色粘土の小ブロック土が混在する流路もあるが、人為的に埋め戻されたものではない。またやや規模の大きな流路では、数層に細分されるものもあったが、これは一度埋没した流路がさらに別の流路からの流れが加わったため、再度掘り込まれて堆積したものと考えられる。各流路は蛇行や合流・分岐を繰り返し、低地部に向かって流下するが、流下方向から大きく3条の流路群に分けることが可能である。まず42区北西部に展開する流路群で、西側微高地より概ね東方に流下して、SDe138方向に伸びるものである（I群）。東端は中世の落ち込み SXe01に削平され明確ではない。前期溝 SDe77の項でも述べたように、調査時に SDe77と小溝群との切り合い関係はつかめなかったが、出土遺物の検討などから SDe77が埋没し



第41図 小溝群断面図 (1/40)

た後小溝群が流下した可能性が高い。それはSDe77の東西両岸に、同一流路と考えられる小溝が存在すること、つまり同一流路と考えられる小溝が、SDe77によって分断されていることから追認される。次に42区中央西部に展開する流路群で、西側微高地より東～北東方向に流下してI群の一部とともに、SDe115・84に合流する(II群)。さらに今一つは42区南側よりSDe115に沿って流下して、SDe115屈曲部東側でSDe115・122・146に合流するもの(III群)である。41区南半部で検出された東側微高地より西に流下する小流路も本群に含めうる。これら流路が本来的に単一時期に流下していたものか、長期間にわたる流路の重複であるのかは、溝内の堆積土のみからは判断することができなかった。ただし小流路の底面の形状は、必ずしも各流路が均一ではなく僅かながらも落差を伴い、また流下方向にむけて徐々に幅を拡げ、いくつかの流路で埋没後に再度流水があったことが確認されたことから、そう長期間ではないにしろ一定期間に亘って、各流路が機能していたことを示すものとする。

さてこうした小流路群はどのような条件下で形成されたのであろうか。おそらくこれら小流路群が形成された当時、周辺域は低湿地状態の裸地であったと想像される。そして、上述したように埋没までにそう長期間を要しないこと、流路埋土中から少量ではあるが遺物の出土を見ること、小流路群の流水を排水するためSDe115が再掘削された可能性のあること、出土遺物から西側微高地の集落の成立や東側



第42図 小溝群出土遺物実測図 (1/2・1/4)

微高地の粘土採掘坑群の形成がほぼ同時期と推定されることが指摘でき、周辺域の開発行為による環境の変化により、これら小流路群は人為的に形成されたものと考えられる。

次に各流路より出土した遺物の説明を加える。調査時において各流路は、方向や規模、深度などから同一流路を判断し、個別に遺構番号を付して遺物の取り上げを行った。出土した遺物の大半は、土器細片であり、図化したのは僅かに17点である。出土した遺物は、弥生前期・後期初頭・後期中葉から末頃の大きく3時期がみられるが、前2時期は他遺構からの混入と推定されるものであり、遺構の形成・埋没時期を示すのは後者と考えるため、個別遺構毎に分離せず以下一括して報告する。なお508～514がⅠ群、515～522がⅡ群、残る523がⅢ群出土のそれぞれ遺物である。

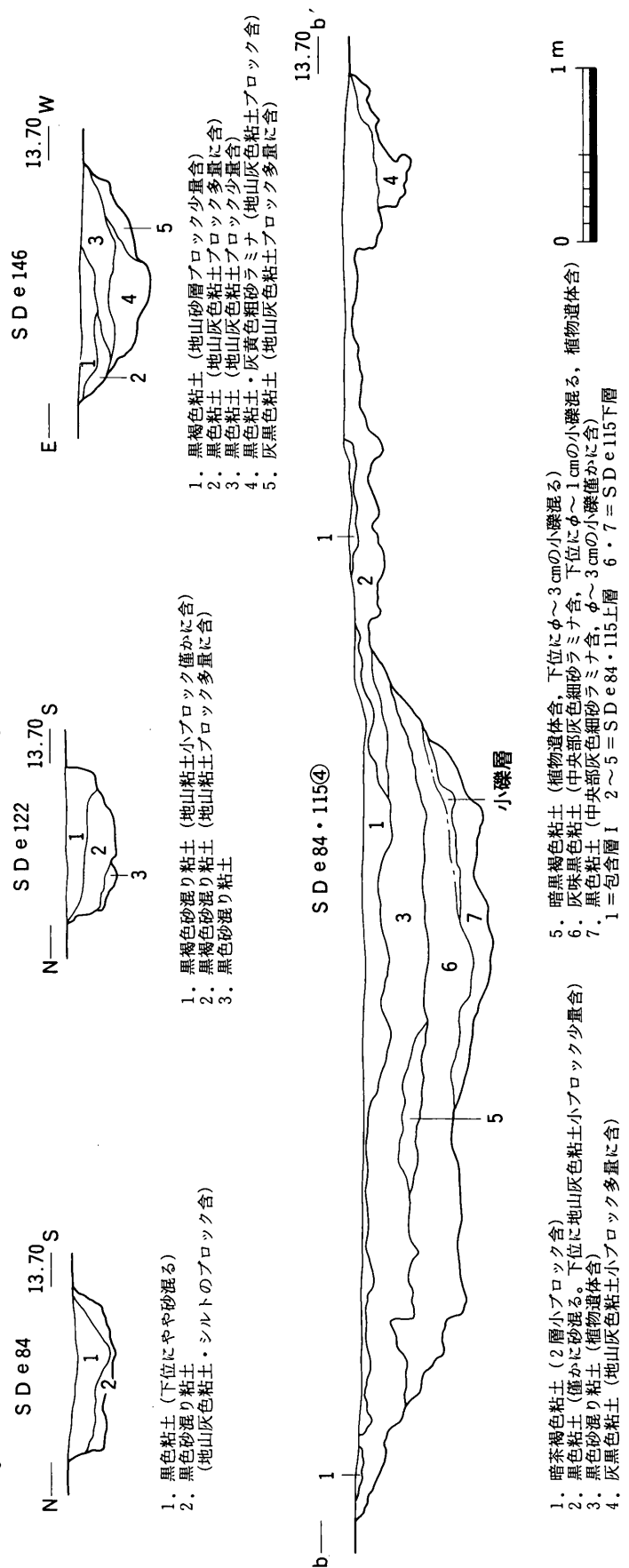
508は前期に遡る甕体部小片。外面上端にヘラ描きの沈線を3条以上認める。509は下川津B類甕。端部の摘み上げは萎縮し、頸部内面には鋭い稜線を有する。後期後半でも新しく位置付けられるか。510は短頸壺であるが、あまり例をみない形態である。口縁部は上方に摘み上げ、外面に2条の鈍い凹線を施す。端部形状から後期初頭に納まるだろう。511は後期初頭の直口壺の口縁部小片。口縁部端面に円形刺突文を施す通有の形態である。510とともに、胎土中に角閃石粒を多量に含む。512は鉢または小形の壺の底部片であろうか。突出した底部形態から、後期後半以降には下らない。513は下川津B類高坏。坏上半部は強く外反して開き、後期後半頃かやや後出する時期に求められよう。514はスクレイパーと

考える。刃部に僅かに調整剥離を加えるのみで、加工の度合いは低い。表面はやや風化が進み白味を増している。515・516も前期に遡る甕体部小片。515は外面上端に3条の沈線を施す。沈線の下位に豆粒状の刺突文をみるが、沈線はまだ多条化しておらず、むしろ工具の圧痕としたほうが理解しやすい。516は如意状口縁の小片で、口縁部直下に1条の沈線を認める。517・518は下川津B類甕。両者とも509より先行する形態である。519は下川津B類高坏。坏上半部が強く外反した小形の形態で、後期後半かやや後出する可能性がある。520は高坏脚裾部。緩やかに内湾して開くやや高めの形態で、519とほぼ同時期としてもよい。521は小形の鉢。口縁部外面に一部ケズリ調整を認める。浅皿状の形態から、後期末まで下る可能性は高い。522は甕底部。突出した平底形態で、中葉前後に位置付けられよう。523は高坏坏部。おそらく後期初頭の直立口縁形態の高坏であるが、屈曲部外面の稜線は不明瞭で、やや後出する形態と考えられよう。胎土中に角閃石粒を多量に含む。

SDe84・122・146(第43~46図・図版36・37)

SDe84はI・II群の小流路の末端部に、SDe122・146はIII群の流路末端部にそれぞれ位置する。基本的には小流路群の一部ではあるが、規模がそれらとは大きく異なることから、小流路群とは区別して報告する。特にSDe84は、SDe115と同程度の規模を有し、人為的に掘り込まれた可能性が高い。いずれも小流路群の流水を集めて、SDe115に注ぎ込む合流部に位置する。

SDe84は、SDe115の北側で検出され、ほぼ並走して東に約12m伸びSDe115に合流する。幅1.0~2.5m、深さ0.2~0.3mで、断面形は皿状ないしは逆台形状を呈する。埋土は西半部で2層に細分され、上位に黑色粘土が、下位に黑色砂混り粘土層が堆積する。下位層に



第43図 SDe84・115・122・146断面図 (1/40)

は、地山灰色粘土・シルトのブロック土の流れ込みが認められた。

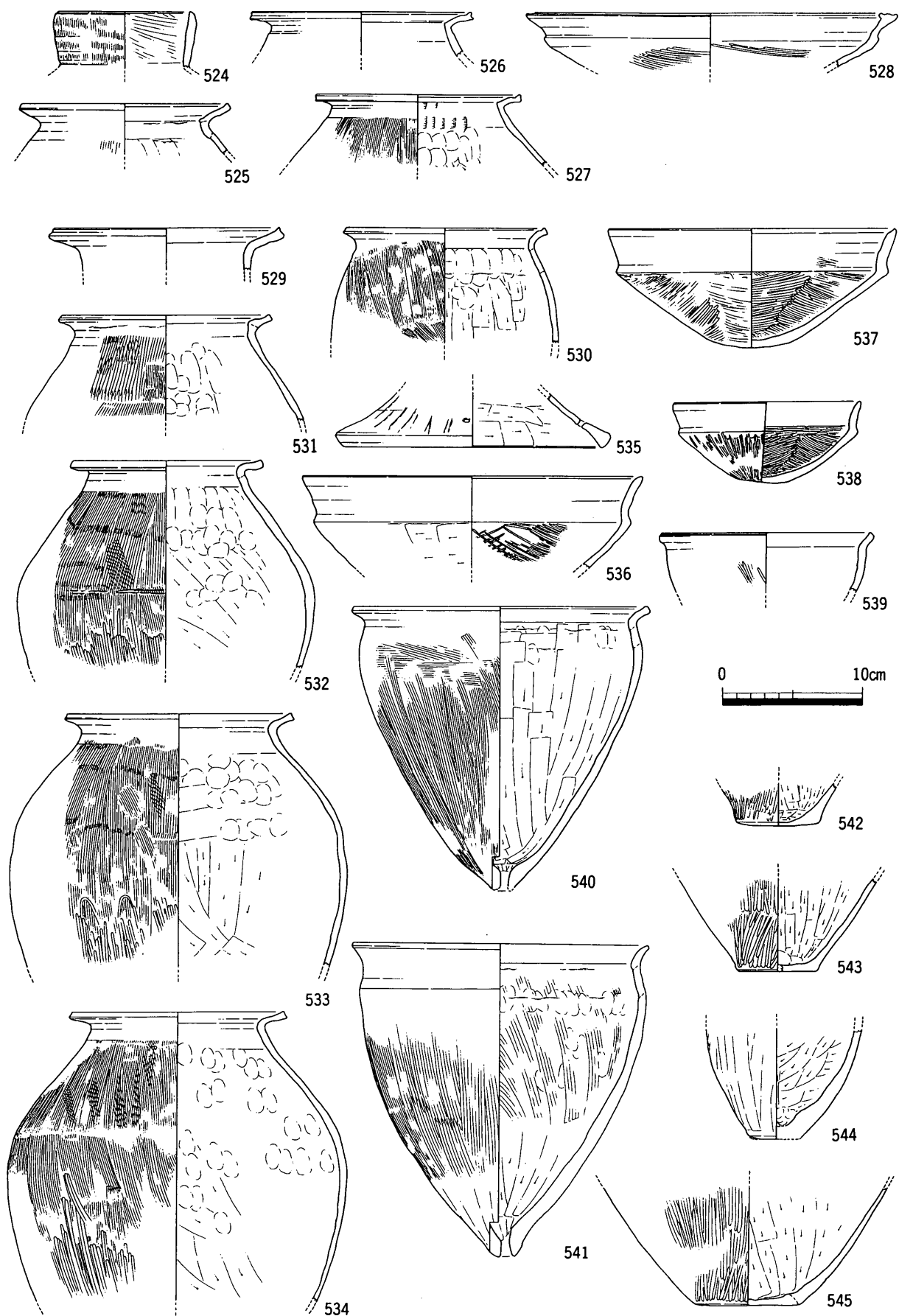
SDe122は、SDe115南側を緩やかに蛇行してSDe115に合流し、南端部で幅0.7m、深さ0.2m、合流部で幅2.3m、深さ0.25mと、合流部付近で急速に規模を拡大する。南端部付近で埋土は3層に細分され、いずれも黒色系粘土が堆積する。上位2層中には地山灰色粘土ブロックが含まれ、特に中位層中には多量に認められた。これらブロック土の混入は、小流路群にも少量ながら認められ、水流の流下により地山層が挟られて再堆積したものであろう。特にSDe115との合流部付近に位置する本溝等に比較的多く認められるのは、水流の流下速度が減少したためと推測される。

SDe146は43区を北流し、北端部は攪乱坑に大きく損壊を受けるが、流路方向からSDe115に合流することは確実である。また本溝は上面の削平により単独で検出され、合流する小流路群を従えないが、埋土や形状などから、上記2溝と同様の位置関係にあることが推測される。規模は南端部で幅1.0m、深さ0.4m、北端部で幅1.8m、深さ0.8mをそれぞれ測る。溝底面は水流による下刻のため小ピットや小流路状を呈して起伏に富み、溝東半部がやや深く掘り込まれる。断面形は概ね逆台形状を呈し、埋土は5層に細分されたが、中位のラミナ層により上下2層に大別された。上層は黒色系粘土層で、地山灰色粘土のブロック土を含む。下層は黒色粘土と灰黄色粗砂のラミナ層を鍵層として、その下位に堆積する黒色系粘土層を一括する。上層は上記2溝の埋土と概ね一致する。

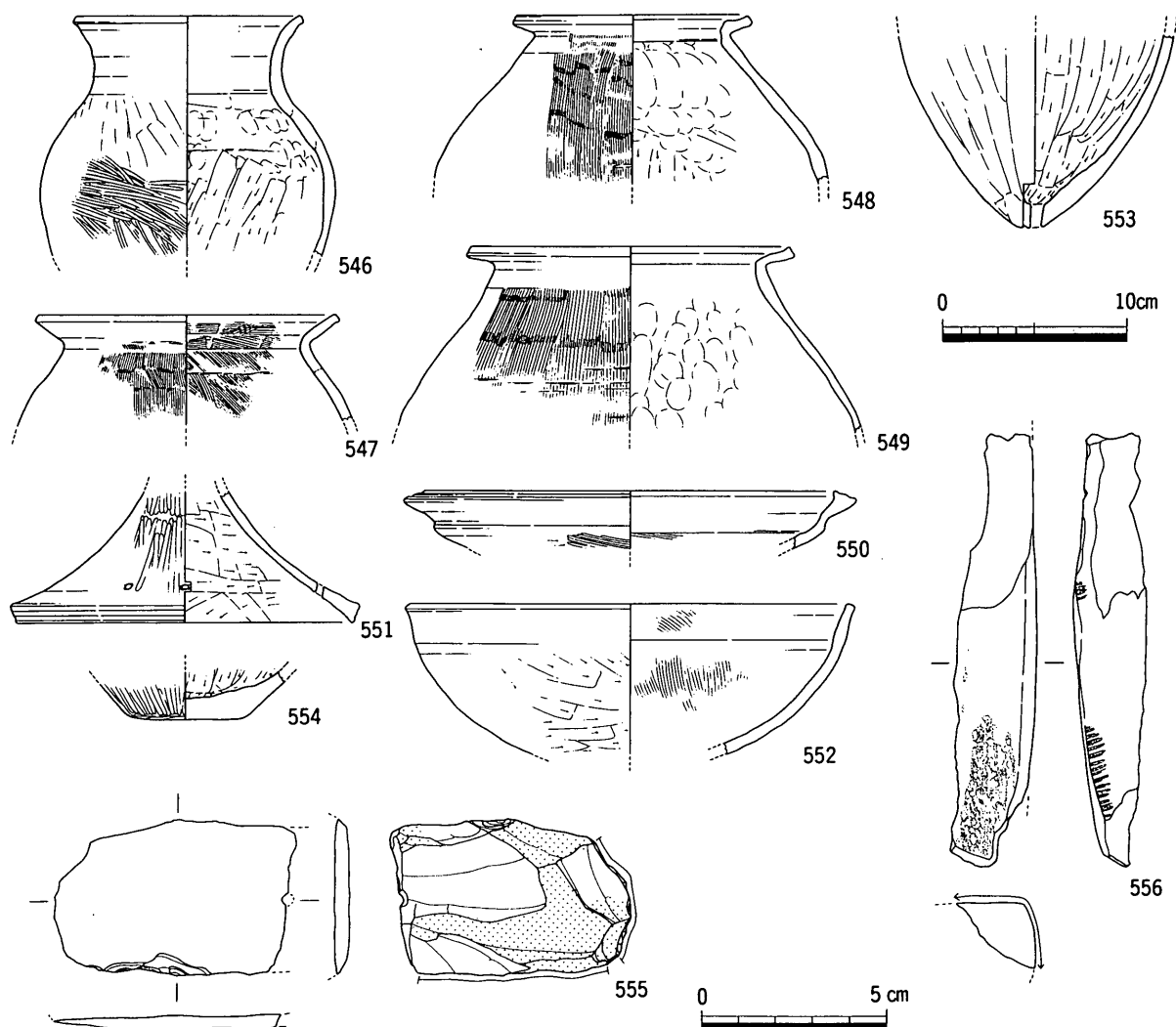
本溝群からは小溝群とは比較にならないほど多量の遺物が出土した。これらの遺物は器表面にローリングを受けたものが少なく、また完形に近く復元される個体もあり、流路群を伝って流れ込んだものが集積したのではなく、本遺構へ直接投棄されたものと考えられる。524～528がSDe84、529～545がSDe122、546～569がSDe146からそれぞれ出土した遺物である。

524は直口壺。直立しやや萎縮した口縁部形態から、後期末かそれ以降にまで下る可能性があり、他の遺物の時期とはやや異なる。525～527は下川津B類甕。いずれも頸部内面の稜線は鋭く、口縁端部を小さく摘み上げる。後期後半でも後出する時期に位置付けられよう。528は後期初頭の一般的な口縁部拡張形態の高坏。坏上半部は強く外傾し、初頭でもやや新しい傾向を備える。胎土中に角閃石粒を多量に含む。

529は下川津B類広口壺。端部を小さく摘み上げる。後期末まで下る。530は「く」字外反口縁の甕。端部は小さく摘み上げられ、体部の張りは弱い。後半でもやや古く位置付けられる。531～534は下川津B類甕。いずれも口縁端部は小さく摘み上げるか鈍く肥厚するのみで、頸部内面の稜線も鈍いものが多い。一般的傾向として、SDe84出土のB類甕より古く位置付けられよう。535はB類高坏脚裾部。脚端部は肥厚傾向が残存し、甕の時期と矛盾しない。536～539は鉢。536はB類高坏と同形態だが、坏部としてはやや深めの形態となることから鉢と判断した。536～538はB類土器。そのうち537・538は中・小形の鉢で、ほぼ完形品である。溝上面より兩個体が重なって、つまり537に538を入れた状態で出土した。形態や調整手法はともに、脚部を除去したB類高坏と酷似する。ただし538の体部外面は放射状ミガキ調整が施され、B類高坏の分割ミガキ調整とは異なる。口縁部の外反度は弱く、538の底部には僅かな平底傾向が認められることから、後期後半には納まるものと考えられる。539は外反口縁を有する鉢。口縁部は萎縮して短く開く。540・541は尖底形態の甑である。いずれも完形品に近く復元される。両者間には口縁部形態や内面調整に若干の差異が認められ、540がやや先行する可能性を考えたい。いずれも後期後半でもやや古い特徴を備える。542・543はB類甕底部。やや突出した平底形態である。544も甕底部と考えられる。底部の大半を欠損するが、残存部より平底形態であったことが知れる。545はB



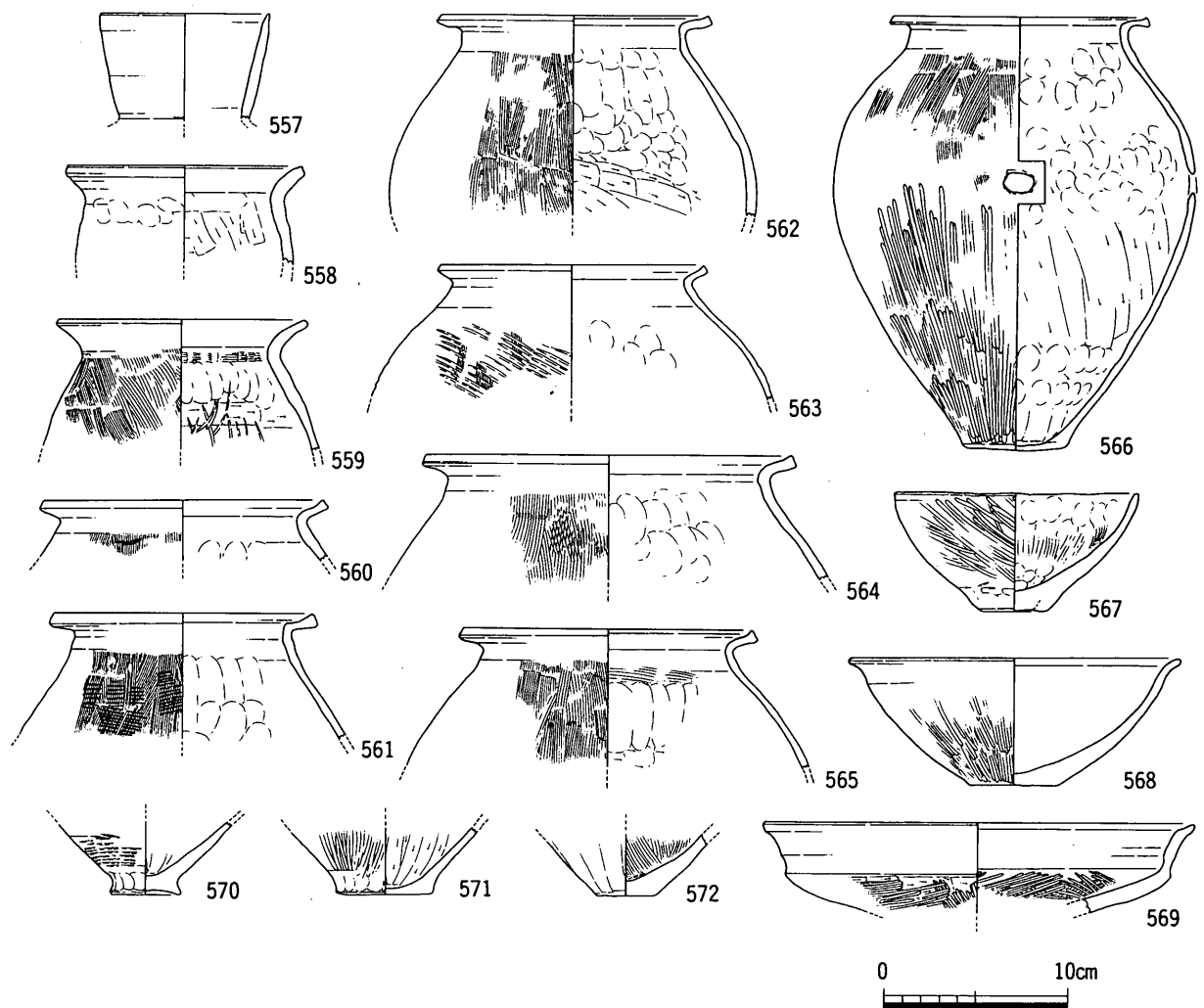
第44图 SDe84·122出土遺物実測図 (1/4)



第45図 SDe146出土遺物実測図1 (1/2・1/4)

類土器で、体部の開きから壺の底部となろう。

546～556は SDe146上層, 557～572は同下層出土の遺物である。546は中形の広口壺。体部下半外面は入念なミガキ調整が施される。547は「く」字外反口縁の甕。端部形状や内面調整は異なるが、全体的なプロポーシヨンはB類甕のそれに近似する。548・549は下川津B類甕。両者に大きな時期差をみることは困難で、後期後半でもやや新しく位置付けられる。550は後期初頭の拡張口縁形態の高坏。胎土中に角閃石粒を多量に含む。551は高坏脚部。脚端部の下方への引き出しはかなり退化しており、後期前半でも後出する形態であろう。胎土中に角閃石粒を多量に含む。552はボール状の大形鉢。体部外面はケズリ調整される。底部形状が不明ながら、後期末に下る。553は尖底形態の甌。底・体部形状より明らかに SDe122出土資料より後出する。554は壺底部であろう。B類土器の模倣形態と考えられ、体部のみならず外底面にまでミガキ調整を加える。555は磨製石庖丁。本調査区から出土した唯一の非サヌカイト製の石庖丁で、質の悪い安山岩を利用する。表面はほぼ旧状を呈さないまでに剥落して薄くなっており、縁辺部に若干の剥離痕跡を認めることから、再加工する過程で表面が剥落したものと考えられる。556も本調査区唯一の片岩製の磨製柱状片刃石斧。刃部を含め大半を欠損する。557は直口壺。体部形状は不明ながら、後期初頭まで遡る。胎土中に角閃石粒を多量に含む。558・559は「く」字口縁の中・小形の甕。558では口縁端部を小さく摘み上げる。いずれも後期中葉以降に位置付けられる。560～562・

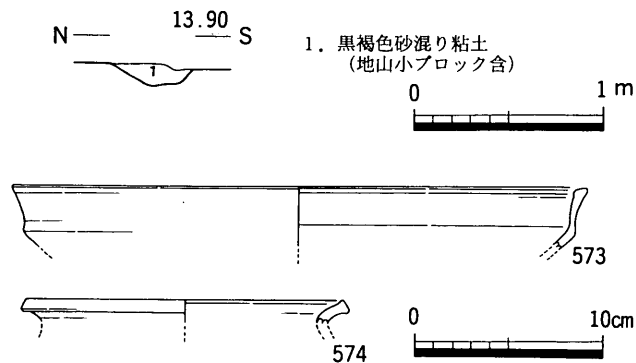


第46図 SDe146出土遺物実測図 2 (1/4)

564~566は下川津B類甕。いずれも大きな時期幅は想定されず、後期後半前後に位置付けられよう。566は北端部溝底の水流により抉られた窪みより出土した(図版37)。ほぼ完形に復元され、体部中央に長径1.5mm程の楕円形の焼成後の穿孔を認める。563は全体的なプロポーションや端部形態などはB類甕に近似するが、胎土中に角閃石粒を含まず、体部外面に明瞭にタタキ調整が残されるなど、B類甕にない特徴を備え模倣形態と考えられる。567は小形の鉢。安定した底部形状から後期後半に位置付けられよう。568は外反口縁を有する鉢である。567よりは後出するが、後期後半内に納まるだろう。569は下川津B類高坏。坏上半部は発達せず、外反度も弱い。570は鉢の底部としたが、底部形状から蓋の可能性もある。外面にはタタキメを認める。571はB類甕底部。566などと大きな時期差はない。

SDe143 (第47図)

Ⅲ-41区I69グリットで検出した東西流する小溝である。東端は調査区外に延長し、西端は民家門前の未調査部分にもぐり込み、その南側では検出されなかったため、僅かに延長5.8mを確認したにすぎない。また調査区東端近くで僅かにくび



第47図 SDe143断面図(1/40)・出土遺物実測図(1/4)



れ、北に分岐する可能性が考えられたが、攪乱溝により損壊を受け確認できなかった。溝は幅0.4m、深さ0.15m、流路方向N63.5° E、断面形は皿状もしくは逆台形状を呈する。埋土は黒褐色砂混り粘土の単層である。底面の標高は13.6~13.9mであり、底面の高低差からすれば東流していた可能性が高い。流路方向や規模、形状から先の小流路群とは異なる人為的に掘削された溝と考える。

遺物は僅かに小袋1袋程度の土器細片が出土したにすぎない。うち2点を図示した。573は下川津B類高坏。坏上半部の発達は弱く、端部が小さく外方へ引き出す。後期中葉頃に位置付けられよう。574はB類甕。口縁部の細片だが、端部は小さく上下に拡張し、573と同時期としても矛盾はない。

#### SDe137 (第48~56図・図版32・33・38~41・45~48・64~68・77・78・80)

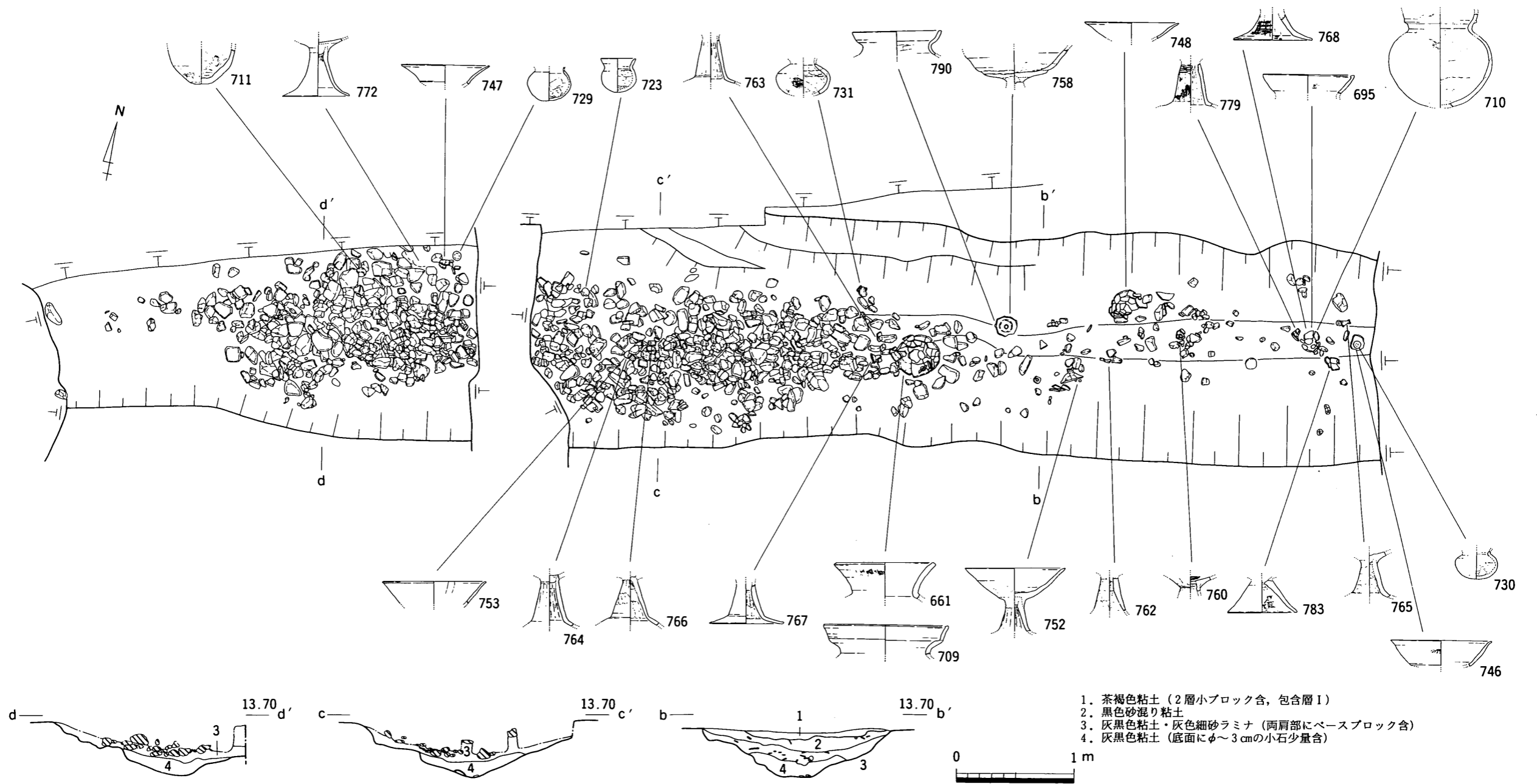
Ⅲ-41~43区北端部で検出した溝状遺構である。西半部は概ね調査区北壁に沿って直線状に東に延び、69ライン西側で緩く屈曲して北東方向に向きを変える。両端は調査区外に延長する。G67グリット西半部では上面をSXe01によって削平を被る。また41区では、SDe139が上面を覆っていたのと、当初弥生時代の包含層Ⅲ層と本溝埋土上層との識別が充分にできなかったため、検出状態は他の調査区と比して必ずしも良好なものとは言いがたい。良好な状態で検出できたG68グリット西半部分で、幅1.6~1.8m、深さ0.4~0.5mを測る。断面形は緩やかに掘り込まれた逆台形状を呈し、底面には0.1~0.3m程度の平坦面を有する。なお溝南肩の下層部分を中心に直に近く立ち上がる部位があることと、中層の両肩部分に壁面の崩落に起因すると考えられる地山層のブロック土の混入が認められることから、本来的には断面V字状ないしは箱状を呈していた可能性も考えられる。底面の標高は、13.05~13.15mを測り、底面の僅かな高低差から東流していた可能性が高い。埋土は3層に分層され、上位より黒色粘土、灰黒色粘土と灰色細砂のラミナー、灰黒色粘土の順にレンズ状に堆積する。溝の機能は開削後短期間で衰弱したためか、旺盛な水流を感じさせる埋土中への砂礫の混入は乏しく、底面を中心に長径3cm以下の小石が少量出土したのみで、穏やかな環境下で堆積しのであろう。また下層は、41区では認められず、底面より中層が堆積する。これは底さらえのような再掘削に伴う土層の除去と解するよりは、通水された水流の流下速度に大きく起因するものと考えられるが、その具体的な要因については明らかにすることができなかった。

G68グリット西半部分では、集石遺構を検出した。集石は、長径5~40cm程度の円礫・角礫が東西約6mにわたって散在し、集石の上面や隙間から壺・甕・高坏・鉢・小型丸底壺などの土器類のほか、炭粒・煤の付着した石や桃核などがコンテナ10箱以上出土した。土器類には、完形に復元可能なものも何点か出土しており、廃棄場所と出土位置が離れていないことを示している。石の種類には、砂岩・安山岩・花崗岩などがあり、このうち砂岩が圧倒的に多数を占める。また石の中には煤の付着するものを散見することから、居住域周辺で何らかの用途に使用していたものも混在していると思われる。石材の内容は、41区で認められた地山砂礫層中に含まれる石材とほぼ似通っており、特に遠方より持ち運ばれた可能性のある石は認められなかった。周辺域の何らかの開発行為により、地山面の掘削に伴って掘り出された石を処理したものと考えている。集石の検出位置は主に中層であり、下層への石の混入はほとんど認められず、集石上面のレベルもほぼ揃っていることから、溝の機能が概ね停止した下層埋没後、土器類とともに一括して投棄された可能性が考えられる。また集石上面の検出位置は南半部が高く北に傾斜し、北半部では石が疎らとなることから、溝の南側より投棄されたものと推測された。

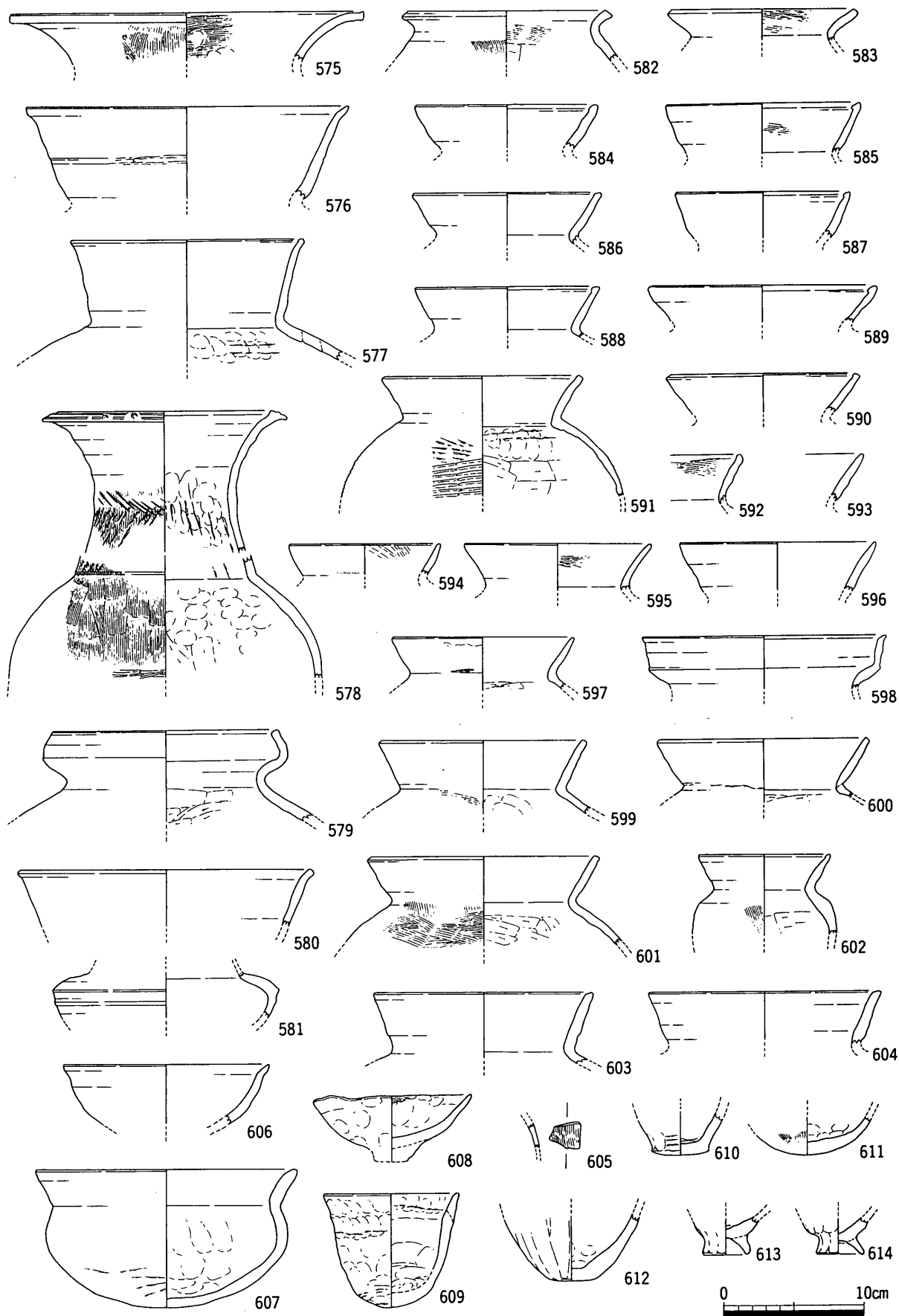
遺物は、上記したように上・中層を中心にコンテナ32箱程度が出土しており、下層からは土器片が少量出土したのみである。調査時に上層と中層の分離が充分ではなく、一部の遺物については中層出土の

ものが上層として取り上げてしまったものがある。以下報告する上層出土の遺物の中には、本来中層出土すべき遺物が若干量含まれる。また本溝からは、桃核が20点程度出土している。本地区の遺構中桃核の出土は群を抜いて多い。その他41区からは桜とみられる樹皮小片2点が出土している。

575～654・818～820・822～827は上層より出土した遺物である。597・605・818・823～827のみ41区からの出土。575・576は広口壺。575は外反して大きく開く口縁部を有し、端部は四角く納める。郡家原遺跡SD158に類似形態をみるが、本例がより外反度が強く後出するものとする。576は口縁部中位に稚拙な沈線を巡らす。布留式中葉以降に下る。577は直口壺。口縁部は僅かに外傾して開き、端部は鈍く内側に肥厚する。578は胎土中に角閃石粒を多量に含み、本地域の典型的な弥生後期初頭の直口壺形態である。頸部外面に2段の斜線文を施す。579・580は二重口縁壺。579の口縁上半部は内傾して短く、内面頸部付近にまでケズリを施す。下川津遺跡SHⅡ25の二重口縁壺の系譜を引く形態と考えるが、それより明らかに後出する。580は形態や調整手法から壺口縁としたが、他器種の可能性も残る。581は広口壺の体部と考える。中央屈曲部にヨコナデにより2条の突帯状の隆起を作る。後期中葉に遡る。582～604は甕。582は後期初頭の甕。口縁部の折り返しが緩やかで明瞭な頸部を認めず、端部の拡張は弱く下方へのみ鈍く肥厚させる。また体部内面のケズリは肩部まで達する。以上の特徴から吉備南部地域からの搬入品と推定される。583は「く」字口縁の甕。端部は摘み上げ気味に四角く納める。胎土中に金雲母粒を多量に含み、後期後半の範疇で理解される。584～590は、内湾して開く口縁部の端部を内側に肥厚させるいわゆる布留系甕である。このうち585・588・590は端部を内側に肥厚させるのみのやや古式のタイプ。584・587・589の端部は、内側に肥厚した後やや斜め上方に引き延ばす後出するタイプである。両者とも頸部内面は丸くナデつける。586の端部形状は前者に近いが、内側への突出度はそれらと比して著しく低い。591・592は外反気味に開く口縁部の端部を摘み上げ気味に四角く納めるタイプで、591では肩部内面に指押さえ痕を外面にはタタキメを明瞭に留める。593～597は端部を丸く納めるか鈍く尖る。口縁部は外反傾向を有するものと、内湾気味に開く形態の2者がある。597は頸部直下までケズリ調整が及ぶが、頸部内面の稜線は丸みを帯びる。598は二重口縁甕。端部の内側への肥厚はないものの、斜め上方に引き延ばす手法は584などに類似する。599～601は直線状ないしは内湾気味に開く口縁部の端部を四角く納めるタイプで、601では肩部外面に横ハケを施す。599は肩部内面に指押さえを認め、600・601では頸部直下までケズリ調整が及ぶ。602は小形の甕。口縁端部は内湾しつつ僅かながら内側に肥厚し、布留甕を指向する。603・604は直線状ないしはやや内湾気味に開く口縁端部を四角く納め、内傾する面を有する。605は甕もしくは壺の体部小片である。ハケ調整を施した外面に赤色顔料が付着する。606～609は鉢。606は外反する口縁部を有する小形の鉢で、口縁部は萎縮し短い。607は本地域で後期末以降散見されるタイプの中形鉢で、底部外面に煤が付着することから鍋状の用途が推定される。底部は丸底で口頸部の形状から、川津二代取遺跡SD07下層資料よりも後出するものとする。608は主に指押さえにより成形される粗製の器で、強く突出した小さな底部形状から蓋の可能性も残る。609も粗製の深鉢形の小形鉢。底部は外面をタタキ調整を加えて丸底に仕上げる。610～612は甕もしくは鉢の底部。610は突出した底部形状から、後期中葉に遡る。611は体部の開きが弱く小形の甕底部となるか。内底面には指圧痕が明瞭に残り、器壁も厚い。612も外面を板ナデ調整する底部片で、形態から後期後半頃に遡る。613・614は製塩土器脚部。いずれも胎土中に角閃石粒を多量に含み、外面調整は不明瞭ながら脚部形態から後期に遡る資料であろう。615～645は高坏。623は坏上半部中位で明瞭な屈曲部を有し外反する浅い形態で、後期まで期的に遡る。その他は布留式併行期に下るとみてよく、坏部形態、



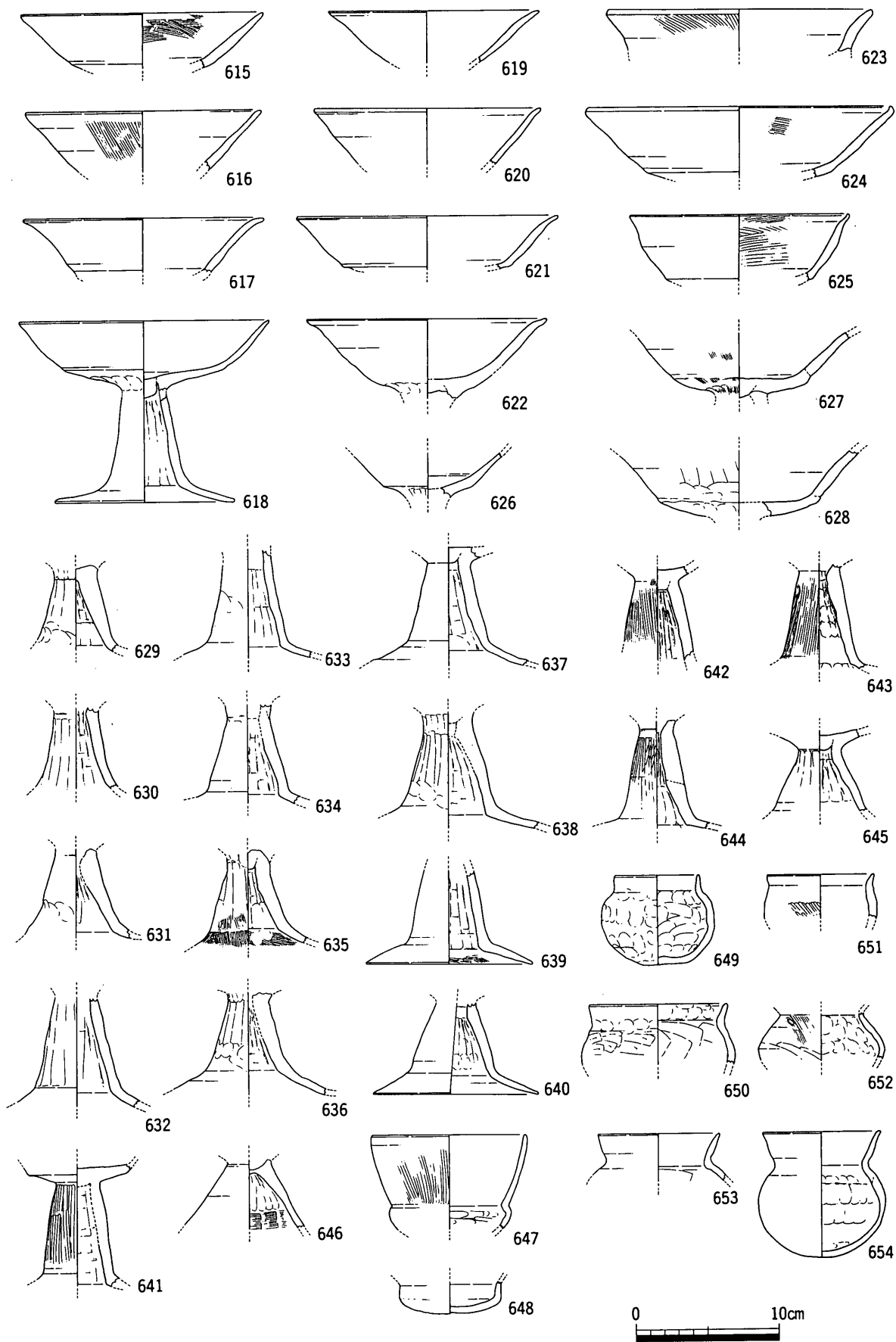
第48図 SDe137集石・遺物検出状況, 断面図 (1/40)



第49図 SDe137出土遺物実測図1 (1/4)

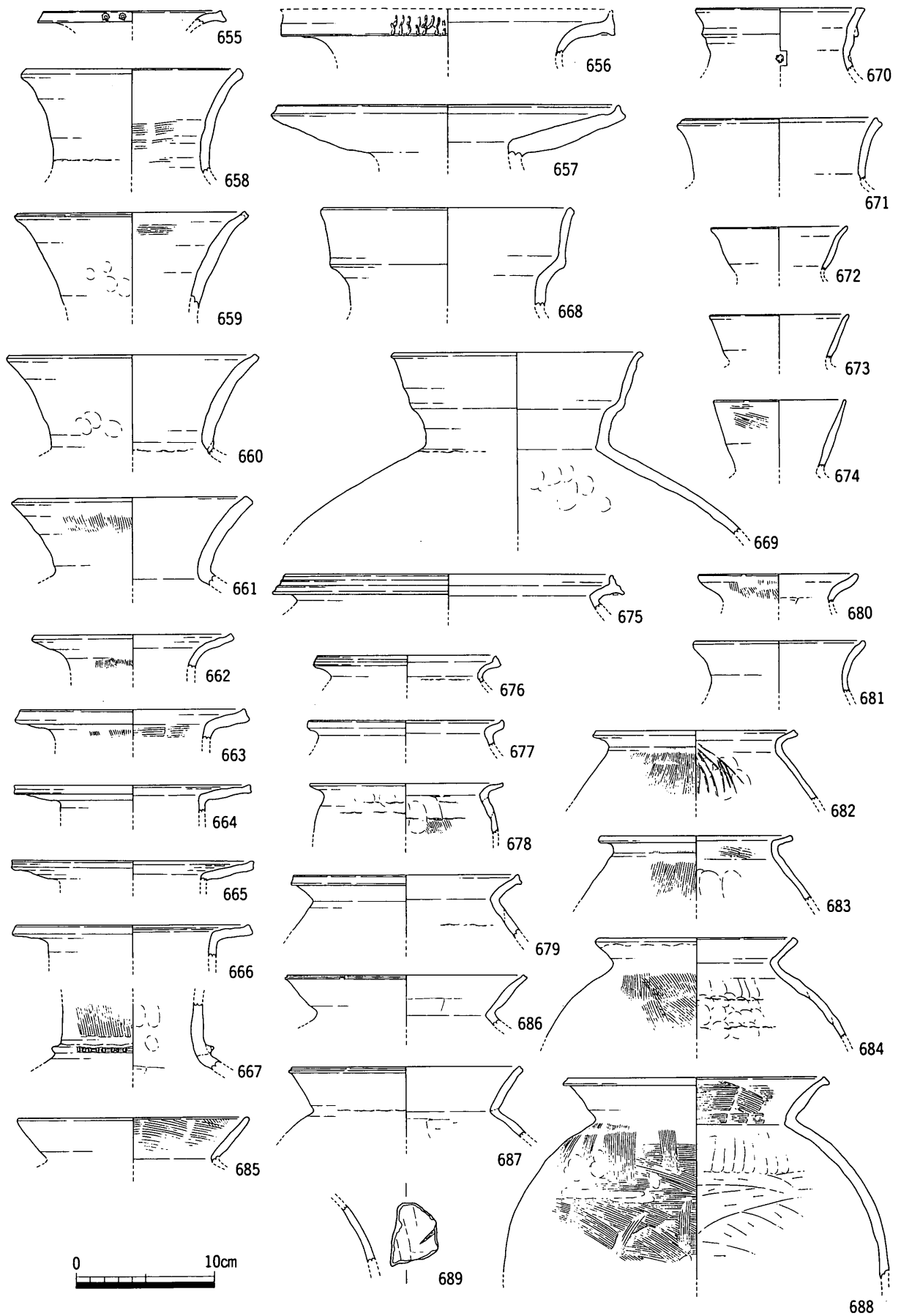
脚部形態共にバリエーションに富む。坏部では大きく、中位に屈曲部を有する形態と、明瞭な屈曲部がなく皿状の形態を呈するもの(619・620・622)の2者に分けられる。さらに前者は、坏上半部の形状から、緩やかに外反ないしは直線状に開く形態(615~617・621・624・627・628)と、内湾して開く形態(618・625)の2者に細分される。脚部との接合は大半は完成された脚部上端に粘土を貼り付けて坏部を成形し、後に小粘土塊を坏部内面より充填する手法を採っており、脚部内面には充填された粘土塊が乳頭状に突出する。629は脚部内面に充填された粘土塊をみず、いわゆる挿入付加法によって成形されたと考えられる。626は小形の高坏で、薄作りの精製品である。脚部も坏部形態に対応して若干のバリエーションを認める。脚柱部に細身の形態は少ない。脚裾部は強く屈曲して概ね直線状に開く。裾部が残存する資料では、開きは弱くまた裾部高も低い。脚柱部内面は横ケズリを基本とし、下位にケズリ調整の後ナデを施すものもある。640・643・645は内面にケズリ調整をみない点でやや異質である。外面は多角形状にメントリ調整された後、一部に縦ハケ調整を加える。ハケ調整をみるものはむしろ少ない。裾部は剥離等により調整不明なもの以外は、おおよそハケ調整を施す。646は大きく開く脚部形態から器台の脚部と考えられる。頂部は受け部との接合面が鈍く凹むのみで、残存部には穿孔は認められない。647~654は小形丸底土器。647・648は在地系譜の丸底土器である。648の体・底部は扁平で丸底化し、頸部のくびれも強く屈曲しない。川津二代取遺跡SD04下層出土資料より後出する形態と考える。豊中町延命遺跡SD21に類似形態をみる。647は内湾する口縁部の開きが弱く、やや先行し後期末に遡る。649・650は球形体部に直立か小さく外反する口縁部を付す形態。649は指押さえ・ナデ調整により成形される。650の肩部外面に施された横ケズリ調整は、大形器種にみるそれと異なり非常にシャープで、小刀など金属器の使用が考えられる。651はむしろ小形の鉢とした方がよい。後期末から布留式古相前後に類例をみる。652は中間西井坪遺跡谷3資料など、布留式新相併行に一般的な形態であろう。653・654は球形の体部にやや内湾気味に開く口縁部を付す。胎土は緻密で、器壁は薄く仕上げられた精製品である。下川津遺跡SH II 02に類似形態をみる。818は両側縁に潰し調整が認められることから小形の楔形石器とした。819・820・822~825はスクレイパー。819・820の刃部はいずれも片面調整である。827はヒノキの板材である。左右両端辺下半部を矩形に切り取り、上側辺にも浅い削り込みを認める。

655~783・821は中層出土の遺物である。655は広口壺である。口縁部は萎縮し、端部は上下に小さく摘み出すのみである。端面に2個1対の円形刺突文を施す。胎土中に角閃石粒を多量に含み、後期前半の時期が想定される。656も広口壺。口縁端部は主に上方に摘み上げ、端面に爪形圧痕を上下2段に施す。657は下川津B類広口壺。口縁端部は小さく摘み上げ、内面はやや深く凹線状に凹む。後期末前後に位置付けられる。658~661は緩やかに外反してラッパ状に開く口縁部を有する広口壺。内外面の調整は比較的丁寧なヨコナデ調整を基調とし、661のように外面に縦ハケ調整を施す例もまみられる。川津下樋遺跡SD24、川津二代取遺跡SD04下層、買田岡下遺跡SD37など布留式古相併行前後に類似形態を多くみる。口縁部の萎縮、端部形態や内外面調整の粗雑化などの点から、661がやや後出する形態と考える。662は長頸形態の広口壺。口縁端部は小さく摘み上げ気味に納め、内面に3条の鈍い凹線を巡らす。胎土中に角閃石粒を多量に含み、後期中葉前後に位置付けられよう。663~666は下川津B類土器で、短頸形態の広口壺。直立気味に立ち上がる頸部より強く折れて、口縁部は水平に開く。いずれも後期末以降に下る形態ではない。667も広口壺頸部で、頸基部に刻み目突帯を付す。668・669は二重口縁壺。668は立ち上がり部が直立した短い形態で、中間西井坪遺跡谷3・1群出土資料に類例をみる。ただし本例では、中間例ほど外面屈曲部や口縁端部を鋭く突出させない。669は立ち上がり部が外傾する



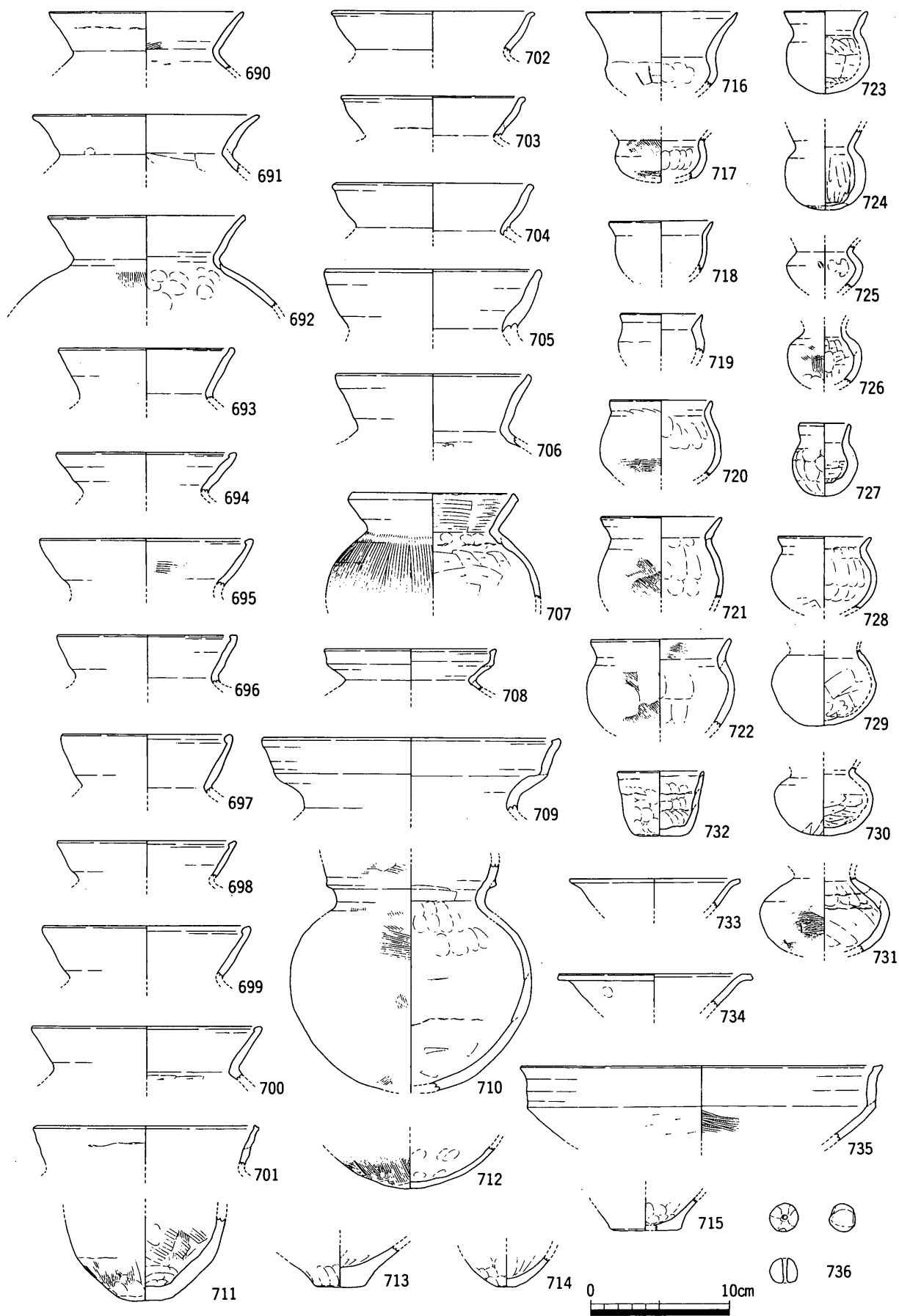
第50图 SDe137出土遺物実測図2 (1/4)

形態で、本例でも外面屈曲部の突出度は弱い。670は弥生中期前葉の壺で、口縁部外面に鈍い突帯を付す。突帯下位には円形刺突文を認める。壺口縁と考えたが、台付鉢脚部の可能性も残る。671～674は直口壺。671は緩やかに外反する口縁部形態を呈し、端面は鈍く凹む。弥生後期末以降には残存しない形態と考える。672・673は口縁部中位がやや内湾する形態。類例に乏しいが、中間西井坪遺跡谷3出土資料中に類似形態をみる。674は口縁部が直線的に開く形態。672以下いずれも小形器種である。675は後期初頭の大形甕口縁部。胎土中に角閃石粒を多量に含む。本地区出土の後期初頭の大形甕では、本例のように口縁部は端部に向けて肥厚せず、直線状に伸びる形態が多い。676も後期初頭の一般的な甕。胎土中に角閃石粒を多量に含む。677・682・683は下川津B類甕。677の口縁部は萎縮して短く、頸部内面に鋭さは認められないが、後期末まで下る可能性がある。682・683もそれに近い時期に位置付けられよう。なお684は、B類系統甕で、布留式古相前後に位置付けられる。678は「く」字外反口縁の甕。口縁部は大きく外反して開き、体部の張りは弱いやや新しい傾向を有するが、布留式併行期までは残存しない形態と考える。679も後期中葉までに位置付けられる甕。胎土中に多量の角閃石粒を含む。680は類例に乏しいが、後期後半頃に位置付けられよう。681も類例に乏しい。体部の張りは弱いことから、布留式併行期までは下らないと考える。685～710は布留式系統の甕。口縁部形状は、先の上層出土資料でみたのと同じくバリエーションに富む。上層出土資料と比して、欠落する形態を認めるが、それが直ちに時期差を示すものかどうかは不明である。688は口縁端部を大きく外方に摘み出す。高松市林・坊城遺跡SX03出土資料に類似形態をみ、布留系統の甕の中でも新しい様相と考えられる。689は甕肩部の小片。外面に刺突文を加えるが、内面にケズリ調整が施されることから、後期に遡る可能性が高い。708は小形の二重口縁甕。立ち上がり部は低く直立する。類例に乏しい形態であるが、吉備系の櫛描二重口縁甕の後出形態と考え、亀川上層式期よりは後出する可能性が指摘される。709は短いながらも頸部が直立し、むしろ二重口縁壺に近い形態を呈するが、口縁端部を内側に肥厚させる手法は、本期の壺形態には認められず甕と判断した。710も二重口縁甕。細片を繋ぎ合わせて復元したため、細部形状にやや不安な点も残る。口縁屈曲部外面には、断面三角形の小突帯を貼付し、屈曲部を強調する。体部は球形で、肩部内面には指圧痕が明瞭に認められる。711は粗製の小形鉢の底部であろうか。712は布留系甕の底部であろう。丸底の底部内面には、指圧痕が明瞭に残される。713は体部の張りが強い点から壺の底部と考える。714は小形の鉢であろうか。716は下川津B類甕の底部。上記底部片は、712・714を除いていずれも布留系統の器種ではない。716～731は小形丸底土器もしくはミニチュア土器。716・717は在地系譜の丸底土器。布留式古相併行期までは残存する。718・719はむしろ小形の鉢とした方がよいかも知れない。川津二代取遺跡SD04上層出土資料に類似形態をみる。720～722・723・724・728～731は布留系の小形丸底土器。形態・調整手法は個体差が激しい。時期差とみるよりは、当該期の資料が乏しい現状では同一時期のバリエーションと理解したい。725～727はミニチュア土器。726の内面は650同様非常に鋭利な工具で細かなケズリ調整を丹念に施す。732は小形の鉢。手づくねにより成形される。733・734は鉢と考えたが、底部形状が不明なため、他器種の可能性も残る。735は下川津B類土器で、大形鉢である。直立する口縁部の発達は弱く、後期中葉前後に位置付けられるか。736は土玉。一部欠損するがほぼ完形である。737～760は高坏。737・739は拡張口縁形態の高坏。坏上半部は強く外傾して中位の屈曲は鈍く、口縁端部は明確な拡張を失っており、後期初頭でもやや新しい様相を備えた形態である。本形態の脚部として、761が対応する。いずれも胎土中に角閃石粒を多量に含む。738は下川津B類高坏もしくはそれに先行する系譜の高坏坏部。外面に赤色顔料が塗布される。740・741は外反口縁形態の高坏。坏屈

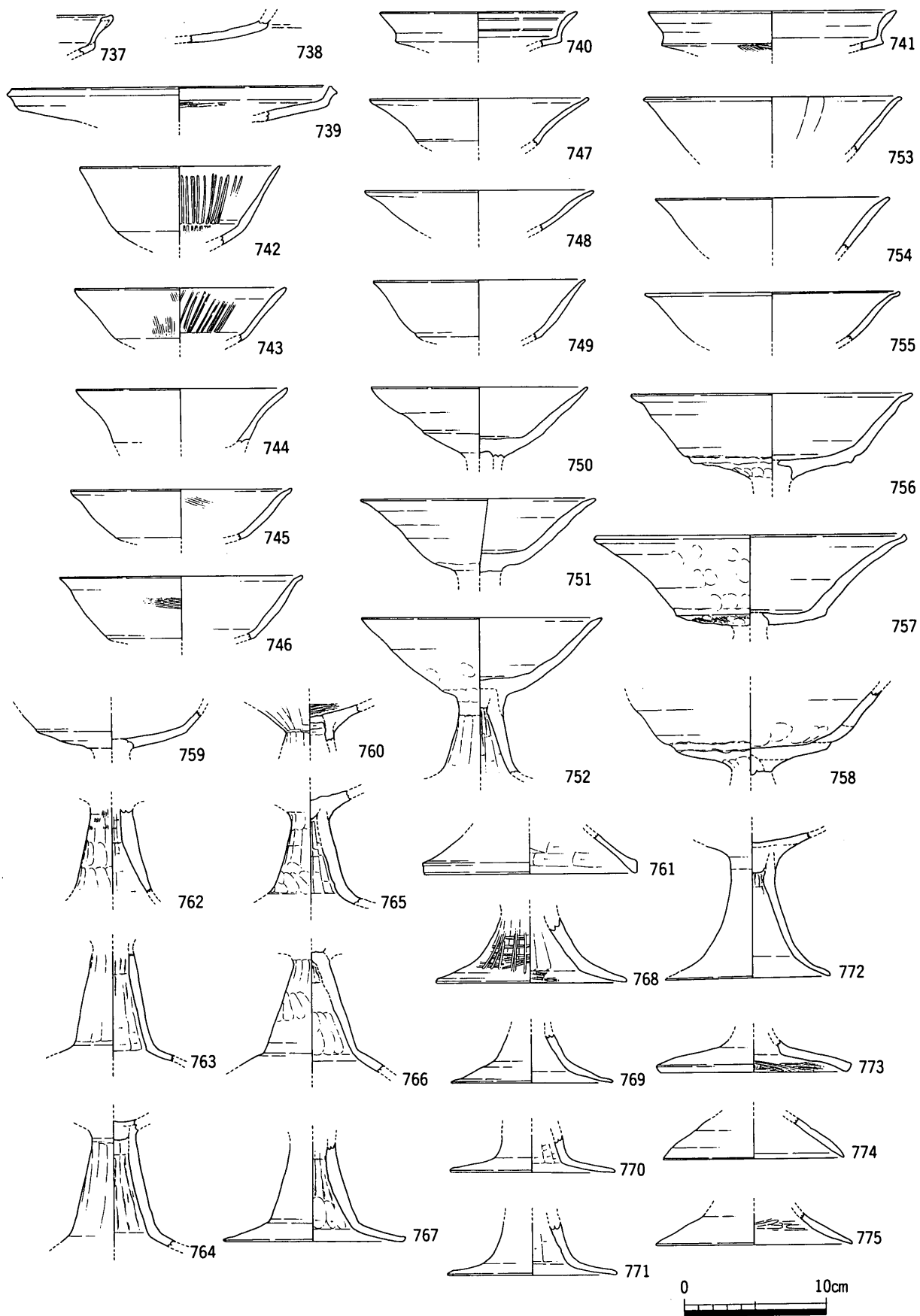


第51图 SDe137出土遺物実測図3 (1/4)





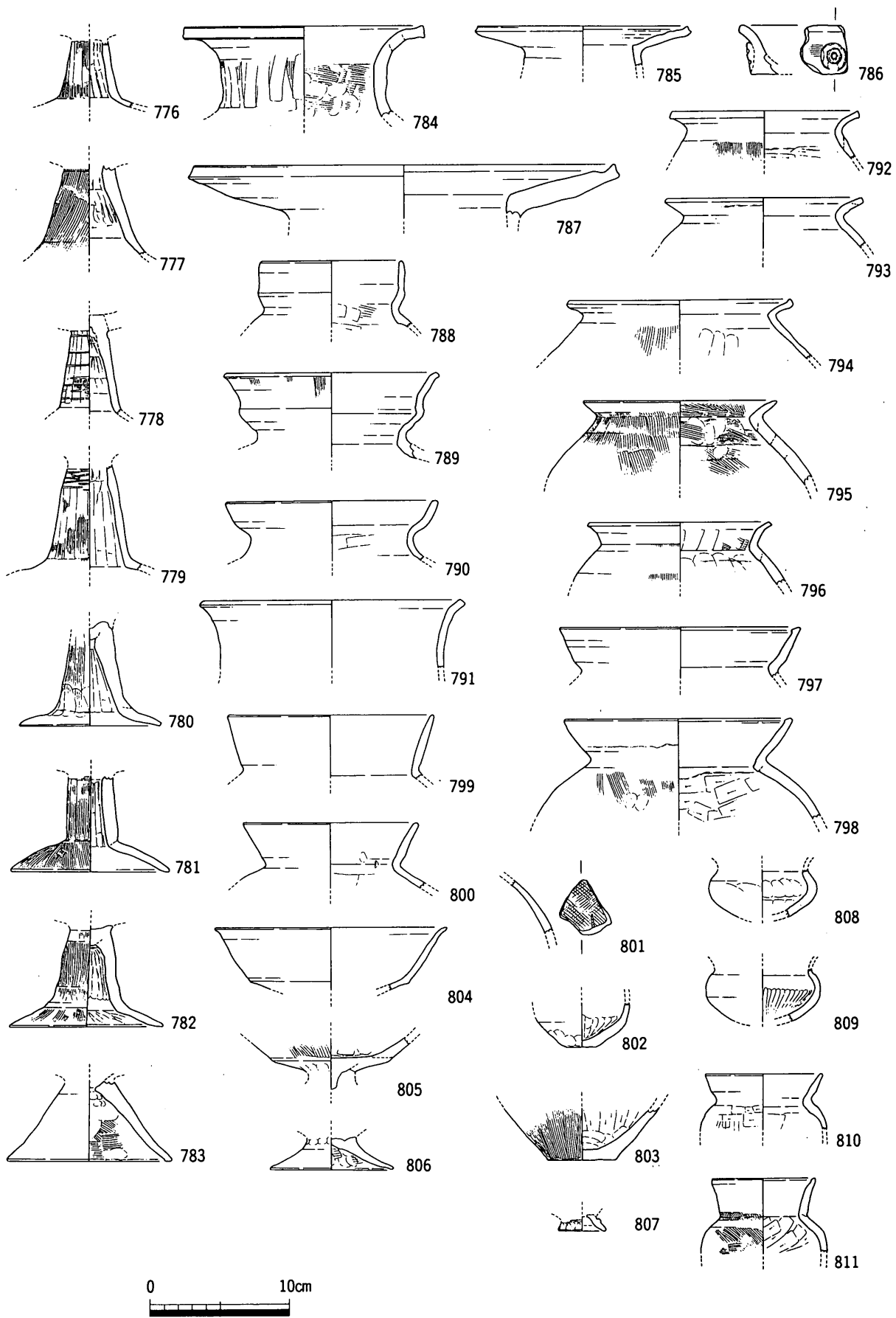
第52图 SDe137出土遺物実測図4 (1/4)



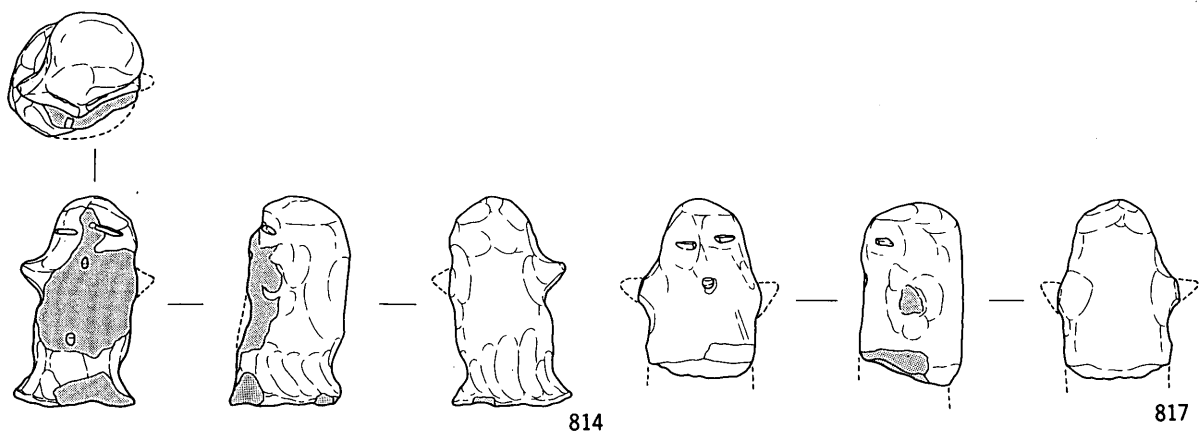
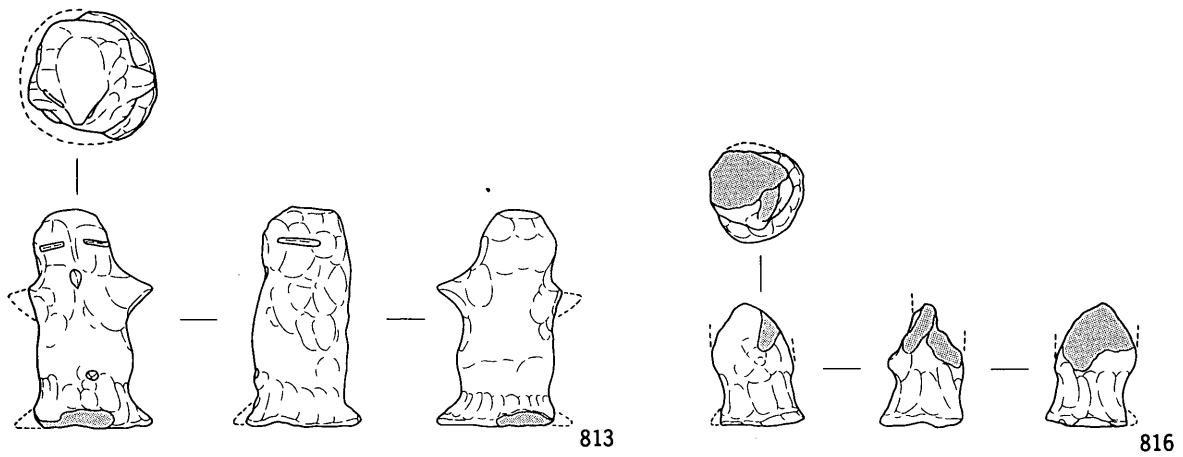
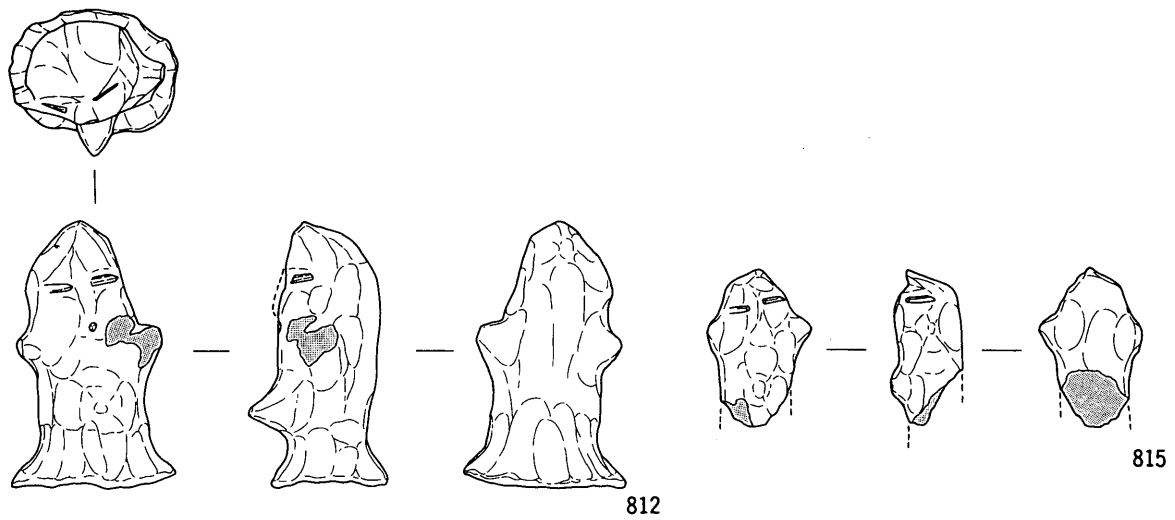
第53図 SDe137出土遺物実測図5 (1/4)

曲部は突出し、口縁端部は鈍く尖る。いずれも後期前葉頃に位置付けられよう。741では坏下半部外面に赤色顔料が塗布される。742～760は布留系統の高坏。762～772, 775～782は同脚部である。高坏も甕と同じく坏部形態にいくつかのバリエーションが認められる。742・743は坏上半部が直線状に開き、深めの坏部を有する形態。内面に放射状のミガキ調整を認める。川津二代取遺跡 SD04下層、買田岡下遺跡 SD37など布留式古相併行期に類似形態が見られる。明らかに他の布留系の一群とは異なり、古く位置付けられる。760も本期の高坏には珍しく坏部内面にミガキ調整をみるが、742とは異なりアットランダムに弧状のミガキを重複させており、坏部形状は不明瞭ながら、脚部内面のケズリ調整からみても、布留式中相以降に位置付けられると考える。脚部形態も、数点を除いて上層でみた当該期の様相と大きく矛盾するものではない。768は脚柱部外面にミガキ調整が施され、やや異質な存在である。778も同様に、軸部外面は丁寧なメントリ調整の後暗文状のミガキ調整を横位に並行して施し、内面頂部には軸芯痕を認める。また坏部との接合は、いわゆる挿入付加法を採っており、他の一群とは明瞭に異なる。定期的に布留式古相併行に遡り、内面にミガキ調整が多用される742の脚部に対応する可能性を指摘しておく。783は緩く内湾して開く脚部形態を呈し、小形器台脚部と考えられる。脚端部は接地面に小さな平坦面を有し、内側に僅かに突出する。脚頂部、受部との接合部中央には小円孔が穿たれる。821は短辺に挟りが見られることから本来石庖丁であったと考える。しかし折れ面には潰し調整が施されており、スクレイパーに転用されている。

784～811は下層出土の遺物。上記したようにすべて43区より出土した。784は広口壺。口縁部は萎縮し、明瞭な端部の拡張も認めがたい。後期前葉に位置付けられる。785は下川津B類広口壺で、いわゆる鶴尾タイプの壺である。口縁端部は小さく摘み上げ、内面に4条の鈍い凹線文を連続させる。薄くシャープに成形されており、後期末に下る。786は二重口縁壺。口縁部外面には円形浮文を貼付する。787も784と同形態の大形品である。端部形状など657に近似する。788～790は布留系統の壺。788は明確な頸部は消失し、口縁部の屈曲も鈍化した二重口縁壺。だれきった口縁部形態は、むしろ直口壺に近い形状を呈する。類例として志度町鴨部南谷遺跡 SH8801出土資料がある。789は二重口縁壺。直立する頸部はあまり明瞭ではない。口縁部は強く外反して大きく開く。790も二重口縁壺である。頸部は明瞭ではなく、また立ち上がり部も短い。あまり例を見ない形態である。791は口縁部の小片。器種は不明だが、長く延びた口縁部形態から壺の可能性を考えた。794は下川津B類甕。792・793はその模倣形態と考えられる。792は口縁端部を鈍く肥厚し、四角く納める。しかし頸部直下までケズリ調整が及ぶ点が、B類甕とは異なる。795は口縁部が短い粗製の甕。胎土中に多量の角閃石粒を含み、体部から頸部にかけての形状はB類甕のそれに近似するが、口縁部形態は大きく異なる。796は「く」字外反口縁の甕。797～800は布留系統の甕。口縁部は端部を内側に肥厚させるものと、丸く納める形態の2者がある。前者では、内側への肥厚の後外方へ引き伸ばされる。後者では口縁部は直線状に伸びる傾向が強い。801は甕体部小片。外面にはハケ調整の後ハケ原体による刺突文が施される。内面はハケ調整される。胎土中に角閃石粒を多量に含み、後期に遡る可能性が強い。802は底部。小さな平底から体部は強く開き、形状から小形壺と考えられる。803は甕底部。胎土中に角閃石粒を多量に含むB類甕の底部である。804・805は高坏。いずれも上層資料と大きな矛盾はなく、布留系統のものとして理解できる。805では脚柱頂部に充填された粘土塊が、大きく下方に突起する。806は低脚坏の脚部。脚部内面は横ハケ調整が施される。本遺構からは本器種は、明確なものは本例1点のみしか出土していない。807は製塩土器脚部。外面には僅かにタタキメを認める。808～811は小形丸底土器。811を除いて扁平球状の体部から口縁部



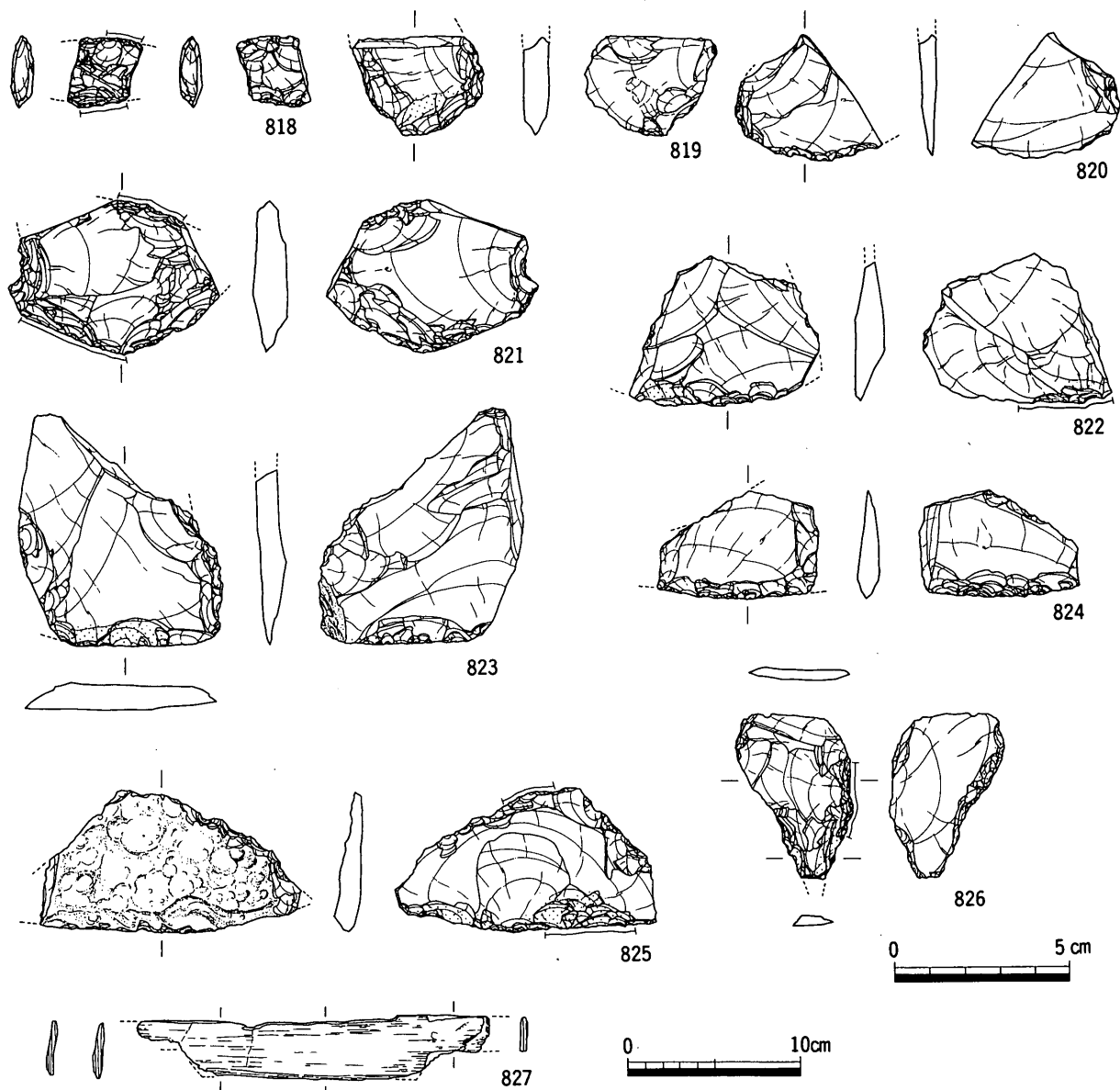
第54図 SDe137出土遺物実測図6 (1/4)



■ = 欠損部



第55図 SDe137出土遺物実測図7 (1/2)



第56図 SDe137出土遺物実測図8 (1/2・1/4)

は短く開く。中間西井坪遺跡S X01等に類似形態を見る。810は肩部外面に鋭いケズリ調整が顕著である。811は口縁部がやや長く伸びた形態で、端部は僅かに内方へ肥厚する。体部内面は頸部付近までケズリ調整される。

本溝より出土した遺物には、上記したもの他に人形土製品がある。人形土製品は計6体が出土しており、うち4体は本溝掘削中に径30cm程の小範囲から集中して出土したものだが、残り2体は本溝周辺の遺構検出段階で出土したもので、その正確な帰属遺構・層位は不詳である。しかしながら、6体の土製品は胎土・技法・形態・意匠が共通することから、同一作者の手になることが推測され、また周辺に本溝と同一時期の遺構は認められないことから、6体がすべて本溝より出土したとして大過ないものとする。従ってここで一括して報告する。

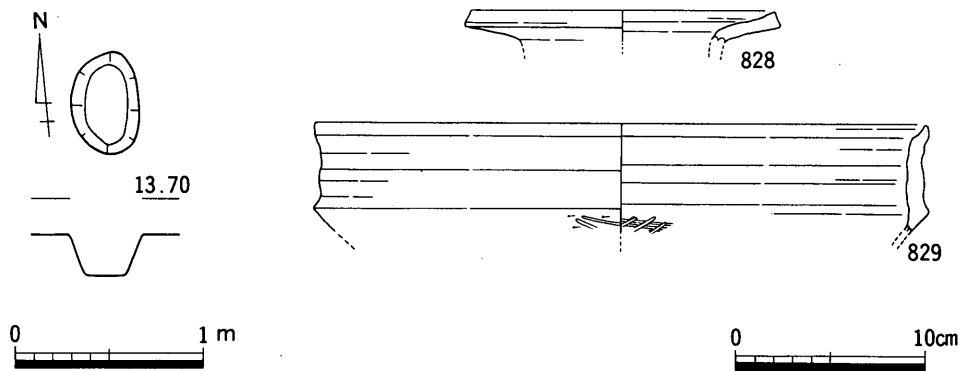
出土位置はG68グリットの緩く折れ曲がった屈曲部周辺で、先の集石遺構より東へ約10m離れている。溝底面より3～4cm浮いた中層より、横位の状態で4体が出土した。溝底面に接してはいないものの、ほぼ近接して出土したことや、外表面に顕著なローリングの痕跡が認められないことなどから、本来の

廃棄位置から大きくは移動していないものと考えられる。6体の人形土製品は、欠損しているものを含めてすべて胎土・形態・技法などを共通する。胎土は比較的緻密な粘土を用いて作られ、粒径2mm以下の白濁色の石英粒を少量含み、また無色透明でバブルウォールタイプの火山ガラスを直径5mmの範囲内に1～2粒程度含んでいる。色調や含有鉱物は、本溝出土土器に共通するものが見られ、そう特徴的なものでなく、本人形が本遺跡周辺の粘土を用いて作られた蓋然性は高い。また3体の土製品は体中央付近で破損して出土したが、他の3体はほぼ完存しており、さらに殴打痕も認められず、意図的に壊したのではないだろう。さてその製作にあたっては、まず片手で握れる程度の粘土塊を棒状に丸めて、そこから鼻・両腕・男性器を指先で捻り出して表現する。目・口・女性器は棒状またはヘラ状の工具で刺突して表現する。女性器は小穴を1穴穿つのみであり、当初これを女性器とするかへそ穴と考えるが判断に迷ったが、男性像にへそ穴の表現がないことから女性器と理解した。耳及び脚は整形されず、下端は粘土塊を平坦面の上に置いて、スカート状に裾を広げるように指頭で粘土を捻り出し、自立するように整形する。体表面にはヘラ描きや彩色による衣服・入墨などの表現は認められず、性器の表現からも裸像を意図していると考えられる。また813・814・817の3体は頭部が丸く仕上げられているのに対して、812・815の2体の頭部は額上方の粘土を摘み上げ瘤状の隆起を作る。特に815については、一見すると鬚のような印象を受ける。性器の表現から前者が女性、後者が男性と考えられ、性差による髪型の相違を表現したものとも考えられる。さらに両腕の角度は、812・813・815が左腕を右腕より高く上げるのに対して、814のみ逆に右腕を高く上げており、それに伴って顔の向きも両者で異なり、上げた腕の方向を向く。817については両腕を欠損しているが、剥離痕から復元すれば左腕が上がるようである。腕の角度と顔の向きは性差に関係なく統一されていることから、並べ置いた時のその位置関係の相違に起因するものとも受け取れる。各土製品の大きさは観察表に示したとおりだが、全形の知られない816については、完形に復元しても812等の大きさとは顕著な隔たりがあり、大きさについては2群に分けられる。仮に前者を成人像と解すれば、後者は小児を表現した可能性が高い。したがって6体の土製品は、成人男性1体、成人女性3体、小児男性2体の組合せとなる。さらに成人像でも男女の相違によって大きさに微妙な違いがあり、相対的に男性像が大きく作られる。男女像とも臀部の表現を欠くにもかかわらず、誇張した性器は必ず表現し、性差によって頭部の形状や大きさに相違が認められることから、性別を表現することに意味があり、また偶像製作の目的・用途を明らかにする上で鍵となるものと考えられる。

## ②. 土坑

### SKe 53 (第57図)

Ⅲ-43区I68グリットで検出した土坑である。上面に包含層I層が堆積し、遺構の残存形態からもかなりの削平を被っていることが想像される。周辺に類似した埋土を有する小



第57図 SKe53平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)

穴数基を検出したが、出土遺物はなく、本土坑との関係は不明である。土坑は、長軸0.55m、短軸0.3mの平面長円形状を呈する。深さは0.2mしかなく、断面形は浅い皿状を呈する。底面は概ね平坦である。

遺物は小袋1袋程度と少なく、うち2点を図化した。828は広口壺口縁部。口縁端部は鈍く肥厚するのみで、明瞭な摘み上げは認めがたい。829は下川津B類大形鉢。口縁部は直立し、内外面は鈍く凹線状に凹む。いずれも胎土中に角閃石粒を多量に含み、後期中葉前後に位置付けられよう。

なお本土坑は、平・断面形が比較的整った形状を呈し、埋土中に地山層のブロック土が混在せず、遺物もやや多く出土している点で、後述するSKe54～59とは異なり、またその性格も自ずと異なるものと判断される。

#### SKe54 (第58図)

Ⅲ-41区K69グリットで検出した土坑である。上面を攪乱坑により削平される。長軸0.4m、短軸0.28mの平面長円形を呈する。深さは0.12mしかなく、断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は13.80mである。埋土は黒褐色粘土の単層で、底面付近に地山層の小ブロック土を混じる。

遺物は、土器細片が数点出土したのみである。

さて本土坑は、上面の削平により基底部を僅かに残すのみだが、底面は起伏に富み断面形状は一定せず、粘土層の地山を掘り込んで構築される。本土坑周辺の地山層は、粘土層の下位にシルト～砂礫層が堆積するが、土坑底面はそこまでは達せず、粘土層内で底となる。こうした特徴は後述するSKe55～59と共通し、これらの土坑の平面的な分布も粘土層の分布範囲に限られる。平面形は各土坑によって一定しないが、断面形状や掘削深度、分布範囲の共通性は、以前検討を行ったⅢ-33区などを中心に分布する粘土採掘土坑群のそれと一致し(蔵本1993)、本地区で検出した土坑群がその西限となるものと考えられる。なお本地区の土坑群は、中心部のそれと比較して上面を顕著に削平されているとはいえ小規模なものが多く、また密度も希薄である。このことは採土行為が中心部より始められ、順次縁辺部に移ってきたことを示唆すると共に、次第に衰退する方向にあったことを窺わせるものである。本土坑の時期を特定することは困難だが、上記したような経過を辿ったと仮定するなら、後期後半から末頃と想定される。

#### SKe55 (第58図)

Ⅲ-41区K69グリットで検出した土坑である。西半部を攪乱坑により損なわれる。包含層I層下面、地山層上面より掘り込まれる。長軸0.65m以上、短軸0.52mの平面形はいびつな隅丸方形形状を呈する。深さは0.08mしかなく、断面形は浅い皿状を呈し、底面は細かな起伏が顕著である。底面の標高は13.89mとなる。埋土は黒褐色粘土の単層で、地山層のブロック土を多量に含む。

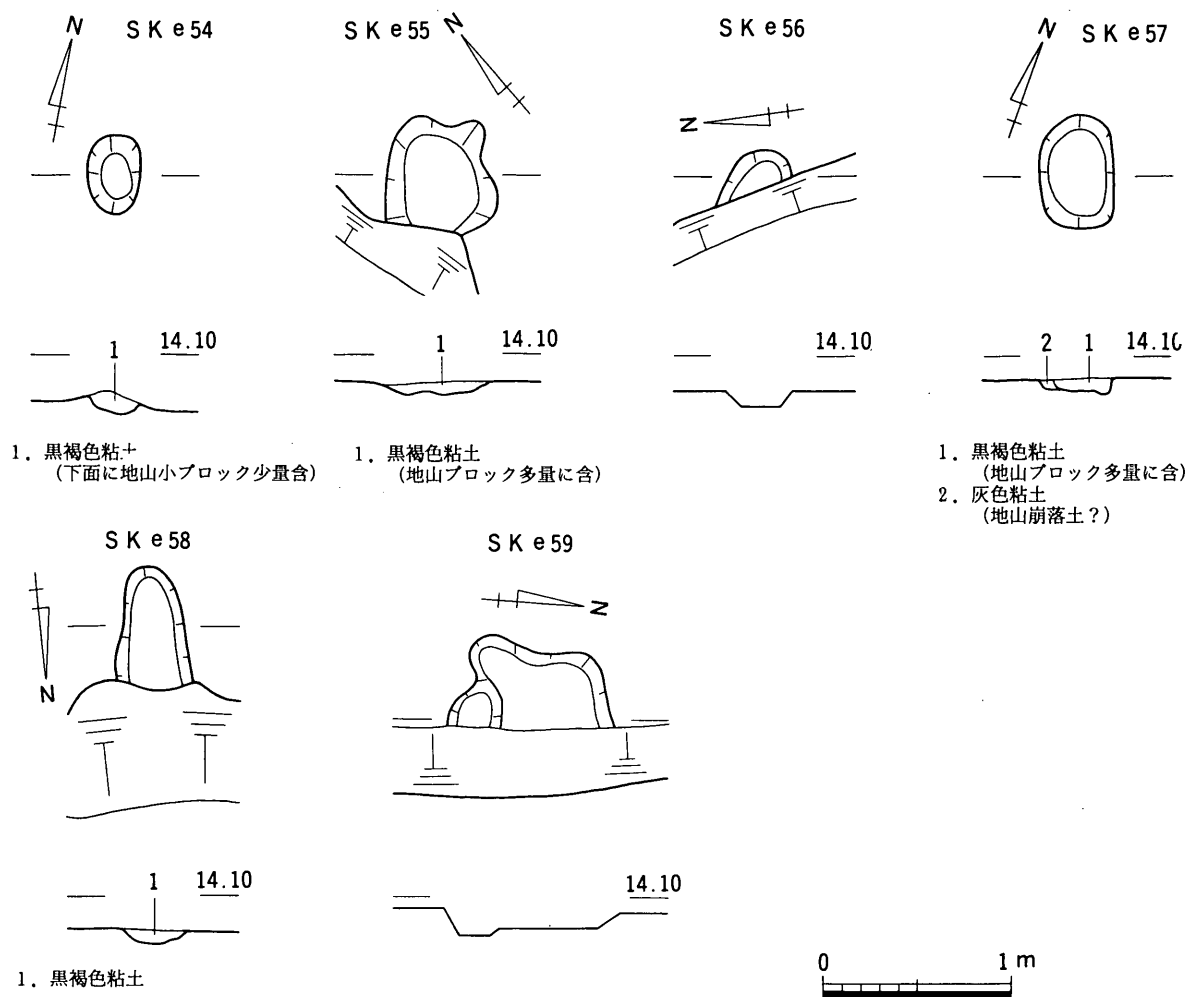
遺物は、土器細片数点が出土したのみである。上記した理由から、本土坑も粘土採掘坑と考えられ、SKe54と近似した時期が想定される。

#### SKe56 (第58図)

Ⅲ-41区K69グリットで検出した土坑である。西半部の大半を攪乱坑により損なわれる。包含層I層下面、地山層上面で検出した。長軸0.3m以上、短軸0.52mを測り、平面形は残存部より楕円形状を呈すると思われる。深さは0.08mしかなく、断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は13.84mとなる。埋土は黒褐色粘土の単層である。

遺物は、土器細片が少量出土したのみである。器形が判明するものはないが、外面にハケ調整をとど





第58図 SK e54~59平・断面図 (1/40)

める土器片が含まれ、甕もしくは壺の体部片と考えられる。本土坑も上記したような特徴から、SK e54と同様な性格をもつものである。

SK e57 (第58図)

Ⅲ-41区K69グリットで検出した土坑である。西半部を攪乱坑により損なわれる。包含層I層下面、地山層上面より掘り込まれる。長径0.58m、短軸0.38mの平面形はいびつな隅丸長方形を呈する。深さは0.08mしかなく、断面形は浅い皿状を呈し、底面は細かな起伏が認められる。底面の標高は13.90mとなる。埋土は、上位より黒褐色粘土と灰色粘土の2層に細分された。上位層中には地山層のブロック土を多量に含み、下位層は土坑西壁際のみ堆積し、地山層に近似することから、地山層の流入土もしくは土坑壁面の崩落土と考えられる。

遺物は出土していないが、上記した特徴より推して、本土坑もSK e54と同様な性格を持つものと考えられる。

SK e58 (第58図)

Ⅲ-41区K69グリットで検出した土坑である。包含層I層下面、地山層上面より掘り込まれる。長軸0.65m以上、短軸0.3mの平面形はいびつな長円形状を呈する。深さは0.06mしかなく、断面形は浅い

皿状を呈する。底面の標高は13.84mとなる。埋土は、黒褐色粘土の単層である。

遺物は出土していないが、上記した特徴より推して、本土坑も SKe54と同様な性格を持つものと考えられる。

**SKe59 (第58図)**

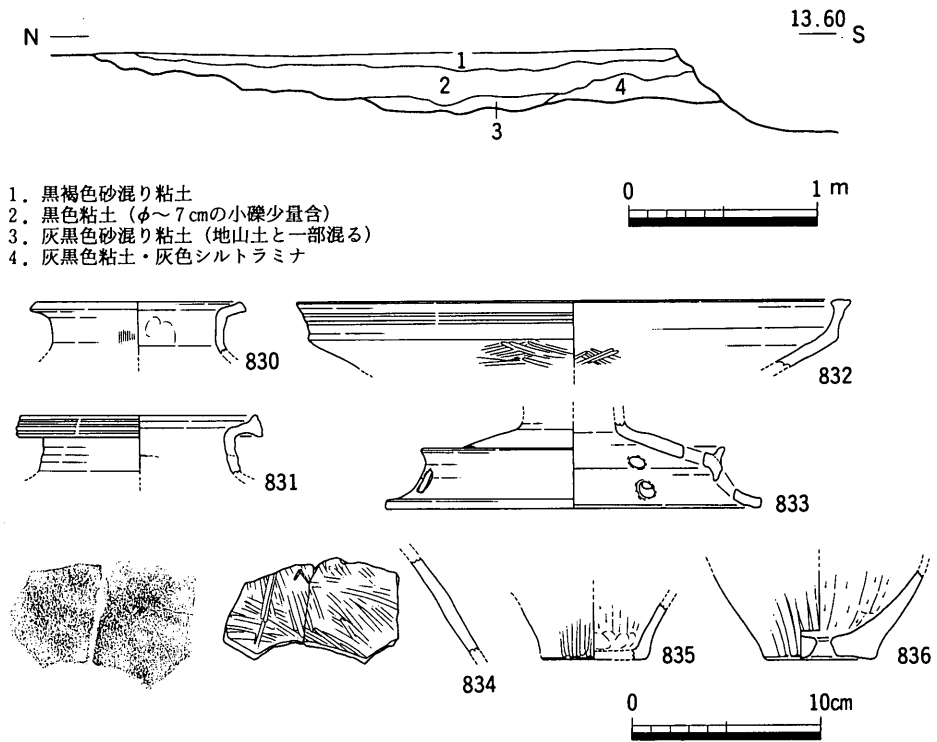
Ⅲ-41区L69グリットで検出した土坑である。東半部は調査区外に延長する。東西0.5m以上、南北0.83mの平面形はいびつな隅丸方形状を呈する。深さは0.1mしかなく、断面形は概ね浅い皿状を呈する。底面は南端部で径0.25mの柱穴状の掘り込みがあり、起伏が顕著である。最深部の標高は、13.90mとなる。埋土は黒褐色粘土の単層である。

遺物は出土していないが、上記した特徴より推して、本土坑も SKe54と同様な性格を持つものと考えられる。

**③. 性格不明遺構**

**SXe03 (第59図・図版69)**

Ⅲ-41・43区北部で検出された浅い落ち込みである。遺構の西・南・東部を中世以降の遺構によって大きく攪乱を被っており、北縁辺の一部を検出したにとどまる。北辺は, SDe138にほぼ並行して直線状に東西に伸び、緩やかに南に下る。東西23m以上、南北9.5m以上を測る。当初北縁ラインが直線状に検出されたことから、溝と考え調査を進めたが、掘削深度は0.3mと他



第59図 SXe03断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)

の溝より浅く、断面形は皿状を呈して底面は平坦であり、溝とするには南北幅に対する掘削深度は浅く根拠に乏しい。また削平を被っているとしても東西への拡がりも乏しく、遺構の性格を断定するまでには至らなかった。埋土は4層に細分された。上位3層は湿地状を呈した自然堆積層。最下層は粘土とシルトの互層で、流水下の堆積が考えられる。

遺物はコンテナ3箱と少なく、主に下位層から出土した。そのうち7点を図示した。このうち830・832・835・836が41区、他は43区の出土である。830・831は広口壺。830は、短いながらも直立した頸部を有し、口縁部は強く折れ、端部の拡張は乏しい。甕とするには明瞭な頸部が認められるので躊躇される。831は、後期初頭の一般的な壺形態。上下に摘み出した口縁端部に、2~3条の凹線文を加える。

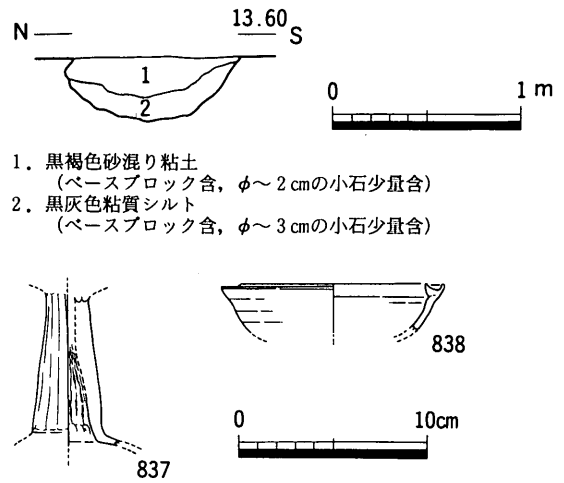
832・833は高坏。832は口縁部拡張形態の高坏。端部の拡張は弱く、中位の屈曲もやや鈍い。坏上半部外面に鈍い沈線2条を施す。833は装飾高坏脚部。脚裾部はやや強く外反して開く。裾部上下段に各々円形の透し孔を穿つ。脚裾下半部は大きく発達して外反して開き、後期初頭までは遡らない形態である。834は体部小片。内外面に入念なミガキ調整が認められることから、鉢の可能性が高い。外面にV字状の記号文が施される。835・836は底部。いずれも安定した平底形態の底部であり、外面は縦ミガキ調整、内面は縦ケズリが顕著である。836は焼成前に底部に穿孔された甑であろう。図示した遺物はすべて胎土中に角閃石粒を多量に含む。時期は、830・833がやや後出する様相を備えるものの、概ね後期初頭～前葉の範疇で理解できるものである。

### 3. 古墳時代後期

#### ①. 溝状遺構

##### SDe142 (第60図・図版42)

Ⅲ-41区H68・69グリットで検出した直線溝である。東端は調査区外に延長し、西端はSXe02によって削平される。SXe02以西では本溝の延長部分が確認されなかったため、調査区内で途切れる可能性が高い。延長15.5mを確認した。流路方向N60.5° E, 幅0.9m, 深さ0.3~0.4mを測る。断面形は概ねU字状を呈し、北壁部上面より0.1m下方で抉れて、わずかに袋状となる。底面は概ね平坦である。底面の標高は13.15m前後であり、レベル差から東に流下していた可能性が高い。埋土は黒褐色砂混り粘土と黒灰色粘質シルトの2層に細分され、ともにベース層のブロック土を多量に含む。ブロック土の混入は、人為的な埋戻しによるものではなく、北壁部分が抉れて袋状を呈することから、埋没過程で壁面の崩落により混入したものと考えられる。



第60図 SDe142断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4)

遺物は非常に少なく、須恵器坏身、弥生土器などの細片が、上層を中心に出土している。837は土師器高坏脚部。細身の脚部で外面をヘラナデによりメントリされる。内面にはケズリ調整は認められず、SDe137出土資料よりは先行する可能性が高い。胎土中には火山ガラスを多量に含み、形態や色調の点からも川津二代取遺跡出土資料に酷似する。838は須恵器坏身。口縁部の立ち上がりは低く内傾し、受け部は緩く内湾して斜め上方に伸びる。TK217型式期に比定され、本溝出土遺物中最も後出する。僅か1点のみの出土であるが、7世紀前半代における本地区唯一の遺構として評価したい。

#### 4. 鎌倉・室町時代

##### ①. 掘立柱建物

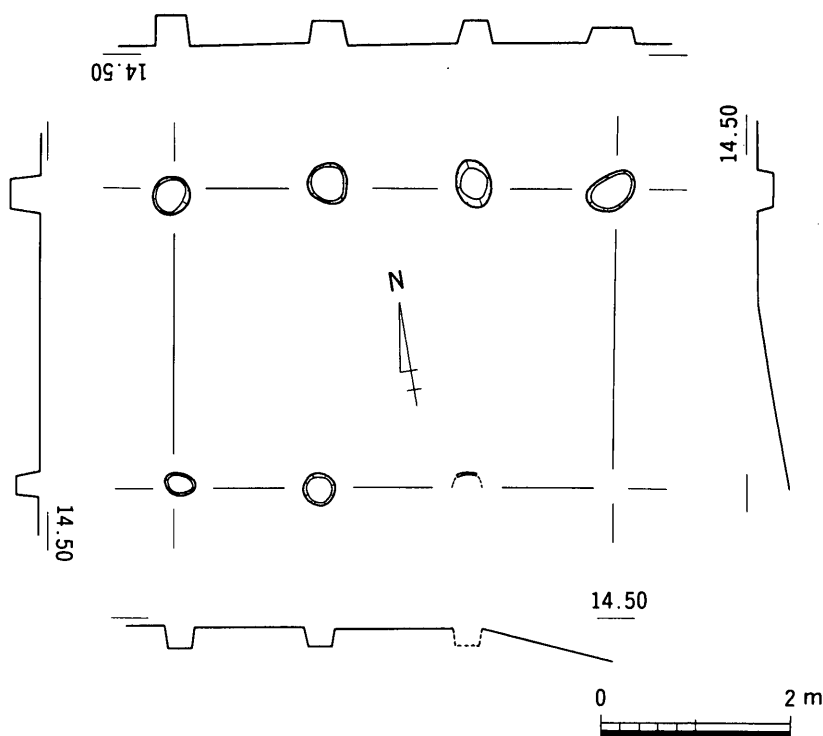
##### SBe04 (第61図・図版23)

II-13区H63・64グリットで検出した東西棟建物である。攪乱によって南列2穴は損なわれている。桁行1間(3.0m)、梁間3間(4.6m)、主軸方向N80.9°W、床面積13.9m<sup>2</sup>の側柱建物が想定される。柱穴掘り方は、径0.3~0.4mの略円形を呈し、残存深は0.2~0.3mと残りは良くない。底面の標高は14.2m前後でよく揃っている。桁方向の柱間間隔は1.4~1.6mと比較的揃い、柱通りも整っている。土層断面の観察の結果、径0.2m前後の柱痕を確認した。柱穴埋土は、北列東隅で黄灰色砂質土であることを確認したのみである。

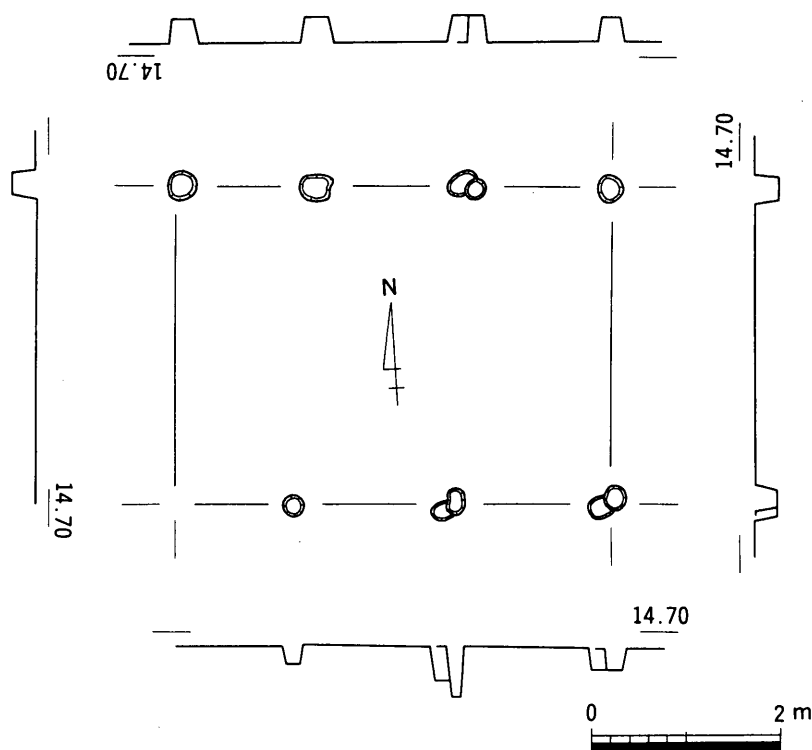
本建物に伴う遺物は出土しておらず、時期決定については調査担当者の所見に従った。

##### SBe05 (第62図)

II-13区H・I63グリットで検出した東西棟建物である。南西隅の柱穴は確認されなかった。桁行1間(3.3m)、梁間3間(4.6m)、主軸方向N85.9°W、床面積15.4m<sup>2</sup>の側柱建物が想定される。柱穴掘り方は、長径0.2~0.4mの略円形ないし楕円形を呈し、残存深は0.2~0.4mである。底面の標高は14.2~14.3mを測り、比較的よく揃う。土層断面の観察の結果、一部の柱穴で径0.1~0.2mの柱痕を確認



第61図 SBe04平・断面図(1/80)



第62図 SBe05平・断面図(1/80)

した。桁方向の柱間間隔は、1.4~1.6mと比較的よく揃い、柱通りも整っている。柱穴埋土は、灰色及び黒褐色砂質土である。

遺物は、北列東隅及び南列西隅の柱穴より、弥生土器細片が各1点出土したのみである。出土遺物のみをもって時期決定を行うことは困難であり、SBe04同様本建物の時期も、調査担当者の所見に従った。

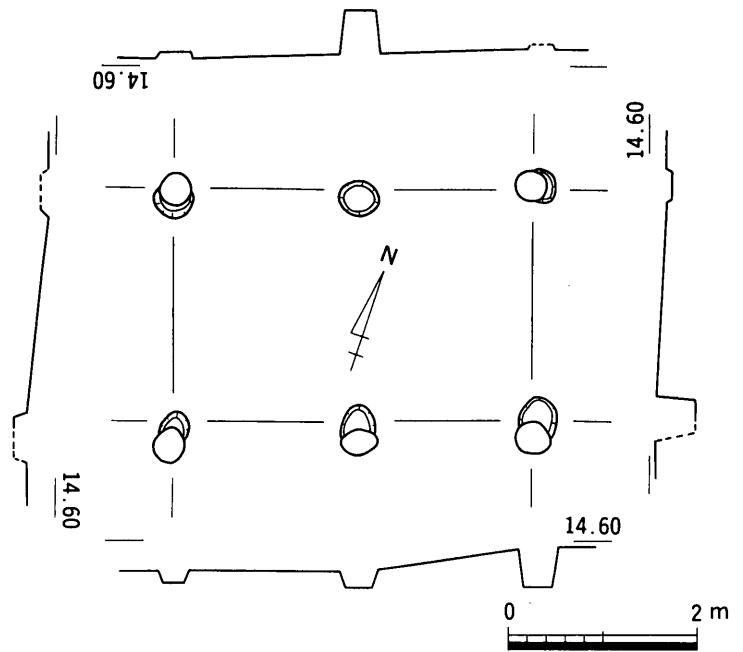
#### SBe06 (第63・64図)

II-13区I63グリッドで検出した東西棟建物である。本建物の柱穴は包含層II層上面より掘り込まれているようである。建物西側に攪乱溝が存在し、1間分は西に拡張される可能性もある。柱穴の重複関係から、同一場所において1度の建替えを想定できる。柱穴埋土の特徴は記録されていない。

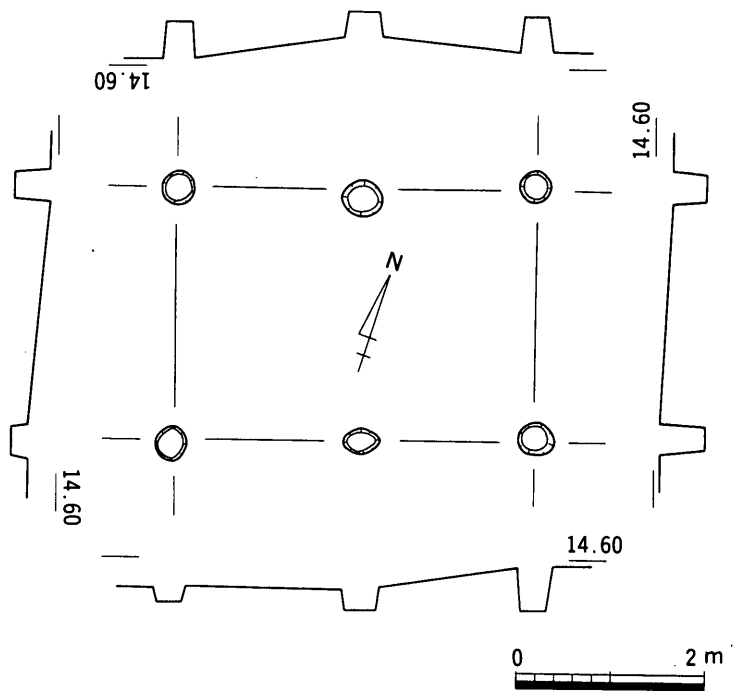
先行するSBe06 aは、桁行1間(2.4m)、梁間2間(3.8m)、主軸方向N71.0°E、床面積9.1m<sup>2</sup>の側柱建物である。柱穴掘り方は、長径0.3~0.4mの楕円形を呈する。桁方向の柱間間隔は1.9mと均一で、柱通りも整っている。

後出するSBe06 bは、桁行1間(2.65~2.7m)、梁間2間(3.7~3.8m)、主軸方向N71.0°E、床面積10.0m<sup>2</sup>の側柱建物である。建替えによりやや規模を大きくする。柱穴掘り方は、長径0.3~0.4mの円ないし楕円形を呈し、残存深は0.15~0.45mと残りはよくない。底面の標高は14.1m前後でよく揃っており、柱通りも乱れは少ない。桁方向の柱間間隔は1.8~2.0mと比較的よく揃っている。

本建物に伴う遺物は出土しておらず、本建物の時期も調査担当者の所見に従った。掘り込み面から想定される時期と矛盾はない。



第63図 SBe06 a 平・断面図 (1/80)

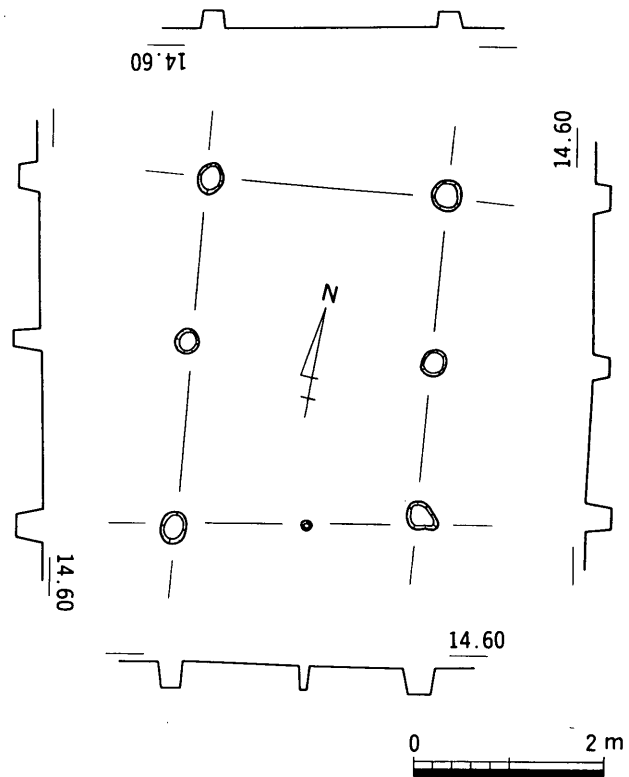


第64図 SBe06 b 平・断面図 (1/80)

SBe07 (第65図)

II-13区 I 63グリットで検出した南北棟建物である。本建物の柱穴も、包含層II層上面より掘り込まれる。SBe08と重複するが、柱穴に切り合い関係はなく、先後関係は不明である。桁行2間(3.3~3.5m)、梁間2間(2.5~2.6m)、主軸方向N6.4° W、床面積8.7m<sup>2</sup>の側柱建物である。柱穴掘り方は径0.2~0.3mの略円形を呈し、残存深は0.15~0.3mである。底面の標高は、14.2m前後で一定している。桁方向の柱間間隔は1.5~1.86mと揃わず、桁行東側が西側と比べて相対的に短い。梁間は大きくは変わらない。柱穴埋土の特徴は記録されていない。

本建物に伴う遺物は出土しておらず、本建物の時期も調査担当者の所見に従った。

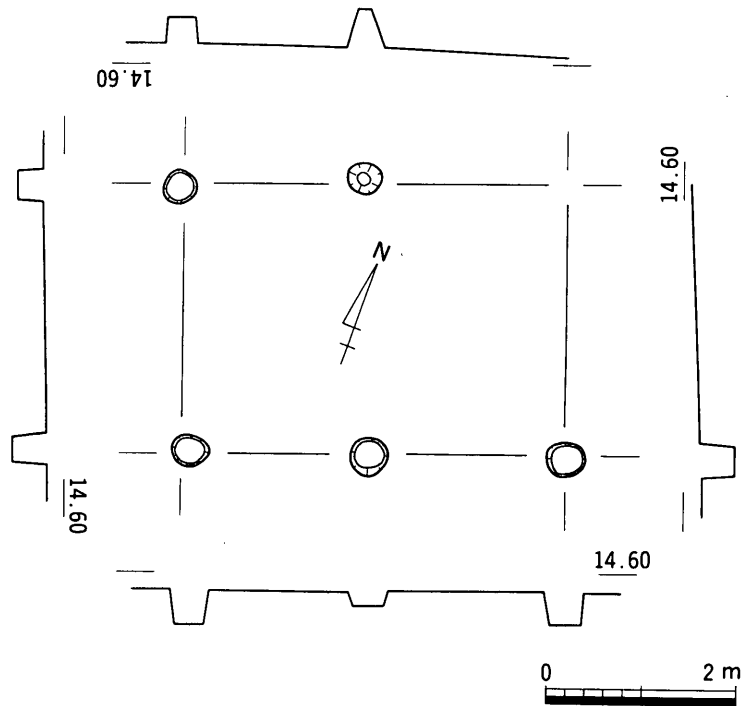


第65図 SBe07平・断面図 (1/80)

SBe08 (第66図)

II-13区 I 63・64グリットで検出した東西棟建物である。本建物の柱穴も、包含層II層上面より掘り込まれているようである。北東隅の1穴を攪乱溝によって損なわれている。桁行2間(3.96m)、梁間1間(2.7m)、主軸方向N70.9° E、床面積10.7m<sup>2</sup>の側柱建物である。柱穴掘り方は、径0.3~0.4mの略円形を呈し、残存深は0.14~0.42mを測る。底面の標高は、南列の中央穴を除いて14.0~14.1mで一定する。桁行方向の柱間間隔は1.9~2.08mと概ね揃い、また柱通りもよい。柱穴埋土の特徴は記録されていない。

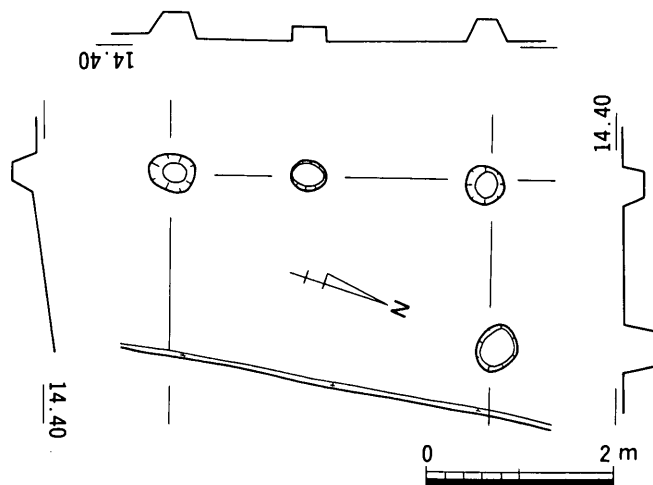
本建物に伴う遺物は出土しておらず、本建物の時期も調査担当者の所見に従った。



第66図 SBe08平・断面図 (1/80)

SBe09 (第67図)

II-13区東端，I64グリットで検出した東西棟建物である。本建物の柱穴も，包含層II層上面より掘り込まれる。東半部分は調査区外に延長し，西辺の3穴及び北辺の2穴を確認したにとどまる。桁行2間(2.3m)以上，梁間2間(3.28m)，主軸方向N82.5°Eの側柱建物が想定できる。柱穴掘り方は径0.3~0.5mの楕円形を呈し，残存深は0.1~0.32mである。桁方向の柱間隔は検出部で1.7m，梁間方向は1.4~1.88mとなり，梁間方向の柱間隔はややばらつきがある。柱穴底面の標高は14.0~14.2mとなる。柱穴埋土の特徴は記録されていない。



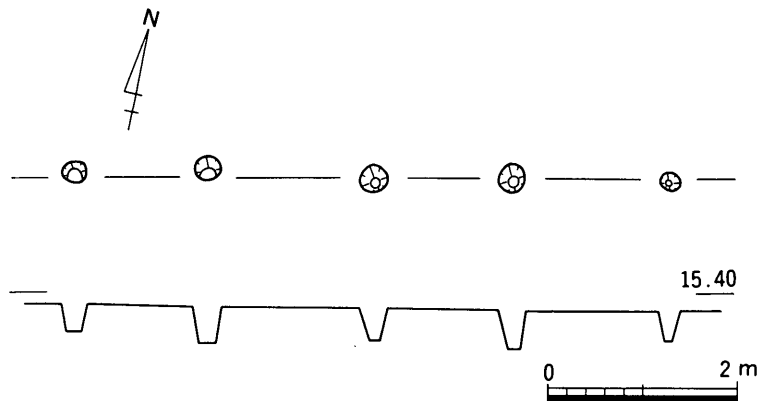
第67図 SBe09平・断面図 (1/80)

本建物に伴う遺物は出土しておらず，本建物の時期も調査担当者の所見に従った。

②. 柵列

SAe04 (第68図・図版23)

II-13区K60グリットで検出した柱穴列である。トレンチ部での調査であるため，建物跡の梁間を構成する柱穴列である可能性も考えられたが，確証を得るまでには至らなかったため柵列として報告する。4間分(6.3m)を検出した。主軸方向N78.9°E，柱間隔1.35~1.65m，柱穴の掘り方は径0.2~0.3mの略円形を呈し，その残存深は0.3~0.4m，底面の標高は14.82~14.98mである。東端の柱穴は他の3穴と比しやや小規模であり，建物跡を想定した場合庇に相当する可能性が考えられる。柱穴埋土の特徴は記録されていない。

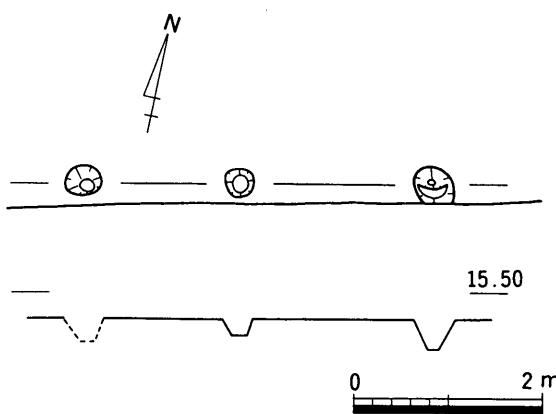


第68図 SAe04平・断面図 (1/80)

本柵列に伴う遺物は出土おらず，時期決定については調査担当者の所見に従った。

SAe05 (第69図・図版23)

II-13区K60グリットで検出した柱穴列である。SAe04同様トレンチ部での調査であるため，建物跡の梁間を構成する柱穴列の可能性も考えられたが，確証を得るまでには至らなかったため柵列として報告する。



第69図 SAe05平・断面図 (1/80)



2間分(3.7m)を検出した。主軸方向N78°E, 柱間間隔1.7~2.05m, 柱穴の掘り方は径0.3~0.4mの略円形を呈し, その残存深は0.27~0.38m, 底面の標高は14.84~14.94mである。柱穴埋土の特徴は記録されていない。

遺物は, 西端の柱穴より弥生土器細片が1点出土したのみである。出土遺物のみをもって時期を決定することは困難であり, SAe04同様調査担当者の所見に従った。

### ③. 性格不明遺構

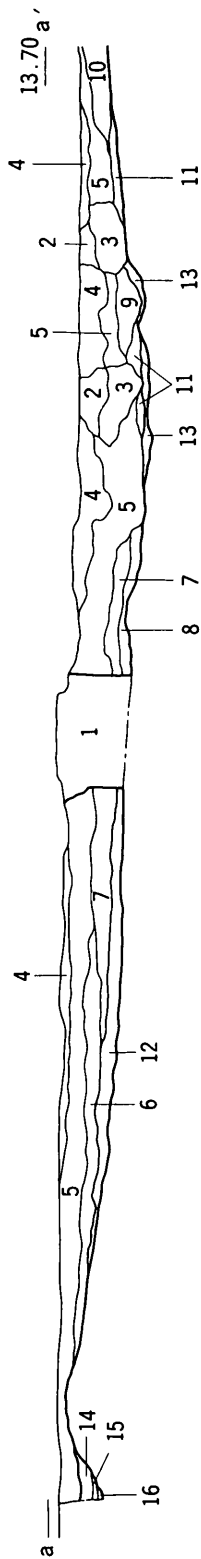
#### SXe01 (第70~74図・図版42・68~73・76・80・81)

Ⅲ-41~43区北部, 包含層I層下面で検出した落ち込みである。調査区北半部を, S字状に緩く屈曲しながら南東から北西方向にかけて溝状に検出された。南東端は近世遺構に大きく攪乱を被るが徐々に浅くなり調査区内で途切れ, 北西端は調査区外に延長する。東側微高地縁辺部より低地部分を横切る形で検出されたが, 北西端は概ね低地部分に沿って北西方向に伸びる可能性が高い。また落ち込み北東縁辺の掘り込み位置は不明瞭で, 近世遺構による攪乱や遺構自体がなだらかに南に落ち込んでいることもあって, 明確に捉えることができなかった。幅8~10m, 深さ0.7~1.1mで, 断面形は概ね皿状ないしは逆台形状を呈する。底面は起伏が顕著に認められ, 一部小ピット状を呈する箇所も認められたが, 人為的なものではなくそれが何に起因するものかは断定できなかった。また東側微高地縁辺部SDe144及びSXe02東方で検出された不定形な浅い皿状の落ち込みも, 本来的には地山層上面の凹部に残された本遺構埋土の残存部分であると考えられる。

埋土は大きく2層に大別された。上層は黒褐色系の粘土層で, 部分的に灰色細砂層がラミナ状に混じり, 粗粒の堆積物はなく穏やかな環境下で堆積したのであろう。色調等により数層に細分されるが, 遺構全域に普遍化しうるものではない。本層上位層は多量の遺物を含み, 本遺構出土遺物の大半は, 本層より出土した。下層は主に遺構南半部に堆積する暗褐色系粘土層で, 本層も灰色細砂をラミナ状に含むが上層で見られたのよりも顕著である。本層も2層に細分され, 微弱ながらも水流による堆積を思わせるものであった。底面の標高値は, 北西方に向けて徐々に深くなり, 時期は異なるが出水遺構SXe02と重複する。また図示したように(第70図②), 本遺構の形成によって明らかに弥生時代の遺構が削り込まれており, 低地部埋没過程で生じた窪地状の地形とは考え難い。以上のような理由から本落ち込みは湧水部を伴った北西方に流下する流路として機能していたことが想像されるが, 湧水部と考える東半部が大きく攪乱を被っており, 確認することはできなかった。ただしその形状から, 人為的に掘削されたものではないと考える。

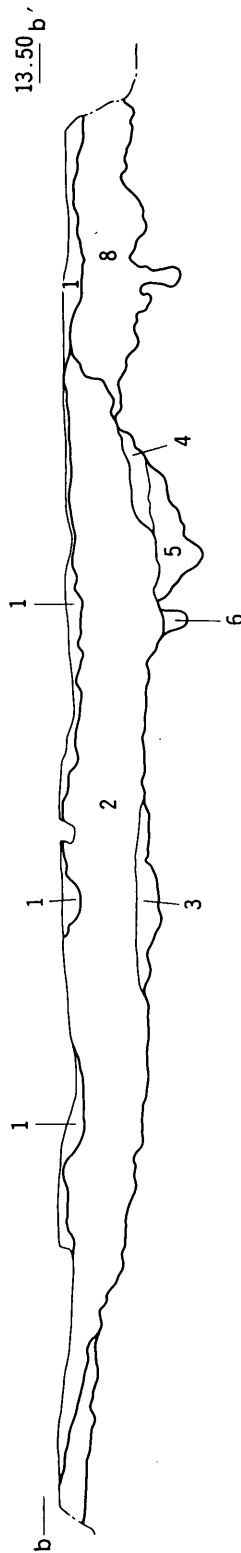
本落ち込みからは, コンテナ53箱程度と多量の遺物が出土した。これら出土遺物の大半は, 重複して検出された弥生遺構から混入したと考えられる土器類であり, その中でごく少量ではあるが古代以降の遺物が含まれる。なお中世の遺物は, 点数こそ少ないものの完形に近く復元されるものも一定量出土しており, 廃棄位置と出土位置がそう大きく離れていないことを示している。また43区H67グリット下層より獣骨1点が出土した。ウシ・ウマ等の大型獣の大腿骨の一部とみられるが, 関節部分を欠損しており獣種を特定するには至らなかった。

上記したように, 本遺構出土遺物の大半は上層からの出土である。うち85点を図化した。839~909・919が上層, 910~918・920~923が下層出土の遺物である。このうち839~860・910~915が弥生土器ないしは古式土師器, 861~863・868が土師器, 864~867・869~879が須恵器, 880~909・916・917が中



- 1. 擾乱
- 2. 褐色粘土・灰色細砂ラミナ (5層ブロック含)
- 3. 褐色粘土 (Fe含)
- 4. 黒色粘土 (僅かに砂混る)
- 5. 黒色粘土 (僅かに砂混る)
- 6. 黒灰色粘土 (僅かに砂混る)
- 7. 黒灰色砂混り粘土
- 8. 黒色粘土
- 2~11 = SX e01上層 12・13 = SX e01下層 14~16 = S D e I37

- 9. 黒色粘土
- 10. 黒灰色砂混り粘土
- 11. 黒灰色粘土
- 12. 灰色粘質シルト (地山灰色シルト粒状に含)
- 13. 灰色粘質中砂・黒色粘土ラミナ
- 14. 黒色砂混り粘土
- 15. 灰色細砂
- 16. 黒灰色粘土

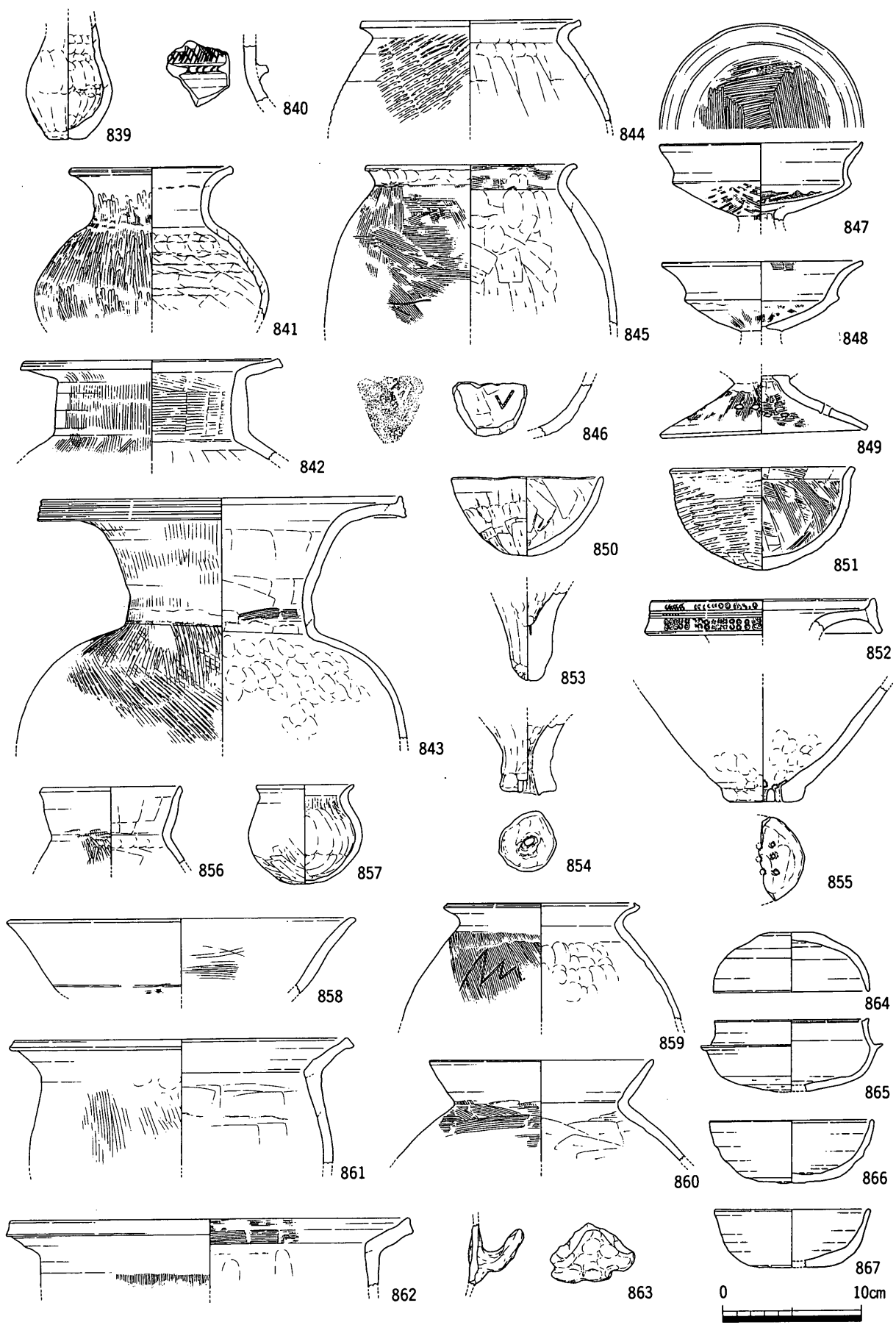


- 1. 茶褐色粘質土 (植物遺体含, 部分的に灰色細砂ラミナ含)
- 2. 暗褐色粘土 (地山灰緑色シルト小ブロック含)
- 3. 暗褐色粘土・灰色極細砂ラミナ
- 4. 暗褐色砂混り粘土 (植物遺体含)
- 5. 黒色粘土
- 6. 黒色粘土
- 7. 黒色粘土 (灰色極細砂ラミナ含)
- 8. 黒色粘土
- 1~3 = SX e01上層 4~5 = SX e01下層 7 = SX e03 8 = S D e I15



第70図 SXe01断面図 (1/60)

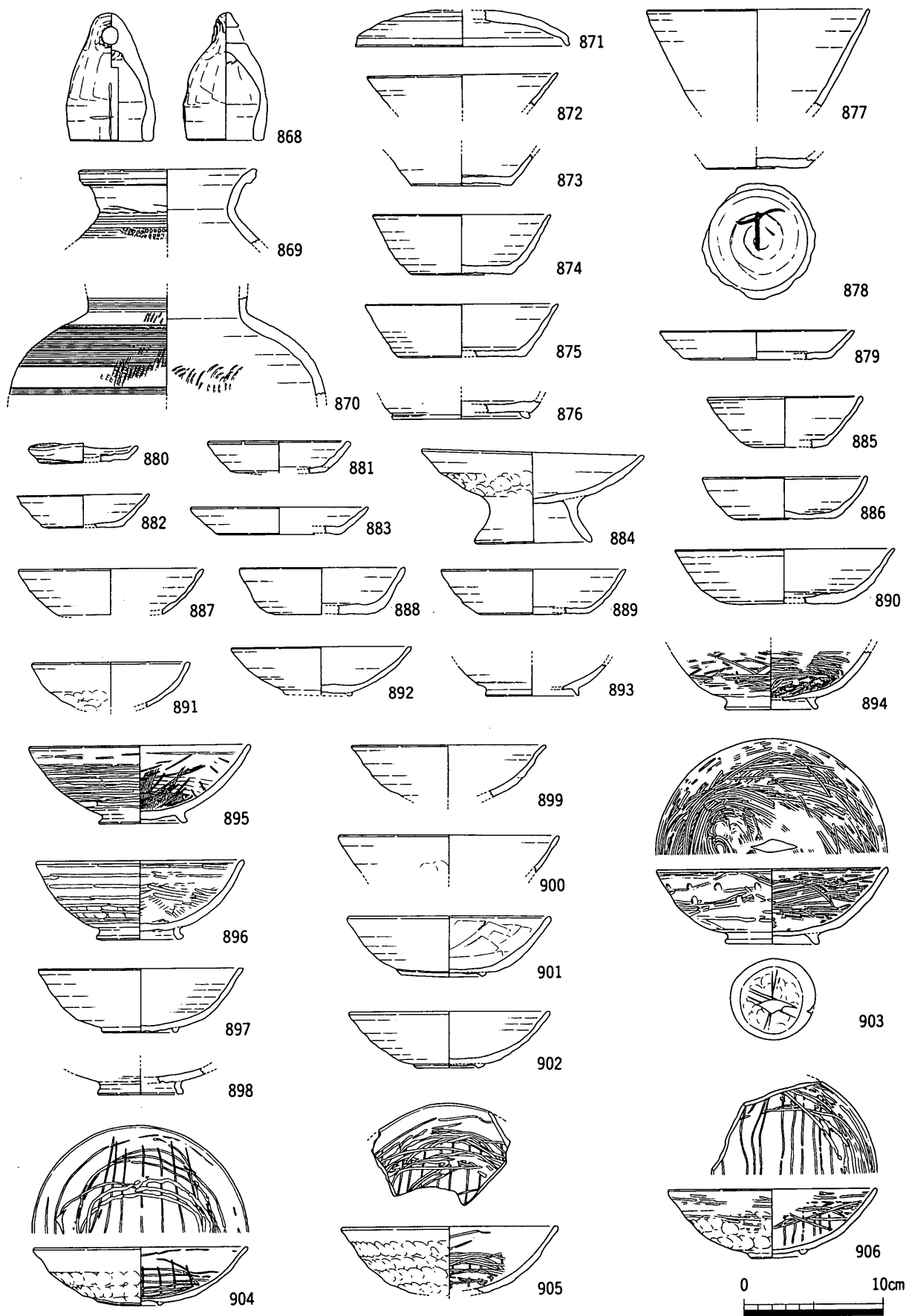
世の土器・磁器類である。839はミニチュア土器の壺である。内面には指押さえ痕が顕著に認められる。840～843は広口壺。840は広口壺の頸部とみられる。頸基部に突出度の高い突帯を付し、上面に半裁竹管文を加える。頸部外面には斜格子文をヘラ描きし、装飾性に富む。841は緻密な素地土を使用し、外面に入念なミガキ調整を加えた精製品である。後期末前後に位置付けられる。842は下川津B類土器の範疇に含まれる。頸部は太く口縁部は短く開く。端部は小さく上下に肥厚する。843は金雲母粒を多量に含む胎土を有する。大きく開いた口縁端部を上方に摘み上げ、下方にも小さく引き出す。端面には鈍い凹線文を3条加える。形態・胎土共に六条・上所遺跡SK01出土資料に酷似し、布留式古相併行に位置付けられる。844・845は甕である。844は短く開いた口縁部の端部を小さく上方に摘み上げる。845の体部下端には横方向の線刻を認める。いずれも体部の張りは弱く、後期末以前に遡るものではない。846は内面にV字状の記号文を施す土器片。外面はナデ、内面にはケズリの後ナデ調整が施され、形態から鉢の可能性が高い。847は下川津B類高坏で、口縁部内面の凹線状の調整は形骸化し、また深めの坏部形態から後期末まで下る資料であろう。848は外反口縁形態の高坏で、郡家原遺跡SD159出土資料よりも坏部上半部はよく発達し、布留式古相まで下る可能性がある。849は低脚高坏の脚部。胎土は精良で、2孔1対の円孔を4箇所にあける。850・851は鉢。850は金雲母粒が目立つ胎土を有し、体下半部をケズリ調整される。851はケズリ調整が底部付近に限られ、やや新しい傾向をみせる。いずれも後期末以前には遡らないであろう。852は大形器台の口縁部とみられる。小片のため復元した口径にはやや誤差を含む。口縁部は上下に大きく拡張し、端面は2条の沈線の上下にそれぞれ1段と2段の竹管文で飾る。853は器種不詳の土製品である。尖底形態の鉢の可能性を考え図示したが、別の器種の可能性もある。内底面に針先状の刺突痕を認める。854も異形の土器で、突出した底部を有する甑状の土器として図化した。内面より棒状の工具で穿孔する。外面は上位より下位にむけてケズリ調整を施す。通有の甑とは形状や調整技法が異なるため、別の器種を想定すべきと思われる。855は甑である。体部は大きく開き、円盤状に突出した底部に6孔以上の穿孔を伴う。尖底形態の甑より後出する形態と考えられ、川津二代取遺跡SD04上層、下川津遺跡SHⅡ25出土資料に類例をみる。後期末前後に位置付けられる。856は直口壺である。口縁部はやや内湾して開き、体部はミガキ調整が入念に施される。布留式併行期まで下る資料であろう。857は小形丸底土器である。口縁部は単純に折り返したのみの小さな形態で、底部外面はケズリ調整される。布留式古相前後に位置付けられよう。858は大形高坏の口縁部とみられる。坏部中位の屈曲は不明瞭で、かろうじてヘラ描きの沈線によりそれと判断される。胎土は緻密な素地土を用い、内面には横ハケ調整が認められる。布留式後半にまで下る可能性がある。859・860は甕である。859は外反して開く口縁部の端部を、小さく摘み上げて内傾させる形態で、体部外面にはヘラ描きの記号文を伴う。基本的には下川津B類甕の系譜上に位置する土器と考えられ、布留式古相に位置付けられる。860はいわゆる布留系甕である。口縁部はやや内湾して開き、端部は丸く納める。肩部に本地区出土の布留系甕では稀な横ハケ調整が施される。861・862は古代に下る甕。861の口縁部は、外反して開き端部を下方へ小さく摘み出す。9世紀後半前後に位置付けられる。862は長胴甕で、やや後出し9世紀後半から10世紀初頭頃に位置付けられる。863は7～8世紀代の甕もしくは甑の把手である。864は坏蓋として図化した。天井部の形状から坏身となる可能性も残る。天井部外面はヘラ切り後未調整である。865は古式須恵器の坏身。口縁部はやや内傾して立ち上がり、端部には沈線状の段を認める。TK208併行期まで遡る資料である。866・867は坏身。864と共にTK217併行期前後に位置付けられよう。本器種に伴う蓋は出土していないが、これは本地域の当該時期の遺跡にある程度共通する様相のようである。



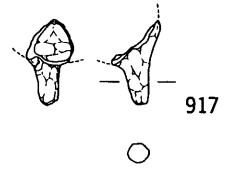
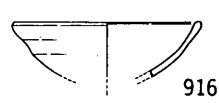
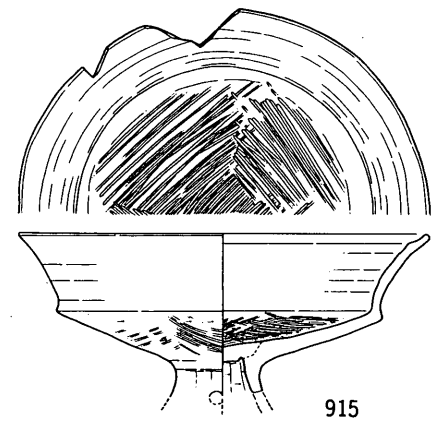
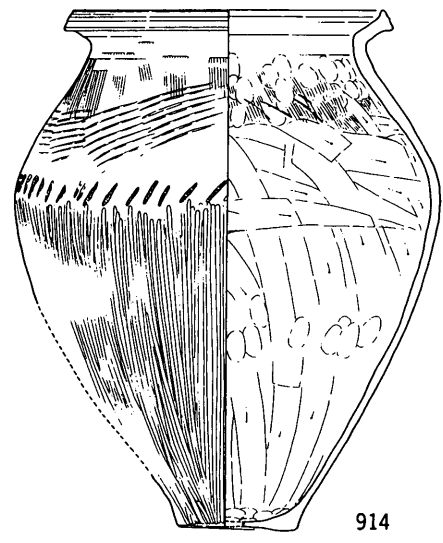
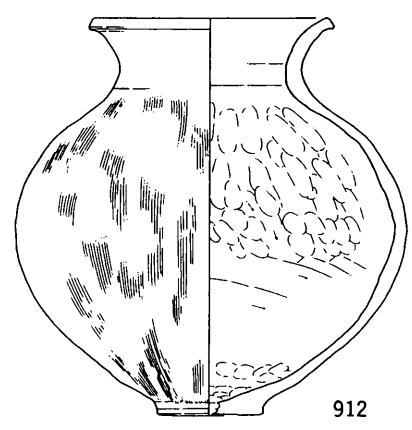
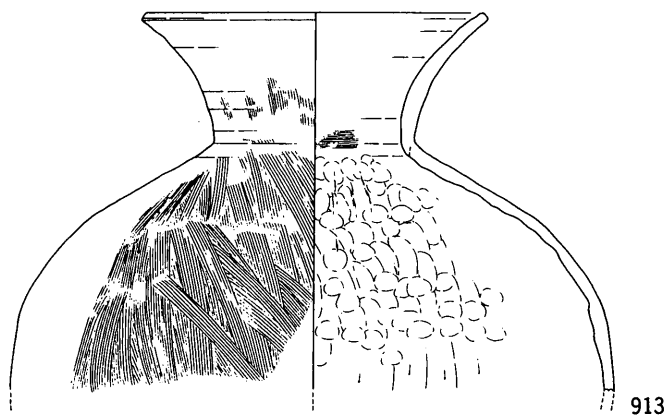
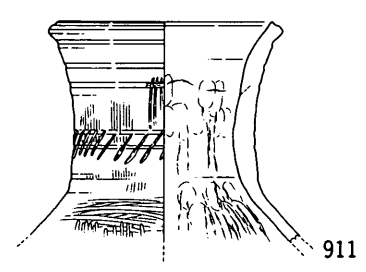
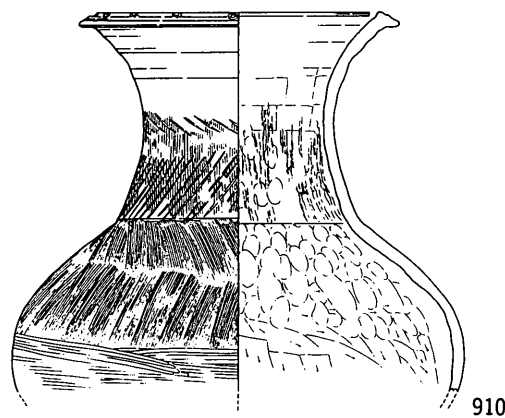
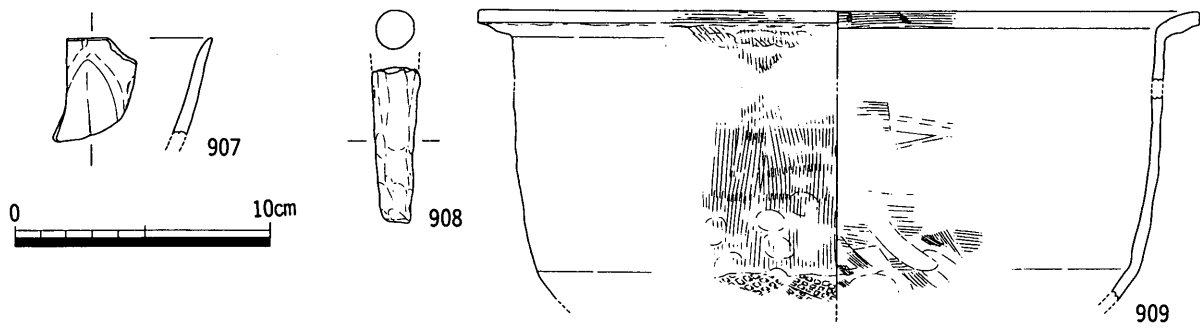
第71図 SXe01出土遺物実測図1 (1/4)

868は釣鐘型の飯蛸壺である。ほぼ完形品で、体部一側面にヘラ描きの十字形の記号文を有する。869・870は須恵器壺。869の体部外面は、格子目タタキの後カキメを加える。864などと同時期とみてよいだろう。871～879は8～9世紀代の坏蓋・坏身・皿である。このうち871が最も先行し8世紀前半代に、また877は最も後出し9世紀後半代にそれぞれ位置付けられる。前記2点以外は概ね9世紀前半代に位置し、Ⅱ-13区包含層Ⅱ層出土資料とほぼ同時期とみてよい。なお878外底面には、「下」の墨書を認める。880～883は土師質土器皿である。881・882は小型化し14世紀代に下り、883は10世紀前半頃にまで遡る。いずれも底部外面はヘラ切り調整である。884は台付皿である。ほぼ完形品にまで復元される。口縁部はやや外反して開き、体部外面には指押さえ痕が顕著である。12世紀代の製品とみられる。本形態は類例に乏しく、本地区からは本例1点のみしか出土していない。885～890は土師質土器坏。時期的には口径が大きい890が最も先行し12世紀代に、やや小型化し器壁が薄くなる887～889が次いで13世紀代に、口径の縮小化の進んだ885・886が14世紀代にそれぞれ位置付けられる。底部外面は判明する限りすべて皿と同じく回転ヘラ切り調整である。なおほぼ完形で出土した886外面は、体下半以下が黒変化しており重焼きの痕跡とみられる。891はいわゆる吉備系の土師質土器碗である。小型化した製品で、内外面にはもはやミガキ調整は認められない。口径から判断して、鹿田遺跡での編年のⅢ-3期に位置付けられる(山本1993)。892は在地産の土師質土器碗と考えられる。外底面には高台の剥離痕を認める。口径・器高は著しく縮小しており、13世紀代に位置付けられよう。893は黒色土器A類碗である。器壁は薄く丸碗化しており、10世紀頃か。894は黒色土器B類碗である。内面見込みには縦及び横のミガキ調整を認める。12世紀前半代の製品であろう。895は綾歌郡綾南町の西村産の黒色土器B類碗である。内面には特徴的なハケ調整がみられ、外面は回転台を利用した横方向のミガキ調整が施される。外底面はヘラ切りの後、高台を付して周囲をナデ調整される。12世紀初頭から前半代に位置付けられる。896～902は西村産の瓦質土器碗である。このうち896・898が最も先行する。896は、内面に分割ミガキが、外面に横ミガキが施され、外底面には外方へ踏張るやや高めの高台が付され、12世紀中頃の時期が想定される。上記2点以外は内外面のミガキ調整は省略され、また器高も低く高台も断面蒲鉾状のものに退化している。いずれも12世紀末から13世紀初頭前後に下る。903～906は和泉型の瓦器碗である。903が最も先行し、12世紀中頃と推定される。また903は904以下のものと比して、焼成はあまく胎土もやや粗く異質な印象を受ける。体部外面には上下2段に棒状の刺突痕?を巡らし、高台内には「×」字形の線刻を伴う。904～906は内底面に、平行線状の暗文が施され、外面の暗文も省略される904・905がやや後出する。器高は縮小し、外底面の高台は蒲鉾状のものに退化する。906は尾上氏の編年のⅢ-2期に、904・905は同じくⅢ-3期にそれぞれ位置付けられる(尾上1983)。907は中国産の青磁碗である。龍泉窯系の製品で、内外面にライトグリーンの釉が掛けられ、外面に鎬蓮弁を認める。横田・森田分類の碗I 5b類に分類される(横田・森田1978)。908・909は在地産の土師質土器である。908は脚で、おそらく三足付土釜の脚であろう。909は土鍋である。細片から復元したために、やや法量には難点がある。外面は主にハケ調整が施され、底面は格子目タタキが認められる。12世紀後半から13世紀前半段階に位置付けられる。

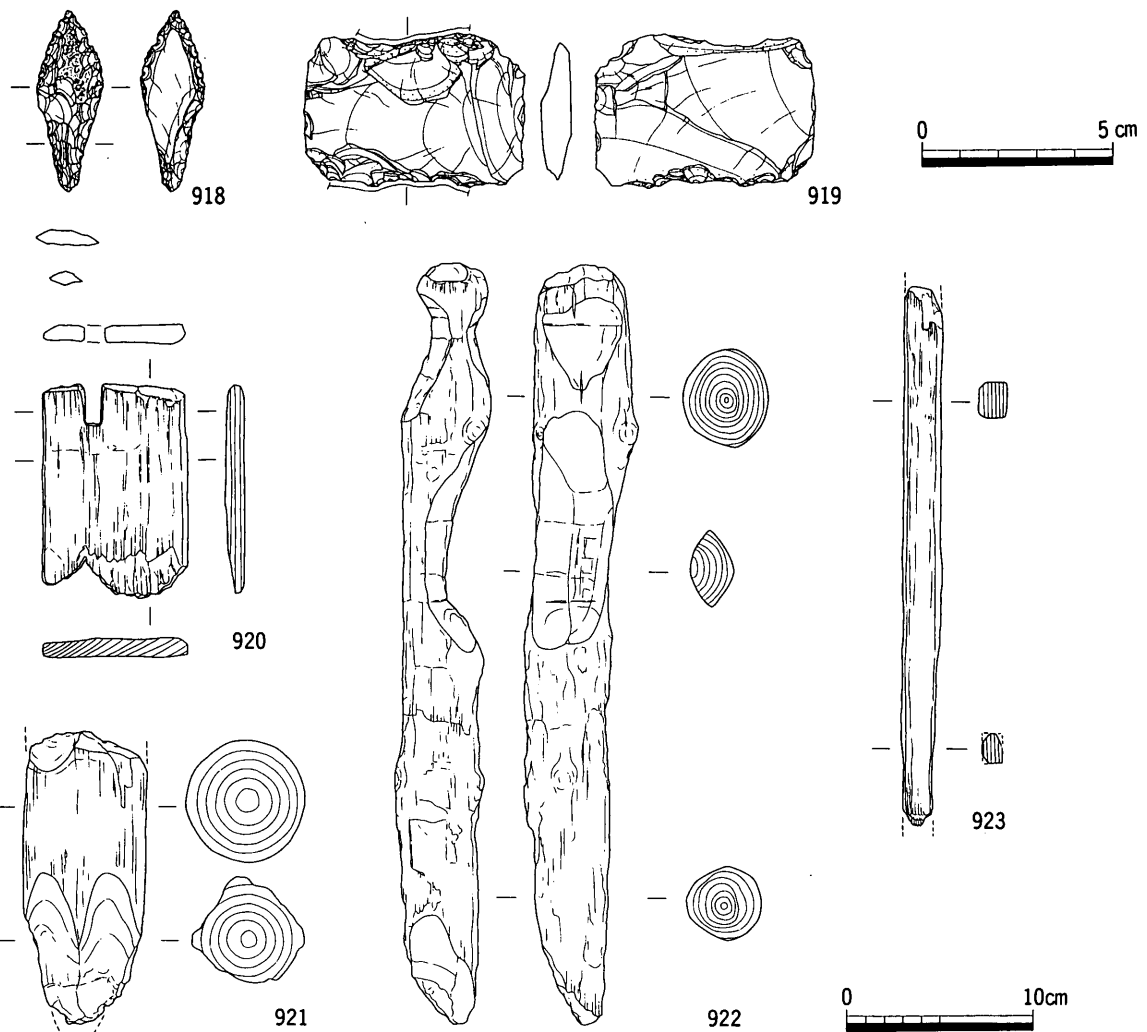
910・911は直口壺。いずれも胎土中に角閃石粒を多量に含み、本地域の後期初頭段階の典型的な壺形態である。910は拡張された口縁端部に2～3条の凹線と円形刺突文を、頸部外面には上下2段に斜線文で飾る。911は口縁端部への加飾はみられないが、頸部外面にハケ原体の斜線文とその上位にヘラ描きの記号文(縦位に3条以上の刻線を刻む)を認める。912は広口壺である。口縁部は外反して開き、



第72図 SXe01出土遺物実測図2 (1/4)



第73图 SXe01出土遺物実測図3 (1/3・1/4)



第74図 SXe01出土遺物実測図4 (1/2・1/4)

端部は僅かに下方へ引き出す。体部の張りは強く、底部は円盤状に突出した平底を呈する。形状から後期中葉までに位置付けられる。913も広口壺である。口縁部は外反して開き、端部は四角く納める。外面に縦ハケを認める。布留式古相併行前後に位置付けられる。914は甕。口縁端部は上下に摘み出して肥厚し、端面に鈍い凹線を施す。肩部外面のハケ調整は弱く、下位のタタキメがよく残る。体中央部はハケ原体の刺突文を巡らせる。胎土中に角閃石粒を多量に含み、後期初頭に遡る。915は下川津B類高坏である。坏上半部は大きく外反して開き、端部内面は凹んでサジ面をなす。やや深い坏部形態から、後期末前後に位置付けられる。916は吉備系の土師質土器碗である。底部を欠損するが、口径は著しく縮小化が進んでおり、鹿田遺跡での編年案のⅢ-3ないしはⅣ期に下る(山本1993)。917は土師質土器小片で、脚としたが把手の可能性もある。全体の器形は不明。918は扁平な凸基式石鏃である。片面に自然面を残す。919はスクレイパーである。上縁部に潰し加工をみる。刃部の作りは粗雑だが、一部に使用による磨耗を認める。920~923は木製品である。920は幅7.7cm、厚さ1.0cm程の板材で、上下端を折損する。上端やや左に片寄って方形のほぞが設けられ、建築部材と考えられる。921は径6.6cm程の芯持ちの丸太材による木杭である。先端部は削られ断面四角形状を呈する以外加工は認められず、樹皮も残る。922は長さ39.5cmと木杭としてはやや短い。径5cm程の芯持ちの丸太材を使用する。上端部は括れ、中位は矩形に抉られる。また先端部は1方向のみを削って尖らせる。それ以外は加工の度合いは低く、小枝が払われる程度で樹皮も残される。923は長辺2.1cm、短辺1.5cmの断面矩形の棒状の木製品である。

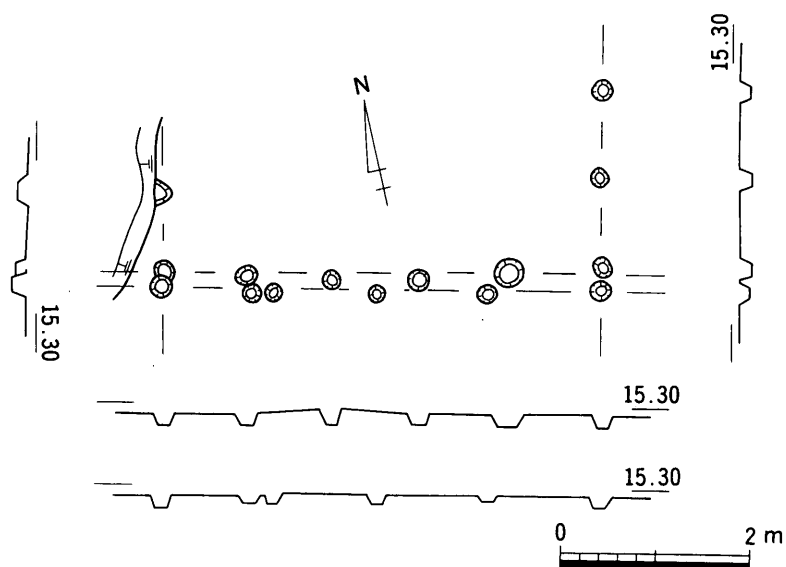


## 5. 江戸時代以降

### ①. 掘立柱建物

#### SBe01 (第75図・図版9)

Ⅱ-7区H58グリットで検出した掘立柱建物である。北半部を攪乱によって損なわれているため、建物全体を復元することはできない。南辺の柱穴列は一部SAe01と重複し、切り合い関係よりSAe01より先行する。確認部分で桁行5間(4.7m)、梁間2間(1.8m)以上で、主軸方位N77.2°Wの側柱建物が復元される。柱穴掘り方は径0.2m前後の略円形を呈し、残存深度は0.1m、底面の標高は15.10m前後である。桁方向の柱間間隔は1.0mと揃っているが、



第75図 SBe01・SAe01平・断面図(1/80)

中央2穴がやや南にずれており、柱通りは必ずしもよくはない。梁方向の柱間間隔は0.9mである。

本建物に伴う遺物は出土しておらず、時期の決定については調査担当者の所見に従った。なお明治21年に測量された地籍図によれば、本建物周辺は宅地として記載されている。本遺跡他調査区での調査結果によれば、18世紀代の掘立柱建物を主体とする屋敷地が、同図記載の宅地と重複する位置で検出されており、本建物の時期を推定する上で参考となる。

### ②. 柵列

#### SAe01 (第75図・図版9)

Ⅱ-7区H58グリットで検出した東西方向の柵列である。調査区内で4間(4.7m)を確認したが、西側への延長は攪乱によって不明である。東側には延長方向に柱穴が確認されたが、規模及び底面の標高値に大きな開きがあり、本柵列に伴うものとの断定はできなかった。またSBe01と重複し、切り合い関係からSBe01より後出する。なお本柵列の検出長はSBe01の桁行とほぼ一致し、主軸方向の差異も小さいことから、本柵列がSBe01の建て替えに伴う柱穴列との可能性も想定されたが、梁間方向に建物遺構とした場合の対応する柱穴が検出されなかったことから、ここでは柵列として報告しておく。主軸方向N76.5°W、柱間間隔1.1~1.2m、柱穴の掘り方は径0.2m前後の略円形を呈し、残存深度は0.1m、底面の標高は15.06~15.16mであった。

本柵列に伴う遺物は出土しておらず、時期決定についてはSBe01との位置関係や調査担当者の所見に従った。

#### SAe02 (図版11)

Ⅱ-7区J57・58グリットで検出した東西方向の柵列である。西端はSDe10の東0.8mで途切れる。東端は攪乱により延長規模は不明。22.1mを検出した。また西半部は、攪乱溝によって3穴が損なわれている。柱穴列の方向はN76.9°Wであり、SDe10とは概ね直交する位置関係にある。柱穴掘り方は、

径0.2~0.3mの略円形を呈し、残存深0.03~0.12m、底面の標高15.3m前後である。柱間間隔は1.8~1.95mであり比較的よく揃っている。本柵列の南2.2mには、方向及び柱穴の並び、規模、柱間間隔をほぼ等しくするSAe03が配される。両柵列にはその位置関係から有機的な関係が想定され、SDe10と共に何らかの区画施設とみなすことができる。また両柵列に挟まれた空間は通路としての機能が想定されるが、調査所見から断定するまでには至っていない。

本柵列からは、サヌカイト製のスクレイパー1点が出土している。出土遺物から時期を特定することは困難であり、調査担当者の所見に従った。

### SAe03 (図版11)

II-7区J57・58グリットで検出した東西方向の柵列である。東西両端は攪乱によって損なわれており、16.6mを検出した。SAe02との関係から、東に2間(3.7m)、西に1間(1.8m)程は延長していたことは確実である。方向はN77.7°W、柱穴の掘り方は径0.2~0.3mの略円形を呈し、残存深0.06~0.2m、底面の標高15.24~15.37mであった。柱間間隔は1.9~3.6mであり、SAe02と比較して3穴欠落しており、検出状況はあまり良好とはいえない。

本柵列に伴う遺物は出土しておらず、時期決定については調査担当者の所見に従った。

## ③. 土坑

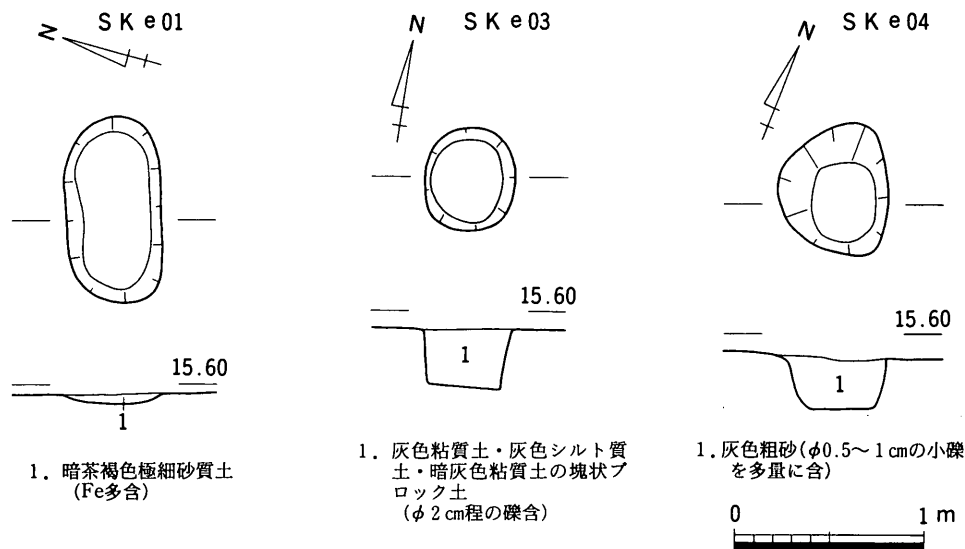
### SKe01 (第76図)

II-7区H56グリットで検出した土坑である。平面形は、長軸0.98m、短軸0.5m、主軸方向N73°Eの東西に長い整った隅丸方形を呈する。深さは0.05mしかなく、底面の標高は15.50mである。断面形は浅い皿状を呈し、底面は概ね平坦である。埋土は暗茶褐色極細砂質土の単層である。

本土坑に伴う遺物は出土していないが、埋土の特徴などから近世以降に比定される。

### SKe03 (第76図)

II-7区H57グリットで検出した土坑である。平面形は径0.46mの略円形を呈する。SDe03・04上面より掘り込まれており、両溝より後出する。深さは0.32m、底面の標高は15.2mである。断面形は箱状を呈し、底面は概ね平坦である。埋土は灰色シルトの単層で、灰色粘質土及び暗灰色粘質土のブロック



第76図 SKe01・03・04平・断面図 (1/40)

土を顕著に含む。埋土の特徴から、本土坑は掘削後短期間の内に人為的に埋め戻された可能性が高い。

本土坑も遺物の出土は認められず、時期決定については調査担当者の所見に従った。

#### SKe04 (第76図)

II-7区H57グリットで検出した土坑である。平面形は長径0.6mの楕円形を呈する。SDe02上面より掘り込まれる。深さは0.28m、底面の標高は15.2mである。断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦である。埋土は灰色粗砂の単層で、長径0.5~1.0cmの小石を多量に含む。

本土坑も遺物の出土は認められず、時期決定については調査担当者の所見に従った。

#### SKe07 (第77図)

II-7区H57グリットで検出した土坑である。SDe11と重複し、切り合い関係よりSDe11より後出する。北西隅部を攪乱により損なう。平面形は残存部より、長軸2.4m、短軸1.4mのややいびつな隅丸長形状に復元される。主軸の方向はN88°Wであり、概ね東西に主軸を合わせる。深さは0.54m、底面の標高は14.76mである。断面形は、西壁がやや直に掘り込まれる以外は緩やかに掘り込まれ、全体として逆台形状を呈する。底面には起伏が顕著に認められる。埋土は灰褐色粘質土の単層で、黒色土及び地山のブロック土を多く含む。埋土の特徴から、掘削後短期間の内に人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

本土坑も遺物の出土は認められず、時期の決定は調査担当者の所見に従った。

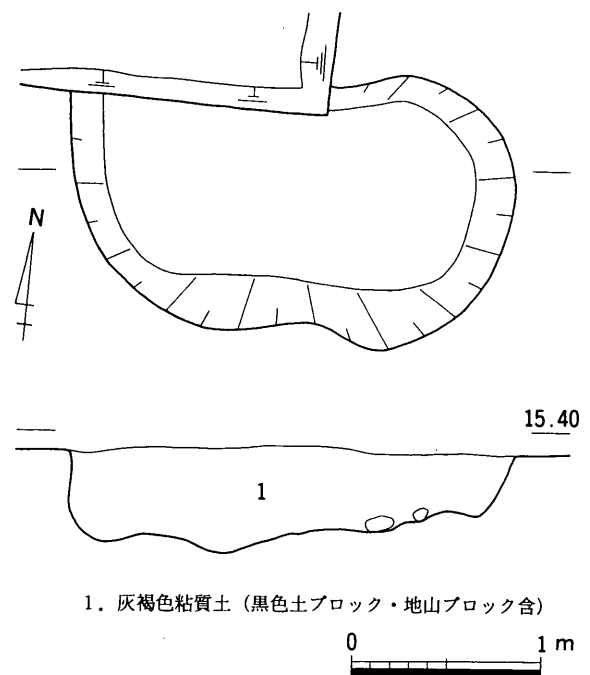
#### SKe09 (第78図・図版11)

II-7区H57グリット、SDe10の東に接するように検出した土坑である。平面形は、長軸2.0m、短軸1.3mの隅丸長方形を呈する。主軸方向N81°Wであり、SDe10とは概ね直交する位置に配される。深さは0.38mであり、断面形は皿状を呈する。底面最深部は中央付近にあり、最深部の標高は14.92mである。埋土は灰褐色砂質土の単層で、黒色粘質土のブロック土を顕著に含む。埋土の特徴より、本土坑も人為的な埋め戻しが想定される。

本土坑も遺物の出土は認められず、時期の決定は調査担当者の所見に従った。

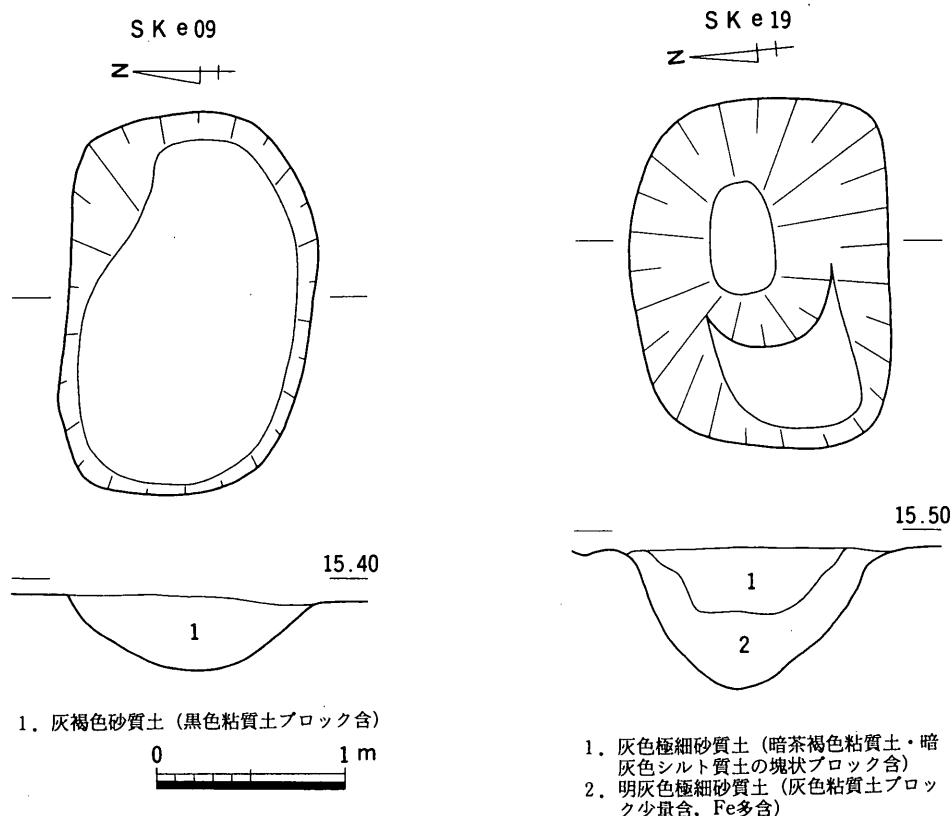
#### SKe19 (第78図)

II-7区I57グリット、SDe09の西に接して検出した土坑である。平面形は、長軸1.8m、短軸1.4mの東西に長い隅丸長方形を呈する。SDe06上面より掘り込まれる。主軸方向はN79.5°Wで、本土坑もSDe10とは概ね直交する位置関係にある。深さは0.73m、底面の標高は14.67mである。断面形は挿鉢状を呈し、中央部が最も深くなる。埋土は2層に細分された。上層は灰色極細砂質土で、暗茶褐色粘質土及び暗灰色シルト質土のブロック土を多量に含む。本層はSKe27埋土と概ね一致する。下層は明灰色極細砂質土で、灰色粘質土のブロック土を少量含む。埋土の特徴より、本土坑も人為的に埋め戻された可能性が高い。



1. 灰褐色粘質土 (黒色土ブロック・地山ブロック含)

第77図 SKe07平・断面図 (1/40)



第78図 SKe09・19平・断面図 (1/40)

本土坑からは、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器焙烙、肥前系染付皿などの小片が、小袋1袋程度出土した。出土遺物の内容から、本土坑の時期は18世紀後半頃と推定される。

SKe20 (第79図・図版12)

Ⅱ-7区I57グリット, SDe09の西に接して検出した土坑である。平面形は、長軸1.1m, 短軸1.0mの整った隅丸方形を呈する。深さは0.28m, 底面の標高は15.22mである。断面形は播鉢状を呈し、やや南に片寄って最深部となる。埋土は明灰色極細砂質土の単層で、暗茶褐色粘質土のブロック土を含む。埋土の特徴より、本土坑も人為的に埋め戻された可能性が高い。

本土坑も遺物の出土は認められず、時期の決定は調査担当者の所見に従った。

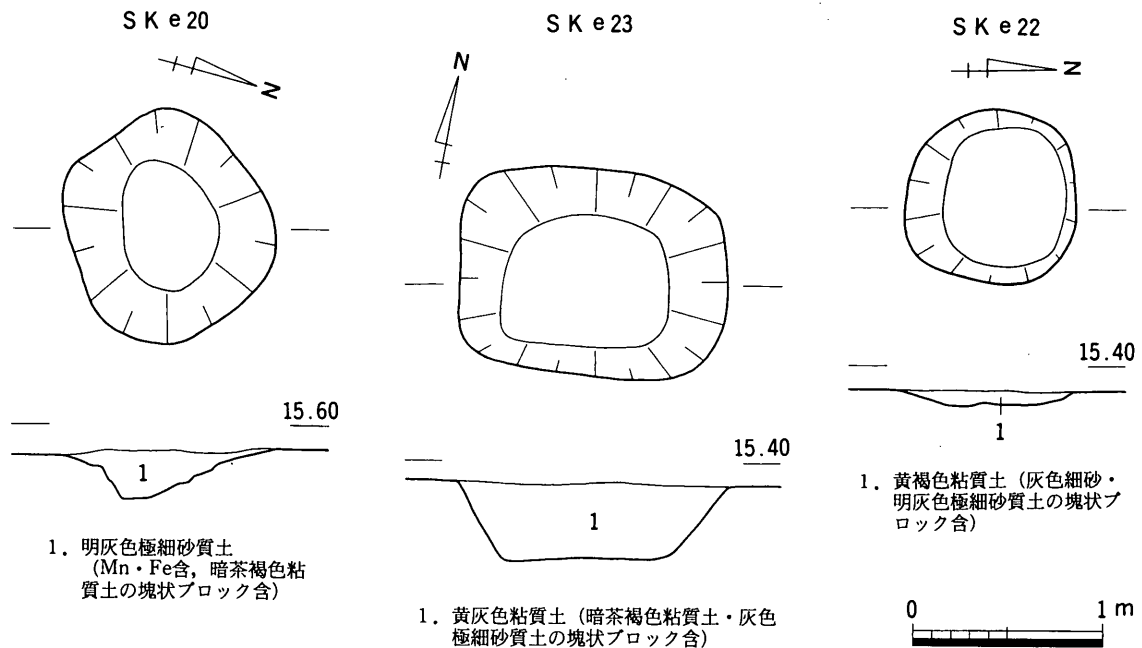
SKe22 (第79図)

Ⅱ-7区I57グリット, SDe10に接するように検出した土坑である。平面形は、長軸0.86mの楕円形を呈する。深さは0.08mしかなく、上面は顕著な削平を被っているようである。底面の標高は15.20mである。断面形は浅い皿状を呈し、底面には細かな起伏が認められる。埋土は黄褐色粘質土の単層で、灰色細砂及び明灰色極細砂質土のブロック土を含む。埋土の特徴より、本土坑も人為的に埋め戻された可能性が高い。

本土坑も遺物の出土は認められず、時期の決定は調査担当者の所見に従った。

SKe23 (第79図)

Ⅱ-7区I57グリット, SDe10の東に接するように検出した土坑である。平面形は、長軸1.5m, 短軸1.1m, 主軸方向N85.5° Eの東西に長い隅丸長方形を呈する。南半部上面を攪乱により削平を被るが、ほぼ全形を知りうることはできる。深さは0.4m, 底面の標高は14.90mである。断面形は逆台形状



第79図 SKe20・22・23平・断面図 (1/40)

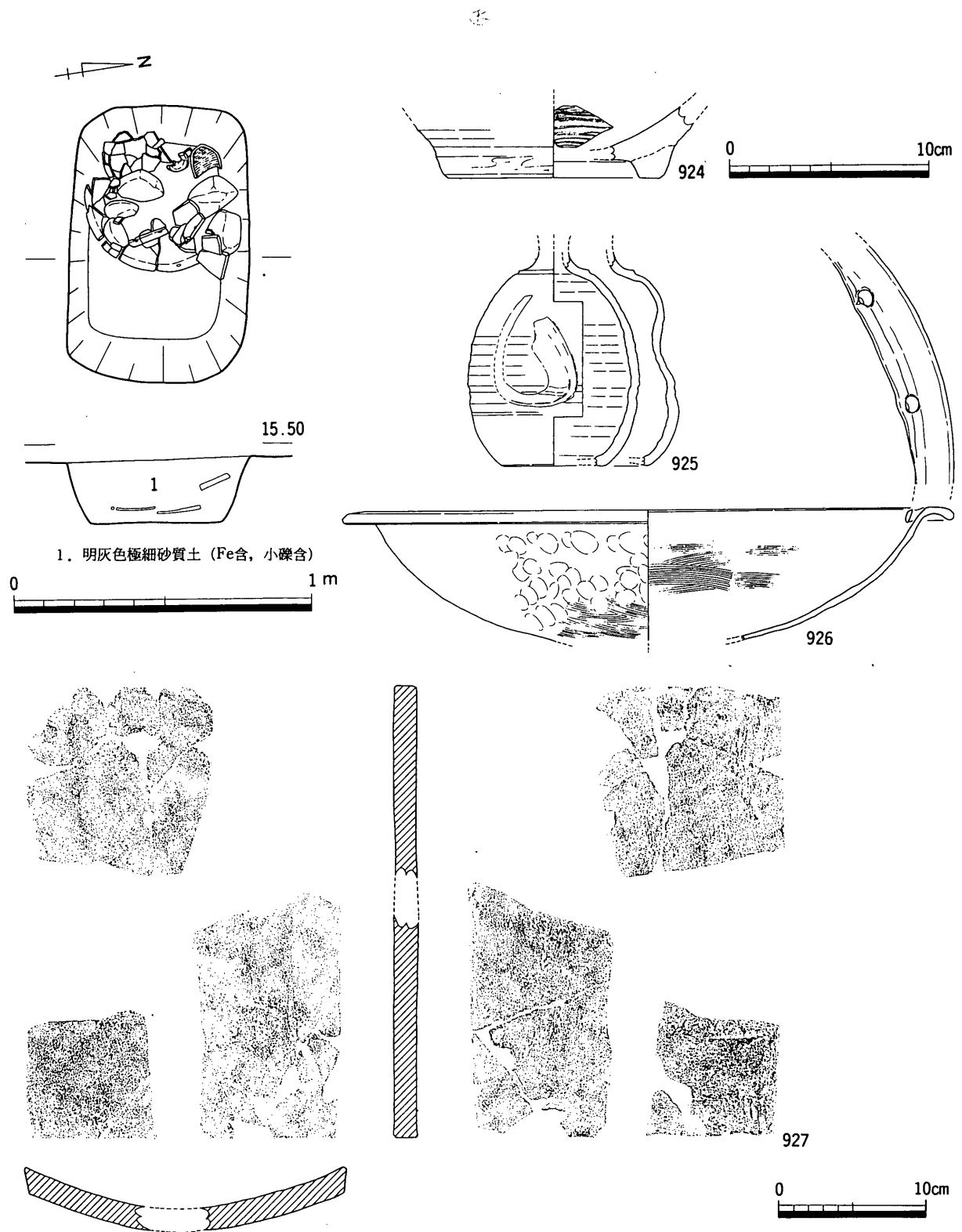
を呈し、東肩がやや緩やかに掘り込まれる。底面は概ね平坦である。埋土は黄灰色粘質土の単層で、暗茶褐色粘質土及び灰色極細砂質土のブロック土を多量に含む。埋土の特徴より、本土坑も人為的に埋め戻された可能性が高い。

本土坑も遺物の出土は認められず、時期の決定は調査担当者の所見に従った。

SKe25 (第80図・図版12・73)

II-7区 I56グリットで検出した土坑である。SKe26上面より掘り込まれる。平面形は、長軸0.89m、短軸0.61mの整った長方形を呈する。主軸方向N80°Wであり、SDe10と概ね直交する位置関係にある。深さは0.44m、底面の標高は15.24mである。断面形は整った逆台形状を呈し、底面は概ね平坦である。埋土は明灰色極細砂質土の単層であった。

遺物は、土坑西半部を中心に底面より4~5cmほど上位より拳大から人頭大の自然礫数個とともに土師質土器焙烙1個体が出土している。口縁部を上にも正置した状態で出土したが、欠損部や小破片が散乱した状況が窺え、破損後廃棄したものであろう。また埋土中から、少量の土器、陶磁器片と巻貝1点が出土した。このうち4点を図示した。924は肥前系陶器の刷毛目鉢である。内面には白土で刷毛目文が施され、外面には褐釉が厚く塗られている。925は備前系の徳利。体部中央は指頭の押圧によるへこみを有する。外面と頸部内面ににぶい褐色の塗り土が施される。926は土師質土器焙烙である。口縁部は外反し、屈曲部内面に2ヶ所の内耳が付される。内耳には2孔1対の円孔が穿たれているが、いずれも貫通している。空港跡地遺跡での編年案(佐藤1994)のa型式に分類される。927は平瓦である。焼成はあまく土師質に近い。10片程度の破片となって出土したが、胎土・調整・色調等からすべて同一個体と考えられる。2次的な火熱を受けて、凹面は変色している。上記した遺物の内容から、本土坑の時期は18世紀代に位置付けられる。



第80図 SKe25平・断面図 (1/20), 出土遺物実測図 (1/3・1/4)

SKe26 (第81図)

Ⅱ-7区 SKe25と重複して検出した土坑である。切り合い関係より、SKe25より先行する。平面形は、長軸0.63m以上、短軸0.63mのいびつな隅丸形状を呈する。深さは0.12mを測り、底面の標高は15.32mである。

遺物は、小袋1袋程度と少ない。土師質土器足釜・焙烙、肥前系染付皿、平瓦などの小片が出土して

おり、1点を図化した。928は肥前系磁器皿である。外面には唐草文が、内面には笹や松が描かれる。出土した遺物の内容から、本土坑の時期は18世紀代に位置付けられる。

**SKe27 (第82図)**

Ⅱ-7区 I 57グリット, SDe09の西に接するように検出した土坑である。南西隅上面を攪乱により損壊を受けるが、ほぼ全形を知りうる。平面形は、長軸1.2m, 短軸1.1mのややいびつな方形を呈する。深さは0.34m, 底面の標高は15.05mである。断面形は整った逆台形状を呈する。底面は平坦である。埋土は、明灰色極細砂質土の単層で、暗茶灰色粘質土及び黄灰色粘質土のブロック土を多量に含む。埋土の特徴より、本土坑も人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物は、弥生土器, 素焼陶器, 土師質土器足釜・焙烙, 瓦質土器焙烙, 肥前系陶器皿などの小片が、小袋1袋程度出土したにすぎない。このうち1点を図示した。929は肥前系の陶器皿である。外面は無釉で、内面にはオリーブ色の釉が掛けられ、見込み部分を蛇の目釉剥ぎされる。17世紀後半から18世紀前半代の製作年代が想定される。他の遺物からすれば、本土坑の時期はやや後出する18世紀後半代に位置付けられる。

**SKe28 (第83図)**

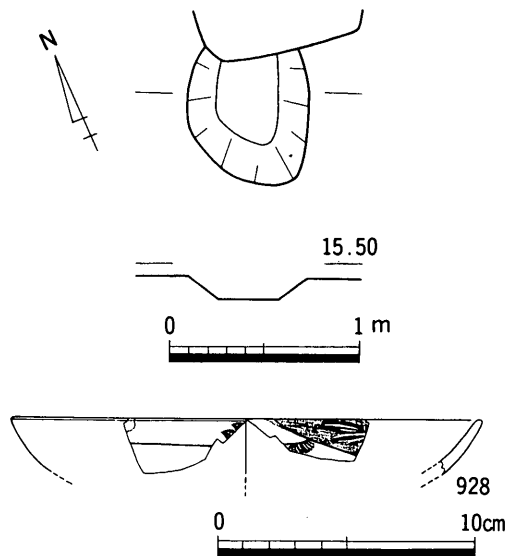
Ⅱ-7区 I 57グリット, SDe10の東に添うように検出した土坑である。攪乱底面で検出したため、上面は大きく削平を被る。平面形は、長軸1.6m, 短軸1.1mの整った隅丸長方形を呈する。主軸方向N16° Eを測り、SDe10とほぼ並行に配される。深さは0.18mしかなく、底面の標高は14.86mである。周壁は緩やかに掘り込まれ、短軸方向での断面形は皿状を呈する。埋土は灰色シルトの単層で、小礫を少量混じえる。

遺物は、図示した遺物のほか、土師質土器小片が1点出土したのみである。930は肥前系の陶器碗の底部である。にぶい橙色を呈する緻密な胎土に、灰釉が施される。18世紀代に位置付けられよう。

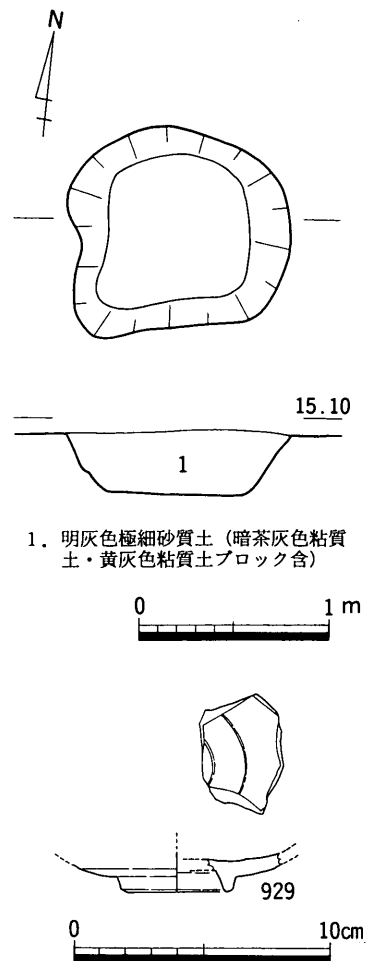
**SKe29 (第83図)**

Ⅱ-7区 I 57グリット, SDe10の東に接して検出した土坑である。平面形は、長軸1.3m, 短軸1.1mのややいびつな隅丸形状を呈する。深さは0.38mを測り、断面形は概ね皿状を呈する。底面の標高は14.94mである。埋土は灰褐色砂質土の単層で、地山土及び黒色粘土のブロック土を含む。

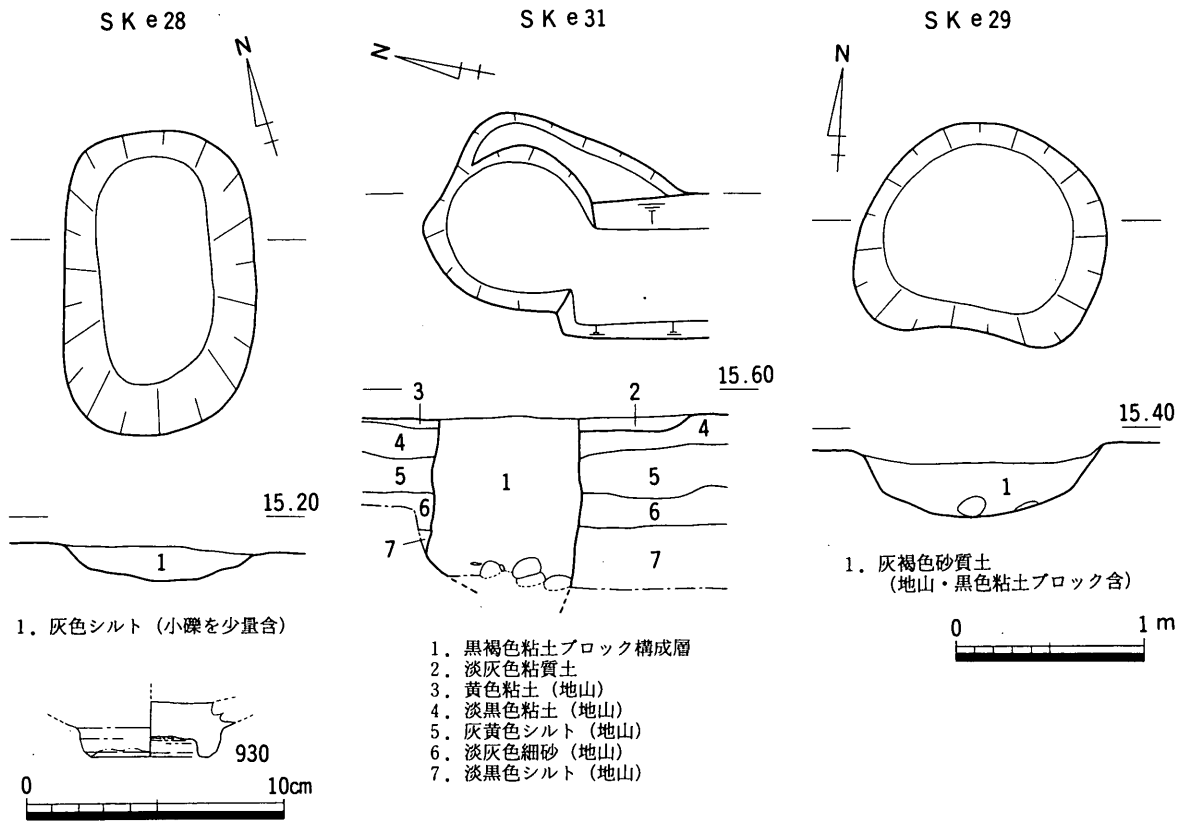
遺物は、肥前系染付皿細片1点と平瓦片1点が出土したのみである。出土した遺物の内容から、18世



第81図 SKe26平・断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/3)



第82図 SKe27平・断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/3)



第83図 SKe28・29・31平・断面図 (1/40), SKe28出土遺物実測図 (1/3)

紀代以降に比定される。

#### SKe31 (第83図)

Ⅱ-7区J56グリット, SDe09の西に接するように検出した土坑である。平面形は、径0.74mの略円形を呈する。南端部の一隅を攪乱により損壊を被る。深さは0.86m以上を測る。断面形は垂直に掘り込まれた箱状を呈するが、完掘しておらず底面の形状は不明である。掘削部底面で、長径10~15cmの河原石が多数検出された。埋土は単層で、黒褐色粘土のブロック土を多量に含んでおり、人為的に埋め戻された可能性が高い。本土坑は、その断面形状から井戸の可能性が高いものと推定されるが、掘削が底面まで達しておらず、透水層である砂礫層との関係も不明瞭なため、土坑として報告する。

遺物は、弥生土器、瓦質土器、肥前系陶器刷毛目皿などの小片が、小袋1袋程度出土したのみである。出土遺物の内容から、本土坑の時期は17世紀後半から18世紀代に比定される。

#### SKe32 (第84図)

Ⅱ-7区J56グリットで検出した土坑である。東半部の大半を攪乱により削平されており、平面形状は不明瞭である。残存部で、南北1.4m、東西0.4mの弧状を呈する。深さは残存部で0.44mを測る。断面形は概ね皿状を呈するが、南肩付近では検出面下0.15mのところ、壁面の崩落により抉れて袋状を呈する。埋土は暗灰黄色砂質土が堆積し、埋土中に含まれるブロック土の大きさにより2層に細分された。下層により大きなブロック土が混在する。埋土の特徴から、人為的な埋め戻しの可能性が高い。

本土坑も遺物の出土は認められず、時期の決定は調査担当者の所見に従った。

#### SKe33 (第84図)

Ⅱ-7区J56グリットで検出した土坑である。南端部をSKe34に切られる。平面形は、長軸1.4m以



上、短軸0.8mの南北に長い隅丸長方形を呈する。主軸の方向はN27° Eを測る。深さは0.06mしかなく、上面は顕著な削平を被っていることが想像される。底面の標高は15.03mを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は明灰色極細砂質土の単層であった。

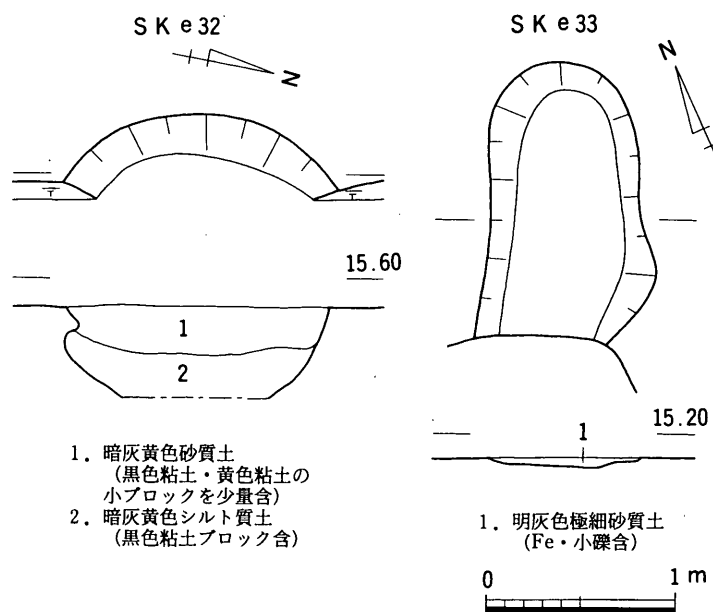
本土坑も遺物の出土は認められず、時期の決定は調査担当者の所見に従った。

### SKe35 (第85・86図・図版72・73)

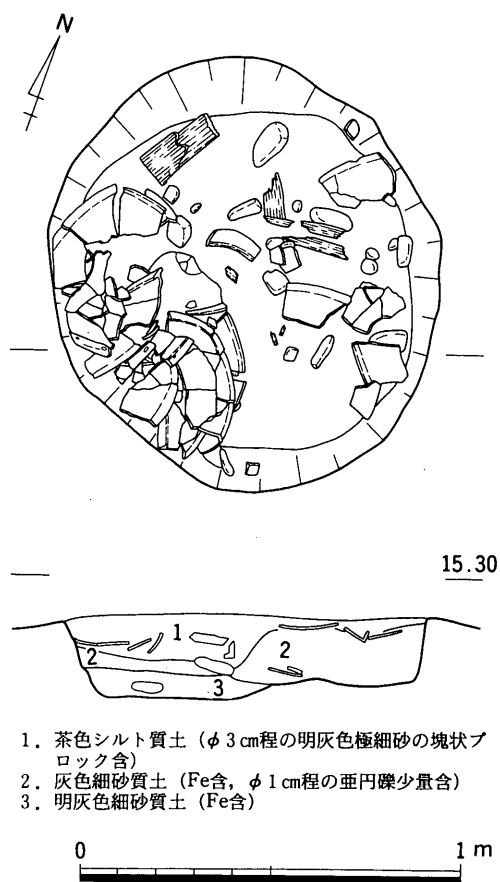
II-7区J56グリットで検出した土坑である。SKe38・39と重複し、切り合い関係より両土坑より後出する。平面形は、径1.0~1.13mの楕円形を呈する。深さは0.22m、

底面の標高は14.98mを測る。断面形は概ね逆台形状を呈する。底面はやや西半部が深く掘り込まれ、わずかな起伏が認められる。埋土は3層に細分された。上層は茶色シルト質土で、長径3cm程度の明灰色極細砂のブロック土及び多量の遺物を含んでおり、人為的に埋め戻された可能性が高い。中・下層は、灰色系の細砂質土が堆積する。

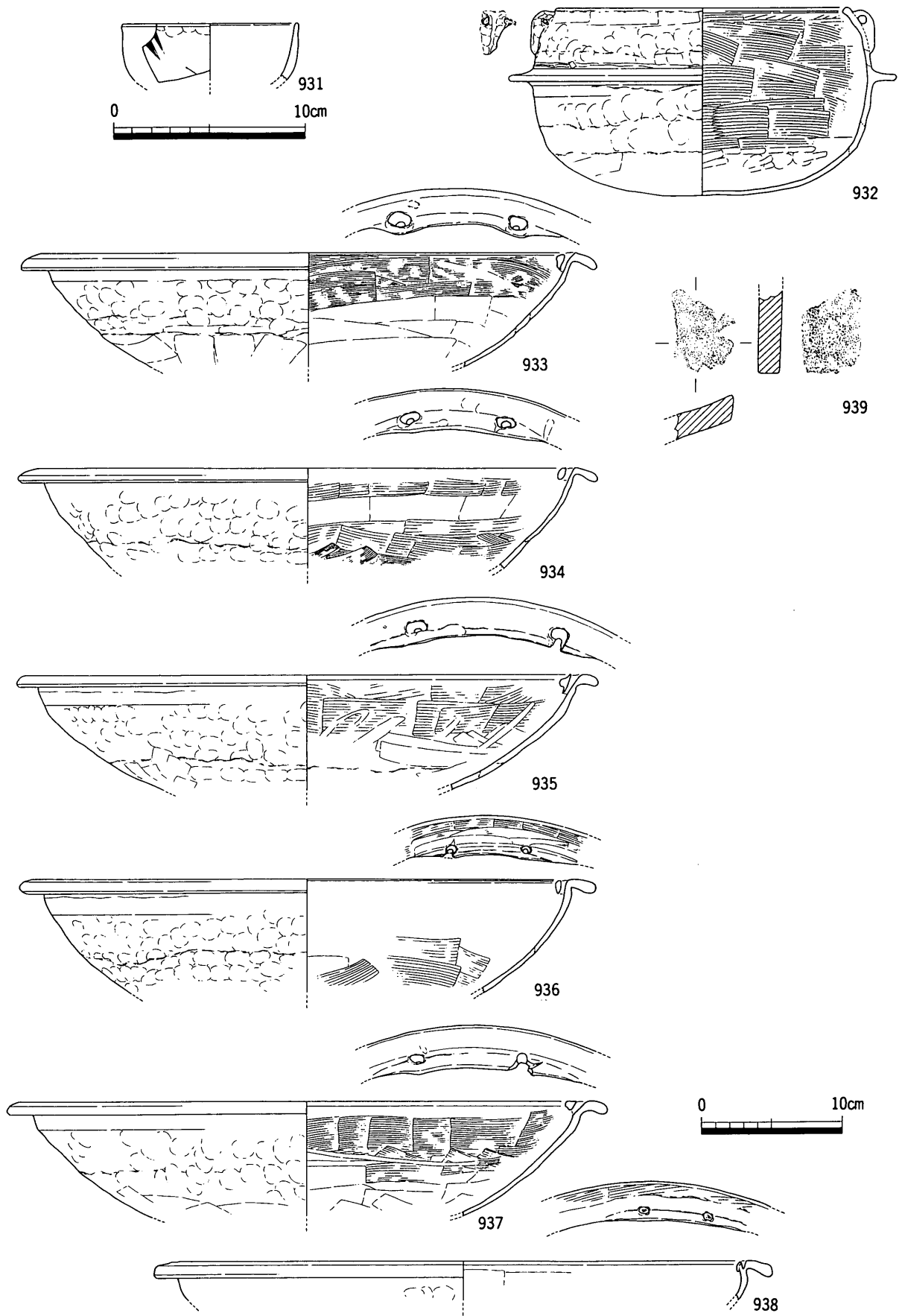
本土坑からは、埋土上層を中心に多量の遺物が出土している。特に土坑西半部では、5個体もの土師質土器焙烙が一括投棄された状態で折り重なるように出土した。また瓦質土器羽釜もほぼ完形に近い状態まで復元される。このほか備前焼水甕口縁部小片や土師質と瓦質の平瓦片各1点などが出土している。このうち9点を図示した。931は、18世紀後半代の京焼系色絵陶器の丸腰の碗である。灰白色の胎土に、明オリーブ色の釉が掛けられ細かな貫入が入っている。外面には笹が赤色釉の上絵付で描かれている。932は瓦質土器羽釜である。焼成はあまく土師質に近い。口縁部等の一部を欠くが、完形に近く復元される。口縁部に1個の円孔が開けられた外耳を一對有する。内面は粗い横ハケによって平滑に調整されているが、外面調整は指頭痕やナデを主体としており、調整は粗雑で粘土紐接合痕が明瞭に残される。底部内面に炭化物が付着する。933~937は土師質土器焙烙である。いずれもほぼ完形に近い状態で出土したが、底部を中心に細片化しており完形にまで接合することはできなかった。いずれも半球形の体部より口縁部は強く折れて外反して開き、屈曲部内面に一對の内耳が付される。内耳に穿たれた2孔1対の円孔は貫通しておりa型式に



第84図 SKe32・33平・断面図 (1/40)



第85図 SKe35平・断面図 (1/20)



第86图 SKe35出土遺物実測図 (1/3・1/4)

分類される（佐藤1994）。胎土には径3mm以下の石英粒等が少量認められるのみで、水簸された細かな素地粘土が用いられる。なお936は、体部上端は直立し、口縁部は屈曲部が直角に近く折り返される。内耳に穿たれた円孔も小さく、b類に近い特徴を備え、他の一群より型式的には後出すると考える。938は瓦質焼成の焙烙。先の土師質の焙烙は5個体が一括して出土したが、938は埋土中より細片となって出土した。938は口縁部形態は土師質のものに近似するが、内耳に開けられた円孔が貫通せず形骸化しておりb型式に下る。なお933～937は胎土・形態・成形手法などが酷似しており、同一地域で生産された可能性が高い。いずれも外面には煤が顕著に付着しており、使用後5個体を一括して廃棄したのであろうか。939は平瓦小片である。焼成はあまく土師質に近い。胎土も粗く、石英粗粒が少量含まれる。表面はかなりマメツしており、他遺構からの混入の可能性が高い。本土坑の時期は、出土遺物の内容から18世紀後半代に位置付けられよう。

#### SKe36（第87図）

II-7区J56グリット，SDe09の西に接するように検出した土坑である。平面形は、径0.8mの略円形を呈し、東端部は攪乱により削られる。深さは0.2mしかなく、底面の標高は15.10mを測る。断面形は概ね逆台形状を呈する。底面は概ね平坦で、わずかに西へ傾斜する。埋土は明灰色細砂質土の単層で、埋土中に灰色シルトがラミナ状に混じる。

本土坑からは小木片が1点出土したのみで、出土遺物のみから時期を決定することは困難である。時期の決定は調査担当者の所見に従った。

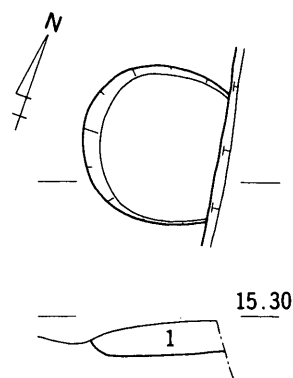
#### SKe37（第88図・図版13）

II-7区西端J56グリットで検出した土坑である。平面形は、長軸1.4m、短軸0.9m以上あり、西端部は調査区外に延長するため全体の形状は不明瞭である。検出部分で南北に長い隅丸方形形状を呈する。深さは0.1mしかなく、断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は15.08mを測る。埋土は灰色細砂質土の単層で、長径1cm程度の暗灰色シルトの塊状ブロック土を含んでいる。

本土坑も遺物の出土は認められず、時期の決定は調査担当者の所見に従った。

#### SKe39（第89図）

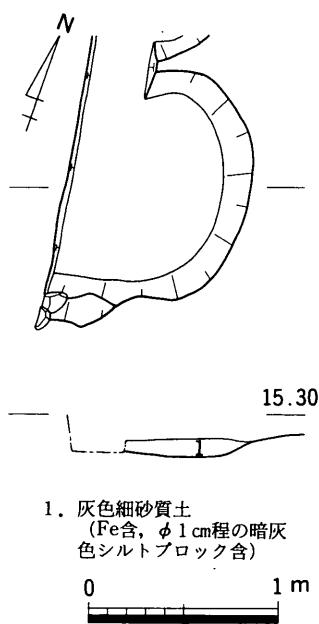
II-7区J56グリットで検出した土坑である。南半部を攪乱により削平される。掘り方の平面形は不明。東西幅1.0m、深さ0.2mで、断面形は底面が概ね平坦な逆台形状を呈する。埋土は淡灰褐色砂質土の単層であった。本土坑では掘り方内部で、径60cm程の円形の木桶を検出した。木桶は掘り方底面よりやや浮いて、ほぼ水平に正置させて据えられていた。上面は大きく削平されているため、木桶は高さ15cm程の基底部しか遺存しておらず、本来はもう少し深い形態であったと考えられる。約半分を攪乱により壊されているため、側板14～15枚と底板を検出したのみである。取り上げ時に破損し、また取り上げ後の処置が不適切であったため、細かな形状については不詳である。桶内埋土は灰色系シルトが堆積し、色調により2層に細分された。



1. 明灰色細砂質土  
(Fe含、灰色シルトを  
ラミナ状に含)



第87図 SKe36平・断面図(1/40)



1. 灰色細砂質土  
(Fe含、φ1cm程の暗灰  
色シルトブロック含)



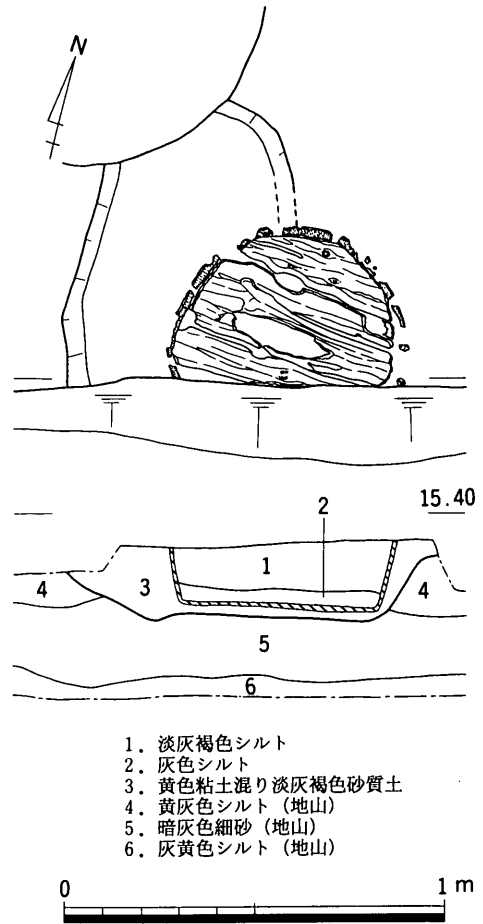
第88図 SKe37平・断面図(1/40)

遺物は、素焼陶器、瓦質土器焙烙b型式などの小片が3点出土したのみである。出土遺物の内容から、本土坑の時期は、概ね18世紀後半代以降に位置付けられよう。

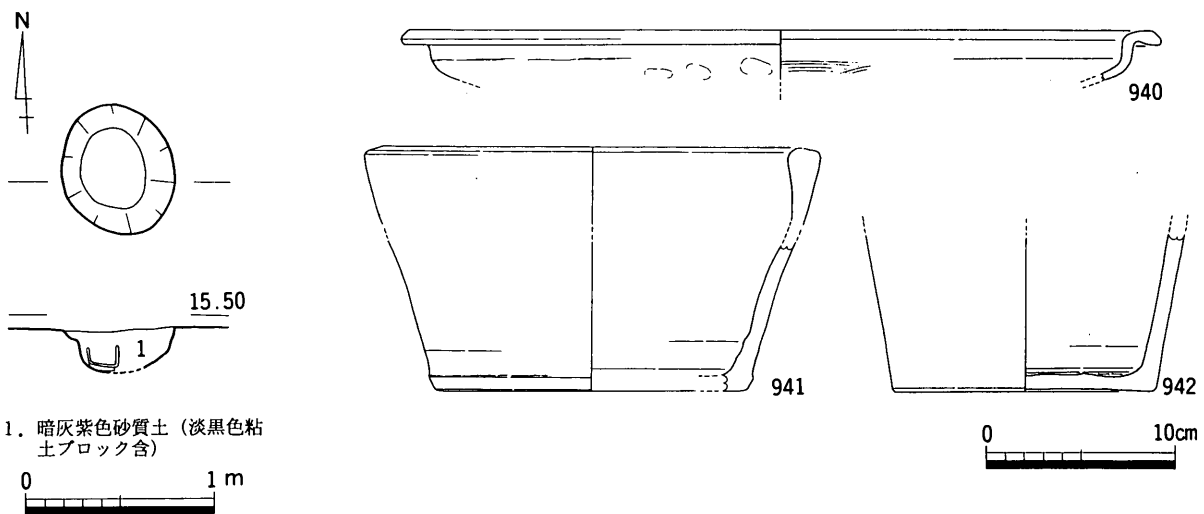
**SKe40 (第90図)**

Ⅱ-7区J57グリット, SDe10の東に接するように検出した土坑である。平面形は、径0.6mの略円形を呈する。深さは0.2m、底面の標高は15.22mを測る。断面形は概ね逆台形状を呈する。底面は中央部が約8cm程盛り上がり起伏に富む。埋土は暗灰紫色砂質土の単層で、淡黒色粘土のブロック土を含んでおり、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物は、土坑やや西寄り、底面より数cm程上位で陶器火鉢(941)がほぼ正置の状況で出土したほか、瓦質土器焙烙などの小片が少量出土している。このうち3点を図示した。940は瓦質土器焙烙である。内耳部分は出土していないが、口縁部直下体部上端が垂直に近く立ち上がることと、焼成が良好な瓦質を呈することから、b型式に分類される可能性が高い。941・942は素焼陶器である。941は火鉢と考えられ、内面は劣化し器表面の剥離が顕著である。体部外面上半部及び内面下半部に煤が付着する。942は941と同一焼成の底部片であり、形状から火鉢の可能性が高い。941同様に体部上半部は内外面に煤が付着する。出土遺物の内容から本土坑の時期は、18世紀後半代以降に位置付けられよう。



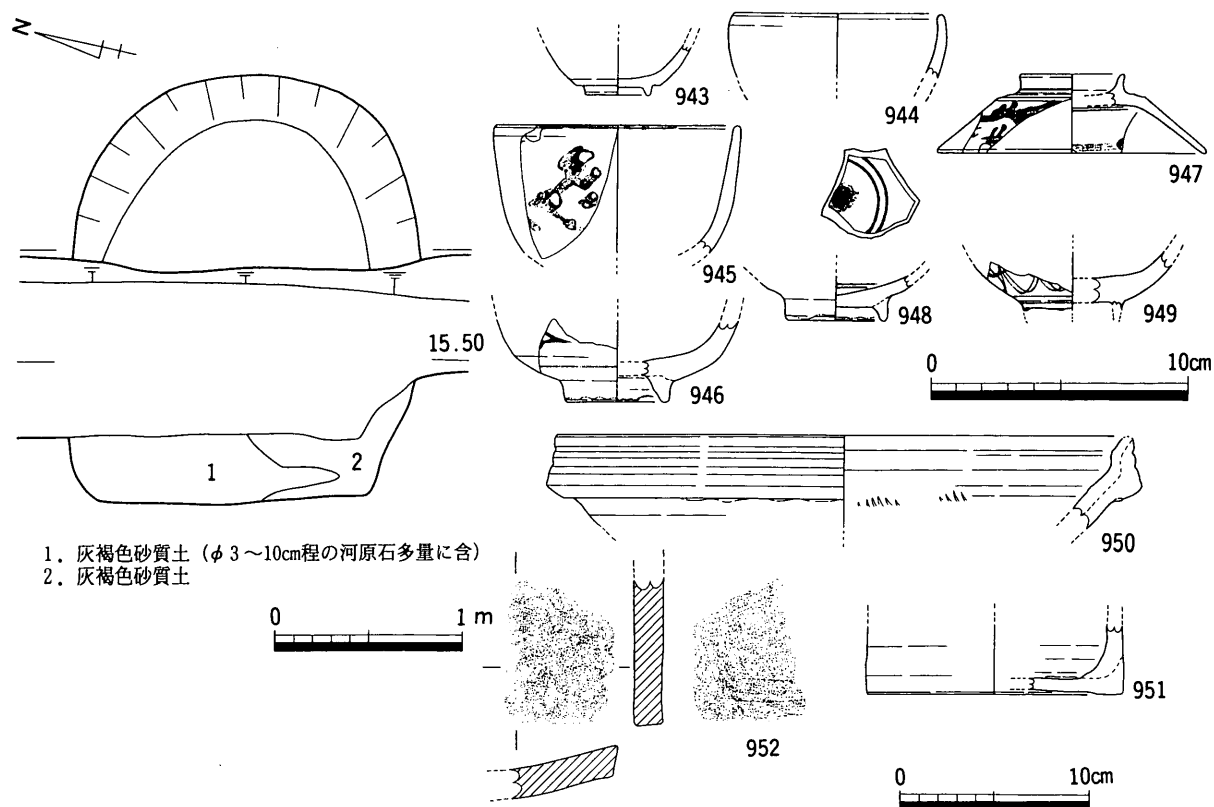
第89図 SKe39平・断面図 (1/20)



第90図 SKe40平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)

**SKe41 (第91図)**

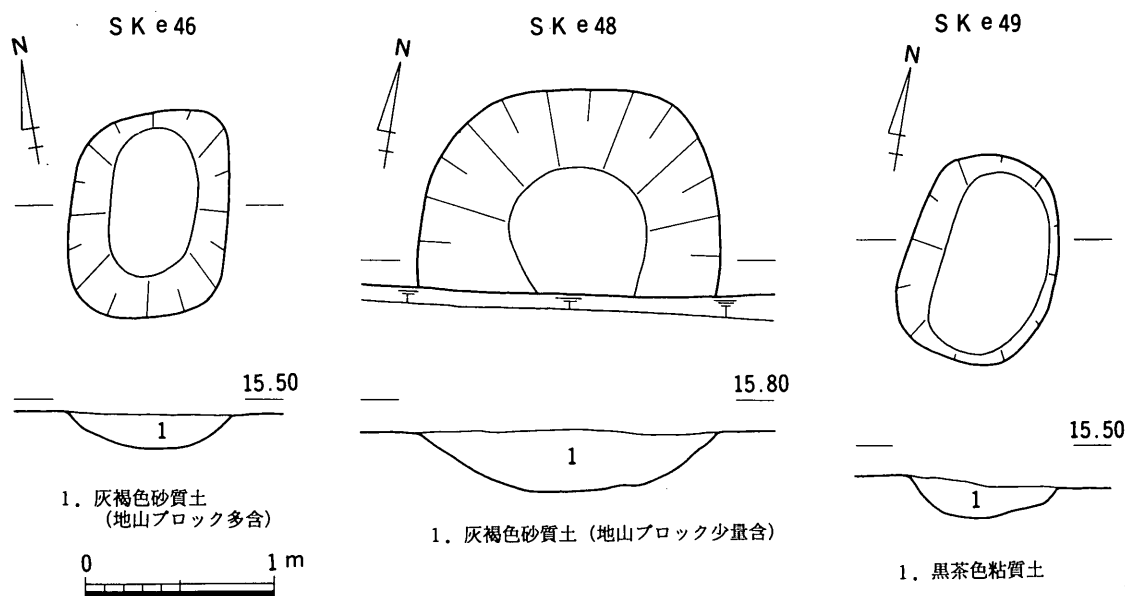
Ⅱ-7区J56グリット, SDe10の底面で検出した土坑である。後述するように出土遺物はSDe10の開削時期より後出する可能性が高く、溝底に設けられた溝に付随する何らかの水利施設であった可能性があるが、具体的にどのような施設であったかは不詳である。西半部の大半を攪乱により損壊を被ってお



第91図 SKe41平・断面図 (1/40)、出土遺物実測図 (1/3・1/4)

り、平面形状は不明瞭。残存部で、南北2.4m以上、東西1.0m以上の南北に長い楕円形を呈する。深さは0.62mを測り、断面形は逆台形状を呈する。底面は平坦で、わずかに北に傾斜する。底面の標高は14.78m前後である。埋土は、灰褐色砂質土が堆積し2層に細分された。北半部を中心に長径3～10cmの河原石が多数出土した。

遺物は、備前系播鉢、瀬戸系小碗、染付皿・碗、平瓦片2点、丸瓦片1点などが小袋1袋程度出土したのみである。このうち10点を図示した。943は信楽焼の京焼風陶器の碗である。胎土は白色の緻密な土で、淡黄色味がかった透明釉が掛けられ全面に細かな貫入が入っている。幕末頃の製作年代が想定される。本土坑の出土遺物中、最も後出する生産年代が与えられ、本土坑の埋没時期の一端を示していると考えられる。944は陶器碗である。内外面に透明釉が掛けられる。産地は不明である。945は肥前系の陶器碗である。口縁端部に口錆釉が施され、外面に鉄釉で斑点状の文様が付される。17世紀代に位置付けられる。946は肥前系の陶胎染付の碗である。高台端部に錆釉が施される。18世紀代に位置付けられる。947は肥前系磁器碗蓋である。いわゆる落とし蓋で、天井部より屈曲して口縁部は直線状に開く。内外面に染付文様が描かれる。18世紀後半から幕末頃に位置付けられる。948は肥前系の青磁染付の碗である。外面には青磁釉が厚く掛けられ、内面見込みにはかなり崩れたコンニャク判の五弁花を施す。18世紀後半代に位置付けられる。949は肥前系磁器碗。いわゆるくわんか碗と呼ばれる分厚い作りの粗製の碗で、淡い青緑色がかった釉が掛けられている。外面に割筆による二重網目文が描かれる。18世紀代に位置付けられる。950は備前焼播鉢。直立する口縁部を有し、口縁部外面上下端には重焼きの熔着痕が認められる。951は備前系筒状深鉢。器表内面に塗り土を認める。952は平瓦。炭素の吸着は良好で、一部銀色に発色する。凸面は縦方向の板ナデ調整の後、短側辺付近を横方向に強いナデ調整を加える。



第92図 SKe46・48・49平・断面図 (1/40)

SKe46 (第92図)

Ⅱ-7区J57グリットで検出した土坑である。平面形は、長軸1.1m、短軸0.85mの整った隅丸方形状を呈する。主軸の方向は、N13°Eを測り、SDe10とほぼ並行に配される。深さは0.18mしかなく、底面の標高は15.24mを測る。周壁は比較的緩やかに掘り込まれ、断面形は皿状を呈する。埋土は灰褐色砂質土の単層で、地山層のブロック土を多量に含む。埋土の特徴から、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、土師質土器の甕体部小片が2点出土したのみである。出土遺物のみから本土坑の時期を推定することは困難であり、時期決定は調査担当者の所見に従った。

SKe48 (第92図)

Ⅱ-7区K57グリットで検出した土坑である。南半部を攪乱溝により大きく損壊を被る。残存部より平面形は、東西1.55m、南北1.05m以上の長円形ないし隅丸方形状を呈するものと思われる。深さは0.32m、底面の標高15.32mを測る。断面形は、周壁が緩やかに掘り込まれた皿状を呈する。埋土は灰褐色砂質土の単層で、地山層のブロック土が少量含まれる。

本土坑も遺物の出土は認められず、時期の決定は調査担当者の所見に従った。

SKe49 (第92図・図版14)

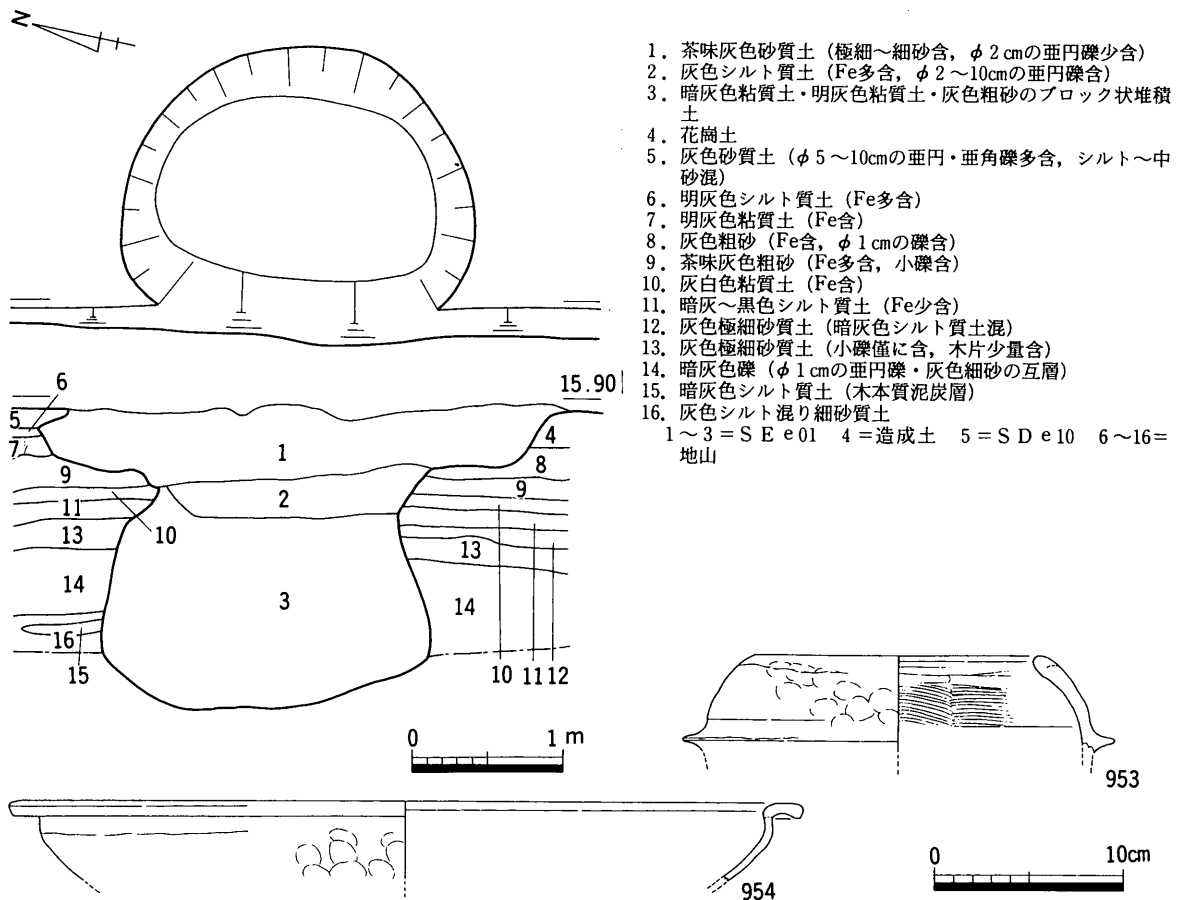
Ⅱ-7区K57グリットで検出した土坑である。平面形は、長軸1.05m、短軸0.85mの隅丸長方形を呈する。主軸方向はN9.5°Eを測り、SDe10とほぼ並行に配される。深さは0.2mしかなく、断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は15.22mであった。埋土は、黒茶色粘質土の単層である。

本土坑も遺物の出土は認められず、時期の決定は調査担当者の所見に従った。

②. 井戸

SEe01 (第93図・図版15)

Ⅱ-7区西壁際、J56グリットで検出した素掘りの井戸である。西端部は調査区外に延長し、東端部は上面を攪乱により削平を被る。残存部より判断して、平面形は長径1.8mの楕円形を呈する。調査区



第93図 SEe01平・断面図 (1/50), 出土遺物実測図 (1/4)

西壁の土層断面の観察によれば, 本井戸周辺では旧耕作土層は削除され, 地山層上面に旧空港造成土と考えられる花崗土が盛られる。本井戸はこの花崗土上面より掘り込まれており, また本井戸を切って SDe10が掘削されている。しかしながら, SDe10の埋没は旧空港造成時の昭和19年であり, 土層断面の観察の結果からは SDe10の埋没は空港造成時より遅れることになる。土層断面を撮影した写真からは異なる解釈も導けそうであるが, 詳細は不明である。深さは1.9mを測り, 断面形は検出面下0.7～1.5mの位置で大きく抉れて袋状を呈する。底面は概ね平坦であり, 底面の標高は13.90mを測る。本井戸は透水層である暗灰色礫層を掘り抜いて構築されており, この礫層部分で壁面は崩落し袋状となる。埋土は3層に分層された。上位2層は地山層に含まれていた亜円礫を含み, 下層はブロック土を多量に含むことから, 基本的には人為的な埋め戻し土で充填されているといえる。石組などの施設を伴っていないことから, 掘削後短期間の内に廃絶されたのであろう。

遺物は, 瓦質土器焙烙・羽釜, 備前系播鉢・徳利・甕体部などの小片が小袋1袋程度出土したのみである。このうち2点を図示した。953は瓦質土器の羽釜である。内傾する口縁部の下端に突出度の弱い鐙を付す。鐙下位外面には煤が付着する。954は瓦質土器焙烙である。内耳部分を欠損するが, 良好な瓦質焼成であり, 口縁部直下が垂直に立ち上がることから, b型式に分類される可能性が高い。

#### SEe02 (図版16)

II-7区K57グリットで検出した石組井戸である。平面形は, 長軸2.5m, 短軸2.0mのややいびつな隅丸長方形を呈する。掘り方北西隅より SDe16が西に延びる。調査段階では, 埋土の切り合い関係より井戸が後出することが確認されているが, 井戸東方に溝が延長しないことから, SDe16は本井戸に伴う

排水溝であり、埋没時期の差が埋土の相違を生じたものと理解したい。石組は掘り方の東方にやや片寄って構築されている。また棒状の石材を主体に小口積みによって円形に積み上げられており、背後に裏込めの石を伴うようである。本井戸については図面等の記録が残されておらず、詳細は不明である。

本井戸からは、近世から近・現代の遺物が出土したようである。

### ①. 溝状遺構

#### SDe03

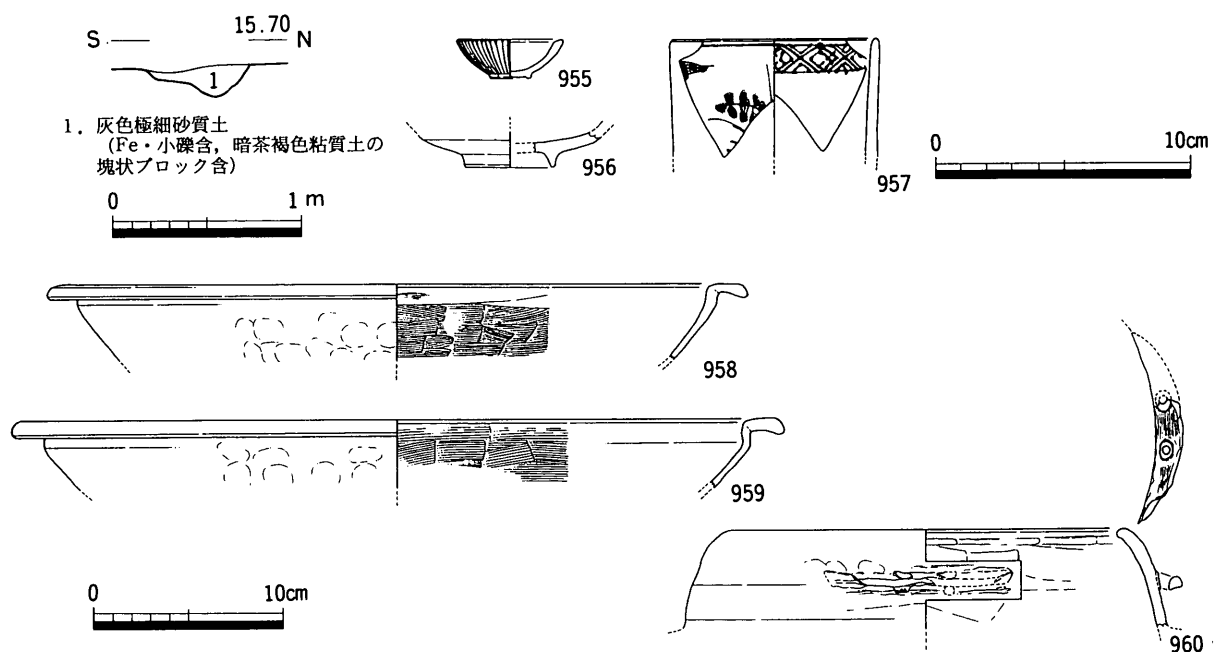
II-7区H56・57グリットで検出した東西走る溝状遺構である。西端は調査区外に延長し、東端は調査区内で終結する。延長11.7mを検出した。SDe02・04・05, SKe03と重複し、切り合い関係よりSKe03より先行し、他の溝より後出する。流路方向N85.2° E, 幅0.41m, 深さ0.05mで、断面形は浅い皿状ないし中央部がわずかに盛り上がったW字状を呈する。底面の標高は、15.5m前後にある。埋土は灰色極細砂質土の単層である。

遺物は出土しておらず、時期決定は調査担当者の所見に従った。

#### SDe06 (第94図)

II-7区I56グリット周辺において検出した東西走る直線溝である。西端は調査区外に延長し、東端はSDe10に合流する。中央部で小溝が北に分岐する。流路方向N83° Wで、SDe08・10と直交する位置関係にある。幅0.52m, 深さ0.17mを測る。断面形は概ねU字状を呈する。最深部は北辺部に偏り、南肩には幅0.1~0.4mのテラス部が伴う。底面の標高は15.4m前後で、底面の高低差から東に流下しており、SDe10への排水機能が想定される。埋土は灰色極細砂質土の単層で、SDe05との重複部位を中心に、SDe05埋土の暗茶褐色粘質土のブロック土が混入する。

遺物は、コンテナ半箱程度出土している。器種・内容は、弥生土器片、土師質土器甕底部・足釜、瓦質土器羽釜・焙烙、肥前系磁器碗・猪口、備前系播鉢、丸瓦片の他、不明鉄器・焼土塊各1点がある。羽釜・焙烙以外は、器形の判然としない小片が多い。以上の遺物のうち7点を図示した。955は磁器の



第94図 SDe06断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3・1/4)

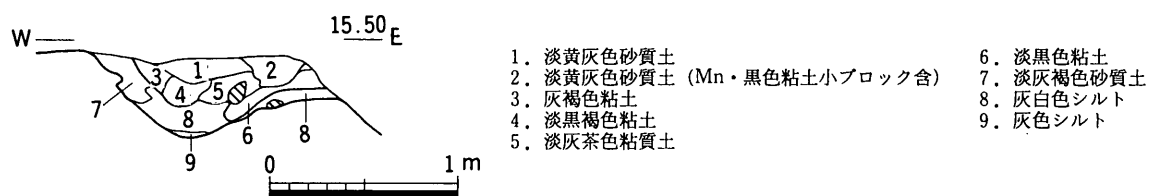


紅猪口である。底部外面付近を除いて透明釉が掛かる。956は肥前系磁器碗底部である。高台端部を除いて透明釉が施釉される。957も肥前系磁器の猪口もしくは半筒茶碗である。外面に草花文を、内面口縁部に花菱文を描く。958は瓦質の、959は土師質の焙烙である。いずれも内耳部を欠損する。960は瓦質土器の羽釜である。内傾する口縁部外面に、2孔一対の外耳を貼付する。上記した遺物はいずれも、18世紀代に納まるものとする。

#### SDe09 (第95図・図版14・15)

Ⅱ-7区を南北に縦走する溝状遺構である。東にSDe10が並走する。南北両端は調査区外に延長し、検出長40mを測る。途中SDe10と分離せずに重機にて掘削を行なったため、SDe09として確認できた部位はきわめて限られる。流路方向N10.8° E, 幅1.3m以上, 深さ0.4mを測る。断面形は、緩やかに掘り込まれたU字状を呈し、底面の標高は15.0m前後を測る。底面の高低差からすれば、流下方向は北である。

確実に本溝より出土した遺物は極めて少なく、須恵器、土師器、肥前系陶胎染付碗の細片が数点出土したのみである。出土遺物より18世紀代に位置付けられるが、併走するSDe10との関係を考慮した場合、もう少し時間幅をもたせるべきかもしれない。

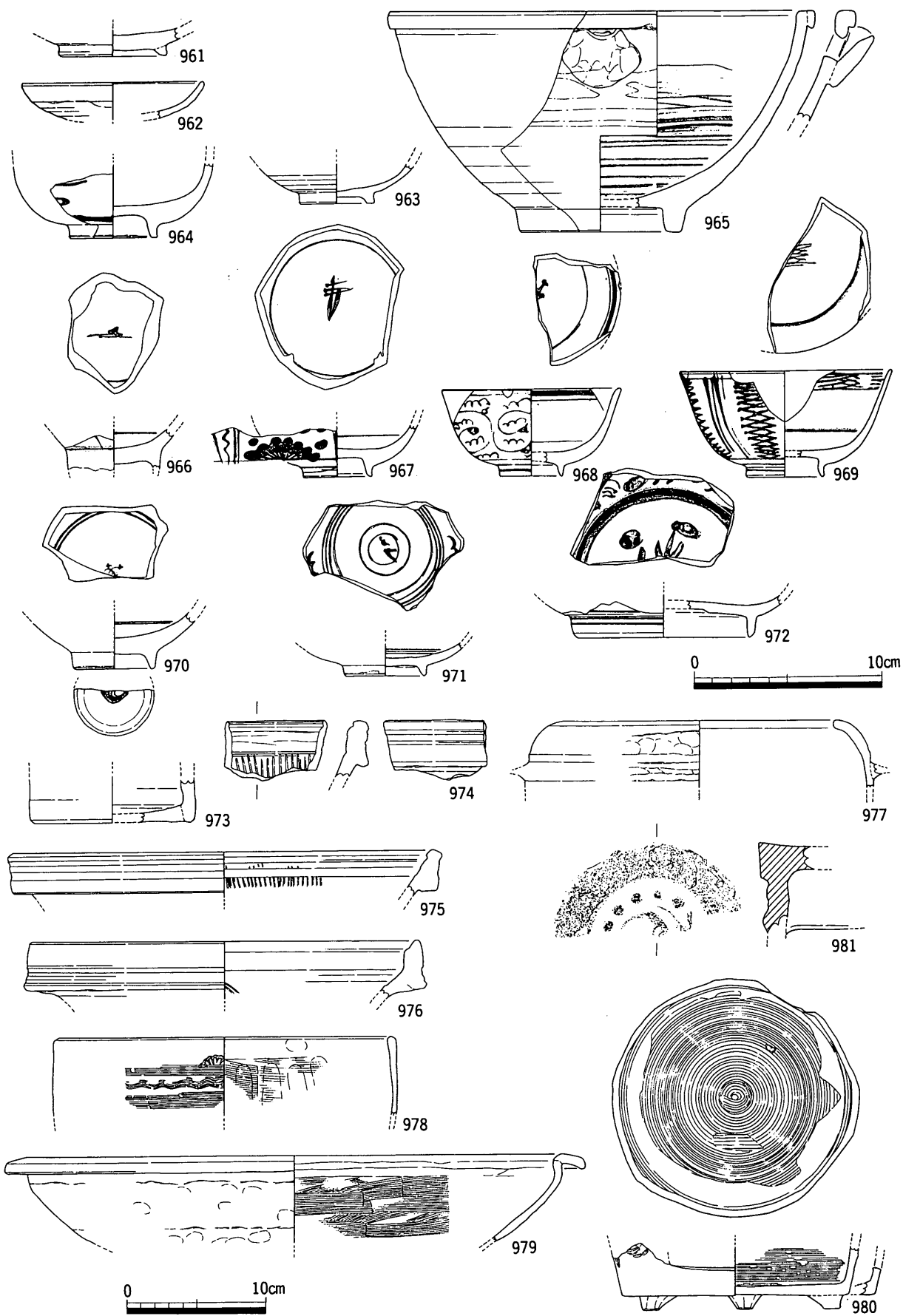


第95図 SDe09断面図 (1/40)

#### SDe10 (第96図・図版5・73)

Ⅱ-7区SDe09の東側をSDe09と並走して、南北に延びる溝状遺構である。南北両端は調査区外に延長するものと思われるが、大きく攪乱を被っており不明瞭である。南端部は攪乱坑西側に落ち込みがあり、攪乱坑部分で大きく屈曲して西に折れ曲がる可能性が高い。検出長30mを測る。流路方向N10° E, 幅2.8~4.3m, 深さ0.9mで、断面形は概ね逆台形状を呈する。底面の標高は14.5~15.1m前後となり、底面の高低差から北に流下する。本溝へは、SDe06・15・16などが流れ込んでおり、基幹水路として機能する。なお本溝は、明治21年発行の地籍図に記載があり、同図の方格地割り線に合致する。つまり山田郡条里の坪界想定線にほぼ位置し、7条10里28坪と29坪の界線に相当する(金田1988)。また同図によると、本溝西側には道状の記載が認められるが、遺構としては確認できていない。

本溝からは、コンテナ3箱程度の遺物が出土している。遺物内容は、弥生土器、須恵器、土師器甕・足釜、瓦質土器羽釜(茶釜)・焙烙・焜炉、備前系播鉢・壺、瀬戸・美濃系腰鍔碗、肥前系陶器刷毛目片口鉢、同染付碗・小碗・皿・猪口・陶胎染付碗、漆器碗、軒丸瓦・丸瓦・平瓦、煉瓦、漆喰片、サヌカイト剥片などがある。このうち近世の遺物を中心に、21点を図化した。961は京都系の緑釉陶器碗である。高台端部は無釉。内外面マメツシ、釉は剥離が顕著である。962は陶器の皿。内面と外面口縁部に褐釉が掛かる。産地は不明。963は灰釉と鉄釉の掛分碗で、18世紀後半代から幕末期にかけての瀬戸・美濃系の製品である。胎土は灰白色でやや粗く、内面には灰釉、高台端部を除く外面には鉄釉が掛分けられている。964は肥前系の陶器碗である。2次的な火熱を被っており、釉の色調はやや濁る。高台端部は鍔釉が施され、体部外面に鉄釉で線状の文様を描く。965は肥前系の刷毛目片口鉢である。外面



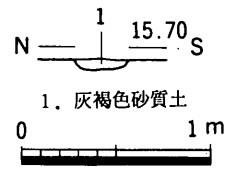
第96図 SDe10出土遺物実測図 (1/3・1/4)

は全面に褐釉を掛け、片口部を中心に白土で刷毛目文が施文される。内面は下半に白土で刷毛目文が描かれ、口縁部付近には鉄釉が太い刷毛で帯状にロクロ回転を利用して施される。966～970は染付磁器の碗である。966は肥前系のいわゆる「広東碗」である。底部の小片で、体部と高台は意図的に打ち欠かれた可能性がある。967も肥前系の製品と考えられ、外面は3区に区切られ各区に同文の松図を、内面見込みには松葉?を描く。968は瀬戸・美濃系の製品の可能性があり、外面に花唐草文が描かれる。969は外面と口縁部内面に網目状の文様を縦位に描く。明治以降に下る可能性がある。970は青磁染付の丸腰碗である。厚手で内面の白磁部分はくすんだ灰色を呈する。見込みに手描きの五弁花を、高台内にはやや崩れた角枠に渦福字銘を有する。いずれも釉の発色は悪く、不鮮明である。971～972は肥前系の染付磁器皿である。971は内面見込みを蛇の目釉剥ぎし、見込みと体部に笹文を描く。2次的に火熱を受けた可能性があり、露胎部分に煤が付着し釉の発色も悪い。972は中形の皿で、底部は蛇の目凹形高台である。釉剥ぎは丁寧には行われず、部分的に釉が残る。見込み花卉文?を描く。973～976は備前焼系の製品である。974～976は播鉢である。974・975は、赤褐色を呈し小石粒をやや含む緻密な胎土を有する。口縁部外面上・下端に、重焼の痕跡が認められず、堺もしくは明石産の可能性もある。975には16条一単位の、974には7条一単位の播目をそれぞれ右下がりに施し、播目の間隔は後者の方がやや粗い。播目上端は、975は轆轤ナデ、974は板状工具のナデによって消されるが、975はナデがあまく播目の痕跡をかすかに認め、より後出する可能性が高いが、いずれも白神典之氏のⅡ型式の範疇には納まるものと考えられる(白神1992)。976は、やや大きめの石粒を微量含む灰色の緻密な胎土で堅く締っている。直立する口縁部を有し、上端内面に段が認められる。右下がりの播目を施す。口縁部の形態から、備前産と考えられる。977は瓦質土器羽釜である。鏝端部を欠損するが、953とほぼ同形態になると思われる。978は瓦質土器の火鉢である。口縁部は直立し、外面には櫛描きの平行沈線と波状文が交互に施され、最上位に菊花文がスタンプで陰刻される。979は土師質土器の焙烙である。内耳部分を欠損するが、a型式に分類される可能性が高い。980は土師質土器焜炉である。鈍い黄橙色を呈する細かな素地土を使用する。体部外面には植物の葉状のレリーフがスタンプされ、側面に方形?の風口が空けられる。981は軒丸瓦である。瓦当面には左巻きの巴文と14個の珠文が配される。珠文の間隔はややばらつきが認められる。

各遺物の本溝埋土内での層位的な帰属関係は不明で、本溝の掘削・埋没時期を遺物の面から特定することは困難である。しかしながら、明治21年の地籍図に記載されていることから、開削時期が明治21年以前に遡ることは確実であり、同図に宅地と記載された場所の調査で、近世後半頃の屋敷地が検出され、宅地化される時期が近世まで遡るものが少なからず認められること、及びその屋敷地はこれら基幹水路に規定されること、またこれらの溝からは相当量の近世後半頃の遺物が出土することなどから、本溝の開削時期については確実に18世紀段階までは遡ることができる。なお後述するように、SDe139では中世後半期の遺物が一定量出土しており、中世後半期の開削の可能性を想定しており、本溝もその性格から同時期に遡る可能性もある。事実Ⅲ-4・6～8区の調査などでは、13～14世紀代の溝が旧空港造成前まで機能していた溝と重複ないしは近接して検出されている。溝によって区画された基本的な地割りの枠組みが何時まで遡及されるのか、またどのように継承・変更されたのかについては、これら調査結果の整理を待ちたい。したがって本溝については、上限を18世紀代と述べるにとどめる。

SDe15 (第97図)

II-7区J・K57グリットで検出した東西走る小溝である。西端は攪乱によって損なわれ、東端は延長11mを検出して途切れる。東部でSKe45と重複し、切り合い関係より先行する。流路方向N81.5° W, 幅0.28m, 深さ0.04mを測り, 断面形は浅い皿状を呈する。流路方向は概ねSDe10と直交する位置関係にある。底面の標高は15.6m前後となる。埋土は灰褐色砂質土の単層である。

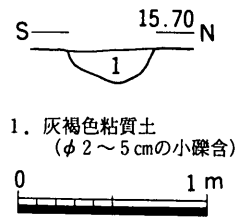


第97図 SDe15断面図(1/40)

遺物は, 土器細片が4~5点出土したのみである。時期決定については, 調査担当者の所見に従った。

SDe 16 (第98図)

II-7区J・K57グリットで検出したSEe02の排水溝と考える小溝である。西端は攪乱によって損なわれ, 延長3.5mを検出したにすぎない。流路方向N82.9° W, 幅0.44m, 深さ0.18mを測り, 断面形は皿状を呈する。SDe10と直交する位置に配される。底面の標高は15.4m前後となる。埋土は灰褐色粘質土の単層で, 埋土中に長径2~5cmの小石をやや多く含む。



第98図 SDe16断面図(1/40)

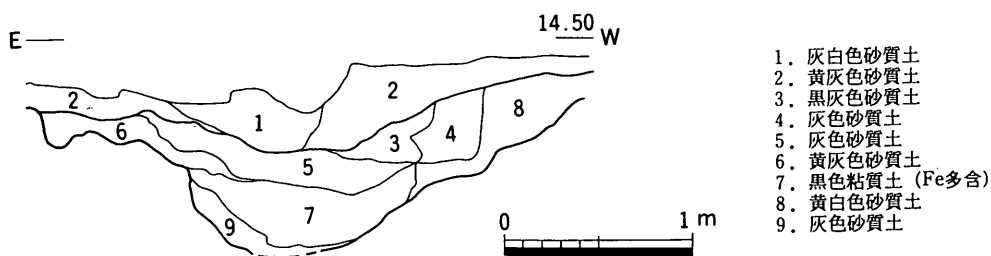
本溝に伴う遺物は出土しておらず, 時期決定については調査担当者の所見に従った。

SDe36 (第99図)

II-13区東半部を南北に縦断する溝状遺構である。本溝も明治21年の地籍図に記載されており, SDe10と同じく山田郡条里の坪界想定線に合致し, 7条10里27坪と28坪の界線となる。流路方向N11° E, 幅2.0~2.5m, 深さ1.05m前後を測る。底面の標高は北半部で13.3m前後にあり, 一部平面図の記載がなく, 調査が部分的なものにとどまるため確実なことは言えないが, 旧地表面の高低差から考えられる流下方向は北である。地籍図の記載から, 調査区外でSDe38が直交して合流する。

埋土の堆積状況は, 北半部についてのみ観察している。それによると, 埋土は大きく2層に大別される。上層は, 旧空港造成直前まで機能していた堆積層で2層に細分される。下位層は旧耕作土層に近似した土層であり, 溝両岸より溝上面を大きく覆うように堆積する。旧空港造成直前には, 本溝の埋没はかなり進行しており, 小溝程度にしかすぎなかったことが推定される。下層は数層に細分され, その堆積状況から数度の改修が考えられる。しかしながら本溝は, 調査時攪乱溝とされたため遺物は一切出土しておらず, 各層の堆積時期を推定することは不可能である。

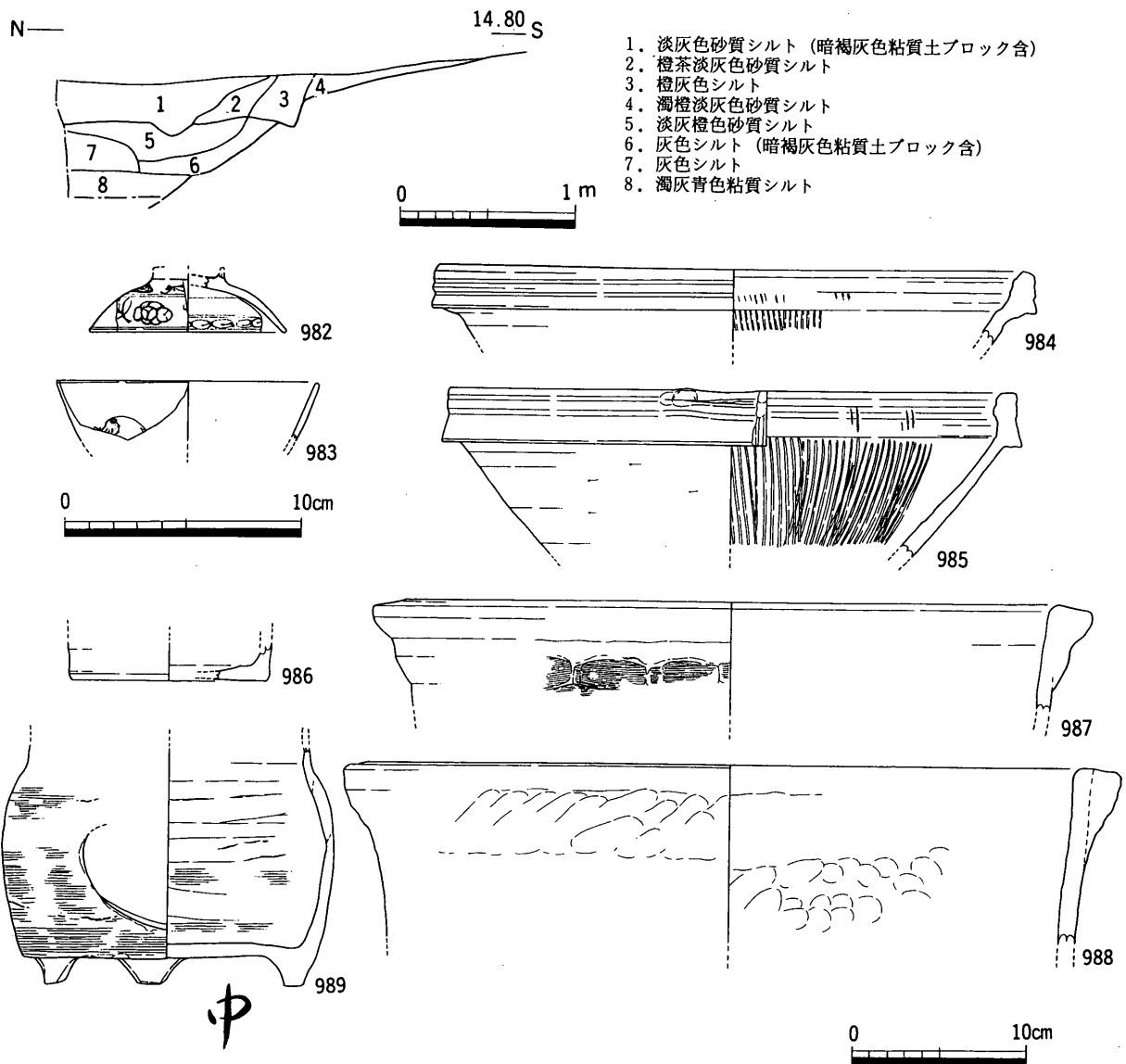
地籍図の記載を頼りにすれば, 本溝は先述したSDe10と同様の機能が想定され, 開削・埋没時期も概ね同様な経過を辿ったことが推定される。



第99図 SDe36断面図 (1/40)

SDe38 (第100図)

III-43区からII-13区北部を東西に横断するように配された溝状遺構である。上述した明治21年の地



第100図 SDe38断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3・1/4)

籍図に記載があり、それによると西端はSDe36と合流し、東端は小さく屈曲して出水SXe02に合流することが知れる。調査によって、II-13・III-5区では確認されたが、東部のIII-42・43区では延長部分は検出されなかった。これは42・43区の当該期の遺構面が大きく削平を被っているためと考えられ、地籍図の記載を誤りとするわけにはいかない。またSXe02東南隅で延長約5m程の溝を検出しており、位置関係からすれば本溝の残存部である可能性は高い。なお本溝も山田郡条里の坪界想定線に合致し、7条10里27坪と34坪の界線となる。

本溝は西端のII-13区周辺で、幅約2.5m、深さ0.8m程度を測り、断面形は概ね逆台形状を呈する。底面の標高は、III-5区で13.7m前後、SXe02との合流部で13.2mを測り、底面の高低差から東流し、SXe02に流れ込む。またSXe02との合流部では、溝底面に接して西側に2石、東側に1石の自然石を流路方向に沿って据えており、上部構造は不明ながら水量を調節する樋門のような水利施設が設けられていたようである。なお本溝底面とS Xe02掘り方底面との比高は約0.4mを測る。

本溝もII-13区では、SDe36同様攪乱溝とされたため遺物は一切出土していない。III-43区からコンテナ1箱程度の遺物が出土しているにすぎない。遺物内容は、瀬戸・美濃系腰鍔碗、肥前系陶器灰釉碗

・刷毛目大鉢，同染付碗・碗蓋，備前系播鉢・鉢・灯明皿・水屋甕，瓦質土器羽釜，土師質土器焜炉・足釜・土鍋・甕，丸瓦，平瓦，弥生土器，須恵器などがあり，いずれも細片となっており，接合可能な個体は少ない。また出土した遺物は概ね19世紀代までには納まるものと考えられ，それ以降に下るものはないが，これは先の遺構上面の削平によるところが大きいと考える。このうち8点を図示した。982・983は肥前系の磁器である。982は碗蓋で，外面には花文，内面には渦文？が描かれる。983は碗で，口縁部は強く外傾して開き，外面に染付文様が描かれる。984～986は備前系の製品である。984・985は播鉢。口縁部に重焼痕が認められず堺ないし明石産とみられる。985は僅かに片口をなす。985は口縁部が長く立ち上がるのに対して，984は短く断面三角形状に近い。984は白神氏のⅢ型式に，985はⅡ型式のそれぞれ分類され，前者が19世紀前半，後者が18世紀後半に相当しよう（白神1992）。987・988は土師質土器の大甕である。口縁部はいずれも頂部が平坦な断面台形状に肥厚する。987は口縁部下位に鈍い突帯状の隆起を有するが，それを除くと両者は概ね近似した形態を呈する。突帯上面は断続的な横ハケ調整が施される。また胎土も988がやや石英粗粒が目立つ外は概ね近似した素地土を使用しており，金雲母粒が認められる点が特徴である。989は土師質土器焜炉である。980とはほぼ同形態を呈する。体部側面には楕円形の風口が空けられ，また外面には白色の釉が薄く掛けられる。外底面には三足の支脚が付され，「中」の文字が墨書される。内底面中央部に支柱の剥離痕が認められる。

#### SDe139（第101図・図版73）

Ⅲ-41区北東隅で検出した，条里型地割りに合致して南北方向に配される溝状遺構である。SXe02北東隅より派生して，緩く弧を描きながら北流する。北端は調査区外へ延長する。約17mを検出した。流路方向N32.6° E，幅3.0～6.0m，深さ0.7m前後を測る。断面形は皿状ないしは逆台形状を呈し，底面は概ね平坦である。SXe02との合流部南肩は，一部2段に掘り込まれている。北岸のみに数本の本杭が検出されたが，後述するSDe144とは対照的に少なく，護岸施設を想定するにはやや無理がある。底面の標高は13.1m前後であり，底面のレベル差から想定される流下方向は東である。本溝も明治21年測量の地籍図に記載されており，少なくともそのころまでには開削されていたことが知られる。同図によると本溝も概ね方格地割りに合致し，山田郡条里の7条10里34坪と35坪の界線に相当する。

埋土は大きく3層に分層された。上層（1層）は灰色粘土層で，長径10～30cmの礫を多量に含んでおり，人為的な埋め戻し土と考えられる。中層（2層）は，灰色粘土と浅黄色極細砂・明灰色粘質シルトのラミナ層である。本層下面には，旧耕土層が両岸より溝内側に垂れ込むように堆積しており，旧耕土層耕作時の堆積層と推定される。また，この中層堆積前に1度改修された状況が窺える。下層（4・5層）は，黒色系粘土の堆積層で2層に細分された。埋土の特徴から顕著な水流は想定し難く，ヘドロ状を呈していたようである。なお上層の堆積状況は，後述するSDe144・SXe02など本遺構周辺で検出された近世以降の遺物を出土する溝状遺構等に共通して認められ，これらの遺構が一時に埋め戻されるような大きな土地区画の変更が想定される。つまり上層は，昭和19年の旧空港造成時の造成土と推定される。

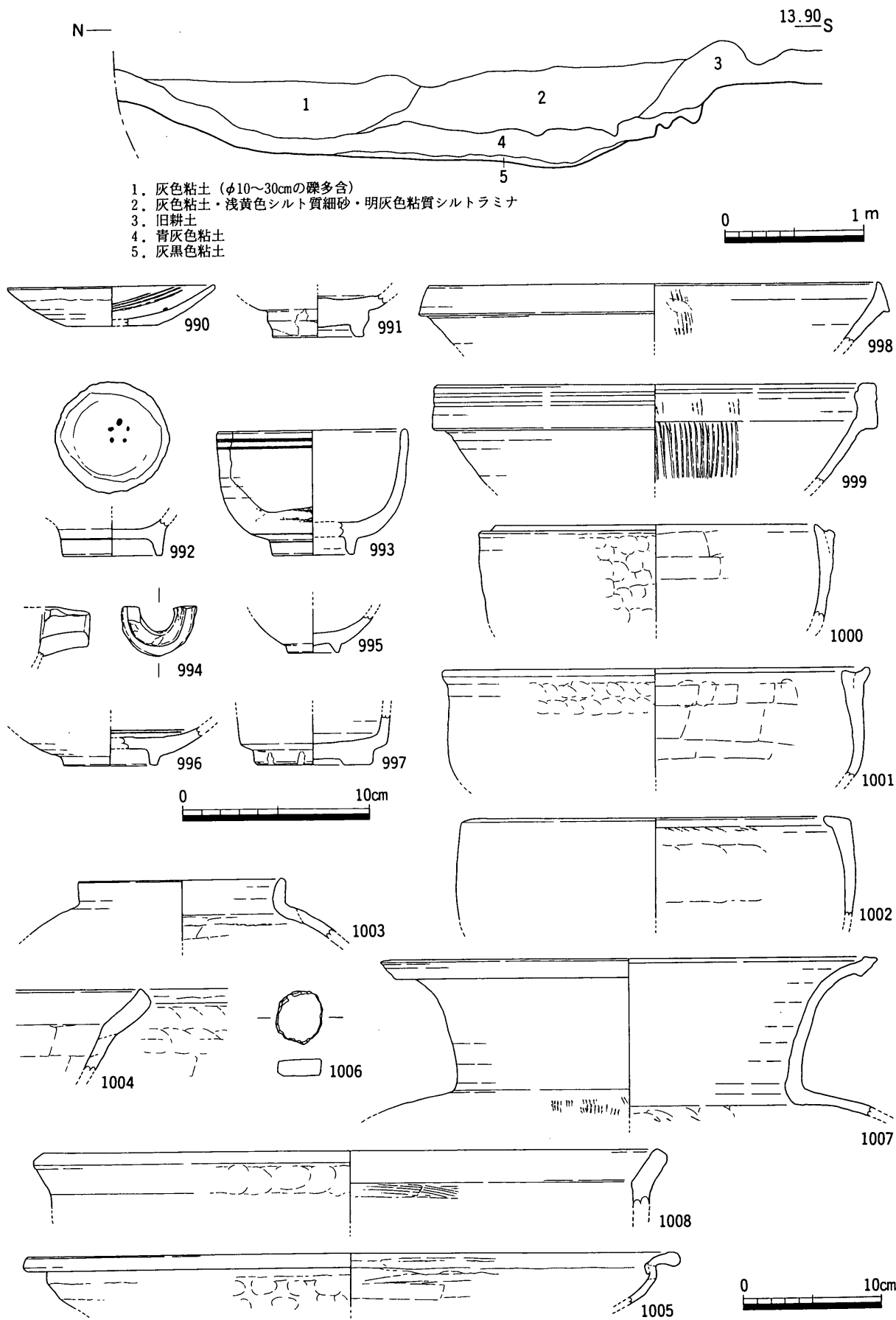
遺物は，中・下層より弥生土器，土師器，須恵器，中世土器類，肥前系陶磁器，瀬戸・美濃系陶器，備前系陶器，土師質大甕，瓦類などの遺物とともに，近・現代の陶磁器，ガラス瓶，煉瓦などが，コンテナ3箱程度出土している。これらの遺物のうち，近世の遺物を中心に19点を図示した。990は幕末頃の信楽焼？の皿である。内面及び外面口縁部に，乳白色の細かな貫入の入った灰釉が掛けられる。内面口縁部には4条の櫛描文が施され，内底面にはハリ支え痕が認められる。形状からおそらく灯明皿とし

て使用されていたのであろう。内面を中心に二次的な被熱を被っているためか、釉の発色は悪い。991は陶器碗である。おそらく肥前系の製品で、高台部周辺を除いて緑色味を帯びた灰釉が掛けられる。992は瀬戸系の陶胎染付の碗である。いわゆる広東碗写しの碗で、19世紀第2四半期頃の製品である。内面見込みには五弁花が描かれる。993は肥前系の陶胎染付碗である。高台端部には錆釉が施される。18世紀代の製品である。994は瀬戸・美濃系の陶器片口鉢の片口部片である。内外面に釉が薄く掛けられる。片口部は短く、19世紀代の製品とみられる。995は肥前系磁器小碗である。高台端部を除く全面に白磁釉が掛けられる。996は肥前系磁器の染付皿である。内面見込みを蛇の目釉剥ぎされる。997も肥前系の磁器で、青磁の香炉である。外面には青磁釉が厚く掛けられる。18世紀代の製品であろう。998は備前焼の播鉢である。口縁部形態からⅣ期前半頃に位置付けられる(伊藤1995)。999も播鉢であるが、口縁部に重焼痕が認められず、堺ないし明石産とみられる。やや長く伸びた口縁部形状から、Ⅱ型式に分類され、18世紀後半頃に位置付けられる(白神1992)。1000～1005は在地産の土師質土器である。1000・1001は土釜である。鐙部はもはや鈍い段状のものに退化しており、中世末16世紀から17世紀前半代に位置付けられる。鐙部形状から1001がやや後出する可能性がある。1002は焜炉である。口縁部は強く折れて、内側に引き伸ばされる。内外面剥離が顕著なため、細かな調整などは不明瞭である。1003は釜である。鐙部を欠損するため明瞭なことは分らないが、おそらく羽釜となろう。口縁部はあまり発達せず、土釜とほぼ近似した年代が与えられる。1004・1005は土鍋である。1004は口縁部は緩く屈曲して開く。国分寺楠井遺跡での編年案のⅡ-1期ないしはⅡ-2期に相当し、14世紀前半代に位置付けられる(佐藤1995)。1005は口縁部がかなり萎縮して短い。1004よりは後出する形態であろう。1006は円盤状土製品である。備前焼の甕を転用する。これら中世末の遺物は、図示した以外にも18世紀代以降の遺物に混じって一定量出土している。本溝周辺に当該時期の遺構は存在せず、他遺構からの混入の可能性を想定するよりも、むしろ本溝開削年代の一端がある程度反映するものとして注意される。しかしこれらの遺物は、必ずしも近世の遺物と層位的に分離して出土したものではないため、開削時期についてはあくまで推定の域を出るものではない。1007は須恵器の大甕である。口縁部は強く外反して開き、端部は矩形に肥厚する。体部内面には、円形無文の当て具痕が認められる。7世紀後半から8世紀前半代に位置付けられる。1008は土師質土器焙烙である。焼成は良好で、むしろ瓦質に近い印象を与える。内耳部分は欠損するが、残存部からすれば突出度は弱くb型式に分類される可能性が高い。

#### SDe144 (第102図・図版44)

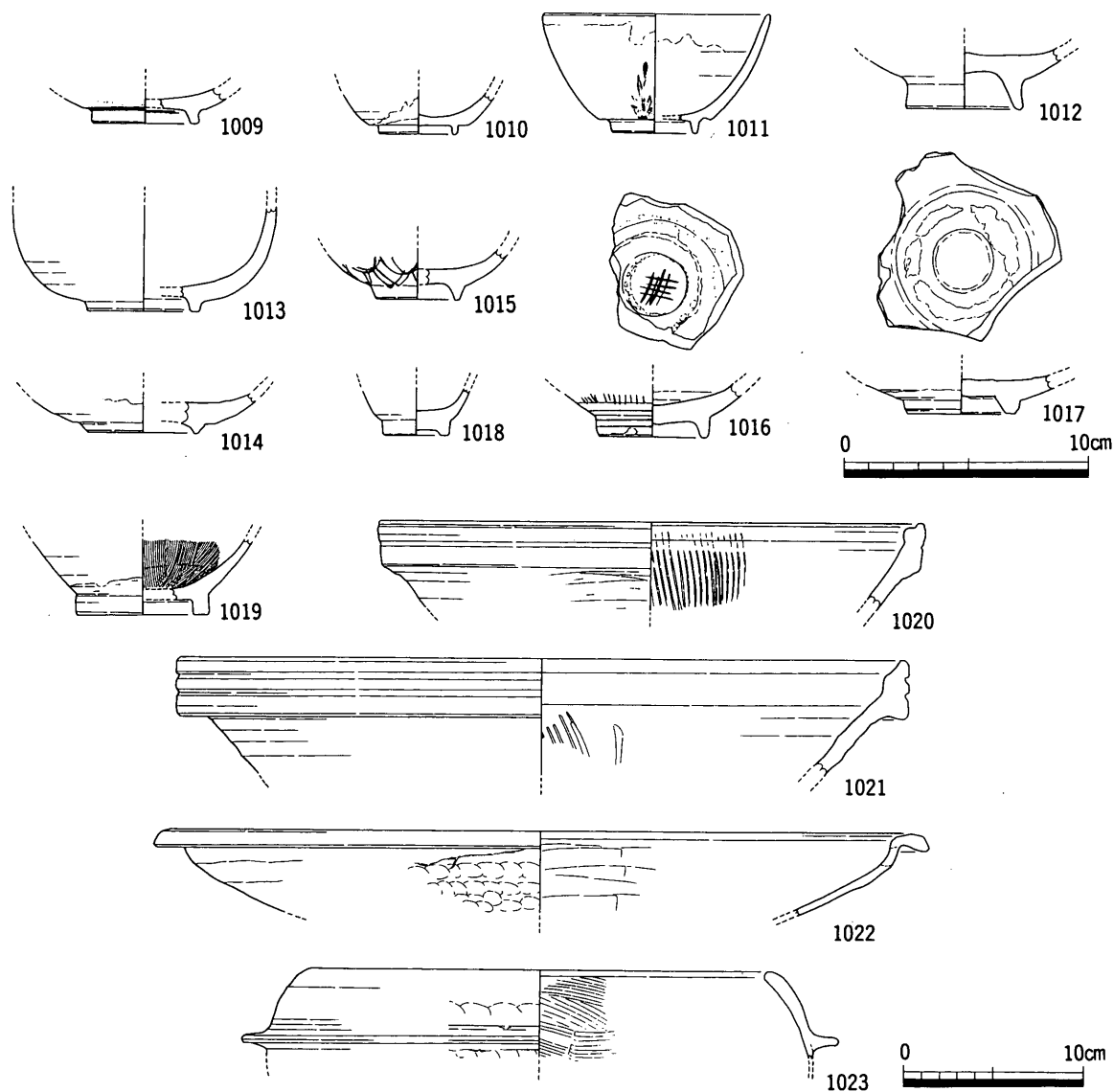
Ⅲ-41・43区で検出した、条里型地割りに合致して直線状に南北流する溝状遺構である。SDe139と同様に山田郡条里の坪界線に合致し、7条10里26坪と27坪の界線に相当する。北端はSXe04に合流し、南端は調査区外に延長する。約32mを検出した。流路方向N3.5°E、幅3.0～3.5m、深さ0.4～0.7mを測る。SXe04合流部付近でやや幅を広げる。断面形は概ね逆台形状を呈し、底面は平坦である。底面の標高は13.1～13.4mにあり、底面の傾斜から北に流下する。両岸には流れに沿って部分的に杭列が認められた。杭は東岸に56本、西岸に8本検出され、特に中央部東岸に集中し、この部分では2列に打たれる。

埋土の特徴、出土遺物の内容についてはSDe139とほぼ共通する。遺物はコンテナ2箱分が出土した。このうち15点を図示した。1009は瀬戸・美濃系の灰釉・鉄釉の掛分碗である。元禄から幕末頃の製品である。1010・1011は信楽系の京焼風陶器碗である。口縁部は内湾して開き、底部はシャープに削り出された低い高台を有する。高台部を除いて透明釉が掛けられ、全面に細かな貫入が入っている。1011では



第101図 SDe139断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3・1/4)





第102図 SDe144出土遺物実測図 (1/3・1/4)

外面に鉄絵で根付若松の文様が描かれる。いずれも18世紀後半代の製品である。1012は肥前系陶器の呉器手碗である。高台端部を除く全面に薄い黄味がかった透明釉が施され、細かな貫入が入っている。17世紀後半から18世紀前半代に位置付けられる。1013はいわゆる京焼風陶器の碗である。高台端部を除いてオリーブ色の釉が掛かり、全面に細かな貫入が入っている。18世紀代に位置付けられる。1014は肥前系陶器の灰釉皿である。17世紀初頭頃に遡る。1015～1018は肥前系磁器の製品である。1015はいわゆるくらわんか碗で、外面に割り筆で二重網目文が描かれる。1106も染付碗で、内面見込みを蛇の目釉剥ぎするが、調整・釉調はあまく高台の剥離痕が残り、釉にも気泡が多く認められる。見込みに井桁文が描かれる。いずれも18世紀代の製品であろう。1017は皿で、内面見込みを蛇の目釉剥ぎし、砂目痕が認められる。17世紀後半代の製品であろう。1018は小物で、高台端を除いて白磁釉が掛けられる。1019～1021は陶器播鉢である。1019は肥前系の製品とみられ、外面ににぶい赤褐色の釉が掛けられる。内面の摺目は丁寧に施される。1020・1021は堺ないし明石産の製品で、口縁部の形態から1020がI型式に、1021がIII型式にそれぞれ分類され、前者が18世紀前半代、後者が19世紀前半頃に位置付けられる（白神1992）。1022・1023は在地産の土師質土器である。1022は焙烙、1023は羽釜で、いずれも18世紀代に位置付けら

れよう。本溝は基本的には SDe139 と一連の水路であり、つまり SDe139 の南延長部に相当し、その開削・埋没時期については同溝と同時期と推定される。

#### ④. 出水遺構

SXe02 (第103～105図・図版43・74・77・82)

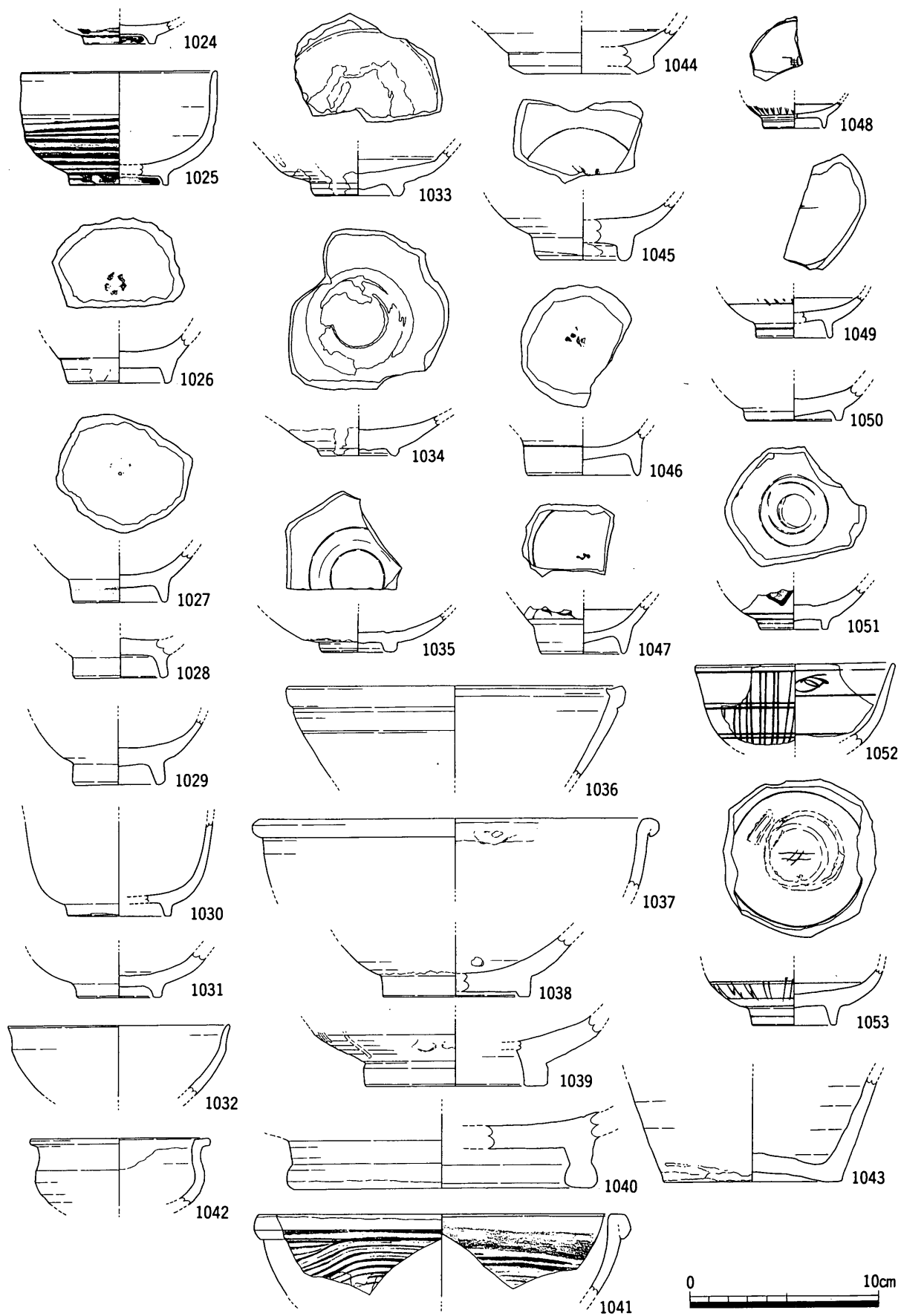
Ⅲ-41・43区北部で検出した出水遺構である。数箇所旧空港の施設による攪乱を被っているが、ほぼ旧状を窺うことは可能である。上述してきたように、南東隅に SXe04 を介して SDe144 が、南西隅より SDe38 がそれぞれ流入し、北東隅より SDe139 が流下する。各溝との合流部水口部分には、SDe38 を除いて水量を調節する何らの水利施設も認められていない。なお本出水も明治21年の地籍図に記載があり、その開削時期は少なくとも明治21年以前に遡ることは確実である。

平面形は東西13.5m、南北21～24mの略長方形の掘り方を有し、中央部やや南西寄りに湧水部が設けられている。掘り方各周辺の方法は、概ね周辺の地割の方法と一致する。深さは湧水部を除いて検出面より0.8mあり、上面の削平を考慮するとさらに0.4～0.5mは深かったことが想像される。掘り方の底面は概ね平坦であり、断面形は箱状ないしは逆台形状を呈する。掘り方西辺は直に近く掘り込まれるが、北辺は検出面より0.4m下位で幅0.9m前後のテラス面を有して2段に掘り込まれ、また南辺も2段に掘り込まれ、上段の傾斜はかなり緩やかである。掘り方の東辺を除く3辺には、径5cm程の棒杭が10～30cmの間隔で打ち込まれていた。また掘り方東方では、切石による石列を2基と石組み1基を検出した。石列間の距離は1.2mでそれぞれ東西両端は攪乱により損壊を受ける。北側の石列は延長5.4mで途中1石を欠損するが13石が残る。南側の石列は残りが悪く延長1.9mで5石が遺存するのみである。石列上面は平坦であり、上位にさらに石が積まれていたかどうかは不明である。また石組みは東西2.6m、南北1.7mで、それぞれ5石、3石で組まれており、平面形は長方形を呈する。石組み上面は平坦で、使用する石材も石列のものと共通する。いずれも滞水時には水面下に水没してしまうため、何らかの基礎構造と推定されるが、それがどのような性格を有するものかは特定することができなかった。

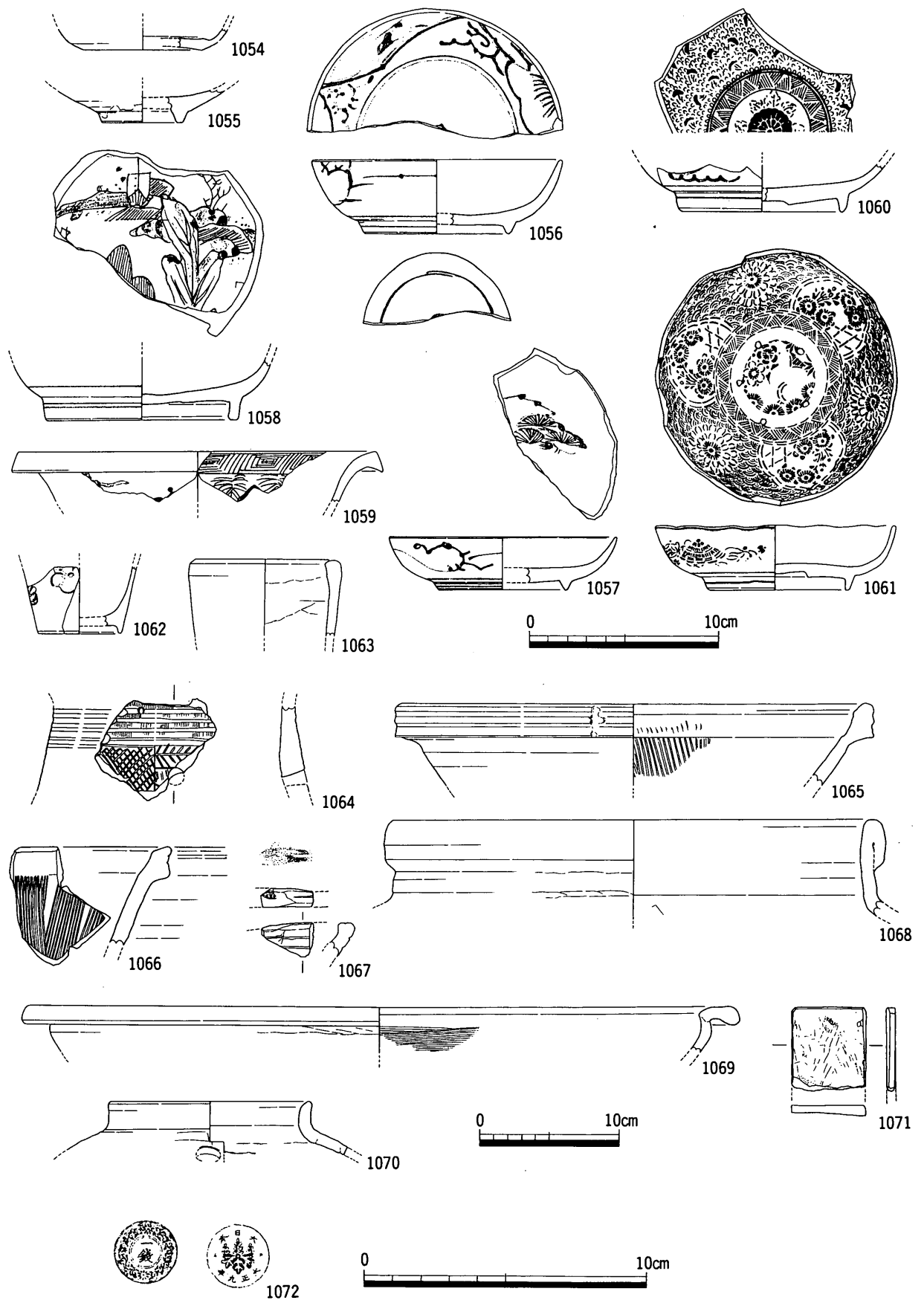
掘り方内部の埋土は、部分的な確認にとどまるが、場所により若干の相違は認められるものの、大きく上下2層に大別されるようである。まず上層は、灰褐色砂礫混じり粘土及び灰色砂礫層で、掘り方底面付近から上面を広く覆って堆積する。埋土中には多量の人頭大の礫や地山層のブロック土が混じっており、人為的な埋め戻し土と考えられる。本層は、基本的には先の SDe139 上層と共通するものであり、昭和19年の空港造成時の堆積層と考えられる。下層は、主に掘り方周縁付近で認められた灰橙色ないし褐色系の粘質土層であり、掘り方中央に向けて傾斜して堆積する。本遺構機能時の堆積層で、おそらく掘り方斜面の崩落に起因するものと考えられる。また掘り方底面には湧水部を中心に、滞水時の堆積層と考えられる灰色系粘土もしくはシルト層が認められたが、本遺構廃棄直前の浚渫のためか残存状況はよくない。本層からの遺物も陶磁器小片を除いてはみるものはなかった。

湧水部は、一辺4.1～5.1mの東西に長い長方形の平面形を呈し、四周には径20cmの丸太材を10～85cm間隔に1列9本打ち込んで杭列とし、杭列内法に沿って長さ70cm以上、幅15cm、厚さ2cmの板材を配して木枠となしていた。木枠の内法は一辺2.3～3.1mで、平面形は東西に長い長方形を呈する。木枠の一部が引き抜かれ、また杭列も一部に乱れが認められ、廃棄時に相当の攪乱を被っているようであった。木枠内は灰色粘土が堆積しており、約1m前後掘り下げたが、湧水が激しくまた崩落の危険もあって底面まで完掘することはできなかった。湧水部より遺物は出土していない。

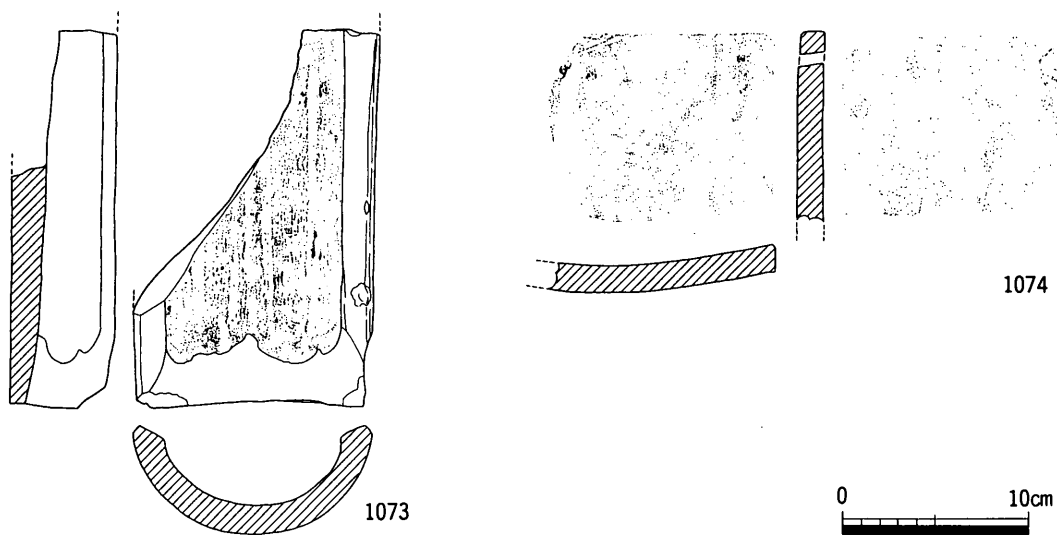
遺物はコンテナ9箱程度出土した。大半は上層からの遺物であり、したがって本来本遺構に帰属する遺物の外に、埋め戻し時に混入した遺物を相当量含むと考える。51点を図示した。1024～1027・1031は瀬戸・美濃系の製品である。1024・1025・1031は鉄釉・灰釉の掛分碗である。1025はやや深めの形態から18世紀末頃に位置付けられる。1026・1027は広東碗写しの陶胎染付碗である。内面見込みに呉須で五弁花を描く。いずれも19世紀中頃の製品である。1028・1029は肥前系の呉器手碗である。1030は京焼風陶器の碗である。高台端を除いてにぶい橙色の釉が掛けられ、全面に細かな貫入が入る。1032は信楽系と見られる製品で、天目碗写しの陶器碗である。内外面に灰釉が施され、細かな貫入が顕著に認められる。1033～1035は肥前系陶器の皿である。1033は灰釉皿で、内面見込みに砂目積みを認める。17世紀初頭に遡る製品である。1034も灰釉皿で内面見込みに蛇の目釉剥ぎし、砂目を置く。1033より後出し、17世紀後半段階の製品である。1035はいわゆる青緑釉皿で、内外面に銅緑釉が施釉され、内面見込みに蛇の目釉剥ぎする。17世紀末から18世紀前半に位置付けられる。1036・1038は美濃系の片口鉢で、1036は19世紀初頭に、1038は18世紀前半にそれぞれ位置付けられる。1038の内面見込みには、団子トチの跡が残る。また2次的な被熱によるためか釉調は変色している。1037・1039・1041は肥前系の陶器鉢である。1037は釉が剥げかかっており不鮮明ながら、刷毛目の鉢とみられる。口縁部を玉縁状に肥厚する。1041も刷毛目鉢で、内外面にロクロ回転を利用した白土の刷毛目が施される。いずれも17世紀後半から18世紀前半の製品であろう。1040は瀬戸・美濃系の陶器鉢で、高台部を除いてオリーブ黄色の釉が掛けられる。19世紀代の製品であろう。1042は産地不詳の製品で、外面と内面口縁部に赤褐色の釉が施される。1043も産地不詳である。外底面は静止糸切りされ、体部外面に乳白色の釉が掛けられ、底部際は一部釉が拭い取られている。1044は中国産の白磁碗で、碗Ⅳ1 a類に分類される(横田・森田1978)。1045は中国産の青磁碗で、内面見込みに印花文を認める。1046～1053は肥前系の磁器碗である。1046は広東碗で、18世紀末から幕末にかけての製品である。1048は見込みに寿字を、外面に縦鎖線文を描く。1050は白磁の碗である。1051は見込み部分を蛇の目釉剥ぎする。1052では外面に格子目文が描かれる。1053では見込み蛇の目釉剥ぎされるが、釉が流れて離れ砂が融着し、また高台の剥離痕が残る。見込みに井桁文を染め付ける。上記した肥前系の製品は、概ね18世紀代から幕末期にかけての製品である。1054は中国産の白磁皿で、皿Ⅳ1 c類に分類される(横田・森田1978)。1055～1058は肥前系の染付皿である。1055は見込みを蛇の目釉剥ぎされる。1056はいわゆる「くらわんか手」と呼ばれる粗製の皿で、見込みにコンニャク判の五弁花を、高台内におそらく渦福字銘をもつ。1057は小皿で、内面に松文が外面に唐草文がそれぞれ描かれる。1058は蛇の目凹形高台の大皿である。1059は肥前系の染付鉢で、口縁部を折り返して下方に垂下させる。以上の肥前系の染付類は、18世紀代から幕末期にかけての製品である。1060・1061は明治期以降の型紙摺りの磁器皿で、呉須は酸化コバルトを使用する。底部はいずれも蛇の目凹形高台である。1061の内面見込みには、5箇所ハマ熔着痕を認める。1062はべた底の一般的な形態のそば猪口である。18世紀後半代の肥前系の製品で、外面に花文を染め付ける。1063は肥前系の青磁香炉で、外面と内面口縁部に青磁釉を厚く掛ける。1064は弥生土器の大形器台である。外面には4条の凹線文の下位に格子文と横位の綾杉文をへら描きする。また円孔を穿つ。胎土中には多量の角閃石粒が含まれ、後期初頭に遡る。1065～1067は陶器播鉢で、いずれも口縁部に重焼痕がみられず堺ないしは明石産の製品である。1065・1066は口縁部が萎縮して小さく、Ⅲ型式に下る(白神1992)。1067は片口部の小片で、頂部に文字不詳の刻印を認める。1068は備前焼の大甕で、長く延びた口縁部形態からⅣ期前半に位置付けられ、15世紀代に遡る(伊藤1995)。1069・1070は在地産の土師質土器の製品で、前者は焙烙、後者は



第103图 SXe02出土遺物実測図1 (1/3)



第104图 SXe02出土遺物実測図2 (1/2・1/3・1/4)



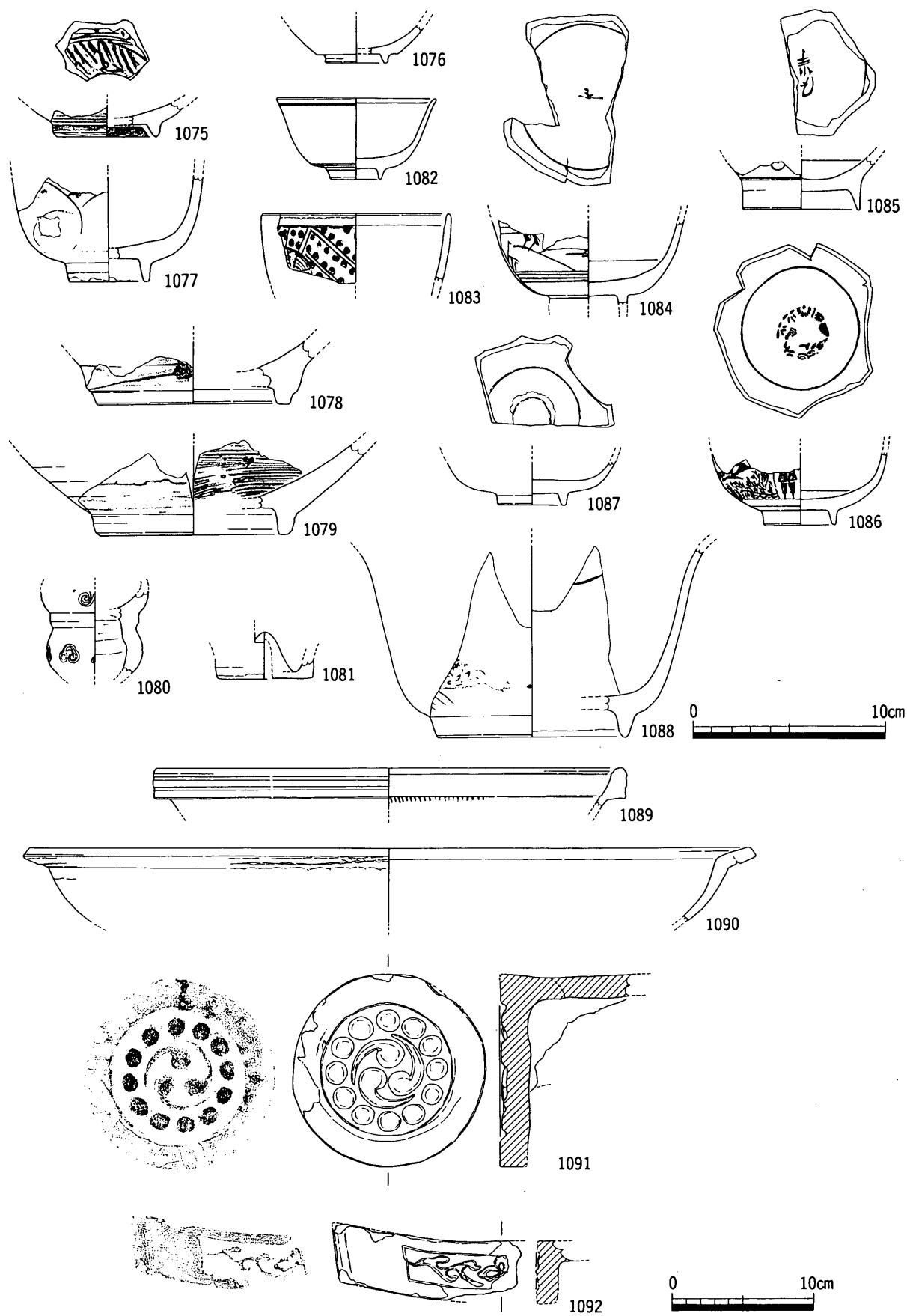
第105図 SXe02出土遺物実測図3 (1/4)

釜である。1071は流紋岩製とみられる砥石で、よく使い込まれており表面は平滑である。1072は大正9年発行の一銭銅貨である。瓦類は多量に出土したが、そのうち残りのよい2点のみを図示した。1073は丸瓦、1074は平瓦である。

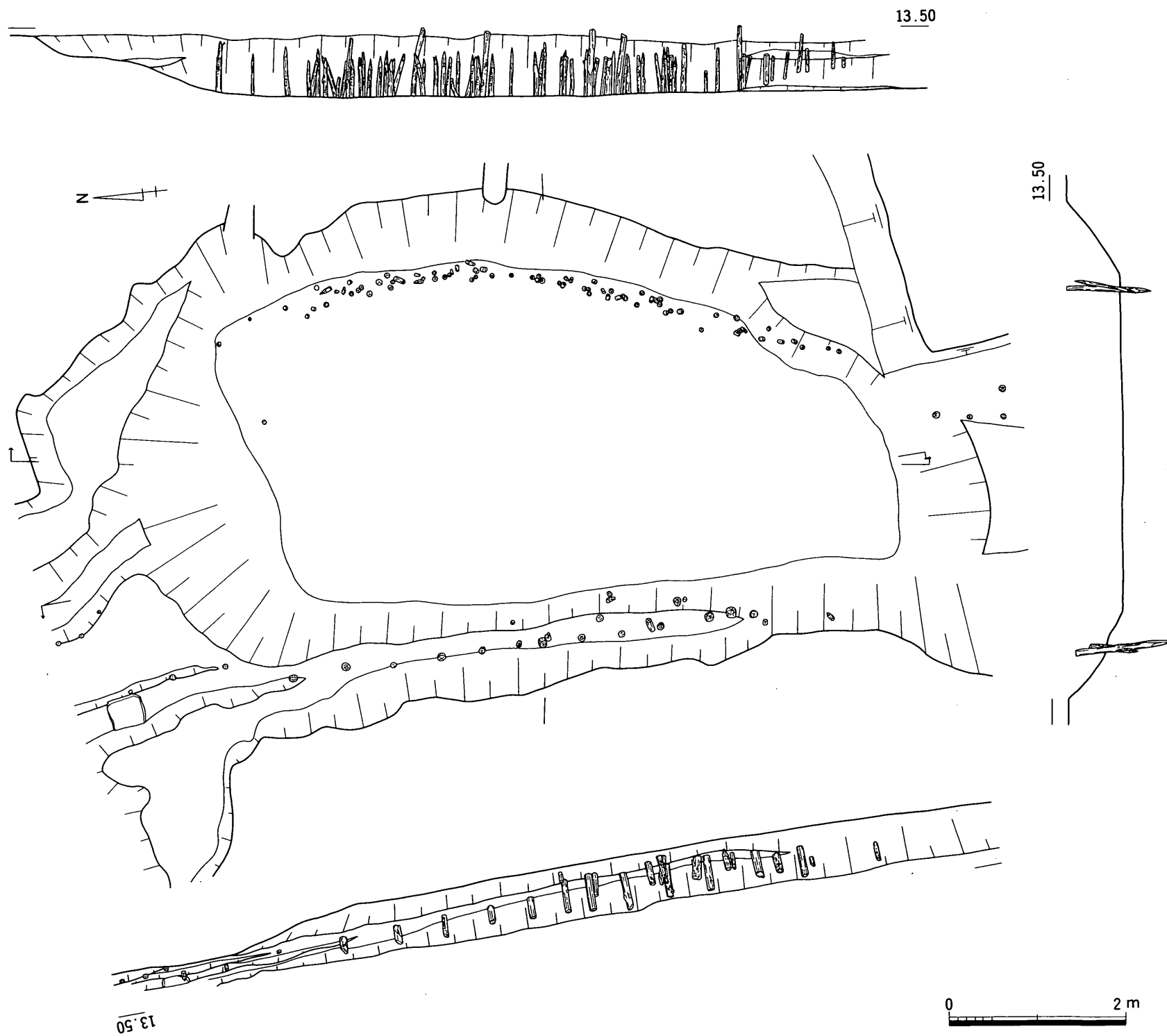
SXe04 (第106・107図・図版44・74)

Ⅲ-41区I68グリットで検出された水利施設と考える落ち込みである。南端はSDe144に接続し、北端はSXe02に合流する。平面形は東西4.2~5.9m、南北約9mのややいびつな隅丸長形状を呈し、主軸方位は概ねSDe144と一致することから、一見SDe144北端に設けられた瘤状の突起部のような形状を呈する。断面形は深さ約0.6mの概ね逆台形状を呈し、東壁は緩やかに掘り込まれるが、西壁は遺構上面より約0.4m下位で、幅0.2m程の小さなテラス部を確認した。底面の形状は概ね平坦であった。底面の標高は12.7m前後を測り、SDe144の底面より約0.5m、SXe02の東肩部底面より約0.4m深くそれぞれ掘り込まれており、この点でSDe144とは別の遺構として把握できる。位置関係や底面の標高差から、SDe144の用水をSXe02に供給するための水量調節を目的とした、貯水池状の機能が想定される。掘り方四周には杭列が認められ、東・西列はやや密に、南・北列は疎らに打設されている。特に東列は径5cmの棒杭が5~30cmの間隔で、西列は径10cmの丸太杭が5~50cmの間隔でそれぞれ垂直に近い角度で打ち込まれており、東西の杭列の状況には明瞭な相違が認められた。これは東壁がSDe144の流路方向の正面に当たることから、特に念入りに護岸を施す必要があったのであろう。なお概報時には、本遺構を出水状遺構として報告した。これは本遺構がSDe144より深く掘り込まれ、また掘り方底面が透水路である地山砂層に達して湧水が顕著に認められたことなどによるが、上記したような理由から出水遺構とした性格は訂正したい。

埋土の状況や出土遺物の内容は、SDe139とほぼ共通する。遺物はコンテナ3箱程度出土している。うち近世の遺物を中心に18点を図示した。1075は肥前系の刷毛目碗で、18世紀代の製品である。1076は信楽系の陶器碗で、18世紀後半以降に位置付けられる。1077は肥前系の陶胎染付碗で、外面に唐草文が描かれる。18世紀代の製品である。また2次的な被熱を被っているためか、釉調は変色している。1078・1079は肥前系の刷毛目鉢である。1080は仏具とみられる。外面に如意頭文が陰刻され、銅緑釉が施される。産地は不明。1081は瀬戸・美濃系陶器の灯明具で乗燭である。底面を除いて乳白色の釉が掛けら



第106図 SXe04出土遺物実測図 (1/3・1/4)



第107图 SXe04平·立面图 (1/60)



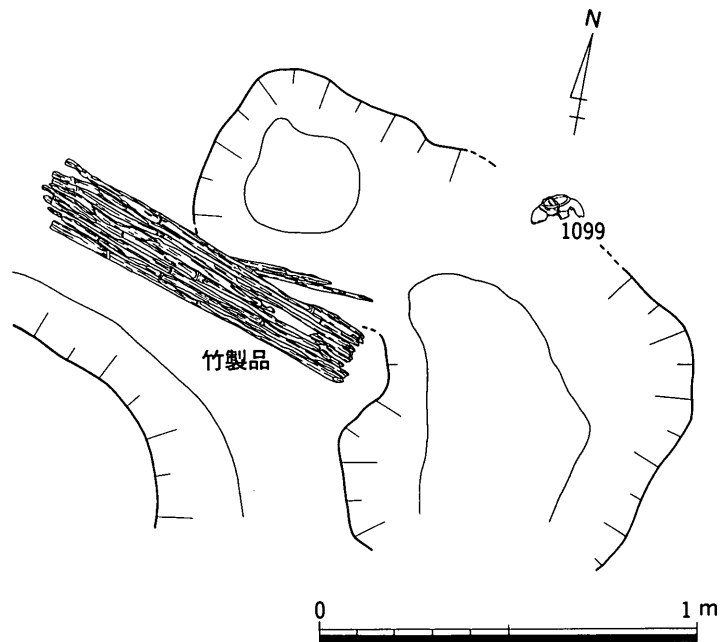
れ、細かな貫入が入っている。1082～1085は肥前系磁器の染付碗である。1082は口縁端部に錆釉が施される。1083は内面口縁端部付近の釉が拭い取られており、蓋物の碗となろう。1084は外面に草花文を描き、17世紀後半に遡る可能性がある。1085は広東碗で、見込みに寿字文を描く。18世紀末から幕末頃の製品であろう。1086は明治期以降の型紙摺りの染付碗である。1087は肥前系磁器の皿で、透明釉が施され見込みを蛇の目釉剥ぎされる。18世紀前半頃に位置付けられる。1088は肥前系の製品で、深めの端反り形態の鉢である。18世紀前半代か。1089は堺ないしは明石産の播鉢で、口縁部は萎縮して小型化しており、Ⅲ型式に分類され、19世紀前半代に位置付けられる（白神1992）。1090は瓦質土器の焙烙である。口縁部は短いながらも強く折り返して開き、形状としてはb型式のそれに近い。c型式でも古い形態であろう。しかしながら体部外面には指頭圧痕は認められず、確実に外型成形により製作されている。19世紀代の製品である。1091は軒丸瓦である。瓦当面には左巻きの巴文の周囲に12個の珠文を配する。1092は軒平瓦である。十字花状の中心飾りの両側に簡略化された唐草文を配する。

## 6. 包含層（第108～111図・図版42・74～76・78・79・81）

Ⅲ-42区低地部を中心に、3層に大別される包含層を検出している。各包含層の堆積状況については、前節で詳述したため本項では省略し、出土遺物についてのみ報告する。

包含層Ⅰ層は、Ⅲ-41～43区で検出した中世の遺物を主体とする包含層である。本層からはコンテナ6箱程度の遺物が出土している。出土遺物の内容は、後述する竹製品や漆碗、図示した土器・石器類の他に、桃核などがある。また41区G68グリットからは、第110図に示したように漆碗1点と竹製品1点

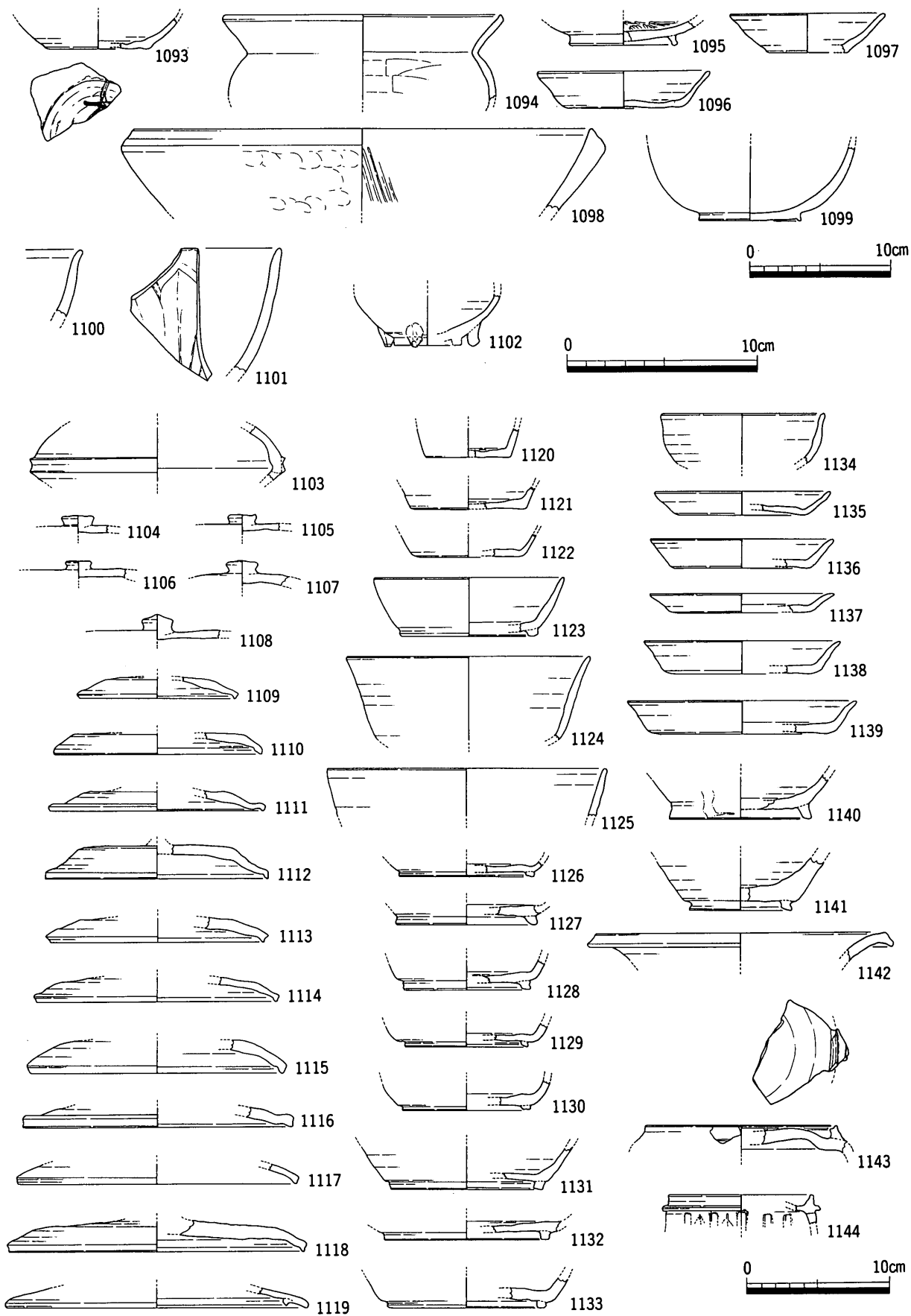
が出土している。竹製品は漆碗の西約0.5mの位置で、上位に9本、下位に2本の竹が主軸方向を揃えて並べられて出土した。竹製品は径1～2cm程の女竹を使用し、長さ96cm程に両端を鋭利な刃物で切り揃えられ、また節も落とされていた。計11本の竹が方向を揃えて並んで出土したことから、本来は紐などによって縛られていた可能性が高いが、その紐の痕跡は調査では検出できなかった。さて本層より出土した遺物については、本来的に本層に帰属するであろうものを中心に10点を図示した。1093は須恵器坏か。外底面に文字不詳の墨書を認める。1094は土師器甕。口縁部及び体部外面下半に煤が付着する。1095は黒色土器A類碗。やや外方に踏ん張った高台部の形状から、10世紀代に位置付けられる。1096・1097は土師質土器皿。口径の小さい1097は10世紀中葉から後半に、1096はより後出し13世紀後半から14世紀前半にそれぞれ位置付けられよう。また1096の外底面は、回転ヘラ切り後ナデ調整される。1098は土師質土器の播鉢で、



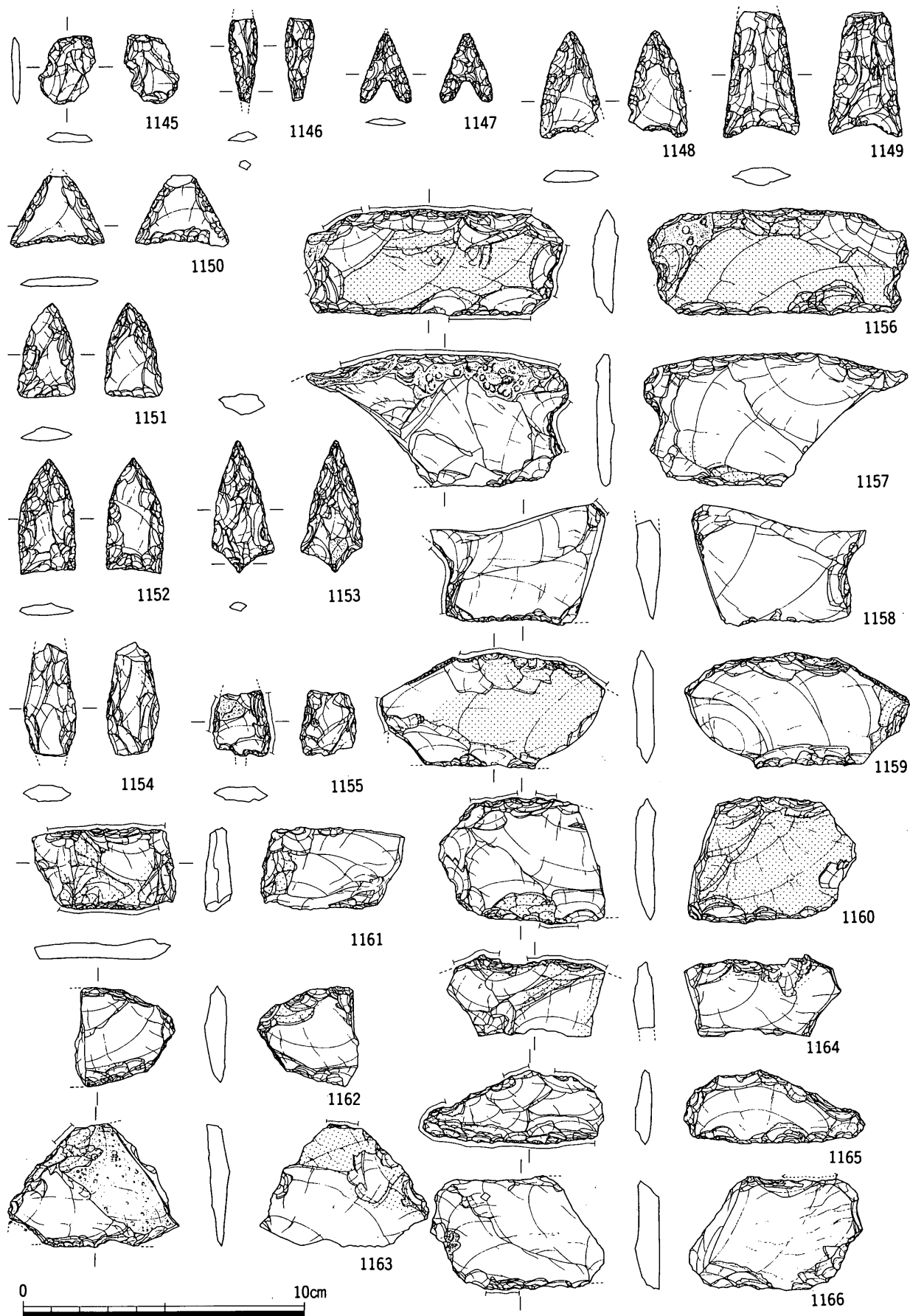
第108図 Ⅲ-41区包含層Ⅰ層木製品等出土状況 (1/20)

口縁端部は小さく摘み上げ気味に方形に納める。内面の卸し目は5条1単位である。国分寺楠井遺跡のⅡ-2期に相当し、14世紀後半代に位置付けられる(佐藤1995)。1099は漆碗である。口縁部付近を欠損し、また腐食のため体部の一部から高台部にかけての残りは悪い。外面高台内の削り込みは浅く、したがって底部の器壁はやや厚いものとなっている。材はシオジを使用し、木取りは柁目取である。内外面とも漆膜の遺存状態は悪いが分析の結果、炭粉下地の上に透明感の強い漆を塗り、さらに朱漆を塗り重ねていることが判明した。朱漆には天然辰砂もしくは人造の水銀朱が使用されているが、漆の塗布回数は少なく廉価な日常品であったのであろう。1100は中国産白磁の碗で、碗V類に分類される。1101は中国産青磁の碗である。いわゆる龍泉窯系の鎬蓮弁の碗で、碗I 5 b類に分類される(横田・森田1978)。1102は18世紀代の肥前系の青磁香炉で、明らかに本層に帰属するものではなく調査時に紛れ込んだものである。1145は石鏃未製品と考えたが、別の器種の可能性もある。側辺の一部に抉りを認める。1146は石錐である。

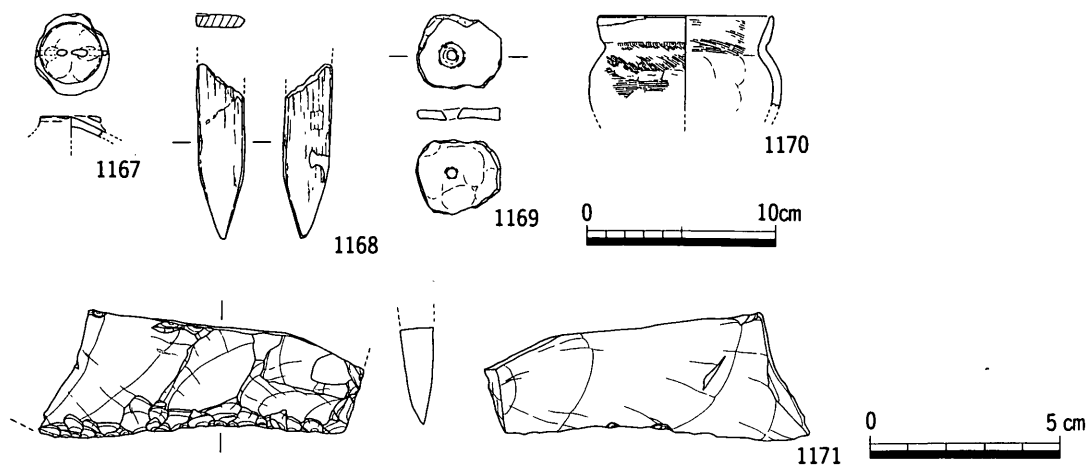
包含層Ⅱ層は、Ⅱ-13・Ⅲ-5区で検出された古代の遺物を主体として包含する土層である。本層からは、Ⅱ-13区でコンテナ4箱、Ⅲ-5区でコンテナ半箱程度の遺物が出土している。しかしながら先述したように、Ⅱ-13区で本層出土遺物として取り上げられた遺物の中には、本来本層下位に堆積する包含層Ⅲ層に帰属していたであろう多量の弥生時代後期初頭の土器・石器が混在し、一方で包含層Ⅲ層の遺物は1点も出土しておらず、調査時において両層の遺物を分離せず一括して取り上げられたものと判断された。つまり本層出土遺物とされるものの中には、図示した以外に多量の弥生土器が含まれるが、それら弥生土器については、本来包含層Ⅲ層に帰属していた可能性が高い。またこれら土器は本文中の個別遺構の出土遺物において報告したものと特に遜色がないため、1点のみを図示するにとどめる。1103は上述したように、本来包含層Ⅲ層に帰属する可能性が高い弥生土器である。細頸壺の体部で、体最大径部外面に断面M字形の突出度の低い突帯を付す。胎土中には角閃石粒が多量に含まれる。1104~1144が本来本層に帰属すると推定される須恵器である。当該期の土師器も少量出土してはいるが、図化しうるものはないため須恵器のみ報告する。1104~1119は坏蓋、1120~1134は坏身、1135~1139は皿、1140・1141は壺、1143・1144は円面硯である。図化しうる資料としては、ここに示したものが概ね全てであり、本層における器種組成や時期幅については、図示した資料に反映されているものと考えられる。つまり1119と1134がやや古く7世紀代に遡る他は、概ね9世紀前半代に納まるものと考えられ、そう大きな時期幅は想定しなくてもよいものと考えられる。また組成上は坏類が圧倒的に多く、皿は少ない。円面硯が2点も出土している点は注目される。1143は脚部を欠く小片。陸部は中央で僅かに凹み、使用により磨耗が認められる。海部端はやや低い外堤を内傾気味に貼付し、端部は鈍く回転ナデにより凹み、外端部を小さく摘み上げる。脚部の形状は不明。外堤下端外面に横方向の直線状の線刻を認める。1144は海部と脚部を欠く小片である。外堤は低く直立し、外堤下端外面に断面蒲鉾形に近い小突帯が水平に取り付く。脚部はやや内傾して開き、方形の透し孔が空けられ、透し孔の間には上方に向けた矢印状の線刻が認められる。類似形態として、下川津遺跡SDⅢ03出土例がある。1147~1155は石鏃である。1147はE区唯一の黒曜石製の小形の凹基式石鏃である。基部の抉りは深く、表面の風化も顕著であり、縄文時代に遡る可能性がある。1154・1155は調整剥離が粗雑で、未製品の可能性がある。1156~1160は打製石庖丁。側端部が残っているものについては、全て抉りが入る。1160は側辺に不明瞭ながらも抉りが、上側辺に潰し加工がそれぞれみられることから石庖丁と考えた。1161は楔形石器で、上下両側辺に潰し加工がみられる。1162~1166はスクレイパーである。1165は端部上側辺に浅い抉りが入り、この部分に



第109图 包含層 I・II 層出土遺物実測图 1 (1/3・1/4)



第110图 包含層 I・II 層出土遺物実測图 2 (1/2)



第111図 その他出土遺物実測図 (1/2・1/4)

やや磨耗がみられることから、紐などで木柄に結びつけて使用された可能性がある。

包含層Ⅲ層は、Ⅱ-13区からⅢ-41区にかけての広い範囲で検出された弥生時代後期を中心とする時期の包含層である。ただしⅡ-13・Ⅲ-5区では若干の混入と考えられる遺物を除くと、大半は弥生時代後期初頭に時期が限られるようであり、41~43区の弥生時代後期後半から末頃を中心とする時期と若干の時期差がみられ、厳密には両地域の包含層が同一層である可能性は乏しい。またⅢ-42区西端では上面の削平により、空港造成土直下で地山層が露出し包含層は消失していたため、層位的な繋がりも捉えることができなかった。さて本層からは、Ⅲ-5区でコンテナ半箱、41~43区でコンテナ2箱程度の遺物が出土している。出土した土器類はこれまで各個別遺構の項で報告してきた遺物と大差はないため、図示することは差し控える。

1167~1170は、遺構検出途中もしくは出土後遺構名が不詳となってしまった遺物である。本文中にこれまで報告していない器種を選んで、一括して報告したい。1167はⅡ-7区攪乱溝より出土した弥生土器蓋である。甕もしくは鉢の底部形状と酷似するが、側面より頂部にかけて2対の穿孔がみられることから蓋と考えた。1168はⅡ-7区より出土した木製品である。材はモミ属を用いた小板材で、下端部を両側辺より切り込み剣先状に尖らせる。調査担当者は齋串として取り上げられたようだが、出土位置が不明のため、時期を決められない。1169・1170はⅢ-41区遺構検出中に出土した遺物である。1169は土製の紡錘車である。弥生土器甕もしくは壺の底部を再利用したもので、楕円形に打ち欠いた土器片の中央に小円孔を穿つ。1170は土師器の小形丸底土器である。肩部外面をハケ調整の後鋭利な器具でケズリ調整される。布留式新相にまで下る。

1171は、SAe02より出土したスクレイパーである。都合により本文末尾に掲載することとなった。縦長剥片を利用し、刃部は主に片面調整である。器表面は白濁色を呈し、風化が顕著である。

註

伊藤晃 1995「備前」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

大久保徹也 1992「古墳時代以降の土器製塩」『吉備の考古学的研究』山陽新聞社

大久保徹也 1996「各地域における弥生時代後期土器の様相 - 讃岐 -」『古代学協会四国支部第10回

松山大会資料 弥生後期の瀬戸内海 - 土器・青銅器・鉄器からみたその領域と交通 -』

尾上実 1983「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』

金田章裕 1988「讃岐の条里遺構」『香川県史 1 原始古代』

溝の坪界の表記については、金田氏の復元案に従った。なお金田氏は、山田郡条里に関して、その八条と九条では里の序数の配置が異なることから、一条から七条についての里の序数の数値の明言を避けられている。しかし本項ではあえて、七条の里の序数の配置については、八条の配置と同じものと考え、また千鳥式の坪並と推定して溝の坪界を表記した。以下溝の坪界の表記については、同様の手続きに依る。

蔵本晋司1993「Ⅲ-33区他検出の弥生時代後期土坑群について」『空港跡地遺跡発掘調査概報 平成4年度』香川県教育委員会他

佐藤竜馬 1994「18～19世紀の土器・瓦について」『空港跡地発掘調査概報 平成5年度』香川県教育委員会他

なお土師質及び瓦質の焙烙の分類案については、以下特に断りのない限り本書に依る。

佐藤竜馬 1995「楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十八冊 国分寺楠井遺跡』香川県教育委員会他

白神典之 1992「堺摺鉢考」『東洋陶磁』第19号

山本悦世 1993「吉備系土師器椀の成立と展開」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊 鹿田遺跡3』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

以下、吉備系土師器椀の分類については本書に依る。

横田賢次郎・森田勉 1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4

#### 参考文献

藤澤良祐 1989「本業焼の研究（3）-下品野村・下半田川村を中心に-」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 Ⅷ』

間壁忠彦・間壁菫子 1968「備前焼研究ノート3」『倉敷考古館研究集報 5号』

## 第3章 自然科学調査の成果

### 第1節 木製品および種実遺体の種類

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

空港跡地遺跡は、高松平野のほぼ中央部に位置し、発掘調査により弥生時代や中世の遺構・遺物が検出されている。本遺跡では、出土した木製品の樹種、備前焼埋納土坑から出土した炭化植物の種類、漆塗りの技法などを明らかにするための自然科学分析をこれまでも行っている（未公表資料）。

本報告では、出土した木製品・自然木および土器底部に付着していた種実の種類を同定し、既存資料と比較しながら過去の植生および植物利用について考察する。

#### 1. 木製品の樹種同定

##### (1) 試料

試料は、弥生時代、古代(?), 中世の木製品など11点（試料番号1～11）である。各資料の詳細は、樹種同定結果と共に表3に記した。

##### (2) 方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラル（抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

##### (3) 結果（図版83～85）

11点の木製品は、針葉樹4種類（マツ属複維管束亜属・モミ属・スギ・ヒノキ）、広葉樹2種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・ヤマグワ）とイネ科タケ亜科に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・マツ属複維管束亜属 (*Pinus* subgen. *Diploxylo*) マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。放射組織は仮道管、柔細胞とエピセリウム細胞よりなり、分野壁孔は窓状、仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～10細胞高。

・モミ属 (*Abies*) マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成され、早材部から晩材部への移行は比較的やや急～緩やか。放射組織は柔細胞のみで構成され、放射柔細胞の壁は粗く、じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はスギ型で2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

試料番号	挿 図	図 版	遺 構 名	器 種	樹 種	時代・時期
1	922	80	SXe01	建築部材?	マツ属複維管束亜属	中 世
2	923	80	SXe01	棒状木製品	ヤマグワ	中 世
3	921	80	SXe01	木 杭	マツ属複維管束亜属	中 世
4	920	79	SXe01	板 材	スギ	中 世
5	265	79	SDe115	板 材	ヒノキ	弥生時代
6	1168	80		?	モミ属	?
7	827	79	SDe137	板 材	ヒノキ	弥生時代
8	266		SDe115	板 材	ヒノキ	弥生時代
9	267	79	SDe115	板 材	ヒノキ	弥生時代
10			SDe115	自 然 木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	弥生時代
11		42	包含層 I 層	竹 製 品	イネ科タケ亜科	中 世

表 3 樹種同定結果一覧表

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus surben.* *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管壁は中庸～厚く、全て単独で配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと同複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。

・ヤマグワ (*Morus australis* poiret) クワ科クワ属

環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、塊状に複合しながら年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ～Ⅲ型、1～6細胞幅、1～50細胞高で、しばしば結晶を含む。

・イネ科タケ亜科 (*Gramineae* subfam. *Bambusoideae*)

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱をもつ。

タケ亜科は、タケ・ササ類であるが解剖学的特徴では区別できない。

#### (4) 考察

出土した木材の時代は、弥生時代・古代?・中世に分けられる。弥生時代では、板材3点・建築部材1点・自然木1点について樹種同定を行った。板材は全てヒノキであった。ヒノキは木理が通直で、板状の加工が施しやすい。同様の例は各地の遺跡で出土した板状の製品にもみることができ(島地・伊東, 1988), 今回の結果もその一例といえる。その一方で、本遺跡の北に位置する井手東Ⅰ遺跡では、弥生時代後期の板材に広葉樹材も多数認められている(能城・鈴木, 1994)。広葉樹材の板材は、丸亀平野に位置する龍川五条遺跡等でも認められている(未公表資料)。これらの結果から、様々な種類の木材が板に利用されていたことが推定され、本遺跡でもヒノキ以外の木材が板に利用されていた可能性がある。



建築部材も板材と同様にヒノキであった。弥生時代の建築部材については、県内では類例が少ない。しかし、古代では畿内を中心に多くの類例が知られており（伊東・島地，1979；島地ほか，1980），今回の結果は古くから建築材としてヒノキが利用されていたことを示す結果といえる。また、ヒノキは周辺で行われた調査で様々な用途に広範に利用されていたことが明らかになっており（能城・鈴木，1995），今回の結果もその一例といえる。

自然木はクヌギ節であった。本遺跡の北西に位置する上天神遺跡では、弥生時代後期中葉～後半の井堰構築材について樹種同定が行われている（未公表資料）。その結果では、クヌギ節を主とした樹種構成が確認されている。また、近接する林・坊城遺跡で行われた花粉分析や自然木の樹種同定結果から、縄文時代晩期頃にアカガシ亜属やコナラ亜属を主とする植生が推定されている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1993a，1993b）。これらの結果を考慮すれば、本遺跡周辺では弥生時代にクヌギ節が普通にみられたと考えられる。

古代？とされる製品は、齋串？1点で、モミ属に同定された。齋串については、本遺跡の東方に位置する鴨部・川田遺跡で平安時代の試料について樹種を明らかにした例がある（未公表資料）。その結果は全てヒノキ属（ヒノキと考えられる）であった。齋祀具などにヒノキが多い例は、本遺跡の北に位置する居石遺跡でも確認されており、畿内文化圏との深いつながりが指摘されている（鈴木・能城，1995）。一方、モミ属は東山崎・水田遺跡で中世の呪符木簡に確認された例があるが（パリノ・サーヴェイ株式会社，1992），古代の齋串に確認された例は知られていない。これらのことを考慮すると、今回の齋串？は特異な例と言える。今後同様の類例が他にもあるか注目したい。

中世では、建築部材・角材・杭・板材・竹製品について樹種同定を行った。建築部材は複維管束亜属であった。複維管束亜属は、東山崎・水田遺跡で近世前半の柱材に多数確認されており（パリノサーヴェイ株式会社，1992），建築部材としてよく利用されていたことが推定される。同様の例は、丸亀平野の郡家一里屋遺跡などでも確認されている（パリノサーヴェイ株式会社，1993c）。複維管束亜属は、林・坊城遺跡の花粉分析結果から、弥生時代以降に増加したことが指摘されており、周辺での入手も比較的容易であったと考えられる。加えて強度が高いことが、建築部材として利用された背景に考えられる。また、角材はヤマグワ、杭は複維管束亜属に同定された。これらは用途を考えれば、特定の種類が選択されたとは考えにくく、周囲での入手が容易な木材が利用されたと考えられる。

板材はスギに同定された。本遺跡周辺でスギ材が確認された例は、東山崎・水田遺跡（近世前半），井手東I遺跡（弥生時代）が知られている。井手東I遺跡では、角材に1点確認されたのみである。これらの結果を見ると、本地域でスギが大量に使用されるようになるのは近世のようである。多肥松林遺跡や林・坊城遺跡の花粉分析結果を見ると、スギの花粉化石は産出量が多いとはいえない。このことから、本地域では近世以前はスギが入手しやすい環境ではなかったことが推定される。

## 2. 土器胎土中の種実遺体の同定

### (1) 試料

試料は、弥生時代の土器底部（4）に付着した種実遺体（試料番号12）である。

### (2) 方法

土器表面ならびに破断面を双眼実体顕微鏡下で観察を行った。また、走査型電子顕微鏡による土器表面の観察もあわせて行った。

### (3) 結果 (図版85)

種実遺体は、土器の破断面に観察され、土器胎土中に練り混まれた状態であることがわかる。場所によっては、種実遺体が抜け落ちた痕が穴となって残っており、薄く炭化物が付着している。種実遺体の大きさは、0.5mm程度の楕円形で、完全に炭化している。炭化が著しいため、炭化物表面の構造は不明で、穎が残存しているかどうかは不明。また、炭化物の表面一部を顕微鏡で観察したが、植物珪酸体等の組織片は、認められなかった。そのため種類の同定には至らなかった。

### (4) 考察

種実遺体は、その産状から、土器胎土に使用した粘土に混じっていたが、意図的に混和されたものと考えられる。前者の場合は流路沿いなどに生育していた植物の種実が堆積した可能性があり、後者の場合は周囲に生育していた植物の他に栽培されていた穀物の可能性もある。また、観察できる全ての個体が炭化していることから、土器焼成の段階で炭化した可能性がある。

### <引用文献>

- 伊東隆夫・島地 謙 (1979) 古代における建造物柱材の使用樹種. 木材研究資料, 14, p.49-76.
- 能城修一・鈴木三男 (1995) 井手東 I 遺跡出土の木製品の樹種. 「一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四冊 井手東 I 遺跡 (自然科学分析・考察編)」, p.1-28, 高松市教育委員会他.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (1992) 木製品の樹種. 「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1冊 東山崎・水田遺跡 第1分冊」, p.358-368, 香川県教育委員会他.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (1993a) 林・坊城遺跡自然河川出土木材の樹種. 「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2冊 林・坊城遺跡」, p.224-238, 香川県教育委員会他.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (1993b) 花粉分析とプラント・オパール分析. 「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2冊 林・坊城遺跡」, p.239-263, 香川県教育委員会他.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (1993c) 郡家一里屋遺跡出土木材等分析委託業務報告. 「四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第十二冊 郡家一里屋遺跡」, p.227-233, 香川県教育委員会他.
- 島地 謙・伊東隆夫編 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧. 296p. , 雄山閣.
- 島地 謙・伊東隆夫・林 昭三 (1980) 古代における宮殿・官衙の使用樹種. 古文化財編集委員会編「考古学・美術史の自然科学的研究」, p.249-260, 日本学術振興会.
- 鈴木三男・能城修一 (1995) 高松市居石遺跡出土木材の樹種. 「一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第七冊」, p.165-171, 高松市教育委員会他.

## 第2節 樹種鑑定・漆膜分析

財団法人 元興寺文化財研究所

### 1. 漆製品の塗膜分析

#### (1) 試料

試料は、Ⅲ-41区包含層Ⅰ層より出土した中世の漆塗椀（1099）である。

#### (2) 方法

##### a. 塗膜断面観察

極微量の試料を樹脂包埋後、減圧して樹脂及び試料中の気泡を抜き、静置して硬化させた。マイクロトーム（㈱日本マイクロトーム研究所製ST-201）を用いて切片を作製し、スライドガラス上に固定し永久プレパラードとした。そして、光学顕微鏡を用い、透過光により塗膜断面を観察し、写真撮影を行った。

##### b. 顔料分析

顔料分析には、電子線マイクロアナライザー（EPMA）（㈱堀場製作所製EMAX2000）を使用した。

EPMAは試料に電子線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のX線を検出することにより元素の種類を同定する。

#### (3) 結果

##### a. 塗膜断面観察（巻頭図版2）

分析の結果、下地は炭粉下地で、内面は下地の上にやや透明感の強い薄い漆層が認められ、さらに上塗りとして朱漆が塗られていた。外面も内面と同様の手順で仕上げられていたが、下地の上に塗られた漆層は内面よりやや厚く塗られていた。

##### b. 顔料分析

第112図に示すように水銀（Hg）およびイオウ（S）のピークが内・外面いずれも強く認められた。さらに顕微鏡による塗膜面の断面観察を併用することにより本試料は、朱（天然辰砂もしくは人造の水銀朱）を顔料として使用しているものと思われる。

### 2. 木製品の樹種

#### (1) 試料

試料は、Ⅲ-42区SDe115南北溝より出土した柄状木製品（268）と、Ⅲ-41区包含層Ⅰ層より出土した漆椀（1099）である。

#### (2) 方法

木材の樹種を同定する方法には大きく分けて肉眼的な方法と顕微鏡的な方法がある。遺跡出土木材は変質しているものが多いので、木口面（横断面）・柁目面（放射断面）・板目面（接線断面）の3方向の切片を作成し顕微鏡観察で組織や細胞の形態を確認することにより、同定を行う。

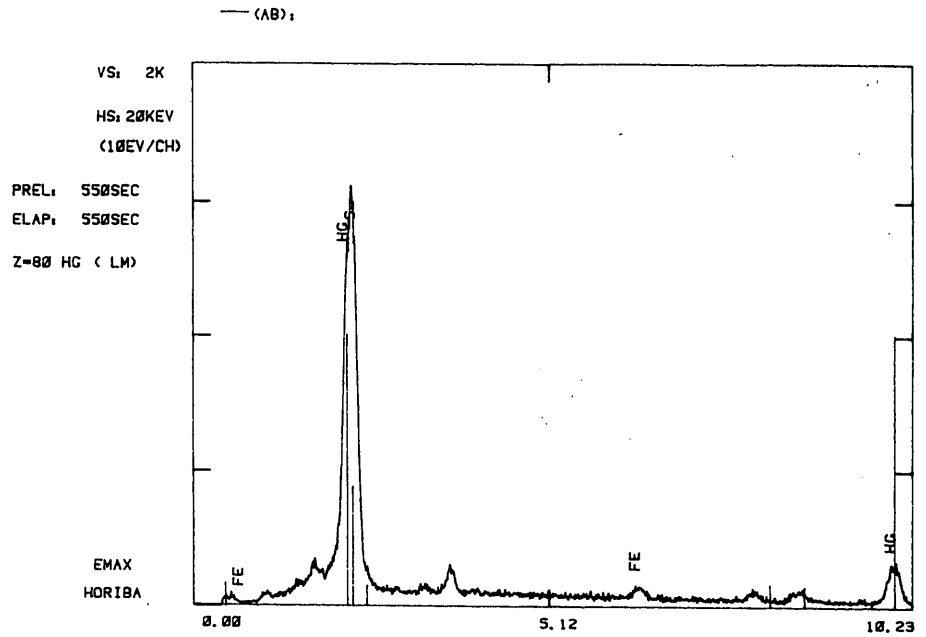
まず剃刀の刃を用いて、試料の木口・柁目・板目の3断面の切片を作製し、プレパラートに封入した。こうして作製した切片の内部形態（針葉樹については樹脂道、樹脂細胞の有無・樹脂細胞の配列・分野

壁孔の形態・ラセン肥厚の有無等，広葉樹については道管の配列状況・穿孔の形態・放射組織の形態と幅等を生物顕微鏡で観察し，樹種を同定した。

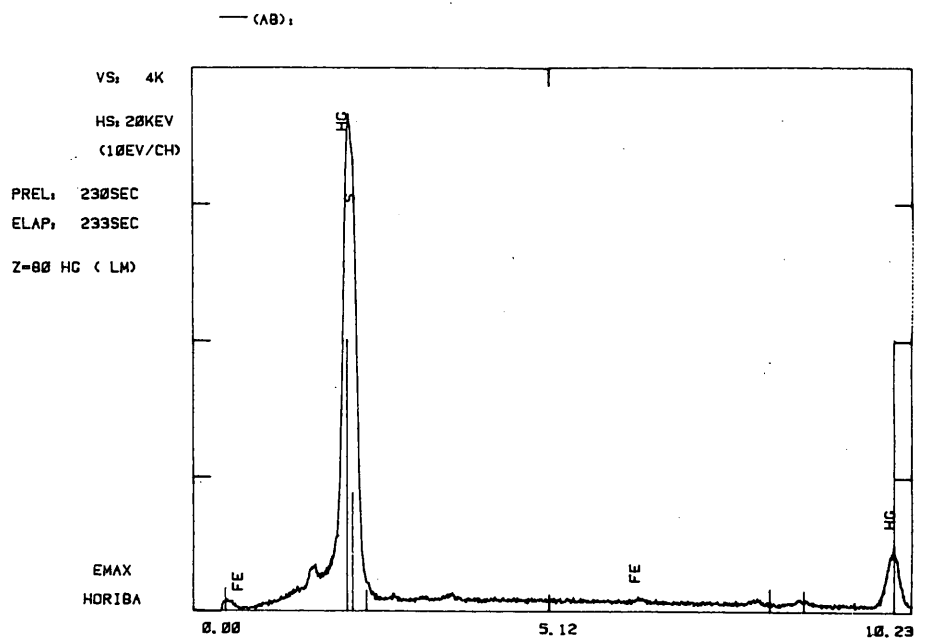
顕微鏡の写真撮影については，木口面は30倍，柾目面は広葉樹100倍・針葉樹200倍，板目面は50倍で撮影した。

### (3) 結果 (図版85)

樹種同定の結果，柄状木製品はコウヤマキ属コウヤマキ，漆碗はモクセイ科トネリコ属シオジと判明した。



1. 内面の朱漆



2. 外面の朱漆

第112図 漆膜電子線マイクロアナライザー分析結果

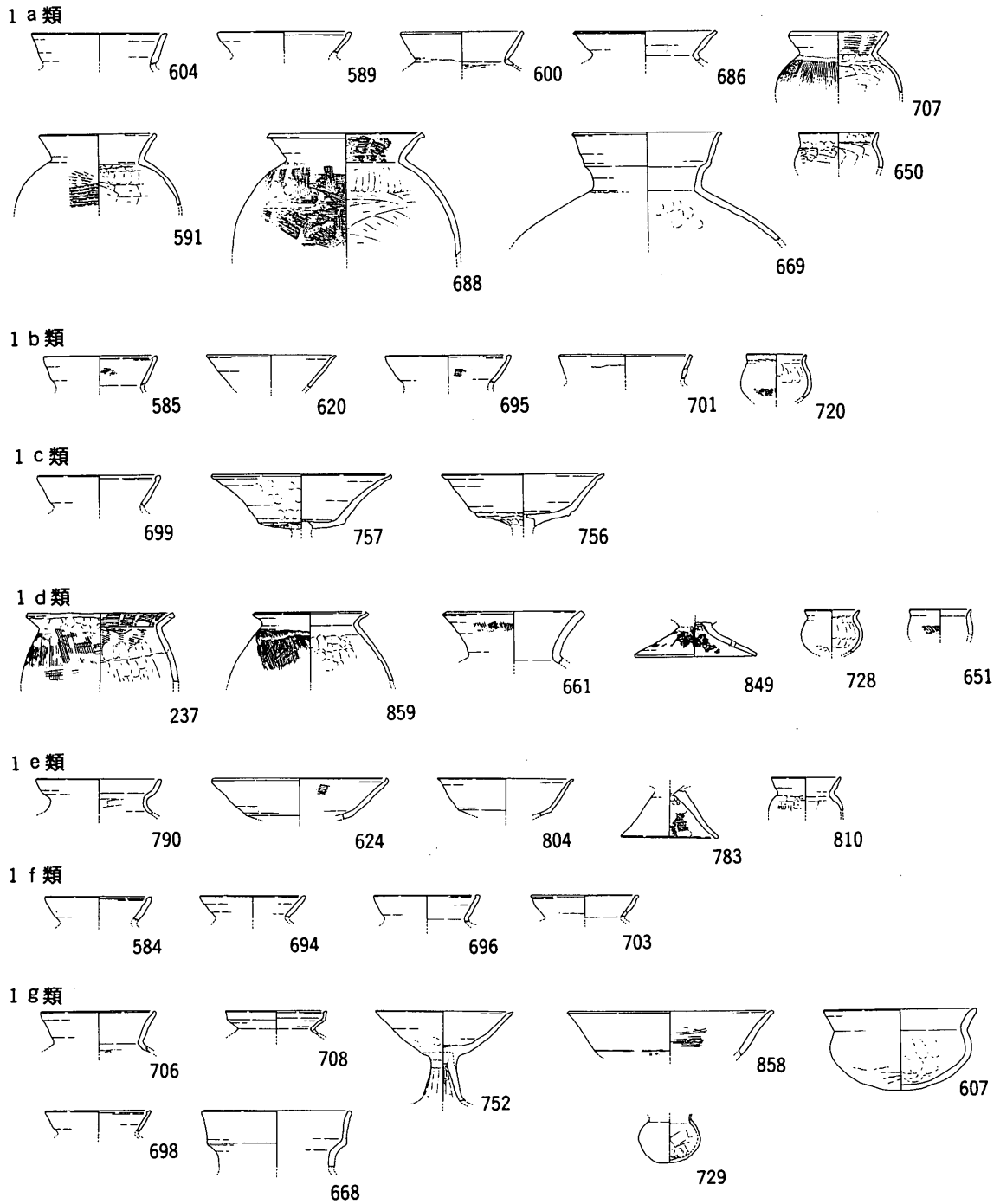
### 第3節 空港跡地遺跡出土土器の胎土分析

#### I 分析試料説明

本分析は、本遺跡出土の弥生時代後期初頭から古墳時代前期の土器について、理化学的な方法を援用することによりその製作地を推定する一助とするために行った。基本的には、実体顕微鏡を用いて土器の砂粒構成を分類し、その分類された土器の胎土分析値と、これまで分析を行った遺物のそれとを比較し、分析値が近似する集団を識別することによってその製作地の推定を試みた。

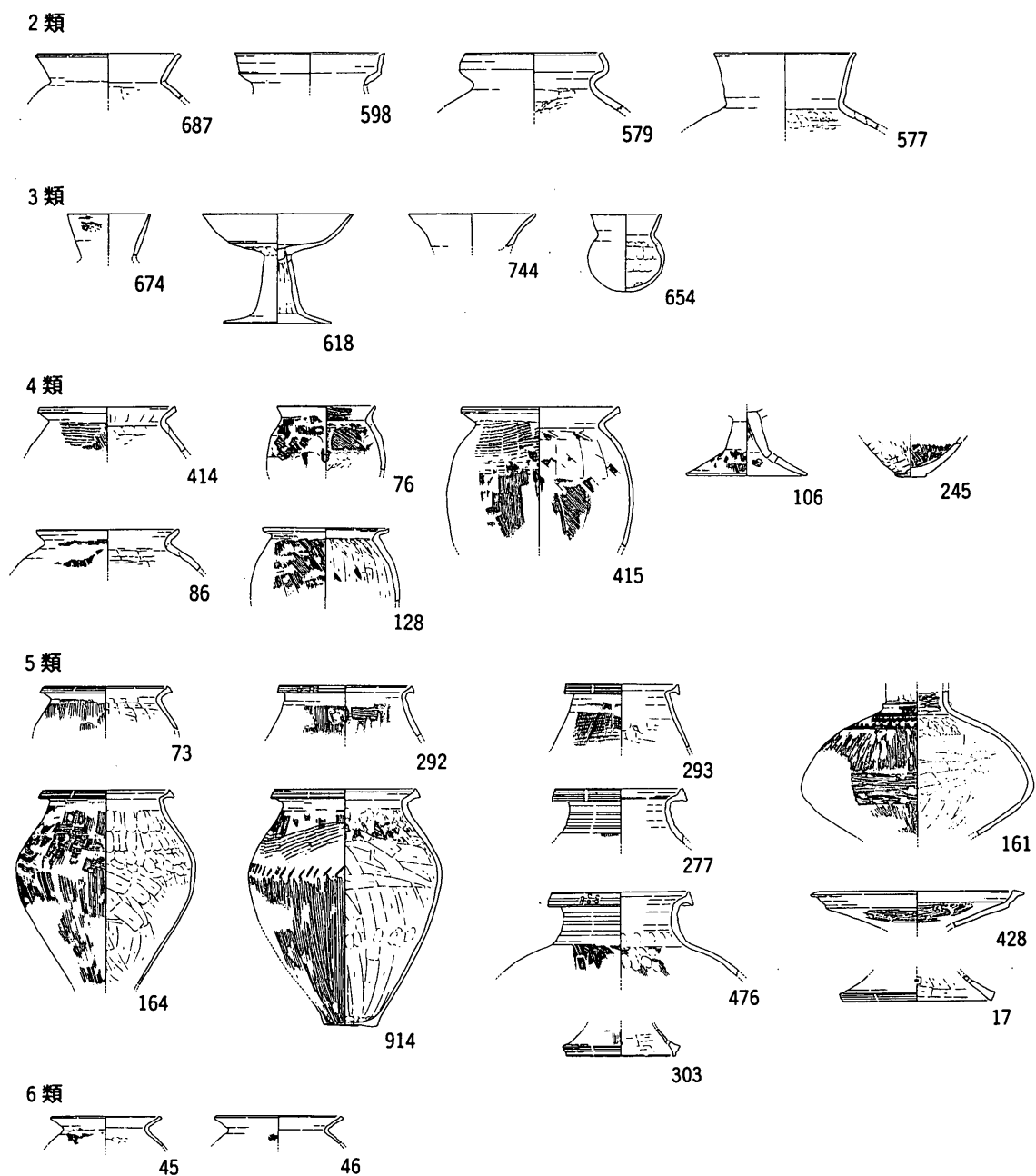
以下にその砂粒分類の基準を示す。なお1～3類は布留式新相併行、4類は弥生時代後期後半、5類は弥生時代後期初頭、6類は布留式古相併行の各々資料である。また1類は、石英と角閃石粒を含む胎土で、含有される砂粒の粒径や土器胎土の色調等により、a～g類の7類に細分した。

- 1 a 類 におい黄橙色ないしは黄褐色を呈し、最大径10mmの石英粒を多量に含み、また最大径1mm以下の角閃石粒を少量含むものである。なお稀に最大径1mm以下の金雲母粒や赤色粒を含むものもあるが細分はしていない。器種としては、甕を主体として、高坏・鉢・小形丸底土器など小形器種にも採用される。本遺跡では主体となる胎土の一つである。
- 1 b 類 砂粒1 a 類とほぼ同一の色調・砂粒構成をなすが、含有される石英粒が最大径2mm以下の中粒を主体とするもので、また含有量も少なく精選された胎土を有するものである。甕を主体に、高坏・小形丸底土器がある。
- 1 c 類 色調は灰白色系を呈し、最大径4mm程度の石英粗粒をやや多量に含むと共に、最大径1mm以下の角閃石・雲母粒を少量含むものである。なお赤色粒を含むものもあるが、細分はしていない。器種としては、甕を主体に直口壺・高坏がある。
- 1 d 類 色調・砂粒構成は1 c 類とほぼ同一だが、含有される石英粒が最大径1mm程度の極細粒を主体とするもので、また量も極めて微量である。器種としては、甕・壺類の大形器種よりも、小形丸底土器など小形器種に多用される。
- 1 e 類 色調は灰白～浅黄橙色を呈し、最大径1mm以下の石英・角閃石・赤色粒を少量含む。また金雲母粒を含むものもあるが、細分はしていない。砂粒1 d 類に近い内容を有するが、色調等によりあえて分類した。高坏・小形丸底土器など小形器種に多用される。
- 1 f 類 色調は浅黄橙色を呈し、最大径2mm以下の石英粒及び最大径1mm以下の角閃石粒を含む。石英粒の多寡により細分されるようだが、試料数が少なく試みない。甕に限って用いられる。
- 1 g 類 色調は橙色系を基調としやや幅がある。砂粒構成は基本的には1 a 類と大差はないが、色調等によりあえて分類した。上記分類項目とはなじまない、粗粒を含む一群を一括した。高坏を主体とし、壺・鉢・小形丸底土器などにも用いられる。
- 2 類 色調は、外面浅黄橙色・断面黒色を呈し、他と明瞭に区別可能な一群である。最大径4mmの石英粒・赤色粒を多量に含む。甕・壺類など大形器種に限って用いられる。
- 3 類 色調は、外面黄橙色・断面黄灰色を呈し、これも他と明瞭に区別可能な一群である。最大径2mm以下の石英粒を微量含み、これに赤色粒が混じる。精選された胎土である。高坏・小形丸底土器など小形器種に限って多用される。



第113図 胎土分析資料1 (1 a~1 g類)

- 4 類 色調はにぶい黄橙色を呈し、これも他と明瞭に区別可能な一群である。最大径3mm以下の石英・角閃石・金雲母粒を含む。赤色粒の有無により2分されるが細分はしていない。構成砂粒はいわゆる胎土1類(森下1994)・下川津B類土器(大久保1990)と呼ばれる一群と同じだが、角閃石の含有量は少なく、代わりに金雲母粒が著しく目立ち、また器形や調整手法等もB類土器とは明確に異なる。器種は甕を主体とし、高坏・鉢が少量加わる。
- 5 類 色調は主ににぶい黄橙色を呈し、最大径4mm以下の石英・角閃石・金雲母粒を含むものである。いわゆる胎土1類・下川津B類土器と呼ばれる胎土に酷似し、総じて角閃石細粒を多量に含み、金雲母粒は微量しか含まれない。器種は各器種認められる。



第114図 胎土分析資料2 (2～6類)

6 類 色調は黄色系を呈し、最大径3mm以下の石英・火山ガラス粒を含むものである。胎土・器形・調整手法などの点で、いわゆる下川津C類土器(木下1995)と呼ばれる一群に酷似するが、火山ガラスの含有量は川津二代取遺跡資料と比較して少ない。器種は本遺跡では、甕・高坏等が認められた。

## II 空港跡地遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所

白石 純

### 1. はじめに

この胎土分析では、蛍光X線分析法により空港跡地遺跡出土の弥生時代後期初頭から古墳時代前半期の土器を分析し、以下のことについて検討した。

なお、ここで分析した土器は、あらかじめ試料提供者が肉眼観察の胎土分析により12種類に分類している土器を基準としている（本節1項参照）。

- (1) 肉眼観察による胎土分析で、空港跡地遺跡出土の弥生後期後半の土器が砂粒分類の4類（下川津B類類似土器）に分類されているが、形態・技法的には下川津B類土器とは異なっている。そこで、蛍光X線分析法でいわゆる下川津B類土器（ここでは下川津B類の土器として高松市上天神遺跡出土土器（白石1995）を比較試料とした。）と、この遺跡出土土器とを比較し差異があるかどうか検討した。
- (2) 空港跡地遺跡 SDe137出土の古式土師器は、形態・技法的および胎土の肉眼観察から9種類に細分されているが、蛍光X線分析法による胎土分析では、どのように分類できるか。また、9種類に分類された土器のうち1b・1g・2類は、高松市中間西井坪遺跡（白石1996）の大形堅穴・焼成土壇・溝S X01・谷3出土の土器と肉眼的な胎土観察で類似しているが、蛍光X線分析法ではどうなるか。
- (3) 空港跡地遺跡出土の弥生後期初頭の土器のなかに、肉眼的観察から下川津B類土器に類似（砂粒分類5類）するものがあり、この土器と上天神遺跡出土の土器（下川津B類）と間で分析値に差があるかどうか。
- (4) 空港跡地遺跡出土の古墳時代初頭の土器のなかで、胎土中に火山ガラスを多量に含む土器（この遺跡では砂粒分類6類としているが、この土器と胎土・形態的にはほぼ同じものに川津二代取遺跡の下川津C類土器がある。）と、その他の11種類に分類された土器との間で差異があるかどうか。

### 2. 分析方法および結果

分析は、波長分散型蛍光X線分析装置（理学電気製KG-4型）を用い、分析試料の作製、測定条件などは現在まで行っている方法である。

分析試料は、第1・2表に掲げた弥生後期初頭～古墳前半期の68点の土器である。

分析の結果、 $K_2O$ ・ $CaO$ ・ $Sr$ ・ $Rb$ の4元素に顕著な差がみられることから、この4元素のX-Y散布図を作製し検討した。

(1)の検討内容である弥生後期後半の4類土器（試料番号49～55）と現在までに分析した讃岐地方の各遺跡<sup>(2)</sup>（上天神遺跡、旧練兵場遺跡、八丁地遺跡、仲善寺遺跡）出土の土器と比較した結果、第1・2



図から53（高坏）以外の土器は全て善通寺市旧練兵場遺跡（高松平野からの搬入および在地産の土器）が分布する領域にプロットされた。

(2)の課題である肉眼観察により、古式土師器が9類(1 a, 1 b, 1 c, 1 d, 1 e, 1 f, 1 g, 2, 3)に分類されているが、第7・8図からこの9分類は、ほぼ一つにまとまり識別されなかった。

また、1 b・1 g・2類と高松市中間西井坪遺跡出土土器（大形竪穴・焼成土壙・溝 SX01・谷3）の比較では、第3・4図から1 b・1 g類の一部の土器が、中間西井坪遺跡の分布範囲に入っただけで、ほとんどの土器が分布範囲以外にプロットした。

(3)の弥生後期初頭の土器のうち、下川津B類土器に類似する土器（5類）があり、この土器（試料番号56～66）と上天神遺跡の4類（下川津B類）の土器の比較では、第5・6図から65（細頸壺）以外は、すべて上天神遺跡出土土器の分布領域に分布した。

(4)古墳時代初頭の土器で、胎土中に火山ガラスを多量に含む土器（6類）とその他の土器との比較では、6類（67, 68）の土器が1 a～g類が分布する領域にプロットした。

### 3. まとめ

空港跡地遺跡内から出土した弥生後期初頭～古墳前半期の土器の胎土分析を実施したが、この分析でわかったことを述べまとめとする。

(1) 空港跡地遺跡出土の弥生後期後半の4類の土器（49～55）は、上天神遺跡（下川津B類土器）の分布領域には入らず善通寺市の旧練兵場遺跡（弥生後期終末）の高松平野からの搬入および在地産土器が分布する領域に入る分析結果となった。このように、胎土分析からもいわゆる下川津B類土器の胎土とは異なることがわかった。また、この4類土器は考古学的な検討で、形態・技法的に下川津B類土器とは異なっており、考古学的な見知から生産地を検討する必要がある。

(2) 空港跡地遺跡出土土器のうち古式土師器が9種類に分類されたが、胎土分析では、ほぼ一つにまとまり識別できなかった。また、1 b・1 g・2類の土器と中間西井坪遺跡との比較では、一部が重なる結果となった。この他の1 a～3類の土器も完全には一致しないが、この中間西井坪遺跡と分布範囲が半分ほど重なる。このことから胎土的には、ほぼ同一の胎土と考えられる。

(3) 空港跡地遺跡弥生後期初頭の5類（角閃石を多量に含む土器類）と上天神遺跡（下川津B類土器）の比較では、5類土器が上天神遺跡の分布領域に入り、分析値からは同一の胎土と推測される。また5類土器のうち65の壺だけが1 a～3類が分布する領域にプロットし、胎土が異なることがわかった。形態・技法的に他地域からの搬入品なのか再検討を要する。

(4) 空港跡地遺跡の古墳前期初頭の6類土器が他の土器と差異があるどうかでは、1 a～3類の土器が分布する領域に入り火山ガラスの有無だけでは差異はなかった。

以上、この分析で得られた結果をまとめたが、空港跡地遺跡出土の弥生後期初頭～古墳前半期の土器が肉眼観察による胎土分析で12類に分類されたが、蛍光X線分析では、以下のように大きく3つに分類された。

(イ) 砂粒分類1 a～1 g・2・3・6類……………胎土中には、粗い石英粒・赤色粒を多く含む。

周辺遺跡で類似する土器として、中間西井坪遺跡の3・4類土器が類似。

(ロ) 砂粒分類4類……………胎土中には、角閃石、金雲母が含まれる。5類に比

べて角閃石の量が少なく、金雲母が目立つ。

周辺遺跡との比較では、旧練兵場跡遺跡（高松からの搬入・在地産）に類似。

(ハ) 砂粒分類 5 類……………胎土中に角閃石を多量に含む。

周辺遺跡の類似土器として、上天神遺跡の砂粒分類 1～4 類に類似。

蛍光 X 線分析法では、大きく 3 つに分類されたが、この分析法での限界なのかもしれない。今後とも分析試料を蓄積し検討していきたい。

最後になりましたが、この分析を行うにあたり、廣瀬常雄氏、蔵本晋司氏をはじめ香川県埋蔵文化財センターの職員の方々にはお世話になった。記して感謝いたします。

#### 註

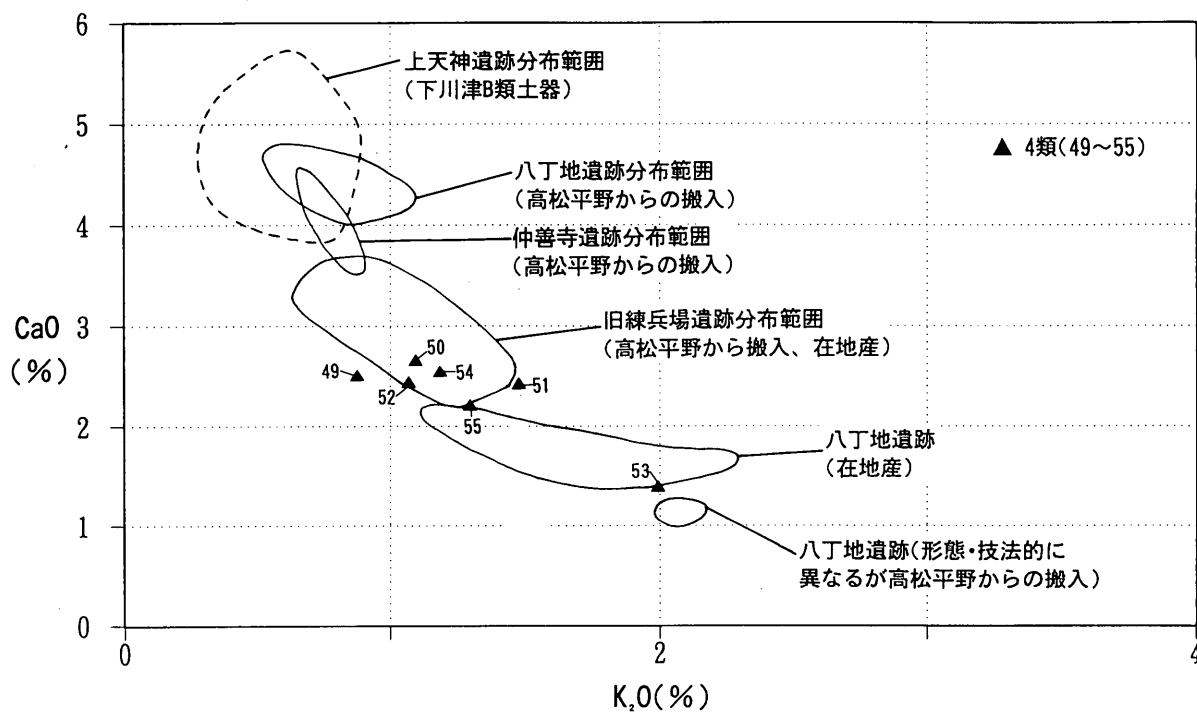
大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』香川県教育委員会他

木下晴一 1995「下川津 C 類土器（仮称）について」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十六冊 川津二代取遺跡』香川県教育委員会他

白石 純 1995「上天神遺跡出土土器の胎土分析」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第 6 冊 上天神遺跡』香川県教育委員会他

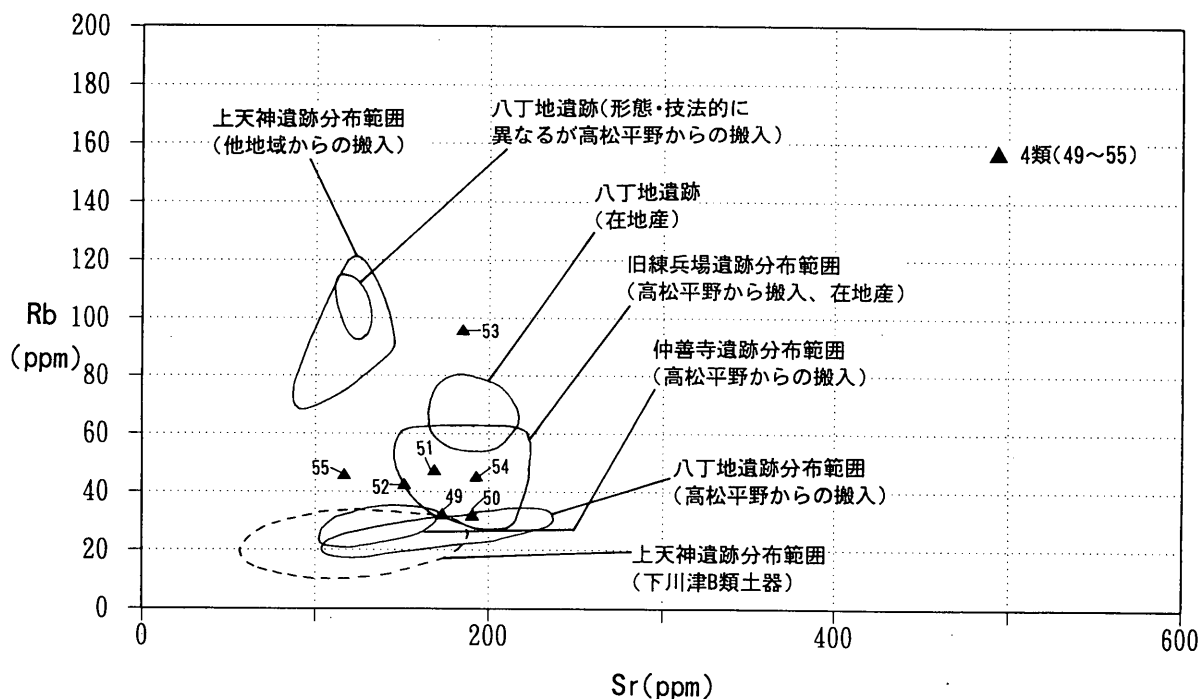
白石 純 1996「中間西井坪遺跡出土土器・埴輪の胎土分析」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 25 冊 中間西井坪遺跡Ⅰ』香川県教育委員会他

森下友子 1994「胎土 1 類土器について」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第 4 冊 太田下・須川遺跡』香川県教育委員会他



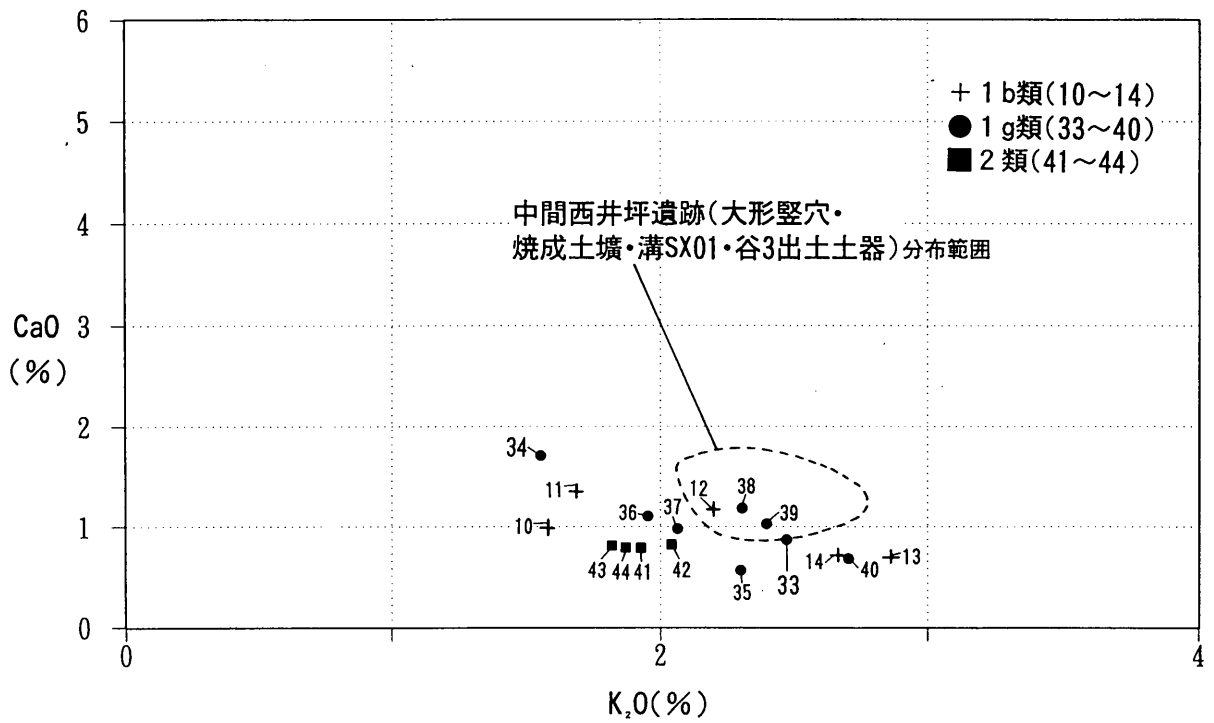
第115図 K<sub>2</sub>O—CaO 散布図

空港跡地遺跡出土土器（弥生後期後半）の砂粒分類4類と香川県内高松平野（上天神遺跡）、東部地域（八丁地・仲善寺跡）、西部地域（旧練兵場遺跡）出土土器の比較



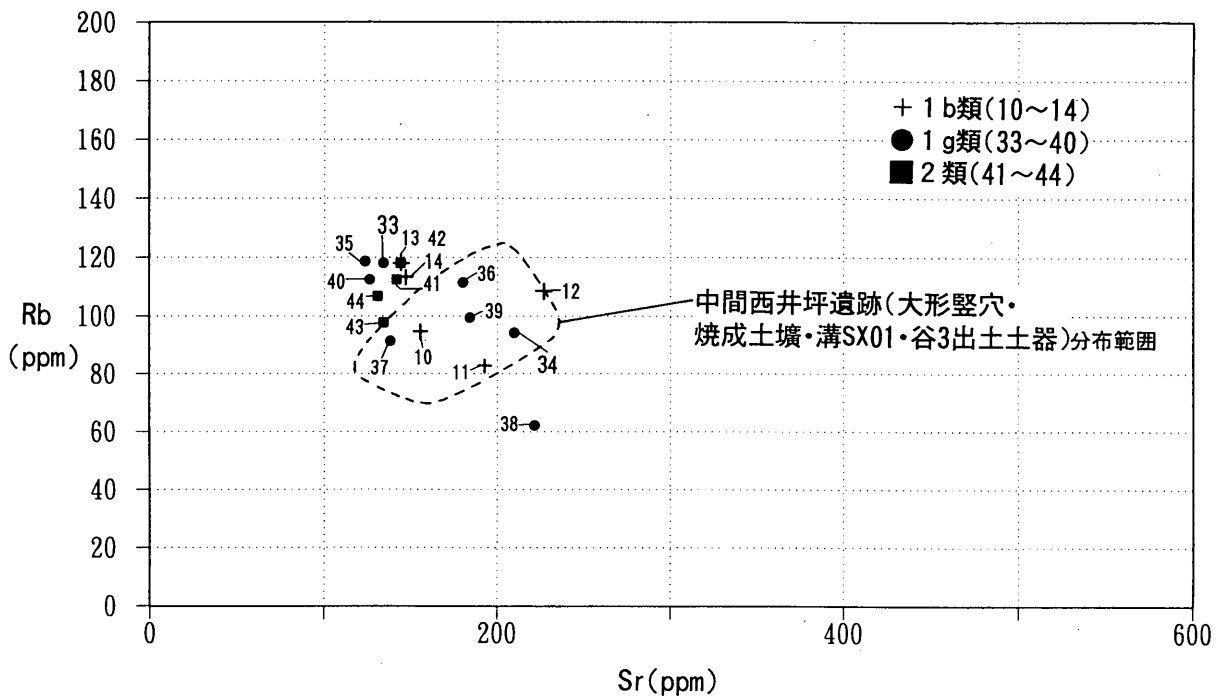
第116図 Sr—Rb 散布図

空港跡地遺跡出土土器（弥生後期後半）の砂粒分類4類と香川県内高松平野（上天神遺跡）、東部地域（八丁地・仲善寺跡）、西部地域（旧練兵場遺跡）出土土器の比較



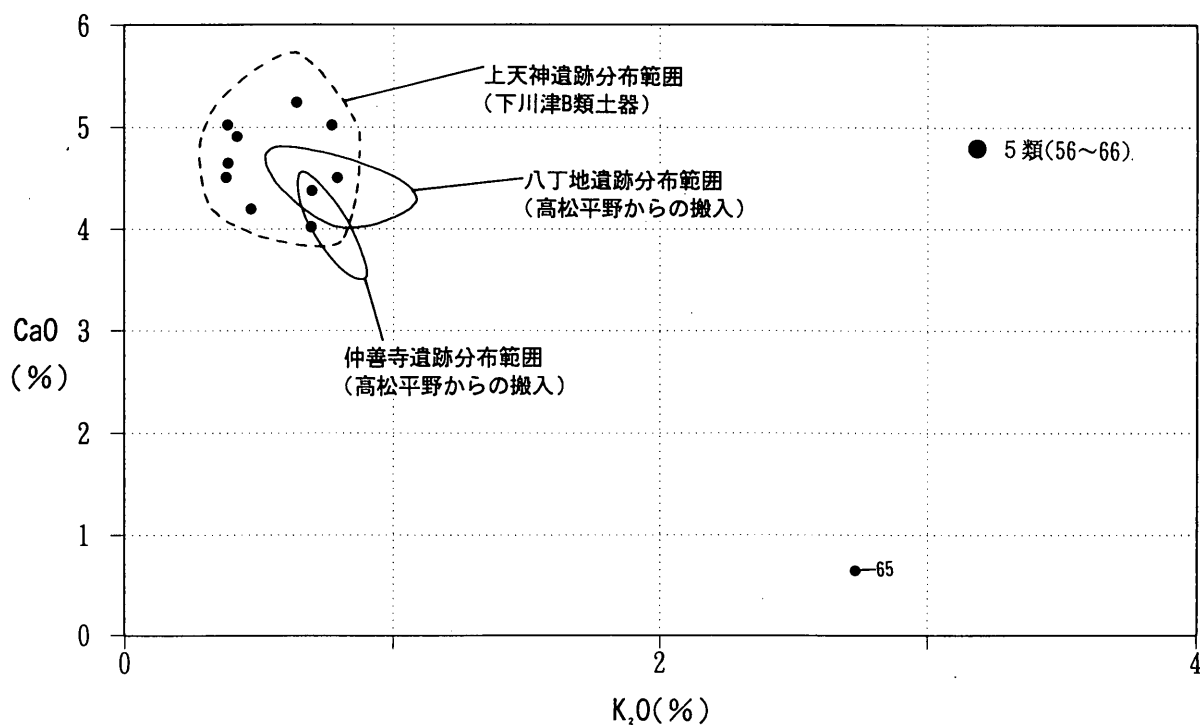
第117図 K<sub>2</sub>O—CaO 散布図

空港跡地遺跡出土土器（古式土師器）の砂粒分類 1b・1g・2類と  
高松市中間西井坪遺跡出土土器の比較



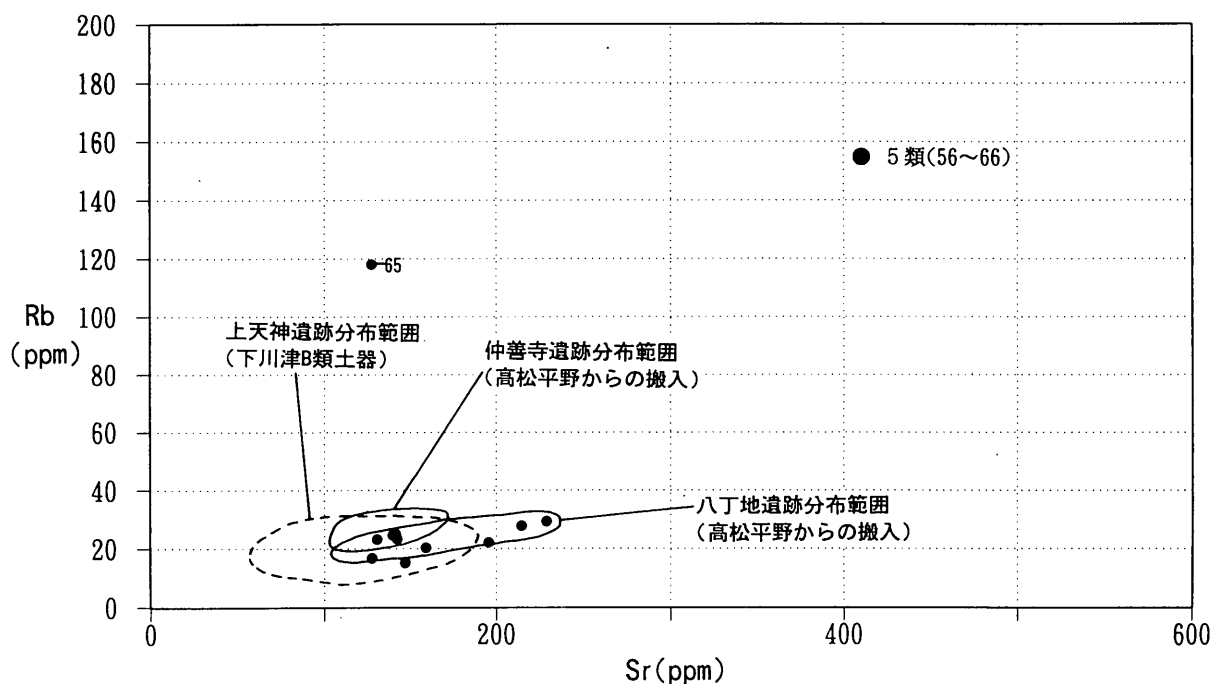
第118図 Sr—Rb 散布図

空港跡地遺跡出土土器（古式土師器）の砂粒分類 1b・1g・2類と  
高松市中間西井坪遺跡出土土器の比較



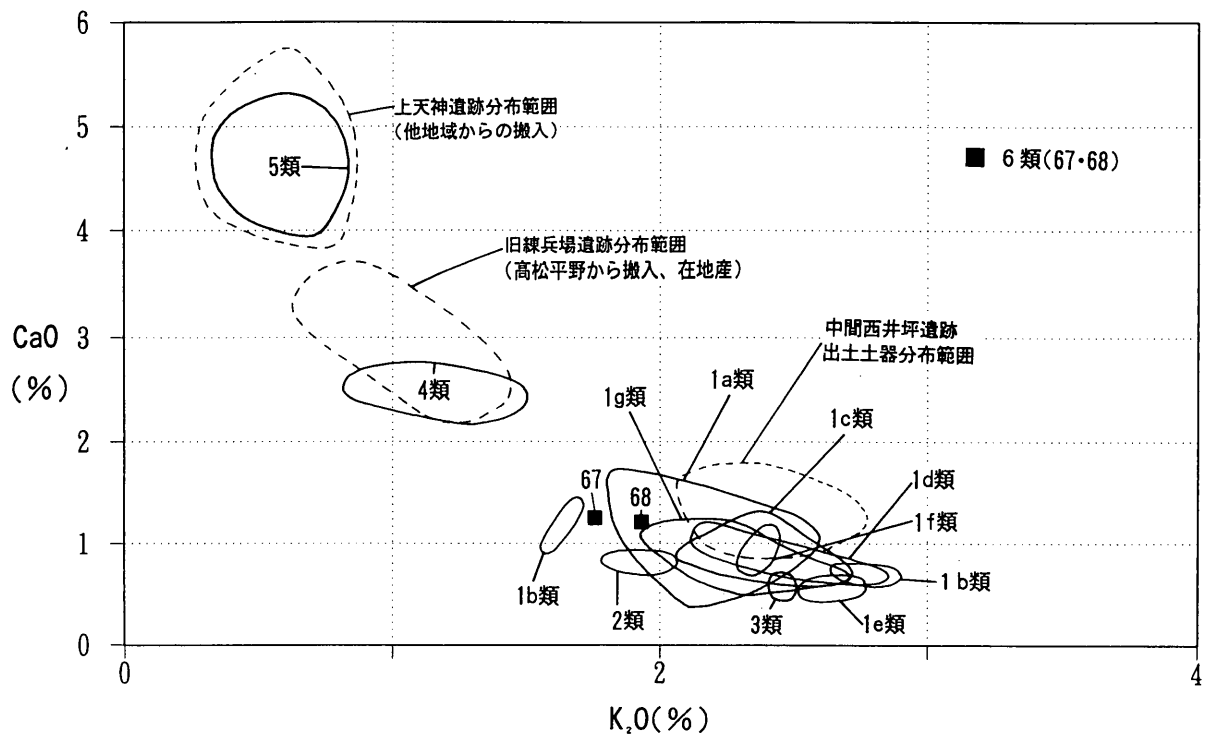
第119図 K<sub>2</sub>O—CaO 散布図

空港跡地遺跡出土土器（弥生後期初頭）の砂粒分類5類と上天神遺跡出土土器の比較



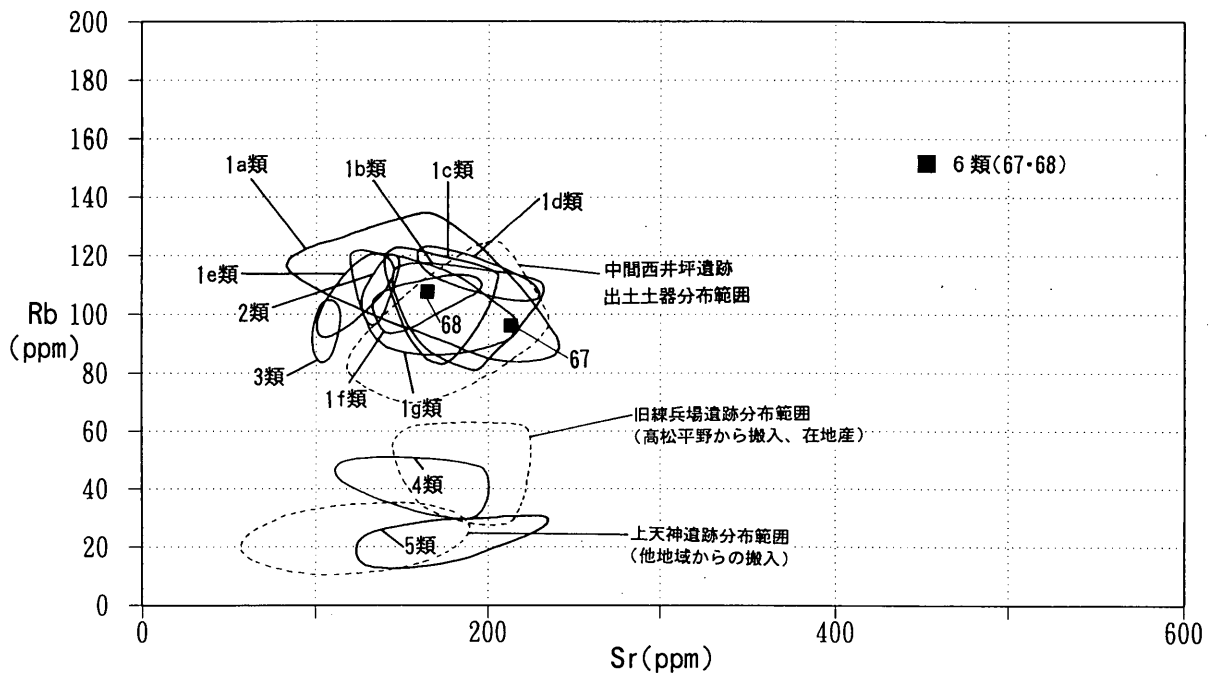
第120図 Sr—Rb 散布図

空港跡地遺跡出土土器（弥生後期初頭）の砂粒分類5類と上天神遺跡出土土器の比較



第121図 K<sub>2</sub>O—CaO 散布図

空港跡地遺跡出土土器（古墳初頭）の砂粒分類6類と他の分類された土器との比較



第122図 Sr—Rb 散布図

空港跡地遺跡出土土器（古墳初頭）の砂粒分類6類と他の分類された土器との比較

試料番号	挿 図	遺 構 名	器 種	砂粒分	K	Fe	Si	Ti	Al	Ca	Sr	Rb
1	707	S De137中層	甕	1a	2.10	2.03	73.59	0.89	16.39	0.47	87	117
2	591	S De137上層	甕	1a	2.50	7.20	51.34	1.11	18.79	1.22	163	132
3	604	S De137上層	甕	1a	2.22	3.59	63.73	0.69	16.39	1.16	203	87
4	589	S De137上層	甕	1a	2.55	4.25	69.13	0.65	17.91	1.03	152	99
5	600	S De137上層	甕	1a	1.83	5.30	53.00	1.11	20.13	1.64	235	89
6	669	S De137中層	二重口縁壺	1a	2.47	1.81	63.31	0.75	19.69	0.99	200	106
7	688	S De137中層	甕	1a	1.89	1.94	60.02	0.99	20.10	0.99	206	113
8	650	S De137上層	小形丸底土器	1a	2.02	5.49	54.75	0.93	19.67	1.01	177	103
9	686	S De137中層	甕	1a	2.23	4.53	58.15	0.79	20.14	0.91	177	109
10	701	S De137中層	甕	1b	1.58	3.72	52.37	0.95	23.56	0.97	156	95
11	620	S De137上層	高 坏 ?	1b	1.68	6.15	55.11	1.50	22.50	1.34	193	83
12	720	S De137中層	小形丸底土器	1b	2.20	1.89	61.99	0.92	18.82	1.16	226	109
13	585	S De137上層	甕	1b	2.86	1.86	69.04	0.57	16.55	0.68	146	118
14	695	S De137中層	甕	1b	2.65	1.72	66.47	0.55	17.50	0.72	147	114
15	757	S De137中層	高 坏	1c	2.69	1.67	69.65	0.57	16.88	0.68	142	120
16	756	S De137中層	高 坏	1c	2.08	3.57	67.04	0.79	20.67	0.89	170	85
17	699	S De137中層	甕	1c	2.37	4.33	61.24	0.88	17.12	1.29	201	113
18	651	S De137上層	小形丸底土器	1d	2.44	2.22	64.02	0.73	18.90	0.82	163	120
19	661	S De137中層	広 口 壺	1d	3.11	3.87	65.78	0.62	23.04	0.38	56	125
20	728	S De137中層	小形丸底土器	1d	2.14	2.63	61.90	0.89	18.47	1.08	210	113
21	237	S De115下層	甕	1d	2.81	1.71	71.74	0.51	17.20	0.71	164	121
22	859	S Xe01上層	甕	1d	2.16	3.38	65.63	0.86	19.18	1.16	223	108
23	849	S Xe01上層	高 坏 脚 部	1d	2.53	1.10	70.95	0.59	17.28	0.73	171	115
24	624	S De137上層	高 坏	1e	2.70	3.32	65.96	0.60	17.43	0.61	142	116
25	783	S De137中層	脚 部	1e	2.72	3.52	68.00	0.69	17.56	0.59	129	117
26	810	S De137下層	小形丸底土器	1e	1.38	14.85	43.38	1.74	18.31	1.85	198	51
27	804	S De137下層	高 坏	1e	2.55	5.72	68.81	0.73	16.89	0.54	106	96
28	790	S De137下層	二重口縁壺	1e	2.69	5.84	65.99	0.66	17.14	0.63	116	101
29	703	S De137中層	甕	1f	2.42	4.05	66.84	0.62	18.80	1.00	130	95
30	694	S De137中層	甕	1f	2.31	3.65	64.15	0.91	17.94	0.78	140	104
31	696	S De137中層	甕	1f	2.35	2.93	66.15	0.90	17.58	0.75	137	109
32	584	S De137上層	甕	1f	2.39	4.68	63.17	0.92	15.84	1.08	191	114
33	708	S De 中層	甕	1g	2.46	5.45	59.00	1.17	22.24	0.86	133	118
34	608	S De137中層	甕	1g	1.54	8.24	54.53	1.28	21.01	1.70	223	62
35	706	S De137中層	甕	1g	2.30	5.77	65.75	0.77	20.46	0.57	123	119
36	607	S De137上層	鉢	1g	1.95	3.19	58.81	0.93	20.37	1.10	180	111
37	668	S De137中層	二重口縁壺	1g	2.06	7.24	57.84	1.33	18.93	0.97	139	92
38	752	S De137中層	高 坏	1g	2.30	5.15	61.50	0.90	18.64	1.17	210	94
39	729	S De137中層	小形丸底土器	1g	2.39	5.04	63.02	0.94	19.27	1.03	185	99
40	858	S Xe01上層	二重口縁壺	1g	2.68	4.98	67.87	0.63	17.12	0.68	126	113
41	579	S De137上層	二重口縁壺	2	1.93	6.24	61.26	0.88	22.82	0.80	141	113
42	577	S De137上層	広 口 壺	2	2.04	7.14	59.10	0.91	22.40	0.83	144	118
43	598	S De137上層	甕	2	1.81	6.27	58.01	0.93	22.83	0.82	133	98
44	687	S De137中層	甕	2	1.87	7.17	60.16	0.88	21.75	0.80	130	107
45	674	S De137中層	直 口 壺	3	2.46	6.94	69.10	0.69	17.20	0.59	109	99
46	618	S De137上層	高 坏	3	2.44	6.55	66.18	0.66	16.92	0.61	107	101
47	654	S De137上層	小形丸底土器	3	2.47	4.55	66.56	0.72	16.86	0.53	105	86
48	744	S De137中層	高 坏	3	2.46	6.88	66.85	0.69	17.81	0.51	107	102
49	415	S De138上層	甕	4	0.85	12.34	45.80	1.96	20.46	2.52	173	33
50	414	S De138上層	甕	4	1.08	12.49	43.09	1.90	18.70	2.68	190	32
51	86	S De115中層	甕	4	1.47	9.86	48.17	1.67	19.46	2.43	168	48
52	76	S De115中層	甕	4	1.06	10.14	46.18	1.62	19.18	2.46	151	43
53	106	S De115中層	脚 部	4	1.98	4.99	61.25	0.98	18.08	1.41	184	96
54	128	S De115下層	甕	4	1.17	10.84	44.67	1.86	20.72	2.57	192	46
55	245	S De115下層	鉢 ?	4	1.28	13.26	43.14	2.03	20.24	2.23	116	46
56	17	S Dell	甕	5	0.69	15.46	41.63	1.47	16.40	4.37	140	25
57	277	S De138上層	広 口 壺	5	0.37	11.75	41.32	2.32	19.85	4.51	147	15
58	303	S De138上層	脚 部	5	0.37	12.30	41.14	1.53	17.54	5.03	142	23
59	293	S De138上層	甕	5	0.41	12.64	41.09	1.75	19.25	4.91	158	20
60	292	S De138上層	甕	5	0.38	12.73	41.76	1.52	19.08	4.65	128	17
61	476	S De138下層	広 口 壺	5	0.63	11.79	44.83	2.04	17.37	5.25	194	22
62	428	S De138上層	高 坏	5	0.76	12.63	45.02	1.99	18.89	5.03	214	28
63	73	S De115中層	甕	5	0.78	10.16	45.39	1.59	18.93	4.50	142	25
64	164	S De115上層	甕	5	0.46	10.49	41.87	1.49	19.12	4.19	131	23
65	161	S De115上層	細 頸 壺	5	2.73	1.53	74.54	0.41	14.51	0.64	127	118
66	914	S Xe01下層	甕	5	0.69	12.00	44.56	1.77	19.02	4.02	228	29
67	45	S De115上層	甕	6	1.76	2.49	58.45	0.85	20.86	1.22	212	96
68	46	S De115上層	甕	6	1.93	5.83	57.73	0.89	19.89	1.21	164	107

表 4 空港跡地遺跡胎土分析史料一覧表(%) ただし Sr, Rb は ppm

## 第4節 空港跡地遺跡出土土器の赤色顔料について

別府大学

本田光子

### 1. はじめに

香川県高松市空港跡地遺跡出土の土器に認められる赤彩色に用いられた赤色物が何であるかを知るために、顕微鏡観察、蛍光X線分析を行った。

出土土器の赤彩色例に関する今までの知見に寄れば、赤色の由来は鉱物質の顔料であり、酸化第2鉄：赤鉄鉱(Hematite)を主成分とするベンガラと、硫化水銀(赤)：辰砂(Cinnabar)を主成分とする朱の2種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹がある。これら3種類の赤色顔料を考えて調査を行った。

### 2. 試料

赤彩色が認められる部分の破片を借用して、実体顕微鏡下で観察を行った。また、赤色部分から針先に付く程度の量を採り顕微鏡観察を行った。蛍光X線分析の測定は破片のまま、赤色部分とそうでない部分について行った。

### 3. 顕微鏡観察

実体顕微鏡により、赤彩色の状態を観察した所、ほとんどがいわゆる焼成前塗彩によるものと判断されたが、塗彩ではなく焼成による発色の可能性があるものも(表中焼成前塗彩?)あった。ベンガラ?が付着しているものも1点(No.14)あったが、その量は非常に少なく、全体として焼成によるどちらかといえば偶発的な発色の一部分である可能性が高い。なお、赤色が認められないものもあった。

採取試料について光学顕微鏡により透過光・洛射光40~400倍で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類・粒度等を観察するものである。三者は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等に認められる特徴の違いから、検鏡により経験的に見極めがつく。

赤色顔料の顕著な特徴を持つ粒子が認められたのは半数で、ベンガラである。その他にいわゆる広義のベンガラと呼ぶ赤色の土と思われる粒子が認められたもの、赤色顔料の粒子は全く認められなかったものがある。

### 4. 蛍光X線分析

赤色物の主成分元素の検出を目的として実施した。堀場製作所(株)製蛍光X線分析装置 MESA-500を用い、15kV-440 $\mu$ A;50秒, 50kV-20 $\mu$ A;50秒, 真空, の条件で行った。赤色の認められる部分とそうでない部分の2ヶ所について測定した。主成分元素としては鉄のみが検出され、水銀、鉛は検出されなかった。この他主として土器胎土部分や付着の土砂に由来する元素が検出された。鉄は土砂部分にも必ず含まれるので、赤色顔料由来のものとの区別は蛍光X線強度から判断したが、赤色部分の方がやや高い程度であった。



No.	挿 図	試 料	顕 微 鏡 観 察	蛍光 X 線分析		赤色顔料の種類
				鉄	水 銀	
1	1103	高坏内面	ベンガラ	+	-	焼成前塗彩
2	1104	高坏内面	ベンガラ	+	-	焼成前塗彩
3	1106	甕口縁内面	ベンガラ (広)	+	-	焼成前塗彩?
4	138	高坏外面	ベンガラ (広)	+	-	焼成前塗彩?
5	1106	高坏外面	ベンガラ	+	-	焼成前塗彩
6	1107	甕?外面	ベンガラ (広)	+	-	焼成前塗彩?
7	376	高坏	ベンガラ	+	-	焼成前塗彩
8	377	広口壺口縁内面	ベンガラ	+	-	焼成前塗彩
9	378	高坏脚部外面	ベンガラ	+	-	焼成前塗彩
10	379	把手付瓶?把手部	不 明	+	-	赤色顔料なし?
11	387	鉢口縁部外面	不 明	+	-	赤色顔料なし?
12	397	高坏内面	ベンガラ	+	-	焼成前塗彩
13	402	広口壺口縁内面	ベンガラ	+	-	焼成前塗彩
14	409	鉢内底	ベンガラ?	+	-	ベンガラ付着, 焼け?
15	478	大型鉢	ベンガラ	+	-	赤色顔料なし
16	507	大型鉢	ベンガラ	+	-	赤色顔料なし
17	566	鉢	ベンガラ	+	-	赤色顔料なし
18	1109	短頸壺口縁外面	不 明	+	-	不 明

表 5 試料の一覧と分析結果及びそれに基づく赤色顔料の種類

## 5. 結果と考察

以上の結果から、空港跡地遺跡出土土器の赤彩色は、酸化鉄を主成分とするいわゆるベンガラおよび広義のベンガラによる発色と考えられる。

赤色物による土器装飾法は、大きく焼成後塗彩つまり「彩文、赤彩」と焼成前赤色塗彩つまり「丹塗磨研」とに分かれる。前者は、彩文土器と赤色塗彩土器に分かれる。これらは埋蔵環境の違いで残り具合も異なるのではっきりとは言えないが、そもそも赤色を固定する膠着剤の違い、すなわちまったく異なる装飾技法によるものではないだろうか。さらに使われる赤色顔料も、朱、ベンガラ(パイプ状粒子を含むものと含まないもの)、広義のベンガラとあり、これらを単一で使用するだけでなく、重ね塗りしたり混ぜたりと多彩である。これに対して、後者は「丹塗磨研」と呼ばれるものであるが、これもまたその内容は多様である。使われる赤色物は、酸化鉄による発色を想定した材料以外は考え難く、今までの調査例からも裏付けられる。具体的には、ベンガラを塗彩あるいは擦り込んで焼いたもの、広義のベンガラを同じように使ったもの、ただ「ミガキ」だけのもの、いわゆる「スリップ(化粧土)」をかけたものなどが認められる。この方法の場合、焼成によって初めての「ベンガラ」となる。

今回、調査の機会をお与え頂きました(財)香川県埋蔵文化財調査センターおよび同蔵本晋司氏に感謝致します。



## 第4章 ま と め

### 1. 弥生時代前期

遺構として確認されたのは、SDe77のみである。本地区周辺には明確な遺構は検出されておらず、本遺構の性格については判然としない。Ⅲ区低地部を縦断して掘削される。

遺物量は僅少であり、周辺域に当該期の集落などを想定することは困難であろう。出土遺物中甕形土器2点の底部内面に、炭化した種子遺体が確認された。分析の結果、種子を同定することはできなかったが、土器胎土中に混入したか意図的に混和された可能性が指摘された。

### 2. 弥生時代後期～古墳時代前期

後期初頭の遺構としては、僅かにⅢ-42区低地部で水路1条（SDe115南北溝）を検出したにとどまる。その流路位置は前期後半の溝SDe77とほぼ重複して穿たれており、また周辺域から微量ながらも中期土器の出土がみられる。埋土や出土遺物に中期に継続して使用された痕跡は見出せなかったが、前期後半段階に開削され、以降継続して改修を繰り返しながら機能した可能性は高い。最大幅1.5m、深さ0.5mの規模を有し、基幹的な水路と目される。その取水源については特定することはできなかったが、流路方向から判断すれば、遺跡南東隅（Ⅲ-25区周辺）で検出された自然河川SR01・02（佐藤他1993）であった可能性が一つ想定される。SR01・02は弥生時代前期から後期頃の遺物が出土しており、本溝の機能期間に重複する部分は多い。なお出土遺物量からすれば、周辺に集落域を想定することは困難ではないが、現在までの調査によっては未だ確実に当該期に遡る集落跡は検出されていない。

後期後半には、Ⅲ区低地部西側の微高地上に竪穴住居？2棟と掘立柱建物2棟で構成される小規模な集落が出現し、東側微高地上には粘土採掘土坑群が展開する。低地部には、後期初頭の水路を継承するSDe115東西溝の他に、大型の幹線水路と目される溝SDe138が新たに掘削され、水路網は充実する。周辺域の開発は、当該期に至って活況を呈するようになる。なおSDe115南北溝は当該期にはほぼその機能を停止する。これはおそらくその水源に大きな変化が生じたことを反映していると考えられ、上記したようにそれが旧流路であるなら、流路位置の変更か埋没などをその要因として想定できよう。また南北溝の埋没後も東西溝による灌漑は、地表面の浮水や、溝底に掘削した湧水坑による地下の伏流水の利用という不安定で小規模な水源に移行しつつも、一定期間は継承される。しかもその水源の不安定さゆえ、溝の数を増加させて水量の維持を計ったものと考えられる。しかしこのような小規模な水源からは、一定規模の耕地を潤すだけの水量を恒常的に維持することは到底期待できず、別の流路を取水源とする新たな灌漑体系を補完する位置にとどまったと考えられ、SDe115南北溝の埋没は周辺集落に少なからぬ緊張関係を生じさせた可能性がある。なおこうした水路群の整備は、周辺低地部の乾燥化にも一定の影響を与え、低地部周辺の諸開発行為（例えば、粘土採掘土坑群の規模拡大）に寄与した側面を合わせ持つであろう。一方西側微高地の集落は、次の古墳時代前期を待たずに短期間で終焉する。

古墳時代前期になると、概ねその初頭段階で上記水路群はその機能を停止し、前期後半には水路群の北側に新たにSDe137が開削される。SDe137の流路方向や掘削深度は上記水路群の東西溝とほぼ同一であり、おそらくは上記水路群の機能停止に伴い、新たな水源を開拓して付け替えられたものと判断され

た。そう理解してよければ、基幹的な水路網はその位置や水源を状況に合わせて微妙に変更しながらも、当該期に至るまでなお踏襲されたと考えられる。なお本溝からは、人形土製品が出土しており注意される。

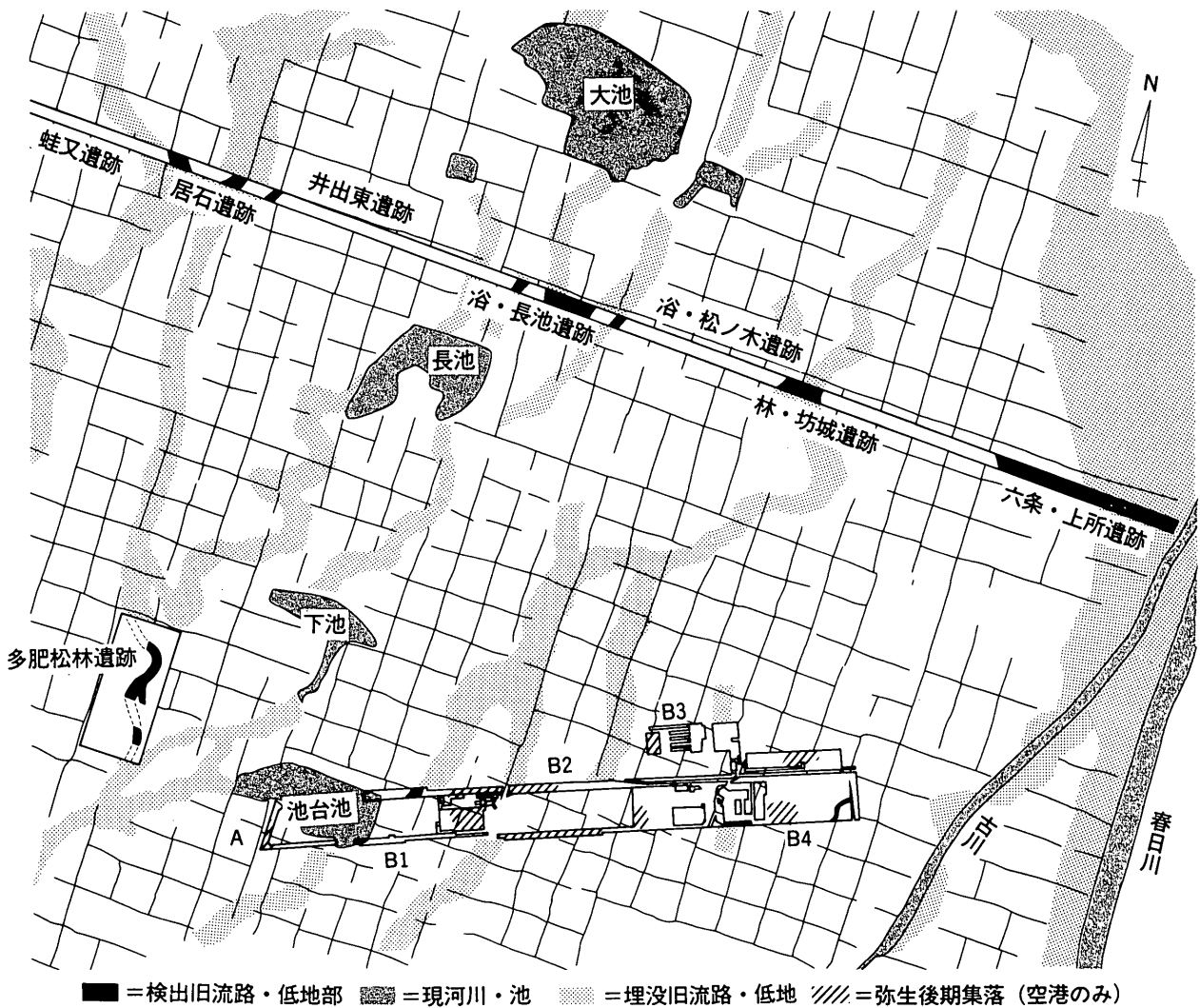
#### 〔地形環境の検討〕

さて、本遺跡周辺には条里型地割り（木下1991）が広く展開する。一部にこれら条里型地割りが認められないか、そのラインの乱れたエリアが带状に認められ、その要所要所に溜池が構築されている。こうした現地表面に記された地割りの状況は、おそらく地表面の微妙な高低差を反映し、方格地割りの乱れたエリアは旧河道・氾濫原・低地部等に起因するものと理解される。したがってこうした現地表面の微妙な起伏を細かく観察することによって、そこから現地表面下に埋没した微地形を復元することが可能と考えられる。先行する高橋学氏（高橋1992）や大久保徹也氏（大久保1995a）の研究成果に導かれながら、また周辺遺跡の発掘調査の成果を参考に、第123図に本遺跡周辺の埋没旧河道の復元について私案を示した。なお旧高松空港内部の条里型地割りについては、明治21年測量の地籍図及び調査成果から復元を行った。以下、第123図に沿って本遺跡の地形環境について記しておくたい。

本遺跡は、旧香東川によって形成された扇状地帯の中央部に立地する。遺跡周辺には埋没した旧河道が網目状に分布し、その旧河道の下刻によって生じた自然堤防・旧中州が点在する。こうした旧河道は、その規模や形状、埋没時期は互いに異なるが、基本的には旧香東川本流に分岐・流下する中小の支流群であり、弥生時代後期にあってもその一部は未だ埋没せずに機能していたことが、いくつかの調査によって示されている。そしてこれら旧河道群が、当時の灌漑用水における取水源となったであろう（大久保1995e）。図に示したように、本遺跡ではその西端付近に蛇行して北東流する1条の旧河道の存在が確認でき、その東西両側に微高地が展開する。また微高地には、弥生時代前期以降の遺構が検出されている。以下、遺跡内の微高地を西より順に概観していくこととする。

まず西端の微高地は、下池から長池・大池に続く旧河道と、池台池から林坊城遺跡で検出された旧河道に繋がる流路によって東西両端を画された微高地である。この微高地をA微高地と仮称する。このA微高地はI-9区で検出された自然河川によって、さらに細分される可能性がある。このA微高地には、弥生時代前期の土坑群のほか、弥生時代後期後半と古墳時代中期の竪穴住居群が検出されている。また東側の流路は、弥生時代前期より埋没が開始し、同後期にはほぼその機能を喪失し、古代から中世には流路部分が水田域として利用されていることが判明した。

次にその西隣の微高地は、A微高地の東側の流路を西限として、その東に展開する微高地である。この微高地をB微高地と仮称する。B微高地の東限は明確には現古川によって画されるが、調査によっていくつかの低地部の存在が推定され、この低地部によって微高地は細分されていると考える。まず西端の低地部は、現在の県立図書館（I-1～4区）の東側、I区とII区の境界付近を南北に縦断する低地部で、北端は先の流路に合流する可能性が高い。この低地部によって、かつてA集落と呼ばれた（山下他1992）弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭にかけて継続した集落域は、少なくとも東西に2分される。この低地部によって東限を画される微高地を、B1微高地と仮称する。B1微高地には、先の集落の他、集落とほぼ同時期と推定される前方後円形や前方後方形の周溝墓を含む墳墓群が所在する。特に集落域と墳墓群が同一微高地に展開することから、遺跡内に点在する当該期の集落群の中でも、本微高地に展開する集落に墳墓群が帰属する可能性は極めて高い点は注意されてよい。また集落域は



第123図 空港跡地遺跡周辺の埋没旧流路・低地部

その後数度の断絶を経ながらも、中世段階まで同一地点に営まれるようである。

さらに東に隣接するB2微高地は、東限をⅡ-5区で検出された自然河川SRc03によって画される。SRc03は、幅約18m、深さ0.6m程の浅い流路で、自然河川よりもむしろ低地部という言葉が相応しい。中世16世紀段階の埋没が想定されているが、出土遺物には弥生土器も含まれており、その層位的関係については報文中に記されておらず上限については不明である。周辺域に弥生時代の遺構は認められず、当時既に低地部として機能していた可能性を想定しておきたい。なお本微高地はⅡ5・6・8・9区周辺を想定しているが、SRc08の南への延長方向がやや不明瞭なこともあって明確にはし難い。本微高地上には、弥生時代後期以降の遺構が検出され、B1微高地とほぼ同様な土地利用の変遷を辿ったものと考えられる。

B2微高地の東に位置するのが、本書で報告を行ったⅢ-42区の低地部を東限とする微高地で、B3微高地と仮称する。本微高地上には、Ⅱ-7・18区周辺で弥生時代後期後半期を主体とする小集落を検出している。前者の集落については、本書で報告したように掘立柱建物2棟と竪穴住居2棟により構成され、遺構分布からすれば調査区北側に集落本体が展開する可能性が高いと考える。またⅡ-24・25

区では、中世15世紀頃の屋敷地を検出している。

B3微高地の東側には、現古川まで明瞭な低地部は存在せず、先のB1～B3微高地とは異なり安定した広い微高地が展開する。調査区東端のⅢ-22区周辺で小規模な流路を検出しているが、小流路東側では明瞭な生活域は検出されていない。本微高地上からは、Ⅲ-17・35区周辺において後期後半頃の集落を各々検出している。またⅢ-33区周辺においては、集落とはほぼ同時期に位置付けられる粘土採掘土坑群を検出している。さらに弥生時代の集落域には重ならないものの、古代末から中・近世の屋敷地も検出されており、B1・2微高地同様比較的長期間に亘り居住域として利用されているようである。

以上が弥生時代を中心とした各微高地における土地利用形態の概要である。調査区内では、明確な水田や畑といった生産域は検出されていない。おそらく調査区の位置関係や遺構面上面の削平に大きく起因するものと考えられ、特にB微高地では居住・墓・生産域がセットとなった自己完結的な集落景観が復元される。以下では、各微高地上に展開する弥生集落の特徴について述べておきたい。

まず各集落に共通する要素として、①各集落の出現時期については、顕著な時期差がみられないこと。②B1・2微高地上の集落を除けば、集落の経営期間は短いこと。③各集落を取り巻く環濠などの防御施設がいずれも認められないこと。④B1微高地上の集落を除いて、基本的には集落に付随する墓域を近在に有しないことが確認される。このうち後3者については、後期初頭の上天神遺跡にも共通して認められる要素であり（大久保1995b）、現資料から判断すれば少なくとも高松平野全域において弥生時代後期を通じて普遍化されるものと考えられる。

さて当該期において、本遺跡周辺で主体をなすのはやはり60棟を優に越える竪穴住居が検出され、同一微高地上に墓群を有するB1・2微高地の集団であろう。その他各微高地上には1～2の小集落が点在するが、竪穴住居の床面積、推定される集落域の占有面積や経営期間、近在に墓域を有しない点などにおいて、前者との間に格差を認めることができ、前者を母集団、後者を分村などの契機によって成立した新興集団と理解することも可能であろう。また2者の集落間格差が、単に集落規模等の差にとどまらない可能性は高い。各集落の様相が未報告の現状では十分な検討を行うことはできないが、報告書が刊行されたB2微高地上の集落内からは、ガラス製管玉の他、鉄鏃などの鉄製利器が一定量出土しており、装身具や鉄製利器の保有などの点において相対的な優位性を保っていた可能性は高い。また前者の集落内からは吉備系土器等搬入土器も一定量出土しており、それらの出土が全くみられなかった本書掲載の地区と比較すると、直接的かどうかはともかく、他集団との接触という面では、後者の集団にはない機能的側面を有していたと考えられる。また前者の集落には、床面積50m<sup>2</sup>を越える大形竪穴住居が数棟検出され、当時複合的な大家族の存在を実証し得ない以上、特殊な用途をもった非日常的な建物とする考え方も成立しよう。上記した諸点を評価すれば、B1・2微高地上に展開する集団が、他集団と比して物質的な面での優位性を保っていた可能性は高い。

松木武彦氏は、中期後半期以降の岡山平野における地域集団間の関係について論じ、「明確かつ永続的なセンターをもたない居住様式は、各集団の政治・経済上の中枢機能の発現が畿内に比べて顕著でなかった状態を反映するものであり、1個の政治・経済主体としての独立度が相対的に低かった可能性」を想定された（松木1993）。中期段階での畿内と吉備との比較から導かれた結論を、そのまま本地域の後期集落に移入することにやや躊躇される点もあるが、その点を割り引いても、上記したようにいくつかの属性において相対的な優位性を有する集団を内包してはいるが、各集団間における集落内部の諸施設の整備状況（集落を囲う堅牢な防御施設、特殊な用途の大型建造物・モニュメント、青銅器や鉄器の工

房跡等)について、他を圧する卓越した様相は認められず、諸属性の差異は「単位間の分業」(大久保1995b)の差に解消しうるものであろう。松木氏が強調する「集団間の一体性」は本地域においても共通する特質と捉えることができる。大久保徹也氏は高松平野中央部の諸遺跡の経営期間や灌漑水路について検討され、「基幹水路は長期に互って維持・使用されつづける」ことと、「こうした基幹水路に比べれば一般にはるかに短命な集落の存続期間」との対比から、「個別の集落単位の消長を超越して、灌漑を機軸とした地域的な結合が強固に機能する」可能性を指摘された(大久保1995e)。

高松平野諸集団において「集団間の一体性」は、個別集落の消長とは無縁に、おそらくは基幹水路の維持・管理を通じた協業関係にある、実体性をもたない集団間においてアプリアリに付与されていたであろう。その範囲は先に記した旧香東川右岸から新川・春日川に挟まれた、埋没旧河道を灌漑用水の取水源として連結されたエリアであったと考えられる。各集落の自立性は、こうした協業関係における強い規制の下に埋没し、基幹水路の維持・管理や、各集落に供給される水資源の分配に係わる諸調整において、その中心となる集団(おそらくこれも分業の一要素である)を必要としたが、その集団は永遠普遍に固定されたものではなく、その時々の中での力関係や関係する集団の内容によって集団間を容易に移動したものと考えられる。その直接的な契機は、本項冒頭に記した取水源の変更に伴う水路網の変化といったものであったろう。各集落の短命さは、そうした集団内の中心軸の流動性のゆえに、再編が繰り返されたことに起因するのではなかろうか。またそうした意味では両者の集団は、いずれも農耕諸生産に専念する非等質的な地域集団の一つに過ぎない。なお大久保氏は後述する「胎土1類」土器の分析から、「生産諸部門における緊密な協業関係や物資の調達等を基礎とした日常的な接触エリア」の存在を推定し、個別集落毎にそうしたエリアに差異が認められるとし、そこに各集落の自立性を見出す(大久保1995c)。大久保氏の推論は、「胎土1類」使用圏内の個別集落毎の非「胎土1類」土器が、その大部分が搬入土器で占められる場合等においてのみ有効と考えられ、そうした実証を伴わなければ筆者の推論が成立する余地も残されると考える。私は集団の自立性はもう少し大きな単位、例えば「胎土1類」土器共有集団単位といった程度の範囲で発揮されたと想定したい。

なお空港跡地遺跡内部の数個の小集落の出現・衰退期が、一部を除いて概ね一致する可能性が高いことは、これら各集落が個別に存在したのではなく、相互に有機的な連関を有して存在していたであろうことを推測させる。前記した背景を前提とするなら、本遺跡内の各集落は個別に無秩序に成立したのではなく、一定の規制・集団を統率する意志に則って、個別微高地単位に計画的に分離・配置された可能性が高い。

#### 〔在地土器と搬入土器〕

本遺跡より出土した弥生時代後期から古墳時代前期の土器は、第3章で詳論したように、胎土の蛍光X線分析の結果から、いくつかの類型に分類することが可能である。こうして分類された土器胎土は、主に素地土の採取地の相違に起因するものと考えられ、型式学的特性と共に在地土器と搬入土器の識別に大きな効力を有するものと期待される。

さて、本地域の当該期の土器については、これまで白石純氏や三辻利一氏により蛍光X線分析が継続して実施され、多数のデータの蓄積がある(白石1995・1996、三辻1990)。また大久保徹也氏や森下友子氏によって、こうした土器胎土の相違に対する解釈も試みられている。大久保氏は、坂出市下川津遺跡の弥生時代後期から古墳時代前期初頭の資料を検討され、その中で胎土中に角閃石粒を多量に含み、極

めて画一的な型式学的特性を有する一群の土器を抽出され、「下川津B類」土器と称された。そしてその製作地を、出土土器中での「下川津B類」土器の出現頻度から高松市香東川下流域と推定した(大久保1990)。また同種土器は、上記した諸特性の他、弥生時代中期後葉に突如として出現し、布留式中段階には基本的には姿を消し、その製作期間が時期的に限定されることなどから、「意図的な粘土・砂礫の選別ないしは調合の産物」であるとする。さらに同じ高松平野においても、遺跡間でその出現頻度に差異が認められることを指摘し、基本的には上天神遺跡を中心とする半径4kmの圏内を同種土器の製作地と考え、それより概ね同心円状にその出現頻度が減少することから、出現頻度が最も高い地域を指して「日常的な物資や人間の移動、共同作業を通じて一定範囲の近接した集落間の頻繁に接触するエリア」の存在を推定された。さらに、後期後半～末頃の下川津IV式期においてそうしたエリアの外部にあたる隣接諸地域に多量の「下川津B類」土器が搬出され、逆にエリア中心部の太田下・須川遺跡においては出現頻度が次第に低下する動きにあることを指摘され、当該期において「広域の物資流通が活性化すること」をその背景に求めた(大久保1995c)。一方森下氏は、太田下・須川遺跡の資料の分析から、角閃石粒を多量に含んだ一群の土器を「胎土1類」土器とされ、その素地土の採取地の推定を試みられている。氏は、奥田尚氏が同胎土に「閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主として含む」土が用いられていることを明らかにされた(奥田1994)のを受けて、高松市の石清尾山丘陵南端付近をその採取地として推定された。さらに太田下・須川遺跡で同種胎土の土器が90%以上を占めること、近在にその素地土の分布が認められず、土器製作に当たって遠方より搬入されていることから、「胎土1類」土器の特殊性を強調された(森下1994)。以上5氏による研究によって、「胎土1類」・「下川津B類」土器に関して、その特殊性については充分認識され、その背後に存する経済的・政治的背景についても研究が深められつつある。以下ではこの「胎土1類」・「下川津B類」土器を中心に、空港跡地遺跡における土器組成上の問題について言及しておきたい。まず今回の分析結果をまとめることから始めよう。

砂粒分類の1～3類に分類した土器は、大半がSDe137より出土した布留式新相併行の土器群である。そのうち1類の土器は、胎土中に角閃石細粒を微量含むことを指標とし、他の石粒の大きさや含まれる率、器表面の色調等により7類に細分した土器群である。しかし分析の結果は、1類の細分類間に大差がないことを示しており、素地土の相違ではなく、その差異は土器製作過程での、水簸の有無や焼成温度に起因するものと考えられる。この1類に含まれる土器は、本遺構出土土器の過半数以上を占めており、おそらく遺跡近在に採土地が求められ、当該期における在地産の土器の可能性は高い。次に2・3類の土器は、胎土中に角閃石粒が認められない一群で、色調により1類その他の土器群と明瞭に識別可能なものを分類した。これも分析の結果、1類と同じ領域に属することになり、採土地の細かな相違はあっても基本的には近似した素地土を用いて製作された土器と考えられる。2・3類の土器は本地区内の土器群の中では少数派であり、その意味では搬入土器の可能性は高いが、白石報文にも述べられているように、同一の胎土と考えられる。

一方砂粒分類の6類に分類した土器は、胎土中に火山ガラスが含まれ、形態上からも「下川津C類」土器に属すると考えられる土器群である。本地区からは、分析を行った2点の甕の他、高坏等も出土しているが、量的には少なく客体的な在り方をしている。さて「下川津C類」土器とは、木下晴一氏によって抽出された土器群で、その特徴として胎土中に多量の火山ガラス粒を含み、「火山ガラスの濃集層を胎土として用いていると推定」され、また「胎土中に含まれる砂粒の径は概ね1mm以下で、水簸した胎土」が選択され、「東阿波型土器」と呼ばれる土器群と「形態・調整技法が酷似する」点を挙げられ



ている。また器種として、広口壺1種、二重口縁壺1種、甕1種、高坏1種、大形鉢1種、小形鉢1種、小形丸底土器1種を提示された(木下1995)。時期的には布留式古相に併行する土器群と考えられるが、その製作地や器種組成、系譜関係は不明であり、この土器群が様式的特徴を備えた土器群として設定されるのか、あるいは当該期における讃岐中央部の土器相の一つのバリエーションに過ぎないのかは、資料の充実を待たざるをえない。ただし、甕を除いて「下川津C類」土器群にのみ存在が許容されるような特殊な形態の土器様相は認め難く、胎土にみられる特殊性は地域性の中に埋没する可能性もある。木下氏は「東阿波型土器」との親縁性を強調されるが、その具体的な説明は報文中にはなくやや曖昧さは残るものの、おそらく「下川津C類」甕における球状体部や頸部内面の稜線の鈍化などの点から想定されているものと解釈したい。しかしこうした傾向は、布留甕を典型として西日本各地の当該期の土器様相にままた認められる傾向であり、あえて「東阿波型土器」との系譜関係を想定する必要性もないだろう。

この「下川津C類土器」について分析を行ったのは、僅かに2点のみである。分析の結果は、この2点の土器が砂粒分類1類の土器群と同じ領域に属することが判明した。この結果のみからでは、「下川津C類」土器の製作地について言及することは困難であろう。しかし本遺跡周辺ではベース層中に火山ガラスを含有していることが確認されており(京都フィッシュン・トラック1996)、火山ガラスを含む土器を製作できる環境下にはある。なお今回検討の対象とはしなかったが、上記した砂粒分類1類に含まれる土器群のうち一部については、胎土中に微量の火山ガラスが含まれることを確認している。

次に砂粒分類4類に分類した土器は、胎土中に角閃石粒を一定量含み、かつ多量の金雲母粒が含まれることを特徴とする土器群である。その年代的な位置付けは、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭に求められ、いわゆる「下川津B類」土器群と同時期に位置付けられる別系譜の土器群である。分析の結果、「下川津B類」土器の領域には属せず、善通寺市旧練兵場遺跡から出土した類似した胎土を有する土器群とほぼ同一の領域に属することが判明した。なおその領域に属しない高坏1点(資料番号53)は、試料抽出時のミスにより他の類型に含まれる土器が混入したものであり、今回の対象からは外しておきたい。本類型に含まれる土器群は、本遺跡では量的に少ない。正確な出現率は提示できないが、少なくとも同時期における本遺跡の土器群の主体をなすものではない。出現率の点からは、搬入土器の部類に属するといえる。本胎土を有する土器群の故地については、現段階では結論めいたことは言えない。土器そのものの諸属性(プロポーシオンや内外面の調整手法等)は、「下川津B類」土器群とは異質なものであり、およそ同一集団の手によって製作されたものとは考えがたい。類似した胎土を入手可能な位置に居住し、「下川津B類」土器群製作集団とは疎遠な位置関係にある集団の手によるものと考えられる。

次に砂粒分類5類は、胎土中に多量の角閃石粒を含むいわゆる「胎土1類」に属する土器群である。分析試料は、時期的には17の高坏脚部1点を除きいずれも後期初頭に遡り、形態や技法の面でも当該地域の同時期の土器群と共通した内容を有する。分析結果は細頸壺161の1点を除き、いずれも上天神遺跡での同種土器の分布領域に重なり、理化学的な分析からも「胎土1類」土器に包括されることが確認された。なお第120図に示されるように、Sr-Rbの分析では本遺跡の試料の大半が八丁地遺跡での「胎土1類」土器の領域とほぼ重なる結果が得られた。これをもって本遺跡の同種土器が八丁地遺跡に搬出されているとはとてもいえないが、今後の分析試料の蓄積によっては、「胎土1類」土器の細分と、その流通関係の解明について期待を抱かせる内容と考えられる。

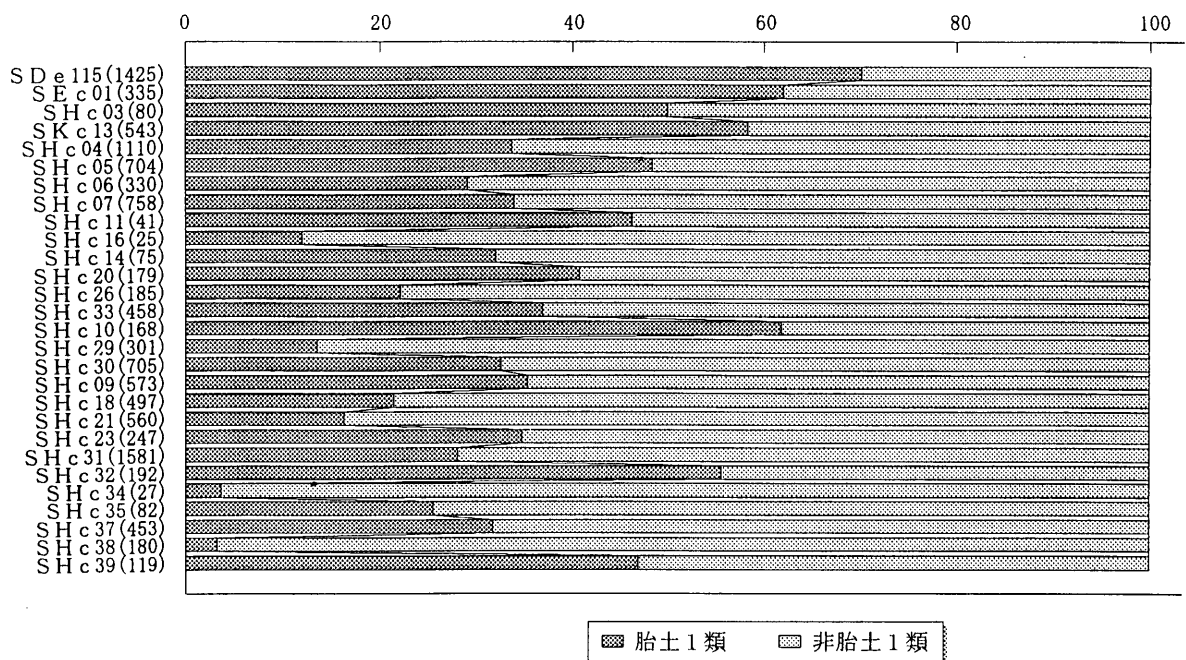
以上の分析結果をまとめると、本遺跡における弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器の胎土

は、大きく3類に大別される。つまり、砂粒分類5類，同4類，同1～3・6類である。砂粒分類5類の土器は、上記したように「胎土1類」土器に属する。「胎土1類」の土器群は、後期初頭から古墳時代前期初頭までの土器に採用され、いわゆる「下川津B類」土器もその延長上に位置付けられる。しかし分析結果や細かな土器片から両者を区別することは現状では困難であり、以下では特に断らない限り両者を区別せずに「胎土1類」土器と称することとする。また砂粒分類1～3・6類と一括した土器群は、基本的には本遺跡周辺で製作された在地産の土器群を主体としている可能性は高いが、土器胎土は特徴的なものではなく、中間西井坪遺跡出土の土器試料の領域に一部が重なる分析結果が得られた。このことは本類の胎土が、高松平野周辺域で最も普遍的な粘土であることを意味している。したがって平野周辺域からの一定量の搬入土器が混在する可能性は推測されるが、胎土分析からそれを識別することは非常に困難であり、資料的制約は大きい。以下では製作地の識別の容易な「胎土1類」土器を中心に、本遺跡での土器様相について検討を行うこととする<sup>14)</sup>。

第124図は、主にB2微高地集落(西岡1996)出土の弥生時代後期から古墳時代前期の土器について、「胎土1類」土器の出現率を遺構別に表示し、時期の古いものから順に並べたものである。図の上の方の遺構が古く、下にいくに従って新しくなるように配置したが、個別の遺構の新旧関係を表現しているものではない。またできる限り一括性の高い遺構を選択することを念頭に、竪穴住居・土坑の出土資料を軸に抽出したが、実際の遺物出土状況からは、厳密な一括性を期待できる資料は極めて限られるようであり、示されたのはおおよその傾向でしかない。出現率の計算方法は、大久保徹也氏が以前試みられたと同様の方法により(大久保1990)、全土器片中に占める「胎土1類」土器片の比率を集計した。遺構名の右側の括弧内の数値は、各遺構の全土器片数を示す。各遺構より出土した遺物の中には、明らかに時期の異なると判断される土器片も混在していたが、それは可能な限り除去した。各遺構によって土器片総量に偏りがあり、直接に全ての遺構を比較することは控えたいが、一般的に時期を下るに従い、「胎土1類」土器の出現頻度が低下することは明白である。後期初頭段階のSDe115では70%を超える高率を示しているが、後期後半以降特に終末前後<sup>15)</sup>については、概ね35%前後に中心を置いた比重を示しており、半数以下に低下する傾向が窺える。

後期初頭ないし前半段階の遺構として、上述したSDe115とSEc01がある。SDe115では「胎土1類」土器は約70%、SEc01では同様に約62%を占める。こうした傾向は、近在の後期中葉段階の林・坊城遺跡SX03資料の62.5%(大久保1995c)と近似しており、後期初頭段階の上天神遺跡や太田下・須川遺跡の90%前後とは比較にはならないが、高率を占め、「胎土1類」土器を主体的に取り入れた集団とみなせるであろう。SDe115の残余30%弱の土器は、今回分析を行わなかったが、そのすべてが搬入土器で占められるとは考え難く、少量の他地域産搬入土器の他は、おそらく非「胎土1類」の在地産土器をも含むものと考えられる。

なお他遺構出土や包含層資料を含めて、後期初頭の土器群でその形態や胎土から明確に搬入の可能性が推測できたのは吉備系の甕(582)など、また他地域系譜の在地産土器として垂下口縁形態の広口壺(39)や広口壺(275)、甕(167)などがある。それら土器群の出現頻度については測定することはできなかったが、いずれも極少量が認められるに過ぎない。一方上天神遺跡では、吉備・阿波・西部瀬戸内系の土器が搬入され、また他地域系譜の在地産土器として近畿地方や吉備系統の土器が認められる。前者では1遺構中の土器の約5%、後者では最大3割前後をしめる比率が確認され、まさに「人間の「移動」」の可能性が想定されている(大久保1995f)。こうした両者の差異は、本遺跡が極めて閉鎖的な集



第124図 胎土1類土器出現頻度

団であった可能性を示唆するものといえる。上天神遺跡では、後述する赤色顔料や石器素材などの物資や、人の移動によってもたらされた情報が集中する、拠点としての機能を想定することができるのではなかろうか。しかしそうした機能も、後述するように他の集落と隔離した位置に準備されたものではないことだけは注意しておきたい。

一方後期後半段階に属するSHc03以下及び古墳時代前期前半段階のSHc29以下の遺構では、上述したように概ね35%を前後する比率に低下する。高松平野以外の地域での同種土器の比率10%前後（大久保1990）と比較すればやや高率な値を示すが、同一地点における時間軸上の変化という点では、半減することの意味は重視されてよい。同様の状況は先の太田下・須川遺跡にも共通するようであり、大久保氏はこうした背景に、「より「広域の」物資流通が活性化する動きを反映したもの」との解釈を示されている（大久保1995c）。大久保氏の推論の背景には、当時列島規模で活発化しつつあった広範な土器の移動を念頭に置いたものと考えられる。

本遺跡では、非「胎土1類」土器65%の大半は、砂粒分類1類ないしは2・3類に分類される粘土によって製作された非「胎土1類」土器によって占められており、また後述するようにこうした非「胎土1類」土器と「胎土1類」土器との間に、製作技術上の系譜関係や緊密な連携は想定しがたい。明確に讃岐地域外部からの搬入が確認されるのは、いわゆる「ボウフラ」と呼ばれる吉備系甕が少量存在するに過ぎない。ここで問題となるのは、讃岐地域外部からの搬入土器を除いた非「胎土1類」土器の製作地である。そのすべてが本遺跡近在の粘土を使用して遺跡内で製作されたものではないだろうし、先述したように「胎土1類」土器を共有するエリア外部に隣接する高松平野周辺域からの搬入品を、その中から判別することは非常に困難である（数少ない例として、SDe115から出土した庄内期の土製支脚（256）がある。本例は、わずか1点のみの出土であり、形態や調整手法の点からも、在地で模倣したと考えるよりも丸亀平野からの搬入の可能性が高い）。この問題については等閑に付すしかないが、一方

で日常生活における土器の使用形態、例えば煮沸形態や供膳形態などが大きく変化しなければ、消費される土器総量に大きな変更を認める必要性はないと判断される。そうした前提に立てば、後期前半から後半への推移の中で小形鉢の多量化等を除いては大きな変化は認めがたく、「胎土1類」土器の出現頻度の低下は、単純に同種土器そのものの量的減少を反映していると考えて大過ないだろう。

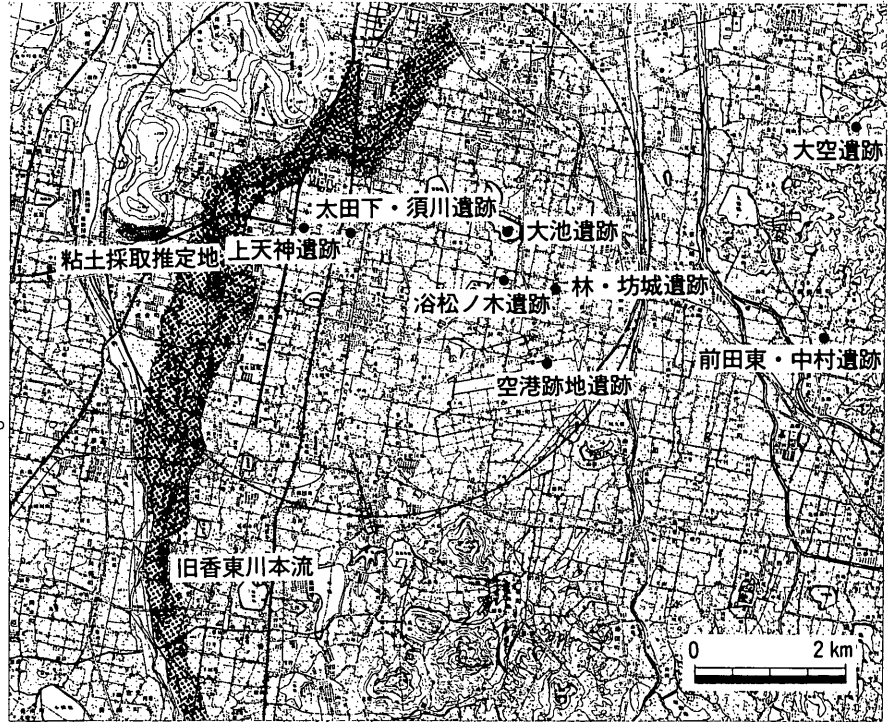
しかし、例えば高坏などの特定器種に限れば、その器種中での出現頻度はおそらく後期前半段階並の水準を維持していると思われる。本遺跡での出現頻度を低下させている主な要因は、甕や壺類における非「胎土1類」土器の増加である。特に破損の度合いの高かったであろう甕については、非「胎土1類」土器が多用されたことは確実であろう。また当該期の同種甕が、内面調整にハケや板ナデを多用し、体部外面下半にミガキ調整を認めないこと、また口縁端部の形状などの諸点において、「下川津B類」甕とはその製作技術を共有しない可能性が高い。このことは本遺跡の集団が、少なくとも日常生活の一部において、「胎土1類」土器の共有集団から離れて、自立性を示しつつあったことを示している。しかし高坏等に代表される儀礼的側面においては、なおその集団内部にとどまっていたと考えられ、土器様相において二相性が看取できる。おそらく前者は集団内部の経済的側面を、後者は外部集団との関係の社会的側面を象徴しているのであろう。そうした面からみれば、同種土器の減少が直ちに集団間の変化を反映するとの解釈は慎まねばならない。

とはいえ、遠隔地の遺跡への搬入量に遺跡による格差が認められ、また遠隔地の墳墓へ供献土器として搬出されている現象からは、土器の移動の背後に何らかの集団関係の設定を想定する必要性はあろう。それは土器に限らず物資の流通全般において言えることではあるが。こうした関係を考察する一例として、徳島県萩原1号墓（菅原ほか1983）を取り上げる。萩原1号墓は、径約18mの円丘部に長さ約8.5mの突出部が付す、丘陵部に構築された前方後円形の積石塚の墳墓である。円丘部を中心とする墳丘上及び積み石内部より多量の供献土器が出土しており、特に竪穴式石槨上面の遺物を中心に「下川津B類」の細頸壺と台付小形丸底土器、広口壺が認められ、讃岐地域の土器の搬入が確認される。また墳丘形態は、丘陵主軸に墳丘主軸を一致させ、円丘部を丘陵下位に突出部を丘陵上位に設定する。さらに円丘部の基底部の標高は、突出部のそれより最大約4m下方に設定され、さらに突出部は極めて低平であり、円丘部の造作に主眼を置いた築造規格を呈する。こうした形態は讃岐地域の前期前方後円墳に共通する特徴とみなせる（蔵本1995）。供献土器の様相や積石塚を採用する点とも相まって、本墓の築造に讃岐の集団が関与した可能性は極めて高い。一方萩原1号墓の眼下に広がる平野部には、近接して朱精製に関与した黒谷川郡頭遺跡が所在する。同遺跡の溝22出土の後期末前後の資料では、「下川津B類」土器は13%の出現頻度をもって確認されており（菅原1987）、讃岐地方東部の森広・寺田・石田の諸遺跡の数%と比して、著しく高い数値を示している（大久保1990）。こうした現象は、単なる物流システム上の偶発性との理解では説明が困難である<sup>3)</sup>。

なお「胎土1類」土器を共有する集団は、後期後半段階以降非常に限定され、収斂されていったものと考えている。おそらくそうした動向は、「下川津B類」土器の成立と無縁な動きではない。土器が集落から駆逐され消えていく現象及び、特殊な胎土と独自色の強い器形、一種専門的な工人の存在を想像させる器種毎の画一性と精緻な作りを有する「下川津B類」土器の成立を互いに関連する動きとして理解し、日常生活に供する容器としての土器本来の属性が払拭された姿をそこに求めたい。大久保徹也氏は太田下・須川遺跡での「胎土1類」土器の出現頻度の低下の要因を、「搬入品」の増加に求めたが、増加したのは確実に「搬入品」のみなのであろうか。なお、古墳時代前期後半に位置付けられる SDe137

では、他遺構からの混入が想定される遺物を除いた土器群の中には、「胎土1類」土器は1点も認められない。その前段階、石清尾山古墳群の石船塚古墳において僅かに、円筒埴輪と広口壺に同種胎土が使用されているのが確認されるのみである(大久保1996a)。

第125図は、大久保氏によって算出されたデータをもとに(大久保1995c)、後期前半段階の「胎土1類」土器の共有集団について、そのおおよそのエリアを想定したものである。

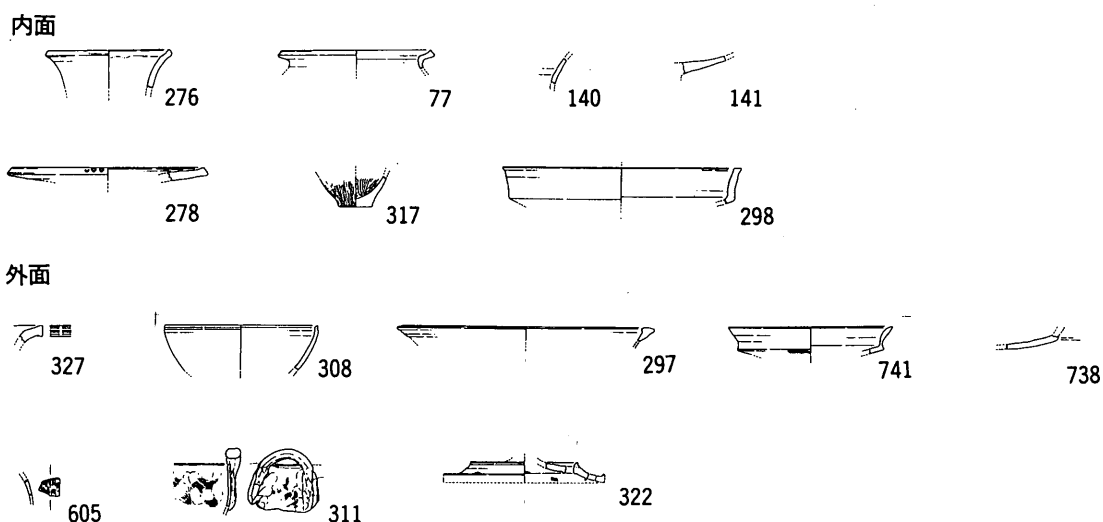


第125図 胎土1類粘土採取推定地と後期前半段階の同種土器共有集団  
須川遺跡周辺を中心とした直径5～6kmの仮想円に含まれる範囲が、「胎土1類」土器を60～70%以上の確率で保有した集団のエリアと考えた。西は石清尾山山塊に、南は日山などの丘陵に、東は新川・春日川に画された範囲を想定している。粘土採取推定地は、森下氏の説に従う限りエリア西端に位置し、エリア東端の諸遺跡(林・坊城、空港跡地)で同種土器の出現率が低下するのは、地理的要因に依ることも考えられる。こうしたエリアで括られる集団は、まさに先の集落立地の検討から導かれた、旧香東川の中小支流を主水源とする幹線水路網を軸に連結された協業関係にある集団と考えられる点は興味深い。大久保氏が示された幹線水路網の継続期間から推定すれば、こうした集団関係は弥生時代前期以降長期間に亘って醸成されてきたものと考えられる。

そして後期後半期における先にみた空港跡地遺跡での(厳密にはB2微高地西端の集落単位での)「胎土1類」土器の減少は、そうした集団関係からの逸脱と映るがはたしてそうだろうか。エリア中心部の様相、例えば上天神遺跡や太田下・須川遺跡周辺での同種土器の動向が今一つ明らかでない現在、それが地域集団の細分化の動きなのか、あるいは集団間の関係とは直接にリンクしない別次元の動きであるのか等々は分からない。しかし前期古墳の動向を振り返れば、本遺跡周辺の地域集団を内包する首長墓系譜である、瘤山1号墳→三谷石舟古墳の系列の形成時期は、石清尾山古墳群諸墳の成立より遅れ、またその衰退期に当たって墳丘規模を著しく増大させている点(大久保1996a)は、本地域の集団の動向を考える上で極めて示唆的と言える。

#### 〔赤彩土器〕

本文中にも記したように、本遺跡からは赤色顔料が付着した土器片が20点前後出土している。出土した遺構は、本文中にも述べたように溝を主体とする。また出土状態からそれら赤色顔料付着土器が、他の土器と特に区別された形跡は認められない。本地区より出土した土器について、その細片まで含めて丹念に検討した結果であり、総点数についてはこれを大きく上回ることはないだろう。土中埋没時や出



第126図 空港跡地遺跡出土の赤色顔料付着土器

土後の洗浄時等の顔料の剥落を想定すれば、実数は増加するであろうが、肉眼観察の限界もあってそうした資料の抽出は不可能である。こうした点を前提として、以下本遺跡出土の赤色顔料付着土器について、簡単にまとめておきたい。

赤色顔料が付着した土器片は、すべて弥生時代後期に限られ、またほぼ後期全般において認められる。なお同時に出土した石器類には、赤色顔料の付着は確認していない。付着位置は、内面に塗彩または付着したものと、外面に塗彩したものの2者がある。前者には、壺・甕・高坏・小形鉢があり、後者には壺・高坏・装飾高坏・小形鉢がある。分析の結果は第3章の本田報告に示すように、すべてベンガラなど鉄系顔料による赤彩であり、付着位置・器種・時期による顔料や塗彩位置の差異は顕著ではない。また明らかに彩文を意図したとみられるものもない。なお赤色顔料が付着した土器片の胎土が、極少量を除いて前述した「胎土1類」によって占められる点は注意してよい。上天神遺跡での同種赤彩土器の存在と、先の「胎土1類」土器の検討を踏まえるなら、「胎土1類」土器共有集団内における習俗的な部分での連携を補完するものと考えられる。

さて本遺跡北西約3kmに位置する上天神遺跡からは、後期初頭段階の多量の赤色顔料付着土器が出土している。これらの赤色顔料付着土器の一部については、本田光子氏によって分析が行われ、極微量を除いたほぼ全てが水銀朱を使用していることが明らかにされている(本田1995)。また上天神遺跡での赤色顔料の性格については、「辰砂原石の打割・粉状化作業に要する各種石杵類や石皿類が完全に欠落する」ことと、特に大形鉢・把手付広片口皿の内面に液状化状態での顔料の付着が認められ、その2器種がある段階の朱精製作業に使用された可能性が高いと考えられる点から、「最終工程に近いであろう水簸工程もしくは利用形態に合わせた何らかの調合工程、あるいはそれ以後の顔料使用(消費)過程」に限定される点を指摘し(大久保1995g)、「朱調合儀礼」の存在を推定される(大久保1995h)。

上天神遺跡での水銀朱の使用形態は、それのみをもって非常に特殊な行為であり、一般的な集落に普遍化するものではないが、それら水銀朱が土器装飾に多用されていない点は重要である。その点で本遺跡との間に赤色顔料に対する意識の差異は認められない。しかし本遺跡出土の赤色顔料付着土器に水銀朱が検出されなかったことは、上天神遺跡から水銀朱が本集落に搬入されなかった可能性を示唆するものであり、そのことは本遺跡での大形鉢の比率が極めて乏しく、ましてや把手付広片口皿や石杵類は

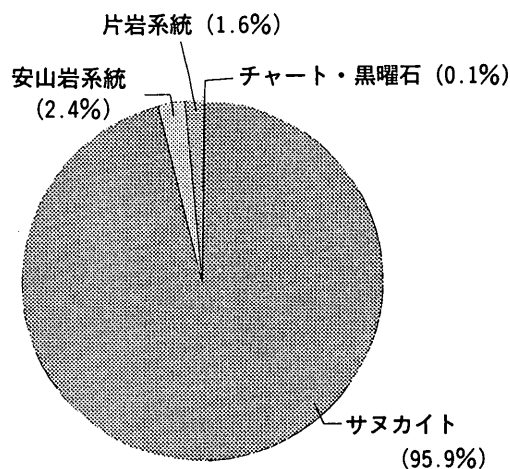
1点も出土していないことから傍証とすることができよう。本田氏が指摘するよう（本田1994）に、後期初頭段階での朱使用の目的として、「仙薬」原料を想定するのであれば、そうした行為は非日常的な特殊な行為であり、各集落において個別になされるものではなく、限られた「場」を必要としたのである。そうした「場」を提供したのが上天神遺跡に居住した集団であり、先に見た上天神遺跡での土器様相は、こうした行為と密接に関係していたことを想像させる。

上天神遺跡での竪穴住居遺構は、4区を中心に検出されており、その床面積は約50m<sup>2</sup>を最大に、30m<sup>2</sup>前後のものが多く、そう規模の大きなものは多くない。また突出した規模を有する住居も確認されていない。上天神遺跡の特殊性は、朱の集積という1点にある。他地域系統の土器や遠隔地産の石器石材の搬入、おそらく畿内産と考えられる銅鏃の存在はそれに付随した現象であり、朱以外には他の集落と隔絶した様相が認められない点は重要であろう。

### 〔石器石材の搬入〕

本文中の報告にもあるように、石器・石製品はⅡ区の包含層を中心に出土しており、本層が弥生時代後期前半の遺物を潤沢に含むことからすれば、同石器類も大半が同時期に位置付けられるものと理解してよいだろう。本地区の石器石材には、サヌカイト・安山岩・砂岩・片岩系統・黒曜石・チャートの6種の石材が認められ、後3者については、本地域周辺の径30kmの域内には産出しない石種であり、遠方から搬入された石材である。またサヌカイト・黒曜石・チャートの3種の内一部については、石器の形態や表面の風化の度合いから、後期前半以前に遡る可能性のあるものを含むが、量的には問題とならないものと考えている。

さて第127図は、石皿と考えられる砂岩製の石製品を除いた5種の石材について、微細な剥片類を含めてその重量比を示したものである。この図から判断されるとおり、石器石材として圧倒的多数を占めるのがサヌカイト製品であり、全体の約96%を占める。これに次ぐのが安山岩と片岩系統の石材で、ともに2%前後を測る。その他の石材は各々1点のみの出土であり、時期的にも他3者の石材より遡る可能性が高くここでは問題としない。片岩系統の石器には、柱状片刃石斧1点と打製石庖丁の素材と考えられる剥片1点の計2点があり、安山岩系統の石器には、磨製石庖丁1点と石鏃1点及び剥片類4点がある。他の石材に対してサヌカイト製品は非常に高い搬入率を示している。概ね同時期に位置付けられる上天神遺跡では、片岩系統の石材が17.5%を占め（大久保1995d）、片岩系統の石材の搬入量は本遺跡と比較して高く、両者の相違は著しい。こうした背景として、本遺跡では片岩系統の石材を搬入する供給ルートをも、独自には持っていなかったと理解せざるを得ない。大久保徹也氏の指摘にもあるように、磨製石斧類が消滅段階にある当該期において、その主要な素材となる片岩系統の石材の需要量は低下していると推定され、本遺跡における片岩系統の石材の僅少さは、そうした背景に由来するものともいえよう。しかし、一方において上天神遺跡にはなお一定量の片岩系統石材が搬入され、なおかつそれが機能的にはサヌカイトで充分賄える打製石庖丁にあえて製品化されている点は、別の解釈を必要とする。それが先にみた上天神遺跡での朱精製と密接に関わるであ



第127図 石器石材の搬入量

ろうことは論を待たない（大久保1995 h）。

ところで搬入された石器石材の製品率については、サヌカイトで約30%を測る。出土したサヌカイト素材の中で最大のものでも110gしかなく、大半は50g以下の剥片類であり、大型の石核となるような石材は出土していない。製品化率約30%とはいえ、かなり製品に近い状態まで加工されたか、製品そのものが搬入された可能性が高い（森1995）。非製品とした約70%は、石器製作の最終工程や破損後の二次加工時に生じた残滓か、破損した石器そのものである。他の石材については、点数が著しく少ないため、直接比較することは困難だが、サヌカイトよりは高率となることは確実であろう。なおサヌカイト製品の製品率30%は、上天神遺跡での同種分析の製品率35%（大久保1995 d）と近似しており興味深い。

#### 〔鉄製品〕

本地区からは、当該期の鉄製品としてSDe138出土の鋤・鍬先（507）がある。本品は、SDe138南端の湧水坑付近の溝底面近くから出土した。中央部で縦位に半折しており、一方の袋部は遺存しているが、もう片方は欠損しており、正確な刃部幅は不明である。残存部より、刃部幅10cm程度、長さ6cm程度と推定され、弥生時代のものとしてはほぼ標準的な大きさとなろう。時期は後期後半でも末に近い時期に求められる。

さて本例のような弥生時代の鉄製の鋤・鍬先について山田隆一氏は、九州域に分布が集中し、「九州以東の分布が極端に少なく点的であること」から、九州以東のものについては「北部九州域からの流入の可能性」を想定する（山田1988）。また「検出遺物の希少な事、木製鋤・鍬の状況からみても、この種の鉄製品が土木作業や一般的な農耕に使用される器種ではなかった事」を指摘する。本例は、出土時に幾分欠損したが、中央で2つに半折されており、通常の使用でのものとは考えられず、意図的に折り取ったものと考えられる。またその出土位置は、溝の取水源である湧水坑付近の溝底であり、他に祭祀性を帯びた遺物には乏しいが、山田氏の指摘を参照すれば、何らかの農耕諸儀礼との関連を想定することもできよう。

その他、鉄器の存在を推定させる遺物として、SDe115南北溝出土の柄状の木製品（268）がある。本例は、長さ39.1cmのピリヤードのキュー状を呈する木製品で、先端部は鈍く尖らせるが、使用により潰れており、ソケット状の鉄製品が被せられて使用された可能性が高い。その場合、鉄器の種類としては袋鑿の可能性が想定される。時期は、後期初頭に遡る。

#### 〔古墳時代前期の土器〕

本項では、SDe137から多量に出土した古墳時代前期の古式土師器資料をもとに、本遺跡における土器様相について若干の検討を行ってみたい。なお本地域において当該時期のまとまった資料として、中間西井坪遺跡（大久保1996a）があり、主に中間西井坪遺跡との対比という視点で、以下の検討を試みる。また本項で使用する器種名称は、大久保徹也氏の分類案を踏襲し、一部追加する。まずSD137出土資料について、整理することからはじめよう。

本文中にも報告したように、SDe137は集落に近接した位置に、弥生時代後期以来の幹線水路網を大きく変更しない位置に開削された水路と考えられる。その開削時期は、古墳時代前期後半段階に求められ、短期間でその機能を停止する。埋土は大きく3層に分層され、下層は砂層を主とした流水下の堆積層、中・上層は黒褐色系粘土を主体とし機能停止後の自然堆積層と考えられた。遺物は本溝機能時には



ほとんど混入されておらず、機能停止後の中層下位を中心に一括投棄が推定される状況で出土した。想像を逞しくすれば、集落の廃絶に伴い本溝も必要とされなくなり、それまで使用されていた土器類の廃棄場所として最後に選ばれたと考えることも可能であろうか。

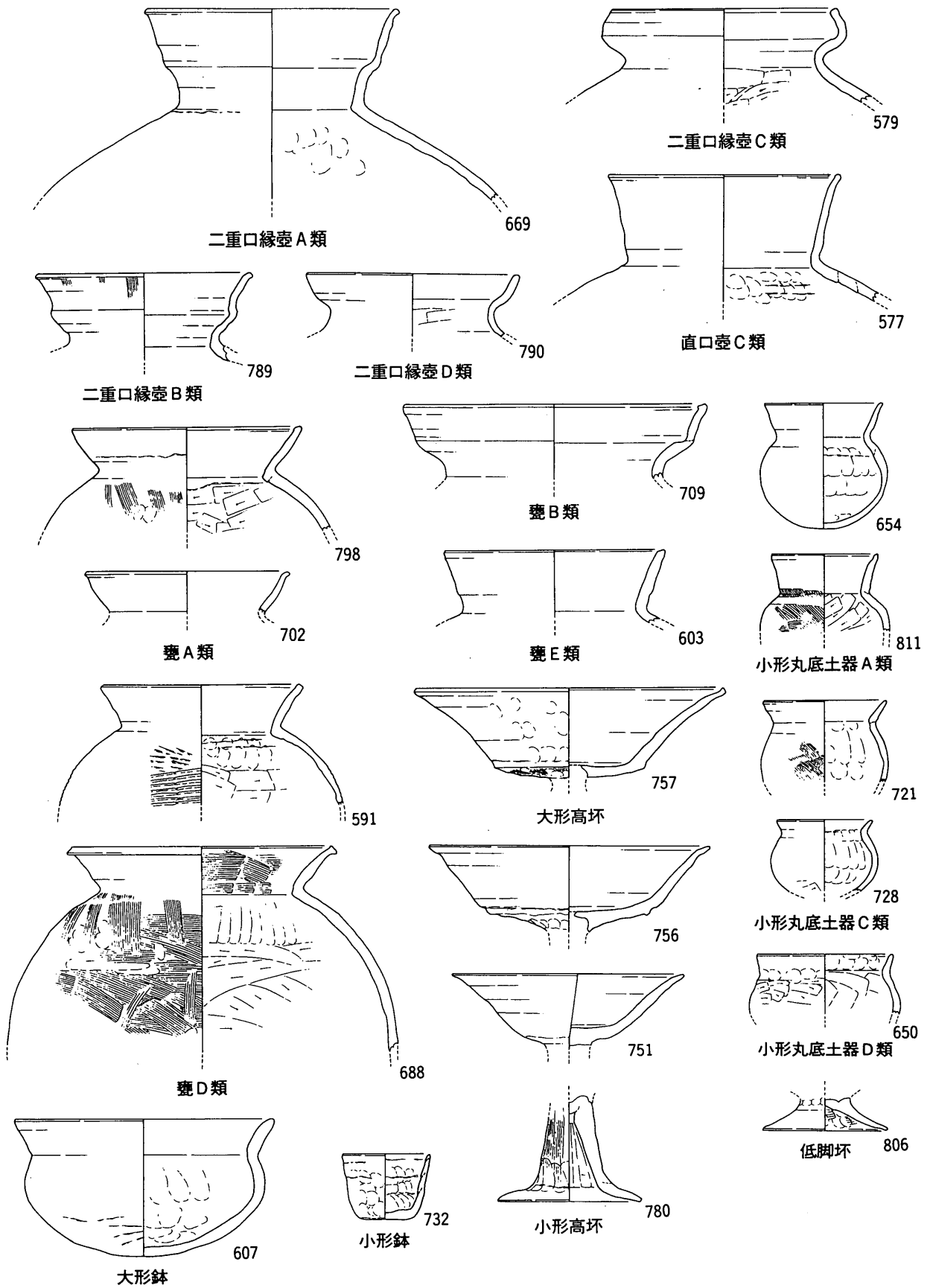
出土した土器には、弥生時代後期初頭以降のものが認められるが、これらの土器は器種が限定され、また下層から古墳時代前期後半期の遺物が出土していることから、本溝機能時のものとは考え難く、他遺構からの混入の可能性が高い。上記した存続期間の推定は、こうした理由による。また基本的には3層に分離され出土した土器群相互に、時期差を想定することが考古学的手法としては妥当であろう。しかし、当該期の比較資料が乏しい本地域においては、細かな時期差を設定することが可能かどうか検証することが困難なため、ここでは一括して検討を加える。細分案は今後の調査の進展に期待したい。

さて本溝より出土した古墳時代前期後半期の土器には、壺・甕・高坏・鉢・低脚坏・小形丸底土器の各器種があり、それぞれに若干のバリエーションを有している。上記器種のほか、小形器台と考えられる個体も出土しているが、確実に供伴するかどうかは微妙であり、ここでは触れない。

まず壺には、二重口縁壺A・同B・同C・同D・直口壺Cがある。二重口縁壺A類は、口縁上半部及び頸部は直立して短く、口縁下半部も短い。端部は四角く納めるか若干外方へ張り出すが、顕著な肥厚傾向は認められない。中間西井坪遺跡谷3資料より、口縁部下半部の開きは弱く、より古い傾向と見ることも可能であろうか。また小形品も認めるが、端部の造作などは中形品と比べてやや粗雑である。B類は、明確な直立する頸部を有さず、口縁上半部が外反して開くものである。C類は、B類と同様の頸部から内傾する口縁部を有する。出土量は極めて乏しい。D類は、口縁屈曲部に明瞭な稜線をもたず、鈍く内湾して開く形態である。直口壺は一種のみ。C類は、直線状に比較的長く延びる口縁部を有し、端部は小さく外反する。

次に甕は、主に口縁端部の形態によって4種に分類した。A類は、内湾する口縁部を有するものである。通常の布留系統甕に一括されるものであるが、端部形状は、僅かに内側への肥厚させるもの、単に内側に肥厚させるだけのもの、内側に肥厚した後上方に摘み上げるもの、内側への肥厚は認めず外方へ鈍く摘み出すものなど多様性を示す。また口縁部も内湾傾向が弱く、やや直線的に開く個体も認められる。体部形状は不明瞭だが、中間西井坪遺跡で認められた肩部へ刺突文や沈線を施す個体は認められず、また肩部への横ハケ調整の使用も限られる。内面は、頸部はヨコナデにより丸く仕上げられ、肩部には横ケズリ調整が施される。B類は二重口縁形態の甕、A類と比較して圧倒的に少ない。口縁端部は内側に肥厚することを特徴とする。C類は、一定量存在するが、布留式古相併行期のものと明確に識別できないため、ここでは触れないでおく。D類は、口縁部は外反して開き、端部を四角く納める形態。端部形状は、単に四角く納めるものの他、上方へ僅かに摘み上げるもの、上下に肥厚させるものがある。体部外面には、タタキメを残すものも認められるが、一般的にはハケ調整が卓越する。A類に次いで量的には多いが、主体となるものではない。E類は口縁部が直線的に立ち上がるもの。端部は四角く納め、内傾する面をなす。D類のバリエーションとして一括される可能性を持つが、特徴的な口縁部を有することから、分離しておく。

高坏は、大・小2種がある。口径20cmを超えるものを大形高坏として設定する。中間西井坪遺跡例と比してやや小形であり、後述する小形高坏との差は顕著ではない。量的には少なく、また脚部形状は不明である。坏部中位で屈曲して、上半部は直線状ないしは外反して開き、端部は小さく摘み上げる。小形高坏は、坏部形状はバリエーションに富み、個体差が激しい。それが時期の異なる数型式の遺物を含



第128図 空港跡地遺跡 SDe137出土の布留系土器 (1/4)

んでいるのか、本遺跡での特徴であるのかは俄には判断できない。坏部の多様さに比すと、脚部形状はやや画一的である。裾部は脚柱部より鈍く屈曲して短く開き、扁平である。脚柱部内面は横ケズリ調整を基本とし、下位をケズリ調整の後ナデを施すものもある。外面に横方向のミガキ調整をみるものは極めて少ない。縦ハケもしくは、ナデ調整を主体とする。坏部との接合は、大半は完成された脚部上端に粘土を貼り付けて坏部を成形し、後に小粘土塊を坏部内面より充填する手法を採用している。なお脚柱部内面頂部の充填された粘土塊に、軸芯痕を認めるものは例外的に過ぎない。

鉢は大形と小形粗製のものがある。大形鉢は、やや扁平な丸底化した体部から、強く外反して開く短い口縁部を有する。系譜的には、少なくとも川津二代取遺跡などの布留式古相併行期の資料に求められ、在地系譜の土器である。小形粗製の鉢は、いわゆる手づくねにより成形されたもので、個体差が激しい。なお小形鉢には、在地系譜の浅皿状を呈するものもあるが、確実に本資料に供伴するとは限らず、今後の検討に委ねたい。

低脚坏は、脚部小片が下層より1点のみ出土している。体部形状は知られず位置付けは難しいが、胎土の特徴は他の器種と違和感はなく、供伴すると考えてよい。

小形丸底土器も、口縁部形態を中心にバリエーションに富む。A類としたものは通有の形態の小形丸底土器で、体部は球形化が進展し、口縁部は萎縮し内湾傾向を帯びる。内面の調整は、一部においてケズリ調整が認められるものの、基本的にはナデ調整が主体となるようである。一方C・D類としたものは、小形丸底土器に含めてよいかどうかやや疑問が残る。系譜上は弥生時代後期の小形鉢に求められようが、法量や形態に小形丸底土器に近いものがあり、本類に含めて考える。

次に、以上のような様相を示す空港跡地遺跡の古式土師器資料の位置付けについて検討する。既に述べたように、本遺跡の古式土師器は概ね中間西井坪遺跡と同様な器種組成・形態を呈しており、布留式後半に位置付けられることはほぼ誤りない。甕D・E類に中間西井坪遺跡とは異なるやや新しい傾向をみることも可能だが、時期差を設定することが可能かどうかは現状では別の問題であろう。私見としては、中間西井坪遺跡資料とはほぼ並行する時期に位置付けられると考えている。中間西井坪遺跡の古式土師器資料について大久保徹也氏は、「小形器台・小形精製鉢の欠落、体部が肥大化した新しい様相の小形丸底土器と高坏の多量化」及び「小形丸底土器の全体的な鈍化傾向が極限にまで達していないことや椀形坏部の高坏がまだ出現していないことから」、寺沢氏の編年案の布留4式(古)の段階に位置付ける。畿内地域の編年案での個別器種の消長を、「畿内地方の典型的な布留様式のそれとは微妙に異なる」中間西井坪遺跡の古式土師器(大久保1996a)に、そのままダイレクトに移入してよいのかどうか。また、中間西井坪遺跡へ布留系土器の製作技術が導入されて間もなく、短期間の内に讃岐諸地域にそうした技術が拡散していること(例えば下川津遺跡SHⅡ02、鴨部南谷遺跡SH8802)を勘案すれば、中間西井坪遺跡の特殊性を突出させて考えることもまた疑問である。さらに中間西井坪遺跡の小形高坏の坏部の屈曲は鈍化しているとはいえまだ屈曲部に稜を認める個体もあり、大形二重口縁壺の形態や甕A類が主体となる器種組成などの点から、時期的にやや遡上させて考えてもよいのではないかと思われる。しかし当地域においては、布留3式併行期の良好な資料はなく、大久保氏の編年観を覆すだけの私案も持ち合わせていないため、畿内地域との併行関係については大久保氏の指摘に従いたい。

さて、空港跡地遺跡の古式土師器資料と中間西井坪遺跡の資料とを比較したときに、重要な要素として、個別器種の欠落や追加とは別に、空港跡地遺跡においてはいわゆる「山陰的な」様相(大久保1996

a) が希薄である点が指摘される。この「山陰的な」様相の希薄さは、具体的には二重口縁形態の甕の僅少さと、大形二重口縁鉢の欠落、甕肩部文様や高坏脚柱部内面頂部の軸芯痕の一部不採用（次山1995・森内1983）、小形丸底土器体部内面のケズリ調整が貫徹されていない点に求められる。

さて、二重口縁形態の甕に対しては布留系統の甕Aの高い比重によって、大形二重口縁鉢の欠落に対しては在地系譜の中形鉢の存在によって、それぞれ各器種の欠落は概ね補填されており、両遺跡に特定器種の欠落に伴う機能的側面の格差は認められない。また後3者は、各器種の製作手法・調整技法上の差異であり、特に甕肩部文様の施文については「製作者の出自や系譜の一端を反映している」可能性が想定されている（次山1995）。大久保氏も同様の視点から、中間西井坪遺跡の「土器・埴輪製作集団の技術的系譜を追求する際の重要な指標」とされている（大久保1996a）。両氏の見解に沿うなら、中間西井坪遺跡と本遺跡とにおける土器様相の差異は、土器製作者の出自集団の差とみることも可能だが、資料的な制約もあって断定するまでには至らない。あるいは中間西井坪遺跡の集団が、より直接的なかたちで布留系土器の製作技術を導入し、その一部が淘汰された後に本遺跡に導入された可能性もある。その場合の両遺跡における時間軸上の先後関係の問題は、中間西井坪遺跡の前により外来的様相を備えた仮想の1遺跡を設定し、その遺跡での取捨選択による非等質的な2次的波及といった地理的な問題にすり替えることで解消することもできよう。推論を重ねることは慎み、ここでは当地域における布留式後半期の土器様相の二相を指摘するにとどめておきたい。

### 3. 古墳時代後期

当該期に属する遺構には、溝 SDe142を検出したのみである。周辺域で当該期の遺構が未検出であり、その位置付けは非常に困難であり、今後の調査の進展に待つ部分が多い。本地域の諸開発行為は、当該期においては少なくとも活性化していなかったことだけは確かである。

### 4. 中世

Ⅱ-13区で数棟の掘立柱建物（SBe04・05）と、Ⅲ-41~43区で流路状の落ち込み（SXe01）を検出した。

Ⅱ-13区で検出した掘立柱建物には、概ね条里型地割りの方向に建物主軸が合致するもの（SBe04・05）と、合致せず斜交するもの（SBe06~09）の2者がある。おそらく両者は、それぞれ所属する時期を違えているものと考えられるが、具体的にそれを決定付けるだけの根拠をもった遺物の出土は認められなかった。森下英治氏によれば、いわゆる丸亀平野における条里型地割りの施行時期は7世紀末に遡り、宅地においてもその地割りに合わせて集落単位で再編成されるという。また平安期以降になると、一部で宅地の配置に地割りの方向と合致しないものが出現し、「律令国家の土地政策の変容」が窺えるという（森下1997）。森下氏の説に従えば、前者の建物とはかく後者については、平安期以降に下る可能性が高い。調査担当者は、後者の建物が9世紀の資料を主体とする包含層Ⅱ層上面より掘り込まれていることをもって、建物の時期を中世に位置付けたが、その推定は上記した点を踏まえるなら概ね矛盾しない。しかし、本遺跡の他調査区の中世段階の建物配置は、ほぼ例外なくとしてよい程地割りの方向に合致する。本区画の建物だけが、これら方向性に規制されないのはやや矛盾があるように思われる。

また本建物群の周囲に、溝や土坑など集落を構成する上で当然付随すべき遺構が何ら検出されていないことは、きわめて特殊なケースと考えられる。上面の削平を考慮しても、建物柱穴より掘削深度の浅

い遺構のみで占められていたとは当然考え難い。掘立柱建物数棟のみが単独で存在するような集落が存在するのだろうか、今後類例の検討を待ちたい。

さてⅢ区低地部で検出されたSXe01は、調査結果から遺構の性格を特定することは困難であった。形状から人為的に掘削されたものではないことは本文中でも述べた。また埋土の堆積状況も、穏やかな環境下での堆積を示しており、人為的な改変行為は認められないものであった。つまり当該期に至っても周辺域は低湿地状を呈していたと考えられ、積極的な開発行為からは取り残された区域であったと考えられる。こうした推定が正しいとすれば、SXe01は金田章裕氏が想定する『弘福寺領讃岐国山田郡田図』に記載された「佐布田」という土地利用形態（金田1990）に近似するものと考えられる。

当該期に位置付けられる遺物は、上記したSXe01や包含層Ⅰ層を中心に出土している。在地産と考えられる土師質土器類の他、地域内の搬入土器に西村産黒色土器碗・瓦質土器碗・国分寺楠井窯産土師質土器播鉢などがあり、讃岐地域外からの搬入品に吉備系土師質土器碗・中国産輸入磁器類・和泉型瓦器碗がある。特に後者は、量的には少ないとはいえ当時の広範な物資流通の様相を窺わせるものであろう。

## 5. 近 世

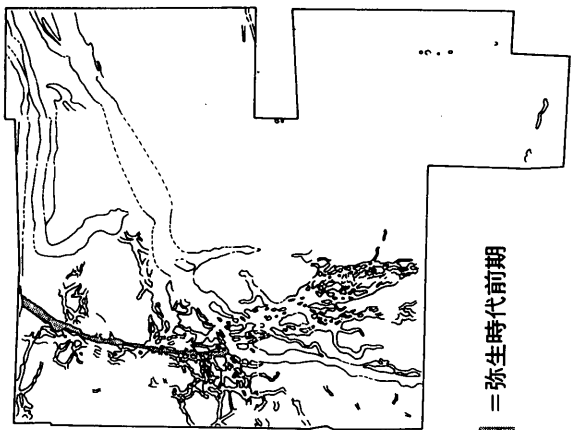
近世の遺構としては、Ⅱ-7区B3微高地上において掘立柱建物1・柵列3・土坑・井戸2等で構成される2区画の屋敷地及び、各調査区で条里型地割りに合致した溝や低地部で出水1を検出した。屋敷地以外の土地利用については、溝・出水など水利施設が検出されたのみであり、遺構としては確認されなかったが、おそらく耕地として利用されていたのであろう。

さて北側の屋敷地は、掘立柱建物1（SBe01）と柵列1（SAe01）及び数基の土坑で構成される。屋敷地の時期については、建物遺構からの遺物がなく直接的な根拠に乏しいが、周辺遺構の遺物から概ね18世紀前半代までは遡るのではないと思われる。以後この屋敷地は、明治21年発行の地籍図の同一地点に屋敷地の記載があり、19世紀代まで継続したことが推測される。おそらく当時には既に礎石建物に建て替えられていたであろうが、上面の削平により遺構としては確認できなかった。屋敷地の範囲は、明確にその敷地を画する施設は確認されなかったが、明治21年地籍図の記載内容を参考にすれば、その南半部が検出された可能性が高い。この屋敷地については、そのかなりの部分を後世の攪乱により損なわれており、その建物配置や構造については明らかにすることはできなかった。また条里型地割りに合致して検出された掘立柱建物SBe02については、調査担当者の所見及びSBe01とその主軸方向がややすれる点を重視して、弥生時代に位置付けたが、方向性や検出位置から再検討すれば、近世に下る可能性は高い。

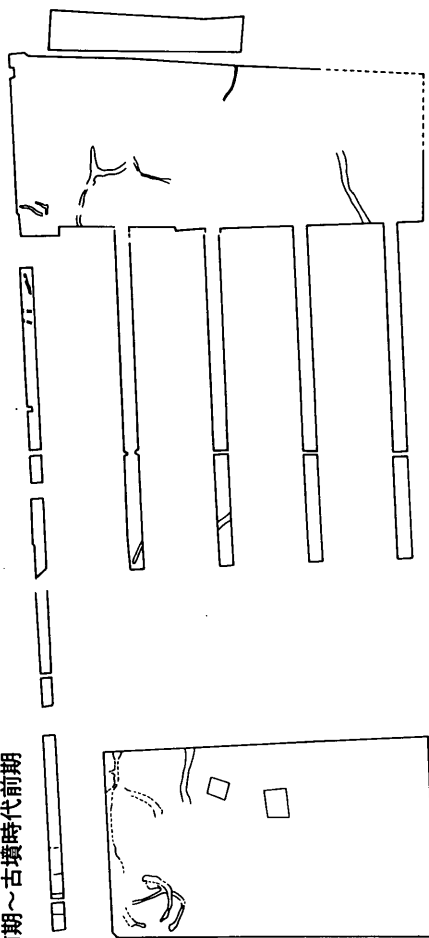
南側の屋敷地はその北端部が調査区内で検出されたに過ぎない。検出された遺構には、おそらく屋敷地北限を画したであろう溝SDe15と、石組井戸SEe02及び数基の土坑がある。建物遺構は検出されていない。本屋敷地の時期については、出土遺物が僅少なため不明である。明治21年発行の地籍図を参照すれば、19世紀後半代には屋敷地として利用されていたようである。

条里型地割りに合致した溝群や出水の開削時期については、その底面から近・現代の遺物が出土し、当時徹底して堆積土の除去、改修が行われていたようで、調査成果から推測することは困難であった。一部については出土遺物から中世段階の開削を想定したが、層的に把握したものではなく、可能性を指摘したに過ぎない。しかし多量の18世紀段階の遺物が出土し、その当時の屋敷地がこれら溝に規制された在り方を呈していることから、その一部については18世紀頃までは遡ることは確実であろう。

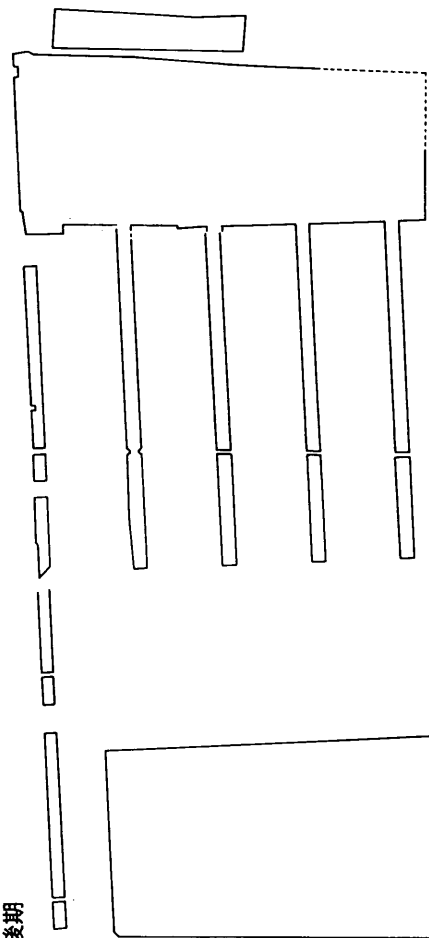
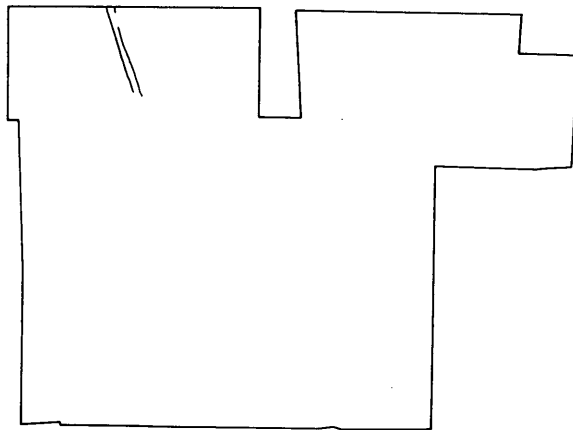
弥生時代前期～古墳時代前期

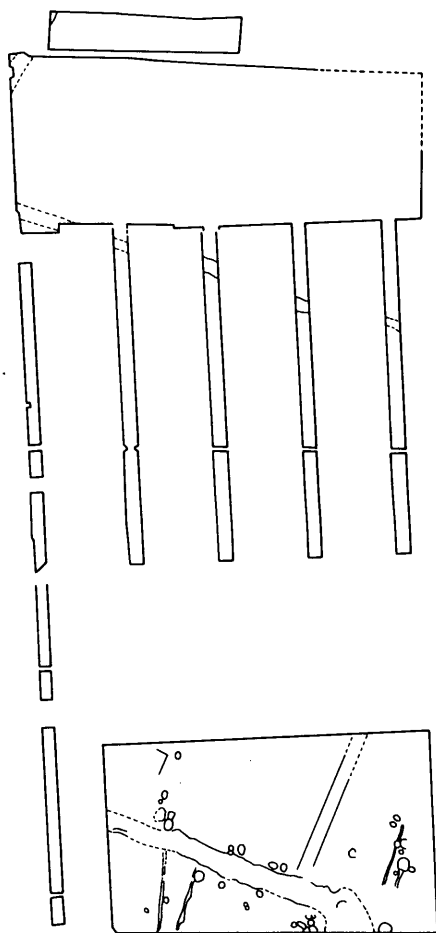
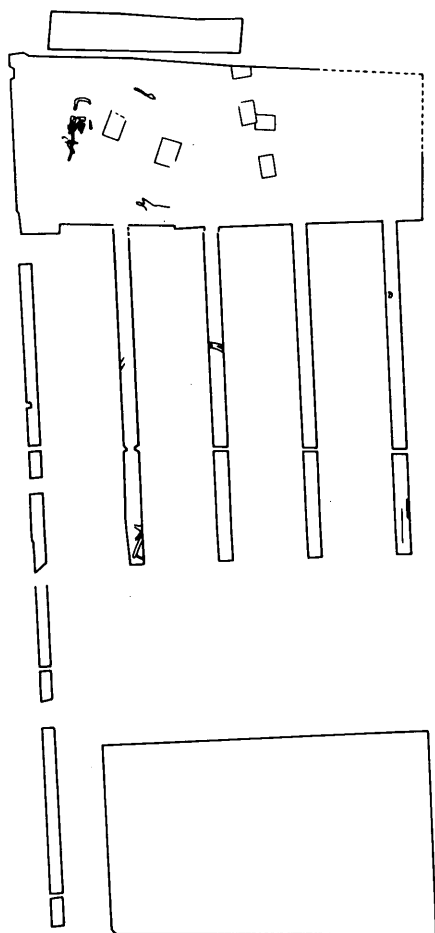
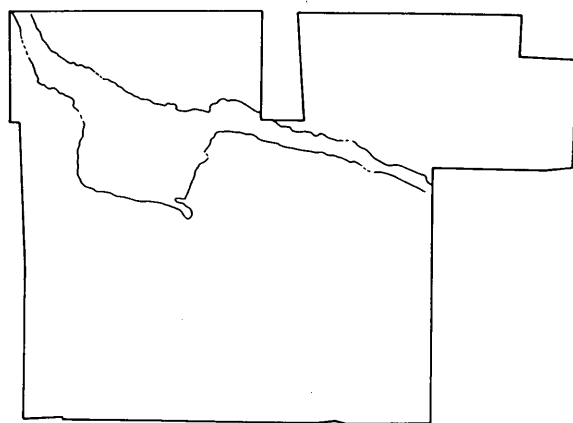
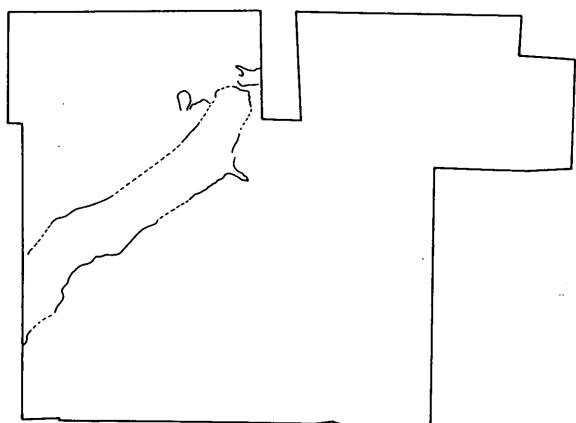


弥生時代前期



古墳時代後期





中世

近世



第129図 空港跡地遺跡E地区遺構変遷図

以上、本地区の遺構の変遷を軸に、本遺跡の有する史的意義について私見を披露した。しかしながら本遺跡についてはその大半の地区について報告書が刊行されておらず、また筆者の力量不足のため実証性の伴わない推測めいた議論に終始してしまった。導かれた結論には、まだまだ多くの検証と論証を必要とする。また今後順次刊行されていく本遺跡の報告書の中で、訂正されるべき点も多々あることと思われる。特に弥生時代後期から古墳時代前期の集落群の動向については、各集落の様相が不明なまま思いつくままに推論を重ねたが、B1微高地上の集落の様相によっては全く異なった論が成立する可能性もある。また「下川津B類」土器群の出現頻度の低下も、それがB2微高地西端の集落単位においてのみ認められる現象であるかもしれない。

さらに本地区より出土した人形土製品については、事実報告のみで考察を加えることができなかった。その呪的性格や時代性については、大山氏によって簡潔にまとめられており(大山1994)、そちらを参照していただきたい。大山氏の論を補足することがあるとすれば、それは本遺跡例が他の資料にない「家族」関係を表現している可能性がある点である。古墳時代前期の親族関係については、主に古墳からのアプローチが主流をしめており、家父長制の成立時期や双系制などを軸に議論がなされているようである。しかし古墳に葬られなかった階層の様相については、集落からの分析による以外には方法がない。本資料はそういった階層での具体例とすることができるが、その扱いについては、出土した人形がその全てではない点のもとより、本資料が当時のどういった階層の親族関係のどの範囲までを表現したものか、成人女性像3体の解釈の2点について、慎重に検討すべきと思われる。上記した諸点を含めて、今後資料の充実を待って再論したいと考えている。

#### 本文註

- (1) 林・坊城遺跡に西接する浴・松ノ木遺跡SD06出土の「下川津B類」土器について、調査担当者の山元敏裕氏は同様の作業を行っている。結果、出現頻度78.2%という数値が得られており、また出土土器の観察結果から本遺構は、後期後半の「下川津Ⅱ式」に併行するとされる(山元編1994)。しかし報告書に掲載された遺物には、明らかにこれに後出する後期終末の庄内式併行期の遺物を含んでおり、遺構の性格の点でも単一時期の遺構ではない。したがって上記出現頻度は、そうした時間幅をもった資料での数値であり、今回の検討からは除外しておくことにしたい。
- (2) 厳密には、後期後半でも終末に近いV期4(新)段階(大久保1996b)から、布留式古相併行の土器群と考えている。
- (3) 黒谷川郡頭遺跡において、これほどの高率を示すのは、現在提示されている資料では溝22に限られる。他の遺構では、讃岐東部とほぼ同様の数%に過ぎない。しかし両者の出現頻度は、高松平野中枢部からの実質的な距離に比例せず、また吉野川下流域における「東阿波型土器」の成立に、「下川津B類」土器の技術的影響が顕著に認められる点(大久保1990)を評価すれば、本文中に記した視点は有効性を持つと信ずる。

#### 文献註

奥田尚 1994「太田下・須川遺跡の土器の砂礫」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第



4冊 太田下・須川遺跡』香川県教育委員会他

大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』香川県教育委員会他

大久保徹也 1993「買田岡下遺跡」『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成4年度』香川県教育委員会他

大久保徹也 1995 a 「地形的環境」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 上天神遺跡』香川県教育委員会他

大久保徹也 1995 b 「上天神遺跡の集落構成」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 上天神遺跡』香川県教育委員会他

大久保徹也 1995 c 「上天神遺跡の「在地」土器と「搬入」土器」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 上天神遺跡』香川県教育委員会他

大久保徹也 1995 d 「上天神遺跡における石器石材の搬入状況」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 上天神遺跡』香川県教育委員会他

大久保徹也 1995 e 「基幹的灌漑水路と灌漑単位」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 上天神遺跡』香川県教育委員会他

大久保徹也 1995 f 「上天神遺跡の他系統「在地」土器」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 上天神遺跡』香川県教育委員会他

大久保徹也 1995 g 「上天神遺跡出土赤色顔料付着資料について」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 上天神遺跡』香川県教育委員会他

大久保徹也 1995 h 「讃岐地方における朱関連資料 -特に内面朱付着土器について-」『考古学ジャーナル No.394』ニュー・サイエンス社

大久保徹也 1996 a 「まとめ」『四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第25冊 中間西井坪遺跡Ⅰ』香川県教育委員会他

大久保徹也 1996 b 「各地域における弥生時代後期土器の様相 -讃岐-」『古代学協会四国支部第10回松山大会資料 弥生後期の瀬戸内海 -土器・青銅器・鉄器からみたその領域と交通-』

大山真充 1994「人形土製品についての覚書」『空港跡地遺跡発掘調査概報 平成5年度』香川県教育委員会他

金田章裕 1990「弘福寺領讃岐国山田郡田図の微地形表現 -東大寺開田地図との比較を通して-」『弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地域発掘調査概報Ⅲ』高松市教育委員会

木下晴一 1991「糸里型地割施工以後の微地形変化 -丸亀市飯野町付近の事例-」『香川地理学会会報』No.11

木下晴一 1995「下川津C類土器（仮称）について」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第十六冊 川津二代取遺跡』香川県教育委員会他

京都フィッシュン・トラック 1996「土壌中火山灰抽出分析結果報告」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 空港跡地遺跡Ⅰ』香川県教育委員会他

蔵本晋司 1995「香川県高松市三谷石舟古墳の再検討」『香川考古 第4号』香川考古刊行会

佐藤竜馬他 1993『空港跡地遺跡発掘調査概報 平成4年度』香川県教育委員会他

白石純 1995「上天神遺跡出土土器の胎土分析」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第

6冊 上天神遺跡』香川県教育委員会他

白石純 1996「中間西井坪遺跡出土土器・埴輪の胎土分析」『四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第25冊 中間西井坪遺跡Ⅰ』香川県教育委員会他

菅原康夫他 1983『萩原墳墓群 -鳴門市大麻町萩原所在-』徳島県教育委員会

菅原康夫 1987『黒谷川郡頭遺跡Ⅱ 昭和60年度発掘調査概報』徳島県教育委員会

高橋学 1992「高松平野の環境復元」『讃岐国弘福寺領の調査 弘福寺領讃岐国山田郡田岡調査報告書』高松市教育委員会

次山淳 1995「波状文と列点文 -布留形甕にみられる肩部文様の分類・系譜・分布-」『奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集 文化財論叢Ⅱ』同朋舎出版

本田光子 1994「野方中原遺跡出土の土器に付着した赤色顔料について」『野方久保遺跡Ⅱ』福岡市教育委員会

本田光子 1995「高松市上天神遺跡出土土器に付着している赤色顔料」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 上天神遺跡』香川県教育委員会他

松木武彦 1993「岡山平野における弥生～古墳時代の地域集団」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊 鹿田遺跡3』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

三辻利一 1990「下川津遺跡出土土器の蛍光X線分析」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』香川県教育委員会他

森格也 1995「高松平野における弥生時代の石器生産と流通」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 上天神遺跡』香川県教育委員会他

森下英治 1997「丸亀平野条里型地割の考古学的検討」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要 V』

森下友子 1994「胎土1類土器について」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 太田下・須川遺跡』香川県教育委員会他

森内秀造 1983「高坏の製作法について」『兵庫県文化財調査報告書第17冊 田多地小谷遺跡』兵庫県教育委員会

山下平重ほか 1992『空港跡地遺跡発掘調査概報 平成3年度』香川県教育委員会他

山田隆一 1988「近畿弥生社会における鉄器化の実体について」『網干善教先生華甲記念考古学論集』

山元敏裕編 1994『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第二冊 浴・松ノ木遺跡』高松市教育委員会他

## 参考文献

宮崎哲治 1993『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 林・坊城遺跡』香川県教育委員会他

山本英之他編 1993『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第一冊 浴・長池遺跡』高松市教育委員会他

山元敏裕編 1994『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第三冊 浴・長池Ⅱ遺跡』高松市教育委員会他

蔵本晋司他 1994『空港跡地遺跡発掘調査概報 平成5年度』香川県教育委員会他

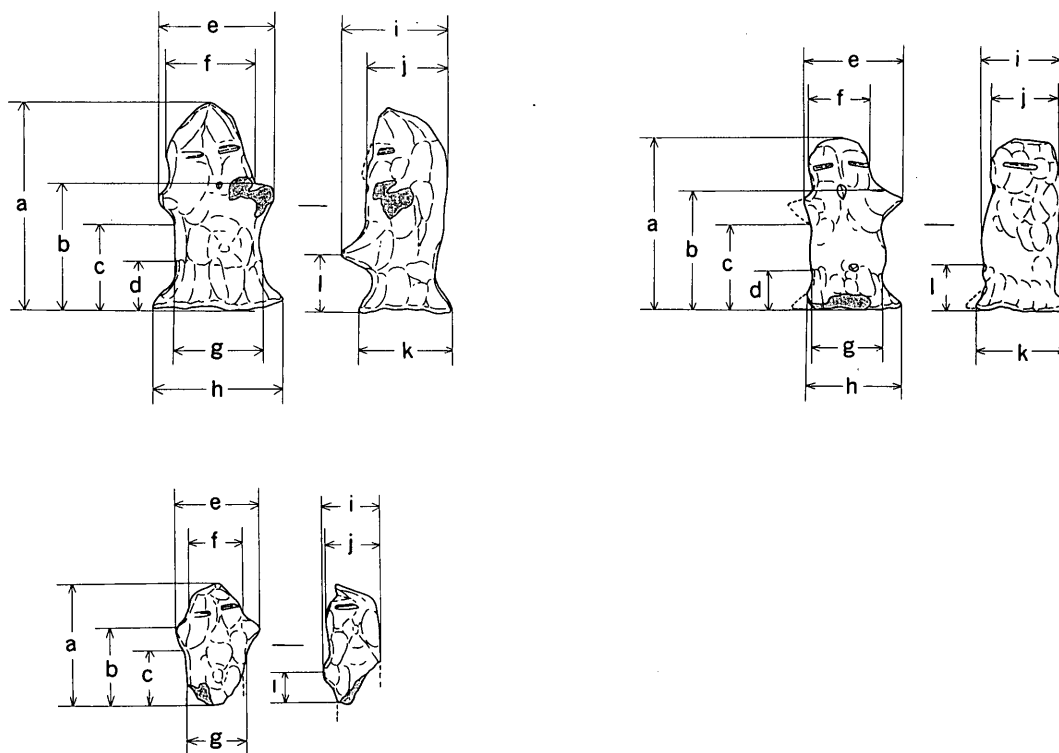
- 山下平重他 1994『高校新設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報平成5年度 多肥松林遺跡』香川県教育委員会他
- 北山健一郎 1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊 六条・上所遺跡』香川県教育委員会他
- 山元敏裕編 1995『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第四冊 井手東Ⅰ遺跡』高松市教育委員会他
- 山元敏裕編 1995『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第五冊 井手東Ⅱ遺跡』高松市教育委員会他
- 山本英之編 1995『高松市林町RT（加入者線多重伝送装置）設置に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 空港跡地遺跡（亀の町地区Ⅰ）』高松市教育委員会
- 山本英之編 1995『高松南部農業協同組合林支所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 空港跡地遺跡（亀の町地区Ⅱ）』高松市教育委員会
- 蔵本晋司 1995『空港跡地遺跡発掘調査概報 平成6年度』香川県教育委員会他
- 宮崎哲治他 1995『高校新設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報平成6年度 多肥松林遺跡』香川県教育委員会他
- 北山健一郎他 1995『高松土木事務所新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 多肥松林遺跡』香川県教育委員会他
- 西岡達哉他 1996『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 空港跡地遺跡Ⅰ』香川県教育委員会他
- 片桐孝浩 1997『四国工業技術研究所増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 空港跡地遺跡』香川県教育委員会他
- 若林邦彦 1997「中河内弥生中期土器にみる諸相 - 「生駒西麓型土器」のもつ意味 -」『考古学研究』第43巻第4号



# 遺物観察表

## 凡 例

1. 遺物観察表は、土器・石器・木器・軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・人形土製品・鉄器・貨幣に分けて作成した。各表ごとに挿図番号順に編集している。なお木製品の漆器碗については、その性格上土器観察表に掲載した。
2. 残存率は遺物の図化部分に占める実物の割合を示しており、完形品に対するそれではない。
3. 観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1992年版』を参照した。しかし、一部陶磁器釉薬の色調についてはこの限りではない。
4. 土器胎土は、主に30倍ライトスコープを用いて、石英・雲母・角閃石・赤色粒についてのみ、その粒径や多寡を観察し記録した。また含まれる石粒の大きさが0.5mm以下を「微」、同0.6～1.0mmを「細」、同1.1～3.9mmを「中」、同4.0mm以上を「粗」と表記した。さらにその多寡については、「多」・「普」・「少」の3段階に区分したが、それは観察者の主観にもとづくものである。
5. 土器観察表中の法量について、復元される口径等に焼成時のひずみなどがあり、確度が落ちるものについては（ ）を付して記載した。
6. 各観察表中の単位については、大きさはcmで、重さはgでそれぞれ統一した。
7. 人形土製品観察表の計測部位は下記のとおりである。





土器観察表

報告番号	神図	図版	器種	口径	器高	底径	胎土	色	調	端部形態	外面調整	内面調整	残存率	備考
SDe77下層	1		弥・壺				中・多、石英含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい褐	黄 褐	外反して閉く。口縁部は四角く納める。端部付近内面に断面扇型刻み突帯を貼付する。	口縁；ヨコナテ 端部；ヘラ描山形文 一条の沈線の上段に重弧文？を施す。	マメツ・刻み突帯 ナテ	細片	
SDe77上層	2		弥・壺				中・多、石英含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい褐	黄 褐	底面は安定した平底。	体部；板ナテ 底面；ナテ？	板ナテ	7/8	底部焼成後穿孔
SDe77下層	3		弥・？		6.9		中・多、石英含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい褐	黄 褐	底面は安定した平底。	体部；指オサエ・ナテ？底面；ナテ？	指オサエ・ナテ？	4/8	外面残？付着
SDe77下層	4		弥・？		7.0		粗・多、石英含む	(外)にぶい褐 (内)にぶい褐	褐	底面は安定した平底。	体部；ナテの後斜ミガキ底面；ナテ？	マメツ	2/8	
SDe77上層	5		弥・？		7.2		粗・多、石英・角 閃石を含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい褐	黄 褐	底面は安定した平底。体部の器壁に比して底面は極端に厚い。	指オサエ・ハクリ著	ハクリ	7/8	外面残付着
SDe77下層	6	49	弥・？		8.4		粗・多、石英含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい褐	黄 褐	底面は安定した平底。口縁部は直立気味に立ち上がる。体部より強く折り返して、口縁部は強く開く。端部は四角く納めつつ、下方に小さく突出する。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	1/8以下	
SDe05	8		弥・大形鉢	29.8			中・多、石英・角 閃石、金華母・赤色を含む	(外)灰白 (内)にぶい黄	灰白 黄	張り強い体部より強く折り返し、口縁部は直立気味に立ち上がる。端部は丸く納め上げる。	マメツ・ハクリ	指オサエ・マメツ・ハクリ	4/8	
SDe08	9	49	弥・無頸壺	6.6	7.2	2.3	粗・多、石英含む	(外)明褐 (内)明褐	明褐	内傾して立ち上がる頸部より、口縁部は強く折り返して開く。端部は小さく納め上げる。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	2/8	
SDe08	10		弥・広口壺	13.4			中・多、石英・角 閃石、金華母・赤色を含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい褐	黄 褐	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく納め上げる。	口縁部；マメツ・ハクリ 体部；縦ハケ	マメツ・ハクリ	2/8	
SDe08	11		弥・壺	15.5			粗・多、石英・角 閃石、金華母・赤色を含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい褐	黄 褐	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく納め上げる。	ヨコナテ	ヨコナテ・凹線3条	3/8	
SDe11	12		弥・広口壺	22.4			中・多、石英・角 閃石、金華母・赤色を含む	(外)黒 (内)黒	黒	口縁部は強く折れて、水平に近く開く。端部は上方へ納め上げ、内面に鈍い凹線。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	1/8	
SDe11	13		弥・壺	13.2			細・普、石英・角 閃石、金華母・赤色を含む	(外)黄 (内)黄	黄	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく納め上げる。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	2/8	
SDe11	14		弥・壺	15.4			中・多、石英・角 閃石、金華母・赤色を含む	(外)黒 (内)黒	黒	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく納め上げる。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	2/8	
SDe11	15		弥・？		5.0		細・普、石英・角 閃石、金華母・赤色を含む	(外)黒 (内)黄	黒 黄	底面は突出した平底。	縦ケズリ	縦ケズリ	3/8	外面残付着
SDe11	16		弥・鉢？		2.6		中・少、石英含む	(外)灰白 (内)黄	灰白 黄	大きく突出した上げ底縁の底面。	体部；マメツ・ハクリ 底面；指オサエ	マメツ・ハクリ	4/8	
SDe11	17		弥・脚		16.8		中・多、石英・角 閃石、赤色を含む	(外)明褐 (内)明褐	明褐	脚底縁は縁やかに開き、端部は肥厚しつつ、上方に小さく突出する。	脚底部；マメツ 端部；鈍い凹線2条	横・斜ケズリ	7/8	
SDe18	18		弥・広口壺？	14.2			細・多、石英・角 閃石、金華母・赤色を含む	(外)黄 (内)黄	黄	直立して立ち上がる頸部より、口縁部は強く折り返して外反気味に開く。端部は上方へ納め上げる。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	1/8	
SDe18	19		弥・壺	14.2			粗・多、石英・角 閃石、金華母・赤色を含む	(外)明赤 (内)明赤	明赤	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく納め上げる。	口縁；ヨコナテ 体部；マメツ・ハクリ	口縁；マメツ・ハクリ 体部；マメツ・ハクリ	1/8	
SDe18	20		弥・？		2.9		中・多、石英・角 閃石、赤色を含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	黄 褐	底面は小さく平底。	体部；指オサエ？・マメツ 底面；指オサエ・ナテ	マメツ・ハクリ	底部完存	
SDe19	21		弥・？		5.1		粗・多、石英・金華母・赤色を含む	(外)にぶい黄 (内)黒	黄 黒	底面縁部を小さく突き出し、厚めの底面。底面は僅かに凹む。	体部；マメツ・ハクリ 底面；指オサエ・ナテ	体部；縦板ナテ？ 底面；指オサエ	底部完存	
SDe19	22	49	弥・広口壺	12.6 (29.65)			粗・普、石英・角 閃石、金華母・赤色を含む	(外)黄 (内)黄	黄	直立して立ち上がる頸部より、口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく納め上げる。底面は平らだが体部との境は不明瞭。	マメツ	頸・体部上半；指オサエ 体部下 半；ケズリ	3/8	
SDe25	23		弥・広口壺	17.6			粗・多、石英・角 閃石、金華母含む	(外)明赤 (内)明赤	明赤	口縁部は外反気味に開き、端部は下方へ引き出しつつ上方にも小さく突出する。	ハクリ	ハクリ	1/8以下	口縁部焼成面穿孔
SDe25	24	49	弥・大形壺	18.0			中・普、角閃石・石英、赤色を含む	(外)褐 (内)褐	褐	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上方へ納め上げつつ下方にも小さく突出する。	口縁；鈍い凹線2～3条 体部；マメツ・ハクリ	口縁；マメツ・ハクリ 体部；指オサエ・マメツ	2/8	
SDe25	25		弥・？		6.6		中・普、石英・角 閃石、金華母・赤色を含む	(外)暗褐 (内)黄	暗褐 黄	底面は突出した平底。	マメツ・ハクリ	指オサエ・ハクリ	2/8	

報告書 番号	挿図	図版	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形状	外部調整	内部調整	残存率	備考
SDc25	26	弥・脚	弥・脚		15.0		中・多、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)明褐 (内)明褐	脚縁部は縷やかに外反気味に開く。端部は下方へ引き出しつつ、上方にも小さく突出する。	脚縁部；マメツ・ハクリ 鋭い凹線2条	横ケズリ	1/8	
SDc26	27	弥・直口壺	弥・直口壺	13.8			中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口縁部は外反して開き、端部を上方に小さく構み出す。	マメツ	マメツ・3個1組の円形刺突文	1/8	
SDc26	28	弥・壺	弥・壺	12.4		6.6	中・多、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は下方へ引き出しつつ上方へ引き出す。	端部；鋭い凹線2条 マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	1/8	
SDc32	29	弥・?	弥・?				中・多、石英・角 閃石・赤色粒・黒 色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	底部平底。	マメツ・ハクリ	指オサエ・ハクリ	6/8	
SDc56	30	弥・脚	弥・脚		14.4		中・多、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)明褐 (内)明褐	脚縁部は縷やかに外反気味に開き、端部は厚いつつ下方へ引き出す。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	1/8	
SDc59	31	弥・短頸壺?	弥・短頸壺?	12.4			中・多、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口頸部は縷やかに外反して開く。端部は下方へ引き出しつつ上方にも小さく突出する。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	2/8	
SDc59	32	弥・壺	弥・壺	15.0			中・多、石英・角 閃石・黒雲母含む	(外)明褐 (内)明褐	口頸部は強く折れて短く開く。端部は上方に小さく構み出す。	マメツ・ハクリ	口頸部；マメツ・ハクリ 指オサエ・マメツ	2/8	
SDc59	33	弥・壺	弥・壺	15.2			中・多、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)明褐 (内)にぶい黄澄	口頸部は強く折り返して短い。端部は上下に構み出す。	端部；鋭い凹線2条 マメツ・ハクリ	口頸部；マメツ・ハクリ 指オサエ・マメツ	1/8	
SDc59	34	弥・壺	弥・壺	14.6			中・多、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)明褐 (内)にぶい黄澄	口頸部は強く折り返して短い。端部は上方へ構み出せる。	端部；鋭い凹線2条 マメツ・ハクリ	口頸部；マメツ・ハクリ 指オサエ・マメツ	2/8	
SDc59	35	弥・壺	弥・壺	15.0			中・多、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口頸部は強く折り返して短く開く。端部は小さく構み上げる。	端部；鋭い凹線2条 マメツ・ハクリ	口頸部；マメツ・ハクリ 縦ケズリ	1/8	
SDc59	36	弥・脚	弥・脚				中・多、石英・角 閃石含む	(外)灰褐 (内)海褐	脚部は縷やかに開く。	マメツ・ハクリ	マメツ	7/8	
SDc59	37	弥・?	弥・?		5.5		中・多、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)黒褐 (内)黒褐	底部はやや突出した平底。	ハクリ	ハクリ	2/8	検出後?被熱
SDe115上層	39	弥・広口壺	弥・広口壺	19.4			中・普、石英・角 閃石・雲母含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口頸部は縷やかに外反して開き、端部は粘土帯を付して垂下口縁をなす。	端部；凹線2-3条の後1条1対 の短凹線 頸部；縦ハケ	マメツ・ハクリ、端部付近に円形 浮文	1/8	
SDe115上層	40	弥・広口壺	弥・広口壺	27.0			中・多、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口縁部は外側より鋭く折れ、水平に近く開く。端部は構み上げつつ下方にも引き出す。	端部；凹線2条 口縁；ヨコナデ 頸部；縦ハケの後2部ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ 頸部；横ケズリ?	1/8	
SDe115上層	41	弥・広口壺	弥・広口壺	27.6			中・多、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口縁部は強く折れて水平に近く開く。端部は上方に構み上げ、内面が鋭く凹線状に凹む。	端部；鋭い凹線 口縁；マメツ・ ハクリ	口頸部；マメツ・ハクリ	1/8	
SDe115上層	42	土・二重口縁 壺	土・二重口縁 壺	22.3			中・普、石英・角 閃石含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口縁部中位で鋭く屈曲して、上半部は大きく外反して開く。端部は四角く納める。	ヨコナデ?、マメツ	ヨコナデ?、マメツ	1/8	
SDe115上層	43	弥・無頸壺	弥・無頸壺	9.0			中・少、石英・角 閃石・雲母含む	(外)黒褐 (内)黒褐	張り強い頸部より口縁部は小さく折り返し丸く納める。肩部に凹孔1。	口縁；ヨコナデ・マメツ 体部； マメツ	口縁；ヨコナデ 体部；横板ナ デ?	1/8	
SDe115上層	44	弥・壺	弥・壺	12.4			細・少、石英・赤 色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口頸部は鋭く折れ、やや内湾気味に開く。端部は鋭く構み上げる。	ヨコナデ	ヨコナデ、マメツ著	1/8以下	口縁部外面張付 着
SDe115上層	45	弥・壺	弥・壺	12.0			中・普、石英・赤 色粒含む	(外)黄澄 (内)黄澄	口縁部は強く折れ短い。端部は内上方へ鋭く構み上げる。	口頸部；ヨコナデ 体部；縦・斜 ハケ	口頸部；ヨコナデ 体部；指オサ エ	1/8	
SDe115上層	46	弥・壺	弥・壺	14.2			中・普、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口縁部はやや強く折れて短い。端部は鋭く構み上げる。	口頸部；ヨコナデ 体部；斜ハケ	口頸部；ヨコナデ 体部；マメツ	1/8	口縁部外面に縦 付着
SDe115上層	47	土・壺	土・壺	12.0			中・普、石英・赤 色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口頸部は縷やかに折れ、内湾して立ち上がり端部近くで外反して開く。端部は丸く納める。	口頸部；ヨコナデ 体部；斜ハケ マメツ	口頸部；ヨコナデ 体部；マメツ 指ナデ	7/8	口縁部、体部下 半外面張付着
SDe115上層	48	弥・壺	弥・壺	12.6			中・普、石英・赤 色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口頸部は強く折り返し、外反気味に短く開く。端部は四角く納める。	口縁；マメツ・ハクリ 体部；縦 ハケ・ハクリ著	口頸部；マメツ・ハクリ 体部； 斜ハケ・ハクリ著	2/8	
SDe115上層	49	弥・壺	弥・壺	16.0			中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口頸部は縷やかに折れて外反気味に開く。端部は小さく構み上げる。	口頸部；ヨコナデ 体部；縦・斜 ハケ・マメツ	口頸部；斜ハケの後一部ナデ 体部；縦ケズリの後縦・斜ハケ・ナ デ	6/8	
SDe115上層	50	土・壺	土・壺	12.8			粗・多、石英・黒 雲母・赤色粒含む	(外)にぶい赤褐 (内)黒褐	口縁部は鋭く折れ、外反気味に開く。端部は外方へ引き出しつつ、丸く納める。	口縁；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口縁；横ハケ 体部；ナデ	2/8	体部外面一部張 付着
SDe115上層	51	弥・脚	弥・脚				中・普、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	脚柱部は凹筒状を呈し、やや膨らみとなる。	沈線、マメツ・ハクリ	マメツ	8/8	
SDe115上層	52	弥・高坏	弥・高坏	23.3			中・普、石英・角 閃石含む	(外)黄澄 (内)黄澄	口縁部中位で屈曲して、上半部は外反気味に立ち上がる。端部は外方に引き出しつつ、頂部に小さく凹む。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	1/8以下	



報告書 通称番号	押印	図版	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	端部	形状	外側調整	内側調整	残存率	備考
SDel15上層	53		土・高坏	13.4			粗・普、石英・角 閃石、赤色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	やや深い坏部形態。上半部は直線状に長く延び、 端部は鈍く尖る。	上半部は直線状に長く延び、 端部は鈍く尖る。	環ハケ、マメツ著 環ハケ?、マメツ著	マメツ	3/8	
SDel15上層	54	51	土・高坏	14.9			粗・少、石英・角 閃石含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	坏部は中位で屈曲し、上半部はやや外反気味に開く。 端部は鈍く尖る。	坏部は中位で屈曲し、上半部はやや外反気味に開く。 端部は鈍く尖る。	環ハケの放射状ミガキ 環ハケの放射状ミガキ	環ハケの放射状ミガキ	3/8	
SDel15上層	55		弥・鉢?	19.4			中・多、石英・角 閃石、赤色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	やや内湾気味に開く。端部は丸く鈍る。	やや内湾気味に開く。端部は丸く鈍る。	環ハケの放射状ミガキ 環ハケの放射状ミガキ	環ハケの放射状ミガキ	1/8	
SDel15上層	56	50	弥・小形鉢	8.4	5.5	3.0	中・普、石英・角 閃石含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	突出した厚めの底面より内湾気味に立ち上がり、口 縁端部は外方に小さく引き出しつつ鈍く尖る。	突出した厚めの底面より内湾気味に立ち上がり、口 縁端部は外方に小さく引き出しつつ鈍く尖る。	環ハケの放射状ミガキ 環ハケの放射状ミガキ	環ハケの放射状ミガキ	6/8	
SDel15上層	57	50	須・环蓋	12.8	(4.3)		中・少、石英含む	(外)灰白 (内)灰	口縁部は直立し、端部は外側に小さく鈍み出して、 器面に凹面。天井部はやや平たい。	口縁部は直立し、端部は外側に小さく鈍み出して、 器面に凹面。天井部はやや平たい。	環ハケの放射状ミガキ 環ハケの放射状ミガキ	環ハケの放射状ミガキ	1/8	
SDel15中層	58	50	土・広口壺	13.8			細・普、石英・角 閃石、金葉母、赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	内傾する頸部より強く折れて、口縁部は内湾気味に 開く。端部は鈍く鈍み上げる。	内傾する頸部より強く折れて、口縁部は内湾気味に 開く。端部は鈍く鈍み上げる。	環ハケの放射状ミガキ 環ハケの放射状ミガキ	環ハケの放射状ミガキ	1/8	
SDel15中層	59		弥・広口壺	13.8			中・普、石英・角 閃石、金葉母、赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	内傾する頸部より強く折れて、口縁部は内湾気味に 開く。端部は鈍く鈍み上げる。	内傾する頸部より強く折れて、口縁部は内湾気味に 開く。端部は鈍く鈍み上げる。	環ハケの放射状ミガキ 環ハケの放射状ミガキ	環ハケの放射状ミガキ	2/8	
SDel15中層	60		弥・広口壺	18.4			粗・普、石英・角 閃石、金葉母、赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	内傾して立ち上がる頸部より強く折れて、口縁部は 水平気味に開く。端部は鈍く鈍み上げる。	内傾して立ち上がる頸部より強く折れて、口縁部は 水平気味に開く。端部は鈍く鈍み上げる。	環ハケの放射状ミガキ 環ハケの放射状ミガキ	環ハケの放射状ミガキ	2/8	口縁部は中位に僅かに麻付着
SDel15中層	61		弥・広口壺	16.0			中・多、石英・角 閃石、金葉母、赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	僅かに内傾する頸部より強く折れて、口縁部は外反 気味に開く。端部は上方へ鈍み上げる。	僅かに内傾する頸部より強く折れて、口縁部は外反 気味に開く。端部は上方へ鈍み上げる。	環ハケの放射状ミガキ 環ハケの放射状ミガキ	環ハケの放射状ミガキ	2/8	
SDel15中層	62		弥・広口壺	16.0			粗・普、石英・角 閃石、金葉母、赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	直立気味の頸部より強く折り返して、口縁部は水平 に開く。端部は鈍く鈍み上げる。	直立気味の頸部より強く折り返して、口縁部は水平 に開く。端部は鈍く鈍み上げる。	環ハケの放射状ミガキ 環ハケの放射状ミガキ	環ハケの放射状ミガキ	1/8	
SDel15中層	63	50	弥・広口壺	15.6			中・普、石英・角 閃石、金葉母、赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	僅かに外傾する頸部より強く折り返して、口縁部は 水平に開く。端部は鈍く鈍み上げる。	僅かに外傾する頸部より強く折り返して、口縁部は 水平に開く。端部は鈍く鈍み上げる。	環ハケの放射状ミガキ 環ハケの放射状ミガキ	環ハケの放射状ミガキ	4/8	
SDel15中層	64	50	弥・広口壺	18.6			中・普、石英・角 閃石、金葉母、赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	直立気味の頸部より強く折れて、口縁部は水平に近 く開く。端部は鈍く鈍み上げる。	直立気味の頸部より強く折れて、口縁部は水平に近 く開く。端部は鈍く鈍み上げる。	環ハケの放射状ミガキ 環ハケの放射状ミガキ	環ハケの放射状ミガキ	4/8	
SDel15中層	65		弥・広口壺	15.3			中・少、石英含む	(外)灰黄 (内)淡黄	直立気味の頸部より強く折れて、口縁部は僅かに内湾 気味に開く。端部は四角く鈍る。	直立気味の頸部より強く折れて、口縁部は僅かに内湾 気味に開く。端部は四角く鈍る。	環ハケの放射状ミガキ 環ハケの放射状ミガキ	環ハケの放射状ミガキ	2/8	
SDel15中層	66	50	弥・広口壺	18.0			粗・多、石英・角 閃石、赤色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	直立気味の頸部より強く折れて、口縁部は僅かに内湾 気味に開く。端部は四角く鈍る。	直立気味の頸部より強く折れて、口縁部は僅かに内湾 気味に開く。端部は四角く鈍る。	環ハケの放射状ミガキ 環ハケの放射状ミガキ	環ハケの放射状ミガキ	頸部は僅かに麻付着	
SDel15中層	67		弥・広口壺	21.0			中・多、石英含む	(外)淡黄 (内)淡黄	口縁部は鋭く外反して開き、端部は四角く鈍る。僅 かに下方に引き出す。	口縁部は鋭く外反して開き、端部は四角く鈍る。僅 かに下方に引き出す。	環ハケの放射状ミガキ 環ハケの放射状ミガキ	環ハケの放射状ミガキ	2/8	
SDel15中層	68		弥・広口壺				粗・少、石英・角 閃石?、赤色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	頸部はやや内傾気味に立ち上がり、基部に断面短形 の刻み目突帯を付す。	頸部はやや内傾気味に立ち上がり、基部に断面短形 の刻み目突帯を付す。	環ハケの放射状ミガキ 環ハケの放射状ミガキ	環ハケの放射状ミガキ	2/8	
SDel15中層	69	51	弥・広口壺	12.2	16.8		粗・普、石英含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	直立気味に立ち上がる頸部より強く折れて、口縁部 は鋭く開く。端部は四角く鈍る。端部は上方に鈍 み上げる。	直立気味に立ち上がる頸部より強く折れて、口縁部 は鋭く開く。端部は四角く鈍る。端部は上方に鈍 み上げる。	環ハケの放射状ミガキ 環ハケの放射状ミガキ	環ハケの放射状ミガキ	7/8	体部外面中位下 半麻付着
SDel15中層	70		土?・広口壺	18.0			中・少、石英・角 閃石含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は鈍く屈曲して水平に近く開き、立上り部は 強く外反する。	口縁部は鈍く屈曲して水平に近く開き、立上り部は 強く外反する。	環ハケの放射状ミガキ 環ハケの放射状ミガキ	環ハケの放射状ミガキ	1/8	
SDel15中層	71		弥・二重口 壺				中・普、石英・角 閃石、赤色粒含む	(外)淡黄 (内)淡黄	外傾気味に立ち上がる頸部より鈍く屈曲して、口縁 部は外反して大きく開く。	外傾気味に立ち上がる頸部より鈍く屈曲して、口縁 部は外反して大きく開く。	環ハケの放射状ミガキ 環ハケの放射状ミガキ	環ハケの放射状ミガキ	2/8	
SDel15中層	72	50	土?・二重口 壺				中・普、石英・角 閃石、赤色粒含む	(外)灰黄 (内)淡黄	口縁部はやや鋭く折れ、外反気味に短く開く。端部 は肥厚し、上方に鈍み上げる。下方にも突出する。	口縁部はやや鋭く折れ、外反気味に短く開く。端部 は肥厚し、上方に鈍み上げる。下方にも突出する。	環ハケの放射状ミガキ 環ハケの放射状ミガキ	環ハケの放射状ミガキ	2/8	
SDel15中層	73	51	弥・甕	14.0			中・普、石英・角 閃石、金葉母、赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部はやや鋭く折れ、外反気味に短く開く。端部 は上方に鈍み上げる。下方にも突出する。	口縁部はやや鋭く折れ、外反気味に短く開く。端部 は上方に鈍み上げる。下方にも突出する。	環ハケの放射状ミガキ 環ハケの放射状ミガキ	環ハケの放射状ミガキ	1/8	
SDel15中層	74		弥・甕	16.2			中・普、石英・角 閃石、金葉母、赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部はやや鋭く折れて短く開く。端部は直立し、四角 く鈍る。僅かに鈍み上げる。	口縁部はやや鋭く折れて短く開く。端部は直立し、四角 く鈍る。僅かに鈍み上げる。	環ハケの放射状ミガキ 環ハケの放射状ミガキ	環ハケの放射状ミガキ	1/8	
SDel15中層	75		弥・甕	13.6			中・普、石英・角 閃石、金葉母、赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は鋭く折れて短く開く。端部は直立し、四角 く鈍る。僅かに鈍み上げる。	口縁部は鋭く折れて短く開く。端部は直立し、四角 く鈍る。僅かに鈍み上げる。	環ハケの放射状ミガキ 環ハケの放射状ミガキ	環ハケの放射状ミガキ	1/8	

報告番号	挿入図	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	端部	端部形状	外面調整	内面調整	残存率	備考
SDe115中層	76	弥・甕	11.2			中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口頸部は強く折れ返り、端部は丸く納める。	口縁部は丸く納める。	口縁；ナア 体部；縦、斜ハケ	口縁；横ハケ 体部；下半縦ケズ の後に上半部斜ハケ	1/8	口縁部 体部下 半外面保存着
SDe115中層	77	弥・甕	15.6			細・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)赤褐色にぶい 黄褐色(内)赤褐色 ぶい黄褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく揃 み上げる。	口縁部は小さく揃 み上げる。	ヨコナア	ヨコナア	1/8以下	口縁部内面及び 端部に赤色顔料 付着
SDe115中層	78	弥・甕	12.8			細・少、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口頸部は強く折り返して短い。端部は小さく揃 み上げる。	口頸部は小さく揃 み上げる。	口頸部；ヨコナア 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナア	1/8以下	
SDe115中層	79	弥・甕	15.1			中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)褐灰 (内)にぶい黄褐色	口頸部は強く折り返してやや短い。端部は鈍く揃 み上げる。	口頸部は鈍く揃 み上げる。	口頸部；ヨコナア 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナア 体部；指オサ エ・ナア	2/8	口縁部外面保存 着
SDe115中層	80	弥・甕	13.4			中・多、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口頸部は強く折れ、水平に短く開く。端部は小さ く揃み上げる。	口頸部は小さく 揃み上げる。	口頸部；ヨコナア 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナア 体部；指オサ エ・ナア	1/8	口縁部外面備か に保存着
SDe115中層	81	弥・甕	14.6			細・多、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口頸部は強く折り返し短い。端部は鈍く揃 み上げる。	口頸部は鈍く揃 み上げる。	口頸部；ヨコナア 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナア 体部；指オサ エ・マメツ著	1/8	体部外面保存着
SDe115中層	82	弥・甕	14.6			中・多、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)明赤褐色 (内)明赤褐色	口縁部は強く折れ返り短い。端部は小さく揃 み上げる。	口縁部は小さく揃 み上げる。	口頸部；ヨコナア 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナア 体部；指オサ エ・マメツ著	1/8	
SDe115中層	83	弥・甕	12.2			中・少、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)灰黄 (内)灰黄	口頸部は強く折れて、外反気味に短く開く。端部は 小さく揃み上げる。	口頸部は短く開く。端部は 小さく揃み上げる。	口頸部；ヨコナア 体部；斜ハケ	口頸部；ヨコナア 体部；縦ハケ	2/8	
SDe115中層	84	弥・甕	14.6			中・少、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい褐 (内)にぶい褐	口縁部は強く折り返して短い。端部はやや鋭く揃 み上げる。	口縁部はやや鋭く揃 み上げる。	口頸部；ヨコナア 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナア 体部；縦ハケ	2/8	体部下外面備 かに保存着
SDe115中層	85	弥・甕	15.8			粗・少、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折り返して短い。端部は揃 み上げる。	口縁部は揃 み上げる。	口頸部；ヨコナア 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナア 体部；指オサ エ・ナア	1/8以下	
SDe115中層	86	弥・甕	16.2			中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れ、端部は四角く納め つ。	口縁部は四角く納め つ。	口頸部；ヨコナア 体部；縦、斜 ハケ	口頸部；ヨコナア 体部；上位横 板ナア、下位横板ナア	1/8以下	
SDe115中層	87	弥・甕	17.6			中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折り返して水平に開く。端部は四角 く納める。	口縁部は四角く 納める。	口頸部；ヨコナア 体部；縦、斜 ハケ	口頸部；ヨコナア 体部；縦、斜 ハケ	2/8	
SDe115中層	88	弥・甕	14.4			中・少、石英・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折り返し、外反気味に開く。端部は四 角く納める。	口縁部は四 角く納める。	口頸部；ヨコナア 体部；縦、斜 ハケ	口頸部；ヨコナア 体部；ナア	2/8	外面保存着
SDe115中層	89	弥・甕	15.8			粗・少、石英含む	(外)灰黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口頸部は強く折れて、外反気味に開く。端部は小 さく揃み上げる。	口頸部は小 さく揃み上げる。	口頸部；ヨコナア 体部；斜ハケ	口頸部；ヨコナア 体部；ナア	1/8	口縁部外面保存 着
SDe115中層	90	弥・甕	13.8			中・少、石英・赤 色粒含む	(外)淡黄 (内)淡黄	口頸部は強く折れ、外反気味に開く。端部は四角 く納めつ。	口頸部は四角く 納めつ。	口頸部；ヨコナア 体部；縦、斜 ハケ	マメツ・ハクリ	2/8	
SDe115中層	91	弥・甕	15.2			粗・普、石英・金 雲母・赤色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れ、外反して開く。端部は四角く 納めつ。	口縁部は四角く 納めつ。	口頸部；ヨコナア 体部；縦、斜 ハケ	マメツ・ハクリ	1/8	
SDe115中層	92	土・甕	15.6			中・少、石英含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口頸部は強く折れ、外反気味に開く。端部は外反 して外方に引き出し、頂部に平坦面。	口頸部は外反 して外方に引き出し、頂部に平坦面。	ヨコナア、マメツ著	ヨコナア、マメツ著	2/	
SDe115中層	93	弥・甕	6.6			中・普、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)褐灰 (内)褐灰	口縁部は強く折れて極めて短い。端部は四角く納 める。	口縁部は四角く納 める。	口頸部；ヨコナア 体部；縦ハ ケ？、マメツ・ハクリ	口頸部；ヨコナア 体部；下位縦ケ ズリ、上位縦ハケの後、中位に横 板ナア	1/8以下	
SDe115中層	94	弥・？		5.3		粗・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)褐 (内)明褐	やや厚めの平底。		体部；縦ハケ 底面；ハケ？の後 ナア	縦ケズリ	6/8	外面黒斑
SDe115中層	95	弥・？		3.4		中・普、石英含む	(外)灰黄 (内)淡黄	かなり厚めの平底。		体部；タタキメ 底面；ナア？	横ハケ	底部ほぼ 完存	外面黒斑
SDe115中層	96	弥・高坏	28.8			中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい赤褐色 (内)明赤褐色	外反して開く口縁部。端部は外方に引き出し、つ つ、内側にも小さく突出する。	外反して開く口縁部。端部は外方に引き出し、つ つ、内側にも小さく突出する。	ヨコナア	ヨコナア？、マメツ	1/8以下	
SDe115中層	97	弥・高坏	22.6			中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れ、外反して開く。端部は丸く納 めつ。	口縁部は外反して開く。端部は 丸く納めつ。	上半部；ヨコナア 下半部；横ケ ズリ、マメツ	上半部；ヨコナア 下半部；ヨコ ナアの後ミガキ	1/8	
SDe115中層	98	弥・高坏	21.8			中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れ、外反して開く。端部は丸く納 めつ。	口縁部は外反して開く。端部は 丸く納めつ。	上半部；ヨコナア 下半部；横ケ ズリ、マメツ	上半部；ヨコナア 下半部；ヨコ ナア？	1/8	
SDe115中層	99	弥・高坏	23.2			中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れ、外反して開く。端部は丸く納 めつ。	口縁部は外反して開く。端部 は丸く納めつ。	上半部；ハクリ 下半部；横ケ ズリ、ハクリ著	上半部；ヨコナア 下半部；ヨコ ナアの後分割ミガキ	1/8	
SDe115中層	100	弥・高坏	18.1			中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい褐 (内)にぶい褐	口縁部は強く折れ、外反して開く。端部は丸く納 めつ。	口縁部は丸く 納めつ。	上半部；ヨコナア 下半部；横ケ ズリ	ヨコナア、鈍い凹線状の段	1/8	

種番 遺構番号	挿図	図版	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	端部形態	外面調整	内面調整	残存率	備考
SDe115中層 101		弥・高坏		19.0			中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	坏中で屈曲して上半部は外反して開く。端部は丸く納め、内面に鈍いサシ面。	上半部：ヨコナデ、状線状の段 下半部：ヨコナデの後ミガキ	上半部：ヨコナデ、状線状の段 下半部：ヨコナデの後ミガキ	1/8	下半部外面に 黒斑
SDe115中層 102		弥・高坏		13.9			中・普、石英・角 閃石・金雲母、赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	坏部中位で屈曲し、上半部は外反して開く。端部は鈍く尖り、内面に鈍い状線状の段。	上半部：ヨコナデ 下半部：ミガキ	ヨコナデ？、マメツ	1/8	
SDe115中層 103		弥・脚			13.4		粗・普、石英・角 閃石・赤色 粒含む	(外)にぶい褐色 (内)にぶい褐色	脚部は緩やかに開き、端部は厚しつ下方に引き出し、上方にも積み上げる。	端部：鈍い凹線 脚部：マメツ・ハクリ	横ナズリ	1/8	
SDe115中層 104		弥・脚			16.4		中・普、石英・角 閃石・金雲母、赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	脚部はやや内湾気味に開き、端部は四角く納めつつ僅かに積み上げる。	ヨコナデの後横ハケ	横ナズリ	1/8	
SDe115中層 105		弥・脚			21.8		中・普、石英含む	(外)浅黄褐色 (内)灰白	脚部中位に段を有し、外反して開く。端部は丸く納める。	縦ミガキ	マメツ・ハクリ	1/8	
SDe115中層 106		弥・脚			13.6		中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	脚部より緩く屈曲して、端部は直線状に開く。端部は四角く納める。	脚柱部：マメツ・ハクリ 脚部：縦ハケ	脚柱部：マメツ 脚部：縦ハケ	1/8	縦部に小田孔の 透し孔5
SDe115中層 107		土・高坏					中・少、石英・角 閃石？赤色粒含む	(外)浅黄褐色 (内)浅黄褐色	脚柱部より鈍く折れて、裾部は内湾気味に開く。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ 脚柱部： 横ナズリ 脚部：マメツ・ハクリ	3/8	
SDe115中層 108		弥・脚			11.4		中・普、石英含む	(外)にぶい黄褐色 (内)灰黄褐色	裾部は強く屈曲して、内湾気味に開き、端部は丸く納める。	脚部：メントリの後縦ハケ 脚部：縦ハケ	横ナズリ 脚部：ヨコナデ	8/8	外面一部黒付着
SDe115中層 109		弥・鉢		17.4			細・少、石英含む	(外)にぶい褐色 (内)にぶい褐色	内湾気味に開く体部より、口縁部は緩く折れて短い。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	1/8	
SDe115中層 110	51	弥・小形鉢		9.0			中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)灰黄褐色 (内)灰黄褐色	内湾気味に立ち上がり、口縁部は四角く納めるか、丸く納める。底部は丸底か？	口縁：指オサエの後ナデ ナデ：指オサエ？ 底部：指オサエ？	横・斜ハケの後、上半部ナデ	2/8	
SDe115中層 111		弥・鉢		15.6	4.5		粗・少、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	鋭い皿状を呈する。底部は丸底。口縁部は丸く納める。	マメツ・ハクリ	ナデの後横・斜ハケ	1/8以下	
SDe115中層 112		弥・大形鉢		34.8			中・普、石英・角 閃石・金雲母、赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部はほぼ直立し、体部との境は鈍い。端部は四角く納めつつ内側に僅かに引き出す。頂部は僅かに凹む。	口縁：斜ハケの後ヨコナデ 体部：マメツ・ハクリ	口縁：ヨコナデ、鈍い凹線状の段 体部：マメツ・ハクリ	1/8	
SDe115中層 113		弥・大形鉢		39.6			中・多、石英・角 閃石・金雲母、赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	中位で鈍く屈曲して、口縁部は外湾気味に開く。端部は積み上げ、頂部は鈍く凹む。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8以下	
SDe115中層 114		弥・大形鉢		42.9			中・普、石英・角 閃石・金雲母、赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	中位で鈍く屈曲して、口縁部はやや外反気味に開く。端部は丸く納める。底面はサシ面。	口縁：ヨコナデ、マメツ 横ナズリ、マメツ	口縁：ヨコナデ、鈍い凹線、マメツ 体部：横ハケ、マメツ	1/8以下	
SDe115中層 115		弥・大形鉢					中・普、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	中位で屈曲して、口縁部は直立気味に立ち上がる。	横ナズリ	斜ハケの後、屈曲部付近横ナデ後 外側ミガキ	2/8	
SDe115中層 116		弥・小形丸底 土器					中・少、石英・角 閃石含む	(外)灰白 (内)灰白	底部は尖り気味の丸底。体部の張りは強い。	マメツ・ハクリ	体部：上位指オサエ・ナデ、下位 ヨコナデの後放射状ミガキ	2/8	
SDe115中層 117	51	土・小形丸底 土器		6.9	8.3		粗・普、石英・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は緩やかに折り返して、直線状に開く。端部は丸く納める。底面丸底。	口縁部：ヨコナデ 体部：横斜ハケ、マメツ著	口縁部：ヨコナデ 体部：上位指 オサエ・ナデ、下位ケズリ	2/8	
SDe115下層 119		弥・広口壺		15.6			中・普、石英・角 閃石・金雲母、赤 色粒含む	(外)にぶい褐色 (内)にぶい褐色	口縁部は鈍く折れて水平に近く開く。端部は小さく積み上げる。	ヨコナデ	口縁：ヨコナデ、鈍い凹線2〜3 条 頸部：ヨコナデ	1/8	
SDe115下層 120		土・広口壺？		17.0			細・普、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)浅黄褐色 (内)浅黄褐色	口縁部は外反して開き、端部は鈍く積み上げる。	斜ハケの後ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	
SDe115下層 121		土・二重口縁 壺		24.6			粗・少、石英・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部中位で屈曲して、上半部は外反して大きく開く。端部は四角く納めつつ、小さく積み上げる。	ヨコナデ	指オサエの後ヨコナデ、マメツ	1/8	
SDe115下層 122		弥・甕		14.4			中・普、石英・角 閃石・金雲母、赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れて短く、端部は積み上げる。	口頸部：ヨコナデ 体部：縦ハケ	口頸部：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ	1/8	
SDe115下層 123		弥・甕		13.8			中・普、石英・赤 色粒含む	(外)にぶい褐色 (内)にぶい褐色	口縁部は強く折れて、水平に近く開く。端部はやや鈍く積み上げる。	口頸部：ヨコナデ 体部：縦ハケ	口頸部：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ	1/8	
SDe115下層 124		弥・甕		16.0			細・普、石英・角 閃石・金雲母、赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上方に積み上げる。	口縁：ヨコナデ 体部：マメツ	口縁：ヨコナデ 体部：ヨコナデ オサエ・ナデ	1/8	
SDe115下層 125		弥・甕		15.0			中・普、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく積み上げる。	口頸部：ヨコナデ 体部：縦ハケ	口頸部：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ	1/8	

報告書 選機番号	挿入 図版	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	端部 形 態	外面調整	内面調整	残存率	備 考
SDe115下層	126	弥・甕	17.3			粗・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)灰黄褐 (内)にぶい黄橙	口縁部は強く折れて短く、端部は鈍く揃み上げる。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	口縁部外面麻付 着
SDe115下層	127	弥・甕	14.5			中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)明褐 (内)明褐	口縁部は強く折り返し短く、端部は小さく揃み上げる。	口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ 体部；指オサエ・ナデ	1/8以下	口縁部外面麻付 に麻付着
SDe115下層	128	弥・甕	14.4			中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)褐	口頸部は強く折り返して、外反して短く開く。端部は小さく揃み上げる。	口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口縁；ヨコナデ 体部；縦ケズリ	2/8	
SDe115下層	129	弥・甕	13.0			中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい褐 (内)にぶい褐	口縁部は強く折れ、外反気味に短く開く。端部は下方に揃み出す。	口縁；凹線1条 口縁；斜ハケの 後ヨコナデ 体部；縦ハケの 後上位ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ 体部；縦ケズリ の後に上位ナデ	1/8	
SDe115下層	130	弥・甕	12.3			中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)灰黄褐 (内)灰黄褐	口頸部は緩く折れて短く、端部は丸く納める。	口頸部；タタキメの後ヨコナデ 体部；タタキメの後縦ハケ	口頸部；ヨコナデ 体部；指オサエ・ナデ	1/8以下	体部下外面麻 付着
SDe115下層	131	弥・甕	14.0			中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口頸部は緩く折れて外反して開く。端部は上方に揃み上げつつ、下方にも突出する。	口頸部；ヨコナデ 体部；マメツ ・ハクリ	口頸部；ヨコナデ？、マメツ 体 部；横ケズリ	2/8	
SDe115下層	132	弥・甕	14.4			色・少、石英・赤 色粒含む	(外)澄 (内)澄	口縁部は緩く折れて、内湾気味に小さく開く。端部は丸く納める。	口縁；タタキメの後ナデ？ 体 部；タタキメ	口縁；横ハケ 体部；縦横ナデ	1/8以下	
SDe115下層	133	弥・甕	16.6			中・普、石英・赤 色粒含む	(外)にぶい澄 (内)にぶい澄	口頸部は緩く折れ、口縁部は外反して開く。端部は四角く納める。	口頸部；ヨコナデ 体部；タタキ メ、マメツ	口頸部；マメツ 体部；縦・斜ケ ズリ	2/8	
SDe115下層	134	弥・高坏	27.6			粗・少、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	坏中位で強く屈曲し、上半部は外傾して開く。端部は鈍く肥厚して外方に揃み出し、内方にも突出する。	口頸部；凹線3条 上半部；ヨコナ デ？、マメツ 下半部；横ケズリ、 マメツ	上半部；ヨコナデ 下半部；マメ ツ・ハクリ	1/8	
SDe115下層	135	弥・高坏	18.2			中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)澄 (内)にぶい澄	坏中位で屈曲して上半部は外反して開く。端部は丸く納める。	上半部；マメツ・ハクリ 下半 部；横ケズリ	上半部；ヨコナデ	1/8以下	
SDe115下層	136	弥・高坏	22.6			中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい澄 (内)にぶい澄	坏上半部は鈍く屈曲し、強く外反して開く。端部は鈍く尖り、内面にサツ面。	坏上半；ヨコナデ 坏下半；横ケ ズリの後分割ミガキ	坏上半；ヨコナデ 坏下半；ヨコ ナデの後ミガキ	1/8	
SDe115下層	137	弥・脚	16.4			中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	根部は緩やかに開き、端部は肥厚しつつ四角く納める。	ヨコナデ	横ケズリ	1/8	裾部に2孔1対 の透し孔
SDe115下層	138	弥・脚	16.4			中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい褐 (内)にぶい褐	脚部は緩やかに開き、端部は四角く納める。	ヨコナデ？	横・斜ケズリ	1/8	裾部透し孔
SDe115下層	139	土・脚	11.2			微・少、石英・角 閃石？、赤色粒含 む	(外)にぶい澄 (内)にぶい澄	脚柱部より緩やかに屈曲して、根部は内湾気味に開く。端部は概ね四角く納める。	脚柱部；メントリの後斜ハケ 脚 根部；斜ハケ	脚柱部；横ケズリ？の後に下半指オ サエ 脚根部；横ケズリの後ヨコ ナデ	3/8	
SDe115下層	140	弥・高坏？				中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)澄 (内)赤褐		ヨコナデ	ヨコナデ	細片	内面に赤色顔料 付着
SDe115下層	141	弥・高坏				中・多、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)赤褐 (内)にぶい褐		ケズリの後ミガキ	分割ミガキ	1/8以下	内面赤色顔料付 着
SDe115下層	142	弥・脚	3.4			中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	直線状に開く体部より鈍く折れて、台形状に開く短い脚部が貼付される。	体部；縦ケズリ、ハクリ 著 脚 部；指オサエ・ナデ？	体部；指ナデ？ 脚部；指オサエ ・ナデ	7/8	製造土器
SDe115下層	143	土？・小形鉢	9.4			中・普、石英含む 色粒含む	(外)にぶい澄 (内)にぶい澄	内湾気味の体部より緩く折れて、口縁部は短く開く。端部は丸く納める。	口縁；ヨコナデ 体部；上位タタ キメ、下位マメツ・ハクリ	口縁；ヨコナデ 体部；指オサエ、 マメツ	1/8以下	8以下
SDe115下層	144	弥・小形鉢	12.7	5.8		中・普、石英・赤 色粒含む	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙	丸底の底部より内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く納める。	マメツ・ハクリ	体部；ナデ 底部；指オサエ	底部完存	内外面黒斑
SDe115下層	145	土・小形鉢	12.7	5.8		中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	浅い皿状を呈する。口縁端部は鈍く尖る。	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	1/8以下	8以下
SDe115下層	146	土・小形鉢	9.3	3.4		中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	丸底気味の皿状の形態。口縁端部は特に調整を加えず、丸く納める。	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	1/8	
SDe115下層	147	弥・？	4.6			(外)灰白 (内)灰白	底部突出した上げ底。	体部；ケズリの後ナデ、指オサエ 底面；指オサエ	体部；ナデ	体部；ナデ	底部完存	底面に僅かに麻 付着

報告番号 遺構番号	挿図	図版	器種	口径	器高	底径	胎土	色	脚	端部	形態	外 面 調 整	内 面 調 整	残存率	備 考
SDe115下層	148	弥・?	弥・?			8.5	中・曹、石英・角 閃石、金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	底部平底。 口頸部は緩やかに外反して開き、端部は断面三角形に大きく引き出す。	ミガキ	斜ケズリ	斜ケズリ	斜ケズリ	3/8	外面黒斑
SDe115上層	149	弥・広口壺	弥・広口壺	12.4			中・曹、石英・角 閃石、金雲母含む	(外)浅黄褐色 (内)黄褐色	直立気味の頸部より強く折れて、口縁部は短く開く。端部は上方へ狭く上げつつ、下方へ大きく引き出す。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	2/8	
SDe115上層	150	弥・広口壺	弥・広口壺	14.7			粗・多、石英・角 閃石含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	やや内傾して立ち上がる頸部より、口縁部は緩く折れ、口縁部は上方へ大きく引き出す。	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ	2/8	
SDe115上層	151	弥・広口壺	弥・広口壺	14.4			中・多、石英・角 閃石、金雲母・赤色 粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	直立気味の頸部より口縁部は緩やかに外反して開き、端部は上方へ狭く上げつつ、下方にも小さく引き出す。	口縁；鋭い凹線・マメツ 頸部；縦ハケ？・マメツ 指オサエ・マメツ・ハクリ	口縁；鋭い凹線・マメツ 頸部；縦ハケ？・マメツ 指オサエ・マメツ・ハクリ	口縁；鋭い凹線・マメツ 頸部；縦ハケ？・マメツ 指オサエ・マメツ・ハクリ	口縁；鋭い凹線・マメツ 頸部；縦ハケ？・マメツ 指オサエ・マメツ・ハクリ	4/8	
SDe115上層	152	弥・広口壺	弥・広口壺	17.1			中・曹、石英・角 閃石、金雲母含む	(外)浅黄褐色 (内)黒褐色	直立気味の頸部より口縁部は緩やかに外反して開き、端部は上方へ狭く上げつつ、下方にも小さく引き出す。	口縁；鋭い凹線 マメツ	口縁；鋭い凹線 マメツ	口縁；鋭い凹線 マメツ	口縁；鋭い凹線 マメツ	1/8	
SDe115上層	153	弥・短頸壺	弥・短頸壺	19.4			中・曹、石英・角 閃石、赤色粒含む	(外)明赤褐色 (内)にぶい褐色	口頸部は強く外反して開く。端部は大きく下方に引き出して、上方にも小さく引き出す。	口頸部；鋭い凹線 マメツ	口頸部；鋭い凹線 マメツ	口頸部；鋭い凹線 マメツ	口頸部；鋭い凹線 マメツ	1/8	
SDe115上層	154	弥・直口壺	弥・直口壺	11.0			中・曹、石英・角 閃石、金雲母含む	(外)灰黄褐色 (内)灰黄褐色	口縁部は緩やかに外反して開き、端部は丸く納める。	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	
SDe115上層	155	弥・直口壺	弥・直口壺	8.4			中・曹、石英・角 閃石含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は緩やかに外反して開き、端部は丸く納める。	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	4/8	
SDe115上層	156	弥・直口壺	弥・直口壺	13.4			中・曹、石英・角 閃石、赤色粒含む	(外)にぶい褐色 (内)にぶい褐色	口縁部は緩やかに外反して開き、端部は丸く納める。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	1/8	
SDe115上層	157	弥・直口壺	弥・直口壺	11.6			中・多、石英・角 閃石、赤色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	直立して立ち上がる大めの頸部より、口縁部は小さく外反して開く。端部は四角く納める。	マメツ	マメツ	マメツ	マメツ	7/8	
SDe115上層	158	弥・短頸壺	弥・短頸壺	12.2			細・少、石英・角 閃石、赤色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	緩く外反して開く口縁部。端部は上方へ狭く上げつつ、下方にも小さく引き出す。	マメツ	マメツ	マメツ	マメツ	1/8	
SDe115上層	159	弥・細頸壺	弥・細頸壺				細・曹、石英・角 閃石、金雲母含む	(外)にぶい褐色 (内)にぶい褐色	体部最大径部に断面矩形の突帯貼付。	体部上半；縦ミガキ 端部；鋭い凹線2条 マメツ	ヨコナデ？	ヨコナデ？	ヨコナデ？	1/8以下	
SDe115上層	160	弥・細頸壺	弥・細頸壺				中・曹、石英・角 閃石、赤色粒含む	(外)灰黄褐色 (内)黒褐色	頸部は直立して立ち上がり、基部に断面矩形の突帯貼付。扁平な体部の最大径部に断面M字状の小突帯貼付。	頸部；縦ハケの後突帯貼付 体部；上半縦ハケの後縦ミガキ、中位ヨコナデ、下半縦ミガキ	体部；上半縦ハケの後指オサエ・指ナデ、下半縦ハケ	体部；上半縦ハケの後指オサエ・指ナデ、下半縦ハケ	体部；上半縦ハケの後指オサエ・指ナデ、下半縦ハケ	1/8	体部上半2次的 燃焼？
SDe115上層	161	弥・細頸壺	弥・細頸壺				中・曹、石英・角 閃石	(外)にぶい黄褐色 (内)黒褐色	頸部は直立して立ち上がり、体部の張りは極めて強い。頸基部に小突帯を付す。	頸部；縦ハケの後突帯貼付 体部；上半縦ハケの後縦ミガキ、中位ヨコナデ、下半縦ミガキ	頸部；縦ハケの後指オサエ・指ナデ、下半縦ハケ	頸部；縦ハケの後指オサエ・指ナデ、下半縦ハケ	頸部；縦ハケの後指オサエ・指ナデ、下半縦ハケ	5/8	
SDe115上層	162	弥・壺	弥・壺	14.6			細・少、石英・角 閃石、金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口頸部は強く折り返して短い。端部は上方へ狭く上げつつ、下方にも小さく引き出す。	口頸部；鋭い凹線2条 マメツ	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ	1/8	口頸部外面煤付 着
SDe115上層	163	弥・壺	弥・壺	16.2			中・多、石英・角 閃石、赤色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口頸部は強く折り返して短い。端部は上方へ狭く上げつつ、下方にも小さく引き出す。	口頸部；鋭い凹線3条 マメツ	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ	2/8	
SDe115上層	164	弥・壺	弥・壺	14.5			細・少、石英・角 閃石、赤色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折り返して短い。端部は上方へ狭く上げつつ、下方にも小さく引き出す。	口頸部；鋭い凹線3条 マメツ	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ	5/8	口縁部・体部下 半外面煤付着
SDe115上層	165	弥・壺	弥・壺	16.6			中・多、石英・角 閃石、赤色粒含む	(外)灰褐色 (内)灰褐色	口頸部は強く折り返して短い。端部は上方へ狭く上げつつ、下方にも小さく引き出す。	口頸部；鋭い凹線3条 マメツ	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ	1/8	
SDe115上層	166	弥・大形壺	弥・大形壺	20.6			細・曹、石英・角 閃石、赤色粒含む	(外)にぶい褐色 (内)にぶい褐色	口頸部は強く折り返して短い。端部は上方へ狭く上げつつ、下方にも小さく引き出す。	口頸部；鋭い凹線3条 マメツ	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ	1/8	
SDe115上層	167	弥・壺	弥・壺	13.6			中・曹、石英・角 閃石、赤色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口頸部は強く折り返して短い。端部は上方へ狭く上げつつ、下方にも小さく引き出す。	口頸部；鋭い凹線2条 マメツ	口頸部；鋭い凹線2条 マメツ	口頸部；鋭い凹線2条 マメツ	口頸部；鋭い凹線2条 マメツ	1/8	
SDe115上層	168	弥・壺	弥・壺	13.4			中・曹、石英・角 閃石、赤色粒含む	(外)浅黄褐色 (内)黄褐色	口頸部は強く折り返して短い。端部は上方へ狭く上げつつ、下方にも小さく引き出す。	口頸部；鋭い凹線3条 マメツ	口頸部；鋭い凹線3条 マメツ	口頸部；鋭い凹線3条 マメツ	口頸部；鋭い凹線3条 マメツ	4/8	口縁部・体部下 半外面煤付着
SDe115上層	169	弥・広口壺	弥・広口壺	17.2			中・曹、石英・角 閃石、赤色粒含む	(外)灰褐色 (内)黄褐色	口頸部は強く折り返して短い。端部は上方へ狭く上げつつ、下方にも小さく引き出す。	口頸部；鋭い凹線3条 マメツ	口縁；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口縁；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口縁；ヨコナデ 体部；縦ハケ	2/8	

報告書 遺構番号	挿図	図版	器種	口径	器高	底径	胎土	色	端部形態	外面調整	内面調整	残存率	備考
170	53	弥・壺	弥・壺	14.2			中・多、石英・角 閃石・雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口頸部は強く折り返して短い。端部は上方へ横み上げつつ、下方にも突出する。	端面；鈍い凹線2条 コナデ；縦ハケの後上半部に縦ミガキ？、最大径部に刺突文列	口頸部；ヨコナデの後に上半部指オサエ	2/8	口縁部、体部下 半外面残存着
171	53	弥・壺	弥・壺	16.2			粗・多、石英・角 閃石・雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい褐色 (内)灰褐色	口頸部は強く折り返して短く開く。端部は上方へ横み上げつつ、下方にも小さく引き出す。	端面；凹線2条 コナデ；横ハケの後下半部に刺突文列	口頸部；ヨコナデの後に下半部縦ミガキ？、肩部に刺突文列	3/8	外面残存着
172	53	弥・壺	弥・壺	17.4			中・普、石英・角 閃石・雲母・赤 色粒含む	(外)暗褐色 (内)暗褐色	口頸部は強く折り返して短く開く。端部は上方へ横み上げつつ、下方にも引き出す。	端面；鈍い凹線2条 コナデ；縦ハケの後下半部に刺突文列	口頸部；ヨコナデの後に上半部縦ミガキ、肩部に刺突文列	2/8	外面残存着
173		弥・高坏	弥・高坏	24.7			中・多、石英・角 閃石・雲母含む	(外)にぶい褐色 (内)にぶい褐色	口中位で屈曲して、上半部は外傾して開く。端部は上方へ横み上げつつ、内方にも引き出す。	上半部；ヨコナデ ツ・ハクリ	上半部；ヨコナデ 下半部；マメツ	1/8以下	
174		弥・高坏	弥・高坏	29.0			中・少、石英・角 閃石・雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)黒褐色	口中位で屈曲して、上半部は外傾して開く。端部は上方へ横み上げつつ、内方にも引き出す。	ヨコナデの後放射状ミガキ	ヨコナデの後放射状ミガキ	3/8	杯部内面残存着
175		弥・脚	弥・脚			13.0	中・普、石英・角 閃石・雲母含む	(外)黄褐色 (内)灰褐色	脚部は内傾気味に開き、端部は下方へ引き出しつつ上方にも小さく突出する。	裾部；ヨコナデ？、マメツ・ハクリ 端部；鈍い凹線2～3条	横ケズリ	1/8以下	外面残存着、裾 部小凹形透し孔
176	53	弥・脚	弥・脚			17.6	細・多、石英・角 閃石・雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)灰黄褐色	脚部有段、屈曲部に断面矩形の密帯張付。裾部下半は縦やかに外反して開き、端部は四角く締めつつ内方にも小さく突出する。	下半部；ヨコナデの後に後端放射状文列	ヨコナデ	1/8	下半部凹形透し 7方
177		弥・脚	弥・脚				中・普、石英・角 閃石・雲母含む	(外)浅黄褐色 (内)にぶい黄褐色	やや細身の軸部	マメツ・ハクリ	横ケズリ	7/8	上下2段に3方 向透し孔
178	53	弥・小形鉢	弥・小形鉢	(11.5)	(5.8)	3.2	中・少、石英・角 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)黄褐色	やや突出した平底の底部より内傾気味に開き、口縁部は丸く締める。	体部；横ケズリの後上位斜 ハケ、指オサエ・ナデ 底面；ナデ？、マメツ	横・斜ケズリの後上位指オサエ・ ナデ	7/8	
179		弥・？	弥・？			4.0	中・多、石英・角 閃石・雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)黒褐色	円盤状に突出した底部で、中央部がやや凹む。	体部；縦ミガキ 底面；ナデ？	ナデ？、マメツ	底部完存	
180		弥・？	弥・？			5.8	中・普、石英・角 閃石・雲母含む	(外)灰黄褐色 (内)にぶい黄褐色	底部はやや突出した平底。底面僅かに凹む。	体部；縦ミガキの後下 端ヨコナデ 底面；ナデ？、マメツ	縦ケズリの後ナデ？	底部完存	外面残存着
181		弥・？	弥・？			6.0	中・普、石英・角 閃石・雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい赤褐色 (内)灰黄褐色	底部はやや突出した平底。底面は僅かに凹む。	体部；縦板ナデ？、マメツ 底面；ナデ？、マメツ	斜ケズリの後ナデ？	2/8	外面残存着
182		弥・？	弥・？			3.4	中・普、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)浅黄褐色 (内)黄褐色	底面は突出し、縁辺を薄く横み出し、小さな上げ底状を呈する。	指オサエ・ナデ、マメツ	板ナデの後ナデ	6/8	
183	54	弥・把手？	弥・把手？				粗・多、石英含む	(外)灰白 (内)灰白	平面台形状。	マメツ・ハクリ		1/8以下	
184		弥・壺	弥・壺	16.6			中・多、石英含む	(外)灰黄褐色 (内)黄褐色	口頸部は強く折り返して短い。端部は厚みしつつ、四角く締める。	口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ 体部；縦ケズ リ？の後ナデ	1/8	口縁部、体部下 半外面残存着
185		弥・壺	弥・壺	16.4			中・普、石英・角 閃石含む	(外)黒褐色 (内)にぶい黄褐色	口頸部は強く折れて短い。端部は上方へ横み上げる。	端面；鈍い凹線 体部；？	口頸部；ヨコナ デの後に上半部指オサエ・ナデ	1/8	体部外面残存着
186		弥・広口壺	弥・広口壺	14.0			中・多、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	やや外傾気味の頸部より、口縁部は縦やかに外反して開く。端部は四角く締めつつ、小さく横み上げる。	端面；鈍い凹線 頸部；鈍ハケ	口縁；ヨコナデ、鈍い凹線状の段 頸部；ヨコナデ、指オサエの後ヨコナデ	2/8	
187	53	弥・広口壺	弥・広口壺	14.9			中・多、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	頸部は強く折れて直立気味に立ち上がり、口頸部は外反して短く開く。端部は四角く締める。	口縁；指オサエの後ヨコナデ 頸部；縦ハケの後丸線、基部に刺突 文+竹管文2段 体部；マメツ？	口縁；横ハケの後ヨコナデ？ 頸部；指オサエ、マメツ 体部；横 ケズリ	4/8	
188	54	弥・広口壺	弥・広口壺	15.5			中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	外反する頸部より強く折れて、口縁部は外反気味に開く。端部は小さく横み上げつつ、下方にも突出する。	口縁；ヨコナデ 頸部；縦ハケ	口縁；マメツ・ハクリ 頸部；指 オサエ	4/8	
189		弥・広口壺	弥・広口壺	20.1			中・少、石英・金 雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	内傾する頸部より縦やかに折り返して、口縁部は外反して開く。端部はやや厚みつつ四角く締める。	端面；鈍い凹線 口縁；ヨコナデ	口縁；ヨコナデ	1/8以下	
190		弥・広口壺	弥・広口壺	14.3			中・普、石英・角 閃石？・赤色粒 含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口頸部は強く折り返して短く開く。端部はやや外反気味に四角く締める。	口縁；ヨコナデ 頸部；マメツ ・ハクリ	口縁；ヨコナデ 頸部；マメツ ・ハクリ	1/8	
191		弥・広口壺	弥・広口壺	14.4			粗・多、石英・黒 雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口頸部は強く折り返して短く開く。端部はやや外反気味に四角く締める。	端面；鈍い凹線 口縁；ヨコナ デ？マメツ・ハクリ 体部；マメ ツ・ハクリ	口縁；マメツ・ハクリ 体部；横 ケズリの後上位指オサエ・ナデ	2/8	
192	54	弥・広口壺	弥・広口壺	15.2			粗・多、石英・角 閃石？含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	内傾する頸部より強く折れて、口頸部は上下に大きく引き出す。	マメツ・ハクリ	口縁；横ミガキ 頸部；ヨコナ デ？、マメツ・ハクリ 体部；横 ケズリ	7/8	

報告書 番号	押印	図版	器種	口径	器高	底往	胎土	色	端部	形状	外側調整	内側調整	残存率	備考
SDe115上層	193	弥・甕	弥・甕	12.6		中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)に白い黄褐 (内)に白い褐	口頸部は強く折り返して短い。端部は小さく構み上 げる。	口頸部；ヨコナデ メの後縦；斜ハケ	口頸部；ヨコナデ エ・ナデ	口頸部；ヨコナデ エ・ナデ	1/8以下		
SDe115上層	194	弥・甕	弥・甕	11.0		中・普、石英・角 閃石・金雲母を含 む	(外)に白い黄褐 (内)に白い黄褐	口頸部は強く折り返して、内湾気味に短く開く。端 部は小さく構み上げる。	口頸部；ヨコナデ エ・ナデ	口頸部；ヨコナデ エ・ナデ	1/8			
SDe115上層	195	弥・甕	弥・甕	14.1		中・多、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)に白い黄褐 (内)に白い黄褐	口頸部は強く折り返して短い。端部は僅かに構み上 げる。	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ エ?	口頸部；ヨコナデ エ?	2/8		
SDe115上層	196	弥・甕	弥・甕	14.2		中・多、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)に白い黄褐 (内)に白い黄褐	口頸部は強く折り返して短い。端部は小さく構み上 げる。	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ エ	口頸部；ヨコナデ エ	1/8		底部外面に僅か に線部付着
SDe115上層	197	弥・甕	弥・甕	15.5		中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)に白い黄褐 (内)に白い黄褐	口頸部は強く折り返して短い。端部は鋭く構み 上げる。	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ エ	口頸部；ヨコナデ エ	1/8		口縁部外面来付 着
SDe115上層	198	弥・甕	弥・甕	12.6		中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)に黄褐色 (内)に白い黄	口頸部は強く折り返して、やや内湾気味に短く開く。 端部は僅かに構み上げる。	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ エ	口頸部；ヨコナデ エ	1/8		
SDe115上層	199	弥・甕	弥・甕	16.6		中・普、石英・赤 色粒含む	(外)に白い黄褐 (内)に黄褐色	口頸部は鋭く折り返して、外反して開く。端部 は四角く構み上げる。	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ エ	口頸部；ヨコナデ エ	1/8		
SDe115上層	200	弥・甕	弥・甕	16.5		粗・普、石英・赤 色粒含む	(外)に白い黄褐 (内)に白い黄褐	口頸部は鋭く折り返して、外反して開く。端部 は四角く構み上げる。	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ エ	口頸部；ヨコナデ エ	1/8		
SDe115上層	201	弥・高坏	弥・高坏	21.9		中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)に白い黄褐 (内)に白い黄褐	口頸部は鋭く折り返して、外反して開く。端部 は四角く構み上げる。	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ エ	口頸部；ヨコナデ エ	1/8		
SDe115上層	202	弥・高坏	弥・高坏	25.2		中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)に白い黄褐 (内)に白い黄褐	口頸部は鋭く折り返して、外反して開く。端部 は四角く構み上げる。	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ エ	口頸部；ヨコナデ エ	1/8		
SDe115上層	203	弥・高坏	弥・高坏	22.5		粗・普、石英・赤 色粒含む	(外)に白い黄褐 (内)に白い黄褐	口頸部は鋭く折り返して、外反して開く。端部 は四角く構み上げる。	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ エ	口頸部；ヨコナデ エ	1/8		
SDe115上層	204	弥・高坏	弥・高坏	15.4		中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)に白い黄褐 (内)に白い黄褐	口頸部は鋭く折り返して、外反して開く。端部 は四角く構み上げる。	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ エ	口頸部；ヨコナデ エ	1/8		
SDe115上層	205	弥・脚	弥・脚	18.1		細・多、石英・赤 色粒含む	(外)に白い黄褐 (内)に白い黄褐	口頸部は鋭く折り返して、外反して開く。端部 は四角く構み上げる。	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ エ	口頸部；ヨコナデ エ	1/8		
SDe115上層	206	弥・脚	弥・脚	16.6		中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)に白い黄褐 (内)に白い黄褐	口頸部は鋭く折り返して、外反して開く。端部 は四角く構み上げる。	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ エ	口頸部；ヨコナデ エ	1/8		
SDe115上層	207	弥・脚	弥・脚	18.3		中・少、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)に白い黄褐 (内)に白い黄褐	口頸部は鋭く折り返して、外反して開く。端部 は四角く構み上げる。	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ エ	口頸部；ヨコナデ エ	1/8		
SDe115上層	208	弥・脚	弥・脚	17.6		中・少、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)に白い黄褐 (内)に白い黄褐	口頸部は鋭く折り返して、外反して開く。端部 は四角く構み上げる。	口頸部；ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ エ	口頸部；ヨコナデ エ	2/8		裾部に2孔1対 の透し孔
SDe115上層	209	弥・鉢	弥・鉢	16.2		細・少、石英・金 雲母含む	(外)に黄褐色 (内)に黄褐色	口縁部は鋭く折り返して、外反して開く。端部は丸く 構み上げる。	口縁；ヨコナデ	口縁；ヨコナデ エ	口縁；ヨコナデ エ	2/8		
SDe115上層	210	弥・大形鉢	弥・大形鉢	31.1		中・普、石英・赤 色粒含む	(外)に黄褐色 (内)に黄褐色	口縁部は鋭く折り返して、外反して開く。端部は丸く 構み上げる。	口縁；ヨコナデ	口縁；ヨコナデ エ	口縁；ヨコナデ エ	2/8		
SDe115上層	211	弥・大形鉢	弥・大形鉢	32.0		中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)に黄褐色 (内)に黄褐色	口縁部は鋭く折り返して、外反して開く。端部は丸く 構み上げる。	口縁；ヨコナデ	口縁；ヨコナデ エ	口縁；ヨコナデ エ	1/8		
SDe115上層	212	弥・脚	弥・脚	2.8		中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)に黄褐色 (内)に黄褐色	口縁部は鋭く折り返して、外反して開く。端部は丸く 構み上げる。	口縁；ヨコナデ	口縁；ヨコナデ エ	口縁；ヨコナデ エ	1/8		
SDe115上層	213	弥・?	弥・?			中・普、石英含む	(外)に黄褐色 (内)に黄褐色	口縁部は鋭く折り返して、外反して開く。端部は丸く 構み上げる。	口縁；ヨコナデ	口縁；ヨコナデ エ	口縁；ヨコナデ エ	1/8以下		
SDe115下層	214	弥・広口壺	弥・広口壺	14.0		中・多、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)に黄褐色 (内)に黄褐色	口縁部は鋭く折り返して、外反して開く。端部は丸く 構み上げる。	口縁；ヨコナデ	口縁；ヨコナデ エ	口縁；ヨコナデ エ	1/8以下		
SDe115下層	215	弥・広口壺	弥・広口壺	13.4		中・普、石英・赤 色粒含む	(外)に黄褐色 (内)に黄褐色	口縁部は鋭く折り返して、外反して開く。端部は丸く 構み上げる。	口縁；ヨコナデ	口縁；ヨコナデ エ	口縁；ヨコナデ エ	3/8		





報告書 遺構番号	埋図	図版	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	端部形態	外面調整	内面調整	残存率	備考
238	De115下層	54	弥・甕	15.0			中・普、石英・赤 色粒含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄橙	口頸部は強く折れて外反気味に短く開く。端部は四角く納める。	口縁：タタキメの後ヨコナデ？、 マメツ 体部：タタキメの後上位 斜ハケ	口縁：マメツ・ハクリ 体部：指 オサエ、ハクリ	3/8	
239	De115下層		弥・大形甕	23.8			中・多、石英含む	(外)褐灰 (内)褐灰	口縁部は強く折れて短く開く。端部は上方へ横み上げつつ、下方にも突出する。	口頸部：ヨコナデ 体部：ナデ？	口頸部：ヨコナデ 体部：マメツ ・ハクリ	1/8	
240	De115下層		弥・高坏	22.8			中・多、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	坏部中位で屈曲して、上半部は外反して開く。端部は丸く納めつつ、内面に凹線。	上半部：ヨコナデ 下半部：横ハ ケ	上半部：ヨコナデ 下半部：ヨコ ナデ	1/8以下	
241	De115下層		弥・高坏	20.0			中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)橙 (内)橙	坏部中位で屈曲して、上半部は外反して開く。端部は丸く納めつつ、内面に凹線。	上半部：ヨコナデ 下半部：横ハ ケ	上半部：マメツ・鈍い凹線3条 下半部：マメツ	1/8	
242	De115下層		弥・高坏	24.6			中・多、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	坏部中位で屈曲して、上半部は外反して開く。端部は丸く納めつつ、内面に凹線。	上半部：ヨコナデ 下半部：横ハ ケ	上半部：ヨコナデ 凹線状に凹心。 下半部：ヨコナデ？の後分割ミガ キ	1/8以下	
243	De115下層		弥・脚		19.8		中・少、石英・角 閃石含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	据部は緩やかにやや内湾気味に開き、口縁部は肥厚し つつ、小さく下方へ引き出し、上方にも突出する。	据部：ヨコナデ？ 端面：鈍い沈 線	横ハケズリ	1/8	裾部上端透し孔
244	De115下層		弥・大形鉢	28.6			中・少、石英・角 閃石含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	やや内湾気味に立ち上がる体部より、口縁部は強く 折り返して短く開く。端部は四角く納める。	口縁：指オサエの後ナデ 体部： 横ハケ	口縁：横ハケ 体部：横ハケの後 斜ハケ	1/8以下	
245	De115下層		弥・鉢？		3.4		中・多、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐 (内)黄褐	底面はやや突出した平底。	体部：タタキメの後ナデ 底面： ナデ？、マメツ	横・斜ハケ	4/8	
246	De115下層		弥・小形鉢	11.4	5.95		中・普、石英・黒 雲母・赤色粒含む	(外)にぶい褐 (内)にぶい褐	小さな平底の底面より、やや内湾気味に開き、口縁 部は鈍く突る。	口縁：ヨコナデ？、マメツ 体 部：横板ナデ？、マメツ 底面： ナデ	口縁：ヨコナデ 体部：横板ナデ	2/8	
247	De115下層		弥・小形鉢	14.0	9.9		中・普、石英・黒 雲母・赤色粒含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反して開 く。端部は丸く納める。底面丸底。	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ ・ナデ 底面：ナデ	口縁：ヨコナデ 体部：斜・横板 ナデの後指オサエ・ナデ	1/8	外面黒斑
248	De115下層		弥・？		4.6		中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)黒褐 (内)褐灰	底面はやや突出した平底。	体部：縦ミガキ 底面：ミガキ	横・縦ハケズリ	底部完存	底部焼成後穿孔
249	De115下層		弥・？		5.0		中・多、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	底部薄い平底。	体部：縦ミガキ 底面：ミガキ	指オサエの後縦ハケズリ	6/8	
250	De115下層		弥・？		5.0		中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄橙	底面は丸みをおびた平底。	体部：タタキ？ 底面：タタキの 後ナデ？、マメツ	体部：縦ハケズリ 底面：指オサエ	底部ほぼ 完存	体部上半外面 附着
251	De115下層		弥・？		6.8		中・多、石英・角 閃石・雲母・赤 色粒含む	(外)黒褐 (内)黒褐	底部平底。	体部：縦ミガキ 底面：ミガキ	斜ハケズリ	2/8	外面黒斑
252	De115下層		弥・？		3.8		細・少、石英・赤 色粒含む	(外)灰白 (内)にぶい黄橙	底部凹み底、充填法。	縦板ナデ？、マメツ著	横板ナデ	6/8	
253	De115下層		弥・？				細・多、石英含む	(外)灰白 (内)灰白	底部は概ね丸底。	体部：タタキ 底面：ナデ？	板ナデの後ナデ	底部完存	
254	De115下層		弥・甕？		3.9		中・少、石英含む	(外)灰黄 (内)灰黄	底部は小さな平底。	体部：縦板ナデ、マメツ 底面： ナデ？、マメツ	縦板ナデの後底部指オサエ	底部完存	外面黒斑、底部 焼成前穿孔
255	De115下層		弥・？				中・少、石英含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄橙	底部縁刃を薄く描み出して、粗雑な凹み底を呈する。	体部：ナデ、マメツ？ 底面：指 オサエ	体部：縦・横板ナデ 底面：指オ サエ	7/8	外面黒斑
256	De115下層	54	弥・支脚？				中・普、石英含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	頂部が平坦な截頭円錐状を呈し、残存部は中実であ る。	頂部：ナデ 側面：タタキメ？の 後指オサエ・ナデ		細片	
269	De140		弥・広口壺	(21.4)			粗・普、石英・角 閃石・雲母・赤色 粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	口縁部はやや強く折れ水平に近く開き、端部を上方 に引き出す。	端面：ヨコナデの後斜縁部 口縁：ヨコナデ？、マメツ	口頸部：ヨコナデ？、マメツ	1/8	
270	De140		弥・甕	12.0			細・普、石英・角 閃石・雲母含む	(外)灰黄褐 (内)にぶい黄褐	口縁部は強く折れ短い。端部は上方へ横み上げ、下 方にも引き出す。	端面：凹線2条 口頸部：ヨコナ デ	口頸部：ヨコナデ	1/8	
271	De140		弥・？		8.4		中・普、石英・角 閃石・雲母・赤色 粒含む	(外)灰黄褐 (内)にぶい黄橙	突出した厚めの平底。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	3/8	
272	De141		弥・広口壺	13.8			中・普、石英・角 閃石・雲母・赤色 粒含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	直立気味の頸部より強く折れて、口縁部は斜上方に 延びる。端部は僅かに横み上げる。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	1/8	
273	De141		弥・脚		4.6		中・普、石英・角 閃石・雲母含む	(外)にぶい赤褐 (内)にぶい赤褐	ハの字形に開く粗雑な脚部。	ナデ、上位縦ハケズリ	ナデ？	2/8	製塩土器

報告番号	種園	図版	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	端部形態	外面調整	内面調整	残存率	備考
SDe138上層	274	弥・広口壺	弥・広口壺	13.8			細・多・石英・角・石・金雲母含む 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は鈍く屈曲して水平に開く。端部は四角く納める。	口縁～頸部；縦ハケの後ナデ	口縁；ヨコナデ 頸部；指オサエ	4/8	口縁～頸部内面に赤色顔料付着
SDe138上層	275	弥・広口壺	弥・広口壺	10.0			中・普・石英・角・石・金雲母含む 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は面線状に開き、端部は主に下方に拡張し、端部をなす。	口縁～頸部；ヨコナデ 体部；縦板ナデ？・マメツ	口縁；ヨコナデ 頸部；指オサエ	2/8	口縁端外面に黒付着
SDe138上層	276	弥・広口壺	弥・広口壺	12.4			中・普・石英・角・石・金雲母含む 閃石・金雲母・赤色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は外反して開き、端部は僅かに上方に狭み出す。	ヨコナデ？・マメツ	ヨコナデ	4/8	口縁端部内外面に赤色顔料付着
SDe138上層	277	弥・広口壺	弥・広口壺	14.2			細・普・石英・角・石・金雲母含む 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は内傾する頸部より強く折り返して短く開く。端部は上方に大きく狭み出す。	端面；鈍い凹線3条 口縁；ヨコナデ 頸部；鈍い凹線1条	口縁；ヨコナデ 頸部；鈍い凹線1条	1/8	口縁部内面に赤色顔料付着
SDe138上層	278	弥・広口壺	弥・広口壺	20.0			中・普・石英・角・石・金雲母含む 閃石・金雲母含む	(外)黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は水平に近く開き、端部を上方に狭み上げる。	端面；凹線2条 口縁；ヨコナデ	ヨコナデ；鈍い凹線	1/8以下	口縁部内面に赤色顔料付着
SDe138上層	279	弥・広口壺	弥・広口壺	23.6			中・多・石英・角・石・金雲母含む 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)黒褐色	口縁部は外反して大きく開き、端部は上下に鈍く狭張する。	端面；ヨコナデ 口縁～頸部；ヨコナデの後縦ハケ	ヨコナデ	1/8	
SDe138上層	280	弥・広口壺	弥・広口壺	28.2			細・少・石英・角・石・金雲母含む 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)黒褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上下に狭み出す。	端面；鈍い凹線3条の後短別線7条 口縁；ヨコナデ	口縁；ヨコナデ 頸部；鈍い凹線 頸部；ヨコナデ	2/8	口縁部被熱
SDe138上層	281	弥・短頸壺	弥・短頸壺	16.6			中・普・石英・角・石・金雲母・赤色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)褐色	口縁部は緩やかに折り返して短く開く。端部は厚く上下に小さく狭み出す。	端面；凹線2条 口縁～頸部；縦ハケの後ヨコナデ	一部横ハケの後ヨコナデ	2/8	
SDe138上層	282	弥・直口壺	弥・直口壺	11.8			中・普・石英・角・石・金雲母含む 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は緩やかに外反して開き、端部は四角く納める。	口縁～頸部；ヨコナデの後縦ハケ	口縁；ヨコナデ 頸部；指オサエ	2/8	口縁端部に赤色顔料付着
SDe138上層	283	弥・細頸壺？	弥・細頸壺？				中・普・石英・角・石・金雲母含む 閃石・金雲母含む	(外)褐色 (内)黒褐色	扁平で強く張った体部。	ミガキ・体部中央に凹線4条と5条以上の短別線	ナデ	1/8以下	外面黒斑
SDe138上層	284	土・二重口縁壺	土・二重口縁壺	17.0			中・普・石英・角・石・金雲母含む 閃石・金雲母含む	(外)浅黄褐色 (内)浅黄褐色	口縁部は直立気味に立ち上がり、端部付近で鈍く外反して開く。端部は四角く納め僅かに上方に狭み出す。	ヨコナデ？・マメツ著	ヨコナデ	1/8	
SDe138上層	285	弥・甕	弥・甕	15.6			細・普・石英・角・石・金雲母含む 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は短く、端部を上方に狭み上げる。	端面；鈍い凹線 口縁；ヨコナデ	ヨコナデ？・マメツ	1/8	口縁部外面黒付着
SDe138上層	286	弥・甕	弥・甕	14.1			細・少・石英・角・石・金雲母含む 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上方に狭み上げ下方にも突出する。	端面；凹線2条 口縁～頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口縁～頸部；ヨコナデ 体部；指オサエ	1/8	
SDe138上層	287	弥・甕	弥・甕	13.9			細・多・石英・角・石・金雲母・赤色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れて短く開く。端部は上下に狭み出す。	端面；鈍い凹線 口縁～頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口縁～頸部；ヨコナデ 体部；横ハケの後の指オサエ・ナデ	1/8	体部外面に黒付着
SDe138上層	288	弥・甕	弥・甕	15.4			細・普・石英・角・石・金雲母含む 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上方に大きく狭み出して下方も突出。	端面；凹線 口縁～頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口縁～頸部；ヨコナデ 体部；指オサエ・ナデ	1/8以下	
SDe138上層	289	弥・甕	弥・甕	15.2			細・普・石英・角・石・金雲母・赤色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上方に狭み上げ下方に突出。	端面；鈍い凹線2条 口縁；ヨコナデ	口縁～頸部；ヨコナデ 体部；ケズリの後の指オサエ・ナデ	2/8	体部外面下半に黒付着
SDe138上層	290	弥・甕	弥・甕	15.6			細・普・石英・角・石・金雲母・赤色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚し上下に狭み出す。	端面；鈍い凹線 口縁～頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ？	口縁～頸部；ヨコナデ 体部；指オサエ・ナデ	2/8	口縁部外面黒付着
SDe138上層	291	弥・甕	弥・甕	14.8			中・多・石英・角・石・金雲母含む 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く屈曲して短く開く。端部は上下に狭み出す。	口縁；ヨコナデ 端面；鈍い凹線 体部；縦ハケの後縦ミガキ	口縁；ヨコナデ 頸部；横板ナデの後ナデ 体部；ケズリ	3/8	
SDe138上層	292	弥・甕	弥・甕	15.4			細・多・石英・角・石・金雲母・赤色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上下に狭み出す。	端面；鈍い凹線2条 口縁～頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケの後一部ヨコナデ	口縁～頸部；ヨコナデ 体部；横ハケの後ナデ	1/8	口縁外面に黒付着
SDe138上層	293	弥・甕	弥・甕	13.0			微・普・石英・角・石・金雲母含む 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上下に狭み出す。	端面；凹線3条 口縁～頸部；ヨコナデ 体部；タタキの後縦ハケ	口縁～頸部；ヨコナデ 体部；横ハケの後ナデ	2/8	
SDe138上層	294	弥・甕	弥・甕	12.6			粗・普・石英・角・石・金雲母含む 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上方に狭み上げ、端部は内傾する。	口縁；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口縁；ヨコナデ 体部；ケズリ	4/8	外面黒付着
SDe138上層	295	弥・甕	弥・甕	14.8			中・普・石英・角・石・金雲母含む 閃石・金雲母含む	(外)明黄褐色 (内)黄褐色	口縁部は強く折り返して短く開き、端部は厚く僅かに上方に狭み上げる。	ヨコナデ？マメツ	口縁；ヨコナデ？ 頸部；横板ナデ？ 体部；ケズリ	2/8	
SDe138上層	296	弥・甕	弥・甕	13.6			中・少・石英・角・石・金雲母・赤色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折り返して短く開き、端部は厚く僅かに上方に狭み上げる。	口縁；マメツ 体部；縦 斜ハケ	口縁；マメツ 体部；指オサエの後のケズリ	2/8	劣化著
SDe138上層	297	弥・高坏	弥・高坏	25.0			細・普・石英・角・石・金雲母・赤色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)明褐色	口縁端部は厚く、内外方に狭み出す。	頂部；凹線3条 口縁；ヨコナデ	ヨコナデ？	1/8以下	外面に赤色顔料

報告番号 遺構番号	棟号	図版	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	端部	形状	照	外面調整	内面調整	残存率	備考
SDe138上層	298		弥・高坏	23.8			細・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口縁部は直立して立ち上がり、備かに外反して開く。 端部は直立し、備かに外方に積み出す。		マメツ	マメツ	1/8以下	屈曲部内面に赤 色顔料付着	
SDe138上層	299	55	弥・裝飾高坏				中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口縁部は直立して立ち上がり、内面に鈍い稜をなし て開く。屈曲部外面に鈍い突起を有する。		上半：横ミガキ・マメツ 下半：マメツ 下半：マメツ	上半：横ミガキ・マメツ 下半：マメツ 下半：マメツ	1/8以下	外面稜に付着	
SDe138上層	300		弥・高坏	15.0			中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口縁部は直立気味に立ち上がり、肥厚して外反。端 部は鈍く尖る。		ヨコナテ、マメツ	ヨコナテ	1/8		
SDe138上層	301		弥・高坏	21.4			中・多、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口縁部は外反して開き、端部は肥厚して下方 に積み出す。		ヨコナテ	ヨコナテ	1/8以下		
SDe138上層	302		弥・脚		8.6		中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	脚部は緩やかに外反して開き、端部は肥厚して下方 に積み出す。		横ミガキ	横ミガキ	2/8	小田形透かし、 個数不明	
SDe138上層	303		弥・脚		12.4		細・多、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	脚部は緩やかに外反して開き、端部は肥厚して主 に下方に積み出す。		横ミガキ	横ミガキ	3/8	小田形透かし個 数不明	
SDe138上層	304		弥？・脚				中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	脚部は緩やかに開く		横ミガキ	横ミガキ	7/8		
SDe138上層	305	55	弥・脚		19.0		中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	屈曲部に突起。下段は外反して開き、端部は上方に 積み出す。		横ミガキ	横ミガキ	4/8	上・下口孔各 6。外面小黒斑	
SDe138上層	306		弥・脚		10.6		細・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	脚部は緩やかに開いて、端部は四角く納める。		横ミガキ	横ミガキ	2/8		
SDe138上層	307		弥・脚		16.0		中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	脚部は緩やかに開き、端部は四角く納め、上端を僅 かに外方に積み出す。		横ミガキ	横ミガキ	1/8		
SDe138上層	308		弥・鉢	15.8			中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口縁部は直立して開き、端部は丸く納める。		横ミガキ	横ミガキ	1/8以下		
SDe138上層	309	55	弥・小形鉢	4.3	4.7		中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口縁部は直立し鈍く尖る。底部は僅かに平底を呈す る。		横ミガキ	横ミガキ	7/8		
SDe138上層	310		弥・大形鉢	34.2			粗・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	内湾気味の体部より緩く屈曲して、口縁部は外反し て開く。端部は四角く納めつつ下方へ突出する。		横ミガキ	横ミガキ	1/8以下		
SDe138上層	311		弥・瓶？				中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	直口縁。端部は四角く納める。		横ミガキ	横ミガキ	1/8以下	把手部分に黒 赤色顔料付着	
SDe138上層	312		弥・脚		2.4		中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	ハの字形に開く粗雑な脚部を付す		横ミガキ	横ミガキ	底部完存		
SDe138上層	313	55	弥・把手？				中・少、石英・金 雲母含む	(外)灰白	中実円柱状を呈し端部は丸く納める。		横ミガキ	横ミガキ	小片		
SDe138上層	314	56	弥・把手付鉢		11.6		粗・普、石英含む	(外)灰白 (内)灰白	上げ底の底部より鈍く屈曲して、外反気味に開く いわゆるジョッキ形。底端部は外方に引き出しつつ、 四角く納める。体部一方に矩形の把手を付す。		横ミガキ	横ミガキ	2/8		
SDe138上層	315		弥・大形器台	33.2			中・普、石英・黒 雲母・赤色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口縁部は外反して大きく開く。端部は粘土板を貼付 して上方へ小さく積み上げつつ、下方へ大きく垂下 する。		横ミガキ	横ミガキ	1/8		
SDe138上層	316		弥・大形器台	36.0			中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口縁部は大きく外反して開き、端部は肥厚しつ上 方に積み上げ、下方にも突出する。		横ミガキ	横ミガキ	1/8以下		
SDe138上層	317		弥・？		3.4		中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	やや突出した平底で、厚めの底部。		横ミガキ	横ミガキ	7/8	内面赤色顔料付 着	
SDe138上層	318		弥・？		4.0		粗・普、石英・金 雲母含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	底部平底。		横ミガキ	横ミガキ	底部完存		
SDe138上層	319		弥・？		4.4		中・普、石英含む	(外)灰黄褐 (内)灰黄褐	安定した平底。		横ミガキ	横ミガキ	底部完存	外面小黒斑	
SDe138上層	320		弥・？		7.2		細・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	底部厚めの安定した平底。		横ミガキ	横ミガキ	3/8	外面稜付着・赤 斑	
SDe138上層	321		弥・？		6.9		粗・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)暗灰黄 (内)黄灰	底部はやや突出した平底。		横ミガキ	横ミガキ	5/8		
SDe138下層	322		弥・脚		(16.8)		中・普、石英・金 雲母含む	(外)黒褐、明赤褐 (内)灰黄褐	緩やかに屈曲してハの字形に開く。屈曲部に明赤目 突起を付す。穿孔上下に各7ヶ所		横ミガキ	横ミガキ	3/8	外面突帯に赤色 顔料付着	

報告書 遺構番号	押図	図版	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	端部形状	外面調整	内面調整	残存率	備考
SDe138上層	326	56	弥・並	11.4			中・少、石英・金 葉母、赤色粒含む	(外)灰白 (内)灰白	外傾して開口縁部。端部は四角く納め、内外に小さく突出する。中に断面三角形の刻み目突帯を付す。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	
SDe138上層	327		弥・並				中・多、石英・角 閃石、金葉母・赤 色粒含む	(外)明赤褐色にぶ い橙	口縁部は緩く外反して開き、端部は下方へ狭み出す。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8以下	端面赤色顔料付 着
SDe138上層	328		弥・並	14.4			中・多、石英・角 閃石、金葉母含む	(外)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れ返して短い。端部は上下に狭み出す。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	
SDe138上層	329		弥・並	13.8			細・普、石英・角 閃石、金葉母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色	口縁部は強く折り返して短い。端部は下方に引き延ばしつづつ上方へ狭み上げる。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8以下	
SDe138上層	330	56	弥・並	15.8			中・多、石英・角 閃石含む	(外)にぶい黄褐色	口縁部は大きく外反して開き、端部は下方へ引き出しつづつ上方へ狭み上げる。	ヨコナデ	ヨコナデ	3/8	
SDe138上層	331	55	弥・並	9.6			中・普、石英・角 閃石、金葉母含む	(外)褐 (内)褐	口縁部は直立意味に立ち上がり、外反して開く。端部は四角く納める。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8以下	口縁；上半ヨコナデ、下半；指オサエ サエ 頸部；横板ナデの後ナデ
SDe138上層	332	56	弥・並	15.0			中・普、石英・角 閃石、金葉母含む	(外)褐 (内)褐	口縁部は緩やかに外反して開く。端部は四角く納め、下方に僅かに突出する。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	
SDe138上層	333	56	弥・並	14.4			細・普、石英・角 閃石、金葉母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色	口縁部は強く折り返し短い。端部は鈍く狭み上げる。	ヨコナデ	ヨコナデ	4/8	口縁；ヨコナデ 上半は横板ナデの後ナデ、下半は指オサエ・ナデ
SDe138上層	334	56	弥・並	13.0			細・少、石英含む	(外)にぶい黄褐色	口縁部はやや内傾意味に立ち上がり緩やかに外反して開く。頸基部に断面三角形の突帯。端部は四角く納める。	ヨコナデ	ヨコナデ	7/8	口縁部；上半横板ナデの後ヨコナデ、 下半指オサエの体部
SDe138上層	335		弥・並	11.4			中・多、石英・角 閃石、赤色粒含む	(外)淡黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は外傾した短い頸部より鈍く折れて、短く開く。端部は四角く納め、僅かに狭み上げる。	ヨコナデ	ヨコナデ	2/8	口縁；ヨコナデ 頸部；横板ナ デ？ 体部；指オサエ・ナデ
SDe138上層	336		弥・並	13.8			中・普、石英・角 閃石、金葉母・赤 色粒含む	(外)暗灰黄 (内)暗灰黄	口縁部は大きく外反して開き、端部は狭み上げる。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	
SDe138上層	337		弥・短頸	14.2			粗・普、石英・角 閃石含む	(外)にぶい黄褐色	口縁部は緩やかに外反して開く。端部は四角く納め、つづつ僅かに下方に突出する。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8以下	
SDe138上層	338	57	弥・並				細・普、石英・角 閃石、金葉母含む	(外)にぶい黄褐色	頸部小片	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8以下	
SDe138上層	339		弥・並	15.6			中・少、石英・角 閃石含む	(外)或黄 (内)にぶい黄褐色	口縁部は内傾する頸部より鈍く折れて短く開く。端部は四角く納める。	ヨコナデ	ヨコナデ	2/8	
SDe138上層	340	56	弥・並	17.0			中・多、石英・角 閃石、金葉母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色	口縁部は大きく外反して開き、端部は上下に小さく狭み出す。	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁完存	
SDe138上層	341	57	弥・並	15.4			中・普、石英・角 閃石、金葉母含む	(外)にぶい黄褐色	口縁部は強く折り返して、水平に近く開く。端部は鋭く狭み上げ、内面に凹縁。	ヨコナデ	ヨコナデ	2/8	
SDe138上層	342	57	弥・並	15.6			中・普、石英・角 閃石、金葉母含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	口縁部は強く折れて水平に開き、端部は僅かに狭み上げる。下方にも引き出す。	ヨコナデ	ヨコナデ	2/8	口縁；ヨコナデ、凹縁2～3条 頸部；斜板ナデの後ヨコナデ
SDe138上層	343		弥・並	13.2			中・普、石英・角 閃石含む	(外)灰黄 (内)灰黄	口縁部は緩やかに外反して開き、端部は四角く納める。	ヨコナデ	ヨコナデ	2/8	口縁；ヨコナデ、鈍い凹縁 頸 部；斜板ナデ、下位指オサエ ・ナデ
SDe138上層	344	57	弥・並	16.8			中・普、石英・角 閃石、金葉母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色	やや内傾する頸部より口縁部は強く折れて短く開く。端部は鈍く狭み上げる。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	口縁；ヨコナデ 頸部；横板ナ デの後指オサエ・ナデ 体部；指オ サエ・ナデ
SDe138上層	345		弥・二重口縁 壺	17.2			中・少、石英含む	(外)にぶい黄褐色	口縁部は外反して開き、端部は外上方に引き出しつづつ鋭くなる。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	
SDe138上層	346		弥・並	23.4			中・多、石英・角 閃石、金葉母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色	口縁部は水平に近く開き、端部は上方に大きく狭み上げ、下方にも突出する。端部は凹む。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	
SDe138上層	347		弥・並	22.0			中・普、石英・角 閃石、金葉母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れて短く開く。端部は狭み上げつづつ下方にも小さく引き出す。	ヨコナデ	ヨコナデ	2/8	口縁；ヨコナデ、鈍く凹縁状に凹 む 頸部；横板ナデ
SDe138上層	348		弥・並	16.4			粗・普、石英含む	(外)にぶい黄褐色	口縁部は緩やかに外反して開き、端部は四角く納める。	ヨコナデ	ヨコナデ	2/8	口縁部；ヨコナデ 体部；横板ナ デ

報告書 遺構番号	挿図	図版	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	端部形態	外面調整	内面調整	残存率	備考
349		57	弥・広口壺				中・普・石英・角 閃石・金雲母含む	(外)黄褐色 (内)黄灰	頸基部に断面柱形の刻み目突帯。	頸部；爪庄痕 体部；マメツ	マメツ・ハクリ	1/8以下	
350		57	弥・二重口縁 壺	19.4			粗・普・石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)黄褐色	内傾する頸部より強く折れて開き、口縁部は内傾する。	口縁；上半ヨコナデで鈍い凹線、 下半ヨコナデ 頸部；縦板ナデ	口縁；上半ヨコナデで鈍い凹線、 下半ヨコナデ 頸部；縦板ナデ	1/8	
351			弥・甕	12.8			中・少・石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)黒褐色	口縁部は強く折れて、短く開く。端部は主に上方へ 積み上げる。	口縁；鈍い凹線2条 口縁；ヨコ ナデ 体部；指オサエ	口縁；ヨコナデ 体部；ヨコナデ ・指オサエ	1/8	
352			弥・甕	15.9			細・少・石英・角 閃石・金雲母含む	(外)黒灰 (内)灰黄褐色	口縁部は強く折れて短い。端部は上方へ積み上げ つ、下方にも突出する。	口縁部；凹線2条 口縁部；ヨコ ナデ	口頸部；ヨコナデ	1/8	
353			弥・甕	15.6			中・普・石英・角 閃石・金雲母含む	(外)黒 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れ短い。端部は鈍く積み上げる。	口縁部；鈍い沈線 口頸部；ヨコナ デ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ	1/8	口縁部外面残付 着
354			弥・甕	14.2			中・普・石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れ短い。端部は鈍く積み上げる。	口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口縁；ヨコナデ 頸部；横ハケの 後ヨコナデ 体部；指オサエ・ナ デ	1/8	口縁部外面残付 着
355			弥・甕	15.5			中・普・石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れ短い。端部は鈍く積み上げる。	口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ 体部；指オサ エ・ナデ	1/8以下	口縁部外面残付 着
356			弥・甕	13.9			中・普・石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れて短く、端部は鈍く積み上げ、内 面が凹線状に凹む。	口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ 体部；指オサ エ・ナデ	1/8以下	口縁部外面残付 着
357			弥・甕	14.1			中・少・石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れて、短く開く。端部は鈍く積み上 げる。	口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ 体部；指オサ エ・ナデ	1/8以下	
358			弥・甕	13.6			中・普・石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れて短く、端部は鈍く積み上げる。	口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ 体部；指オサ エ・ナデ	1/8	口縁部外面残付 着
359			弥・甕	13.8			中・普・石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)黒褐色	口縁部は強く折れ短い。端部は鈍く積み上げる。	口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ 体部；指オサ エ・ナデ	1/8	口縁部外面残付 着
360			弥・甕	14.0			中・多・石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れて短い。端部は鈍く積み上げる。	口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ 体部；指オサ エ	1/8	口縁部外面残付 着
361			弥・甕	13.1			細・普・石英・角 閃石・金雲母・赤色 粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れ短い。端部は鈍く積み上げ、内面 に凹面。	口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ、 ハクリ	マメツ・ハクリ	1/8	
362			弥・甕	13.0			中・普・石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れ短い。端部は鈍く積み上げる。	口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ 体部；指オサ エ・ナデ	1/8	口縁部外面残付 着
363			弥・甕	13.4			中・普・石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)灰黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れて短い。端部は肥厚しつつ、鈍く 積み上げる。	口頸部；ヨコナデ 体部；縦・斜 ハケ	口頸部；ヨコナデ 体部；指オサ エ・ナデ	1/8	口縁部外面に紫 付着
364			弥・甕	14.4			中・普・石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れ短い。端部は鈍く肥厚するのみ。	口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ 体部；指オサ エ・ナデ	1/8	口縁部外面残付 着
365			弥・甕	12.6			粗・普・石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折り返して短い。端部は鈍く積み上げ る。	口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ、 ハクリ	口頸部；ヨコナデ 体部；指オサ エ・ナデ	1/8	口縁部外面に紫 付着
366			弥・甕	14.3			中・普・石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れ短い。端部は鈍く積み上げる。	口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ 体部；横ハケ の後指オサエ・ナデ	2/8	体部外面黒斑
367			弥・甕	13.4			中・普・石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れて短い。端部は鈍く積み上げる。	口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ 体部；指オサ エ・ナデ	1/8	
368			弥・甕	14.0			中・普・石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)黒 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れ短い。端部は僅かに積み上げる。	口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ 体部；指オサ エ・ナデ	1/8	口縁部外面残付 着
369			弥・甕	14.5			中・普・石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れて短い。端部は積み上げる。	口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ 体部；指オサ エ・ナデ	1/8	口縁部外面残付 着
370			弥・甕	15.8			中・普・石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)黒 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れ短い。端部は鈍く積み上げる。	口頸部；鋭い凹線 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ 体部；指オサ エ・ナデ	1/8	口縁部外面に紫 付着
371			弥・甕	14.1			中・普・石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れ短い。端部は鈍く積み上げる。	口頸部；ヨコナデ	ヨコナデ	2/8	口縁部外面残付 着

報告書 遺構番号	挿図	図版	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	端部	形	部	意	外面調整	内面調整	残存率	備考
372		弥・甕		15.2			中・普、石英、角 閃石、金雲母赤色 粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は強く折れて短い。端部は鋭く積み上げる。			ヨコナデ	口頸部；ヨコナデ エ・ナデ	口頸部；指オサ 体部；指オサ	1/8	口縁部外面煤付 着
373		弥・甕		15.4			中・普、石英、角 閃石、金雲母赤 色粒含む	(外)褐 (内)にぶい黄橙	口縁部は強く折れて短い。端部は鋭く積み上げる。			ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	口縁部外面僅か に煤付着
374		弥・甕		14.8			中・普、石英、角 閃石、金雲母赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は強く折り返して短い。端部は鈍く積み上げる。			口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ エ・ナデ	口頸部；指オサ 体部；指オサ	2/8	口頸部外面煤付 着
375		弥・甕		13.9			細・普、石英、角 閃石、金雲母赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は強く折れて短い。端部は鈍く積み上げる。			口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ エ・ナデ	口頸部；指オサ 体部；指オサ	1/8	口頸部外面煤付 着
376		弥・甕		15.0			中・普、石英、角 閃石、金雲母赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は強く折れて短い。端部は鈍く積み上げる。			口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ エ・ナデ	口頸部；指オサ 体部；指オサ	1/8	口縁部外面煤付 着
377		弥・甕		13.8			細・普、石英、角 閃石、金雲母赤 色粒含む	(外)明褐 (内)にぶい黄橙	口縁部は強く折れて、端部は僅かに積み上げる。			口頸部；ヨコナデ 体部；？	口頸部；ヨコナデ エ・ナデ	口頸部；指オサ 体部；指オサ	1/8	外面厚く煤付着
378		弥・甕		13.8			中・普、石英、角 閃石、金雲母赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は強く折れて短い。端部は鈍く積み上げる。			口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ エ・ナデ	口頸部；指オサ 体部；指オサ	1/8	口縁部外面に煤 付着
379		弥・甕		14.4			中・普、石英、角 閃石、金雲母赤 色粒含む	(外)にぶい褐 (内)にぶい褐	口縁部は強く折れて短い。端部はやや鋭く積み上げる。			口縁；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ エ・ナデ	口頸部；指オサ 体部；指オサ	1/8	口縁部外面煤付 着
380		弥・甕		15.0			中・普、石英、角 閃石、金雲母赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は強く折れて短い。端部は鈍く積み上げる。			口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ エ・ナデ	口頸部；指オサ 体部；指オサ	2/8	口頸部外面煤付 着
381		弥・甕		15.6			細・普、石英、角 閃石、金雲母赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は強く折れて短い。端部は鈍く積み上げる。			口縁；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ エ・ナデ	口頸部；指オサ 体部；指オサ	2/8	口縁部外面僅か に煤付着
382		弥・甕		14.0			中・普、石英、角 閃石、金雲母赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は強く折れて短い。端部は鈍く積み上げる。			口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ エ・ナデ	口頸部；指オサ 体部；指オサ	1/8	口頸部外面煤付 着
383	58	弥・甕		15.2			中・普、石英、角 閃石、金雲母赤色 粒含む	(外)にぶい褐 (内)にぶい褐	口縁部は強く折れて短く延び、端部は鈍く上方に積み上げる。			口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ エ・ナデ	口頸部；指オサ 体部；指オサ	1/8	口縁部外面煤付 着
384		弥・甕		13.4			中・多、石英、角 閃石、金雲母赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は強く折れて短い。端部は鈍く積み上げる。			口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ エ・ナデ	口頸部；指オサ 体部；指オサ	1/8	口縁部外面煤付 着
385		弥・甕		15.6			中・普、石英、角 閃石、金雲母赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は強く折り返して短い。端部は鈍く積み上げる。			口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ エ・ナデ	口頸部；指オサ 体部；指オサ	1/8	口縁部外面煤付 着
386		弥・甕		12.8			細・普、石英、角 閃石、金雲母赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は強く折れて短い。端部は僅かに積み上げる。			口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ エ・ナデ	口頸部；指オサ 体部；指オサ	2/8	口縁部外面煤付 着
387		弥・甕		13.0			中・普、石英、角 閃石、金雲母赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は強く折り返し、短い。端部は鈍く積み上げる。			口縁；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口縁；ヨコナデ？ 指オサエ	口頸部；指オサ 体部；指オサ	2/8	口縁部外面煤付 着
388		弥・甕		14.6			中・多、石英、角 閃石、金雲母赤 色粒含む	(外)にぶい褐 (内)にぶい褐	口縁部は強く折れて短い。端部は鈍く積み上げる。			口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ エ・ナデ	口頸部；指オサ 体部；指オサ	1/8	体部外面下半煤 付着
389		弥・甕		15.4			細・普、石英、角 閃石、金雲母赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は強く折れて短い。端部は鈍く積み上げる。			口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ エ・ナデ	口頸部；指オサ 体部；指オサ	1/8	口頸部外面僅か に煤付着
390		弥・甕		14.8			中・普、石英、角 閃石、金雲母赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は強く折れ、外反気味に開く。端部は鈍く積み上げる。			口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ エ・ナデ	口頸部；指オサ 体部；指オサ	1/8	口頸部外面煤付 着
391	58	弥・甕		13.9			中・普、石英、角 閃石、金雲母赤 色粒含む	(外)にぶい褐 (内)にぶい褐	口縁部は強く折れて短い。端部は鈍く積み上げる。			口頸部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ エ・ナデ	口頸部；指オサ 体部；指オサ	4/8	口縁部外面煤付 着
392	57	弥・甕		15.0			中・多、石英、角 閃石、金雲母赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は強く折れて短く開く。端部は鈍く上方に積み上げる。			口縁；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナデ エ・ナデ	口頸部；指オサ 体部；指オサ	2/8	体部外面煤付着



報告 番号	器 種	口径	器 高	口径	胎 土	色 調	端 部 形 態	外 面 調 整	内 面 調 整	残 存 率	備 考
418	弥・?	5.6			中・普、石英・角 閃石含む	(外)灰白 (内)灰白	八の字形に開く脚部。端部は粗雑に丸く納める。	指オサエ・ナデ	横板ナデ	7/8	
419	弥・?	3.0			中・多、石英・赤 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)黒	やや厚い、ハの字形に開く粗雑な脚部。	体部：縦ケズリ、マメツ著 脚部：指オサエ	マメツ・ハクリ	7/8	製土器
420	弥・?	4.0			粗・普、石英・角 閃石含む	(外)浅黄 (内)灰黄	やや突出した平底。	体部：タタキメ 底面：ケズリ	板ナデ	底部完好	外面黒斑
421	弥・?	5.0			中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)黒 (内)褐	底部はやや突出した平底。	体部：縦ミガキ 底面：ミガキ	縦ケズリ	7/8	外面黒斑
422	弥・?	4.5			(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐		底部平底。	体部：縦ケズリの後ナデ? 底面： ケズリ	縦・斜ケズリ	底部完好	外面及び内面上 半に煤・炭化物 付着
423	弥・?	8.0			中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	底部やや丸みを帯びた平底。	体部：ヨコナデの後縦ミガキ 底面：ミガキ	縦・斜ケズリ	7/8	
424	弥・?	5.5			細・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	底部はやや突出した平底。	体部：縦ミガキ 底面：ミガキ	縦ケズリ、マメツ	7/8	体部上半内面に 炭化物、体部外 面に煤付着
425	弥・右付鉢	3.7			中・少、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	張りの弱い体部に、八の字形の粗雑な脚部を付す。	体部：指オサエ・ナデ 脚部：指オ サエ	体部：指オサエ・ナデ 脚部：ナデ	底部完好	外面黒斑
426	弥・台付鉢?	4.4			粗・普、石英含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	底縁辺部を厚く揃み出し上げ底状を呈する。やや 厚めの底面。	体部：縦板ナデ?・マメツ 底 面：ナデ	ケズリ?マメツ	5/8	外面黒斑
427	土?・?	14.8			粗・少、石英・黒 雲母・赤色粒含む	(外)浅黄 (内)残黄	体部は内湾気味に大きく開く。底部は輪状でやや厚 い。	体部：縦板ナデ?・ハクリ 底面：ナデ	体部：横ケズリ 底面：指オサエ 上半：ヨコナデ 下半：分割ミガ キ	6/8	外面黒斑
428	弥・高坏	22.2			中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)褐 (内)にぶい褐	口縁部は強く屈曲して、外傾して短く開く。端部は 外方に揃み出し内方にも突出する。	体部：縦板ナデ?・ハクリ 底面：ナデ	体部：横ケズリ 下半：分割ミガ キ	3/8	
429	弥・高坏	26.2			細・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	坯中で強く折れて、上半部は外傾する。端部は外 方へ引き延ばしつつ内方にも突出する。頂部に平坦 の後分割ミガキ	体部：縦板ナデ?・ハクリ 底面：ナデ	体部：横ケズリ 下半：分割ミガ キ	1/8	
430	弥・高坏	17.0			中・普、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)明褐 (内)明褐	口縁部は外反し、端部は外方へ揃み出す。	体部：ヨコナデ 下半：横ケ ズリの後ミガキ	体部：横ケズリ	3/8	
431	弥・高坏	19.6			細・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	口縁部は外反して大きく開き、端部は丸く納める。 内面にサツ面。	体部：ヨコナデ 下半：横ケ ズリ	体部：ヨコナデ 下半：分割 ミガキ	1/8以下	
432	弥・高坏	23.8			中・少、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	口縁部は外反して開き、端部は丸く納める。端面に サツ面。	体部：ヨコナデ 下半：横ケ ズリ	体部：ヨコナデ 下半：分割 ミガキ	1/8以下	
433	弥・高坏	23.2			細・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)黄 (内)黄	口縁部は直立気味に立ち上がり、外反して大きく開 く。端部は丸く納める。	体部：ヨコナデ 下半：横ケ ズリの後分割ミガキ	体部：ヨコナデ 下半：分割 ミガキ	3/8	
434	弥・高坏	21.6			中・少、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	口縁部は外反して開き、端部は丸く納める。	体部：ヨコナデ 下半：横ケ ズリの後分割ミガキ	体部：ヨコナデ 下半：分割 ミガキ	2/8	
435	弥・高坏	22.6			中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)黄 (内)にぶい黄褐	口縁部は外反して開き、端部は丸く納め、内面にサ ツ面を有する。	体部：ヨコナデ 下半：横ケ ズリの後分割ミガキ 脚部：縦ミ ガキ	体部：ヨコナデ 下半：横ケ ズリ 脚部：横ケズリ	4/8	
436	弥・高坏	23.6			中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)黄 (内)黄	口縁部は外反して開き、端部は丸く納め、内面に鈍 いサツ面	体部：斜ミガキの後上下端ヨコ ナデ 下半：横ケズリの後分割 ミガキ・マメツ 脚部：マメツ	体部：斜ミガキの後上下端ヨコ ナデ 下半：横ケズリ 脚部：横ケズ リ	3/8	
437	弥・高坏	25.0			粗・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	口縁部は外反して開き、端部は丸く納める。	体部：ヨコナデ 下半：横ケ ズリの後分割ミガキ 脚部：ヨコ ナデ	体部：ヨコナデ 下半：横ケ ズリ 脚部：横ケズリ	4/8	
438	弥・高坏	20.0	16.3	20.0	中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	口縁部は外反して開き、端部は丸く納め、内面にサ ツ面を有する。	体部：ヨコナデ 下半：横ケ ズリの後分割ミガキ 脚部：縦ミ ガキ	体部：ヨコナデ 下半：横ケ ズリ 脚部：横ケズリ	4/8	脚部第1孔 上段 1孔、下段2孔 1対3方向
439	弥・高坏	19.6	16.1	19.6	中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	口縁部は外反して開き、端部は丸く納める。内面に 鈍い凹縁。底部は鋭やかに開いて端部は四角く納め る。上下4方向透し孔。	体部：ヨコナデ 下半：横ケ ズリの後分割ミガキ 脚部：ヨコ ナデ	体部：ヨコナデ 下半：横ケ ズリ 脚部：横ケズリ	3/8	脚外面と内面に 黒斑



報告書番号	挿入	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	端部形態	外面調整	内面調整	残存率	備考
SDe138上層	440	弥・高坏	21.6			中・少、石英・赤色粒含む	(外)浅黄褐色 (内)黄褐色	口縁部は大きく外反して開く。端部は鈍く尖る。	坯上半：ヨコナデ 坯下半：横ケズリ 脚：ナデ	坯上半：横ナデ 坯下半：横ナデ 脚：縦ミガキ	1/8以下	
SDe138上層	441	弥・脚			14.0	細・普、石英・角閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	脚部は緩やかに開き、端部は下方に大きく引き延ばして、上方にも小さく突出する。	端部：鈍い凹線2条 脚部：縦ミガキ ナデ	横ケズリ	1/8	脚部は凹線入り
SDe138上層	442	弥・脚			12.0	細・少、石英・角閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	脚部は緩やかに開き、端部は下方に引き出し、上方へ向って開く。	脚部：ヨコナデ 脚部：縦ミガキ ナデ	横ケズリ	1/8	
SDe138上層	443	弥・脚			14.0	細・普、石英・角閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	脚部は緩やかに開き、端部は下方に強く引き出し、上方への拡張は弱い。	端部：鈍い凹線3条 脚部：ヨコナデ ナデ	横ケズリ	1/8	
SDe138上層	444	弥・脚			19.0	中・普、石英・角閃石・金雲母含む	(外)黄褐色 (内)黄褐色	脚部は緩やかに開き、端部は四角く納め、鈍く尖る。	ハクリ、ヘラ指沈線	横ケズリ	1/8	2孔1対小円孔
SDe138上層	445	弥・脚			20.6	中・普、石英・角閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	脚部は緩やかに開き、端部は四角く納める。	脚部：ハクリ、沈線 端部：沈線状の段	横ケズリ、ハクリ	2/8	2孔1対の円形透かし
SDe138上層	446	弥・脚			17.9	中・普、石英・角閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	脚部は緩やかに開き、端部は四角く納める。	ヨコナデ、マメツ	横ケズリ	1/8	
SDe138上層	447	弥・脚			17.4	中・普、石英・角閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	脚部は緩やかに開き、端部は四角く納める。	ヨコナデ	横ケズリ	4/8	2孔1対の小円孔3ヶ所
SDe138上層	448	弥・脚			19.1	中・普、石英・角閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	脚部は緩やかに開き、端部は上下に鈍く納め出す。	脚部：縦ハケ、ハクリ	脚部：上半横ケズリ 下半横・斜ハケの後ヨコナデ	3/8	脚部焼成後穿孔
SDe138上層	449	弥・脚?			15.4	中・普、石英・角閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	脚部は緩やかに折れて開き、端部は丸く納める。	縦ハケ、マメツ	マメツ・ハクリ	1/8	
SDe138上層	450	弥・鉢	18.6			中・普、石英・角閃石・金雲母含む	(外)黒褐色 (内)黒褐色	やや内湾気味に立ち上がり、口縁部下位で鋭い段を有する。端部は外方へ突出し、内湾気味に鈍く納め、端部は四角く納める。	口縁：ヨコナデ 体部：縦ミガキ	口縁：ヨコナデ 体部：マメツ	1/8	体部下半外面に意匠不明の線刻
SDe138上層	451	弥・鉢	18.7			中・普、石英・角閃石・金雲母含む	(外)浅黄褐色 (内)浅黄褐色	内湾気味に開き、端部は四角く納めつつ上端を僅かに緩み上げる。	口縁：ヨコナデ 体部：横ケズリ	横ハケの後放射状ミガキ	3/8	
SDe138上層	452	弥・鉢	14.8	8.7	4.4	粗・普、石英・角閃石・赤色粒含む	(外)灰白 (内)灰白	口縁部は丸く納める。底部はいびつな平底	口・体部：ナデ? マメツ著 底面：未調整	口・体部：横ハケ 底面：指オサエ	2/8	外面黒斑
SDe138上層	453	弥・鉢	24.2			中・普、石英・角閃石・赤色粒含む	(外)灰黄褐色 (内)灰黄褐色	浅いボール状を呈し、口縁部は四角く納める。底部は丸底か。	口縁：ヨコナデ 体部：縦・斜板ナデ	斜ハケの後放射状ミガキ	1/8	口縁部黒斑
SDe138上層	454	弥・鉢	27.0			細・少、石英・角閃石・赤色粒含む	(外)黒褐色 (内)灰白	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は四角く納める。	口縁：ヨコナデ 体部：縦・斜ハケ	口縁：ヨコナデ 体部：縦・横ハケ	1/8以下	
SDe138上層	455	弥・鉢	26.4			中・少、石英・角閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は内湾気味に開き、端部は鈍く尖る。	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ	口縁：横板ナデ 体部：縦・斜ハケの後ヨコナデ	1/8	
SDe138上層	456	弥・鉢	33.0			細・少、石英・角閃石・赤色粒含む	(外)浅黄褐色 (内)浅黄褐色	緩やかに内湾して開き、口縁部は四角く納める。	口縁：ヨコナデ 体部：縦・斜ハケ	口縁：横板ナデ 体部：縦・斜ハケの後ヨコナデ	1/8	
SDe138上層	457	弥・大形鉢	32.4			中・普、石英・角閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	やや内湾して開き、端部は外方へ鈍く納める。頂部に中位で屈曲して上半部はやや内湾気味に直立する。端部は丸く納め、内面にサジ面。	口縁：ヨコナデ、マメツ 横ケズリ、マメツ	ヨコナデ	1/8	破損後磁熱
SDe138上層	458	弥・大形鉢	32.4			中・普、石英・角閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は外湾して開き、端部は丸く納める。	口縁：ヨコナデ 体部：横ケズリ	口縁：ヨコナデ	1/8	
SDe138上層	459	弥・大形鉢	40.6			中・少、石英・角閃石・赤色粒含む	(外)明褐色 (内)明褐色	口縁部は中位で屈曲して外反して開く。端部は丸く納め、内面に受部状のサジ面。	口縁：ヨコナデ 体部：横ケズリ	口縁：ヨコナデ、鈍い凹線2~3条 体部：横ケズリ	1/8	片口部外面煤付
SDe138上層	460	弥・大形鉢	42.6			粗・少、石英・角閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は丸く納め、内湾して開く。口縁部は四角く納める。	口縁：ヨコナデ 体部：横ケズリ	口縁：ヨコナデ	1/8	
SDe138上層	461	弥・小形鉢	18.0			細・少、石英・角閃石・赤色粒含む	(外)浅黄褐色 (内)浅黄褐色	浅いボール状を呈し、口縁部は丸く納める。	ハクリ、マメツ著	ハクリ、マメツ著	2/8	
SDe138上層	462	弥・鉢	18.4			中・普、石英・角閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は鈍く折り返して短く開く。端部は僅かに外方に引き出しつつ丸く納める。	口縁：ヨコナデ 体部：縦ミガキ	口縁：ヨコナデ 体部：マメツ	2/8	体部外面へフ指記号文
SDe138上層	463	弥・鉢	18.5			中・少、石英・角閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	内湾して開き、口縁部は丸く納める。	口縁：ヨコナデ 体部：縦ミガキ	口縁：ヨコナデ 体部：マメツ	4/8	体部外面へフ指記号文
SDe138上層	464	弥・台付鉢			6.2	細・少、石英・赤色粒含む	(外)灰白 (内)灰白	脚部は強く張り、端部は丸く納める。体部は内湾気味に開く。	脚部：マメツ、脚部：縦ハケの後ヨコナデ、ナデ	脚部：マメツ、脚部：縦ハケの後ヨコナデ	3/8	ひずみのため体部の復元にやや難あり

報告番号	標本番号	種名	口径	器高	底径	胎土	色	調	端部	形状	外調	内調	残存率	備考
465	De138上層	弥・甌?	17.6			中・普、石英、角閃石?、赤色粒含む	(外)灰黄褐 (内)にぶい黄橙	縦やかに内湾気味に開き、端部は丸く納め、波状を呈する。	板ナデ?	縦ケズリの後上半横ハケ	縦ケズリの後上半横ハケ	1/8	外面黒斑	
466	De138上層	弥・甌				中・少、石英、角閃石含む	(外)灰白 (内)にぶい黄橙	純い尖底。底部先端に焼成前穿孔。	縦ハケ	縦ケズリ	縦ケズリ	3/8	外面小黒斑	
467	De138上層	弥・甌	13.4	18.0		中・少、石英、角閃石、赤色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は直口。端部は丸く納める。底部は尖底で焼成前穿孔。	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	4/8 底部完存	外面黒斑	
468	De138上層	弥・甌				中・多、石英、角閃石、赤色粒含む	(外)灰黄 (内)灰黄	口縁部は直口。端部は丸く納める。底部は尖底で焼成前穿孔。	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	5/8	外面黒斑	
469	De138上層	弥・?	2.2	6.4		中・普、石英、赤色粒含む	(外)褐 (内)褐	中位やや上方でくびれる円筒形、口縁部は丸く納め、底部は丸底。	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	完存	外面頂部に小黒斑	
471	De138上層	弥・大形器台			22.2	中・普、石英、角閃石、赤色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	脚根部は大きく外反して開き、端部は四角く納める。	中位及び脚根部に凹線文、マメツ著	横ハケ、端部付近ヨコナデ?マメツ著	横ハケ、端部付近ヨコナデ?マメツ著	1/8	凹線透し孔上下2段各2孔1対4万回	
473	De138下層	細・染帯文土器				中・普、石英、角閃石、赤色粒含む	(外)黒褐 (内)にぶい黄橙	口縁部は断面矩形を呈し、直下に断面蒲葦形の刻み目突着。	ナデ?	ハナク	ハナク	細片		
474	De138下層	弥・広口壺	16.3			細・普、石英、角閃石、赤色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	内傾する頸部より口縁部は強く折り返して直線状に開く。端部は上方に鋭く積み上げる。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	3/8	口縁部内面一部煤付着	
475	De138下層	弥・二重口縁壺	10.6			粗・普、石英、角閃石、赤色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	2/8		
476	De138下層	弥・広口壺	15.8			中・普、石英、角閃石、赤色粒含む	(外)褐 (内)にぶい黄褐	内湾気味の頸部より、口縁部は強く折れて短く開く。端部は上下に大きく積み出す。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	2/8		
477	De138下層	弥・広口壺	13.3			細・多、石英、角閃石、赤色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	直立した頸部より強く折れて口縁部は短く開く。端部は上下に大きく積み上げる。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	1/8	外面体部下半煤付着	
478	De138下層	弥・細頸壺				中・普、石英、角閃石、赤色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	体部の張りは強い。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	1/8		
479	De138下層	弥・甌	14.0			細・普、石英、角閃石、赤色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄橙	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上方に大きく積み上げ、下方にも引き出す。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	1/8		
480	De138下層	弥・甌	16.6			中・普、石英、角閃石、赤色粒含む	(外)灰黄 (内)灰黄	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は四角く納め、上方に僅かに積み上げる。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	2/8	体部外面に僅かに煤付着	
481	De138下層	弥・甌	13.6			中・普、石英、角閃石、赤色粒含む	(外)褐 (内)褐	口縁部は強く折れて短く開く。端部は肥厚して僅かに上方に積み上げる。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	1/8	口縁部外面に僅かに煤付着	
482	De138下層	弥・甌	13.6			中・普、石英、角閃石、赤色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	口縁部は強く折れて短く開く。端部は純く積み上げる。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	1/8	口縁部外面に煤付着	
483	De138下層	弥・甌	16.3			中・普、石英、角閃石、赤色粒含む	(外)褐 (内)にぶい黄褐	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は純く積み上げる。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	1/8	口縁部外面に煤付着	
484	De138下層	弥・甌	15.6			中・普、石英、角閃石、赤色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄橙	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は僅かに上方に積み上げる。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	1/8	口縁部外面に煤付着	
485	De138下層	弥・甌	14.5			中・普、石英、角閃石、赤色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄橙	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は肥厚して僅かに上方に積み上げる。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	5/8	口縁部外面煤付着	
486	De138下層	弥・甌	16.6			中・多、石英、角閃石、赤色粒含む	(外)灰黄褐 (内)灰黄褐	口縁部は強く折れて短く開く。端部は鋭く上方に積み上げる。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	1/8	体部下外面煤付着	
487	De138下層	弥・甌	11.8			細・少、石英、角閃石、赤色粒含む	(外)灰白 (内)灰白	口縁部は純く折返して短く開く。端部は丸く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	2/8	口縁部内面一部炭化物付着	
488	De138下層	弥・甌	11.5			中・普、石英、角閃石、赤色粒含む	(外)灰黄 (内)灰黄	口縁部は純く折返して短く開く。端部は鋭く尖る。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	3/8		
489	De138下層	弥・甌	8.8			細・普、石英、角閃石、赤色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)黄褐	口縁部は純く折返して短く開く。端部は丸く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	1/8	体部外面僅かに煤付着	
490	De138下層	弥・甌	12.6	13.8	2.2	細・少、石英含む	(外)浅黄褐 (内)浅黄橙	口縁部は純く折返して短く開く。端部は丸く納める。底部は小さな平底で底面が指オサエにより凹む。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	口縁部は直立して短く、端部は四角く納める。	底部完存		

報告書 遺構番号	押取	図版	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	端部形態	外面調整	内面調整	残存率	備考
SDe138下層	491		弥・高坏	23.8			中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は外反して開き、端部は外方へ陥み出して、内面は凹線状に凹む。	上半；ヨコナデ 下半；横ケズリ	上半；ヨコナデ 下半；ヨコナデ	1/8	
SDe138下層	492		弥・高坏	13.1			細・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい褐色 (内)にぶい褐色	口縁部は直立気味に立ち上がり、外反して開く。端部は鋭く尖る。	上半；ヨコナデ 下半；ミガキ 横ケズリ	上半；ヨコナデ、鈍い凹線 下 半；ミガキ	1/8	外面残付着
SDe138下層	493		弥・脚		13.4		細・多、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)明褐色 (内)明褐色	脚部は縦やかに開き、端部は下方に強く引き延ばし、上方にも小さく突出する。	脚部；縦ハケの後一部ヨコナデ 端部；沈線	横ケズリ	1/8	
SDe138下層	494	62	弥・?		6.4		粗・普、石英含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	底部やや厚く、体部の張り強い。	体部；縦ハケ 底面；ハケ	ケズリ	底部完存	外面に黒斑
SDe138下層	495	62	弥・?		3.0		粗・多、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい褐色 (内)褐色	ハの字形に開く粗雑な脚部。	体部；ナデ？脚部；指オサエ・ナ デ	体・底部；指オサエ・ナデ？ 脚 部；指オサエ	底部完存	外面黒色化、劣 化著 製埋土器。
SDe138下層	496	62	弥・?		1.9		細・少、石英・金 雲母含む	(外)灰黄 (内)黒褐色	底部は突出し、上げ底気味。	体部；ナデ？ 下端に6ヶ所指オ サエ 底面；指オサエ	板ナデ	底部完存	
SDe138下層	497		弥・?		3.3		中・少、石英・金 雲母・砂岩粒？含 む	(外)灰白 (内)灰白	底部はやや厚い平底。	体部；タタキメ？の後ナデ 底 面；ナデ？	ケズリ	底部完存	外面黒斑
SDe138下層	498		弥・?		5.0		中・普、石英・金 雲母・赤色粒含む	(外)にぶい黄 (内)黒褐色	底部は突出が強く、上げ底となる。	体部；縦ミガキ 底面；ナデ	指オサエ・ナデ	5/8	
SDe138下層	499		弥・?		5.0		中・多、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)灰黄褐色 (内)黒褐色	やや突出した平底。	体部；縦ミガキ 底面；ナデ 底面；ミガキ	横ケズリ	底部完存	外面残付着
SDe138下層	500		弥・?		5.0		中・普、石英・角 雲母含む	(外)灰黄褐色 (内)黒褐色	底部はやや突出した平底で、薄い。	体部；縦ミガキ 底面；ミガキ	ケズリ	3/8	外面一部残付着
SDe138下層	501	62	弥・鉢	15.2			中・普、石英・金 雲母含む	(外)黒 (内)褐色	口縁部はくの字形に外反して開き、端部は丸く納め る。	口縁；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口縁；ヨコナデ 体部；縦ケズリ の後ミガキ	2/8	外面に残付着
SDe138下層	502		弥・小形鉢	13.5			微・少、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)黄褐色	口縁部は縦やかに折り返して短く開く。端部は丸く 納める。	口縁部；ヨコナデ 体部；ナデ？	口縁部；ヨコナデ 体部；斜ハケ	1/8	
SDe138下層	503	62	弥・鉢	15.2	9.7	3.5	中・少、石英・金 雲母・赤色粒含む	(外)明褐色 (内)にぶい黄褐色	内溜気味の体部から、口縁部は縦やかに折れて短く 開く。端部は丸く納める。	口縁；ヨコナデ 体部；縦ハケ、 ハクリ著	口縁；ヨコナデ？ 体部；上半斜 ハケ、下半斜板ナデ？、マメツ著	5/8	口縁部ひずみ大
SDe138下層	504	63	弥・小形鉢	7.8			細・少、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)浅黄褐色 (内)黄褐色	口縁部は内溜気味に開き端部は鈍く尖る。底部は尖 底。	ナデ？	斜ハケの後板ナデ	7/8	
SDe138下層	505		弥・小形鉢				中・少、石英・角 閃石・金雲母？ 赤色粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)浅黄	底部丸底。	縦ケズリ、マメツ・ハクリ著	横・斜ハケの後一部ナデ	3/8	
SDe114	508		弥・甕				中・普、石英含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色		上端へラ指沈線3条以上、横板ナ デ？	マメツ	細片	
SDe109	509		弥・甕	15.4			細・多、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口頸部は強く折れ短い。端部は小さく陥み上げる。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8以下	
SDe100	510		弥・短頸甕	14.6			中・多、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口頸部は縦く折れて、外反して開く。端部は肥厚し つつ、上方へ陥み上げる。	端部；鈍い凹線 口頸部；マメツ ・ハクリ	口頸部；ヨコナデ 体部；マメツ ・ハクリ	1/8	
SDe107	511		弥・直口甕	18.6			中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は外反して開き、端部は外方へ引き出しつつ、 上方へ鈍く突出する。	端部；鈍い凹線の後凹形刺突文 口縁；ヨコナデ	口縁；ヨコナデ、鈍い凹線	1/8以下	
SDe109	512		弥・?		4.0		中・少、石英含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	底部はやや突出した平底。	体部；指オサエ・ナデ 底面；マ メツ	体部；斜ハケ、マメツ	6/8	
SDe103	513		弥・高坏	20.4			中・多、石英・角 閃石・金雲母・赤色 粒含む	(外)にぶい褐色 (内)にぶい褐色	坏部中で屈曲して上半部は外反して開く。端部は 丸く納めつつ、内面にサジ面。	上半部；ヨコナデ 下半部；横ケ ズリの後分副ミガキ	上半部；ヨコナデ、鈍い凹線 下 半部；ヨコナデの後ミガキ	1/8以下	
SDe124	515	63	弥・甕				中・多、石英・黒 雲母含む	(外)灰黄 (内)灰黄	口縁部は縦く折れる。	沈線3条・マメツ	マメツ・ハクリ	小片	
SDe133	516		弥・甕				粗・多、石英・黒 雲母・赤色粒含む	(外)浅黄褐色 (内)浅黄褐色	口縁部は縦く屈曲して、端部は四角く納める。	口縁；マメツ・ハクリ 体部；沈 線1条、マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	1/8以下	
SDe121	517		弥・甕	13.2			細・多、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口頸部は強く折り返して短い。端部は小さく陥み上 げる。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	
SDe121	518		弥・甕	13.4			中・多、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口頸部は強く折り返して短い。端部は小さく陥み上 げる。	ヨコナデ、マメツ	ヨコナデ、マメツ	1/8	
SDe121	519		弥・高坏	14.9			中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	坏部中で屈曲し、上半部は外反して開く。端部は 鈍く尖る。	上半部；ヨコナデ 下半部；横ケ ズリ？の後分副ミガキ	上半部；ヨコナデ 下半部；ミガ キ	1/8以下	

報告書 遺構番号	押図	図版	器種	口径	器高	底径	胎土	色	調	端部	形態	外面調整	内面調整	残存率	備考
SDe132	520	弥・脚	弥・脚	16.6			粗・普・石英・黒色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	脚根部は縦やかに開き、端部は丸く納める。	縦ミガキ	縦ミガキ	横・斜ハケ	横・斜ハケ	1/8	
SDe121	521	弥・鉢	弥・鉢	18.4			細・普・石英・赤色粒含む	(外)黄澄 (内)にぶい黄澄	やや内湾気味に開き、端部は丸く納める。	口縁部；横ケズリ	口縁部；横ケズリ	縦ハケ	縦ハケ	1/8以下	
SDe116	522	弥・?	弥・?		4.2		中・多・石英・赤色粒含む	(外)褐灰 (内)にぶい黄澄	底部はやや突出した平底。	口縁部；横ケズリ	口縁部；横ケズリ	縦ハケ	縦ケズリ	3/8	体部外面黒付着
SDe62	523	弥・高坏	弥・高坏	25.0			中・普・石英・角閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	坏部は縦く屈曲して、上半部は直立気味に立ち上がり、端部は四角く納めつつ、小さく外方に掃み出す。口縁部はやや内湾気味に直立して開き、端部は丸く納める。	口縁部；横ケズリ	口縁部；横ケズリ	縦ハケ	ヨコナデ	1/8以下	
SDe84	524	土・直口壺	土・直口壺	9.4			中・少・石英・金雲母含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口頸部は強く折り返して短い。端部は小さく掃み上げられる。	口頸部；横ケズリ	口頸部；横ケズリ	縦ハケ	ヨコナデ	2/8	
SDe84	525	弥・甕	弥・甕	14.4			中・普・石英・角閃石・金雲母・赤色粒含む	(外)にぶい褐 (内)にぶい褐	口頸部は強く折り返して短い。端部は小さく掃み上げられる。	口頸部；横ケズリ	口頸部；横ケズリ	縦ハケ	ヨコナデ	1/8	
SDe84	526	弥・甕	弥・甕	15.5			中・多・石英・角閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口頸部は強く折り返して、外反気味に短く開く。端部は小さく掃み上げ、内面に凹線。	口頸部；横ケズリ	口頸部；横ケズリ	縦ハケ	ヨコナデ	1/8	
SDe84	527	弥・甕	弥・甕	14.4			中・普・石英・角閃石・金雲母・赤色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口頸部は強く折れて短い。端部は小さく掃み上げる。	口頸部；横ケズリ	口頸部；横ケズリ	縦ハケ	ヨコナデ	1/8	口頸部外面黒付着
SDe84	528	弥・高坏	弥・高坏	24.2			中・多・石英・角閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	坏中位で屈曲して、上半部は外傾して開く。端部は外方へ掃み出しつつ、内方へ突出し頂部に平坦面。	口頸部；横ケズリ	口頸部；横ケズリ	縦ハケ	ヨコナデ	1/8	
SDe122	529	弥・広口壺	弥・広口壺	16.0			粗・多・石英・角閃石・赤色粒含む	(外)にぶい褐 (内)黒褐	直立気味の頸部より強く折れて、口縁部は外上方に開く。端部は小さく掃み上げる。	口頸部；横ケズリ	口頸部；横ケズリ	縦ハケ	ヨコナデ	2/8	
SDe122	530	弥・甕	弥・甕	14.0			中・少・石英・赤色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口頸部は強く折り返して、外反して短く開く。端部は小さく掃み上げる。	口頸部；横ケズリ	口頸部；横ケズリ	縦ハケ	ヨコナデ	2/8	口頸部・体部下外面黒付着
SDe122	531	弥・甕	弥・甕	14.8			中・普・石英・角閃石・金雲母・赤色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口頸部は強く折れて短い。端部は小さく掃み上げる。	口頸部；横ケズリ	口頸部；横ケズリ	縦ハケ	ヨコナデ	1/8	
SDe122	532	弥・甕	弥・甕	13.4			粗・普・石英・角閃石・黒雲母・赤色粒含む	(外)にぶい褐 (内)にぶい褐	口頸部は強く折り返して短い。端部は鈍く肥厚するのみ。	口頸部；横ケズリ	口頸部；横ケズリ	縦ハケ	ヨコナデ	4/8	
SDe122	533	弥・甕	弥・甕	16.0			中・普・石英・角閃石・黒雲母・赤色粒含む	(外)にぶい褐 (内)にぶい褐	口頸部は強く折り返して短い。端部は鈍く肥厚するのみ。	口頸部；横ケズリ	口頸部；横ケズリ	縦ハケ	ヨコナデ	6/8	体部下外面黒付着
SDe122	534	弥・甕	弥・甕	15.0			粗・多・石英・角閃石・黒雲母・赤色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口頸部は強く折れて短く開く。端部は鈍く肥厚するのみ。	口頸部；横ケズリ	口頸部；横ケズリ	縦ハケ	ヨコナデ	2/8	体部下外面黒付着
SDe122	535	弥・脚	弥・脚		18.3		中・多・石英・角閃石・黒雲母含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	脚根部は縦やかに開き、端部は肥厚しつつ、四角く納める。	口頸部；横ケズリ	口頸部；横ケズリ	縦ハケ	ヨコナデ	2/8	裾部透し孔
SDe122	536	弥・大形鉢	弥・大形鉢	24.0			中・普・石英・角閃石・金雲母・赤色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	内湾気味の体部から鈍く屈曲して、口縁部は外反して開く。端部は外方へ突き出しつつ鋭く尖る。	口縁部；横ケズリ	口縁部；横ケズリ	縦ハケ	ヨコナデ	2/8	口縁部外面に黒付着
SDe122	537	弥・鉢	弥・鉢	20.3	8.2		中・普・石英・角閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	直線状に開く体部より口頸部は屈曲して、外傾気味に立ち上がる。端部は鈍く尖りつつ、内面に鈍いサシ面。底部は丸底。	口縁部；横ケズリ	口縁部；横ケズリ	縦ハケ	ヨコナデ	6/8	
SDe122	538	弥・小形鉢	弥・小形鉢	13.2	5.5		中・普・石英・角閃石・赤色粒含む	(外)にぶい褐 (内)にぶい褐	内湾気味に立ち上がる体部より、鈍く屈曲して口縁部に立ち上がる。端部は鈍く丸く納める。底部は平底。	口縁部；横ケズリ	口縁部；横ケズリ	縦ハケ	ヨコナデ	6/8	
SDe122	539	弥・小形鉢	弥・小形鉢	14.8			中・少・石英・角閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口頸部は強く折り返して、内湾気味に短く開く。端部は小さく掃み上げる。	口頸部；横ケズリ	口頸部；横ケズリ	縦ハケ	ヨコナデ	1/8	
SDe122	540	弥・甕	弥・甕	20.8	20.1		中・少・石英・角閃石・赤色粒含む	(外)黄澄 (内)黄澄	体頸は倒卵形を呈し、底部は平底で焼前穿孔し、頸部は強く折れて短く開き、端部は小さく上方へ掃み上げる。	口頸部；横ケズリ	口頸部；横ケズリ	縦ハケ	ヨコナデ	6/8	体部下外面黒斑
SDe122	541	弥・甕	弥・甕	21.0	22.5		中・普・石英・黒雲母・赤色粒含む	(外)黄澄 (内)黄澄	体部は倒卵形を呈し、口縁部は縦く屈曲して短く外反して開く。端部は丸く納める。底部は尖底で焼成前に穿孔。	口頸部；横ケズリ	口頸部；横ケズリ	縦ハケ	ヨコナデ	6/8	体部外面黒斑
SDe122	542	弥・?	弥・?		5.8		中・普・石英・角閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)褐灰	底部はやや突出した平底。	口頸部；横ケズリ	口頸部；横ケズリ	縦ハケ	ヨコナデ	底部ほぼ 完存	外面黒斑

報告書 遺構番号	挿図	図版	器種	口径	器高	底径	胎土	色	端部 形	外面調整	内面調整	残存率	備考
SDe122	543		弥・?			5.6	中・多、石英・角 閃石、金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	底部はやや突出した平底。	体部；縦ミガキ 底面；ミガキ	体部；縦ケズリ 底面；指オサエ	底部ほぼ 完存	外面黒斑、内面 炭化物付着
SDe122	544		弥・?			(3.4)	粗・多、石英・角 閃石、金雲母・赤色 粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)黒灰	底部はやや突出した平底。	体部；縦ケズリ、斜ケズリ 底面；指オサエ	体部；横・斜ケズリ	4/8	体部外面上位 方に帯状に煤付 着
SDe122	545		弥・?			7.5	粗・多、石英・角 閃石、金雲母・赤色 粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	底部平底。	体部；縦ミガキ 底面；ミガキ	縦・斜ケズリ	底部完存	外面黒斑
SDe146上層	546	64	弥・広口壺	12.0			中・少、石英・赤 色粒含む	(外)浅黄褐 (内)浅黄	口頸部は縦やかに外反して開き、端部は四角く締め る。	口頸部；ヨコナア 体部；縦・斜 ケズリの後上半指オサエの後ヨコ ナア	口頸部；ヨコナア 体部；縦・斜 ケズリの後上半指オサエの後ヨコ ナア	4/8	
SDe146上層	547		弥・甕	15.9			中・普、石英含む	(外)灰黄褐 (内)灰黄褐	口頸部は強く折れて短い。端部は四角く締める。	口頸部；ヨコナア 体部；縦ハケ	口頸部；横・斜ハケ 端部近；ヨ コナア	2/8	
SDe146上層	548		弥・甕	12.4			中・多、石英・角 閃石、金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	口頸部は強く折り返して短い。端部は小さく構み上 げる。	口頸部；ヨコナア 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナア 体部；縦ケズ リの後上位指オサエ・ナア	1/8	体部下端外面煤 付着
SDe146上層	549		弥・甕	17.1			中・多、石英・角 閃石、金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	口頸部は強く折り返して短い。端部は小さく構み上 げる。	口頸部；ヨコナア 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナア 体部；指オサ エ・ナア	1/8	口縁部外面煤付 着
SDe146上層	550		弥・高坏	22.0			中・多、石英・角 閃石、金雲母・赤色 粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	口頸部は強く折り返して短い。端部は小さく構み上 げる。口頸部は厚く、外方に引き出す。	口頸部；ヨコナア 体部；縦ハケ	上半部；ヨコナア 下半部；ミガ キ?	1/8	
SDe146上層	551		弥・脚			18.0	中・多、石英・角 閃石、金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	口頸部は強く折り返して短い。端部は厚く、外方に引き出す。	口頸部；ヨコナア 体部；縦ハケ	口縁部；横・斜ケズリ	2/8	脚部2孔1対 の透し孔
SDe146上層	552		弥・大形鉢	23.6			中・普、石英含む	(外)浅黄 (内)浅黄	口頸部は強く折り返して短い。端部は四角く締める。	口頸部；ヨコナア 体部；横・斜ケ ズリ、マメツ著	口縁；斜ハケ、マメツ著 体部； 縦ハケ、マメツ、ハケ	2/8	
SDe146上層	553		弥・瓶				中・普、石英含む	(外)淡黄 (内)灰黄	口頸部は強く折り返して短い。端部は四角く締める。	縦板ナア	縦ケズリ	5/8	底部黒斑
SDe146上層	554		弥・?			6.0	中・普、石英含む	(外)灰白 (内)灰白	底部はやや厚い平底。	体部；縦ミガキ 底面；ミガキ	体部；縦ケズリ 底面；ケズリ	底部完存	体部外面煤付着
SDe146下層	557		弥・直口壺	9.0			中・多、石英・角 閃石、金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	口縁部はやや内湾気味に開き、端部は鈍く尖る。	ヨコナア	ヨコナア	1/8	
SDe146下層	558		弥・甕	12.5			中・普、石英含む	(外)灰褐 (内)黒褐	口頸部は縦やかに折れて短い。端部は四角く締めつ つ、小さく構み上げる。	口頸部；ヨコナア 体部；指オサ エの後ナア	口頸部；ヨコナア 体部；横・縦 ケズリ	2/8	
SDe146下層	559		弥・甕	13.1			中・少、石英含む	(外)浅黄 (内)黒褐	口頸部は縦やかに折り返して外反気味に開く。端部は四 角く締める。	口頸部；ヨコナア 体部；縦・斜 ハケ	口縁；ヨコナア 体部；横ハケの 後ナア 体部；横ケズリの後上位 指オサエ・ナア	2/8	
SDe146下層	560		弥・甕	15.0			中・多、石英・角 閃石、金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	口頸部は強く折れて短い。端部は小さく構み上げる。	口頸部；ヨコナア 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナア 体部；指オサ エ	1/8	口頸部外面煤付 着
SDe146下層	561		弥・甕	13.8			中・多、石英・角 閃石、金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	口頸部は強く折れて短い。端部は厚く、外方に引き出す。	口頸部；ヨコナア 体部；指オサ エの後ナア	口頸部；ヨコナア 体部；指オサ エ	2/8	口頸部・体部下 半外面煤付着
SDe146下層	562		弥・甕	14.2			中・多、石英・角 閃石、金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	口頸部は強く折り返して短い。端部は小さく構 み上げる。	口頸部；ヨコナア 体部；縦・斜 ハケの後上半指オサエ	口縁；ヨコナア 体部；横ハケの 後ナア 体部；横ケズリの後上位 指オサエ・ナア	2/8	口縁部・体部下 半外面煤付着
SDe146下層	563		弥・甕	14.2			中・少、石英・赤 色粒含む	(外)浅黄褐 (内)浅黄褐	口頸部は強く折れて短い。端部は小さく構み上げる。	口頸部；ヨコナア 体部；斜タタ キ	口頸部；ヨコナア 体部；指オサ エ?、マメツ著	1/8	
SDe146下層	564		弥・甕	19.6			中・多、石英・角 閃石、金雲母・赤色 粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	口頸部は強く折れて短い。端部は小さく構み上げる。	口頸部；ヨコナア 体部；縦ハケ	口頸部；ヨコナア 体部；指オサ エ	1/8	
SDe146下層	565		弥・甕	15.4			中・普、石英・角 閃石、金雲母・赤 色粒含む	(外)黄褐 (内)黄褐	口頸部は強く折れて短い。端部は小さく構み上げる。	口頸部；ヨコナア 体部；縦・斜 ハケ	口頸部；ヨコナア 体部；横ケズ リの後指オサエ・ナア	1/8	口頸部外面煤付 着
SDe146下層	566	65	弥・甕	13.6	22.7	5.3	中・多、石英・角 閃石、金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)褐	口頸部は強く折れて短い。端部は小さく構み上げる。 口頸部は倒卵形を呈し、底部はやや突出した平底であ る。	口頸部；ヨコナア 体部；縦・斜 ハケ	口頸部；ヨコナア 体部；横ケズ リの後指オサエ・ナア	ほぼ完存	体部中位～下 半外面煤付着、体 部中位焼成後穿 孔

報告番号	種図	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	端部形態	外面調整	内面調整	残存率	備考
SDe146下層	64	弥・小形鉢	12.9	6.1	3.5	粗・少、石英・赤 色粒含む	(外)浅黄 (内)灰黄	やや内湾気味に立ち上がり大きく開く。口縁端部は小さく四角く納める。底部はやや突出した平底。	体部：縦、斜ハケの後指オサエ 底部：指オサエ	体部：縦、斜ハケの後指オサエ 底部：指オサエ	5/8	
SDe146下層	64	弥・鉢	17.6	6.7	4.9	粗・普、石英・赤 色粒含む	(外)淡橙 (内)橙	内湾気味に開く体部より縁が折れて、口縁部は短く開く。端部は丸く納める。底部は厚めの平底。	口縁：ヨコナア 体部：ハクリ 上半部：ヨコナア 下半部：横ハケ スリの後分割ミガキ	口縁：ヨコナア 体部：ハクリ 上半部：ヨコナア 下半部：横ハケ スリの後分割ミガキ	底部完存 1/8	
SDe146下層	64	弥・高坏	23.0			中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	坏部中で屈曲して、上半部は外反して開く。端部は丸く納めつつ、内面に明瞭なサジ面。	上半部：ヨコナア 下半部：横ハケ スリの後分割ミガキ 体部：タタキメ、マメツ 底部： 指オサエ	上半部：ヨコナア 下半部：横ハケ スリの後分割ミガキ	底部完存	
SDe146下層	64	弥・?		3.8	3.2	中・普、石英・赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	底部はやや厚く突出し、縁辺を湾み出して底面はやや凹む。	体部：縦ミガキの後下端指オサエ 底部：ミガキ	縦板ナアリ、マメツ・ハクリ	底部完存	外面黒斑
SDe146下層	64	弥・?		5.2	5.2	中・多、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	底部は突出した平底。	体部：縦板ナア、マメツ 底部： マメツ	縦板ナア、マメツ・ハクリ	底部完存	
SDe146下層	64	弥・高坏	30.0			中・多、石英・角 閃石・黒雲母・赤 色粒含む	(外)黄 (内)橙	坏部中で屈曲して、上半部は純く外反して開く。端部は外方へ引き出しつつ、内方にも小さく突出する。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	1/8以下	
SDe146下層	64	弥・壺	16.6			中・多、石英・角 閃石・雲母含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は外反して短く開き、端部は上下に小さく納み出す。	ヨコナア、マメツ	ヨコナア、マメツ	1/8	
SDe137上層	64	弥・広口壺	24.8			細・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄 (内)黄灰	口縁部は外反して大きく開き、端部は四角く納め、僅かに上方へ湾み上げる。	端部：ヨコナア 口縁：縦ハケ	端部：ヨコナア 口縁：縦ハケ	1/8以下	内面黒色化
SDe137上層	64	土・広口壺	22.7			粗・多、石英・角 閃石含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は内湾気味に延び、外反して開く。端部は丸く納める。	ヨコナア 口縁部中央に一条の沈線	ヨコナア	1/8以下	
SDe137上層	64	土・直口壺	16.2			粗・多、石英・赤 色粒含む	(外)灰 (内)灰	口縁部はやや外反気味に開き、端部は僅かに内側に肥厚する。	マメツ・ハクリ	口縁部：マメツ・ハクリ 体部： 指オサエ	2/8	
SDe137上層	64	弥・直口壺	15.1			中・少、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	口縁部は縁やかに外反して大きく開く。端部は外方に引き延ばし、上方にも突出。	端部：凹線文の後2箇1対の円形 刺突文、口頸部：上位純い凹線文、 下部縦ハケの後斜線文2段、体 部：縦ハケの後中央線ミガキ	口縁部：純い凹線 頸部：指オサエ 体部：縦ハケの後上位指オサエ	4/8以下	外面部分的に煤 附着
SDe137上層	64	土・二重口縁 壺?	15.8			粗・多、石英・赤 色粒含む	(外)黄灰 (中)黄灰	口縁部は内傾して短く、端部は四角く納める。	マメツ	口縁部：ヨコナア 頸部：横板ナ ア 体部：ケズリ	2/8	
SDe137上層	64	土・二重口縁 壺?	20.4			中・少、石英・角 閃石?・赤色粒含 む	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	口縁部は直線状に延び、端部付近で外反して開く。端部は四角く納める。	ヨコナア	ヨコナア	1/8	
SDe137上層	64	弥・壺	14.0			細・少、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	胴部最大径部を強くヨコナデし、2条の突帯状の隆起を作る。	ヨコナア	ヨコナア	1/8	
SDe137上層	64	弥・壺	13.0			細・普、石英・赤 色粒含む	(外)濁灰 (内)濁灰	口縁部は外反して開き、端部は四角く納む。	口縁部：ヨコナア 体部：縦ハケ	口縁部：ヨコナア 頸部：横ハケ の後ヨコナア 体部：ケズリ	1/8	舶入品
SDe137上層	64	土・壺	12.6			細・普、石英・角 閃石含む	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙	口縁部はやや内湾気味に延び、端部は内側に肥厚する。	ヨコナア	横ハケの後ヨコナア	1/8	
SDe137上層	64	土・壺	13.8			中・少、石英・赤 色粒含む	(外)灰黄橙 (内)灰黄橙	口縁部はやや内湾気味に開き、端部は純く肥厚する。	ヨコナア	横ハケの後ヨコナア	1/8	外面煤附着
SDe137上層	64	土・壺	13.2			中・普、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は内湾気味に開き、端部は純く肥厚する。	ヨコナア	ヨコナア	1/8	
SDe137上層	64	土・壺	12.2			中・普、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙	口縁部は内湾気味に開き、端部は内側に肥厚する。	ヨコナア	ヨコナア	1/8以下	
SDe137上層	64	土・壺	12.4			中・普、石英・角 閃石?・赤色粒含 む	(外)橙 (内)橙	口頸部は縁く折り返して直線状に開き、端部は内側に肥厚する。	ヨコナア	ヨコナア	1/8以下	外面煤附着
SDe137上層	64	土・壺	15.8			中・普、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)黒 (内)にぶい黄褐	口縁部は内湾気味に開き、端部は内側に肥厚する。	ヨコナア	ヨコナア	1/8	外面煤附着
SDe137上層	64	土・壺	13.0			中・少、石英・金 雲母・黒色粒含む	(外)濁灰 (内)にぶい黄橙	口縁部は内湾気味に開き、端部を僅かに内側に肥厚する。	ヨコナア	ヨコナア	1/8以下	外面煤附着
SDe137上層	64	土・壺	13.8			中・普、石英・角 閃石?・金雲母含 む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部はやや縁く折れて外反して開く。端部を小さく湾み上げる。	口縁部：ヨコナア 体部：上位ヨ コナア、下位タタキ	口縁部：ヨコナア 体部：上位指 オサエ、ナア、下位ケズリ	6/8	口縁部と体部下 位外面に煤附着

報告番号	図版	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	形態	外面調整	内面調整	残存率	備考
SDe137上層	592	土甕				粗・少、石英・角閃石・金雲母を含む	(外)灰黄褐 (内)にぶい黄褐色	口縁部は外反して開き、端部を鈍く上方に揃み上げる。	ヨコナデ	横ハケ	1/8以下	
SDe137上層	593	土甕				中・普、石英・角閃石を含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は直線状に延び、端部を丸く納める。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8以下	
SDe137上層	594	土甕	10.6			細・少、石英・角閃石・赤色粒を含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部はやや内湾気味に開き、端部は丸く納める。	ヨコナデ	斜めハケの後ヨコナデ	1/8以下	外面に灰付着
SDe137上層	595	土甕	13.1			中・普、石英・金雲母・赤色粒を含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は外反して開き、端部は丸く納める。	ハクリ著	横ハケ?・ハクリ著	1/8以下	外面に灰付着
SDe137上層	596	土甕	13.8			粗・普、石英・赤色粒を含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は直線状に開き、端部は鈍く尖る。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	外面に僅かに灰付着
SDe137上層	597	土甕	12.8			中・少、石英・角閃石を含む	(外)浅黄褐色 (内)浅黄褐色	口頸部は緩く折れて、内湾気味に短く開く。端部は鈍く尖る。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	
SDe137上層	598	土甕	17.2			粗・普、石英・赤色粒を含む	(外)浅黄褐色 (内)浅黄褐色	口縁部は直線状に延び、端部は斜上方に引き延ばす。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	1/8以下	
SDe137上層	599	土甕	14.2			中・普、石英・金雲母・赤色粒を含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部はやや内湾気味に延び、端部を四角く納める。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	口縁部外面に灰付着
SDe137上層	600	土甕	14.6			中・普、石英・角閃石を含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部はやや内湾気味に開き、端部は四角く納める。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	口縁部外面に灰付着
SDe137上層	601	土甕	15.8			粗・普、石英を含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は緩く折れて、外湾気味に開く。端部は鈍く尖る。	ヨコナデ	ヨコナデ	2/8	口縁部外面に灰付着
SDe137上層	602	土甕	9.2			中・普、石英・角閃石・金雲母を含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は緩く折れて直線状に延び、端部は四角く納めつつ、頂部に内湾する面を有する。	ヨコナデ	ヨコナデ	2/8	口縁部外面に灰付着
SDe137上層	603	土甕	15.4			粗・普、石英・角閃石を含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は緩く折れて直線状に延び、端部は四角く納めつつ、頂部に内湾する面を有する。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	
SDe137上層	604	土甕	16.4			粗・普、石英・赤色粒を含む	(外)灰黄褐 (内)灰褐	口縁部は直線状に開き、端部は外方に揃み出して内湾する面を有する。	ヨコナデ	ヨコナデ	2/8	外面に灰付着
SDe137上層	605	弥・?				中・普、石英を含む	(外)暗赤褐、暗黄褐 (内)にぶい黄褐色	口頸部は外反して短く開き、端部を丸く納める。	縦ハケ	ケズリ	細片	外面に灰付着
SDe137上層	606	土鉢	14.5			粗・多、石英・赤色粒を含む	(外)黄褐色 (内)浅黄褐色	口頸部は外反して短く開き、端部を丸く納める。底部は丸底。	ヨコナデ	ナデ?・ハクリ	1/8	
SDe137上層	607	土鉢	18.2	9.7		粗・普、石英・角閃石・赤色粒を含む	(外)黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は外反して短く開き、端部は丸く納める。底部は丸底。	マメツ・ハクリ著	マメツ・ハクリ 体部; 指オサエ・ナデ?	6/8	底部外面に灰付着
SDe137上層	608	土鉢	(11.1)	(4.7)		粗・普、石英・角閃石を含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は丸く納める。底部は突出した平底か?	ヨコナデ	ヨコナデ	5/8	口縁部外面に灰付着
SDe137上層	609	土鉢	(9.4)	8.0		中・少、石英・角閃石を含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	碗状の体部より鈍く屈曲して口縁部は短く開く。端部は丸く納める。底部はタタキによって丸底に整形する。	ヨコナデ	指オサエ・ナデ	7/8	口縁部外面に灰付着
SDe137上層	610	弥・?	4.0			細・多、石英を含む	(外)浅黄褐色 (内)浅黄褐色	鈍く突出した平底。体部の開きは弱い。	ヨコナデ	ナデ・板ナデ	4/8	
SDe137上層	611	土鉢				粗・多、石英・赤色粒を含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	底部丸底	縦ハケ・ハクリ著	指オサエ・ハクリ著	7/8	
SDe137上層	612	弥・?	3.3			細・少、石英・金雲母・赤色粒を含む	(外)浅黄褐色 (内)浅黄褐色	底部は小振りな平底。	体部; 縦板ナデ	指オサエ・ナデ	8/8	黒斑
SDe137上層	613	弥・?	3.1			中・普、石英・角閃石・赤色粒を含む	(外)赤褐 (内)暗赤黄	開きの弱い体部に低い脚台を有する。	指オサエ・ハクリ著	ハクリ著	8/8	製塩土器
SDe137上層	614	弥・?	3.3			中・普、石英・角閃石・赤色粒を含む	(外)にぶい赤褐 (内)にぶい赤褐	開きの弱い体部に小形の脚台を有する。	指オサエ・ナデ	脚部; ナデ 体部; ハクリ	7/8	製塩土器
SDe137上層	615	土・高坏	16.6			細・少、石英・赤色粒を含む	(外)褐灰 (内)黄褐色	坏部中位で鈍く屈曲し、上半部は直線状に開く。端部は丸く納める。	ヨコナデ	ハケメの後一部ナデ	1/8	
SDe137上層	616	土・高坏	16.2			中・普、石英・赤色粒を含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は直線状に開き、端部は鈍く尖る。	縦ハケ?の後ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	
SDe137上層	617	土・高坏	16.6			中・普、石英・赤色粒を含む	(外)黄褐色 (内)浅黄褐色	口縁部は端部近くで外反して開き、端部を丸く納める。	ヨコナデ	マメツ	1/8	
SDe137上層	618	土・高坏	17.4	(12.5)	12.4	細・少、石英・赤色粒を含む	(外)灰 (内)灰	坏部中位で屈曲し、上半部は内湾気味に開き、端部は鈍く尖る。脚部は鈍く折れて直線状に開き、端部は丸く納める。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	5/8	

報告 番号 構造 番号	棟号	図面	器	種	口徑	器 高	底 徑	胎 土	色 調	端 部 形 態	外 面 調 整	内 面 調 整	残 存 率	備 考	
SDe137上層	619		土・高坏		15.6			細・少、石英・赤 色粒含む	(外)澄 (内)にぶい澄	内湾気味の下半部より端部近くで外反して開く。端部は鈍く尖る。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	1/8		
SDe137上層	620		土・高坏		15.4			中少、石英・角 閃石・雲母・赤色 粒含む	(外)暗褐 (内)にぶい褐	口縁部は直線状に開き、端部付近で僅かに外反する。口縁部は鈍く尖る。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8以下		
SDe137上層	621		土・高坏		18.0			粗・少、石英・角 閃石含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	坏部中で屈曲し、上半部は内湾気味に立ち上がり、外反して開く。端部は丸く納める。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8以下		
SDe137上層	622	65	土・高坏		16.6			中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	坏部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反して開く。端部は丸く納める。	口縁部；ヨコナデ ・指オサエ	坏上半；ヨコナデ ・坏底面；板ナ デの後ナデ	5/8		
SDe137上層	623		土？・高坏		18.3			細・普、石英・黒 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)暗褐	口縁部は外反して短く立ち上がる。端部は四角く納める。	斜めハケの後ヨコナデ	ヨコナデ	2/8		
SDe137上層	624		土・高坏		21.0			微・少、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	坏中で屈曲して、上半部は直線状に開く。端部は小さく揃み上げる。	ヨコナデ	ハケメの後ヨコナデ	2/8		
SDe137上層	625		土・高坏		15.2			微・普、石英・金 雲母？含む	(外)にぶい澄 (内)灰白	内湾気味の下半部より外反して開く口縁部。口縁部は丸く納める。	ヨコナデ・マメツ	横ハケ・マメツ	1/8		
SDe137上層	626		土・高坏					細・少、石英・赤 色粒含む	(外)にぶい澄 (内)にぶい澄	坏中で屈曲して、口縁部は直線状に開く。	ナデ	ヨコナデ・ナデ	1/8		
SDe137上層	627	65	土・高坏					粗・普、石英・角 閃石？・赤色粒含 む	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄褐	坏部中で、屈曲し、上半部は外反して開く。	ハケメの後ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ？	5/8		
SDe137上層	628		土・高坏					中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)浅黄褐 (内)浅黄褐	口縁部は外反して開く。		上半；板ナデの後ヨコナデ・ナ デ 下半；指オサエ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	2/8	
SDe137上層	629		土・脚					細・普、石英・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	脚部は線やかに開く。		横ケズリ	横ケズリ	4/8	外面黒斑
SDe137上層	630		土・脚					細・普、石英・角 閃石・雲母・赤色 粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	脚部は線やかに開く。		指オサエ・ナデ・ハクリ著	ケズリ・ハクリ著	7/8	
SDe137上層	631		土・脚					粗・多、石英・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	脚部は線やかに開く。		脚柱部；ケズリ？ 脚裾部；マメ ツ	脚柱部；横ケズリ 脚裾部；マメ ツ	6/8	
SDe137上層	632		土・脚					細・少、石英・角 閃石？・赤色粒含 む	(外)浅黄褐 (内)にぶい黄褐	脚部は線やかに開く。		脚柱部；ナデ？・ハクリ	ハクリ・マメツ	6/8	
SDe137上層	633		土・脚					細・少、石英・赤 色粒含む	(外)澄 (内)澄	脚部は強く屈曲して開く。		脚柱部；ナデ？・マメツ著	脚柱部；横ケズリ 脚裾部；マメ ツ	5/8	
SDe137上層	634		土・脚					細・少、石英・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	脚部は強く屈曲して開く。		脚柱部；ナデ？・マメツ著	脚柱部；横ケズリ 脚裾部；マメ ツ	5/8	
SDe137上層	635		土・脚					粗・普、石英・角 閃石？・金雲母含 む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	脚部は強く屈曲して開く。		脚柱；メントリの後下半部ハケ ナデ 脚裾；横ハケ	脚柱；横ケズリの後下半部ナデ 脚裾；横ハケ	5/8	外面黒斑
SDe137上層	636		土・脚					中・普、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	脚部は鈍く屈曲して直線状に開く。		柱部；ミガキの後一部指頭真	柱部；ケズリ 裾部；ヨコナデ	6/8	
SDe137上層	637		土・脚					細・少、石英・赤 色粒含む	(外)黄褐 (内)浅黄褐	脚部は強く屈曲して大きく開く。		脚柱部；ナデ？・マメツ著 脚 柱部；ヨコナデ	脚柱部；横ケズリ 脚裾部；ヨコ ナデ	6/8	
SDe137上層	638		土・脚					中・普、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	脚部はやや強く屈曲して開く。		柱部；ミガキの後一部指頭真 裾 部；ヨコナデ	柱部；ケズリ 裾部；ヨコナデ	8/8	
SDe137上層	639		土・脚			11.4		微・少、石英・赤 色粒含む	(外)灰黄 (内)灰白	脚部はやや内湾気味に開き、端部は鈍く尖る。		脚柱部；マメツ 脚裾部；ヨコナ デ	脚柱部；ケズリの後一部ナデ 脚裾；横ハケの後ナデ	1/8	
SDe137上層	640	65	土・脚			11.4		微・小、石英・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)浅黄褐	脚部は直線状に開き、端部は鈍く尖る。		脚柱部；指オサエ？ マメツ・ハ クリ	脚柱部；指オサエ？ マメツ・ハ クリ	5/8	
SDe137上層	641		土・高坏					中・多、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	脚部は強く屈曲して開く。		坏部；ナデ 脚部；ミガキ？	坏部；ナデ 脚部；ケズリ	7/8	
SDe137上層	642		土・脚					微・少、石英・赤 色粒含む	(外)浅黄褐 (内)浅黄褐	脚部は線やかに開く。		横ハケの後上端ヨコナデ	脚柱部；横ケズリ	7/8	
SDe137上層	643		土・脚					微・少、石英・赤 色粒含む	(外)灰白 (内)灰白	脚部は強く屈曲して開く。		横ハケ	指オサエ・ナデ	7/8	



報告書 遺構番号	棟号	図版	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形状	外 面 調 整	内 面 調 整	残存率	備 考
SDe137上層	644		土・脚				中・少、石英・角 閃石?・金雲母含 む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	裾部は強く屈曲して開く。	脚柱部：上端にへろ指沈線、縦ハ ケの後下位ヨコナア 脚縁部：ヨ コナア	脚柱部：横ケズリの後下位指オサ エ・ナア 脚縁部：ヨコナア	4/8	
SDe137上層	645		土・脚				微・少、石英・赤 色粒含む	(外)灰白 (内)浅黄橙	軸部はやや中膨らみ	脚柱部：ミガキ	ナア	5/8	
SDe137上層	646		土・脚				細・少、石英・角 閃石?・赤色粒含 む	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙	脚部は直線状に開く。	ヨコナア・ナア	上位：ナア 下位：横ハケ	4/8	
SDe137上層	647	66	土?・小形丸 底土器?	10.6			中・少、石英含む	(外)灰白 (内)灰白・褐灰	口縁部は内湾して開き、端部は丸く納める。	口縁：縦ハケ 体部：ナア?・マ メツ	口縁：ヨコナア 体部：ヘラナア	1/8	
SDe137上層	648		底土器				粗・普、石英・角 閃石含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	底部丸底	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	1/8	
SDe137上層	649	66	土・小形丸底 土器	5.7	6.3		中・普、石英含む	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙	口縁部は小さく直立し、端部を丸く納める	口縁部：ヨコナア 体部：指 オサエ・ナア	口縁部：ヨコナア 体部：指 オサエ・ナア	6/8	
SDe137上層	650	66	土・小形丸底 土器	(9.5)			粗・少、石英・赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は縁く折れて短い。端部は縁く尖る。	口縁部：ヨコナア 体部：横 ケズリ 体部：ナア?・マ メツ	口縁部：指オサエの後ヨコナア 体部：板ナア	3/8	外面縁付着。口 縁部はずみ大
SDe137上層	651		土・小形丸 底土器	7.3			中・少、石英含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は縁く屈曲して短い。端部は尖る。	口縁部：ヨコナア 体部：上位ヨ コナア・下位ミガキ	口縁部：ヨコナア 体部：ナア	2/8	
SDe137上層	652		土・小形丸底 土器				中・普、石英・角 閃石?含む	(外)にぶい黄橙 (中)にぶい黄橙	やや張りの強い体部。	体部上位：ハケメの後ヨコナア 体部下位：板ナア	指オサエ・ナア	2/8	
SDe137上層	653		土・小形丸底 土器	8.4			細・少、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)暗 (内)暗	口縁部は縁く折り返して短く開く。端部は縁く尖る。	ヨコナア	口縁部：ヨコナア 体部：板ナア	1/8	
SDe137上層	654	66	土・小形丸底 土器	8.1	8.7		微・少、石英含む	(外)暗 (内)暗	口縁部縁く折り返してやや内湾気味に開き、端部は丸く納める。底部は丸底。	口縁部：ヨコナア 体部：マ メツ・ハクリ	口縁部：マメツ・ハクリ 体部： 指オサエ・マメツ	1/8	体部外面に黒 斑
SDe137中層	655		土・広口壺	12.8			細・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	外反して水平に延びる口縁部。端部は上下に僅かに 拡張して内傾する面をなす。	ヨコナア、端部に2画、粗の竹筥 文を施す	ヨコナア	1/8以下	
SDe137中層	656	66	土・広口壺	(23.8)			中・少、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙	口縁部は外反して大きく開く。端部は上方に積み上 げ下方にもやや突出する。	口縁部：ヨコナア 端部：2段に 瓜形刺突文	ヨコナア	1/8	
SDe137中層	657		土・広口壺	24.6			細・少、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)暗 (内)浅黄橙	頸部より強く折り返して、口縁部は直線状に開く。 端部は上方に積み上げ、内面に明瞭な凹線。	ヨコナア	ヨコナア	1/8	
SDe137中層	658		土・広口壺	15.2			細・普、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙	口縁部は外反して開き、端部は四角く納めつつ、僅 かに積み上げる。	ヨコナア	上位：ヨコナア 下位：横ハケの 後ヨコナア	2/8	
SDe137中層	659		土・広口壺	16.2			粗・普、石英・角 閃石?・赤色粒含 む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は外反して開き、端部は四角く納める。端部 に1条の鈍い沈線。	一部指オサエの後ヨコナア	横ハケの後ヨコナア	1/8	
SDe137中層	660		土・広口壺	17.6			粗・普、石英・角 閃石?・赤色粒含 む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は外反して開き、端部は四角く納める。	ヨコナア	ヨコナア	1/8以下	
SDe137中層	661		土・広口壺	16.4			細・少、石英含む	(外)灰白 (内)灰黄褐	口縁部は外反して開き、端部を四角く納める。	縦ハケの後ヨコナア	ヨコナア	2/8	
SDe137中層	662		土・広口壺	14.2			細・多、石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)赤褐 (内)赤褐	口縁部は縁く屈折して直線状に延びる。端部は僅か に上方に積み上げ、内面に3条の縦凹線をみる。	口縁：ヨコナア 頸部：縦ハケ	口縁：ヨコナア	1/8	劣化著
SDe137中層	663		土・広口壺	16.2			中・普、石英・角 閃石・赤色粒含 む	(外)にぶい黄橙 (内)暗	口縁部は水平に開き、端部を僅かに上方に積み上げ る。	口縁部：ヨコナア 頸部：縦ハケ の後ヨコナア	ヨコナア	1/8	
SDe137中層	664		土・広口壺	17.0			中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は水平に開き、端部は上方に縁く積み上げる。	端部：鈍い凹線 口縁：ヨコナア	口縁部：3条程度の鈍い凹線・ヨ コナア	1/8以下	端部及び口縁部 内面に赤色顔料 付着
SDe137中層	665		土・広口壺	17.2			中・多、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)暗 (内)暗	口縁部は強く折れてほぼ水平に開く。端部は僅かに 上方に積み上げる。	端部：鈍い凹線 口縁：ヨコナア	口縁：ヨコナア・鈍く凹線状に凹 む。	1/8以下	
SDe137中層	666		土・広口壺	16.8			粗・普、石英・角 閃石・赤色粒含 む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	直立気味の頸部より強く折れて、口縁部は水平に短 く引き出す。端部は小さく積み上げる。	ヨコナア	口縁：ヨコナア・鈍い凹線3条 頸部：ヨコナア	1/8	頸部内面に黒斑
SDe137中層	667		土・広口壺				細・普、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	頸部は直立し、基部に刻み目突起を付す。	頸部：縦ハケ 頸部部に突起貼付 ケズリ	頸部：指オサエ・ナア 体部：横 ケズリ	1/8	
SDe137中層	668		土・二重口縁 壺	17.8			中・少、石英含む	(外)にぶい黄 (中)にぶい黄	口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は小さく外反 して四角く納める。	マメツ	マメツ	1/8	

報告 遺構 番号	単 元	図 版	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	色 調	端 部 形 態	外 面 調 整	内 面 調 整	残 存 率	備 考
SDe137中層	669		土・二重口縁 壺	17.7			粗・多、石英・金 赤含む	(外)にぶい黄緑 (内)にぶい黄褐色	口縁部はやや外反して延び、端部は四角く納める。	ヨコナデ?・ハクリ着	口縁部：ヨコナデ 体部上 位；指オサエ・ナデ体部下位；ケ ズリ	2/8	
SDe137中層	670		土・二重口縁 壺	11.0			中・普、石英・金 赤含む	(外)黄灰 (内)黄褐色	口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、外面に突帯を 貼付する。端部は外方へ引き出しつつ、内方にも小 さく突出する。	マメツ	マメツ	1/8以下	
SDe137中層	671		土・直口壺?	13.8			細・少、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)黄 (内)黄褐色	口縁部は細やかに外反して開き、端部は小さく揃み 上げる。	端部；鈍い凹縁 口縁；ヨコナデ	口縁；ヨコナデ	1/8	
SDe137中層	672		土・直口壺	9.8			細・少、石英・赤 色粒含む	(外)黄 (内)黄褐色	口縁部は内湾気味に開く口縁より僅かに外反させて端部 に至る。端部は丸く納める。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	2/8	
SDe137中層	673		土・直口壺	10.0			細・少、石英・赤 色粒含む	(外)黄 (内)黄褐色	口縁部は直線状に延び、端部は鈍く尖る	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	2/8	
SDe137中層	674		土・直口壺	9.4			微・少、石英・赤 色粒含む	(外)にぶい黄 (内)黄褐色	口縁部は強く折り返して短い。端部は上方へ揃み上 げ、下方にも引き出す。	ハケメ?・ハクリ・マメツ	マメツ・ハクリ	2/8	
SDe137中層	675		土・大形壺	23.6			細・多、石英・角 閃石・金赤母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄褐色	口縁部は大きく外反して開き、端部は四角く納める。	端部；凹縁3条 口縁部；ヨコナ デ	口縁部；ヨコナデ	1/8	
SDe137中層	676		土・大形壺	12.8			細・普、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄褐色	口縁部は外反して短く開き、端部は上方に揃み上げ る。内湾する端部に凹縁2~3条。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	
SDe137中層	677		土・大形壺	14.0			中・普、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れて、短い。端部は小さく揃み上げ る。	口縁部；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口縁部；ヨコナデ	1/8	
SDe137中層	678		土・大形壺	13.9			中・普、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄褐色	口縁部は大きく外反して開き、端部は四角く納める。	口縁部；ヨコナデ 体部；指オサ エ・ナデ	口縁部；ヨコナデ 体部；縦ハケ の後に横板ナデの後に一部指オ サエ	1/8	外面煤付着
SDe137中層	679		土・大形壺	16.2			中・普、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れて短く開き、端部は上方に揃み上げ る。内湾する端部に凹縁2~3条。	端部；鈍い凹縁 口縁部；ヨコ ナデ	ヨコナデ	2/8	外面に小黑斑
SDe137中層	680		土・大形壺	11.2			中・少、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)黄 (内)黄褐色	口縁部は内湾気味に開き、端部を丸く納める。	粗い縦ハケ・ヨコナデ	口縁部；ヨコナデ 頸部横ケズリ	1/8	
SDe137中層	681		土・大形壺	12.2			細・少、石英・角 閃石含む	(外)黄 (内)黄褐色	口縁部は強く外反して開く。端部は僅かに揃み上げ る。	ヨコナデ・ナデ・マメツ	ヨコナデ	1/8	
SDe137中層	682		土・大形壺	14.3			細・普、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れて短く開き、端部は上方に鈍く肥 厚する。	口縁；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口縁；ヨコナデ 体部；指オサエ ・ナデの後に一部横板ナデ	2/8	口縁部外面煤付 着
SDe137中層	683		土・大形壺	13.8			細・普、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れて短く開く。端部は上方に僅かに 揃み上げる。	口縁；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口縁；ヨコナデ 頸部；縦ハケの 後ヨコナデ 体部；指オサエ・ナ デ	2/8	
SDe137中層	684	66	土・大形壺	14.0			中・少、石英・赤 色粒含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄褐色	口縁部はやや内湾気味に開き、端部は丸く納める。	口縁；ヨコナデ 体部；縦ハケ	口縁部；ヨコナデ 体部；指 オサエ・ナデ	1/8	体部外面黒斑
SDe137中層	685		土・大形壺	16.6			粗・多、石英・赤 色粒含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れて短く開く。端部は丸く納め る。	縦ハケの後ヨコナデ	縦ハケの後ナデ	4/8	
SDe137中層	686		土・大形壺	17.0			粗・普、石英・金 赤含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折り返して外反気味に開く。端部は四 角く納める。	ヨコナデ	口縁部；板ナデの後ヨコナデ	1/8	口縁部外面煤付 着、口縁部ひず み大
SDe137中層	687		土・大形壺	16.4			粗・多、石英・赤 色粒含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れて、端部近くに外反して開く。端 部は僅かに肥厚して、端部に鈍い凹縁。	マメツ・ハクリ	口縁部；マメツ・ハクリ 体部； ケズリ	2/8	
SDe137中層	688	66	土・大形壺	18.2			粗・普、石英・金 赤含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄褐色	口縁部は外反して開き、端部を上下に鈍く肥厚する。	口縁部；ヨコナデ 体部；縦ハケ の後に一部縦ハケ	口縁部；縦ハケの後ヨコナデ 体 部；指オサエ・ナデ 下位ケ ズリ	5/8	外面体部下半煤 付着
SDe137中層	689	66	土・大形壺	16.1			中・普、石英・赤 色粒含む	(外)黄 (内)黄褐色	口縁部は強く折れて、外反して開く。端部は丸く納 める。	縦板ナデの後別点文	縦ケズリ	1/8以下	外面に煤付着
SDe137中層	690		土・大形壺	13.8			中・普、石英・赤 色粒含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れて、直線状に開く。端部は丸く納 める。	口縁部；ヨコナデ 体部；縦ハケ の後ヨコナデ	口縁部；ヨコナデ	1/8	
SDe137中層	691		土・大形壺	16.1			中・普、石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れて、外反して開く。端部は丸く納 める。	ヨコナデ	口縁；ヨコナデ 体部；板ナデ?	1/8	
SDe137中層	692	66	土・大形壺	13.8			中・普、石英・赤 色粒含む	(外)にぶい黄 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折り返して、外反気味に開く。端部は 四角く納める。	口縁部；ヨコナデ 体部；縦ハケ の後ヨコナデ	口縁部；縦板ナデの後ヨコナデ 体部；指オサエ	2/8	

報告番号	採掘番号	採掘地	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	端部形態	外面調整	内面調整	残存率	備考
SDe137中層	693	土・壺	土・壺	12.0			細・少、石英・赤色粒含む	(外)浅黄澄 (内)浅黄澄	口縁部は直線状に開き、端部は僅かに内側に肥厚する。	ヨコナデ	ヨコナデ	2/8	
SDe137中層	694	土・壺	土・壺	12.2			細・少、石英・角閃石・雲母・赤色粒含む	(外)浅黄澄 (内)浅黄澄	口縁部はやや内湾気味に開き、端部は内側へ肥厚する。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	外面一部に煤付着
SDe137中層	695	土・壺	土・壺	15.2			微・普、石英・金雲母・赤色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口縁部は内湾気味に開き、端部は内側に肥厚する。	横ハケの後ヨコナデ	横ハケの後ヨコナデ	1/8以下	外面煤付着
SDe137中層	696	土・壺	土・壺	12.0			細・少、石英・角閃石・雲母・赤色粒含む	(外)浅黄澄 (内)浅黄澄	口頸部は緩く折れて、やや内湾気味に開き、端部は内側へ肥厚する。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	
SDe137中層	697	土・壺	土・壺	12.0			細・普、石英・角閃石・金雲母赤色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口縁部はやや内湾気味に開き、端部を内側に肥厚する。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	
SDe137中層	698	土・壺	土・壺	12.6			中・普、石英・角閃石・金雲母赤色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口縁部は内湾気味に開き、端部は内側に肥厚させる。	ヨコナデ	ヨコナデ	2/8	外面煤付着
SDe137中層	699	土・壺	土・壺	14.5			細・普、石英・角閃石・金雲母赤色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	やや内湾気味の口縁部。端部は内側に肥厚し、僅かに斜め上方に引き延ばす。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	
SDe137中層	700	土・壺	土・壺	16.2			中・多、石英・角閃石・赤色粒含む	(外)黒褐 (内)にぶい赤褐	口頸部は緩く折れて、やや内湾気味に開く。端部は内側に肥厚する。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	外面煤付着
SDe137中層	701	土・壺	土・壺	15.6			中・少、石英・角閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口縁部はやや外反気味に開き、端部は小さく内側に突出する。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	
SDe137中層	702	土・壺	土・壺	14.2			粗・普、石英・角閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口縁部は内湾気味に開き、端部は外上方に引き出しつつ丸く納める。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	
SDe137中層	703	土・壺	土・壺	13.0			細・多、石英・角閃石・赤色粒含む	(外)浅黄澄 (内)浅黄澄	口縁部は内湾気味に開く。端部は丸く納めつつ、外上方へ鈍く引き出す。	ヨコナデ?	ヨコナデ?	1/8	外面煤付着
SDe137中層	704	土・壺	土・壺	13.9			粗・普、石英・角閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口頸部は緩く折り返して、内湾して開く。端部は外上方へ引き出しつつ、丸く納める。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	
SDe137中層	705	土・壺	土・壺	15.2			中・少、石英・角閃石・赤色粒含む	(外)澄 (内)澄	口縁部は内湾気味に開き、端部は丸く納めつつ、やや外側に肥厚する。	ヨコナデ?	ヨコナデ?	1/8	
SDe137中層	706	土・壺	土・壺	13.6			中・多、石英含む	(外)澄 (内)澄	口頸部は緩く折り返して外反して開き、端部は四角く納める。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	1/8	
SDe137中層	707	土・壺	土・壺	11.4			粗・多、石英含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	直線状に開く口縁部。口縁部は面をなして四角く納める。	ヨコナデ	ヨコナデ	2/8	外面煤付着
SDe137中層	708	土・壺	土・壺	12.2			細・普、石英・角閃石・金雲母含む	(外)澄 (内)澄	口縁部は強く折れて直線状に延び、屈曲して上方へ突き上げ受口状となる。端部は内外に肥厚する。	ヨコナデ	ヨコナデ	6/8	
SDe137中層	709	土・壺	土・壺	21.2			粗・少、石英・角閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口縁部は外反して短く開き、端部は外方に鈍く突き出し、内方へも突出する。	ヨコナデ	ヨコナデ	3/8	体部外面黒斑
SDe137中層	710	土・壺	土・壺				粗・普、石英・角閃石?・赤色粒含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	口縁部は内湾気味に開く。底部は丸底少。	ヨコナデ	ヨコナデ	5/8	
SDe137中層	711	土?・?	土?・?		2.5		粗・普、石英・角閃石?・安山岩粒含む	(外)浅黄澄 (内)浅黄澄	底部平底	ヨコナデ	ヨコナデ	底部完存	
SDe137中層	712	土?・?	土?・?				細・少、石英・角閃石・雲母含む	(外)にぶい黄澄 (内)黒色	底部丸底	ヨコナデ	ヨコナデ	6/8	
SDe137中層	713	鉢・?	鉢・?		3.6		細・普、石英・赤色粒含む	(外)灰白黒 (内)灰白	底部は突出した平底	板ナデ?・マメツ	板ナデ?・マメツ	5/8	外面に黒斑
SDe137中層	714	土?・?	土?・?		1.2		中・普、石英・角閃石・赤色粒含む	(外)浅黄澄 (内)浅黄澄	底部は小さな平底	ナデ	ナデ	8/8	
SDe137中層	715	鉢・?	鉢・?		5.0		中・普、石英・角閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄澄 (内)灰黄褐	底部平底	指オサエ	指オサエ	1/8	口縁部ひずみ大
SDe137中層	716	土・小形丸底土器	土・小形丸底土器	(10.8)			細・少、石英・金雲母含む	(外)灰白 (内)浅黄澄	口縁部は外反して直線状に開き、端部は鈍く尖る。	ヨコナデ	ヨコナデ	2/8	
SDe137中層	717	鉢・小形丸底土器	鉢・小形丸底土器				細・少、石英含む	(外)にぶい黄澄 (内)にぶい黄澄	体部の張り強い。	指オサエ	指オサエ	2/8	
SDe137中層	718	鉢・小形丸底土器	鉢・小形丸底土器	7.4			細・少、石英赤色粒含む	(外)澄 (内)澄	内湾した体部より緩く折れて、口縁部は短い。端部は鈍く尖る。	マメツ	マメツ	2/8	

報告書 遺構番号	単元 図版	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	端部 形態	外面 調整	内面 調整	残存率	備考
SDe137中層 719		土・小形丸底 土器	5.8			微・少・石英・赤 色粒含む	(外)灰白 (内)灰白	口縁部は短く積み上げる。端部は鈍く尖る。	マメツ	マメツ	1/8以下	
SDe137中層 720		土・小形丸底 土器	7.2			細・少・石英・角 閃石？含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は短く折れ短く開く。端部は鈍く尖る。	口縁部；ヨコナデ 体部；指オサエ・ナデ 部；ヘラ底？	口縁部；ヨコナデ 体部；指オサエ・ナデ	2/8	体部外面黒斑・ 口縁部ひずみ大
SDe137中層 721	67	土・小形丸底 土器	8.6			細・少・石英・赤 色粒含む	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙	口縁部は緩やかに折れて短く開く。端部は丸く納めるか、部分的に僅かに肥厚する。	口縁；ヨコナデ 体部；斜めハケ	口縁；ヨコナデ体部；指オサエ・ナデ	2/8	
SDe137中層 722		土・小形丸底 土器	9.9			中・普・石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい橙 (内)橙	口縁部は短く折れて短く開く。端部は四角く納める。	口縁部；横ハケ？ 体部；指オサエ・ナデ	口縁部；横ハケ？ 体部；指オサエ・ナデ	1/8以下	
SDe137中層 723	67	土・小形丸底 土器	5.9	5.8		細・少・石英・赤 色粒含む	(外)橙 (内)橙	口縁部は内湾気味に開き、端部は鈍く尖る。底部は丸底。	口縁部；ヨコナデ 体部；斜めハケ	口縁部；マメツ・ハクリ 肩部；指オサエの後一部ケズリ 体部；指オサエの後ケズリ 底部；指オサエの後ケズリ	7/8	
SDe137中層 724	67	土・小形丸底 土器				細・少・石英・赤 色粒含む	(外)橙 (内)橙	口縁部はやや内湾気味に開く。底部丸底。	マメツ・ハクリ	口縁；マメツ 体部；ケズリ？	3/8	
SDe137中層 725		土・小形丸底 土器				中・普・石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)浅黄橙 (内)黄橙	張りの強い体部より口縁部は緩く折り返して開く。	マメツ・ハクリ 肩部にモミ丘状	体部；指オサエ・マメツ・ハクリ	1/8	
SDe137中層 726		土・小形丸底 土器				細・少・石英・赤 色粒含む	(外)浅黄橙 (内)にぶい橙	口縁部は短く折れて、外反して開く。	肩部；ヨコナデ 体部下；ハケ	体部；ケズリの後一部指オサエ	1/8	
SDe137中層 727	67	土・小形丸底 土器	3.4	5.0		微・普・石英・赤 色粒含む	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙	口縁部は短く積み上げ、端部は丸く納める。底部丸底。	口縁～肩部；ヨコナデ 体部下 口縁～肩部；ヨコナデ 体部下	口縁～肩部；ヨコナデ 体部；指オサエの後ケズリ	6/8	外面に黒斑
SDe137中層 728		土・小形丸底 土器	6.6			細・少・石英・赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は短く、端部は丸く納める。	口縁～肩部；ヨコナデ 体部下 半；ケズリの後一部ナデ	口縁；ヨコナデ 体部；指オサエ・ナデ	4/8	
SDe137中層 729	67	土・小形丸底 土器				中・普・石英・赤 色粒含む	(外)にぶい橙 (内)にぶい橙	底部丸底	マメツ・ハクリ	体部；板ナデ 底部；指オサエ	7/8	
SDe137中層 730	67	土・小形丸底 土器				微・少・石英・金 雲母・赤色粒含む	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙	底部丸底。	肩部；ヨコナデ 体部；ナデ？	肩部；ヨコナデ 体部；ケズリ	底部完存	
SDe137中層 731		土・小形丸底 土器				細・少・石英・赤 色粒含む	(外)灰白 (内)灰白	体部の張り強く扁球形。	横ハケの後ナデ？・マメツ著	上位；指オサエ・ナデ 下位；ケズリ	4/8	外面黒斑
SDe137中層 732	67	土・ミニチュ ア土器	6.1	4.6	3.8	細・少・石英・金 雲母・赤色粒含む	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙	直立気味の口縁部。口縁部は丸く納める。底部は安定した平底。	体部；指オサエ・ナデ 底部；ミ ガキ	指オサエ・ナデ	3/8	
SDe137中層 733		土・鉢	12.0			中・普・石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は外反して開き、端部は丸く納める。	ヨコナデ	横板ナデの後ヨコナデ	1/8	
SDe137中層 734		土・鉢？	13.6			細・普・石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は短く折り返して開き、端部は四角く納める。	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	1/8	
SDe137中層 735		弥・大形鉢？	25.8			中・普・石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は外方に構み出して、頂部に内傾する面をなす。	口縁；ヨコナデ 体部；横ケズリ	口縁；ヨコナデ 体部；斜ハケの 後ミガキ	1/8	外面口縁端部に 小黒斑
SDe137中層 737		弥・高坏				中・普・石英・赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	坏中で屈曲して上半部は外反して短く開く。端部は肥厚しつつ外方へ引き出し、内方にも小さく突出する。	上半部；ヨコナデ 下半部；横ケズリ？	上半部；ヨコナデ 下半部；ヨコナデ	1/8以下	
SDe137中層 738		弥・高坏				中・多・石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)暗赤褐 (内)褐	口縁部は外反して開き、端部は鈍く尖る。	ケズリ	横ハケの後ミガキ	1/8以下	外面に赤色顔料 付着
SDe137中層 739		弥・高坏	21.0			微・普・石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)橙 (内)橙	外反する口縁部端を僅かに上下に拡張して、内傾する面を形成する。端面はヨコナデにより鈍く凹む。	坏部上半；ヨコナデ 坏部下半； 横ハケ後ナデ	坏部上半；ヨコナデ 坏部下半； 横ハケ後ナデ	1/8以下	
SDe137中層 740		弥・高坏	13.8			中・普・石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	坏中で屈曲して上半部は外反して短く開く。端部は鈍く尖り、内面に鈍い沈線。	上半部；ヨコナデ 下半部；横ケズリ	上半部；ヨコナデ・鈍い沈線 下 半部；マメツ	1/8	
SDe137中層 741		弥・高坏	17.3			中・普・石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は外反して開く。端部は鈍く尖る。	口縁；ヨコナデ 坏下半；ミガキ	ヨコナデ 口縁端に沈線	1/8以下	坏下半外面に赤 色顔料
SDe137中層 742		土・高坏	14.0			中・少・石英・角 閃石？・赤色粒含む	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙	坏部中で屈曲して、上半部は直線状に開き、端部は鈍く尖る。	マメツ・ハクリ	上半部；ヨコナデの後放射線状ミ ガキ 下半部；放射線状ミガキ？	1/8	
SDe137中層 743		土・高坏	14.8			中・少・石英・角 閃石・金雲母・赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	口縁部は外反して開き、端部は鈍く尖る。	ヨコナデ？の後横ハケ・マメツ著	ヨコナデの後放射線状ミガキ	1/8以下	

報告書 番号	種別	断面	口径	高さ	底径	胎土	色	調	端部	形態	外面調整	内面調整	残存率	備考
744	土・高坏	14.8				細・少・石英・金 葉母含む	(外)橙 (内)橙		口縁部は外反して開き、端部は鈍く尖る。	ハクリ	ハクリ	1/8以下	劣化著	
745	土・高坏	15.4				細・少・石英・赤 色粒含む	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙		口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部近くで外反して開く。端部は鈍く尖り、内面を僅かに凹ませる。	ヨコナデ ハケの後ヨコナデ?・マメツ	ハケの後ヨコナデ?・マメツ	1/8		
746	土・高坏	16.8				微・普・石英・赤 色粒含む	(外)橙 (内)橙		口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、外反して開く。端部は鈍く尖る。	横ハケの後ヨコナデ	ヨコナデ・マメツ著	1/8以下		
747	土・高坏	15.2				微・少・石英・赤 色粒含む	(外)灰 (内)橙		口縁部は大きく外反して開き、端部は鈍く尖る。	ハクリ・マメツ	ハクリ・マメツ	2/8		
748	土・高坏	(16.0)				微・普・石英・赤 色粒含む	(外)橙 (内)橙		内湾気味の下半部より外反して開く。端部は鈍く尖る。	ハクリ	斜ハケの後ヨコナデ?・ハクリ	4/8	口縁部ひずみ大、 外面一部黒斑、 劣化著	
749	土・高坏	14.8				細・普・石英含む	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙		坏中で屈曲して上半部はやや外反気味に開く。端部は鈍く尖る。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	1/8	内面黒斑	
750	土・高坏	15.2				中・少・石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙		口縁部は直線状に開き、やや内湾気味に端部に至る。端部は鈍く尖る。	口縁部;ヨコナデ・ハクリ	ハクリ著・ヨコナデ?	2/8		
751	土・高坏	(16.4)				中・普・石英・金 葉母・赤色粒含む	(外)橙 (内)にぶい褐		口縁部は、内湾気味の下半部より外反して開く。端部は丸く納める。	ナデ?マメツ	ヨコナデ・ナデ	7/8	坏部内面黒斑 (煤?)	
752	土・高坏	(16.6)				粗・普・石英・赤 色粒含む	(外)橙 (内)橙		坏部はやや内湾気味に開き、端部は鈍く尖る。	坏部上位;ヨコナデ マメツ・ハクリ ナデ?マメツ著	坏部;ヨコナデ? 脚柱;マメツ	3/8	口縁部黒斑・口 縁部ひずみ大	
753	土・高坏?	17.6				微・少・石英・赤 色粒含む	(外)浅黄橙 (内)にぶい黄橙		口縁部は直線状に延び、端部近くで強く外反して開く。端部は丸く納める。	ヨコナデ	縦板ナデの後ヨコナデ	1/8		
754	土・高坏?	16.4				細・少・石英含む	(外)橙 (内)にぶい黄橙		口縁部は直線状に延び、端部近くで外反して開く。端部は鈍く尖る。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8		
755	土・高坏	17.7				微・少・石英・赤 色粒含む	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙		内湾気味の下半部より、強く外反して開く。端部は小さく納め、丸く納める。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8		
756	土・高坏	19.6				粗・普・石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙		坏部中位で屈曲して口縁部は直線状に延び、端部付近で外反して開く。	ヨコナデ・ナデ・マメツ著	ヨコナデ? マメツ	2/8	外面煤付著	
757	土・高坏	21.6				中・普・石英・角 閃石・金葉母? 赤色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙		口縁部は外反して大きく開き、端部は僅かに上方に揃み上げる。	坏上半;ヨコナデ マメツ・ハケの後ナデ	ヨコナデ・ナデ	3/8	内面黒斑	
758	土・高坏					粗・普・石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙		坏部中位で屈曲し、上半部は内湾気味に立ち上がり、外反して開く。	マメツ・ハクリ	ヨコナデ	6/8		
759	土・高坏					細・少・石英・赤 色粒含む	(外)橙 (内)橙		坏部中位で屈曲し、上半部は内湾気味に開く。	下半;ヨコナデ ハクリ著	ハクリ著	7/8	劣化著	
760	土・高坏					細・普・石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)にぶい橙 (内)にぶい褐		坏部は外反して大きく開き、端部は僅かに上方に揃み上げる。	坏部;ヘラナデ 脚柱;メントリ の後ヨコナデ	坏部;ミガキ 脚柱;ケズリ	6/8		
761	土・高坏	14.6				中・普・石英・角 閃石・金葉母・赤 色粒含む	(外)にぶい褐 (内)にぶい褐		坏部は緩やかに内湾気味に開き、端部は下方に引き出しつつ、上方にも小さく突き出す。	裾部;マメツ ハクリ	横ケズリ	2/8	外面黒斑	
762	土・脚					中・普・石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙		軸部は緩やかに開く。	縦ハケの後ナデ?下位指オサエ	ケズリの後下位ヨコナデ	7/8		
763	土・脚					細・少・石英・赤 色粒含む	(外)橙 (内)橙		裾部は強く屈曲して開く。	脚柱部;ケズリ マメツ著 脚柱部;マメツ	脚柱部;横ケズリ 脚部;マメツ	7/8		
764	土・脚					細・少・石英・赤 色粒含む	(外)灰白 (内)浅黄橙		裾部はやや強く屈曲して開く。	坏接合部;ヨコナデ ケズリ?・マメツ著	マメツ	6/8		
765	土・脚					粗・多・石英・赤 色粒含む	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙		裾部は鈍く屈曲して開く。	脚柱;メントリ の後上位ヨコナデ 下位指オサエ・ナデ 脚部;ヨコナデ	脚柱;横ケズリ 脚部;ヨコナ デ?	7/8		
766	土・脚					中・普・石英・赤 色粒含む	(外)黄橙 (内)黄橙		裾部はやや強く屈曲して開く。	脚柱部上位;横ケズリ 脚柱部;マメツ	脚柱部;ナデ 指オサエ 脚部;マメツ	6/8		
767	土・脚	12.4				細・少・石英・赤 色粒含む	(外)橙 (内)橙		脚部は直線状に開き、端部は鈍く尖る。	マメツ・ハクリ	脚柱部;横ケズリ の後一部ナデ 脚部;マメツ	4/8		
768	土・脚	13.2				微・少・石英・赤 色粒含む	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙		裾部は鈍く屈曲して直線状に開く。端部は丸く納める。	脚柱;メントリ の後横ミガキの 後 縦ミガキ 脚部;ヨコナデ	脚柱;横ケズリ? マメツ著 脚部;横ケケの後 ヨコナデ	2/8		
769	土・脚	11.2				微・少・石英・金 葉母	(外)橙 (内)橙		裾部はやや内湾気味に開き、端部を丸く納める。	マメツ	マメツ	1/8		

報告 遺構番号	挿図	図版	器種	口径	器高	底径	胎土	色	調	端部 形態	外面調整	内面調整	残存率	備考
770			土・脚		11.5		細・普・石英・角 閃石?・赤色粒含む	(外)橙 (内)橙		底部は強く折れて、直線状に短く開く。端部は鈍く尖る。	脚柱部; マメツ・ハクリ 脚部; マメツ・ハクリ	脚柱部; 横ケズリ 脚部; マメツ・ハクリ	1/8	
771			土・脚		11.8		細・少・石英・赤 色粒含む	(外)橙 (内)橙		底部は鈍く屈曲して開く。端部は丸く納める。	マメツ・ハクリ	脚柱; 横ケズリ? 脚部; マメツ・ハクリ	3/8	
772			土・脚		(11.6)		細・少・石英・赤 色粒含む	(外)浅黄橙 (内)橙		脚部はラツパ状に開き、明瞭な屈曲部を有さない。端部は鈍く尖る。	ハクリ	ハクリ	4/8	
773			土・脚		13.0		細・少・石英・赤 色粒含む	(外)灰白 (内)灰白		底部は強く折れて、内湾気味に開く。端部は四角く納める。	マメツ	横ハケ・マメツ	2/8	
774			土・脚?		12.6		細・普・石英・角 閃石・金葉母・赤 色粒含む	(外)浅黄 (内)浅黄		底部は内湾気味に開き、端部は鈍く尖る。	ヨコナデ・マメツ	マメツ	1/8	
775			土・脚		13.7		微・少・石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙		脚柱部より鈍く屈曲して直線状に開き、端部は丸く納める。	ヨコナデ	横ミガキ、ヨコナデ	1/8	
776			土・脚				中・普・石英・赤 色粒含む	(外)におい黄橙 (内)におい黄橙		底部は強く屈曲して開く。	脚柱; メントリの後縦ハケ	脚柱; 横ケズリ	7/8	
777			土・脚				中・普・石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)灰白 (内)におい黄橙		底部は鈍く折れて開く。	斜ハケ	脚柱部; 横ケズリの後ナデ 脚部; ナデ	7/8	
778			土・脚				微・普・石英・角 閃石・金葉母・赤 色粒含む	(外)橙 (内)橙		底部は強く屈曲して開く。	メントリの後縦ハケの後横ミガキ	ケズリの後ナデ?	5/8	外面煤付着
779			土・脚				細・少・石英・角 閃石?含む	(外)黄橙 (内)黄橙		底部は強く屈曲して開く。	脚柱; メントリの後上位ヨコナデ の後ミガキ、下位; 縦ハケ	脚柱; 横ケズリ	6/8	
780	68		土・脚		10.0		細・多・石英・赤 色粒含む	(外)浅黄 (内)浅黄		底部は鈍く屈曲して短い。端部は丸く納める。	脚柱; メントリの後縦ハケ下半指 オサエ 脚部; マメツ	脚柱; 横ケズリ・マメツ 脚部; オサエ	8/8	外面煤点?
781			土・脚		11.3		中・少・石英・角 閃石・金葉母・赤 色粒含む	(外)におい黄橙 (内)におい黄橙		底部は内湾気味に開き、端部は丸く納める。	脚柱; ヘラナデによるメントリの後 後縦ハケ 脚部; ハケ	脚柱; 横ケズリ 脚部; ナデ・ヨ コナデ	4/8	
782			土・脚		11.0		粗・普・石英・赤 色粒含む	(外)橙 (内)におい黄橙		脚部は鈍く屈曲して直線状に開く。端部は丸く納める。	脚柱; メントリの後縦ハケの後一 部ヨコナデ 脚部; ハケの後ヨコ ナデ	脚柱; ナデ 脚部; ケズリの後端 部付近ヨコナデ	7/8	脚柱部外面煤 ・破損後煤点
783			土・脚		10.6		微・少・石英・金 葉母・赤色粒含む	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙		やや内湾気味の上半部より僅かに外反して開く。端部は丸く納める。	ヨコナデ・ナデ	横・斜ハケの後指オサエ・ナデ	1/8	受部中央に穿 孔?
784			弥・広口壺	17.0			中・普・石英・角 閃石含む	(外)におい黄 (内)におい黄		口縁部は外反して開き、端部は上下に僅かに拡張し て面をなす。	口縁; ヨコナデ 頸部; 縦ハケの 後一部ナデ	口縁; ヨコナデ 頸部; 横ハケの 後一部ナデ	2/8	破損後一部煤点
785			弥・広口壺	14.9			中・多・石英・角 閃石・金葉母含む	(外)におい黄橙 (内)におい黄橙		口縁部は鋭く屈曲してほぼ直線状に開く。端部は上 方に積み上げ、端面は鈍く凹む。	口縁; ヨコナデ 4条の縦凹線	口縁; ヨコナデ	1/8	
786			弥・二重口縁 壺				中・普・石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)におい黄橙 (内)橙		口縁部は強く屈曲し外反して開く。端部は四角く納 める。	横ハケの後円形浮文を施す。	マメツ	1/8以下	
787			弥・広口壺	29.9			中・普・石英・角 閃石・金葉母含む	(外)におい黄橙 (内)におい黄橙		口縁部は直線状に延び、端部は上方に積み上げ、端 部は鈍く凹む。	ヨコナデ	ヨコナデ, 口縁部は凹線状に凹 む。	2/8	
788			土・二重口縁 壺	10.0			中・少・石英・金 葉母含む	(外)におい黄橙 (内)におい黄橙		口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は丸く納める。	ヨコナデ	口縁; ヨコナデ 頸部; 横ハケの 後ヨコナデ 体部; 横ケズリ	1/8以下	
789			土・二重口縁 壺	15.0			粗・普・石英・角 閃石含む	(外)におい黄橙 (内)におい黄橙		口縁部は鈍く屈曲して、外反して開く。端部は丸く 納める。	口縁; 縦ハケの後ヨコナデ 頸 部; ヨコナデ	ヨコナデ	2/8	口縁部に小煤班 着、口縁部ひず み
790			土・二重口縁 壺	15.0			微・少・石英・角 閃石・金葉母含む	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙		口縁部はやや内湾気味に開き、端部は丸く納める。	ヨコナデ	ヨコナデ・横板ナデ	2/8	
791			土?・?	18.4			中・普・石英・角 閃石・赤色粒含む	(外)におい黄橙 (内)におい黄橙		口縁部は外反して開き、端部は四角く納める。	ヨコナデ・ハクリ著	ヨコナデ・ハクリ著	1/8以下	
792			弥・壺	13.2			粗・多・石英・金 葉母含む	(外)におい黄橙 (内)におい黄橙		口縁部は外反して開く。端部は四角く納め、僅かに 上方に積み上げる。	口縁~肩部; ヨコナデ 体部; 縦 ハケ	口縁~肩部; ヨコナデ 体部; 横 ケズリ	2/8	口縁部外面煤付 着
793			弥・壺	13.8			粗・普・石英・角 閃石?含む	(外)におい黄橙 (内)におい黄橙		口縁部は外反して開き、端部は四角く納める。	ヨコナデ	口縁; ヨコナデ 体部; ヨコナ デ?	1/8	体部内面黒色化
794			弥・壺	15.8			細・多・石英・角 閃石・金葉母含む	(外)灰黄褐 (内)におい黄褐		口縁部は僅かに外反して開き、端部を上方に横 み上げる。	口縁; ヨコナデ 体部; 縦ハケ	口縁~肩部; ヨコナデ 体部; 指 オサエ・ナデ	1/8	口縁部外面に煤 付着
795	68		弥・壺	13.8			中・多・石英・角 閃石・金葉母含む	(外)明赤褐 (内)明赤褐		口縁部は短く直線状に開き、端部は丸く納める。	口縁; 縦ハケの後ヨコナデ 体 部; 縦ハケ	口縁; 斜ハケ 後横・斜ハケ	2/8	
796			土・壺	12.9			粗・多・石英・金 葉母・赤色粒含む	(外)におい黄橙 (内)におい黄橙		口縁部は外反して開き、端部は四角く納める。	口縁; ヨコナデ 体部; 縦ハケの 後ヨコナデ	口縁; 横板ナデの後一部横ハケ 体部; 指オサエ・ナデ	2/8	口縁部外面煤付 着

報告書 遺構番号	棟号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	端部形態	外面調整	内面調整	残存率	備考
SDe137下層	797	土・壺	17.2			中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は内湾気味に開き、端部は内側に肥厚する。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8	外面に煤付着
SDe137下層	798	土・壺	16.2			粗・普、石英・角 閃石含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部はやや内湾気味に開き、端部は内側に僅かに肥厚する。	口縁；ヨコナデ 体部；横ケズリ ヨコナデ	口縁；ヨコナデ 体部；横ケズリ	2/8	外面にかすかに煤付着
SDe137下層	799	土・壺	14.6			中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)灰黄褐色 (内)にぶい褐色	口縁部は直線状に長く、端部は丸く納める。	ヨコナデ	ヨコナデ	1/8以下	破損後被熱
SDe137下層	800	土・壺	12.4			中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)黒褐色 (内)にぶい褐色	口縁部は外反気味に開き、端部は丸く納める。	ヨコナデ	ヨコナデ	2/8	口縁～肩部外面に煤付着
SDe137下層	801	土・壺?			2.0	細・普、石英・角 包粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	やや突出した小さな平底。	横ハケの後縦ハケの後刺突文 体部；指オサエ・ナデ 底面；板 庄痕	縦ハケ 下半；ヘラナデ	1/8以下	外面下半に煤付着
SDe137下層	803	弥・?			4.7	粗・普、石英・角 閃石含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	底部は安定した平底。	体部；縦ハケ 底面；ナデ	体部；縦ケズリ 底面；ケズリの 後ナデ；指オサエ	4/8	外面に黒斑
SDe137下層	804	土・高坏	16.6			細・少、石英・角 閃石・金雲母・赤 包粒含む	(外)浅黄褐色	口縁部は内湾気味に立ち上がり、外反して開く。端部は丸く納める。	ヨコナデ・ナデ	ハクリ	1/8	
SDe137下層	805	土・高坏				中・多、石英・角 閃石含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は直線状に開く。	上半；縦ハケの後ヨコナデ 下 半；指オサエの後ヨコナデ・ナデ	上半；板ナデの後ヨコナデ 下 半；ヨコナデ	6/8	
SDe137下層	806	土・脚			8.6	中・普、石英・角 閃石含む	(外)浅黄褐色 (内)浅黄褐色	やや外反気味に開き、端部は僅かに下方に肥厚する。	ナデ	横ハケの後ナデ	3/8	
SDe137下層	807	弥・脚			3.2	細・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい褐色 (内)にぶい褐色	ハの字型に開く低い脚台。端部は丸く納める。	指オサエ・ナデ、上位にタタキメ 痕	ハクリ	ほぼ完存	被熱により赤変、 裂壊土器
SDe137下層	808	土・小形丸底 土器				細・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 包粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)浅黄褐色	体部の張りは強い。	頸部；ヨコナデ 体部；ナデ?マ メツ着	指オサエ・ナデ	2/8	外面に小黒斑
SDe137下層	809	土・小形丸底 土器				中・普、石英・角 閃石含む	(外)浅黄褐色 (内)浅黄褐色	体部の張りは強い。	マメツ	ミガキ?	1/8	
SDe137下層	810	土・小形丸底 土器	8.3			中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 包粒含む	(外)にぶい褐色 (内)にぶい褐色	口縁部は直線状に短く開く。端部は鈍く尖る。	口縁；ヨコナデ 体部；横ケズリ の後縦ハケ?	口縁～頸部；ヨコナデ 体部；横 ケズリ	3/8	外面煤付着
SDe137下層	811	土・小形丸底 土器	7.2			中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)褐色	口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は真跡的に内側に肥厚する。	口縁；ヨコナデ 体部；縦ハケの 後一部横ハケ	口縁；ヨコナデ 体部；縦ケズリ	2/8	口縁部内外面一 部黒色化
SKe53	828	弥・広口壺	16.0			中・多、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は強く折れて水平に近く開く。端部は肥厚し つつ鈍く納み上げる。	ヨコナデ	ヨコナデ、鈍い凹線	1/8	
SKe53	829	弥・大形鉢	32.0			中・多、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は直線状に開く。端部は鋭く尖る。	口縁；ヨコナデ、鈍い凹線 体 部；横ケズリの後ミガキ	口縁；ヨコナデ、鈍い凹線 体 部；横ハケの後ミガキ	1/8	体部外面煤厚付 着
SXe03	830	弥・広口壺	10.8			細・多、石英・角 閃石・雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	直立気味の短い頸部より、口縁部は強く折れて短く 開く。端部は小さく納み上げる。	口縁；マメツ 頸部；縦ハケ? マメツ・ハクリ	口頸部；ヨコナデ?、マメツ	1/8以下	
SXe03	831	弥・広口壺	12.4			中・普、石英・角 閃石・金雲母含む	(外)褐色 (内)褐色	内湾気味に立ち上がる頸部より、口縁部は強く折 返して短く開く。端部は上方へ納み上げつつ、下方 にも引き出す。	口縁；ヨコナデ 3条 口縁；ヨコ ナデ	口頸部；ヨコナデ	1/8	
SXe03	832	弥・高坏	28.0			中・多、石英・角 閃石・雲母・赤色 包粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	口縁部は直線状に開く。端部は外反気味に開く。端 部は内湾気味に立ち上がる頸部より、口縁部は鋭く折 返して短く開く。端部は上方へ納み上げつつ、下方 にも引き出す。	口縁；ヨコナデ、鈍い凹線 3条 口縁；ヨコ ナデ	口頸部；ヨコナデ 下半部；ヨコ ナデの後分割ミガキ	1/8以下	
SXe03	833	弥・脚			19.6	中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤色 包粒含む	(外)褐色 (内)褐色	脚縁部有、屈曲部に突出度の高い突起。裾下段は 強く外反して開き、端部は四角く納めつつ小さく下 方に突出する。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	3/8	
SXe03	834	弥・?				中・普、石英・角 閃石・金雲母・赤 包粒含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	底部はやや突出した平底。	ミガキ	ミガキ	1/8	外面にV字状の 記号文
SXe03	835	弥・?			5.6	中・普、石英・角 閃石・赤色包粒含む	(外)浅黄褐色 (内)にぶい黄褐色	底部はやや突出した平底。	体部；縦ミガキ 底面；マメツ	縦ケズリの後指オサエ	2/8	
SXe03	836	弥・?			5.6	中・普、石英・角 閃石・雲母含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	底部はやや突出した平底。底面は僅かに凹む。	体部；縦ミガキ、マメツ 底面； ナデ	縦ケズリの後ナデ	底部完存	底部焼成前穿孔
SDe142	837	土・脚				中・普、石英含む	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	やや細身の脚柱部。	メントリ、マメツ・ハクリ	下半ナデ	8/8	

報告書 番号	種目	図版	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	端部 形態	外面調整	内面調整	残存率	備考
SDe142	838	須・坏身	9.8				(外)灰 (内)灰白	内湾気味に立ち上がる体部より、口縁部は小さく折り返して内湾する。端部は内湾して斜上方に小さく突出する。	口縁：回転ナデ 体部：自然軸	回転ナデ	1/8		
SXe01上層	839	須・壺	2.3				(外)淡黄 (内)淡黄	張りの弱い体部より内湾して、滑らかに頸部に至る。頸部は直立し、頸基部に断面矩形状の突帯を付す。頸部外面に斜格子の線刻。突帯端部に半截竹管文。	体部：指オサエ・ナデ？、下半板ナデ？、マメツ 底面：指オサエ・ナデ？、マメツ	指オサエ・ナデ ヨコナデ？、マメツ	底面完存 小片		
SXe01上層	840	須・広口壺	11.3				(外)灰白 (内)灰白	口頸部は強く折れて開く。端部は四角く納めつつ、上下に直ぐに突出する。	口頸部：ヨコナデの後縁刻 体部：縦ミガキ	口頸部：縦ハケ板ナデの後上端指オサエ・ナデ	口縁ほぼ完存 3/8		
SXe01上層	841	須・広口壺	18.1				(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	やや内湾して立ち上がる頸部より、口縁部は強く折れて開く。端部は上方へ揃み上げつつ、下方にも突出する。	口縁：縦ハケの後ヨコナデ 頸部：縦ハケの後ヨコナデ	口縁：ヨコナデ 頸部：縦ハケ板ナデの後上端ヨコナデ	3/8		
SXe01上層	842	須・土・広口壺	25.6				(外)灰黄褐 (内)にぶい黄	外顔して立ち上がる頸部より強く折れて、口縁部は水平に近く大きく開く。端部は上方へ揃み上げつつ、下方にも突出する。	口縁：ヨコナデ 3条 口頸部：縦ハケの後ヨコナデ 体部：縦、斜ハケ	口縁：ヨコナデ 頸部：縦ハケ板ナデ 体部：指オサエ・ナデ	3/8		
SXe01上層	843	須・土・広口壺	15.4				(外)灰白 (内)にぶい黄	口頸部は強く折り返して外反して短く開く。端部は小さく下方へ脚厚する。	口縁：ヨコナデ 体部：縦、斜ハケ	口縁：ヨコナデ 頸部：縦ハケ板ナデ？、上端指オサエ	3/8		
SXe01上層	844	須・壺	14.8				(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	口頸部は強く折り返して短く開く。端部は小さく下方へ脚厚する。	口縁：ヨコナデ 体部：縦、斜ハケ	口縁：ヨコナデ 頸部：縦ハケ板ナデ？、上端指オサエ	2/8	体部外面線刻文	
SXe01上層	845	須・壺	14.2				(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	内湾する体部小片。	指オサエ・ナデ	ケズリの後一部ナデ	小片		内面にV字形の記号文
SXe01上層	846	須・壺	14.4				(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	口頸部は強く折り返して短く開く。端部は小さく下方へ脚厚する。	口縁：ヨコナデ 体部：縦、斜ハケ	口縁：ヨコナデ 頸部：縦ハケ板ナデ？、上端指オサエ	7/8		
SXe01上層	847	須・高坏	14.2				(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	口頸部は強く折り返して短く開く。端部は小さく下方へ脚厚する。	口縁：ヨコナデ 体部：縦、斜ハケ	口縁：ヨコナデ 頸部：縦ハケ板ナデ？、上端指オサエ	1/8以下		
SXe01上層	848	須・高坏	14.2				(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	口頸部は強く折り返して短く開く。端部は小さく下方へ脚厚する。	口縁：ヨコナデ 体部：縦、斜ハケ	口縁：ヨコナデ 頸部：縦ハケ板ナデ？、上端指オサエ	4/8		
SXe01上層	849	須・脚	10.8	5.6			(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	浅いボウル状を呈し、端部は丸く納めつつ、口縁部は小さく外反し、端部は四角く納める。底面はいびつな丸底。	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	斜板ナデ	7/8		
SXe01上層	850	須・小形鉢	12.6	7.3			(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく下方へ脚厚する。	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	1/8		
SXe01上層	851	須・小形鉢	15.8				(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく下方へ脚厚する。	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	1/8		
SXe01上層	852	須・器台？					(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく下方へ脚厚する。	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	1/8		
SXe01上層	853	須・？					(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく下方へ脚厚する。	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	7/8	端部外面黒斑	
SXe01上層	854	須・？			4.05		(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく下方へ脚厚する。	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	7/8	外面黒斑	
SXe01上層	855	須・壺	9.8		5.0		(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく下方へ脚厚する。	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	1/8		
SXe01上層	856	土・直口壺	6.8	7.0			(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく下方へ脚厚する。	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	1/8		
SXe01上層	857	土・小形丸底土器	24.4				(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく下方へ脚厚する。	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	ほぼ完存	体部外面黒斑	
SXe01上層	858	土・？	13.4				(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく下方へ脚厚する。	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	1/8	外面黒斑	
SXe01上層	859	土・壺	16.0				(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく下方へ脚厚する。	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	2/8	口縁部外面黒斑、肩外面線刻文	
SXe01上層	860	土・壺	23.8				(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく下方へ脚厚する。	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	3/8	口縁部と体部下端外面に黒付着	
SXe01上層	861	土・壺	28.4				(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく下方へ脚厚する。	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	2/8	口縁部と体部下端外面に黒付着	
SXe01上層	862	土・土鍋					(外)にぶい黄 (内)にぶい黄	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく下方へ脚厚する。	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	口縁：ヨコナデ 体部：指オサエ・ナデ 底面：縦、斜ケズリ	1/8	体部内面炭化物、厚く付着	



報告書 番号	押印	図版	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施部 形	施	外面調整	内面調整	残存率	備考
SXe01上層	863	土・把手					中・普、石英・金 葉母・赤色粒含む	(外)浅黄緑 (内)にぶい黄緑	三角形の把手部分。	指オサエ・ナデ	指オサエ?		把手完存	
SXe01上層	864	須・坏蓋		11.0	4.2		粗・普、石英含む	(外)灰 (内)灰	やや丸みを帯びた口縁部。天井部平坦。	口縁：回転ナデ 天井部；ヘラ切り未調整 口縁：回転ナデ 底部；回転ナデ	回転ナデ		3/8	
SXe01上層	865	須・坏身		10.9	(5.1)		中・少、石英含む	(外)灰 (内)灰	口縁部は内傾して立ち上がり、端部は肥厚しつつ頂部に段、内部は水平に開く。	口縁：回転ナデ 底部；回転ナデ	回転ナデ		4/8	
SXe01上層	866	須・坏身		11.6	4.5		中・少、石英・黒葉母含む	(外)灰白 (内)黄灰	内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く納める。	口縁：体部；回転ナデ 底部；回転ナデ	回転ナデ		4/8	
SXe01上層	867	須・坏身		11.0	(4.2)		中・普、石英・黒葉母含む	(外)灰白 (内)灰白	やや内湾気味に立ち上がり、口縁部は直立、端部は丸く納める。	口縁：回転ナデ 底部；ヘラ切り	回転ナデ		1/8以下	体部中央に「十」字形の線刻
SXe01上層	868	71 土・飯給壺		5.6	8.8		粗・普、石英・角閃石・金葉母含む	(外)にぶい黄緑 (内)にぶい黄	鈴鐘形。頂部に楕円形の釣り手部を付す。口縁端部は四角く納める。	口頸部；回転ナデ 体部；回転ナデ	口縁；ヨコナデ 体部；ヨコナデ		完形	
SXe01上層	869	70 須・壺		12.2			中・少、石英含む	(外)灰 (内)灰	口頸部は鋭く外反して開き、端部は外面に粘土紐を纏いて小突帯をなす。端部は鋭く尖る。	口頸部；回転ナデ 体部；タタキメの後カキメ	回転ナデ		2/8	
SXe01上層	870	須・壺					中・少、石英含む	(外)灰 (内)黄灰	口頸部は直立気味に立ち上がる。	口頸部；回転ナデ 体部；タタキメの後カキメ	回転ナデ		2/8	
SXe01上層	871	須・坏蓋		14.8			細・少、石英含む	(外)灰白 (内)灰白	やや丸みを帯びた天井部より、口縁部は小さく折れて下方へ擴み出す。端部は丸く納める。	天井部；回転ナデ 口縁；回転ナデ	回転ナデ		2/8	
SXe01上層	872	須・坏		13.2			中・少、石英含む	(外)灰 (内)灰	口縁部は強く外傾して大きく開く。端部は丸く納める。	回転ナデ	回転ナデ		1/8	外面火線
SXe01上層	873	須・坏			7.0		細・少、石英含む	(外)灰 (内)灰	口縁部はやや強く外傾して立ち上がる。	体部；回転ナデ 底部；回転ナデ	回転ナデ		底部完存	内外面火線
SXe01上層	874	71 須・坏		12.6	4.2		細・少、石英含む	(外)黄灰 (内)黄灰	平底の底部より内湾気味に立ち上がり、口縁端部近くで、小さく外反して開く。端部は鋭く尖る。	口縁；回転ナデ 底部；回転ナデ	口縁；回転ナデ 底部；回転ナデ		1/8	内面火線
SXe01上層	875	71 須・坏		13.6	3.65		中・少、石英含む	(外)灰 (内)灰	口縁部は外傾して直線状に開き、端部は丸く納める。	口縁；回転ナデ 底部；回転ナデ	回転ナデ		4/8	内外面火線
SXe01上層	876	須・坏					中・多、石英含む	(外)灰白 (内)灰白	やや厚めの底部に外方に踏張る小高台を付す。	体部；回転ナデ 底部；回転ナデ	回転ナデ		2/8	
SXe01上層	877	須・坏		15.6			中・少、石英・黒葉母含む	(外)灰 (内)灰	直線状に開き、端部は丸く納める。外面端部付近は鋭く凹線状に凹む。	回転ナデ	回転ナデ		2/8	破損後板蓋付着
SXe01上層	878	71 須・?			7.2		中・少、石英・黒葉母含む	(外)灰白 (内)灰白	底部平坦。	底部；回転ナデ	底部；回転ナデ		底部完存	底面透母「下」
SXe01上層	879	須・皿		13.7	(2.0)		細・少、石英含む	(外)灰 (内)灰	口縁部は外傾して短く開く。端部は丸く納める。	口縁；回転ナデ 底部；回転ナデ	回転ナデ		1/8以下	
SXe01上層	880	71 土・小皿		7.8	1.4		中・少、石英・金葉母・赤色粒含む	(外)灰白 (内)灰白	平底の底部より、口縁部は斜め上方に揃み上げる。端部は丸く納める。	口縁；回転ナデ 底部；回転ナデ	回転ナデ		4/8	
SXe01上層	881	土・皿		9.8			微・少、石英・黒葉母・赤色粒含む	(外)浅黄緑 (内)浅黄緑	強く外傾して開き、端部は丸く納める。	口縁；回転ナデ 底部；回転ナデ	回転ナデ		1/8	
SXe01上層	882	土・小皿		9.2	(2.3)		細・少、石英・赤葉母含む	(外)浅黄緑 (内)浅黄緑	口縁部は直線状に開き、端部は丸く納める。	口縁；回転ナデ、マメツ 底部；回転ナデ、マメツ	回転ナデ、マメツ		4/8	
SXe01上層	883	土・皿		12.4	(1.9)		中・普、石英・黒葉母・赤色粒含む	(外)浅黄緑 (内)浅黄緑	口縁部は強く外傾して開き、端部は鋭く尖る。	口縁；回転ナデ、マメツ 底部；回転ナデ、マメツ	回転ナデ?、マメツ		2/8	
SXe01上層	884	71 土・台付皿		15.4	6.7		中・少、石英・金葉母含む	(外)灰白 (内)灰白	皿部はやや内湾気味に大きく開き、端部は丸く納める。脚部は太くハの字形に開いて、端部は丸い。	口縁部；回転ナデ 体部；指オサエの後ナデ、マメツ	口縁；回転ナデ、マメツ 脚部；回転ナデ		7/8	
SXe01上層	885	土・坏		10.9	(3.5)		中・少、石英含む	(外)灰白 (内)灰白	僅かに内湾しつつ開き、端部は肥厚して丸く納める。	口縁；回転ナデ 底部；回転ナデ	回転ナデ		1/8	
SXe01上層	886	71 土・坏		11.6	2.95		中・少、石英・黒葉母含む	(外)灰白 (内)灰白	内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く納める。	口縁；回転ナデ 底部；回転ナデ	口縁；回転ナデ 底部；回転ナデ		7/8	外面下半部付着
SXe01上層	887	土・坏		13.0			中・普、石英含む	(外)にぶい黄緑 (内)にぶい黄緑	やや内湾気味に立ち上がり、口縁部は丸く納める。	回転ナデ、マメツ	回転ナデ、マメツ		2/8	
SXe01上層	888	土・坏		11.6	(3.3)		中・普、石英・黒葉母・赤色粒含む	(外)浅黄緑 (内)浅黄緑	鈍く屈曲して直線状に立ち上がり、端部は丸く納める。	口縁；回転ナデ 底部；回転ナデ	回転ナデ		1/8	
SXe01上層	889	土・坏		13.0	(3.2)		細・普、石英含む	(外)浅黄緑 (内)浅黄緑	口縁部はやや内湾気味に開き、端部は丸く納める。	口縁；回転ナデ 底部；回転ナデ	回転ナデ		2/8	
SXe01上層	890	71 土・坏		15.4	(3.8)		粗・普、石英含む	(外)浅黄緑 (内)浅黄緑	内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反して開く。端部は丸く納める。	口縁；回転ナデ 底部；回転ナデ	回転ナデ		2/8	
SXe01上層	891	71 土・碗		11.0			中・少、石英・黒葉母含む	(外)灰白 (内)灰白	内湾気味に立ち上がり、端部僅かに肥厚して丸く納める。	口縁；ヨコナデ 体；底部；指オサエの後ナデ	回転ナデ		4/8	吉備系